大正十四年二月出版

續群書類從

第拾六輯下

東京

續群書類從完成會

續群書類從第拾六輯下目次

和歌部

續群書類從第拾六輯下目次終

總檢校保己一集
男源忠寶校

和歌部八十四

馬内侍集

後涼殿の御つほれにうへわたらせ給て梅の花のすくなくさきたるをけちめも見えしかくすくなけれはとおほせられしかは

さかりありてちらまくいかにおしまゝし心のとけき春の花哉

おなしとしの三月に中宮の御かたに花をかめにさゝせ給ひてこれかちる心よめとおほせられしかは

ちらしとやためそめけんはかなくもとまらぬ花にそふ心哉

七月七日にはすのたまをつくりてさりにし人のをこせたれは

思ひ餘りたのめし中のくやしきは此世とたにも契らさりしか

ともたちのもとよりあまに成なんとありしはいかにといひたれは

後拾 しかすかにかなしき物は世の中をうきたつ程の心なりけり

さりにし人のもとよりいかにそ人やかたらひたるとあれは

萬代 新拾 君かことおもはぬ人のつらからは我も心はあくかれなまし

左大將ひさしくをともし給はて

あふことのなきさなれはや都鳥かきりて跡もたえてとひこぬ

なとかそれよりもとあれはかへし

秋風 續後 とはぬまは袖くちぬへし數ならぬ身よりあまれる涙こほれて

その夜たひなる所にきあひて枕もなけれは草をむすひてしたれは

新古 あふ事はこれやかきりの旅ならん草の枕も霜枯にけり

あるきんたちいまとてすかせは

頼めくる君しつらくは四方の海に身もなけつへき心ち社すれ

かへし

さしはへてかさしの花のその折もあたなる物と見えにし物を

左大將こほりをつゝみて身にしみてなんおもふと
あれは

後拾 あふことのとゝこほるまはいか計身にさへしみて歎くとかしる

人をよせねはしゐていりきたるかわひしけれはちかことをたてゝ後に逢んとてやりたれは一日計ありて

祈りくるわかかたをかのちかとをそくたゝすの神にも有哉

返し

あふことをかた岡とのみ思ふ身はなにゝたゝすの神にかくらん

人に物いひはしめて

新古 わすれても人にかたるなうたゝねの夢みて後も長からぬよを

文をこするおとこの秋とたのめたる比なか月はかりわつらひていひおこせたる

命あらはさりともとのみたのみたる秋待つけん心ちこそせね

したのはかまのこしむすひて謙徳公の許に遣しける

新千 人しれす思ふ心のしるけれはゆふともとけよ君かしたひも

左大將こほりしたるかたなとかきたるあふきをわか心かはりなはおこせよとの給ひしかはたてまつるとてこほりたる池のつらにをんなをすへてけふりをたゝせてかく

もえ出るむねのけふりはたかけれと涙の川は猶氷りけり

十月はかりにあからさまにきたる人のかへりなんとするにしくれのすこしすれは

後拾 かきくもれ時雨とならは神無月けしき空なる人やとまると

しはすふたつ有し年忍ひてやみなん又はなこそといひし人のうるふ月はいかゝ思ふといひたれは

みそかにも有へき物を雪ふるにたもとのうるふ月の侘しさ

人おほくかたらふとてあるきんたちのもとより

色〳〵の花のなかにも女郎花いかなる枝に露とまるらむ

をんなのともたちのもとに久しくとはぬをとゝいひて

つらからは扨もやみなて春の日のうらみまほしき蛩にも有哉

かへし

つらしてふ心ありけり春の日のわかうらなきにおもひける哉

しそく成し人のあるおとこにかたらはれてこれなむひとつまつとてをこせたれは

ひとつ松むすひけりとも今そしろとくる心はときはならしを

左大將殿かへり給ひて雨ふるにいはると聞給ひて

つかのまも戀しき人はつれ〳〵となかめに物や思ひますらん

ひさしくありておほしいてゝ

萬代風 程ふれはわすれやしにし春雨のふるとのみそ我はこひしき

返し

風 いとゝしくぬれのみまさる衣手にあめふるとを何にかくらん

後拾 むけにおとつれ給はぬころ

くもてさへかきたえにけるさゝかにの命を今は何にかけまし

嘆きつゝふれ共敷にあらぬ身はいかゝはすへき賤のをた巻

かへし

かくて社よそにふれ共さゝかにのいかに戀しき物とかはしろ

雪のいみしくふるにおはしてあかつきにかくきな

新後拾 らひてこぬはいかゝおもふへきとの給へは

忘れなはこしちの雪の跡たえて消るためしになりぬ計そ

かへし

年ふともきゆるよもあらし白雪のちとせの松にふりし積れは

かくて忍ひてあるほとにえあはておとときみ

今さらになにかわふへき君ならてこの世のをは思はさりしを

かへし

何かその露のほたしにあらぬ身も君とまるへき此世なられは

山さとなる人にゆきの降日

ふれはかつきえぬる雪と知なからなに山里のしゐて戀しき

かゝるへきとにあらすといひてあはぬ人の許より

長月はかりにまたらなる草はをこせけれは

人心またらにみゆる草なれはかれぬる人のしるし成へし

かくてその冬うちとけてもあはさりけれは年かへ

りて二月ついたち比につほみたる花にさして

あたにはとたのみし風しあらからは盛もなくて花や散なん

返し

風もあらく花も程なく散ゆかは憂身をいかゝなりぬとか思ふ

もとの人なと聞つけてさわかしくてえあはぬなり

けりおなし人心うきをやきゝけんこしたれは女も

むつかりてあはさりけれは五月五日に男

うきをたいつ忘れてか菖蒲草たえぬしたねを立ゐまつらん

かへし

忘られぬうきにつけても菖蒲草いかに下根のなかから出やは

かくてあるにさはれなといふこゝろくれたるの花を

男の見せにおこせたれは

くるゝとて色にいつれはあさえけり棄てくやしき花をみる哉

五月宮の御まへに雨のいみしくふるに郭公のなき

てわたれは人に歌よませたまひしに

とふかたそまつしられける郭公いかになく音を雨やとりせて

をとこのしもし八字よむこゝろいひにおこせたる

かれいならすやありけん

しりそめしとやくやしき忍ふ草しろ人もなしたえやしなまし
この男よをかれたる夜夢にや見えけん
思ひつゝぬるよの夢をしらぬ身は胸にたく戀さめたにもせよ
長閑なる春の蒲にもすかたあは猶こゆるきのいそかしやなそ
あるおとこのもとより
なきたむる涙のたまを衣手につゝむ人めに程そへにける
つかひあしくして見つけられてこひたる人さりぬ
と聞えてこの君
人しれすぬれわたる身は袖川いはねの滝をあはれとそ思ふ
かへし
おもほえす涙の川にぬれきぬを我より外に誰かきるへき
たつた山に二日計ありてたつ田山もいかゝとて
吹風にけになひかすはをみなへし忍ひにかゝる露をしらなん
とあれは
さかのいろなるこゝろとやきく
といひしかは
をみなへしつゝむ我身は野へなれや
おなし君九月はかりに
おもふ人やゝすきぬとや菊の花雨をなきても露にぬるらむ
ほかにとてかへしつなとかをとはのといひたりし
かはみつからきたるにあはねは九月九日菊にさし
て
蒲のうへの露をはなきて涙こそわたの衣の袖もかはかね
しのひたりし人のもとより
あさとにな[illegible]雲の[illegible]られす[illegible]もうき[illegible]ふちのふして
きり〳〵すのなきしをひとりきに
なき名たつそてもありしたきり〳〵す草露けし何か鳴らん
五月五日にこのきみ
新古 ほとゝきすいつかと待し菖蒲草けふはいかなる音にか鳴らん
かへし
新古 五月雨の空くもらする郭公ときになくねは人もとかめす
その夜きたるにおくにゐるかけは見えてなしとて
かへしたれは
新古 ほの見えし月を戀つゝかへるさの雲路の浪にぬれし袖哉
いまはかきりといひたりしかはしかのうらにとの
みいひやる三日はかりありて
しかのうらにたのむ泪はつきせねとせきもとゝめぬ相坂の關
返しはせてしはしありていし山へまうつと聞て
あふ坂のせき山こゆるけふさへやなほや涙のつきせさるらん
といひたりしかは
白露のすゑ〳〵こゆる相坂のいとはる雨に袖そぬれける
また七月七日に

けふとたに契らぬ中はあふ坂な雲ゐにのみと聞わたるかな
かへし
あふをなけふとなかけそ鵲のはしさくたにもゆゝしき物を
人のきたるにわたのころもとたのめやしけん
流れゆく言のはにこそ白露のいのちなかけてをきかへりつれ
これなきゝてあきのふの朝臣
さ月山みやまかくれの草木とやとのはたにもかけて散こぬ
またあるおとこしのふ草につけて
忍ふ草しのふやつまといひなから夜深く露のなける袖哉
かへし
物思ふに秋は深くそ成にける軒のしのふの色かはるまて
このおとこけさかへりつるみちにほとゝきすのなきつるといへは
こゝろ見に空にかよひて時鳥人たのめなる音こそなかるれ
大風のふきたるつとめてひはたにさしてあるおとこのもとに
けさみれはとまれる宿もなかりけり忍ふの草もいかゝ成にし
おとこのとをきところへいくとて
草枕たひねのころもかはかすは夢にもつけん思ひをこせよ
たひねのところより
獨ぬる宿にふすふるかやりひのさ夜更かたにもえかはりつゝ
ひさしくあはてなてしこにさして
あふをはから撫子のはるけくて思ひわつらふとこ夏の花
つゝむをありてふみなともかよはぬほとかきあつめてをくらせたる
萬代 後拾
井せきする岩まの水の打忍ひしのひかねてそれはなかれぬる
いかなれはしらぬに生るうきぬなはくるしや心人しれすのみ
浮草にまくらやすらんなし鳥の夜はのとけきいやはれらるゝ
わか戀にくらへてし哉雨ふれは庭のうたかた數なかそへて
ね覺には聞もしつらんよもすから雨の壁にはおとりやはする
かへし
五月雨に夜ひとよ雨は忍ふれとそれより外の葉はせさりき
さいゐんよりうつゐなたまへれは
なけきとそほと〳〵思ふなのゝ斧は親の枝をきるにそ有ける
かへし
斧のなとも尋れさりせははま椿いはゐの杖をいかてしらまし
人のもとにかれたるもみちの枝をやりたれは
霜枯のあふくなけきの枝なれはふかき色とは見えすそ有ける
左大將ちかことふみなをこせ給ひてかはりのふみなこせよとせめ給ひしかは
下
千早振かもの社の神もきけ君忘れすは我も忘れし
やすのふふみなこすれといひもはなたれはうりに

書て

うりふ山そのほとゝのみ頼めつゝ久しくなるはつらきわさ哉

左大將兵衛佐にておはせし時うつきに物をいひそ
めたまひて

新古 郭公聲をはきけと花のえにまたふみなれぬ物をこそ思へ

かへしかしは木のわかき葉にさして

新古 ほとゝきす忍ふる物をかしは木のもりても聲の聞えける哉

あせちの大納言むかしは物なと聞えたるなりけれは
ほかにて八かたらふときゝて

澤に昔おりたちぬとも葉を若みわかかりそめし淺の菖蒲は

五月のなか雨にあやめのおちたるを宮御らんして
あはれ歌よめとおほせられしかは

菖蒲草いつれの澤にねをとめて身をはなかめにくらしはつ覽

めある人のもとに物いふにつゝめはかきのした葉
にかきてをこせたる

露とけておもひもなかし物ゆへにしたにこかれて何か偲ふる

いもの葉に露のとまれるを

つれなくていもか下葉に置露はいかにとまれる物とかはしる

おとこかひなこすとて

かすならて千尋の濱にひろひつゝかひや有とそけふを待つる

と聞てもとよりある人あしくするにむけにあはね
はいひをこせたりし

なか空にかくてやたゆるさゝかにのいと淺ましき心成けり

人のこんとてこさりしに風の吹しかは

詞花 おとなきて昔こぬ宵の風の音はよるとなれはそ悲しかりける

こむといひし人きてよひと夜ありけれとあはてつ
とめてなとこす成にしといひやりたれは

終夜田子のうら波よせし音を富士の高根にきかさりけるに

忍ふる人にいひつかはしゝ

おこしひの炭をは灰にかくしつゝうつまれぬ名の戀を社思へ

兵衛のすけなる人かたらふとみな人きゝて後中將
にふみかよはしけれは人のきゝていひたる

かしは木は雨も人めもしけしとて三笠の山にふみかよふとか

さらにわすれしとちきりたる人にたえてある所を
たにしらせれは

秋風 行かよふ跡たえぬるか水くきのなかれてとかや人のたのめし

人をかたらひてあふなりあはぬとき有しかはあふ
きのはなしてをきたるにかきてをこせたりし

月草のうつし心やいかならんむら〳〵しくもなりかへるかな

かたらひてとし比ありつる人のゆふさり人のむこ
になりぬと聞て後のかたをつくりてかきてやる

新拾 大井河人めもらさぬけふやさは杣のいかたしくれをまつらん

正月に空のけしきなともよしよめと宮の仰られし
かは
浦とにあまはみるらんはつ春のけぬるき風に浪やなこまむ
おとこをうらみてひさしくおとせて
(千た)つらからは戀しきことは忘れなてそへてはなとかしつ心なき
かへし
かりにても心をかへて見ましかは今はのとかに成もしなまし
ひさしくこねはいひやる
姥すての月はいかにか出たりしなくさめかたき人は見るらん
此おとこつゝみてさるへきおりあふほとにいし山
へまうつときゝてかへりて三月はかりに
相坂のせきのまに〳〵花をみて春のきにける程もしられす
返し
もろともにあふともなくて相坂の關のまに〳〵花を見にけん
人かたらふと聞給ひて中關白
あやしきはぬれぬ人なき染川のかゝらぬ神もくちはてぬへし
みちのくにのかみこうりをたちぬる月のなりとて
うたはわすれて侍らさりけりかへし
きり深くなく鹿を見よかりふのゝけにかりもりの心成けり
きんとふのきみこその春やりたりしむめの花を文
にさしてをこせたれは
むかしににたる梅の花かな
といひたれは
梅の花むかしのことをうたかへと空のけしきのかはれるやなそ
されかたの君えてきたりこのふみありけるを見て
うらやましちりくる跡や都鳥ならひありせはをくれましやは
すけゆきあふきををこせてこれはいかにわすれや
しにしといひやりたれは
ほとゝきす忘るらんこそ卯花のかけとそふへき我としらすや
みそきの日忍ひてかたらふ人のもとより
うしろめた神も聞いれぬとなれは我を忘るゝみそきしつらん
ある人心うきことやありけん
人心よしみつしほの今よりはわれつらくとも田子の浦なみ
中關白殿おはせんとのたまひてまへわたりたち花
のかきりおらせてすき給ひぬれは
こち風にこのみしろくてたち花のたのめしとのすきぬめる哉
つれ〳〵なりし日人のふみをこせたるに
春日野にたれかまつとはつけつらんけふの子日に鶯の聲
かくてえあはぬころ風ふくつとめて
朝日さす草のしもとに家ゐしてすはへする日はとにかなしも
このおとこおなし人をゐ中へゐていきてきやうへ
のほるとて雪ふる日

山たかみ雪ふる里に君をゝきておほつかなくも思ふへき哉
　このおとこ京よりふみをこせたるに雪なんおそろ
　しくふりたるといひたれは
我おもひみやこの風とふきてゝはふりつむ雪は嵐とをしれ
　ひころありて夢になん見つるいかゝといひたれは
（秋風）人しれすねられぬ床のさひしさを誰とぬるよの夢にみつらん
　るいなる人のせいすれはあはてのみあるにおとこ
くれはいかに／＼してかは大井川ゐ堰の水はもりぬへしやは
　かへし
（新勅撰集三 實方家集）大井河ゐせきにつゝむ我なれやけふ暮かたに嘆をそする
　おとりたる男やなきにふみをさしてをこせたれは
ふく風になひくとやきく青柳のいと淺ましく思ひよるかな
　わか心とかれにし人正月に
わかれては春にこそ又成にけれ年はたゝにそとまらさりける
またたれも／＼はなれて年比になりて三月計雨ふ
る日
思ひきや春のなかめののとけきに君を雲ゐになさん物とは
右大殿ものしたまてのころいきところもしらてほ
かにあれは
（新千載集一）忍ふれは空に泪もきりみちて戀敷人やいつこなるらん
　人のあくかれてこさりしころあるところに松虫の
　なきけれは
君をのみ松虫の音のある物をいつれの野への露にぬるらん
　五せちのところに忍ひてあるにおほとのゝ少將に
　ておはせし時みつけたまうてかゝる事抔有しかは
三笠山日影まはゆき影見るもさしはなれすはかゝらましやは
　と聞えしかは
つらしといふ君もをはり忘られて人めをつゝむ我なうらみそ
　おなしところにてあるをとこ
ほのかにも見はやなくさむと思ひしに心をしらぬ心地けり
　この男文ををこするを女いみしくいふと聞て
岸ちかみうこかぬいはゝつれなきに何くたくらん浪の下水
　しほるゝもといひたれは
かくれともうこかぬ岸の岩の上にいさ白波のくたけやはする
　猶きせよと有に二日計有てわたをこせたれは
しつのえのまつにもあらす思ひよりあまりなかけそ岸の藤浪
　ある人三月はかりとをさところより
ゐて近きいもれぬ宿の淋しきにいとゝかはつも聲はたてゝ
　またあき
秋風のふけはみたるゝ花薄むすひし心我につけなん
　人をよせさりしかは
（秋風）數妙にふしみふさすみ嘆けとも猶うかりける身をいかにせん

いせへくたる人みちより

鈴鹿山こえもならはぬ道すからこふるはいかに苦しとかしる

忍ひたる人おらはいかゝ思ふ限りなめりかしとい

ひたれは

人とはゝいかゝこたへん涙たにこゝろしてやは袖をぬらさぬ

あめふる日いみしくふるともかならすまいらんと

あれはさらなりとて

流れつゝしのふる袖にくらふれはけふ降くらす雨はあめかは

つゝむをありてあはてのみあるに津の國へなんま

かりぬる有さまにしたかひてかれよりもまいらん

といひたれは

秋風

忍ひてもいかゝはすへき芦のやのそのやへ葺の隙もあらしを

ゐたるまへより人のいきけるにこゑきこゆるほと

なれはおほつかなくてなむまかるといひいれたれ

は

待わひてたてつる聲によふこ鳥雲井なからもこたへつるかな

といはせたれはかへし

喚子鳥ひなをもとめて鳴ならはよそなる聲になくさめもせよ

忍ひたる人かはたけなうへよとてをこせたれは

風ふけは梢かたよる河竹のよゝになれなはねも絕ぬへし

あはたの右大殿夜ふかくかへらせたまひて日かけ

を給はせたりしかは御返さゝえさせし

つゝめ共うきに人めの惜けれはあけは日影のまはゆからまし

もりといふ所をゐにかきてよみしかは

萬代

春は花秋はもみちとさそはれて人もたちよる衣手の森

かめのかたを作りてこにうす物をはりて螢をいと

おほくこめたりさふらふ人々によませさせ給ひし

君か代をかめのをなしに見すとてや川邊の螢ひかりますらん

十月はかりおもへるを讀てと宮より仰られしかは

千

ね覺してたれか問らんこの比の木葉にかゝるよはの時雨を

とし比諸ともにありふろ人よそ〳〵になりてとし

をに人のもてきけるうりをきゝけるをありけると

しをこすとて

としをにしらすかほなるうり作りかりもりしつる秋にも有哉

なかたえたる人あしろになん日ころあるとて紅葉

にひをゝつゝみてをこせたるに

ひをへてもいかにとふらん網代木に夜おもひ出る人はたにて

かりそめはかり思ひし人のまめやかにかたらふ人

いてきぬ」と聞てうつろひたる萩のしたはにかき

て

拾

うつろふは下葉はかりと見しほとにやかて秋にも成にける哉

人のこ松といふところに侍りしにゆきのいとうふ

りしかはつかはしゝ
あさほらけ思ひやるかな程もなきこ松は雪に埋れぬらん
かへし
埋むとも雪はきえなん春來ても問へき人のなきを社思へ
とをき所より便あるにとはぬ人に
詞花 年ふともすくす便を見さりせは忘れぬ中と猶たのまゝし
さるへきところに夜々とのゐしてあかつきにはく
るものゝほかにとまりたりけれは
けさ見れは露むすほゝる朝氷とくる物ともたのみける哉
忍ひたる所にある人ふみのかへりをせねは歌をえ
よまぬなめりとてなにはつをかきてをこせたれは
冬こもり忍ふとすれはなにはつに咲やこの花散も社すれ
えしたる人のもとにふみをやりたりけれはかへり
ともせぬに
山彦もこたへぬ春のよふこ鳥なけとや聲のたえぬ限りは
むかし見ける人こゆみをたよりにつけていま身つ
からとりにこんといひけるかおほかたにきたれと
また見えねは
ひくらしにまち心みんあつさ弓はるたに人のおもひ出よと
かへし
日くらしに春のうらみもあつさ弓おもひためたるつらき心を

かたらふ人おほかるおとこのとほき所なりけるか
のほるときくにまたみる有ときゝて
拾 こよひ君いかなる里の月を見て都に誰をおもひ出らむ
かへし
宿ことにねぬよの月はなかむれとともにみしよの影にせさりき
よにそらをいはれてなけくにふみをこせかたく
侍人のたえてをとつれねは
後拾 うかりけるみのふの浦のうつせ貝空しき名のみたつは聞つや
まつ人なきはえあふましきを人々いひてこの比
しも日もくるゝをなといひて
たもとのみひるまもなくて此比のあさひにくるゝ空をみる哉
人のもとより今宵はいきやすへきとあれは
千 さゝの葉にあられ降夜の寒けきに獨はねなん物とやは思ふ
かたらふ人えあふましきをありて外へゆくとて
新勅 よしさらに戀しさゝを忍ひ見てたえすはたえぬ命と思はん
かへし
雲 補後拾 戀しさの忍ふはかりにあらは社しぬるまつまの命とおもはめ
こよひかならすこんとてこぬ人のもとに
後拾 やすらはてねなまし物をさ夜更てかたふくまての月を見し哉
四月つこもりかたにむかしさふらひしともたちの
なきことをいひたれは

いまさらに忍ひそわふる郭公もとつ人とはれのみなかれて
おなしところにすへてたましつめしてまいらすと
て
身からこそとにも角にもあくかれぬ通はん玉のを絶たにすな
とてまいらせたれは
よにも皆あくかれにたる玉なれはうらなきつまに留る物かは
かたらふ人のあはぬころほとゝきすのなきつるは
きゝつやといひたれは
新古
こゝろのみ空になりつる郭公人たのめなるねこそなかるれ
むかしみし友たちの賀茂のまつりのしたいしにい
てゝかくなんまいりたるといひたれは
新古
君しもあれ道のゆきゝをさたむらん過ぬる人はかつ忘れつゝ
くらまにまいりたるにとりゐのもとにさくらいと
さかりなるを見すへき人もかなと思ふにもあかれ
は
萬代
都にもなへてはいはしさくら花たれに匂ひをまつかたらまし
たきをおとせはいろ〳〵の花うきたり
山たかみみたれておつる瀧の糸はあやさたまらぬ錦成けり
つゝし椿の花さきたる所にて
鞍馬山おほつかなしと人とはゝ名にはたかへる道とこたへん
むかし見しところの花をある所にうへさせ給たり
けれはまいりたれは
萬代
續古
宿かへてにほひおとるな梅の花むかし忘れぬ人も有よに
またある人
秋風
梅の花いくとせ春をへたてゝかむかし忘れぬけふにあふらん
まいりたる人
しる人に匂ひなかけそ梅の花むかしのこともいかて忍はん
むかしの友たちのもとよりおほきなるたち花をふ
みのなかに入て
たくひなき戀する人のあたりには花たち花もかはかりやなる
かへし
思ひきや花たちはなのかはかりも戀しき人にならむものとは
正月ついたちの日いまはとしころともきこえつへ
しといひたれは
とはかくあらたまるめる世中に雪降まさる身をいかにせん
つゝむとのみある人に
秋風
みねの雪谷の氷にとちられて跡みえかたき三わの山本
かへし
三輪の山しるしの杉も見えぬまてふりつむ雪に跡たえてやは
ある人この人をかたらはんと人にもいひふみをも
をこせんと思ひける程にそゝろなるきんたちなん
との女かたらふときゝて稍にさして

ちらすとて菊に心をかけたれは花こそいたくうつろひにけれ
　ともたちのもと成しこの人にはなれて又のとし中
　の子の日の松をむすひてけふはなかのねの日とは
　しらすやとて

後拾
たれをけふまつとはいはんかく計忘るゝ中のねたけなるよに
　はしめのやうにもあらすなり侍人のねところにあ
　ふきをわすれたるやるとて

朝またきあれ行床に我をゝきて又わすらるゝならひ有けり
　しはしたのむへくもあらぬ人のもとに

ちる花に枕さたむと見し夢は明るよころを幾夜かそへむ
　七月七日けふの空のけしきいかゝみるといひたれ
　は

萬代
王
歎きつゝあまの川なみ詠れはたえまかちなる雲そ渡れる
　おなし日女郎花をうへよとて人のをこせたれは

ひこほしに忍ふる人やかよふらんけふしも匂ふをみなへし哉
　いたくあれたる人の家に紅葉ちりて人もおさ〳〵
　なきに菊をもしろうたてり女なかめたるに

秋風
木枯のしける紅葉に跡たえて人も見えこぬ宿のしら菊
　いみしきとありともよそ〳〵にならしと契りける
　人さしもなくなりてをかせたるてはこをさへにこ
　ひにをこせたれはやるとて

後拾
玉くしけ身はよそ〳〵になりぬともふたり契りしとな忘れそ
　人ようさりこんとてこさりしを其おこたりをもし
　らむとてようさりはかならすとあるに

後拾
まつ程のすきのみゆけは大井河たのむる暮もいかゝとそ思ふ
　とき〳〵みゆる人むまやそこにいりたるといひた
　れは

あくかれて行へもしらぬ春駒の面影ならてみゆるよそなき
　あるところの御まへにきくあはせ給ふとてあるも
　のゝ月あかきにこひありくを見て

月影にまかふとや思ふきくの花うつろふ色はことにも有かな
　はらからなる人のはゝきゝといふところにてをと
　もせねはたよりにつけて

後拾
ゆかはこそあはてもあらぬ母木々のありとはかりは音信よ君
　中あしく成し人秋に成て此比いかにといひたれは

君しあれは覺の風もしらさりき秋めつらしき比にも有哉
　かへし

君により人を戀しとしらるれは君をあはれと思ひ初つる
　ゆのこしまといふところをくのかみにすゑて

行かへりのとかならねはこし方の忍ふはかりに待人もあらし
　世中のいとはかなき比むかしさふらひし所より

いかゝせんいかゝいはまし蜩のなきても餘る世のはかなさを

さるへきところにてしのひてよる／＼きける人ま
かてゝつとめて
秋ちかき萩のしたはのかけてたにもりにし露そよるは露けき
返し
かけ草の下葉にかゝる露にても戀しといかに思ひ出くらむ（けむイ）
ものへゆく人にかゝみとらすとて
續千 みなれよとそふる鏡の影たにもくもらて過せ人わするとも
東三條の花をるりのつほにさしてたのこひのはこ
にすゑてこれはちりにけるをあたらしくさして參
らせよとて少納言のくら人といふ人につかはしゝ
さくら花たれに心をかよはしていかに匂ひをとゝめさるらん
さふらひし人のほかなるにふみたまふとて
しめのうちの同しいかきの都鳥なれにし友を尋てそとふ
おろかならす契りける中いかゝありけんおとこ
秋風 君もいひ我も契りし言のはゝかくしもかれん物とやはみし
ゑに女のものへまうてつる山路にいろ／＼の花ち
るをとゝまりて見る
色／＼の花の心をちらさらはふるさとありとおもはましやは
この比もろともにある人つとめてのはきのけしき
なんいとあはれなるかならすおきて見むと契りて［せんさい歟］
みるつとめてしもつゆといふものなくせさひとも
よくかはきたりうきとかきりなくて
萩の上の枝もたはゝになく露をつゆけさいかておはきたる覽
このあかつきにとくおきむこれはおそきけなりと
ておきよといへは
結ひをきてとくと思ふ共蜘蛛のいかにまとはん露ならぬ身は
物かたりする人いつこにかあらむわかやうにたへ
てねぬ人はあらしものをたれとかたらはんとおも
ひつゝねられぬに夜更てほとゝきすのこゑひとた
ひなきてやみぬれはいつこならむとおほえて
やと／＼に鳴音は夢かほとゝきすねぬ我計聞よしも哉
やむことなき人の御ふみひとたひありてまた音つれ
もなけれは五月つこもり比に
とふ螢まとの戀にあらねともひかりゆゝしき夕やみの空
おところへはてゝうち院にすむにかへる鴈を聞て
後拾 とゝまらぬ心そ見えむかへる鴈花のさかりを人にかたるな
てん上にてなき名をいひたてけれは
拾 拾雜春日野に もえこかれ萩のやけのゝくゆる上に（原あさるとも下全同）見えぬ無名をおほす成哉
入道前太政大臣兵衞佐にて侍ける時一條左大臣家
にまかりそめてかくなんあるとはしりたりやとい
ひをこせて侍ける返事に
後拾 春雨のふるめかしくもつくる哉はやかしは木のもりにし物を

時々物申侍ける人の住吉にまうでゝいはての杜い紅葉こそまたしかりつれといひをこせて侍ける返しに

君にしも秋をしらせぬつの國のいはての森をわか身とも哉

拾遺集第九雜下　内侍馬か家に右大將實資かわらはに侍ける時こうちにまかりたりけれはものかゝぬさうしをかけ物にして侍けるを見侍て

小野宮太政大臣

いつしかとあけて見たれは濱千鳥跡あるとに跡のなき哉

かへし

とゝめても何にかはせん濱千鳥ふりぬる跡はなみに消つゝ

〔右馬内侍集正編巻第二百七十二所收也然讀本書得補舊本缺脱者不少矣故不敢從省略〕

源重之むすめの集

春たつひある所のおほせとにて

うはこほりとくるなるへし山川のいしまのし水をとまさる也

よしの山にゆきのうへにかすみのたなひくを見侍りて

たにふかみゆきしきえねは吉野山作の色とこにかすみをそ見る

むめの花なおそしといふ心を

こちいさけぬるくなれは我宿のさかいの匂ひをおり〳〵そ見こ

うくひすのこゑはきくやとゝひてはへるかへりをに

山ふかみ人にしられぬ宿なれはまたうくひすの音つれもせす

ものおもふころあをやきを見はへりて

えたわかみ風にかたよる青柳のいともみたれて物をこそ思へ

ふるさとの花のさかりものへまかりける人に

わかくさに駒ひきとめて古郷の花のさかりをみてもゆかなん

院のおほせことにてつかうまつる

なほさりにほりうゑしものを我宿のおきのは風に秋をしる哉

たなはたのまたの日ある所のおほせことに

袖ひらてけふはたなはたかへるらん昨日のそらを思やりつゝ

月をなかめはへりて

月影の雲かくれぬるものならは何をうきよのなくさめにせん

はきの花日ことに色まさるといふたいを中宮にて

かりそめのよをかさねつゝ置露の〔にイ〕うさのみまさる秋はきの花

たいしらす

法の海にうかへる船のこふをへてあくる浮木にあひにける哉

ふかき山にこもりはへりて五月五日

我とや人もみぬまのあやめ草さつきのよそにきえわたるらん

山てらにこもりてひとりこちはへる

なつふかく草しけりゆく我宿は誰かきわけてとはむとすらん

夜ふかき月をなかめてよめる

むらさきにたなひく雲のたえまよりみにしむ月の色を見る哉

〔右源重之女集以屋代弘賢自筆本校合〕

殷富門院大輔集

春

夫木 まきのとをあくれは春やいそくらん袂にさえし風ゆるふ也

くれはつるとしを哀と思ひれにのこれるよはの空もしらみぬ

玉 あらたまる光もしらてふるさとにひとり春めくうくひすの聲

夫 春きぬときくにも物そあはれなる花まつほともしらぬ命に

夫 暁のめかふくの若なはおいぬとや鳥羽田の面にあせつたひ行

ますらおかあら田のをたをかへすまに鳴のふしとはあれやしぬ覽

風 みかくれてすたく蛙の聲なから京かせてけりな井手の小山田

夫 よさの浦の春にうら／＼見渡せは外山の庭にわかめかりほす

かこ山の春のこくれはしけゝれと空よりもらぬ月もすみけり みてしかイ

たつぬへき人もなき身はおくかるゝ心のまゝに花をこそみめ

霞たついそらかさきのつり舟はこかぬ物からとをさかりゆく

かけきよきみきはの櫻うつろへは花にこつたふ池のにほとり

新古 花もまたわかれん春に思ひ出よさきちるたひの心つくしを

うくひすもよはうき物と知にけり出しふる巣へ立歸るらん

なつ

夫 河そひの卯花かきを白なみはさらす布とや思ひかくらん

夫 夏狩のせこふみしたき分る野にしほりやすらんさゆりはの花 しをれイ

ふなてせぬとこもうきねに成にけり高瀬の淀の五月雨の空

續後撰 いたつらに老にけらしなあはれわか友とはみすや杜の下草

夏ふかみはらみにけりなしの薄したはひまとふ葛の帶して

秋

夫 ゆふすゝみあたれの床の明方にすたれうこかし秋はきにけり

秋來ぬと思ふよりこそわひしけれ枕に虫の鳴んとすらん

あすといへはなけきも色やかはる覽今更にまたしむ心ちする

夫 露むすふ山田もるこか袖ぬれて物や思ふとはまほしくも

きり／＼す雲井の膓に何といひてかへのそこより聲あはす覽

古郷の一村萩の花さかりたれきてみよと色こかるらん

ねさめして殘れるよはの月みれは行ともなくて傾きにけり

月清みむこの高ねに雪ふりてつもりの浦によする白たま

新勅 いまはとて見さらん秋の空までも思へはかなし秋のよの月

虫のねも心／＼にいそくなりはたをるあれはつゝりさせてふ

なかき夜の友とそたのむきり／＼す我もつゐには蓬生のねや
秋風にうらみ殘りし葛のはの露あかすとや色こになる
秋の夜の物悲しさをいかにしてうき世の外にねて心みん
とにかくに見るわれくるし秋萩の花はうつろひ下葉色つく
色かはるみ山おろしの嵐風にふかき木の葉も紅葉しにけり
新後撰
このはちる殘りすくなき風の音にしつのきぬたの衣うちそふ
たくひなく心ほそしや行秋のすこし殘れる有あけの月
きり／＼すあなかましはしと思しにかれ行聲を聞そわりなし

冬

かきくもり時雨もあへす出る日のかけよはり行冬はきにけり
柴の戸をたゝく嵐の音さむみあくる物うき冬のつとめて
むしのねのよはりはてぬる庭の面に荻の枯はの音そのこれる
神無月いかなる時の雨なれはかきくもるより物かなしかる
みちふかみいとひし庭のよもきふの霜かれゆくも物そ悲しき
つのくみし芦へ程なく枯にけりなにはの事もかゝるよそかし
きゝすなく／＼荻はたれゝ有物をかりはのをのにたゝぬはかりそ
秋はつる山田のそはつ心あれや同しうきよの物かたりせん
今朝みれは籬ことつになりにけりへたつる竹のよはの雪折
白雪のふりつむ野への萩かえに春待鳥はいかゝわひしき
源の池に氷柱ゐにけり打むれて渡るあきさの今朝はおりゐる
山川のさゝれかうへにうす氷のきみ行すみむすほれにけり
行年のけしきはいつもかはらぬに物悲しさそいやまさりぬる

戀

こひ草のしけみにおける露の命なひくもまたて消ぬへき哉
物思ひた何のやまひそとふ人のなれぬ氣色もうらやまれけり
かひなくていけるそつらき侘ぬれはあはぬしにせん名たも惜す
身のほともしらぬ心のつきしより頼しまそなけきせんとは
人心あなあやにくの世中やにくみいとへはこひしわりなし
こひしてふ事をたれおはしはしめけんつらき物から哀とそ思ふ
みせはやなを島の蜑の袖たにもぬれにそぬれし色はかはらす
いつ方へ人の心はなちとりわかれしよりにかへうさるらん
わすれすななほさりをなたのめをきて空をしみせし曙の空
まちかれて今は中々山風吹はそよかへらんと契りやはせし
忘れにし人かゝとおもは過きぬと誰に語てこよひ見ぬらん
あかさりし待ひ殘れるさむしろは露ぬるよりもおきうかりけり
わすれなはいけらん物と思ひしにそれもかなはぬ此世なりけり
へたつとていとひしとはのきぬを返してねたる夢にたにこぬ
恨みすとなけの情のこれなたになからへはてゝきかん物かは
忘れしとつれにはいひしわくさのやかてのきはにかれも行哉
あはぬ夜く涙すといひし衣手を引とめてたに恨かけはや
心にもあかすといひてよかれせし折／＼はかりあふよしも哉
しはしこそこぬ夜の塵もはらひしか枕のうへに苔むしにけり

我戀に五位のかうふり給らはなみたにそむるあけの絹さん
（夫）千はやふるちひろたくなはもゝ結ひうちとけてみき長き心を（よイ）
はかなしなたゝ君ひとり世中にある物とのみ思ふはやわれ

雜

春草にまかひてたてるわか松の行末遠き君か御代哉
月を見て思はぬ事はなけれとも猶悲しきはやみに迷はん
（千）つく／＼と思へは悲しあか月のね覺も夢を見るにそ有ける
うら山しうきはむかしに成はてゝあらぬ世に成かつまたの池
徒に老ぬる松をともなへと千世にはえこそたらはさりけれ
露の身の何にかゝりて過すらんさすかにもとの雫ともなし
古しへは老もやすると賴みありきさて此比はいかにたゆむそ
（萬玉）春の花咲てはちりぬ秋の月みちてはかけぬあなう世の中
うき世そと人はいへ共えそしらぬさもあらぬ折の習なけれは
（月詣）あり／＼て今はの時やわれか身の世の人數にならんとすらん
さきてちる物思ひなき埋木もくち行はての悲しからすや
花も葉も落ちるときの有物を思ひもあへぬ人の世のうき
（續古今）きえぬへき露のうき身のをき所いつれの野への草葉成らん
こりはてぬ色にはしまし山吹の匂ふ清水をくみて思ふに

宇多の郡

淺からす思ふかためのいつはりにこほりも深くみちにける哉

上陽人

くれかたく明しくらしつ春秋のいかにつもりてさまかはる覽
（勅）かり衣しかまのかちにそめてきんのとの露にかへらさるへき（くイ）

隱題きんのこと

ひとりふせこ

よそにても我を思はゝひとりふせ戀しといふもさらは賴まん

高野大師

たかの山みねの朝日をまつとてそかみなきみちに思ひ入ける

地こく

心よりいつる思ひのわかすゆにかへる／＼もにゆる悲しさ

極樂

笛の音も琴のしらへも紫の雲にしみ行あかつきのそら
こゝのしな匂ふ蓮に生れては一ののりのうひとをせん
よとゝもにえのめつらしき色／＼の花はかれせす鳥は歸らす

華嚴經

秋の夜の月のみかほはのとけくて春のなかはにかくれすも哉

最勝王經

（風雅）いまはとて衣をかけし竹のはのそよいかはかり悲しかりけん

維摩經

むろの內もさとる心し廣けれはよろつの床をみてそたてける

法華經

今そしる鶴のはやしは名のみしてわしの高ねにすめる月影

涅槃經

つく〳〵と思ひとくこそ悲しけれ雪のみ山の鳥のをしへに

賀茂の神主重保よみたらん歌ともかきあつめてみやしろにおさめんと申せは書てをくるとておくに

夫 神山の霞吹とくはる風に色こくなりぬあけの玉垣

しめの内に色こくみゆる櫻花天下りけん昔をそおもほゆ

夫 歸る雁みたらし川にうつろへは水のしらへのことち也けり

年をへて花の都に住かむはう月のいみにもれぬ也けり

ゆふしてや秋の初風吹ぬらしそよ〳〵いたく身にもしむ哉

月やとるかもの川霧晴ゆけは雲間をいつる心ちこそすれ（くイ）

神垣のくすの紅葉の色こきはみる〳〵露のそむるこけり

をく霜やそめかへつらんあさち原うらかれ色の紫のゆへ

萬 神さひて年はふれともひめ小松若えさしそふ陰そ替らぬ

もろ人をわたすちかひのたえせぬはみたらし川のとつみや處

法隆寺舍利の御はこの歌をみて

夫木三十一 限ありし鶴の林のかたみをはとゝめおきつるいかるかの里

［右殷富門院大輔集以圖書寮本及丹鶴叢書加校合畢］

後堀川院民部卿典侍集

きくたにも雲井の外のかひもなしそむきにし世の猶そ悲しき

返し

悲しさのみるめのまへを思ひやれそむきにし世のよその哀に

いか計かなしとかしろ世のうさにすつるこの身のおやの心は

花の色もうき世にかふる墨染の袖やうきよに猶しつくらん

返し

墨そめを花の衣にたちかへし泪の色はあはれともみき

寂空

君かいるまことの道の月の影夢と見し世も今やてらさむ

かへし

やみふかきうき世の夢のさめぬとててらさはうれし在明の月

沙彌蓮生

紫のいろにつたへし袖のうへをかはりにけりと聞そ悲しき

返し

あくるまのけふは昨日にかはるよの衣の色はいふかひもなし

いゑなか

墨染の袖をかされて悲しきはそむくにつけてそむく世中

かへし

いける世にそむくのみこそ悲しけれあすともまたぬ老の哀は

權律師修榮

形見とはいふもをろかにいひしらす心にあまる程をみせはや

あさからぬ契もいまは白雪のかさなるとしのあとに見えなん

鶴契遐年

いく千世かあまの羽衣たちなれんともなふ鶴の雲の通ひち

殿歌合月下鹿

續千 さをしかの峯のたちともあらはれて妻とふ山をいつる月影

風前擣衣

あしかきに木のは吹しくおひ風の音もまちかくうつ衣かな

寄衣戀

やま藍のそめぬ衣もくれなゐの色に出てや今はこひまし

寄鏡戀

續後撰 おもかけはさらぬ鏡のかけにたに添へたてゝえやは見えける

玉

續拾 かひもなしとへとしら玉乱れつゝこたえぬ袖の露のかたみは

絲

しかすかにまたたえやらぬかた糸のあふを限と年はへにけり

おほせをにて五首題初秋

さらにまたかきほの荻もをとつれて思ひそむる秋の初風

ふく風のたとはの山のされかつら秋くるからに露こほれつゝ

秋月

たれもまつ秋はならひの月なれと猶ひかりそふ夕暮の空

歌合名所月

辰田山そめてうつろふ木末より時雨ぬ色にいてぬ月影

清見潟月の空にはせきもゐすいたつらにたつ秋の白なみ

いくかへりすまの浦人わかための秋とはなしに月を見るらん

行末のけふりとたにもわかさりし心のやみはいつかはるへき

返し

おもひやる心の空の月の色にとまるやみちのはるゝをそ待

世をそむきぬと聞て人のとふらひて侍ける返し

續後撰 悲しきはうき世のとかとそむけともたゝ戀しさの慰めそなき

續古 夢の世に別れて後の戀しさをいかにせんとかきみになれけん

くるとあくとなかすなみたの紅に色も別し墨染のそて

おなし比たにゝ烟のなと申ける人に

身をこかす烟くらへの別路はをくるへくやは物の悲しき

述懐歌

歎きまてかはれはかはる世中をなになからへてあけ暮しけん

夢にたにむかしは見るもみねに来る色やみとりの風そ悲しき

くすのはのいく秋風をうらみてもかへらぬ物は昔なりけり

末の世をてらすと見えし月なれは西の空にや光そふらん

したへとも花の臺の遠けれは空行月にねをのみそなく

見てしかはうき世の衣ぬき捨てさとりひらけん花の衣を

うきなみに霧も霞も立かさねしほたれ衣かはく日そなき

こひわふるかけたに見えぬ夢の世にあはれ何とて在明の空

ゆめよりもはかなき露の秋のよに長き恨やきえのこりけん
たちわかれうき世出へきつまとてや花色衣きつゝなれけん
かたみゆへ又せきとめぬ涙かななれて別はこりはてし世に
みたれ落る我ものからの身にそへて今はあたなる袖のしら玉
いかさまに忍ふる袖をしほれとて秋をかたみと露のきえけん
　雪ふりたる朝しけもちまいるよし申けるに心ほそ
　さおほしめしやらるゝ御事つけのついてに
けふまても何に命のかゝるよにふるも悲しき雪のもふらん
　おりを過さぬおほせともおなし涙にかきくれて
ふりつもるあとなき雪をみてもまつ閇し涙にかきくらしつゝ
　おなし雪のあした大殿より
おもひのみ日数や雪につもるらんあとなき庭も跡きえぬまて
憂身世にきえぬもつらきためしとや袖の雪たに拂はさるらん
　御かへし
うき事のふりてつもれる雪の中はいとはぬ庭もあとそ稀なる
きえとまるほとも悲しき墨染の袖には雪のふるかひもなし
　いとさひしく見わたさるゝにも
残りなく年も我身もいりはてゝとはれぬ雪のほとは見えける
宿からの都もしらすふる雪に山のいくへをおもひこそやれ
　としかへりて日数過て後これよりおとろかされて
　つゐてに　さか

しはあらぬ霞の袖の春の色なきりにまよひし秋のかたみと
　はかりはひとりなかめてこそ（ありイ）りしか
春しらぬみ山の雪のふかさまてとはるへしとは思はさりしを
　わかこゝろのあさゝこそとありけれは又京
すみそめの衣いつれとわかぬまに霞や霧にたちかはるらん
　もしゝれ候はて
袖のうへのうきしる紫にくらふれはみ山の雪は春もしるらん
　この返事こまかにて　さか
くまもなく光をてらす秋の月さこそは西の山に入らめ
　これをも九品れんたひに思ひやりまてせさせ給へ
此世にもにこらさりけり秋の月花のうてなに光さすらん
　たのもしうこそ候へ
うき世をは霞の色にぬきすてゝ花の袖にそ春をしるらん
秋の霧春の霞と立かさねなみたにしほるあまの袖のみ
　こそ数なるも数ならぬも哀盡せぬ恨にては侍らひ
けり
さむるまてあらまし夢のよの中を見し長月の在明の空
　いかに候事にか身にとりて長月の在明方ふし待の
　ほとたへかたくあはれに思ひしみて、さふらふに小
　倉の山のしかのなくさへ
はかなさの春の夢かとみしよにも末はの秋の露の世中

たちかへしあまの衣の袖のなをうき世に殘すつまとこそきけ
我なから捨し此よを打かへし又おしみさふらふか
今さへまたおそろしくもさふらへとも秋より冬まて思ひつめ候し事を佛にひかれまいらせてうちいたしそめ候て中〳〵にとゝめかれたるやうに

となくともしとふ心の契あらは花のうてなの露もへたてし
秋の月影もしられぬ山陰の庵にたにも露はこほれき
身をなきに思ひなしても悲しきはうき世を捨し秋のよの月
君か代をいはひし春も百千鳥よをうくひすと鳴を聞にも
まつ泪の氷はいとゝとけそめ候ぬる心地してこそけにも候つれ

これも又惜みなからもそむく世とすゝむる道のしるへ之けり
とまておもひなしまいらせてこそ候へ

谷陰の柴のくち木の烟ともならん夕の空をなかめよ
きかせおはしまさは

かきつめてうき水くきの跡なれと忘れす忍ふかたみならすや
と心をやりて又〳〵かくれてはつかしく

かきやれはその事となく水くきに泪のかゝる心ならひに
をしはかりまいらせ候も

あはれいかに此春雨のつれ〳〵とふるにつけても袖ぬらす覽
人の夢に見參らせたりける歌

まよひこし我心からにこりけりすめはすみける池の水哉
此世にてあひみん事はしかすかにはかなき夢を頼む計そ
御らんせられて大殿

すきやすき月日のほとを思ふにもかすなき物は涙之けり
いけ水のすめはすむらんきはりはもとの心のきよき之けり
御はての日さかよりとてさしをかれたりける

この秋もかはらぬ野への露の色にこけの袂を思こそやれ
と有をたれともみ分れは殿の御まきれ事にやとて御くるまに入させつ

けふとたに色もわかれすめくりあふ我身をかこつ袖の涙に
さとにいてゝむけにふけぬるほとに又殿よりとて

かきくらしかさなる秋はめくるともなを墨染の色やひかたさ
又御返事いとこゝろへすなから

王 よのうさに秋のつらさをかさねてもひとへにしほる墨染の袖
ほとへて後はしめの歌は六條の三ゐいゑひらさることしたりしと宰相殿に語けるときく

祥　寳

けふよりの花のたもとのあらましに泪かさなる墨染のそて
返事

墨染の袖もひかたき秋なれととふ人もしやわきさて露けき

權大納言典侍集

戀

音なきはこゝろひより[illegible]かゝる思ふよそ[illegible]

はる

さく花はまたまたしくと今は[illegible]けしき[illegible]

またすともあはれ程あらし花さかり風にみたれん如月のころ

正[illegible]元年[illegible]月[illegible]日[illegible]

戀しさにたへぬ[illegible]にすゝれなりはてぬやと思ふくれかな

はるのけしき

よのけしきそとなくこそまなれそらうすにほひ木末けふりて

うくひす

ゆきちりて寒さのこれる春なれと時をしりける鶯の聲

としのくれ

年くると人はさしもにいそけともつれゝりをに世は長閑なる

冬

きのふまて秋となかめしよの色を何のかはれは冬になすらん

戀

むなしくは人のとかにはあらすともまつ一度は恨みやりてん

秋

たけの葉に秋風さわみふきとなり夕暮さひしひとりなかめて

いけなみたちて

吹風に池なみ立てみきはなるあしひとかたにをしなひくめり

こひ

[illegible]にも入[illegible]るへくは物うきとこもいそかれなまし

さむきあし

[illegible]氷りとわたる朝あけにたてるみきはのあしの寒けき

秋

[illegible]の下葉に[illegible]くれしと[illegible]さひわたる庭のおもかな

【題闕】

ひとしくれとをれるあとのうき雲にやかてはつるゝ有明の月

草はみなかれかろみつゝ風にのみもろくみたるゝ音そ悲しき

こひ

いかにして人になれしと思ひとるも今より後のをに祉あらめ

秋風

きゝなくるなこりもすこしつく〳〵と梢にわたるよはの秋風

ゆき

かきたれてふると詠むる程もなく庭こそやかて雪になりぬれ

戀

このきはゝたゝ中々にみすともといひし情のころまれもかな

松下月

ものくらき松の木かけに月もりてふけぬる庭の色そさひしき

たけのつゆしろし

たくひなく見えもするかな月の夜の竹にならへる露のしら玉

〔題闕〕

ときいたり春にをしなるとはりに空もやはらき霞ゆくめり

むめ

色もかも心の中にあらましてまたきしつえの梅をこそみれ

天しやう

このくれそあはれとみつる大そらの霞そめぬるよもの梢を

ちき

ちりてこそなをしも風は厭はるれさなから庭の花を見んとて

はるの動物

にはにさす日かけのとけみ風ぬるく春なるけふに鶯なきぬ

春居所

月うすくふるきのきはの梅にほひむかし忍へとなれる夜半哉

花

おしとおもふ心もしはしわすられぬ風に亂るゝ花のけしきに

春雨

色あさき柳のみとりうちなひきあめしつかなる春の日くらし

はる

春はたゝおり〳〵ちれる花の色の匂ひになれるいりあひの聲

なつ

雨の中に橘かほる夕くれよ山ほとゝきすいまたにもなけ

冬

吹をくるかねての風はけしくて靜になれる雪の中かな

正應二年十月十三日御歌合落葉

風にちる木の葉もいかに思ふらん枝にわかるゝ今のなこりは

同御歌合雪

雪はたゝ靜になれるのちよりもふりにけるよのあけほのゝ庭

同御歌合戀

このうさに猶なからふるつれなさはあすと賴めは又や待れん

うきとはしはしかほとの思ひにてたゝ戀しさにつれは成ゆく

秋夜

風のをとにはにしつまる月のかけふけぬるよはの秋を見る哉

うらむる戀

そのたひにむかしはいひしうき事を今は心にさてのみそもつ

暮春

春として匂ひし花の色つきて日かすのはても今にかきりぬ

戀

思はすとさのみもいかゝ恨むへきたゝ我いかて人をしたはし

夜

月とをき村雲すみてこの夜はゝ明かたちかく成りにけるかな

春

月もなく風はかりふく春の夜に哀はおほきものにそありける

永仁二年三月十四日
思ふ事のいかにあるにやつねよりも今宵の雨の音のかなしき
つく／＼の心もおなし思ひにておなしさまなる雨をきくかな
春のなこり花のなこりの月の夜をあらぬ情に雨のなしぬる
永仁元年四月はるの夕といふ題にてうたあはせ
うすかすむよものけしきをにほひにて花にとゝまる夕暮の色
同御歌合冬夜
吹ならすあらしの音もことなるは霜か雪かの今宵ふるにや
同時戀夜
戀しさにつく／＼とねぬ夜半の内にせめてやあらき雨さへそふる
雜風
枝よはくなひける竹の夕にそ風をはらうけて見るへかりける
永仁二年三月廿九日ほしゆん
思ひいれておしむ所もおしまぬもなへてわかるゝ夜半の春哉
なくさめてふち山吹を殘しおきて花をはくして春やさりゆく
同時戀
つねよりも戀しさあまる折はたゝ詠めてたにもあられさり鳧
いかなれや夕くれことに雨かけの見るこゝちして今宵戀しき
身にうさの限をみてしそのゝちは心のそこそ我もかはれる
我もゆき人もまたれしその折の身さへ戀しき今にもあるかな
さま／＼に後は名殘の戀しきに人にはしゐてなれしとそ思ふ
さりともと思ひけるこそはかなけれもとよりさその人の心を
御うたあはせに
ひと本のこゝのお花にやとるらんさとをはるけみ行方もなし
かれしろき尾花に夕日さすまゝにたへす聲するきり／＼す哉
くらき松の嵐のをとも雨やみて軒のしつくのふくるをそきく
永仁二年四月廿四日一行寒鴈万山秋
ひとそゝきしくるゝ山の夕くれにたへぬ聲なるかりそ過ゆく
何となくあはれにみゆるおほそらの雲に心をけふはくらしぬ
永仁二年四月十三日ふるきしの心を
すきぬれは現のかひやいつくなるたゝ見し事は夢にのみして
御つき歌中に戀
つれなきを思ひとれ迚かく計またみぬうさをみするにそあらん
たえぬへく恨みなりぬるはてはたゝ哀ひとつに思ひわひつゝ

續群書類從卷第四百五十

和歌部八十五

俊成卿萬葉集時代考 稱萬時考

萬葉集時代事。もとよりひと方ニさためかたく候て。ろむしあひたる事ニ候。

清和天皇御時。文室有季ニとはれ候時は。

神な月時雨ふりおけるならのはの名におふ宮のふることそこれ

と申て候へは。ならのみかとゝはきこえ候。

ならのみかとゝは。うちまかせては。

この京へ宮こうつりしてのち。さらにならにわか身許かへりておはしましたるみかと。

桓武の御こ。嵯峨の御あにのみかとを。御名には　平城天皇と申。

たゝならのみやこにおはしましたる。六七代のみかとをは。をの／＼御名ありて。ならのみかとゝ申さす。

元明。元正。聖武。孝謙。淡路。光仁也。

古今の序ニは。

いにしへよりかくつたはろうちにも。ならの御時よりそひろまりにける。かの御世やうたの心をしろしめしたりけむ。かの御時に。おほきみつのくらゐかきのもとの人まろなん。うたのひしりなりける。これはきみも人も身をあはせたりといふなるへし。秋のゆふへ龍田河ニなかるゝ紅葉をは。みかとの御めににしきと見たまひ。春のあした吉野の山のさくらは。人丸か心には雲かとのみなんおほえける。又山邊赤人といふ人ありけり。うたにあやしくたへなりけり。この人／＼をゝきて。またすくれたる人も。くれ竹のよゝにきこえ。かたいとのより／＼にたえすそありける。かゝりけるさきのうたをあはせて。

萬葉集となつけられたりける。かの御時よりこのかた。としはもゝとせあまり。世はとつきになんなりにける。

　とかきては。

代をかそふれは。　平城より醍醐天皇まて十代。年をかそふれは。　平城天皇のはしめ大同元年より。延喜五年ニいたるまて百年。

世つきにはならのみかとの御時。左大臣時平見うけたまはりて。萬葉集をえらふと申て候。

顯昭法師はこの世は十つきになんなりにけると申。古今の序をつよくまもりて。大同のみかとの御撰と申候。さなき人は。おほくさきのならの御よにえらはれたりと申は。たゝ世は十つきのをは許こそ大同ニあたりたれ。すへて人丸あか人をめしつかふよりはしめて。なにともさきのならの御よにあたりて見ゆれは。大同にあらすと申あひて候めり。

このせちにつく人。又おなし序をひきて。もゝとせあまりとかけるに。もゝとせにみつとしなれは。一定さきなりと申。又このせちにつきて。人丸赤人をめしつかふ御世に。萬葉集をえらふと申さは。むけのひか事也。萬葉集には時代あらはに見えて候。人丸あか人はふるき人になりて。家の集を見てそのうたを見る。當時ある人ニあらは。

聖武天皇なは　太上天皇と申。

孝謙天皇なは　天皇と申たり。

中納言家持は前（二十卷）太上天皇は元正御事也。

（光仁御時）寶龜十一年二月一日參議ニなる。

（桓武）延暦二年七月十三日中納言ニなりて。おなし四年八月にうせて候へは。

大同の人その歎をかきて。中納言とかき候へし。萬葉集には。内舍人より越中守左少辨なと申て。次第ニなりのほりたる上達部よりさきのつかさを。やう〳〵にかきて候。又さなき人〳〵も。光仁桓武の御よの公卿をは。おほく殿上人よりしものつかさにかきて候へは。

あらはに聖武天皇くらゐをおりさせ給て。孝謙天皇くらゐにおはしますころの集とは見えて候へとも。たれうけたまはりて。一定えりたりとも。いつれのみかとのおほせ事にてありとも。たしかにかきたる物はなにも見え候はす。

諸兄大臣は天平勝寶八年　聖武天皇のうせさせたまふとし致仕。つきの年うせて候へは。人のほと。まことにうけたまはりてえらんも。あたりたる人に候へとも。ゝのなとにうるわしくかきたる事は見をよひ候はす。人のつかさ世のありさまにて。あらはに聖武御時のことゝは見え候へとも。さま〳〵ろ

んしいさかひ申あひて候。

やす〳〵と人のしりたるをにては候はぬ也。むかしのをはなにをもかすかにたしかならて。人の心はしなやかに心にくゝ候へは。ものをあなかちにあま〔く脱カ〕てさたするをも候はす。かきつくる事も。申さはしとけなきをおほく申ちらして候を。よのすゑには。いかにせんとしらぬ事をもしりかほに。見さためぬををも。事をきるやうに申あひ候へは。きゝにくゝも又おこかましくも候なり。これよりすきてたしかなる説は。たれもえ申候はしとおほえ候。

此一巻就後京極殿〈于時大将〉御尋所被注献之也。五條入道殿御消息也。正本は在于九條殿云々。是は九條前内府御筆也。

以藤谷殿御本書寫交合訖。奥書は藤黄門御自筆也。御本者巻物也。追期之後者可奉返家門者也。

桑門潤爲

此時代事隨分被秘。仍書寫御免之仁無之歟。以身書寫。面目云々。

右一策以前黄門爲久卿相承之本書寫之。抑此萬時事顧世上稀有之物也。以芳志被借與之。深納筥底。尤可秘藏而已。

享保十六載三月中浣　散木亞槐公澄

此一帖以滋野井家御秘藏本謄寫之。誠珍重之物也。公麗卿以御懇志借與之給。深納函底可秘。必不可出窓外者也。

安永乙未歲霜月上旬　大和守作積與

此一巻不謀得之。雀躍而頓謄寫畢。尤可秘窓中者也。

天明四年初秋　芳宜園主人慈延

〔右俊成卿万葉集時代考以圖書寮本校合〕

定家長歌短歌之説

萬葉集長歌載短歌字之由事

集巻第一　此巻無并短歌字。

泊瀬朝倉宮御宇天皇代

天皇御製歌

所載長歌也。　只御製と書て無長短字。

高市岡本宮御宇天皇代

天皇登香具山望國之時御製歌

長歌。　不書長短字。
反歌。
幸讃岐國安益郡之時軍王見山作歌
長歌。
反歌。
明日香川原宮御宇天皇代
額田王歌
卅一字歌也。
已下如此。卅一字皆作歌と書。
近江大津宮御宇天皇代
天皇詔内大臣藤原朝臣競春日万花之艶秋山千葉之彩時額田王以歌判之歌
長歌。　歌と書て長歌を書也。
額田王下近江國時作歌井戸王即和歌
長歌。
反歌。
此外卅一字皆作歌と書。無長短之分別。
明日香清御原宮
天皇御製歌
長歌。
天皇幸吉野宮御製歌
卅一字。
藤原宮御宇天皇代
天皇御製歌
卅一字。
過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌
長歌。
反歌。有二首。不書短歌字幷歌數。
已下皆卅一字。作歌と書事同。
幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作歌
長歌。　又不書長短字。
反歌。
載如此二首。
幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麿作歌
たみの浦にふなのりすらんあまとものたまものすそにしほみつらんか
輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麿作歌
やすみしりしわかおほきみのたかくてろ日の皇子神なから神さひせすとふとしけるみやこをゝきてかくらくのはつせの山はま木たてるあら山みちをいはかねのふせきをしなひき板鳥のあさこえましてたまきはるゆ〔し脫歟〕ふさりくれはみゆきふるあきのおほのにはたすゝきしのをゝなみくさまくらた

ひやとりせすむかし思ひて

短歌

秋のゝにやとるたひ人うちなひきいもねらめやもむかしおもふに

まくさかるあらのはあれとはすきさるきみかゝたみのあとよりそこし

此二首歌書短歌字。不書反歌字。是以卅一字爲短歌之證也。

藤原宮之役民作歌

長歌。

藤原宮御井歌

長歌ヲ書訖天。奥に書短歌二字。

短歌。

ふちはらのおほみやつかへあれせはやをとめのともはしよくめすとも

或本從藤原宮遷于寧樂宮時歌

長歌。

反歌。

あをによしならの宮こはよろつよにわれもかよはむわするとおもふな

私無長歌之時。卅一字ヲ皆作歌と書。有長歌時。長歌を作歌或歌と書て。其反歌ヲ幷短歌と書也。

無長歌時。無幷短歌之字。因玆人迷惑。長歌ヲ短歌と云說出來也。

卷第二　作歌と書事又以同。

明日香皇女木瓱殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌

長歌。

短歌。

あすかゝはしからみわたしせかませはなかるゝ水ものとけからまし

あすかゝはあすたにみむとおもふやもわかおほきみのみなわすれせぬ

私端に作歌一首幷短歌と書うへに。長歌一首書訖て。更短歌二首と書て。書反歌二首。短歌分明也。

高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌

長歌一首ヲ書。

短歌二首。

久かたのあめにしほるゝきみゆへに日月もしらすこひわたるかも

はにやすの池のつゝみのかくれぬのゆくゑもしらすとねりまとひぬ

弓削皇子薨時置始東人作歌一首幷短歌

長歌一首ヲ書。

反歌一首。
有歌。
又短歌一首。
さゝなみのしかさゝらなみしきしくにつれにときみかおほ
したりける
柿本人麿妻死之後泣血哀慟作歌二首幷短歌
長歌。
短歌二首。
秋山のもみちをしけみ迷ぬるいもをもとめん山ちしらすも
もみちはのちり行なへにたまほこのつかひをみれはあひし
日おもほゆ
又長歌一。
短歌二首。
こそ見てし秋の月よはてらせともあひみしいもはいやとを
さかる
ふすまちをひきての山にいもをゝきて山ちをゆけはいける
けらなし
或本日。
長歌。
短歌三首。
こそ見てし

ふすまちを　二首は同言也。
家にきてわかやとを見れはたまゆかのほかになきけるいも
かこまくら
吉備津釆女死時柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌
長歌一。
短歌二首。
さゝなみのしかつのこらかまかりちの川せのみちを見れは
かなしも
あまつかすおふしつこしのあひし日をおほに見しかはいま
そくやしき
讃岐狭岑嶋視石中死人柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌
長歌一。反歌二。
靈龜元年歳次乙卯九月志貴皇子薨時作歌一首幷短歌
長歌一。
短歌二首。
たかまとの野への秋はきいたつらにさきかちるらん見る人
なしに
みかさ山のへゆくみちはこきたくもあれにけるかもひさに
あらなくに
書反歌之所ニ更書短歌字事。此後巻々不見。
巻第三

長皇子遊獵路池之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌
長歌。
反歌一。
鴨君足人香具山歌一首并短歌
長歌一。
反歌一。
詠不盡山歌一首并短歌　赤人歌
長歌一。
反歌二。
山部赤人至伊與温泉作歌一首并短歌
登神岳山部赤人作歌一首并短歌
角鹿津乘船時笠朝臣金村作歌一首并短歌
山部赤人登春日野作歌一首并短歌
大伴坂上郎女祭神歌一首并短歌
登筑波岳丹比眞人國人作歌一首并短歌
覊旅歌一首并短歌
私 已上各一首。不可分別。
石田王卒之時丹生王作歌一首并短歌
長歌一。
反歌。　又有同心。長歌一。反歌一。
過勝鹿眞間娘子墓時山部赤人作歌一首
長歌一。
反歌二。
天平元年己巳攝津國班田史生丈部龍麿自經死之時判官大伴宿禰三中作歌一首并短歌
長歌一。
反歌二。
七年乙亥大伴坂上郎女悲歎尼理願死去作歌一首并短歌
長歌一。反歌一。
家持作歌一首并短歌
長歌一。
反歌三。
十六年甲申春二月安積皇子薨時内舍人大伴家持作歌六首
長歌一。反歌二。三首。二月三日作。
長歌一。反歌二。三月廿四日作。不書短歌字。
悲傷死妻高橋朝臣作歌一首并短歌
長歌一。
反歌二。
卷第四
岡本天皇御製一首并短歌
神代よりうみつきたれは人おほくにゝはみえて(ちし)あちむらのさりきはゆけとわかこふる君にしあらすひるは日のくる

ゝまてよは夜のあくるきけ思つゝねなくにとあかしつらく
もなかきこのよを
反歌
山のはにあちむらさはきいぬなれと我はさふしゑきみにし
あらねは
あふみちのとこの山なるいさや河けふこのころはこひてし
もあらん
丹比眞人笠麿下筑紫國時作歌一首幷短歌
安貴王歌一首幷短歌
神龜元年甲子冬十月幸紀伊國之時爲贈從駕人所誂娘子笠朝臣
金村作歌一首幷短歌
長歌一。
反歌二。
二年乙丑春三月幸三香原離宮之時贈娘子作歌一首幷短歌
笠朝臣金村
長歌一。
反歌二。
大伴坂上郎女怨恨歌一首幷短歌
長歌一。反歌一。不書反歌字。
同郎女從跡見庄贈留宅女子大孃歌一首幷短歌
長歌一。反歌一。

卷第五
筑前守山上臣憶良挽歌一首幷短歌
長歌一。
反歌五首。
神龜五年七月廿一日山上憶良令反惑情歌一首幷序
長歌一。反歌一。
哀世間難〔[illegible]〕住歌一首幷序　長歌一。反歌一。
敬和爲能凝述其志六首幷序憶良
長歌一。反歌五首。不分別長短。
貧窮問答歌一首幷短歌　長歌一。反歌一。
好去好來歌一首　反歌二首。
是長歌一。卅一字二首也。
老身重病經年辛苦及思兒等歌
七首。長一首。短六首。長短字載之。
長歌一首。卅一字六首也。
天平五年六月丙申朔三日戊戌作戀男子名古日歌三首　長一首。
短二首。
長一。反歌二首。
卷第六
養老七年癸亥夏五月幸吉野離宮時笠朝臣金村作歌一首幷短歌
長歌一。反歌二。

車持朝臣千年作歌一首幷短歌　長短共一。

神龜元年甲子冬十月五日幸于紀伊國時山部宿禰赤人作歌一首幷短歌

長歌一。　反歌二首也。

神龜二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌一首幷短歌

長歌一。反歌二首也。

山部宿禰赤人作歌二首幷短歌

長歌一。反歌二。長歌一。反歌一設之。仍歌と云は長歌也。

冬十月幸于難波宮時笠朝臣金村作歌一首幷短歌

長歌一。反歌二首。

同人作歌一首幷短歌

なきすみの　ふなせにみゆる　あはちしま
松帆の浦に　あさなきに　玉もかりつゝ
ゆふなきに　もしほやきつゝ　あまをとめ
ありとはきけと　みにゆかん　としのなからは
ますらおの　心はなしに　たをやめの
思たゆみて　やすらはん　われはきぬかふる
ふなかちをなみ

反歌二首

たまもかるあまをとめらか見にゆかん舟のかちもか浪たかくとも

ゆきかへりみれとあかんかなきすみのふなせのはまにしきるしらなみ

山部赤人作歌一首幷短歌

長歌一。反歌三首。

過辛荷島時山部宿禰赤人作歌一首幷短歌

長歌一。反歌三。

五年戊辰幸于難波宮作歌四首

私 昔卅一字也。料知。無長歌時。卅一字歌作歌何首と書。有長歌時は歌とは長歌を書て。反歌を短歌と云也。因茲無長歌時。無短歌字。不委見之人仍迷惑也。

石上乙麿卿配土左國之時歌三首幷短歌

いその神　ふるのみをは　たをやめの
まとひによりて　むまよりも　縄とりつけて
しゝよりも　弓矢かくみて　おほきみの
みことかしこみ　あまさかる　ひなへにまかり
ふるころも　またうち山に　かへりこぬかも」
おほきみの　みとかしこみ　さしならへ
國にいてますや　わかせこの　おほやけとに
かけまくも　ゆゝしかしこし　住吉の
あら人神の　舟のへに　牛吐たまひ

つけたかひ　のしまのさきに　よりたまひ
ゐいそのさきに　あらきなみ　風にあはせず
くさつゝみ　病あらせず　すみやかに
歸へ[illegible]　本國邊に
ちゝ君に　我は愛子ぞ　母刀自に
我はしかこそ　[illegible]り　やそ氏人の
たむけすと　かしこのさかに　ぬさまつり
我をそかへる　とほき土左道に
長歌三首[illegible]反歌一首也。
悲寧樂故鄕作歌一首幷短歌
はるさりくれば　かすが山
みかさのゝへに　櫻はな　このくれされに
かほとりの　まなくしはなく　つゆしもの
秋さりくれば　伊こま山　とふひかくれに
はぎのえな　しがらみちらし　さをしかは
つまよびとよめ
反歌二首。
讃久邇新京歌二首幷短歌
長歌一。反歌二。長歌一。反歌五首也。
春日悲傷三香原荒墟作歌一首幷短歌
長歌一。反歌三首。

難波宮作歌一首幷短歌
長歌一。反歌二首。
過敏馬浦時作歌一首幷短歌
長歌一。反歌二首。
卷第八
天平五年癸酉春閏三月笠朝臣金村贈入唐使歌一首幷短歌
長歌一。反歌二。
山上臣憶良七夕歌十二首幷短歌
長歌一首。反歌十一首。
大伴家持攀橘花贈坂上大孃歌一首幷短歌
長歌一首。反歌二首。
櫻花歌一首幷短歌　長歌反歌各一。
卷第九
詠上總末珠名娘子一首幷短歌
詠水江浦島子一首幷短歌
見河內大橋獨去娘子歌一首幷短歌
已上長歌反歌各一首。
春三月諸卿大夫等下難波時歌二首幷短歌
長歌一。反歌一。長歌一。反歌一。
難波經宿明日還來時歌一首幷短歌
檢稅使大伴卿登筑波山時歌一首幷短歌

詠霍公鳥一首并短歌
登筑波山歌一首并短歌
登筑波嶺爲嬥歌會日作歌一首并短歌
詠鳴鹿一首并短歌
七夕歌一首并短歌
鹿島郡苅野橋別大伴卿歌一首并短歌
神龜五年戊辰秋八月歌一首并短歌
　已上長歌一。反歌一。
天平元年己巳冬十二月歌一首并短歌
　長歌一。反歌三首。
同五年遣唐使船發難波入海之時(親(万葉))母贈子歌一首并短歌
　長歌一。反歌一。
思娘子作歌一首并短歌
　長歌一。反歌二。
過足柄坂見死人作歌一首　無并短歌字。
　長歌一。無反歌。
過葦屋處女墓時作歌一首并短歌
　長歌一。反歌二首。
哀弟死去作歌一首并短歌
　長歌一首　反歌二首。
詠勝鹿眞間娘子歌一首并短歌
　長歌一。反歌一。
見菟原處女墓歌一首并短歌
　長歌。反歌二首。
卷第十
夏雜歌之中
　詠鳥廿七首。長歌一首。反歌廿六首。
秋雜歌之中
　七夕九十八首之中。二首長歌。
　都唐五百四十首之中。五百卅四首反歌。二首短歌。四首旋頭
　歌。
　私此短歌如古今集長歌也。
　此一卷短歌不似他卷。疑是後代之人所註歟。
卷第十一
卷第十二　無長歌。仍不書短歌字。
卷第十三
　愚考。卷第十三。雜歌二十七首。是中長歌十六首。此外問答
十八首。譬諭歌一首。挽歌二十四首。此分ハ無長短之字。相
聞五十七首。是中長十九首ト在。此分定家卿後代ㇵ注付歟。
　此卷悉長歌反歌書連之。不書并短歌之字。
備後國神島濱調使首見屍作歌一首并短歌
　長歌反歌各一首。無分明所見。

卷第十四
皆諸國歌。無長歌一首。
卷第十五
古挽歌一首并短歌。長歌反歌各一首。
丹比大夫悽愴亡妻作歌(長歌一。反歌一。不註歌數。)
到壹岐島雪連宅滿忽遇鬼病死去之時作歌并短歌二首
長歌一。反歌二首也。
葛井連子老作歌一首并短歌二首
長歌一。反歌二。
六鯖作歌一首并短歌二首
長歌一。反歌二。
卷第十六
竹取翁作歌一首并短歌
長歌一。反歌二。
戀夫君歌一首并短歌
長歌一。反歌二。
卷第十七
讚三香原新都歌一首并短歌
長歌一。反歌一。
哀傷長逝之弟歌一首并短歌
長歌一。短歌二。

忽沈狂疾殆臨泉路仍作歌詞以申愁緒一首并短歌
長歌一。反歌二。
更贈歌一首并短歌　家持
長歌一。反歌三首。
家持有序　三月五日臥病作之。
七言一首。四韻詩也。
短歌二首。卅一字歌二首也。
家持卿所存已以顯然歟。
述戀緒歌一首并短歌
長歌一。反歌四首。
守家持遊覽布勢水海賦一首并短歌
長歌一。反歌一。
立山賦一首并短歌　四月廿七日　家持
長歌一。反歌二。
入京漸近悲情難撥述懷(贈掾池主)一首并一絕
長歌一如恒。反歌一。無絕句。
池主和歌一首并二絕　是又反歌二首也。
思放逸鷹夢見感悅作歌并短歌
長歌一。反歌四。依不書歌數不分明。
卷第十八
獨居幄裏遙聞霍公鳥喧作歌一首并短歌

長歌一。反歌三。
賀陸奥國出金詔書歌一首并短歌
長歌一。反歌三。
爲幸行芳野離宮之時儲作歌一首并短歌
長歌一。反歌二。
爲贈京家願眞珠歌一首并短歌
長歌一。反歌四。五月十四日。家持。
教喩史生尾張少咋歌一首并短歌
長歌一。反歌三。三イ
橘歌一首并短歌　潤五月廿三日
長歌一。反歌一。
庭中花作歌一首并短歌
長歌一。反歌二。
天平感寶元年潤五月廿七日還到本任仍長官館設詩酒宴樂飲於
時是主人守家持作歌一首并短歌
長歌一。反歌二。
五月六日以來小旱至于六月朔日見雨雲作歌一首并短歌一絶
長歌反歌各一也。
七夕歌一首并短歌
長歌一。反歌二。
巻第十九

天平勝寶二年三月八日詠白大鷹歌一首并短歌
長歌一。反歌一。
潜鸕歌一首并短歌
長歌一。(なかるさきたの河のせにあゆこさはしるしまつ
とり)
反歌二。
悲世間無常歌一首并短歌　長歌。一反歌一。
慕振勇士之名歌一首并短歌　同上。
詠霍公鳥并時花歌一首并短歌
長歌一。反歌二。
爲家婦贈在京尊母所誂作歌一首并短歌
長歌一。反歌一。
霍公鳥歌不勝感舊之意述懐一首并短歌
長歌一。反歌二。
不飽感霍公鳥之情述懐作歌一首并短歌
長歌一。反歌三。
詠山振歌一首并短歌　長歌一。反歌一。
六日遊覽布勢水海作歌一首并短歌
長歌一。反歌一。
贈水烏越前判官大伴池主歌一首并短歌
長歌一。反歌二。

詠霍公鳥并藤花一首并短歌　長歌一。反歌一。
廿二日贈判官久米朝臣廣繩霍公鳥怨恨歌一首并短歌
長歌一。反歌一。
詠霍公鳥歌一首并短歌。長歌一。反歌一。
挽歌一首并短歌。長歌一。反歌二。
從京師來贈歌一首并短歌
天平五年贈入唐使歌一首并短歌
向京路上依興預作侍宴應詔歌一首并短歌
入唐使藤原朝臣清河等作歌一首并短歌
爲應詔儲作歌一首并短歌
已上長歌反歌各一首。
卷第二十
追痛防人悲別之心作歌一首并短歌
長歌一。反歌一。
陳私拙懷一首并短歌　兵部少輔家持
長歌一。反歌二。
爲防人情陳思作歌一首并短歌　家持
長歌一。反歌二。　使(万葉、下 万葉)
二月廿三日上野國防人部領大目正六位上上毛野君駿河進歌數
十二首(但拙劣歌不取載)
長歌一。反歌五。無并短歌字、

又雖有長歌。只歌と書。無短歌字。
喩族家歌一首并短歌
長歌一。反歌一
已上無長歌。

寶龜三年五月七日
參議兼刑部卿從四位上勳四等藤原朝臣濱成謹上
凡歌躰有三。一者求韻。二者查躰。三者雅躰。
求韻二躰。一者長歌。二者短歌。
長歌以第二句尾字爲初韻。以第四句尾字爲二韻。如是展轉相望。
短歌以第三句尾字爲初韻。以第五句尾字爲終韻。以還頭句爲終句頭。并之爲六句。當於唱歌用之。還頭者不須還頭。
雅躰有十。
四句者。以五句爲一絶。三句爲一韻。五句爲二韻。如彦火火出見天皇贈海龍女歌曰。
於岐都等利(オキツトリ)一句
可母都久志麻爾(カモツクシマニ)二句
和我爲禰旨(ワガイネシ)三句
伊母播和須禮旨(イモハワスレシ)四句
與能據等據等耳(ヨノコトコトニ)五句
五者長歌。以二句爲一韻。如是展轉相望。如帛天稚彦喪會者歌

曰。

阿貴那留夜一句　於等多那馬他能二句
宇那不勢留三句　他麻能美須麻呂四句
美須麻呂能五句　阿那他麻婆夜美六句
他爾不他和他留七句　阿渡須岐能可味八句

二句能字是一韻。四句侶字是二韻。能與侶是一對韻。六句美字當三韻。八句味字是四韻。美與味是一對。四句侶字八句尾字當韻。今欲韻。故以五句能字連韻於四句侶字。以顯改韻之節。若歌者欲以改韻者。亦復得其韻。同字韻不須禁例。雖然不多得用。但絕句者其禁甚之。古長求韻如是。新長求韻無如此。古二句爲今一句。古四句爲今二句。二句尾字。即是爲一韻字。如是展轉相求。

失者如柿本若子詠長谷四韻歌曰。

阿麻俱母能可氣佐倍美由留一句　己母利俱能婆都勢能可婆努二句
宇羅那美可不爾能與利己努三句　伊蘇那美可阿麻母都利勢努四句
與旨惠夜旨宇羅婆那俱等母五句　與旨惠夜旨伊蘇婆那俱等母六句
於岐都那美岐與俱己[illegible]己七句　阿麻能都利不禰八句

得旨可謂阿麻不禰[illegible]。六句相韻。亦義不相違。

右長歌以阿麻俱母能爲一句。以可氣佐倍美由留爲一韻。以直語而成句。都無古事。故今以用古事。頂於新意。長谷之先以顯雲喩。稱於能顯本領。亦以能顯[illegible]。古事爲喩。喩爲古事。實爲新意。

故以阿麻俱母能可氣佐倍美由留等十二字爲一句。餘亦準之。努是四句韻字改韻。故與五句尾字連韻。而避於四句韻字、欲改韻者。餘亦準之。禰是韻字。毛是二句韻字。禰與毛不韻爲失。亦四句云海部釣不禰、而是句云勝入來泉郞釣船。是爲要尾不合。

宇治山僧喜撰式

長歌文句。

五七五々七五七々句。多少任意。

又說。九七五々七五七々也。

長歌常用於女弟詠之無常歌

はじめあれは　さためてをはり　あるをは
うつせみの　世のをはりと　おもへとも
あまそきの　そのきしかけと　たのめれは
けぬたつま　まよふくさはに　おとろへて
あかねさす　ひまくゝに　なりゆけは
ぬはたまの　よいもねかてに　ねさめつる
草まくら　たひにはあられと　水とりの
うきなくに　時の目にかも　たひらきて
あまくもに　たえにし事も　かたらはん
とおもひて　ほれたる事も　ひらけれと
うき舟の　なみにたゝよひ　風まつと
夢のこと　いともつれなく　なりゆけは

そてのうらに　よする浪の　しきぬれは
すへなしと　あまのわふるを　見きゝつゝ
たまほこの　みちゆきすりに　みるわれも
あまくもの　ゆきすきかねて　さまよひぬ
あなうの世　あはれわかみを　かけろふの
ゆめかうつゝか　なそもつれなき

私 文句雖非常長歌之躰。已非反歌。又有喜撰式號物之中。（今案。古今序以之爲亀頭歟　文章殊散々。）

一者二五三七。卅文字餘一文字。是長歌也。

二者五七五七。多少任心也。是短歌也。

文殊菩薩聖徳太子奉給し歌長歌

いかるかやとみのを河のたえはこそわかおほきみのみなはわすれめ

柿本人丸高市親王ニよせたまへる歌短歌

かけまくもかしこけれともいはまくもゆゝしけれともあすか山

彼是水火。雖是後代之人所書歟。

孫姫式

凡長歌式。

五七五七七五七々。（言脱歟）

五言與七雜轉變往ゝ。徘徊不歸。其落句重用七言耳。

柿本人麿奉高市皇子歌曰。

かけまくも　かしこけれとも　いはまくも
ゆゝしけれとも　あすか山　みかきかはらに
ひさかたの　あまつみかとを　かしこくも
さためたまひて　神さひて　いはかくれます
あまひこは　わかおほ君の　きこしめす
そともの國の　まきのたつ　ふは山こえて
こまけもの　わさみのはらの　かり宮に
とゝまりまして　あめのした　さかえん時に
我もとも〳〵

而喜門長歌式。用五七五々七五々七々爲法。其法已在首是也。仍重不出之。今案。自衣通比咩已來。迄于聖代。繁文間起。鷲流弘業。長歌之其法在何哉。未知喜門所量殊操辞歟。喜門不稱其情方。好兩爲意製。是喜之謬妄無窮者也。凡頗本長歌及諸手筆。一同五句之式。無人書。然或多省詞。或頗著義。

私 抑被撰拾遺集之時。於旋頭歌者眞名被書之。至于長歌。以假名なからたと被書。以之思之。花山法皇有御了見之旨歟。揮先達之所爲用假名字。但詞又被載短歌之字歟。萬葉集所載已以顯然。（家持卿所書歟。至天平寶字三年。）寶龜三年參議濱成朝臣式又如此。

喜撰式。孫姫式。(載貞觀以前大寶以後由。)云先賢之所用。云長短之道理。事已分明也。何至于延喜五年初載長歌。是稱短歌哉。不審之中不審。難義之中難義也。但斯時萬葉集未遍披露。僅窺(閱イ)見之輩。委不見歌之員數歟。又不辨事之理非。只就幷短歌之字。推爲號長歌之名歟。依獨歩之儁案。忘重疊之證據。可謂斯道之遺恨。崇德院被下百首題之時。被載短歌一首之由。(敎長卿書之。)作作者皆詠長歌訖。亡父卿撰千載集之時。任古今例書短歌字訖。

清輔朝臣書 奥義抄之時。

一長歌 二五三七。合三十一字也。

やくもたついつもやへかきつまこめにやへかきつくるその
やへかきを

二短歌 五七五七。多少任意。

先書孫姫式。次書喜撰五七五々歌。

但求韻歌別有二種。

一長歌(第二句終字爲一韻。第四句終字爲二韻。)

一短歌(第三句終字爲一韻。第五句終字爲二韻。)

任濱成(歌經)朝臣式記之。

又云。雜談別有十種。

四短歌 以五句爲一絶。

おきつとりかもつくしまにわかゐねしいもはわすれす世の
こと〳〵に

しとにと同韻也。

五長歌 二句終爲韻。

あめなるや をとたなはたの 一韻
うなかせる たまのみすまろ 二韻
みすまろの あなたまはやみ 三韻
(弘)たにふたわたろ あちすきのかみ 四韻

任濱成朝臣式載之歟。端所註長短之體。已以相違。是就各本文載之。不註今所用之相違。雖似可弃。上古與當時相替之由。乍存之成憚。委不分別歟。非無所存哉。雖有所辨存。不破先達之説歟。可謂知道。

範兼卿童蒙抄云。

雜躰

長歌

やくもたついつもやへかきつまこめにやへかきつくるその
やへかきを

短歌

ちはやふる 神な月とや けさよりは
くもりもあへす はつしくれ 紅葉とゝもに

躬恒長歌略之。

萬葉集に反歌を短歌とかける事もましけれとも。僻に長くよみつゝけたるを短歌といへる事はいますこし僻也。日本紀にも卅一字の詠を短歌といへり。古今集の長歌行短歌行の心を尋て。思ふる心におもひみるに。歌といふはうたふといふ事なれは。卅一字の作は字すくなく。句のつゝきなかめよけれは。その詠の聲なかし。長歌は句は多くつゝけるゆへに。詠の聲なかくはあるへからす。仍短歌といふ也。かくやすきさまに心えぬにとり。[illegible]に僻にやとて心えたる。

如此勘寄之上。長歌を短歌といへる事。いますこし僻也と書之條。甚以不當。可謂人心不同歟。又不叶髓腦式。頗以委不見哉。

此外俊頼朝臣無名抄[illegible]此事。件抄某金者不為可云々。

謹所勘出。只為[illegible]。至今者猶改延喜以後稱來之說。

更尋[illegible]以前[illegible]之[illegible]。且不加私今案。只顯先賢之所存許也。

貞永元年七月中

黄門道老在判

小野小町者[illegible]之人也。[illegible]式。[illegible]

元慶后宮之時[illegible]不過[illegible]。

松殿入道殿下[illegible]

師伊房卿[illegible]古今[illegible]序之中[illegible]。

安及人代。並以大異。長歌。（註云。即是々也。俗以長歌稱短歌謬也。）短歌（卅一字也。又稱反歌。）旋頭。其體未詳。混本之類（旋頭歌之異名也。）

此註又如此。本說者貫之註也云々。

諸說各可稱貫之。不辨彼是否。

萬葉集時代事。古來賢者猶遺疑。近代好士重相論。頻作勘文。互爲己理。未見備見本集有所辨的。何是何非。只可隨後學之所存。

云人云我。全不稱自說之有謂。

本集卷第十七　自天平二年至于二十年。

卷第十八　自天平二十年三月廿三日。至天平勝寶二年正月二日。

[illegible]等宴歌。

卷第十九　同年三月一日。

此卷末云。

おほきみは神にしませはあかこまのはらはふ田ゐをみやことなしつ

おほきみは神にしませは水鳥のすたくみぬまをみやことなしつ

右件二首天平勝寶二年十二月三日聞之。即載於茲。　此文分明也。　至五年正月廿五日。

卷第二十　自同五年五月。至于天平寶字三年正月一日[illegible]

聽郡司等宴。
凡和漢書籍之習。多以所註載。爲其時代之書。何拋萬葉集之所見。徒勘他集之序言哉。似無其謂。
是註所見之許也。異贊者不可論。

古今序

かくつたはるうちにも。ならの御時よりぞひろまりにける。かの御世や歌の心をしろしめしたりけん。かの御時に。おほきみつのくらゐかきのもとの人まろなむ歌のひじりなりける。これはきみも臣も身をあはせたりといふなるへし。秋の夕たつた川に。
又山のへのあか人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり。人まろはあか人かかみにたゝんことかたく。赤人は人まろかしもにたゝむことかたくなむありける。
これよりさきのうたをあつめてなむ。萬葉集となつけられたりける。
かの御時よりこのかた。年はもゝとせあまり。世はとつきになむなりにける。
如此序者。文武天皇御世。柿本山部列座之由歟。
見萬葉集。柿本人麿所詠歌。皆藤原宮之由註之。山部赤人歌。神龜元年以後。天平年中之由註之。其年月不違。相並之由無所見。
自文武大寶元年。至于延喜五年。二百五年。文武以後延喜十八代歟。然奈良御時雖存。聖武天皇御世。其前後二十四年三代（元明。元正。）也。以此序爲平城天皇之證據。（顯昭付之。）大同年中無可撰和歌之人。不被稱德天皇以後歟。於平城之說者勿論不足言事歟。

同序

これよりさき、歌をあつむる次、又以不審多。强不勘時代年選。
撰文京極書歟。
天平勝寶年中歌をこれよりさきの歌と書。尤無其理歟。
道因之所望勸文。不詳此等子細。
古今序或等事、頗不似披見萬葉集之人如何。

享保十二未夏奈良屋安左衛門所持致候。定家卿眞筆長歌短歌古今相違之事と申書付、公義江被　召上。右代りとして黄金百枚安左衛門江被下置候。然處右書付今度冷泉中納言殿江被下候由。是者定家卿御子孫之由。右に付書簡并中納言殿御詠歌之寫。
今度先祖定家卿眞跡之長〔短歌脫〕歌古今之事一狀。以家筋を爲久江拜領被　仰付候御事。　上意之段畏承候。誠當道之再興、當家之面目、永々傳子孫。興幸不淺悉存候段、難盡筆紙候。御禮之儀、可然樣御披露　希存候。爲其以使札令

呈上也。恐惶謹言。

冷泉中納言　爲久

十月十二日

水野和泉守殿
松平左近將監殿
松平伊賀守殿

今度從　大樹公。先祖定家眞跡一帖。家筋以爲久江拜領被　仰付候事。　上意之段畏存候。誠當道之再興。當家面目。永々傳子孫。恩幸不淺忝存候段。難盡筆紙候。御禮之儀。亞相公御前可然樣御披露希存候。爲其愚札以令呈上候。恐惶謹言。

冷泉中納言　爲久

十月十二日

安藤對馬守殿

冷泉黄門

將軍家の仰とありて。先祖京極黄門の長歌短歌の事を委筆しおかれたる一帖を。家に納へきよしにて下し給りぬる。忝により思ひを述侍る長歌。

千早振　神代のまゝに　うこきなき
大和島根の　その葉を　とをつをやより
うけつきて　年をかさぬる　いへのかせ
ふきのこしつゝ　一すしに　絶せぬ道と
なりにけり　しかはあれとも　するついに
おろかなるへき　おしへそと　書なかしけん
いにしへの　名殘いつこと　しらなみの
よるへを遠く　たとる身に　今おきかへす
水くきの　跡もさたかに　あきらけき
月の面かけ　手にとりて　まちかくむかふ
ますかゝみ　かけてあふけは　いやたかき
木の下露の　めくみをは　せはき袂に
つゝみても　をき所なき　うれしさも
いかてと葉に　のはへまし　猶さかふへき
日のもとの　國をためしに　いくはるも
わかのうら松　色そへて　君につかふる
ことわさの　つきせぬ種と　代々に傳へん

貴翰にふく恵の風のたよりゆへよるへ正しき和歌のうら船

貴札致拜見候。今度定家卿眞跡長歌短歌古今之事一帖。以家筋拜領之。　上意之趣相達。忝由得其意存候。御紙面之趣致承知候。恐惶謹言。

十月　　戸田山城守

冷泉中納言殿

〔右定家卿長歌短歌說以小杉榲邨氏所藏本校合〕

續群書類從卷第四百五十一

和歌部八十六

萬葉集難事上

顯昭陳

道因陳并顯昭陳萬葉集時代係々難事

一平城天子事

時人皆云。古今序曰。平城天子詔侍臣令撰萬葉集者。聖武天皇也。非大同帝也。聖武天皇於寧樂京馭宇、遷平城宮。故可有平城號。大同帝者本不居平城宮。但大同帝有事、遷移平城宮〔不審〕後弘仁五年始有此號。自以前云太上天皇、又稱先朝、又號大同帝也。此等證具見日本紀并國史等。所以國史云。大同御時オホシマニオハシマシテ。作ミアソヒシ給トキニ。四ノ位ヨリ上ツカタ。皆アチハカマヲカサス。其時歌ヨミテイハク。

皆人ノソノカニメツルフチハカマ君ノミタメニタチリタリケフ

天皇御答歌。

〔几歟〕チリヒトノコヽロノマヽニマフチハカマムヘ色深クニホヒタリケリ

此贈答。大和物語ニハ。奈〔良歟〕良帝ハ泊瀬ニオハシマシケル時。嵯峨帝ハ坊ニオハシマシケル比。讀テ奉リタマハリケルトアリ。以之案之。嵯峨帝御時マテハ大同帝ト申ケルト見エタリ。

又橘氏之說云。兵部卿橘宿禰奈良麿者左大臣諸兄子也。母淡海公女也。出時於平城帝賞之、仍以奈良爲名云々。

又續日本紀云。從五位下紀朝臣飯益男清人。天平十五年治部大輔兼爲平城宮留守。

又万葉集第十七云。天平十六年四月五日。獨居於平城故郷舊宅。大伴家持作歌六首云云。

又公卿補任云。大伴宿禰安麿。慶雲二年。平城朝任大納言云云。以之思之。奈良平城是同名也。平城之號不可限大同歟。況於六同帝載平城號之條。借年代暦許也。仍爲散不審。始自神武至于桓武。五十代皇居所注出也。此平城宮者非帝王之號。是宮室之名也。和銅二年始造營也。

又本朝月令云。元慶八年十二月廿日。定獻荷前幣十陵五墓中。近江宮御宇天皇〔衍歟〕山階山陵。在山城國宇治郡。平城宮御宇天皇後田原山陵。在大和國添上郡。桓武天皇柏原山陵。在山城國乙訓郡。崇道天皇八嶋山陵。在大和國添上郡。平城太上天皇楊梅山陵。在同國郡云云。

以是等文。皇代記之處。〔分明〕平城宮御宇天皇者相當孝謙。又平城太上天皇者相當桓武。孝謙桓武共有平城號。然者聖武御時撰始。孝謙御時終功歟。

顯昭陳云。夫帝皇謚號者。崩御之後。或依德化立之。如文武天皇。博涉經史。尤善射藝云云。或依山陵立之。如村上天皇。康保四年六月四日。葬村上山陵云云。或依所居宮立之。如嵯峨天皇。承和元年八月。遷嵯峨院云云。自餘謚號可准之。爰大同帝者雖爲平安聖廷。遷都之後。移居平城令崩御畢。仍所居宮有此謚號也。而平城者宮室也。非帝皇號之由被勘之條。甚迂誕也。

又弘仁五年始有平城天皇謚號之條如何。又以大同帝號平城天皇之條。繼年代暦許之由被注之條如何。凡日本後紀。皇代記。年代記。帝皇謚號之處。皆同注載第四十五代者聖武天皇。第四十六代者孝謙天皇。第五十一代者平城天皇也。一書一文未見。未注於聖武孝謙奉載平城天皇之號。所謂令義解云。平安朝廷平城嵯峨淳和三帝。並桓武天皇子也云云。

又帝皇系圖云。平城天皇又曰奈良天皇。(是平城之謂也。謚永安殿。桓武天皇長子也云云。)

又云。弘仁十四年四月二十三日。停平城太上天皇諸司也云云。

又云。天長元年七月五日。平城太上天皇崩云云。

又云。桓武皇女朝原親王。平城天皇納之無寵云云。

又皇代紀云。日本根子天排國高彥尊天皇號平城天皇。俗曰奈良帝。諱安殿云云。但平城奈良共訓雖同。平城者大同帝之謚號也。不可通餘帝。神武以後帝皇。於諱號有同名。孝德文武共奉號輕。元明孝謙共奉號阿閇。於謚號者全無同名者也。然者以聖武孝謙名平城天皇之謚無所見乎。若於聖武孝謙之謚號。强可載奈良號。只可書奈良天子若寧樂天子若諸樂天子等也。平城天子者天濫平城〔衍歟〕天皇者也。又奈良帝號者世俗詞也。雖通餘帝。不可招混濫之遇。彼天智聖武二帝共名兩帝。又神功皇后履中天皇同名磐余稚櫻宮。又持統文武同名藤原宮。然者奈良帝之號者。雖通數帝。何難之有乎。抑本朝月令中。以孝謙名平城宮御宇天皇。以聖武名平城太上天皇之由被勘之條如何。彼平城宮御宇天皇者光仁也。後田原院之故也。然孝謙者高野陵也。彼平城太上天皇者大

同也。楊梅陵之故也。亦聖武者佐保陵也。況以平城太上天皇存孝謙聖武天皇之由者。何桓武天皇之後擧之乎。則知只守平城宮之字。不辨山陵之前後歟。一事已有訛謬。万緒定迷正義歟。人不可信。世不可努力〻。

延喜式云。
檜隈大内陵。(藤原宮御宇持統天皇。有大和國高市郡。)
檜前安古岡陵。(藤原宮御宇文武天皇。同國同郡。)
奈保山東陵。(平城宮御宇元明天皇。同國同郡。)
奈保山西陵。(平城宮御宇(淨[illegible])足姫天皇。同國同郡。)
高野陵。(平城宮御宇天皇。同國同郡。)
田原東陵。(寳字)(平城宮御宇天宗高紹天皇。同國同郡。)
柏原陵。(平城宮御宇桓武天皇。在山城國紀伊郡。)
楊梅陵。(平安宮御宇日本根子天排國高彦尊天皇。在大和國添上郡。)
深草陵。(平安宮御宇仁明天皇。在山城國紀伊郡。)
田邑陵。(平安宮御宇文德天皇。在山城國葛野郡。)

又帝皇系圖云。
高野姫天皇。(寶龜元年八月四日崩。年五十三。)(以下十一字註文歟)同七日葬大和國高野山陵。
光仁天皇。(延曆元年葬廣山岡陵。同五年改葬大和國田原陵。又號茱葉皇子。追號田原天皇云云。)

今按。以光仁天皇號後田原天皇。是故歟。
桓武天皇。(延曆廿五年三月七日崩。葬山城國柏原陵。大同元年十月改葬同山陵。)
平城天皇。(天長元年七月五日崩。年五十一。葬楊梅陵。)

今按。藤原宮。([illegible])平安宮。平城宮者。皆是帝皇所居宮也。非謚號乎。其中天稚國高彦尊天皇一人得平城謚號也。又平城天皇之號。縱可通聖武孝謙者。古今序爲遮混濫。專不可載平城之號并十代之詞也。其故者延喜聖主繼絶興廢。追萬葉之先蹤。令撰古今集之時。序者豈亂帝皇之謚號乎。是以能因家集序云。王道股肱之臣。訪於衆心探詞。儒林河漢之才。冠卷首而題序云云。何憶不注時代。招向後之疑乎。假名序縱雖載奈良帝之字。眞名序何不擧聖武之謚號乎。

又通俊卿後拾遺抄目錄序云。平城天子修万葉集。花山法皇修拾遺抄云云。

今案。([illegible])已對花山法皇。書平城天子。豈亂帝皇之謚號乎。若爲聖武有左可載其號也。又越州藤刺史仲實朝臣撰類林和歌序云。自平城御宇以來。撰集之蹤連綿不絶。然萬葉集者部類不相同。編列雖准據云云。然彼朝臣古今集目錄云。平城天皇者大同帝也。諱改小殿爲安殿云云。爰知彼朝臣存平城天皇撰萬葉之義。凡平城天皇撰萬葉集之條。往古代々一向傳來。全無異儀云云。未曾見聞聖武撰義。又貫之新撰集序云。上代之篇。義漸幽而文

猶質。下流之作。文偏巧而義漸踈。故抽出自弘仁至于延長詞人之作華實相兼云云。然彼撰中入萬葉集歌并平城天皇御歌二首。(一首花歌。一首蘭歌。)然而除大同御宇之詞人。取弘仁以下之歌人。是則除萬葉撰之代歟。不然者何可除彼代乎。此序意有由。

又聖武天皇者本居平城宮也。天平十五年遷幸近江甲賀宮。同十六年四月都於難波。八月忽依不豫幸奈良宮云云。而始居難波之條。前後違亂。

又居難波朝之詞如何。可書居難波宮也。朝廷居宮未被分別歟。

又和銅元年戊申。始造平城宮也。何云二年乎。

又聖武朝撰始。孝謙時終功之條。度々被勘畢。若被存東大寺大佛之躰歟。平城天子詔侍臣之詞。何宜兩代乎。若聖武若孝謙。可定一代也。若平城

下並可有聖武孝謙二代者。父子之撰集。若居(恐當遷御)別宮而終其功之時者。可書何帝之勅撰乎。

又花山法皇長德年中令撰拾遺。豈云一條天皇御撰乎。

白河法皇大治年中令撰金葉集。全不云讃岐院御撰。又讃岐院天養年中令撰詞花集。誰號近衛院御撰乎。

又以奈良書平城之條。不限萬葉。自餘書籍皆以如此。然者平城奈良同名之條無疑事也。被勘出此證等之條。甚以無證歟。今所論者大同帝外可有平城天皇之號乎。

又聖武孝謙二代奉號平城天皇之證文也。如下委勘。

又見公卿傳。安麻呂慶雲二年雖有任大納言之詞。全無平城朝之詞如何。隨文武御宇者爲藤原朝乎。

又引大和物語奈良帝御泊瀨之詞被注之條如何。考彼物語云。奈良帝ノ神泉ニオハシマシタリケルニ。嵯峨帝ハ坊ニテオハシマシケル時ニ。ヨミテタテマツリ給ヘリケルト云云。隨此事出日本後紀如委引。縱雖有僞本之說。何不引載乎。甚以遺恨歟。

又國史者日本書紀二十卷。(自神武至持統四十一代。)

續日本紀四十卷。(文武以後至桓武天皇延曆十年。)

日本後紀四十卷。(自延曆十一年正月。盡淳和天皇天長十年。)

續日本後紀二十卷。(仁明天皇一代。)

文德實錄十卷。(文德一代。)

三代實錄五十卷。(淸和。陽成。光孝三代。)

而今日本紀并國史之詞如何。

又始自神武。終至桓武五十代。被注皇居并諡號之條。甚以無益也。仍不引載。又其中有不審。第三安寧天皇。大和國高市郡葬山南云云。今考。延喜式云。片鹽浮穴宮。畝傍山西南御陰井上陵也。然者葬山南非居宮歟如何。

第十一垂仁天皇。(大和國添上郡菅原伏見率(宮歟)云云。)

今考式云。纒向珠城宮。　菅原伏見野中東陵也。然者菅原伏見非居宮歟如何。

第十三成務天皇。(近江國志賀郡穴穗宮云云。)

第廿一安康天皇。(大和國山邊郡石上穴積宮云云。)

今考。式前者磯香高穴積宮也、後者穴穗宮也、積字如何。謂所被書積字。非書寫之失。有所存歟。

第廿九宗化天皇云云。

今考之。宣化也如何。書寫之失也、

第卅三崇峻天皇。(大和國十市郡椋倉橋宮云云。)

今考。式云。倉梯宮也。又化云云。猶梯宮。貞云倉梯宮云云。然椋倉兩字重疊如何。

道因難云。謂大同平城天皇御撰者。有條々不審。所以自文武至高野。依被古皇居於彼地。可奉號平城之由令聞歟。大同天皇者弘仁元年御出家。其後住彼古宮。讓位御居之所。奉稱此號也。而(謚歟)諡號不可有同名之由。被出難條如何。

今按之。彼五代天皇崩御之後。隔五十年。何有同名儀哉。加之太上天皇之總名者朱雀院也。然而以承平天皇奉號朱雀院。是准據之例也。可謂謬難

顯昭陳云。大旨同前歟。但元明天皇和銅三年二月　從藤原宮遷奈良宮。桓武天皇延暦三年遷長岡京。同十三年移平安宮也。然者自元明至桓武八代。居平城宮也。自文武至孝謙五代。奉號平城之條如何。又朱雀院之例者。還爲大同之准據歟。其故者附若所而論之者。平城之號雖可宜八代。於大同帝已立其諡號畢。延喜御時。何於大同以前帝可立平城天皇之號乎。後古今集之時。以寛平法皇雖奉號朱雀院。承平天皇得此號之後。於後撰以後之撰之者。如以寛平不奉號朱雀院之故也。又朱雀院者後院也。何云太上天皇之總名乎。費葉法涼(寄歟)之空語。顯古今之明文。可謂大謬。又帝號之混濫。不可及同時之義。國無二主之故也。尤可避前後混濫之過也。依之同帝重祚之時猶立別號。皇極天皇後號齊明。又孝謙天皇後號稱德。是以萬葉集中以皇極號明日香川原宮。以齊明號後岡本宮也。各雖隔一代。重祚之時猶除混濫。況各別帝乎。何依隔五十代乎。凡平城天皇者一定大同諡號。其外若以聖武孝謙又可奉號平城天皇者。明文憑證大切也。今如兩勘狀者。大同平城之號者無其理。本不居平城宮之故。又少其文。年代暦一書之外。然其號之故云云。此條沙汰外之事也。世人驚耳目歟。奇異々々。不便々々。

一時更十代事

[illegible]會云。自聖武至延喜雖歷十六代。付大數除餘數。仍捨六代者十代歟。文筆常習也。十條ヲ十五六ニテハ號十也。其證據多々也

於[illegible]記云。若過若減。皆在大數云云。

禮記云。經禮三百云云。

正義云。是同官。々々三百六十。擧大數弃六十歟。

文選序云。時更七代。數逾千祀。注曰。七代謂自周至梁也。言數千年也云云。

爰考。唐年代自周至梁十一代歟。亦四代歟。
文集云。人生一百歳。通計三萬日云云。
如算計之處。一百歳者三萬六千日也。亦六千日歟。
又云。死囚四百來歸獄。注曰。囚徒歸。死罪者三百九十人云云。
是則以三百九十人稱四百也。增十人歟。
又云。新豐老翁八十八。是時翁年二十四。臂折來。成六十年矣云々。
如此文者。自廿四至六十年。八十四歟。增四年歟。
又云。遂秋其數須知分。已過淸安三十年云云。淸居二毛時二年也。亦二年歟。
又云。元和五年春詔寫眞。時年五十七云云。
然居易者代宗大暦六年正月生。至穆宗元和五年。已上四十一歳也。亦四年歟。
又云。會昌二年罷太子少傅。爲白衣居士。又爲其時年七十一云云。
然自元和六年至武宗會昌二年。已上三十一年也。前後都合七十二年也。義相叶歟。亦一年歟。
又云。會昌五年十月十一日卒已者。(七十五。)
菅三品尚齒會序云。少於樂天三年云云。
文時者居易二年弟也。增一年歟。
菅時登序云。貞觀刑部八代之孫云云。

實者九代也。亦一代歟。
後江相詩云。從儀入室昔千卷。范蘭薛官筆一雙云云。
五千卷也。亦四千卷歟。
古今序云。陛下御宇于今九歳云云。
即位以後八年也。然而八歳書者別様也。付云吉增一年歟。
顯昭陳云。付大數以亦小數之條。典籍之常習。文筆之定例也。然而昔又可依事也。古今序者從注時代之故。書平城之號。置十代之詞也。若指聖武者。兩條相違太有過失。其故見于皇代之次第。

聖武。	孝謙。	廢帝。	稱德。
光仁。	桓武。	平城。	嵯峨。
淳和。	仁明。	文德。	淸和。
陽成。	光孝。	宇多。	醍醐。

已上十六代也。若改聖武孝謙之號。枉可立平城名者。尤置十五十六代之詞。以可遁大同之疑也。若爲十五十六代之數。枉可載十代文者。尤擧聖武孝謙之號。以可除平城之濫也。何翌平城十代之詞。可改聖武十六代之義乎。若存其義者。可書時更十六代數近二百年也。又後拾遺序云。天暦ノ末ヨリ今日イマニイタルマテ。世ハトツキアマリヒトツキトカケリ。是ハ模古今序也。古今ハ自平城至延喜。歴十代之故。ヨハトツキトカケリ。後拾遺ハ自天暦至白川天皇。歴十一代之故。トツキアマリヒトツキ

トハ書ナリ。若古今綿十六代以書十代者。後拾遺又書十一代以
可書十代也。所謂十一代者天暦。冷泉。圓融。花山。一條。三條。
後一條。後朱雀。後冷泉。後三條。白川也。
又万葉集序云。式部大輔敦光朝臣作。始自永泰。迄于聖代。時更
五代。數近百年云云。
是後冷泉。　後三條。　白川。　堀川。　鳥羽。已上五代也。是等
序者達學文選近模古今歟。又彼勘出條々[illegible]。尤可[illegible]者
文選序也。古今序偏模彼餘之故也。彼序云。自姫漢以來。眇焉悠
邈。時更七代。數逾千祀。詞人才子[illegible]卷
盈乎緗帙云々。注云。七代謂自周至梁云々。今[illegible]文選[illegible]不同。
一義云。周秦漢魏晉宋齊七代也。梁昭明太子撰文選。加梁時者
及八代歟。更者歷也。然者自周至齊也。[illegible]七代[illegible]一義云。周
漢魏晉宋齊梁七代也。弃秦取梁也。此[illegible]序者[illegible]之。[illegible]
姬者周也。即詩始也。漢者詩盛(也歟)之代也。故書[illegible]四代八
百六十余年。漢代四百二十余年之中[illegible]十九
年也。是亂國之上。焚書坑儒。滅之無詩。仍略不[illegible]序文云。
遠自周室。迄于聖代云云。然者注之云。自周至梁云云。何弃秦乎。
但此兩義邪正難知歟。秦梁二代。[illegible]是八代。何云十一乎。
若漢分前後。又魏加後魏東魏。又立蜀呉二國。晉代西晉東晉[illegible]
晉。　其中又有前涼後涼南涼西涼北涼[illegible]
燕南燕北燕後蜀僞夏等十六國。又齊立南北并周等。[illegible]如此。

[illegible]分者其數太增。不相叶十一代之義歟。又菅三品文選竟宴序
云。昭明太子之撰斯文也。聽七代之人英。搜千歲之鴻藻云云。
又自餘例等中。若過若減者可隨事也。不叶今序[illegible]代之義也。
又文華之稱者。以十餘稱廿。以廿餘稱卅云云。　然者以十六代可
書廿代。何書十代乎。
又經歷三百者。三百外略六十。何准於十外略六之義乎。
又道計三百日者。爲對人生一百年。略六千日也。
又孔四四百増十人者。是等則可云文華之習。亦可存若過大數之
[illegible]歟。
又[illegible]四年之條。巳是文集之相違。嗜以雜計。未致會釋。可
有其恐歟。
又巳過潘安三十年者。居易六十二歲之時也。仍過潘安之三十二
巳卅年也。今不弃二年歟。何據(字誤)得意乎。何[illegible]乎。
又自居易卒年異說多。國手澂進士許先鳴[illegible]云。會昌五年歲次
乙丑冬十月十一日卒。時年七十五云云。
又傳云。大中元年卒(卒歟)。時年七十六。贈尚書右僕射云云。
又唐錄云。(小史。)大中元年卒云云。此二說同歟。
又會昌五年履道坊尚齒會年。居易七十四之由[illegible]文集。若會昌
五年薨者御年七十四歟。
又或說云。尚齒會年七十二。其年薨云云。
又安和二年尚齒會年。菅三品七十。天祿元年尚齒會年。菅時登

六十二云云。少於寬天三年之詞。會昌刑部十年之弟等。少々相違。且難知定說。且強不可對歟。凡於居易得年者。如此有異說。不可有相違之難者歟。

又引文集說。被注居易從目之條如何。無所見歟。

又考菅家系圖。自貞觀刑部至時登試九代也。然而或除貞觀刑部歟。若除時登身歟。仍云八代也。除始除終。隨時不定歟。

又法華疏云。文殊者釋尊九代之祖師〔古鈔本〕云云。然光并八王子只算都合十代也。除一代是定例也。非今序之例歟。

又崔備入宗書千卷者。是等即文筆之習也。仍非筆一變。取者千卷也。千字無盈歟。古今序陛下九年者。相加受禪之年計之也。仍無相違歟。八歲之詞何異樣乎。〔[illegible]〕九歲之字何言乎。凡年記不同。物數增減者。或書籍異說。或傳々書寫誤。或爲來對句。以增減文字條。文筆之習也。然而不可例平城十代之文乎。

道因云。大同撰卜云。予時〔[illegible]〕十代之詞。此一事雖相叶大同撰。猶多不審。是自然之事歟。或重代歌仙有被掛酌之旨。其義被甘心。仍老比丘所同申也。其間委細不可加載勘文。便宜之時一謁之次。可遂心事也。

顯昭陳云。時歷十代之詞。相叶大同之由被注畢。此條穩便也。曲會私情。甚以左道也。但或重代歌仙有被掛酌之旨云云。何樣掛酌乎。何不書載乎。若是如當々風聞者。自聖武至仁明。當十代之義歟。然者尤以不當也。文選序。姬漢以來時歷七代之文。遠自周至秦代遠也。亦古今序。万葉以後時歷十代之文。遠自大同迄聖代延喜也。但作表大旨者。古今序意乘遍昭業平等之六歌仙。爲和歌之人。並雖書是仁明以後人也。以其在世不可云和歌陵遲。故以仁明以前十代。可爲和歌衰代云云。

今案之。已昔古今序意歟。所謂彼序云。近代在古風者〔[illegible]〕纔二三人。花山僧正者。在原中將者。文屋康秀者。宇治山喜撰者。小野小町者。大伴黑主者云云。此外氏姓流聞者不可勝計。皆以體近鄙。不知大體者也。昔平城天子詔侍臣令撰万葉集。自爾以來時歷十代。數過百年。其後和歌棄不被採。雖風流如野相公。雅情如在納言。而皆以他才聞。不以斯道顯。陛下御宇于今九載。思繼既絕之風。欲興久廢之道。爰詔大内記紀友則。御書所預紀貫之。前甲斐少目凡河内躬恒。右衛門府生壬生忠岑等。各獻家集并古來舊歌。曰續万葉集。重有詔部類所奉之歌。勒爲二十卷。名曰古今和歌集云云。此序意者万葉以後和歌已衰。好士難少。其中知和歌人。纔業平等六人也。又野相公在納言者雖詠和歌。依他才聞。不專斯道也。其後和歌棄不被採者。且是顯無撰集也。是以拾遺古今序云。(或書大嘗永觀制作)自川洪皇令撰金葉集。其後好事之者〔[illegible]〕絕無聞。而或棄不被用。於是太上天皇云云。(是則依[illegible]院之作左京兆三品被撰詞花集也。)此序心乘古今序也。大治以後至仁安。豈無好事乎。只以無撰集之故。云亦不被用也。大同以後至延喜。豈無好事乎。只以無撰集之故。云棄不被採也。

依之孫姬式云。人丸古姬司歩於前都。山部高洛并名於北闕。紀一文林分飛並進。善直臣信田進延道。伊五郎。(同異。作大夫。(春宗宿禰。)野相公。(右大弁。)菅大夫(貞崎朝臣。左遷。)自貞觀之前大寶已後。和歌之士擬漢文家。非其筆圓、萬不會藝同矣云云。

附之案之。大寶以後貞觀以前好事猶多歟。何記一貫以後仁明以前和歌陵遲之由乎。只是大同撰萬葉之後。延喜撰古今之前。久無勅撰。故云和歌事不撰集也。非謂好事之。仁明御字已無撰集。何以其代爲和歌興乎。若以撰式以後爲和歌興一者。何不舉大同以前人乎。若以仁明以後爲和歌興者者。不可見在納言乎。其狀者通昭行平業平等。云年齡云任官。大略同時也。然者以學野相公。可知限弘仁以後之前。以學在納言。可知限仁明以後之由也。

小野篁■

弘仁十一年文章生。天長五年八月任大内記。七年補藏人。(年廿九。)二月任式部少丞。十年三月任東宮學士。承和元年任遣唐副使。三年正月七日叙正五位下。五年停■■法隆之除名。六年叙正五位上。九年彈正少弼。十二年補藏人頭。十三年權左中弁。十四年參議。十五年左大弁。嘉祥二年五月以前彈正弁。停左大弁。仁壽二年春宮。據後任左大弁。十二月叙從三位。同月■。(年五十一。)

在原行平■

承和七年正月補藏人。八年十一月二十日叙從五位下。十年侍從。十三年正月右兵衛佐。五月右近少將。貞觀十二年正月參議。十四年左衛門督。藏人頭。元慶元年治部卿。六年中納言。九年按察使。仁和三年四月十三日致仕。(年七十。)

遍昭僧正(俗名良峯宗貞。)

承和六年右兵衛尉。九年左近將監。十一年藏人。十二年左兵衛佐。十三年左近將監少將。嘉祥三年藏人頭。(出家。)貞觀十一年法眼。元慶三年權僧正。仁和元年僧正。(賜七十賀。)寛平二年七月入滅。(年七十六。)

在原業平朝臣

承和十二年左近將監。十四年藏人。嘉祥二年正月叙從五位下。貞觀七年左兵衛佐。六年左近將監。七年右馬頭。元慶元年右近中將。同二年藏人頭。四年五月卒。(年五十六。)

抑而入道等皆以撰萬葉之案者。雖存水魚味之思。仁明以前十代之征者。已雲泥万里之論。互何不決理乎。何況愚僧一人乎。可謂■之歟。可謂不詳。

萬葉集難事下

一義過百年事

勝命云。自大同至延喜五年。九十七年也。可書及百年也。何書過百年乎。自聖武至延喜五年。百七十九年也。過百年之何有其謂

歟。

顯昭陳云。數過百年者。白大同時可至古今集進覽之時也。延喜五年四月十八日。被仰貫之等之日也。其旨見序文。又貫之集同有其旨。就中紀友則者延喜五年與貫之等同奉　勅。而友則死去之後。貫之等詠入古今集。其詞云。

紀友則カミマカリニケル時ヨメル　貫　之

アスシラヌ我身トオモヘトクレニケルケフハ人社悲シカリケレ

又七條ノ后ウセ給テ後　伊勢詠歌

チキツナミアレノミマサル宮ノウチニ云云。如常。仍略之。

此后崩日延喜七年七月七日也。

又云。法皇西カハニナハシマシケルニ鶴立洲トイフコトチ題ニテヨマセ給ケル　貫　之

アシタツノタテル河邊チ吹風ニヨセテ歸ラヌ波カトソミル

同タヒ猿叫夫トイフコヽロチ　躬　恒

ワヒシラニマシラナナキソ足曳ノ山ノカヒアルケフニヤハアラヌ

今按。此行幸(如歟)如貫之忠岑等假名序者。延喜七年九月十日。法皇主上相共臨幸云云。而如帝皇系圖者。延長四年十月十九日。今上與法皇行幸大井河云云。又左近陣記同之。此條相違不審也。若有兩度歟。

拾遺云。亭子院大井ニ御幸アリテ御幸モアリヌヘキ處ナリト仰セ給ニコトノ由チ奏セシトテ　一條オホイマウチキミ

小倉ヤマミネノモミチシコヽロアラハ今ヒトタヒノミユキマタナム

其後延喜ノ帝ノトコロニ行幸アリケル日アマタノ歌ヨマセタマヒケルナカニ　貫　之

オホヰ川カハヘノ松ニコトヽハムカヽルミユキヤアリシムカシモ

今案。如此詠等者。前有法皇御幸。後　主上法皇共臨幸歟。然而延喜五年以後歌入之條無疑歟。

又亭子院歌合ノトキヨメル　伊　勢

見ル人モナキ山サトノサクラ花外ノ散ナム後ソサカマシ

貫　之

櫻花チリヌルカセノナコリニハミツナキ空ニ浪ソタチケル

此歌合延喜十三年也。

又貫之カ和泉國ニ侍リケルトキニ大和ヨリコエテマテキテヨミテツカハシケル　藤原忠房

君チ思ヒチキツノ濱ニナクタツノタツネクレハソアリトタニ聞

カヘシ　貫　之

チキツナミタカシノ濱ノ濱マツノナニコソ君チマチワタリケ

レ

件忠房延喜廿二年任大和守云云。

又古今眞名序，是紀淑望之作也。而或說云。貫者其父紀納言借彼名作之云云。又或人云。淑望者延喜九年任大學頭。同十年任東宮學士。同十九年卒云云。紀納言者同十二年二月薨。然者淑望任大學頭東宮學士等官。而紀納言薨之後作之歟。若爲納言存生之時者。何仰子息淑望乎。何又借其名乎。被還借本之英華之故也云云。若然者非延喜五年之奏覽歟。但件序奥云。于時延喜五年歲次乙丑四月十八日。臣貫之等謹序云云。是則付奉　勅之日以序識也。內外書籍諸題并序等。與正文別記年月。是常例也。但藤原仲實朝臣古今集目錄云。延喜五年四月十八日。卷軸肇就。以備叡覽云云。付眞名序之結詞如此注歟。仍世人不用之。凡奏覽之日猶不見歟。後撰集者天暦五年十月晦日　仰河內掾清原元輔。近江少掾紀時文。讃岐大掾大中臣能宣。學生源順。御書所預坂上望城等。撰并和歌。并令讀万葉集。以梨壺爲其所。以藏人左近少將藤原伊尹。勅當撰和歌所別當云云。仍御筆宣旨奉行文奥云。于時天暦五年歲次辛亥玄英初換之月。朱草將萌之期也云云。奉　勅之日者如此雖分明。奏覽之年者猶不見歟。古今同之歟。然者付奉　勅之日。被御宇九歲之文。依奏覽之年。注數過百年之詞歟。更不可相違。

或人々曰。過百年者經過百年歟。可依讀様也云云。然而數過百年者模文選序之數逾千祀之詞也。仍假名序ニ年ハモヽトセアマリトカケリ。然者猶百年ニ過ト可得意也。

道問云。自大同元年至延喜五年滿百年也。就中大同元年代始也、或御即位。或大嘗會御禊。是恒例也。何抛有限兩條之政務。被撰無益一興之和歌。縱有其義。大同三四年之間歟。然者百年猶有不足乎。

顯昭陳云。數百（過百歟）過年之條同前。但無益一興之和歌如何。我朝習俗傳神同詠。大嘗會歌于今不絕。如此詞者。賢王聖主之御代。不可有和歌之撰集歟。此條不似好事之詞。遺恨云云。

一大同年中撰事

野合[illegible]云。此撰集者在位大積治天下時事也。大同四年之間。每年不閑。初年ハ受禪御即位。八月洪水。十月先皇改葬。二年依十一月伊與親王并母夫人等亂停大嘗會事。三年二三月天下病事甚熾。十月大嘗會御禊。十一月大嘗會。四年四月天皇御不豫。禪位於皇太弟。如此連々不閑、以何隙有撰集沙汰乎。是以古今者延喜帝在位卅三年之內　延喜五年有　勅。數年漸々撰之。後撰者村上帝在位二十一年之內。天暦五年有　勅。漸々撰之。拾遺者花山法皇在位雖二年。御出家之後。二十二年之間漸々撰歟。後拾遺。白河法皇院御在位十四年之間。承保之比有　勅。應徳三年奏之。金葉。鳥羽院在位十六年之間。天治元年有　勅。大治二年奏覽之。詞花集。讃岐法皇在位十八年之內有　勅。漸々撰

之。院號之後。天養元年六月二日奏覽之。以之思之。万葉集者聖武天皇御在位廿五年之內漸々有沙汰。左大臣諸兄天平勝寶五年奉勅撰之。四千五百餘首也。定送數年撰之歟。
顯昭陳云。古今後拾遺詞花者誠歷多年歟。其外後撰者天曆五年梨壺五人奉　勅之由雖注之。於奏覽之日者慥未見歟。但天德四年三月三十日。內裏女房歌合之歌不可之。又此集作者位署。如古今集。除大臣之外不書官也。然富小路右大臣者天德四年八月任右大臣。而此集只書藤原顯忠朝臣。不載大臣官。以此等推之。天德四年以前終功歟。拾遺者花山院遜讓之後御撰也。然而其始終不審也。但道綱卿之位署被載中納言并右大將。而道綱者長德元年宰相中將。同二三兩年之間中納言右大將也。同四年任大納言畢。然者此二三兩年之間終功歟。金葉者依白川院之仰。讃岐院御宇之初大治二年撰上。何依鳥羽院十六年之御在位乎。詞花集者讃岐院遜讓之後。天養元年六月二日。依院宣數六條三品左京兆被撰之。而今被勘云。在位十八年之間奏勅。漸々撰之。院號之後。天養元年六月二日奏覽之條。以外僻事也。彼院宣參議教長卿之奉也。彼時慥所見也。
又大同四年之間。連々不闕云云。然而日本後紀云。天排國高彥天皇大同二年幸神泉苑。琴歌間奏。四位已上共插菊花。皇太弟頌歌云。
ミナ人ノソノカニメヅル云云如前。
上和之曰。
チリ(ル歟)人ノコヽロノマニマ云云如前。
又云。同天皇大同三年幸神泉苑。有　勅從五位下平群朝臣賀是麿作和歌
イカニフク風ニアレハカオホシマノ尾花カスヱチ吹ムスヒタル
皇帝歡悅。即授從五位上云云。
今按之。大同二三兩年已有歌興。何無撰集乎。又萬葉爲體。不似近代撰。雖不逐年序。其功易成歟。一者部類雜亂不同。近代撰集者四季賀別羇旅哀傷戀雜神祇釋教等是也。而萬葉者雜歌挽歌相聞歌譬喩歌問答歌。不出此五。其中ニ或卷立皇代。或卷記年號。或卷列(列歟)有題無名。或卷聚無題有名。或卷一人詠。或卷由緣歌。或卷諸國防人。或卷奉歌風俗。或卷詩歌序代。或卷書狀傳記。或卷有一座會歌三十二首。或卷別夫婦贈答六十三首。
二者和歌書樣不同。或卷假名書也。
安思比寄能夜麻毛知可吉乎保登等藝須都寄多都麻泥爾奈仁賀吉奈可奴
或卷眞名書也。
昨日社年者極之賀春霞春日山爾速立爾來
其中又有本叢教調隱易顯難。所謂三伏一向。一代三起。馬追喚。大馬饗騎音。八十一衣副衣。(有點現本。)石着玉。桃花褐。神樂。

大馬。牛。馬。白[illegible]。[illegible]金山。御衣。[illegible]
精進。不[illegible]。[illegible]々。云云。[illegible]已。波。白雲平。
此類千万。略舉三五矣。
三者和歌不撰善惡、[illegible]數四千五百餘首中。有作者歌二千一百三十六首。皆是[illegible]等也。
別集者柿本人麿歌四百餘首。山上憶良歌六十餘首。山邊赤人歌五十餘首。笠金村歌四十餘首。田邊福丸歌五十餘首。安陪蟲丸歌三十餘首。[illegible]歌四十八首。大伴家持歌四百五十餘首。大伴坂上郎女八十餘首。諸國防人等歌百三十餘首。新羅使等歌百餘首。又無作者歌一千八百餘首之中。當作者不詳歌百二十餘首。不載作者歌千六百二十餘首。其中五十餘首出古集。又有無名歌二百三十餘首。如此等[illegible]家集[illegible]家會歌、或無名歌等、不撰善惡入之歟。
四者和歌貴不相尋。所謂万葉名歌等粗以注出。

仁德天皇御歌

高キヤニノホリテ見レハ烟タツ民ノカマトハニキハヒニケリ

新羅王仁獻此天皇

難波津ニサクヤコノ花冬コモリ今ハ春ヘトサクヤコノ花

顯宗天皇御歌

イナ筵河ソヒヤナキ水ユケハナヒキオキフシ其子ハタエス

衣通姬歌

ワカセコカ〳〵ヘキヨヒナリサヽカニノ蛛ノフルマイカネテシルシモ

トコシナヘニ君モアヘヤモイサナトリ海ノタマモノヨルトキ〳〵ニ

聖德太子於片岡山給御衣於飢人御歌

シナテルヤカタ岡山ノイヒニウエテフセル旅人アハレ親ナシニ

飢人御返

イカルカヤ富ノヲカハノ絕ヘハコソワカオホ君ノミナハ忘レソ

太子御詠者長歌也。末略之。

天智天皇御歌

朝倉ヤキノマロ殿ニワカヲレハナノリチシツヽ行ハタカコソ

秋ノ田ノカリホノイホノトマチアラミ我コロモテハ露ニヌレツヽ

アツサ弓ヒキノヽツラヽスエツヒニワカ思フ人ニコトノシケヽム

近江釆女給ケル御歌也。

近江釆女奉御返

ナツヒキノモヒキノ絲ヲクリ返シコトシケクトモ絕ムトオモフナ

柿本人麿歌

梅ノ花ソレトモ見エス久堅ノアマキル雪ノナヘテフレヽハ

ワカヤトノ池ノ藤ナミ咲ニケリ山時鳥イツカキナカム

タツタ河紅葉ハナカルカミナミノミムロノ山ニ時雨フルラン

タノメツヽコヌ夜アマタニナリヌレハ待シト思ソ待ニマサレル

梓弓イソヘノコマツタカヨニカ萬代カネテタネマキケム

アハヌ夜ノ降白雪トツモリナハワレサヘトモニケヌヘキモノヲ

風フケハ波ウツ岸ノ松ナレヤネニアラハレテナキヌヘラナリ

ホノ〳〵トアカシノ浦ノアサキリニ島カクレユク舟ヲシソヲモフ

奈良帝御歌

ワキモコカネクタレカミヲサル澤ノ池ノタマモト見ソ悲シキ

萩ノ露タマニヌカムトヽレハケヌヨシミル人ハユタナカラミヨ

立田川モミチ亂レテナカルメリ渡ラハ錦ナカヤタエナム

猿澤ノ池モツラシナワキモコカ玉藻カツカハ水ソヒナマシ

行基菩薩歌

鷹ソヨクシホセノ波ノイツマテカ憂世ノ中ニウカヒアタラム

カラストフオホナソ鳥ノコトチ見テトモニト云テサキタチイヌル

山鳥ノホロ〳〵トナク音キケハ父カトソ思フ母カトソオモフ

モヽサク(クサ)ニヤツサク(クサ)ソヘテ給ヒテシチフサノムクヒ(ケ)チフリ(ソ)ヲ　已上

拾　カヌル

ノリノ月ヒサシクモ哉ト思ヘトモサ夜更ニケリ光カクシツ

法華經ヲワカエシコトハ薪コリ菜ツミ水クミツカエテソエシ

靈山ノ釋迦ノミマヘニチキリテシ眞如クチセスアイミツルカモ

婆羅門僧正歌

カヒラエニトモニ契リシカヒアリテ文珠ノ御顔アイミツルカモ

光明皇后御歌

ミソシアマリフタツノ姿ソナヘタルムカシノ人ノフメルアトソコシ

安倍仲麿歌

天ノ原フリサケミレハ春日ナルミカサノ山ニイテシ月カモ

中臣東人歌

絶スユク明日香ノ川ノヨトミナハ心アルコトヤ人ノオモハム

五者作者位署不定。

或具書官姓名。或書官名不書姓。或書官姓不書名。或書姓名不書官。或書官不書姓名。或書名不書官姓。或兼書兩官。或書初官

不書後官。或書初官々書後官。或雖劣官書之。或書位不書官。或書居所不書名。只是臨期而注之。任見而載之。兼無定准。後知審注。

今案。注在撰集者或少或貪停事有歟。其功雖大。或預撰和歌之善惡。或無定位（音）之卒劣。或雖無詠於萬貫之人者貫之。或雖五歌於下賤之類有撰之。或遺古歌。或但書撰。或猜猜撰。或序與歌或歌異者。或書撰當代。或少入者猶不足之歌。或多入者[illegible]之[illegible]。[illegible]惟[illegible]之[illegible]其不然乎。[illegible]千首四哉之間。何不撰定乎。雖二十軸。一年之中。輙可終功歟。

一人麿在世事

勝命難云。古今序云。イニシヘヨリカクツタハルウチニ。ナラノ御時ヨリゾヒロマリニケル。カノ御トキニ。オホキミツノクラヰ柿本人丸ナム歌ノヒジリナリケル。コレハ君モ人モコヽロヲアハセタルト云ナルヘシ。秋ノユフヘ龍田河ニナガルヽ紅葉ハ。帝ノオホムメニハニシキト見玉ヒ。春ノ朝吉野ノ山ノ櫻ヲハ。人丸カコヽロニハ雲カトナムオホエケル。又山ノヘノ赤人トイフヒトアリケリ。歌ニアヤシクタヘナリケリ。人丸ハ赤人カ上ニタヽンコト難ク。赤人ハ人丸カシモニタヽンコトカタクナムアリケル。此人々ヲ置テ。マタ勝レタル人モ。呉竹ノヨヽニ聞ヘ。カタイトノヨリノヽニ絶スナンアリケル。コレヨリサキノ歌ヲアツメテナム萬葉集トナツケラレタリケルトイヘリ。

假名序心[illegible]ノ心ヲ[illegible]。其奈良帝者是聖武也。人丸赤人當世賢者之[illegible]也。別之コレヨリ前ノ歌ヲ集テ名萬葉集者。大同撰之條。[illegible]歟。[illegible]人丸文武天皇時。大寶元年之比。度々行幸從[illegible]見[illegible]。次人丸[illegible]在[illegible]文武聖武[illegible]。然者赤人々丸非大同[illegible]之[illegible]。人丸[illegible]大同者[illegible]。[illegible]云。此序[illegible]者奈良[illegible]時[illegible]。其[illegible]有人丸赤人等者。是指大同以前之帝歟。コレヨリサキノ歌ヲアツメテナム。萬葉集トナツケラレタリケルトカケルハ。即指大同代也。（今勘文ニハコレヨリサキノウタトアリ。證本ニハカヽリケルサキノウタトアリ。）

持統。文武。元明。元正。聖武。孝謙。文御代好事溢朝。詠賞[illegible]大[illegible]集彼世々之[illegible]萬葉集也。是故集前歌之由被注[illegible]。[illegible]武孝謙之御宇撰之者。不可云集前歌歟。萬葉集是[illegible]二代撰也。已是當代也。何云前歌乎。所謂假名序者[illegible]人丸赤人等同時之帝。然不載撰萬葉之帝[illegible]也。然而カノトキヨリコノカタ。年ハモヽトセ餘リ。ヨハトツキニナムナリニケルト書タレハ。指大同帝之條無疑也。眞名序者不舉人丸赤人同時之帝。只至眞文。平城天子詔侍臣令撰萬葉集。自爾以來時歷十代。數過百年云云。兩序共書時（若歟）及十代之文。仍平城天子者指平城天皇之條無疑事也。名人丸同時奈良帝撰之者。眞名序

擧人丸等同時之帝號畢。此帝即撰萬葉之由可書載也。迷此兩
序前後之人致疑。或雖有大同撰之義。以人丸等屬大同朝。是不
可也。或者人丸等同時之奈良帝。雖有非大同之旨。其帝即位撰
万葉之義。是又不可也。兩序之意。能可斟酌々々。凡奈良帝二
人之條。雖有不審。古今作者之中。已有二人。仍序中亦可有二人
也。所謂春部云。

奈良帝御歌

フルサトヽナリニシナラノ宮古ニモ色カハラスソ花ハ咲ケル
是ハ平城天皇也。諸家目錄中安殿云云。
秋部云。

讀人不知

ハキノツユタマニヌカント　如前。
此歌或人云。奈良帝ノ御歌トナム。
タツタカハモミチミタレテ　如前。
此歌或人云。奈良ノミカトノ御歌。
今案。是二首者大同以前之奈良帝御歌歟。古今延喜序取此龍田河
之歌。秋暮立田カハノ紅葉ハ帝ノオホムメニハ錦トミユト被
書載。彼御時可有人丸之故也。又大和物語中有二人之奈良帝。
但仲實朝臣古今目六中。以此注著奈良帝。尋大同之代。讀人不
用歟。然者人丸長壽之難不可來歟。抑付古今序見之者。奈良帝
御時雖有人丸。付万葉集勘之。人丸者藤原宮御代已去歟。

所謂万葉集云。藤原宮御宇天皇代。柿本朝臣人麿在石見國臨死
之時自傷作歌
カモ山ノイハネシマケルソレナカモシラステ妹カ待ツヽアラ
ム
柿本人麿死時妻依羅娘子作歌二首
ケフ〳〵トワカマツ君ハイシカハノカヒニマシリテ有トイハ
スヤモ
タヽニアハヽアヒモカネテムイシカハニ雲立ワタレミツヽ忍
ハン
丹比眞人(名闕)擬柿本人麿之意報歌一首
アラ波ニヨセタル玉チ枕ニチキワレコヽナリトタレカツケヽ
ム
又万葉中於人丸歌無載慶雲以後之年號。又元明元正ヨリ并聖
武天皇御代。雖有赤人詠歌。無人丸之作歌。又與聖武天皇無贈
答歌。又與彼代人無贈答歌。
因茲式部大輔敦光朝臣作人丸畫讃云。仕持統文武之聖朝。遇新
田高市之皇子云云。而高市新田皇子者共天武天皇之皇子也。高
市皇子者持統天皇御宇大化二年七月薨云云。
又仲實朝臣古今目錄云。柿本人丸。父母未詳。大春日之比人也。古
今和歌集序。有先師柿本人丸大夫者。金玉集序。有正三位柿本
人丸者。和歌仙也者。而尋勘舊記。無有歷任。誰不知哉云云。

以此等說按之、古今所存人丸不至聖武御宇歟。付萬葉時代之故也。然者古今假名序之說尤以不審。是何帝哉、抑又眞名序不載此事乎。但前所勘出孫姬式云、人丸吉野歩南都、〈平城京也〉、山部赤人高沙齊名於北闕云云。此說相似假名序歟。且可會通注古諸說而已。

道因云。如假名序者、奈良御時有人丸ト書ケリ。又大同御時豈人丸見存乎。又拾遺集云。ナラノミカトタツタカハニ紅葉御覽シニ御幸アリケルトキ。御トモニツカウマツリテ詠云。タツタカハモミチハナカル、　如前。此歌書載聖武天皇御歌。タツタ河モ　ミチミタレテ。　如前。　同入古今。但不明作者人丸。此集之誤也。然而拾遺集注人丸歌之上。又在彼家集。供奉行幸無疑。以聖武御事平城明白事也。又此タツタカハ紅葉ミタレテノ御歌、古今集ニハ。讀人不知。此歌ハ奈良帝ノ御歌トノヘリ云云。隨則此御歌慥在聖武天皇御集。爰知彼天皇奉號平城之條。世以所謂歟也。

顯昭陳云。古今序并作者。又大和物語中二人奈良帝御歌之由、有委勘畢。此義勢等不出其外歟。凡以奈良帝之號皆不可屬平城天皇。又無左右不可定聖武也。撰萬葉之平城天子者一定大同也。若有人丸同時之奈良帝者、即可指大同以前之帝歟。然而六義錄事又以不審。依萬葉十七。人丸不可至聖武之御代。古今序猶不指聖武之故也。

又奈良帝御集甚多不審。不可依憑。其故者古今春部花歌。フルサトヽナリニシナラノ　如前。是平城天皇御詠也。此歌入彼集。又他人詠等多以相交歟。然者聖武御集之條難定歟。凡人丸赤人集持等集。世間流布之本。其歌相互交雜。不審甚多。又異古萬葉序引之集等以相違也。凡諸家集之歌互交雜。又其說惟多。是則大旨後人追書集之故歟。

忠峯歌

ミチノオクニ有トイフナル名取河ナキナトリテハ苦シカリケリ

此歌在人丸集。

貫之歌

五月雨ノ空モトヽロニ時鳥ナニヲウシトカヨタヽナクラム

友則歌

タカタメノ錦ナレハカ秋キリノサホノ山ヘヲタチカクスラム

元方歌

アラ玉ノ年ノヲハリニナルコトニ雪モ我身モフリマサリツヽ

已上歌等在家持集。

承均歌

イサヽクラ我モチリナムヒトサカリアリナハ人ニウキノミエナム

閑院歌

サキタヽスクヒノ八千度カナシキハナカルヽ水ノカヘリコヌナリ

已上歌等在素性集。

淸愼公歌

色フカクソメシ袂ノイカヽシクナミタニサヘモコサマサル哉

此歌在小町集。

躬恒歌

タノメツヽアハテ年フルイツハリニコリヌコヽロチ人ハシラナム

此歌在伊勢集。業平朝臣歌也。

忠峯歌

藤衣ハツルヽイトハワヒヽトノ涙ノタマノヲトソナリケル

惟高親王歌

白雪ノタエスタナヒク岑ニタニスメハ住ヌルヨニコソ有ケレ

已上歌在貫之集。

行平卿歌

オキナサヒ人ナトカメソカリ衣ケフハカリトソタツモナクナル

ワクラハニ問フヒトアラハ須磨ノ浦ニモシホタレツヽ詑トコタヘヨ

已上在業平集。

良風歌

春風ハ花ノアタリヲヨキテフケコヽロツカラヤウツロフト見ム

此歌在興風集。

忠峯歌

ヤカストモ草ハモエナム春日野ハタヽ春ノ日ニマカセタラナン

兼盛歌

ナヨタケノワカコノヨチハシラスシテオホシタチツト思ヒケル哉

已上在重之集。

長家卿歌

高砂ノチノヘノシカチコク舟ノウラカナシクヤ過カテニキク

此歌在經信卿集。

此一帖爲子孫寫之。

寶德元年三月日　菅原朝臣爲賢判

有二册以爲賢自筆之書令書寫校合者也。

此書雖當有焉馬矣。爲後勘寫之畢。令見之人。可憐予癖執

筆之老病與照相上各短焉。于時寶曆四年甲戌冬上旬書之畢。

和歌部八十七

古今集註序

和歌の起。古來の風躰。家々の口傳。その數多といへとも。此集の序をよく〳〵沙汰したらんにはしくへからさるもの也。古の歌仙人丸赤人等のことは左右におよはす。中古と成りて。延喜御門の御時。萬の道をおこし。專この歌を翫たまひしに。時の歌仙中に紀貫之拔群の譽ありて。ふかく此道のことをしれり。これによりてつらゆきに仰て此集を撰定せしめ。紀貫之序を書て。具に歌のおこり及さま〳〵の風躰をあらはせり。然は此序をよく〳〵料簡して歌をはよむへき也。其以後の千萬の口傳は。さらに此序にもれたることなし。但古人の筆は事のこゝろふかくして。今この世の人は輙不得心の事のみあれは。よく〳〵聞得可銘心腑也。撰歌の事は上古には聞ゆることなし。萬葉集よりして撰歌といふこと出來なり。但此萬葉集を被撰の時年紀。撰者こと異說これ多し。或人皇四十五代聖武の御時。左大臣（井手左大臣ともいふなり。）橘諸兄撰ともいひ。或五十一代平城御時の撰とも云り。此事後に具に可註也。此集を撰せられて後。又中絕したりしを。六十代延喜御時。此みちを興されて古今集を撰はる。自是代々相續して撰集おほく出來するなり。

古今集二十卷

延喜五年。大內記紀友則。御書所預同貫之。前甲斐目凡河內躬恒。右衛門府生壬生忠岑等に仰て。古今の歌を令撰給。正しく此集を撰定することは貫之一人なり。

後撰集二十卷

村上天皇、人王六十二代。延喜御子。）御時撰せらるゝ也。源

順・紀時文。清原元輔。大中臣能宣。坂上望城等五人に仰せて撰也。大内梨壺といふ處にて撰せらる。仍其前の五人をば梨壺五人ともいふなり。

拾遺集二十卷（六十五代）

花山院御自撰也。或説御出家後撰給ふ。然とも治天の昔の勅撰にはあらず。然とも代々勅用之。古今後撰拾遺をは三代集と名付て。此三代の集撰とも末代に被用者也。拾遺集は撰の起なれとも。只さま／＼の歌を取集られたることなきゆへに。後に集も萬葉の歌をは皆撰入らるゝ也。古今以後集は無其義。但錯て後々の集に入たることともあれとも。當道ことなり。

後拾遺集二十卷（七十二代）

白河院御時應徳。中納言藤原通俊卿承仰撰之。

金葉集十卷（大治）

同院御時。源俊頼朝臣撰之。

詞花集十卷（七十五代）（天養）

崇徳院御時。左京大夫藤原顕輔卿撰之。此集又非治天君之勅撰。

千載集二十卷（七十七代）（文治）

後白河院御時。入道皇太后宮大夫藤原俊成卿撰之。

新古今集二十卷

後鳥羽院御時（元久）。參議右衛門督源通具卿。大藏卿藤原朝臣有家。左近衛中將藤原朝臣定家。前上總介藤原家隆。左近衛權少將藤原雅經。元久三年三月廿六日撰之。土御門院治天八年也。院御前にて御撰之。仍院御自撰の義なり。以上自古今至此集。謂之八代集。

新勅撰集二十卷（八十六代）

後堀川院御時。中納言定家卿撰之。

續後撰集二十卷（八十五代）（建長）

後嵯峨院御時。前大納言爲家卿撰之。

續古今集二十卷（文永）

同御代。九條内大臣基家公。衣笠内大臣良ゝ公（家良歟）。藤原爲家卿。藤原教[illegible]等承仰撰之。

續拾遺集二十卷（九十代）（弘安）

龜山院御時。前大納言爲氏公撰之。

新後撰集二十卷（八十一代）

後宇多院御時。前大納言爲世卿撰之。

玉葉集二十卷

伏見院御時。大納言爲兼卿撰之。

續千載集二十卷（文保）

後宇多院重たる御治天時。前大納言爲世卿重承仰撰之。

續後拾遺集二十卷

九十六代
先朝（後醍醐。）御時。民部卿爲藤卿承御撰之。而奏覧前早世
之間。子息爲定卿相續して撰之。

已上代々撰集次第如此。分部調卷次第。大概は以古今爲本。雖
然少々相違事等有之。歌の數は古今序所載千首也。金葉詞花は
卷の數も十卷。歌も千首に不足。新古今の時初て二千首を定ら
る。玉葉の時四千首に増す。續後拾遺の時千首に減せられ畢。
凡集を承る人はみな時にとりては宗匠なり。凡然上代には顯
宗匠の家とて相承の儀は無之。只時の堪能たれは。如此の撰者
等をは承也。中古以來道の宗匠といふこと出來。所謂俊頼朝臣
は大納言經信卿の子なり。父卿此道の宗匠たり。俊頼是を相續
して金葉集の時撰者たり。又修理大夫顯季此道の好士たり。
その子息顯輔卿相續して依有名譽。詞花集の撰者たり。仍其
し以後一流宗匠たり。九條一流といふは是なり。また俊頼朝臣
同時に。前左衛門佐基俊といふ人堪能にて。此道を許入
は此基俊をもつて師範とす。俊成卿は此人の弟子なりけれは。而
も堪能たりしに依て。千載集の時撰者たり。其よりこの流宗匠
して。今に至まて代々撰者たり。俊成卿[illegible]になり。又俊
成卿の千載集を撰せしより。撰者頻繁已七代。撰集九ヶ度に及
へり。如此諸流も多く撰歌の集も一様ならねとも。以古今本と
し。以貫之道の〔祖宗〕祖宗とす。しかれは此道を好まん輩は。いかに
も此集を能〔藝〕古し。序の趣をも沙汰し明らめは。おのつから此
みちにふかき人〔九然〕けるへし。

此集には眞名假名の二序あり。
眞名序は紀淑望と云人是を書。或説には淑望は罪有けれは。先
士代を漢字の文章にて草せしめて。是をかなにわけてかきた
り。仍眞名序は奏覧の本にはあらすといへり。或説には貫之か
書たる假名序なれは。その後淑望以漢字撰作すとも云。何様にて
もかな序は奏覧の物とは見へす。随て家々證本にも不載
之。眞名序を用ひたる本もあり。是は非本意。假名序におほつか
なきことの眞名序にて料簡せらるゝことあるへし。仍才學の
爲に書かせたと見へたり。而を新古今の時いかやうに治定せ
られけるにや。建仁本古今を撰せられしに。眞名假名のこの序
をは[illegible]被載たり。頗不審事なり。
〔第一〕今[illegible]字は々あるへし。
やまと歌はといふより。心をもなくさむるは歌なりとまて一〔第二〕
段。此歌あめつちのひらけはしまりけるといふより。みそらしは
まり一もしはよみけるといふに至るまて又一段。〔第三〕かくてそと
云より。此歌もかくのことくなるへしと云に至まて又一段。〔第四〕な
にはつの歌はといふより。てならふ人のはしめにもしけると
いふまて一段。〔第五〕そもそも歌のさま六なりといふより。六義の終
まて又一段。〔第六〕今の世中色につきといふより。はにいたすへきこ
とにもあらすといふまて又一段。〔第七〕このはしめをおもへはと云

ふより。さかしおろかなりとしろしめしと云に至まて又一段。第八しかのみならすと云より。歌にのみ心をなくさむるといふに至るまて又一段。第九古よりかくつたはる中にといふより。かた糸のより／＼にたへすそありけるといふに至まて又一段。第十これよりさきの歌をといふより。代はとつきにいたるまて又一段。第十一いにしへのことをもといふより。そのさたしらぬなるへしといふに至る迄又一段。第十二かゝるに今といふより。よろこひのみそあるへきといふに至まて又一段。第十三まくらことはといふより。此時にあへるをなん悦といふに至まて又一段。第十四人丸なくなりにたれと云より。序のおはりに至まて又一段。第十五此段々をよく／＼わけて。その上に一々の義を聽聞へきなり。

第一段の心は惣て歌の起れる姿。又は此歌の徳をいへる也。やまとといふは。日本とも倭とも書て。同やまとゝ訓する也。和とかけるは。倭の字と音通する故に書之。正義には非す。やまとゝは山跡又山止の心也。跡も止もともにとゝよむ也。むかし此國あめつちひらけて。潮のうるほひかはりければ。あらへる人は山をのみ往來してその跡多し。仍云大倭國。又の義には居所をして山とす。昔の人山にのみ山住しけるに依てやまとゝいふ。古より兩說也。日本といふことは。この國日の出る所に近し。故に日本國といふ。されと日の本とはいはす。日本をやまとゝよむ也。倭と書ることは。むかし此國の人漢土に渡ける時。かの國人何の人そと問けるに。此人わか國也といふを。やかて漢人倭國と聞て。此字をもて此國の名とす。文字を渡しける時。倭と書てこの國の名とせり。此國又領納して。則やまとの字とすと云り。雖然漢土にも又耶麻堆（ヤハタイ）國とも云。是はやまとに歌を聞てしるせるなり。やまとゝ云は惣て日本一國の名。わかれて畿内大和國なり。畿内大和は。人皇のはしめ神武天皇より四十余代の都にて。此國の最中なり。仍大和といふ。其後四方の國を開てその名各別なりと云とも。中國の名を取て惣して日本一州を倭といふ也。大日本大和といふたれとも。必しもおほやまとゝよます。只やまとゝよむ也。今畿内の國にて可知之。此國の名あまたあり。神代の昔は豐葦原の千五百秋の瑞穗の國とも云。是は昔天神國常立尊葦芽如して生出たまひしより葦原國と云。千五百秋瑞穗は久しかるへきゆへなり。又は大八洲國と云。伊弉諾伊弉册の二の神。國土を生たまふ時八洲あり。仍大八洲國と云。又秋津洲と云名あり。是は中州の大和國を產たまふ豐秋津州といふ神を產たまふ。此御名に依て秋津洲といふ號も出來歟。但常の說には秋津とは蜻蛉なり。神武天皇山にのほり國の形を望み給ひて。蜻蛉に似たるなとのたまふ。是より秋津洲ともいへり。その外も猶さま／＼の名あれとも。ことなかけれは不註。うたとは哥とも歌とも謌とも書。

何も同字の異作なれはくるしからす。但定は家の字也。此詠ことは只の言語にはあらす。心に思ふことを。言にかさりて詠若はうたふへき義なり。歌こと別て口傳。　やまとうた。九條の流なとにはやまとうたといふ。京極入道中納言〔俊成定家〕の流にはやまとうたと云。和歌の披講なとの時も。如此心得て可讀也。

人の心をたねとしてよろつのことの葉とそなれりける。

と云は。凡人の心はもと渾沌未分の所より起て。天地と氣を同しく。善もなく惡もなく。邪もなく正もなく。凡もなく聖もなく。天眞の道のみなり。如此さとるは聖人也。天地人と分て。凡聖の心は別に成てより以來。六識盛におこりて本性をさとらす。六識と云は眼に物を見。耳に音をきゝ。鼻に香をかき。舌に味をなめ。身に寒温を知り。意に諸法を分別するなり。かの眼耳鼻舌身意〔六根と云也〕をは。色聲香味觸法をは六塵とも云。一々に分別する心をは六識とも云也。如此の差別あれとも一心の所變也。聖人は一心の源を知る故に。用に隨而六識を使とも一心に疵なし。譬は鏡の上に萬象を浮るか如し。凡夫は一心の本を不悟か故に。六識に被使て。さまさまの妄念を起す。有無の見に落て。流轉三界の苦を不離。若その源をしり。その妄を離れぬれは。聖人と凡夫と一毫の差別なき。是を得法とも悟道ともいふなり。然は彼歌も聖人の心根。凡夫の妄念大きに可有差別。能悟てよめらん歌は即聖言也。離生死因縁となるへし。妄心の上にて。いろ〳〵執愛に作てよめる歌は。狂言綺語の誤あるへし。此故に不可聊爾。能々思入て初心より可被向事也。

人のこゝろをたねとして。

是は内の心外の感して。善惡を辨。是非を悟に付て。万のことはとなるも。愁あれは愁の心を種とし。感する所みな愁の詞にあらはれ。悦あれは向所皆悦の端となるなり。

ことのはとそなれりける。

ことのはとは詞の端なり。常に言葉にとかくは音を借て書なり。万の言葉といへとも。聲は口舌唇の三を不出。響は宮。（一越調。）商。（平調。）角。（双調。）徵。（黄鐘。）羽。（盤渉。）變徵。（上无變。）宮。（下无。）〔變宮也〕の六聲を出す。あいうえを。この四十七の文字を知りぬれは。万の聲も詞も皆是手〔に有〕おさまり盡也。口をひらけは万の詞となり。口をふさけは一氣のみなり。一心の万念となるかことし。かゝれは此歌も一心よりよろつの言葉となり。一音より出てさま〳〵曲節をなす者なり。

世の中にある人。ことわさしけきものなれは。

世といふに二の義あり。親の後を子の續。子の後を孫の繼をは世といふ。古去今來移變事のやまさるをは代といふ。今の

世俗中といへるは此心を可通なれは人といふ。委尺せは天地人三は本一なり。渾沌にして不別時は。全く天地人といふ者なし。而を清氣はたなひきて天となり。濁れる氣はつゝいて土と成。この二氣をうけてやはらける氣は人となる。是則人道の初なり。然は人の初をしらは是神也。神なることを知は即天地なり。天地なることを知は。則渾沌に至りぬれは。凡もなく聖もなく。樂もなく苦もなく。未分の一氣のみある。これを聖人の道といふ也。

ことわさしけきものなれは。

とは。聖人にも凡夫にも可渡。聖人は我と云こともなく。己と〔云歟〕譜ことなし。只人のまとへるを哀るゆへに。さま〳〵の法をとりて是を導かゆへに。ことわさしけきものとなれる。於凡夫者六識六根六境にふれて。喜も憂もさま〳〵なる故に。又ことわさしけきものとなる。されは歌の道にも。聖人の心はせ。凡人の心はせ。大に差別有へし。

心に思ふことを。みるものきくものにつけて。いひ出るなり。

と云は。上のことわさしけきいはれを重て尺けり。

花になく鶯。水にすむかはつのこゑをきけは。いきとしいけるもの。いつれか歌をよまさりける。

古今の本註には。鶯の聲をきゝ。蛙のこゑを聞人。何人か哥〔□□〕をよまさりけると尺せり。此尺は謬なりと云へし。はの字の花にさへつり。水にすむかはつのおのれとすたけるは。みなをのか心をのへて。歌をよむに似たるをいふといへり。此義眞名序には。若夫春鶯之囀花中。秋蟬之吟樹上。雖無曲節。各發歌謡。物皆有之。自然之理也。此眞名序と假名序とは。全その心不可相違也。故に花に鳴鶯。水にすむ蛙の聲を。人の歌をよむに比量すること顯然なり。然は本註は眞名序に見合すして。一往をしるすにや。

いきとしいけるもの。いつれか歌をよまさりける。

心あるものとか〔は歟〕ならす音あり。聲あるものは必なかむる詞あり。此を歌といふへしと見へたり。此歌につきてさま〳〵ふかき心あるへし。心ある者の只本性のみある時は。是とも非とも云へき所なし。心に愛も害もある時に。みるものにつけ。きくものにつきて。眞に催し出るを云て時に。うたなかめらるゝ心を歌と云。なかむるにつきて。宮商角徴羽の五音あるへし。此五音を金石糸竹匏土革木の八音にうつすを樂といふ。樂にしたかひて手をあけ足をふむ。此を舞といふ也。然と〔は歟〕聲は必樂なり。樂はかならす舞となる。然此故に歌をよむ人に。五行の相生を辨へて。五音の吉凶をしるへき也。五音の吉凶といふは。宮は土なり。商は金也。角は木なり。徴は火也。羽は水也。宮は一越調。商は平調。角は双調。徴は黄鐘。羽は盤渉調也。是をもて相剋相生を辨へし。たとへは土克水

なるかゆえに。盤渉調の音に一越調のいてきたらんは凶なり。水克火なるか故に。黄鐘調の音に盤渉調音來らんまた凶也。火克金のゆへに。平調の音に黄鐘調の來らんは又凶也。木克土の故に。一越調の音に双調の音の來らんは又凶なり。相生の次第は又是をもてなそらへ知へし。又吉凶を知に付て。宮商角徴羽を君臣民事物に配當す。宮の亂たらんは君の凶也。商の亂たらむは臣の凶。角の亂たらんは民の凶。徴のみたれたらんは事の凶。羽の亂たらんは物の凶としるへし。物の凶といふは。五穀も實ならす。財産も不集たくひを云也。此理をよく心得て。亡國の音をもおさめ。世の妖をも知へし。或人の說に。音の凶を則うめきなをして正に歸すといふは。その理不當事也。古の知音の人は。音の凶ある時は身の凶ともおそれ。時の凶をも知て。本に歸て德をもおさめ。心のひかめるをも直するをもて。五音を辨る本意とする也。昔師曠といひし人は無極の知音なり。此人南風といふ樂をうたひし時死の音出來。師曠驚て楚の軍功あらしと知る。是は南風と云は。南方に配當り主とる。楚は南となり南方にあたる。樂に死の聲出來せしに依て。南國の軍不可有利と知なり。此南風は昔の舜と云し聖人のつくられし樂なれは。なしかは亡國の音のあるへき。師曠は又知音の達者なれば。此南風をうたはんに。何によつてか誤あるへきなれとも。時の凶に感して不思に死の聲出來けるを師曠自然驚けり。依之しりぬ。音の上の吉凶はよく／＼習知て。災難をものそき。正路〔衍歟〕にも可歸事也。今の歌をよむ輩。是を樂になし。五音に吉凶を辨るほとの事はなくとも。構てあしき詞をは禁し。その事となく憂悲んことは不可好。その由清輔朝臣口傳に此ことを委注せり。實綱中納言といひし人。位山のほれはくたるわか身かなとよみて。人に超越せられけるなり。彈正尹清仁親王。鶴龜も千とせの後は限あり佛にきみははやもならなんとよまれける。是は父花山の法皇を餘に祝てよまれける。その後やかて法皇かくれさせ給けり。後三條院の御位をりさせ給て後。住吉に御幸ありけるに。住吉の神も哀と思ふらんむなしき舟をさしてきたれは。とよませ給ひけり。おりゐの御門をは虚舟にたとへたる本說あれは。御歌からもやさしく。事の心も備りたれと。時の人虚舟をさしてきたれはと云御製こそいま／＼しけれと申けるに。はたしていくほとなくてかくれたまふと云々。然は身のため世の爲にもあしかるへく。いま／＼しかるへきことをは。返々不可詠出者也。又歌はなかむるに付て。詞のつゝかぬも。やさしからぬも。心におほゆる事なれは。詠吟のよろしからさらんをは。返々可斟酌事也。まして五音相對相生を辨んこと此道の本意なるへき事なり。

ちからをもいれずして。あめつちをうごかし。めにみへぬ鬼神をもあはれと思はせ。

と云るは。此歌の徳をいへるなり。天地を動すと云は。天神地祇を感せしめ。雨をふらし。日てりをもとゝむることときの徳あるへきなり。且天神地祇を感せしめたる歌なり。此事末に可見。鬼神を令感といへるは。伊勢物語に。むかし御門住吉に御幸して。我みても久しくなりぬ住吉のきしのひめ松いく代へぬらんとよみて奉らせ給ひけるに。御神あらはれ給ひて。むつましときみはしらしなみつかきの久しき代よりいはひそめてき。と云御返事歌ありける。如此類なり。

おとこをゝなの中をもやはらけ。

と云は。此〔[illegible]〕歌の歌に。風吹はおきつしらなみたつた山夜半にや君かひとりゆくらん。或人大和國成ける女にすみける。此女おやもなく家もわろくなり行ほとに。此男河内國なる女にかよひて。本の女にかれ／＼になりにける。されと此女つらけなる氣色みへて。河内へ行ことに。おとこの心の如く出つゝいたしやりけれは。男もし外心もやあるとあやしく成て。河内へゆくまねして。前栽の中にかくれてみけるに。折ふし月面白かりけれは。此女夜深まで箏かきならし。此歌をなかめたりけるに。おとこいとあはれとおもひて。それより又河内へもゆかすなりぬ。かやうのたくひをいふなり。

たけきものゝふの心をもなくさむるは歌也。

といふは。葛城のおほきみを陸奥國へつかはしけるに。國の司事おろそかなりとてすさましかりけるを。傍なる女のかはらけとりて。あさか山影さへみゆる山の井の淺くは人はわかおもはなくに。となかめたりけるに。王の心とけてけりと云類也。物部といはん事は。義かはりたれとも。人の怒れるを。歌をよみてやはらけたる一端を引よせて尺せるなり。大方物部と云。〔古〕兵を名て物部と云。是物部の氏遠祖神代に兵を取て。天神の天降たまひし時。御前をつかうまつりしより。其御子孫諸の物部を領して。武勇の道をつかさとりしによりて。たけきものをは。物部といひならはせるなり。

已上第一段畢。

第二段の心は此歌の趣始れる謂を云也。

此歌あめつちひらけはしまりけるよりいてきにけり。

とは。天地開闢の初より。此歌の道あるへしと尺したるに。下の注に。天の浮はしの下にて。女神男神となりたまへるときの歌なりと尺したり。天地開闢と女神男神との時代頗相違す。開闢とは國常立尊の化生し給しより前の事也。伊弉諾伊弉冉の天降給しことは。遙なる後の事なれとも。かやうの文章のならひなれは。大概にてもその心をうへきにや。抑この注の事古來異義あるへし。貫之此集を撰して奏覧しける

本には無此注。老後に望て息女にあたへんか爲に。此集を書寫しける時。注を書加へたりと云。一には貫之か所爲にはあらて。後人の所加也云々。後人と云によりて。四條大納言公任卿所爲なりと云說も有。宗匠の家には。猶貫之か所爲と云事を用て。他人の說といふ事をは不可用之由しるされたり。然而今案には。いかにも貫之か所爲にと云さるなり。先其證據は下の六義歌をおして。一々に不叶之由をしるせると。六義にあてたる歌は。貫之か前よりの事なりと云とも。此序を書たる時。尤事の仔細を證へきに。無相違書つられて。素覺の後の老後。一々加難て注に書載けん事。惣而さるへしとも覺す。次には雅の歌の注に。山さくらあくまて色をみつるかな花ちるへくも風ふかなまに【ぬ歟】。云へる歌は平兼盛か歌なり。兼盛は貫之以後の人なり。然は後の人の所爲といふこと顯然なり。古賢猶是まては委く不及沙汰にや。今の注に。天の浮はしの下にて。女神男神となり給へるといへるは。天の浮橋の下にて。やかて男女のふるまひをなし給へるにはあらす。女神男神天の浮橋の上にたゝすみて。瓊矛をさしおろし滄溟原をかきさくりたまふ。矛のしたゝり凝て島となる。是をおのころ島といふ。二の神此島におり居て。八尋の殿を造てともに住給ふ。二の神婬をなし。國の御柱をめくりて。女神は右よりめくり。喜思哉可愛少男にあひぬとのたまひ。男神は左より巡て。喜思哉可愛少女にあひぬとのたまふ。是は歌としもおほえねとも。陰陽相感せし初の詞なれは。歌の始なりとはいふなり。是よりさきの神たちの物もあれとも。餘事おほきによりて。二神の夫婦となりしよりこのかたのことを根本とす。

しかあれとも。世につたはることは。久かたのあめにしては。したてるひめにはしまり。

注云。下照姫【に歟】とは天稚みこの妹なり。せうとの神のかたちをかたにもうつりてかゝやくをよめる。えひす歌なるへし。是等は文字の數も定らす。歌のやうにもあらぬことともなりと云々。久堅のあめとは。惣して天を久堅といふ。久く堅き義なり。かやうの詞は。古語の殘れるを。今の世に枕詞と名付て。あなかちには尺を不付して。只空を久堅と心うると云り。山をあし引の山とするまてにて。强に委くすへからすと口傳す。然而さまく\の尺つくりたる書とも多し。又やすく心得らるゝ枕詞も多し。可依事者也。此久堅も。古撰の和歌の式といふ物には。月を久堅と云へしと云々。付之て昔天智天皇の后の御膝をいて。きよけにおほしけるを。天皇めて給ひて。月にたると被仰けるより。月を膝形といふ。また云傳へたりと云々。强不可被信用事なれとも。舊口傳には多かやうに注たり。又古[illegible]といふものには。空を久堅と

云。仍今の世には万の天皇の御時には。皆久堅の枕詞を加へて詠来日。大かた古と今との事相違せり。古はひさし〳〵と云へきをな。必枕詞をゝきて是を云。たとへは其德を云のへて。後に躰を云也。久かたのあめ。あらかれのつちと云る類なり。あめとは天也。神代の神代也。大空也。此詞につきて。神代の萬言に。天にい道に天下云詞けるときは。更に種々事なり。付て深義とてあるへし。我國の神代の昔は皆梵音に通たり。然もあめといふことはも。若梵語にて。あは最初に口を開声なり。めは摩の字の轉なり。故にあまと云は本にて。あめと云は轉なり。万物の初は天也。天をあまと云。阿は開口聲の初。まは閉口聲の終也。諸声皆ともあることなり。唵は佛かほとけといふか。此國へ佛像のわたりしを。守屋等か奏聞に依て。堂塔を破却し。佛像を難波の堀江に投入たりし時。人多くほとおりやみしを。此佛像の所爲なりとて。ほとたりけ名付つく。今は略してほとけといふ。大權菩薩にて。古語俗語の差別を可辨知也。下照姫とはあめわかみこの妹なりと。此事くわしくは日本紀の神代の巻に注すへし。大意は。昔天照太神御孫の神を此國に下奉りて。主とし給はんとせしに。諸のあらふる神此國を領して。螢火のかゝやくことく。五月蠅のさはくか如くつとひとよみけり。又草木岩木までも。皆是此荒神たちなけ。素戔烏の御子大汝の神(出雲大社。)屈服しき。天照太神先此神達をなこめて後に。御孫を降しとて。天稚彦といふ神に天羽々矢天鹿兒弓を給て下されしに。大汝神の女照姫(下照姫)といふ神に嫁して。三年に成までも御返事申さず。大神あやしみ給て。無名雉といふ鳥を下してみせられける。此雉天稚彦のゐたりける門の前なる。かつらの木に居たりけるを天稚彦射殺つ。其矢たゝちに天に上て。御神の前にいたりぬ。血に塗れたりけれは。大神あやしみ思食て。此矢は即昔天稚彦にたひし天のはゝ矢也けれは。ねきことなし給ひてなけ下し給ふ。其時に天稚彦にはなひらてねふせりけるに。此矢胸にあたりて即死ぬ。爰に天稚彦の父母か神かなしひ嘆て。かのかはねを天上に取あけて。もかりを作て。是を置て泣せゝいけり。こゝに下照姫の兄味耜尊彦根といふ。天稚彦の父母をとふらはん爲に。天上にのほり給けるに。その形美麗にして。八の岡八の谷にうつりて照かゝやけり。是をかのいもうとの下照姫歌につくりて。つとへる人につけしらしめけり。二首歌あり。あめなるや。をとたなはたのうなかせる。たまのみすまる。あなたまはやて。たにふたわたらす。あちすきたかひこね。是一首。又あまさかる。ひなつめのゐわたらせと。いしかはかたふち。かたふちに。あみはりわたし。もろよしに。よしよりこれは。いしかはかたふち。是上古の神の詞なるに依て更難心得こと共也。此注に

あめわかみことゝいへる夷歌とみへたり。次にせうとの神といへる。女の兄弟を通してせうとゝ云り。是は神代の俗とみえさること也。次にえひす歌とは。日本紀に夷曲とかきて。ひなふりとよめり。此を今の注にえひす歌と書。ひなとは鄙て邊土をいふなり。近比の中国の雅詞にかはれるに依て。ひなふりと名付る歟。日本紀にひなふりといへるを。此注に夷歌と云こと。貫之か所爲とはおほえさる事なり。貫之は極て物云上手の譽ありけり。伊勢物語についちのくつれとある。此集の歌の事かきに。かきのくつれよりと書なしたる。貫之か高名なりと云々。まして日本紀に古言をわろく書なして。えひす歌とは云へしともおほえす。次に是等は文字のかす定まらすと云は。以前の二首の歌の句もとゝのほらす。詞もたしかならぬ事をいへり。但此歌短歌旋頭歌等の根源を。の世となりても。かゝる歌の類あまたみえたり。聖德太子大和のかた岡にて。飢人に給ける御歌にも。かゝる躰見えたり。此御歌見拾遺集。

あらかねのつちにしては。すさのをのみことよりそおこりける。

あらかねとは。土といはんとて枕詞なり。是尺せはいまたきたはさる金といふ心なり。すさのをの尊よりおこりけるとは。是も委くは神代の卷にて沙汰すへし。大概は素盞烏尊と申は伊弉諾伊弉冉御子天照太神御弟なり。其性さかなくましく／＼て。やらはれて、根國（地底）くたらんとし給ひしに。先天上にのほりて。天照太神にまみへたまふ。其時さま／＼の御ちかひありて。正哉吾勝神首としてあまたの神を化生し給て。しはらく天上にとゝまり給し。惡行やまさりしかは。天照太神怒まし／＼て。天の岩戸に閉籠給ふ。そのゝち諸の神罪を素盞烏尊におほせてやらひくたされき。先出雲國簸河上に八岐の大蛇をきり。國つ神の女奇稲田姫をめして妃としたまふ。清香といふ所に宮を作てすみ給ひしに。其所に八色の雲たちけるを見給て歌をよみたまふ。委は下に可尺。

ちはやふる神代には。歌のもしもさたまらす。すなをにして。ことのこゝろわきかたかりけらし。

さきに云所の陰陽神のあなうれしえや御詞なるへし。是を下照姫の歌に尺合すれは。參差すといふへきにや。素盞烏の三十一字をよみ出たまひしは。この國の事なれとも上代なり。下照姫の歌は於天上よみ給へとも。すさのをの尊の孫にこそまし／＼せは。遙に後の事とみえたり。然は今の一句なは女神男神の御歌なりと料簡すれは無相違なり。此假名序のおもにては。いさゝかおほつかなきやうなれとも。後の義においては。眞名の序の說に符合する也。追可見合彼序。

人の世となりて。すさのおのみことよりぞ。みそもしあまりひと

もしほみける。
人の代といへる事。心得かたき事なり。是も神代の昔の事なれは。いまた人の世と云へきにあらさるなり。されとも清ましく出雲國にくたり給て。夫婦のわさをなし給ふ。是に依て人の代と云歟。すさのをはそさのをとも云。其謂兩樣あり。みそとは三十一字をは古語にそとよむ。百をはをとよむ也。此神の歌より五七五七七の句はとゝのをりたり。如此五句をとゝのへられける根源は。はかりかたき樣なれとも。句のやすく／＼ととゝのなりて詠しやすき。天然のことはりなるにや。眞名序には今の反歌の作なりと云々。此反歌に付て種々の義あるへし。公任卿の尺には短歌を反歌と云。此短歌に則今の三十一字也云々。此義又不審。そのゆゑは古今集に長歌を短歌と云。依之長歌短歌は別同異說別。初の五七五の七五々々といくつもつゝけて。最後句に七々と止たれに。初終はかりをたれば。普通の卅一字歌なり。よみつゝけてみれは又長歌なり。其句五七五七々と。されは／＼にあるうたは。短歌ともいはるゝ也。其長歌をよみをはりては。反歌とて普通の卅一字の歌を一首副用事あり。是は長歌の心をつゝめて。重てよむ故に是を反[illegible]云々。しかれとも今のそさのをの尊の御歌は。長歌のうへにそへられたる歌にはあらす。是に付て可案之。可[illegible]之。眞名序の一首の中にて八雲に八[illegible]

たついつもやへかきと云て。末にやへかきつくるそのやへかきをと云。上の詞を下にておしかへしたるゆへに。反歌といはるゝ歟。長歌心をつゝめて。別に讀たるを反歌と云。義かはりたれとも其心同なり。能々可料簡。可穩之。眞名序に。爰に人の世に及て此風大興。長歌。短歌。旋頭。混本類。雜躰非一。源流漸繁云々。四條大納言公任卿の注に。則是長歌なり。俗以長歌稱短歌。あやまりなり。短歌は三十一字なり。又稱短歌。旋頭は其体未詳。可尋之。混本は旋頭歌の異名也云々。顯昭注云。混本は式[illegible]云。萬葉集には長句の歌をもて長歌と名つくる也と云々。かゝれは古來長歌短歌にとりて異說ありき。一決義なしといへとも。所詮長歌を短歌と云と心得て。其下にて前義を可成にや。反歌とは三十一字なりと云ことは。さもやと覺たれとも。今案には可相替へき歟と覺たり、長歌の奥の反歌の樣を思に。普通の三十一字をもて。一向に反歌といはん事。いかゝ有へき。能々可思也。注にすさのをの尊天照太神の兄なり。是又誤なり。天照太神の御弟にてますを。御兄と云ことは。日本紀等に更に不見者也。或說には天照太神は女神にまします。女は兄弟をいはす。男子を見といふかと云說のあれとも。此注をそむかさらんために稱たる義。無其謂。
女とすゝ給はんとて。

上に所謂稲田姫とすみ給し事なり。出雲國とは。八色の雲の立たりしに依て。出雲といふ名出來なり。是よりさきに出雲といふ名あるにあらす。日本紀にも如是事多し。やかて其つゝきには八岐の大蛇の尾をさきて得給へりし劔を草薙劔と名付とあり。草をなきし事は。遙に世下て倭武尊の御時の事なり。しかと後の名を取て。やかて最初に書注せり。如此事は非口傳しては輙不可知事也。

やいろの雲。

八色なり。但必しも八の品とは云かたし。只うつくしき雲の立たるを云へるを。讃は何事をも七色とも八色とも。千重とも百重とも書。必しも數のことくに七八千百にあらす。たゝほめたる詞に用古風なり。八色。又の説には八尋と云へり。この詞は不可用之由。京極入道中納言口傳に見たり。やへかきことは宮つくりして垣を立たる心なり。古注には八重のかきと尺す。不可然云々。是もたゝ垣のうつくしきをいふなり。八色雲の義同前。つまこめは女と此宮に住たまふ心なるへし。

已上第二段畢。

第三段は神代の古風を事の初として。歌のさま〳〵多くなれることはりを云り。

花をめて鳥をうらやみ。かすみをあはれみ。露をかなしむ。

と云は。春の朝に花を見鳥をきくより。秋の夕に露をかなしむまて。おりにふれ時にしたかひ。感をもよをし。詞の端となるいはれを云り。めてゝと云は愛する心なり。うらやみと云も同心なり。鳥のうたひ飛かけるをも。うらやむへきにあらす。愛したる心をうらやむと云り。哀をあはれむとは。憐愍の義には非す。面白と云心也。然は今の序の詞にてみれは。あはれむと云ても不可違。但進御本と云書に。（哥云）可憐生とかきておもしろしとよむ。しかれはあはれむとも。おもしろしとは同心にあるへし。露をかなしむとは。秋の氣は人情かなしましむる習なれは。暫草葉にをける露によせて。大方秋のあはれなるよしをいへり。

心ことは多くさま〴〵になりにける。

とは。人の世となりて。長歌。短歌。旋頭。混本等のさま〳〵の多傳れる事を云なり。

とをき所も。いてたつあしもとよりはしまりて。年月をわたり。

と云は。白樂天名詞に。千里始足下。高山起微塵と云り。此句をひきよせてかけるなり。

たかき山もふもとのちりひちよりなりて。あま雲たなひくまて。

と云。是も即上の高山微塵よりおこるを引寄たり。ちりひち

につきて、古来異説多あり。ひちとは雨の儀なりと見す。是は[illegible]におこる云にすかりて見せる[illegible]とありと云。重て後[illegible]と云は人事[illegible]日本紀に[illegible]せさる人の義なるへし。日本紀土をひち[illegible]とあり[illegible]と書。うひちにうかへる土。すひちはいたる土を云なり。[illegible]は只ふもとの[illegible]よりなりてと心得たるか宜なり。[illegible]不可用之。又ひちとはよむへからす。いちとよむへしと云。是は宗匠の方の説也。可付[illegible]なり。但日本紀に[illegible]土の註に子院尼とつけ[illegible]の註に[illegible]尼と付たり。然はひち[illegible]云た正とすへき歟。是は今の[illegible]なり。かやうに歌の[illegible]詞多。さき〳〵になれることを。喩にとりて言なるへし。

已上第三段畢。

第四段は歌の意ひろまれる中に。難波津。安積山。二の事[illegible]の本となれる事を云り。人の代と成て今の[illegible]たるに以此二首本とすと云事。[illegible]なりと云へとも。古より用来れる事なれは。注にも強に其由緒をはあきらめさるなり。

なにはつの歌はみかとのおほむ始なり。

注におほさゝきの御門難波にて御子ときこへける時。春宮をたかひにゆつりて。位につき給はて。三年に成けれは。王仁にといふ人のいふかり思ひて。よみてたてまつりける歌なり。此花は梅花を云なるへしと云々。徒云。なにはつに咲、や此花冬こもり今は春へと咲やこの花といふに。大さゝきの御門とは人皇第十七代仁徳天皇御事なり。応神天皇第二の御子大鷦鷯尊と申は。応神天皇四十余人の御子ましましき。其末の御子菟道稚皇子と申けるを寵愛したまひて。御位をゆつらんとおほして。先第一の御子を召て。事の心を仰たまひけれは。うけかひ申さるゝ色なし。天皇悦たまはす。第二の御子大さゝきの尊に仰たまひけれは。ともかくも可在叡慮之由そうしたまふ。天皇大に悦て。則寵末の御子太子に立給ひ、此君を補佐し奉へきよし勅し給ふ。其後天皇崩御。第一の皇子乱を起し。春宮をかたふけ奉らんとす。第二の皇子此ことをさとり。春宮と心を同して。第一皇子を誅したまひぬ。爰後春宮我は少年也。非器なり。依先帝之鍾愛。〔へ脱歟〕雖立儲君之位。君は高年なり賢王なり。早天位をつき給しゝ申給けれとも。第二皇子更に不承引。先帝の勅命已宣じ。君争みたりに此位をふむへきやとて。固いなひ給ふ。第二皇子は[illegible]難波に座す。春宮は山城菟道にましけり。かやうに相譲て、春宮もつゐに位に即給はす。国々の御貢物を春宮に持参すれは。可献難波とて被返。難波に持参すれは。可献菟道とて被返けり。かくて三年に成ぬ。其の年の冬例のことく御貢物をかなたこなたに持参しける程に。経寒の比なりけれは腐乱する者有。[illegible]東宮世にあらは人の愁やむへからすと

て自殺し給。第二御子此事を聞給て大にをとろき。菟道にわたり給。皇子の御尸をいたきて。泣悲給事限なし。其とき皇子即蘇生して。第二皇子に物かたりに後の事まて申給けり。兩皇子の御心は古にも類なく。異朝にも其例なき事なり。難有かりける御事なり。其後も第二皇子猶位つき給はて程を經にけるに。王仁といふ人。今は爭給ふへき所なし。いたつらに天位をむなしふし給ふ事もよしなしと思て。其時の事をそへて。此歌をよみて第二皇子をすゝめ申ける。大鷦鷯といふ御名は。此皇子の御産屋へ木菟と云鳥入たり。大臣の産屋へは鷦鷯と云ふ鳥入ぬ。天皇聞召て。君臣合躰の奇瑞なりとて。互に彼鳥の名を取て。皇子をはさゝきと名付。大臣の子をは木菟と名付られたり。皇子位に即給て後。たふとびて大字を加て。大さゝきの尊とは申なり。王仁と云は百濟國のたてまつれる博士也。神功皇后新羅百濟高麗の多聞をうちたいらけられて御漢在り。使を被吟しより。彼土の文字書記此國につたはりけるを。百濟國に物しれるものをめして。此國の皇子以下諸人に學び習はせ給しより。たへす博士貢追去。王仁即其人なり。菟道稚皇子の御師にて。物をしへ奉ける人也。此歌の心は難波津には皇子御在所たるに依て是を云。この花とはむかしより異說あり。一には梅花と云々。今の注の義是也。此注は貫之か注とも。または公任の注ともいへり。又の說には大根の花とも云。是は孫姫式といふ物に見たり。兩様の間定說を不知。然而古來の人梅の花の心に讀來り。此何様にも此花には非す。木の花なり。此歌を奉りし後皇子位に即。都を難波に立。是を云高津宮。御門ためしなき程の聖主にましく〱けり。ある年の春。高樓に登て四方を望み給に煙たゝす。仍天下の百姓の課役三年を止給。其後又登て見給ふに。煙たちにきはゝしくみへけるを悦たまふ。御歌に云。高きやに登て見れは煙たつたみのかまとはにきはひにけりと詠たまふ。重三年の御調を被止。宮殿はやふれたれともつくろはす。かくて六年を經て。天下の民君の徳に感して。各御備を備宮殿をつくり奉けり。この君の徳政大概如此。八十七年天下泰平にして。四海なひき隨申せりとぞ。此君の御歌なとそ大本様にも申傳へりけるにや。然而王仁か詠たる所の歌をもて。末代に至る迄相傳者也。此歌に御門御初なりと云事の詞のたらぬにや。御門の御爲に王仁こそ初たれは。兩共たらさるに相似たり。同注に春宮を互に讓てと書る又誤なり。帝位をこそ互にゆつり給けれ。春宮事は先にさたまりし事なり。

あさか山のことはゝ。うねめのたはふれよりよみて。

注云。葛城の王を陸奥のおくへつかはしけるに。國の司事をろかなりとて。まうけなとしたりけれは。すさましかりけれ

は、采女なりける女のかはらけとりてよめる歌なり。是にも王の心とけにけりと云々。安積山とは陸奥國安積郡にあり山の名なり。葛城王と云人陸奥へつかはされたりける時の事なり。昔は國司介在國して、善政を行へき由の格式を定置たれ共。猶よりよりに按察使を遣して、國々を検知せられける。是を觀察使とも巡察使とも云。國掟尋使とも云なり。弘仁ころほひまではこの事有。其後絶てなし。葛城王の下向の時儀。年記不分明。國司に此歌をいせて云。あさか山かけさへみゆる山の井のあさき心はわかおもはなくにとて、怒を書たり。其心を取て今の注に書たり。此葛城王者。舊注には左大臣諸兄と云人の本の名なり。此人は敏達天皇五世の孫也。聖武天皇の御代に仕て、天平八年に叙從三位。同十年正三位。即任右大臣。十一年正月に從二位。十五年正月從一位。即任左大臣。感寶元年四月に正一位。是迄は猶王氏也。勝寶二年正月始橘朝臣の姓を給はり。萬葉集も此人の撰なりと云一説あり。付之案之。あさか山の歌の趣は。此橘大臣の事とはおほえす。いかにも猶上古に同名葛城王と云人ありけるにや。其故は此大臣は人丸赤人等よりも後の人也。然は彼等歌仙の詠歌を閣て。此王の相隨かふ所の采女か詠歌の本様に成て。父母のことく習學へしとは不覺。隨て万葉集に今の歌の傳を書にも。昔の事のやうに見たり。此集は彼大臣の撰ならは。尤可載彼子細歟。是則不當の随一なり。古今萬葉集は此大臣の撰にあらさるかと云潤色にも。今の歌の傳の事を載たれとも。葛城王に別の人あるへきとは不覺。尤不審也。又大和物語に、大納言なりける人の女。内舎人にとられて陸奥へ下て。あさかやまにして此ていを詠すと見へたり。昔より異説ある事なれは。葛城王事は上代の別人といふ儀可宜にや。

うねめなりける女。

とは采女とはかけり。今は宮女にこそ采女と云物はあれ。上古には國下のもとにも采女の號あるより。且万葉集にも首に有采女風流の娘と有。色ある傾城のことを言かとみへたり。

かわらけとりて。

とは盃をとる心なり。万葉の傳には捧觴とかけり。上古にはかはらけなとを用ことはなし。然而後代の風儀になすらひ。此注にはかはらけとりてと云り。中古以來源氏狭衣等の物語に。さかつきとりてとはかゝす。みなかはらけとりてと云り。

このふたうたは歌のちゝはゝのやうにてぞ。てならふ人のはしめにもしける。

昔は手習初にいろはなとにて習ことはなし。仍此一首を習

そめけるにや。源氏物語にも。源氏中将にて。童やみましなはんとて。北山におはしけるに。紫の上いまたおさなき程をみて。文をつかはしたりけるも。おはの尼うへかはりて。いまた難波津なとをつゝけ侍らぬと有。されは件の比は難波津なとを習けるといふことはしられたり。今のいろはは四十七字を連て。あるへき程の文字をつくしたれは。近代は皆是をならふ。然而無常の歌なりとて。物忌なとする人は。今も天地星空なと云ものを習なり。いろはと云ことも。ちゝはゝと云様〔の歌〕に事なり。古語には母をいろはと云。字の母と言心なるへし。

已上第四段畢。

第五段は歌に六義と云事あるへき様を云也。六義は異朝の詩に此心あり。異朝の詩といふ事も。上古には文字の數も不定。めのとゝ〔ひ歌〕のほる事もなし。此國の歌のやうなるへし。周の代といふし時に至て。詩の道盛に成にけり。集此詩三千餘篇ありけるを。孔子の時撰定せられて三百篇とす。今の毛詩と云書是也。此毛詩の序を孔子の弟子の子貢と云人書たるに。初て六義と云事を(マヽ)のへたり。其よりして詩に六義と云ことゝあり。此六義を立殿は彼詩を作る本意。君をも諫若はそしり。下をも教へ若は誡は。詩を作て物にそへなそらへ是を云。其面にはさして謗誡としもはなけれとも。底にふかき心をみせたるか故に。君としても此詩を見て即怒となけれは。詩を作れるものにも其とかなし。漸是を見てその源心をさとり知ぬれは。自正に歸道となる。此故に昔の賢王の代には採詩の官を置。國の詩所々の歌にても是を取集て。詩學の博士を置て此道を盛にす。かゝれは此詩を取て物にたとへなそらへたる本意とす。この故に六義と云事は出來なり。我國の歌も又如此。百濟の王仁かさくやこの花とよみて。大鷦鷯の御門をそへ奉りしより事起て。六義の盛に成にけり。万葉集を被撰し時も。諸國に仰て。其國にあるを召集られたりき。仍万葉には春夏秋冬戀雜なと部を分事なくて。一國の歌をさなから一所にかきつらねられたり。彼毛詩の躰に相似たり。抑六義の事異朝にも其義不一。極て心を得かたき事也。一義には六義各別にもあるへしと云り。一義には風雅頌の三は體なり。賦比興の三は義也。然は六義とて六に別る事あるへからすと云。此義は其謂あるに似たり。彼毛詩は第一の巻より第十巻の初に至までは風なり。諸國の風詩を集たるなり。十巻の半より十九巻の初に至までは雅なり。其中に大雅小雅の二の心あり。第十九巻の巻より二十巻に至までは頌なり。此風雅頌におゐて各賦比興の義はみえたり。然は兩義の中の後の義は正と云へきにや。今古今の序に貫之の書たる趣は。兩義の中の初の義によるかとみえたり。注

は貫之か老後の所爲〔代歟〕なりといふ說あれ共。公任卿の書加たると云說。さもやと覺たり。此注の心は。兩義の中の後の義を見たるかと被推量なり。且公任卿の六義の注と云物別に有之。其注に風賦興は異体。雅比頌は異詞。以彼三詞成此三形云々。この義大概今の注の心に相似たり。但公任卿今の注のごとく。さは／＼と三の躰三の詞書別さるによつて。著此序の注他人の所爲にやとおほつかなけれとも。多分は公任卿の所爲と云也。此六義事。定家爲家卿まては隨分さたせられたるとみゆ。而を近來宗匠の家。定家卿の如此の口傳を書たる書二合あり。〔内書〕一合には上を鶴を木箱にして。一合には鷺を木箱とす。是うさきと名付て。爲家卿まては身をはなたさる物あり。爲家卿覺ける時。宗家の尼阿佛局（爲相中納言母。謂安嘉門院四條局）歌の文書を取て關東に下向す。其後嫡子爲氏卿の訴訟に依て。龜山院御時。被下院宣於關東。彼文書を召渡さるゝ時。箱より目錄もあり。諸人存知の文章等は皆渡之。而をうさきの箱の納物まては。爲氏卿も委知せさりけるにや。〔口傳歟〕秘傳等をは是を留て。あらぬ物共を入て渡にけり。此故にや爲氏卿家は六義等の事をも沙汰せす成ぬ。爲相卿方にも。密々には此口傳あるよし自稱しけれとも。公家武家沙汰有て。文書を渡さるゝ時。此鶴鷺の箱の納物を被留たる事。依證據顯。あらはには不言之。然は道の陵遲不便事なり。此六義にとりて兩義有。其中に後の義は正說成かとみえたれとも。今の序を沙汰せしに取ては。初の義によつて大概を心得わくへき也。

抑歌のさまむつなり。からの歌にもかくそ有るへき。

と云り。からのうたとは詩なり。詩をも訓には歌と云也。唐にも歌の躰は別に有共。惣は詩歌共我國の歌に相似たり。からとは漢共唐とも宋とも。〔らと歟〕代はかはりうつれとも。此國よりしては彼國をさしてかくて云。其起は異朝の人初て此國へ風にはなたれて來る事有。おほからの國の人と云。其よりいつくをも異朝をさしてはからと云。二新羅百濟高麗をもからと云。又鐘唐をもからと云此義也。歌とはうたふへき也。

そのむくさのひとつにはそへ歌。大さゝきの御門をそへたてまつるうた。難波津にさくやこの花冬こもり今は春へとさくやこのはな。

爲家卿口傳云。これ本意を面にあらはさて。よその物にいひあらはして。其心をうる歌也といへり。なにはつの歌の事は。先立て委く尺し畢。同口傳云。かゝる歌を風の歌と云也。風と云は諷也。是は風の色は見えねとも。よろつの物にあたりて。風としらるゝ如に。風の歌は思ふことをこと物よりあらはす歌也云々。

ふたつにはかそへ歌。さく花におもひつくみのあちきなく身

にいたつきのいるもしらすてといへるなるへし。

注云。是はたゝことにいひて。物にたとへなともせぬ物也。此歌いかにいへるにかあらん。其心得かたし。五にたゝこと〔は歟〕歌といへるなん。是にかなふへきこと云々。此注に先にいへるか如く。貫之か老後の所爲とも云。又公任卿の口傳ともいへり。爲家卿の口傳には。賦の歌とは連歌の賦物なとの事也云々。此前後の注につきても。躰を詳す〔に歟〕云のへたり共不覺。但公任卿六義の注に。賦と云は直に其ことを陳て不比喩者。法賦詞也。是は文選等にある賦の躰になそらへてよむへしと云心也。喩は物にたとへなとせて。直に其事をいひてきたらん歌を賦の躰といふへきは。詩にもかゝる姿あまたあるへし。さく花に思ひつくみのあちきなさ身にいたつきのいるもしらすてといへり。思ひつくとは愛する心なり。いたつきとは勞とも煩とも云。花におもひつき。時をうつし日を送る程に。身にいたつくことをしらさるかあちきなしと云心なり。爲家卿口傳に。いたつきと云しりいれたる矢にいられたるをしらぬ程に。思ひつくと云心也。又つぐみと云鳥をいると云說あり。不可用云々。又同口傳にはいたつきは勞なり煩也とも尺せられたり。三の說はいたくあたりたりとも不覺也。今案には。歌の面は先にいへるかことく。はなに思ひつく程に。身にいたつきのある事を云ふなり。こゝにはつくみと云鳥を。いたつきにていたる事をよめる歌也。舊より如此の尺なし。尤不審。今如此料簡する謂は。拾遺集の物名部を見るに。此歌は大伴黑主かつくみをかくし題にてよめる歌也云々。此事可秘之。

三になそらへ歌。君に今朝あしたの霜のおきていなは戀しきことに消やわたらんと云るなるへし。

注に云。此歌よく叶へりともおほへす。たらちねのおやのかうこのまゆこもりいふせくもあるかいもにあはすて。かやうなるやこれとかなふへからんと云々。此二の歌をよくよく〔可歟〕一料簡也。爲家相傳〔卿口傳歟〕云。比の歌とはたくらへ歌なり。物を二いつれも同樣なりとたくらふる歌なり。本歌云。君にけさと云々。是はきみに別て命の消ぬへきにたくらふるなり。凡此卿の口傳の心には。古注の心には不停して。本文のことくに義をたつへき本意也。古注の心は。比と云は。物をならへてそれかやうにあると云へし。たとへはいもにあはぬと。いふせさのおやのかうこのまゆこもりの樣にあると云へし。本文の歌は朝の霜のおきていなはと云て。詞に引よせたれとも。慥になそらへたりと不見事を疑歟。爲家卿口傳の心は。我命の消ぬへきことを。霜の消ぬへきになそらへたる故に。是も比の躰にかなへると云なるへし。

よつにはたとへうた。我戀はよむともつきしありそ海のはま

の眞砂は讀つくすともといへるなるへし。

注云。是は萬の草木鳥獸につけて心を見する也。此歌はかくれたる所なんなき。されと初のそへ歌とおなしやうなれは。すこしさまをかへたるなるへし。すまのあまのしはやく煙風をいたみおもはぬかたにたなひきにけり。此歌なとやかなふらんと云々。本文に引載たる歌。誠に比興の間差別なきに似たり。但注にいたせる歌も。更風躰に不相似やうに分別するにや有けん。おほつかなし。爲家卿口傳云。是は物を二ならへて。何(何歟)れも似たりといへとも。しかも各別の形を見るなり。風比興はあれもたとふる方ありといへとも。風は心と心をたとへ。形と形とたとへ。興はたとへてしかも各別する。このかはり目也。本歌云。我戀はよむともつきしと云々。此口傳の心は。風比興を聊さまをかへて料簡す。誠に本文をもこゝかさすして。しかも三の品を各別したる事尤其興あり。假令今の興の歌をたとへてしかも分別すといへるは。ありそうみのはまのまさこの數よりも。我戀のよみつくすましき事をよめる。たとへてしかも各別するに成なり。如此口傳古より以來多まされとも。最實儀はいひおほせられぬなり。風と云は國々所々のふりなるへし。相撲歌。陸奥歌。伊勢歌なといへる躰の事也。雅と云は中國の躰なり。頌と云は君の德をほめて神明に告歌也。此風雅頌の上にすく〳〵と其心を云て。物にたとへなともせぬは賦の躰なるへし。物に擬して而も我志をのへたるは比の躰なるへし。然はきみにけさの歌も。おやのかうこの歌も。よむともつきしの歌も。比の躰をは出かたし。興と云は。上には心をあらはさすして。草木鳥獸につけていへとも。底には心をふくませたる歌なるへし。難波津の歌。并すまのあまの鹽やく煙の歌。ともに興と云へきにや。毛詩には興爲本。されは二重三重の興の躰あり。深く可尋之。假令三重の喩と云は。毛詩に雎鳩と云鳥の物ねたみせぬ女をたとへて。可樣ならん女を求て。わか夫にあはせはやと云心を作れる詩なり。人の女として。よからん女を我夫にあはせはやと云ことは。おほろけにあるましき事也。夫物ねたむ心なくして。而も我夫に志のふかきか至なるへし。此詩の面には夫婦のあいたを借て。雎鳩の物嫉せぬに喩たれとも。底の心に忠臣のきみを思たる事を云へり。かゝれは重々喩になるなり。

いつゝにはたゝことうた。僞のなき世なりせはいかはかり人のことのはうれしからましといへるなるへし。

注云。是は事の心たゝしきをいふ也。此歌の心更不叶。趣うたとや云へからん。山櫻あくまて色を見つる哉花ちるへくも風ふかぬまにと云々。此注の心極て難得其心。山櫻の歌の躰也と云ことも。何樣の料簡そや。又僞のなき世なりせはの

歌非雅躰。而もとめ歌なるらんこと難得其心。爲家卿の口傳云。雅の歌と云はたゝことゝ歌なり。是は物にもたとへすよせす。すくすくとよめる歌なり。無別子細。本歌云。僞のなき世なりせはと云々。

凡雅の躰には事さらさま〳〵あるへきか。されとも大概は時の事さは〳〵と云て。其心さしをのふへきか。古賢の說に。晴天見月。寒夜聞鴈躰を雅の心なりともいへり。然とも毛詩には雅にも物にたとへたる詩きはめて多。上にいへるか如。雅は中國の風にて。「臣下の君にたてまつりて。其心をのへ。君の下を敎て。其法をたれ給ふ事に。あらはに云事もあるへし。物になそらへて云事もあるへしと心得ぬれは無相違。然而六義を各別に可立之由の口傳方にては。爲家卿の口傳のまゝに心得て可讀也。とめ歌とは。同卿の口傳に。物のうすきをとむる樣の事也と云々。世の中人の心は朴なるへきに。僞のある事のほひなしといへるか。物をとめたるになると云心なるへし。此櫻の歌は兼盛か詠也。依之此注は非貫之所爲と云也。

むつにはいはひうた。この殿はむへもとみけりさき草のみつ葉よつはにとのつくりせりと云るなるへし。

注云。是は世をほめて神につくるなるへし。此歌いはひ歌とは見へすなんある。かすかのにわかなつみつゝ万代をいはふ心は神そしるらん。是等やすこしかなふ「へからん。」凡六種にわかれん事は。えあるましきことになんと云々。爲家卿口傳云。頌の歌。是はいはひ歌也。いのる祝をは祝と書。ほむるいはひをは頌と云也。本歌云。この殿はと云々。先古注に國神と云ことをよみかんきやうに見へたる。必すしも不可然か。喩神明告とも。其德をほめ祝言をのへて。志をいはん事は頌の躰なるへし。詩の頌の義如此。しかれとも此殿歌をもいはひ歌と不見といへる。更不得其意。又爲家卿口傳に。祝と頌とを各別にする。「何樣の本說によれるにか。尤不審也。今の序の本文に。六にはいはひ歌とかきて。頌の字をやかていはひ歌とよませたり。公任卿の注には。頌はいはひ歌の躰のみと云り。然は頌は其外不可差別。而この殿の歌は催馬樂にうたふ所のこのとのゝ即歌也。さきくさのみつ葉よつはの事。舊より異說あり。常には幸種とて。幸をはさきとよむ也。くさとは種也。草にあらす。此幸種は檜木を云也。此殿をつくりひろけたると書也。三は四はとは三棟四棟とかく。屋のむねのあまたある心なるへし。又說にはおけらをさきくさと云。此草の葉三葉四葉あり。三四月の程に花さく草也。此草の三葉四葉なるやうに殿作すと云りといへる。或說に三枝とかきてさき草とよむ。年中行事四月有之。三枝の〔祭歟〕登とて。三枝の花を以神を祭る事あり。若此事かと云。然と

も多分は榆木の説によれる也。古注に凡六種にわかれん事はえあるましき事になんといへる。これ風雅頌を躰として。賦比興を詞とするによつて。六のしなを分たん事はかるへきに依て。序の本文に六種にわかてる事を不甘心して云へる也。公任卿專此義をしるせる。依て今の注をも彼人の所爲かと云。眞實難治定事也。

巳上第五段畢。

第六段は世くたり時あらたまりて。人の心花に成行に依て。歌道昔にかはれることを云也。大かた今の人の心。かやうに道のひろまり盛に成たるとおもへるは。還而衰たるとなる也。唐の歌も如此。昔の詩は少句もとゝのほらす。韻聲さる（[illegible]）事もなかりしかとも。その心ふかく其義正しかりしによつて。道盛なりし時とはいふなり。漢の時に五言七言の躰もさたまり。梁の世に初て四聲を分て。唐の世となりて格律の體起て。詩の姿（た歟）大にさたまりて。聲をもにかへ格をも忘ぬれは。詩にあらすとおもへり。此事還而古風にそむき。道を忘れたるなるへし。歌道もやくもたつ出雲の古。難波津安積山の昔は。心詞朴にして。やかて人の心を感せしむる道也。世下てはこの歌の道衰て。昔のやうにあらぬ事をいふ也。

色このみの家にむもれ木の人しれぬ事となりて。

といへるは。好色家以此歌爲花鳥之傳。乞食客以此道爲活計之媒と云かことし。君をも諷。神にも告て。すなほなるへき道を。色にふけるかたに引なして。あたなることのは（衍歟）のみおもへる事のあやまれるを云なり。むもれ木の人しれぬとは。うつもれてあらはれかたき也。

まめなるところには。花すゝきほにいたすへき。

といへるは。まめやかに正しきなり。まめやかなると云心なり。かゝる所に上に云所の歌をいひ出しかたきことを。花芒ほに出ぬやうにあるとたとへていふなり。

巳上六段畢。

第七段は立かへりて歌道のたゝしかりし昔の事をのへて。今の世のいろ花に成ぬる事を誠なり。

そのはしめをおもへは。かゝるへくなんあらぬ。

と云は。則此こゝろ也。

いにしへのよゝのみかと。

とは。強に時代をさゝす。上古の賢王聖王の世に久しく國を鎭め給し時。此道の正しく。歌の姿も花ならさりし世をいふなり。

春の花のあした。秋の月の夜。

是は花月のおりをすこさす歌を令獻。情をのふるを見給ふ事をいふなり。

さかしおろかなりとしろしめけん。

と云は。此歌をよめる各心はせに。賢愚の性みゆへき事なれは。さかしきをは賞し。愚なるをは退くるによつて。人此道をおそれゆるかせにせす。此故に歌の道正にして不邪。漢朝にも近まて課試及第とて。詩をつくらしめて及第しぬれは。即官を給て昇進の初とす。此にも儒中には其跡あれと。今は有名無實の事なり。昔は歌をめして人をこゝろみしめ給ける。和漢の古風一なりと云事可知也。

已上七段畢。

第八段の心は。上には古の御門の歌の道をもし（ろしめし脱歟）給しことをのへ。此段には世中にある男も女も高も賤も。又此歌をもて各志をのへ。心をもなくさむる道ともする謂をいへる也。

しかあるのみにあらす。

とは。かはともかいとも書。如此あるのみにあらすといふ心なり。不然と云にはあらす。是より下にかたにいへる詞。みな本歌を引よせて書たり。

さゝれ石にたとへ。

我君は千代にやちよにさゝれ石のいはほと成て苔のむす迄

君か代はといふ本歌もあり。

つくは山にかけて君をねかひ。

筑波根の此面かのもに蔭はあれと君か御蔭にしく蔭もなし

よろこひ身にすき。たのしみ心にあまり。

うれしきを何につゝまん唐衣袂ゆたかにたてといはましを

ふしの煙によそへて人をこひ。

人しれぬ思ひをつねに駿河なるふしの山こそ我身なりけれ

松むしのねに友をしのひ。

君しのふ草にやつるゝ古郷は松むしのねそかなしかりける

高砂すみのえの松も。あひおひのやうにおほへ。

かくしつゝ世をや盡さん高砂の尾上にたてる松ならなくに

われみても久しく成ぬすみよしの岸の姫松いくよ經ぬらん

あひをひとは松の生あふなり。昔の友と思ふと云心なり。

おとこ山の昔をおもひ出て。をみなへしの一時をくねるにも。歌をよみてそなくさめける。

今こそあれ我もむかしは男山さかゆく時もありこしものを

秋のゝになまめきたてる女郎花あなかしかまし花も一時

女郎花うしと見つゝそ行すくる男山にしたてると思へは

これらのうたをとりあはせてかける詞也。

春のあしたに花のちるを見。

空蟬のよにもにたるか花櫻咲と見しまにかつちりにけり

秋の夕に木の葉のおつるをきゝ。

秋風にあへすちりぬるもみちはの行衞さためぬ我そ悲しき

あるは年ことにかゝみのかけにふれる。雪と浪とをなけき。

むは玉の我くろ髮も年ふれは瀧のいとゝそなりぬへらなる

波にたとへたる歌。此集の内には見へす。瀧の糸のうたを引よせてよめるにや。

草の露水のあはを見て。我身をおとろき。

露をなとあたなる物と思ひけん我身も草におかぬはかりそ

水の泡の消てうき身といひなから流れて猶もたのまるゝ哉

あるは昨日はさかへをこりて。時をうしなひ世にわひ。

世の中は何かつねなる飛鳥川きのふの淵はけふの瀬になる

したしかりしもうとくなり。

此集に此心のうた不見。

あるは松山の浪をかけ。

君をおきてあたし心をわれもたは末の松山なみもこえなん

野中のしみつをくみ。

古の野中の清水ぬるけれともとの心をしる人そくむ

秋萩の下葉をなかめ。

秋萩の下葉色つく今よりやひとりある人のいねかてにする

暁のしきのはねかきをかそへ。

暁のしきのはねかきもゝはかき君かこぬよは我そかすかく

あるはくれ竹のうきふしを人にいひ。

世にふれはことの葉しけき呉竹のうきふしことに鴬そなく

よしの川をひきて。世の中をうらみきつるに。

吉野川よしや人こそつらからめはやくいひてしことは忘れし

流れてはいもせの山の中に落るよしのゝ川のよしや世の中

今はふしのやまも煙たゝすなり。なからのはしもつくるなりときく人は。歌にのみそ心をなくさめける。

教長卿注云。世中の昔にかはることをたとへ云なり。富士山は煙のたゝぬ所の。初てたへなんとせんは。よくかはらんするなり。なからの橋はふりて久すてたるを。あたらしくつくらんやうの心なり。如此世中あらたまり行とも。歌をよみて心をなくさむといはんれうなり云々。常には此注の如くに料簡するなり。今の宗匠の家に。富士の煙に付て。不立不斷の二義をたてゝ。不斷の説を用也。此義は富士の山のけふり昔より今にたへぬ物なれは。不立といはん事不可然。仍不斷の義を用也。不斷をたへすと云常の義也。拾遺遍昭歌に。唐錦えたに一むら殘れるは秋のかたみをたゝぬ也けるともあり。又堀川院百首に公實公の歌に。年をへて要木こりつむすみかまのけふりをたゝぬ大はらの里云々。かやうにあまた不斷をたゝすとも云事もあれは。富士の山の煙の不斷といはん事にたかふましき事なれとも。此序の詞のつゝきやう。不斷と云ては更に難得其心。いかにも已前教長卿注の義にてや叶へからん。又或説には。富士の山の煙の其比たへにけると。なからの橋の朽はてたるをも其比つくりけると。かやうに世中うつり行事を見聞ても。歌にて心をなくさむる

と云々。此義はさは〳〵と聞ゆるやうなれとも。なからのはしつくりたる事無と云々。その所見には。拾遺集に。天暦御時御屏風に。なからのはしの橋柱はつかに殘れるかた有けるを。藤原清忠か歌に。あしまよりみゆるなからの橋柱むかしの跡のしるへなりけり云々。延喜の御時つくられたらん橋を。かやうにはいふへからす。然者ふしの山の煙も其比たゝぬかと云說も雖用之。只あらましに云かといへるか宜か。然而宗匠の家に不斷の義を頻に被執之上は不及異義。

已上第八段畢。

第九の段は。此歌の道奈良の御門の御時よりひろまりて。其比をひ人丸赤人なと云歌仙のありし事をいへる也。いにしへよりかくつたはるうちに。ならの御時よりそひろまりける。

此ならの御時よりと云事。此序を沙汰するにとりて。難義の其一なり。其故は人丸は持統文武御代の人なり。ならの御門とは。元明天皇の御代より桓武天皇の初つかたに至て。七代の都也。持統文武は大和國藤原の宮にまし〳〵き。如此二代をは藤原の御門と申す。元明天皇和銅三年藤原宮よりならの都へうつりたまひける。

飛鳥のあすかの里をゝきていなは君かあたりはみえすかもあらん。此御歌萬葉集にも有。新古今にも被入たり。然は和銅三年よりあなたは。藤原宮にまします也。萬葉集の第一の卷に。藤原の宮の御宇の天皇の御代に。柿本朝臣人丸於石見國臨死之時自傷て作れる歌。かも山のいはねしまける我をかもしらすていもか待つゝあるらんと見たり。然らはならの遷都以前卒去する事無疑。同集に持統天皇に奉る歌。又文武天皇に奉る歌も有。即大寶元年紀伊國に御幸しける時。つかうまつりてよめる歌も有。然は大寶元年以後。和銅の遷都以前に卒したる人也。此序にならの御時とかける事。更に不得其意。且はたつた川紅葉流の御歌も。文武の御製なるへし。而を此集の秋の下にならの御歌なりと注す。旁不審。此ゆへにや。定家卿は此序にも。奥のもみちの御歌所にも。ならの御門といふ所を押而。文武天皇としるしつけられたり。

又或說には人丸はならの御時にも有之。即拾遺集に人丸もろこしにてよめると云歌もあり。又伊勢のみゆきにまかり留て詠ると云歌も有。又ならの御門をおさめ奉るをみてよめる歌も有。此事いかやう(異本)にも拾遺集の誤歟。柿本人丸入唐すと云事。すへて此所見。天平勝寶年中に。上つ道の人丸。玉手の人丸と云者遣唐使たりと云事有之。人丸の同名をもて。姓迄も不分別して。やかて柿本人丸歌とかゝれたる歟。古人の所爲なれとも。極て如此事の之有。何樣にもならの御時也と云は僻事也。但貫之物書くに。大和國を奈良と書たる

事有。此集の夏の部に。ならの石上寺にて。郭公の啼を聞てよめるとて。素性歌。いそのかみふるき都の時鳥聲はかりこそむかしなりけれ。石上はならにはあらす。山邊郡に有。ならの都は添の上郡に有。郡の境大に相隔たり。されともならの石上と書。假令今の京よりもさき代々の都たりしに依て。大和の方をならと云るか。但是は强潤色を加料簡也。大略は誤と云へきにや。

かの御時におほきみつのくらゐかきのもとの人丸。

柿本とは姓氏錄云。敏達天皇の後也。家門の前に柿の木有。仍而柿本云々。もと本とも下とも二やうに書也。此人正三位と云事。昔より疑之。公卿補任なとにも不見之故也。但是はあなかちの難歟。上古補任は現任はかり載せ。散位をは不書之歟。

うたのひしりなり。

とは歌仙と云ふ心也。

これは君もひとも身をあはせたるといふなるへし。

とは君臣合躰の心也。

秋のゆふへにたつた川になかるゝ紅葉。

とは。立田川紅葉みたれてなかるめりの御歌也。是は文武天皇の御製也。

春の朝よしのゝ山のさくらは。人丸か心には冬に（雲歟）なんおほえける。

と云は。人丸萬葉集に多見えたれ共。吉野の花を雲にまかへたる歌無之。只吉野の櫻を雲にまかへたる長歌は二首まて見たり。若此歌を本として。雲かとのみおほえけるとは。貫之書なせる歟。若又別に此歌あるか。古來の不審なれは。不及委細。

又山邊のあか人といふ人有けり。

姓氏錄云。山邊は垂仁天皇の後也と云々。此赤人はならの御門に仕たりとみゆ。聖武天皇神龜三年の秋九月に。播磨國印南野に御幸給時。つかうまつりてよめる歌とて。萬葉集に見えたり。然は是は人丸の後までも存生しける人なり。官位等不分明。

人丸は赤人か上にたゝん事かたく。赤人は人丸か下にたゝん事かたくなんありける。

とは勝劣なしと云心なり。其に取ても人丸の上にいふことをは不書。且人丸をは此道の先師と尊ふか故に。無上の歌仙と云へきなり。其におとらぬほとの赤人といふなるへし。注にならの御門の御歌一首。人丸歌二首。赤人歌二首有之。是は貫之か所爲歟。後人の所加歟。古來不審なり。

この人々をおきて。くれ竹のよゝにきこえ。かた糸のより〳〵にたえすそ有ける。

とは。是は人丸赤人の外にも。歌讀の多かる里〔理歟〕をいふなり。

已上第九段畢。

第十段の心は萬葉集を撰せし故をいふ也。是より先に撰集と云事不聞。歌道の盛なる事は上古の風義。定て神妙の道に可叶歟といへとも。かやうに集撰せられたる事は不聞之也。

これよりさきの歌をあつめて。萬葉集と名つけられたり。

といへる事。前後の詞相違するに似なり。奈良の御時。此道を盛にし給へる人丸赤人等の歌仙も。此時にむまれあひたるとみゆ。隨而此集もならの御門の御製も。人丸赤人等の歌も入たるに。これよりさきのと云事。何なる故にかおほつかなし。

こゝにいにしへの事をも。歌の心をもしれる人。わつかひとりふたりなり。

と云る。是は又上の人丸赤人等か事を云るかともみへたり。舊注にも此事不憭。若又萬葉集を撰ける比の撰者なとを。名をは不呈して。かやうにかきたる歟。

これかれえたるところえぬ所。たかひになんある。

於人丸赤人等。其得失を云に不足事歟。

かの御時よりこのかた。年はもゝとせあまり。代はとつきになんなりにける。

此事强に歌の道にとりて。ことなる才覺にはなけれとも。此序に取て第一の難儀。昔より沙汰しかれたる事也。まつ萬葉集につきて被撰ける時代異義多し。一には聖武天皇。二には桓武天皇。三には平城天皇なり。先此序の上に取て三の様みたり。古よりかくつたはる内にもと云て。其下に文武天皇の御うた。人丸か歌なとを出し。それより云くたして。萬葉集を撰らるゝ由見えたれは。さて桓武の勅撰なとおほしけれとも。其代は更に不立。如先段藤原都とならの都の御代に撰せられたるへし。是に付て又いつれの御代そといふ事おほつかなきを。彼御時より以來〔年歟〕はもゝとせあまり。代は十つきになんなりにけると云。かくて彌又不審出來也。今此古今集を被撰事は。人皇六十代醍醐御門の代をしろしめす事九年。延喜五年四月の事也。是よりかみ代は十つき。年はもゝとせをかそふれは。五十一代平城天皇。御在位十七年。次文德。御在位八年。清和天皇。御在位十八年。次陽成天皇。御在位八年。次光孝天皇。御在位四年。次宇多天皇。御在位十年。次醍醐天皇。御即位の後九年。合すれは十代。年は百年に過百年と云り。百年あまりとも。百年にすくとも云に取てあたる。此序に百年あまりとかき。眞名序には時曆〔歷〕十代。數は。若又平城天皇の勅撰といふ事は。すへて不審事。彼御世百年はかりの事はさすか程遠きに。貫之なとさは〳〵と云あかさゝる事極て不審。但貫之よりかみつかたにも。分明に

しれる人すくなかりけるかとみゆ。清和貞觀の御時。文屋有季と云者をめして。萬葉集はいつはかり作れるそととはせたまひけるに。（古今）神無月時雨ふりおけるならのはの名におふ宮の大ことそこれと奏し申ける。平城より清和までは五代五十餘年なれは。君もかほとうたかはしめ給へしとも覺えす。又名におふ宮と奏しけれは。疑なくならの都の時の勅撰なるよしを奏しけるにや。先の段に書ることく。元明天皇三年に平城の宮に遷給て。桓武天皇延曆三年に山城國長岡の京に移り給しまて。八代の間はならの都と云也。第五十一代の平城天皇は御名は平城天皇とは申せとも。在位時ならの京にはましまさす。御父桓武天皇先長岡にうつり給て。十年より今の平安城に遷たまふ。其後桓武崩して。平城位に即て。すなはち此新京にまします。四年有て。御弟嵯峨天皇に讓申給て。ならの舊京に迁すみたまふ。其後寵愛し給ひける尙侍藥子。其弟兵衞督仲成等かすゝめ申によつて。世をみたらむとし給ふを。坂上田村丸等を追討せらる。奈良坂にて合戰ありき。上皇の戰無程破ぬ。藥子仲成等皆伏討。御子の春宮高岳と申しもすてられ給ふ。上皇をはよしのゝ山におしこめ申されて。然而崩して後の御名をは平城天皇と申す。平城の都にて代をしろしめしたる君にはましまさす。惣而此君の御在位四年の間に萬葉集を撰れ。又誰人の仰を承て撰と云事。更に無所見。只此序に年はもゝとせあまり。代は十つぎと云に事起て。平城天皇の勅撰かとはいふなり。ならの都の七代の間には。聖武御代殊に盛にして諸の道を興し給き。然は疑もなく聖武の御時の撰なりとみえたり。聖武は位をさらせ給て。御女孝謙天皇の御時の撰なりとも云。（[illegible]文歟）大方かきおかしめたまひたる物とも出し給ふを云也。此假名出來て後。男女貴賤みな此かなかきを好用けるに依て。古樣の萬葉かき等の物。更によみたやしにけり。仍勅撰の時代にも。明にしる人なかりける歟。且貫之さしもと此道に達したりけれとも。萬葉集をはよくも見さりけりとみへたり。且今の古今集。萬葉にいらぬ古歌を被撰たりと。此序には載なから。彼歌多く入たり。又萬葉集の歌を入ては。ある人のいはく。是は柿本人丸かなりなとおほくしけに書たり。爰に知ぬ彼萬葉集を明に見さりけりといふ事は。されはさしも殊勝なる古今集に。更古躰の歌不相交之事。不審する人も有き。何樣にも延喜比をひは。此萬葉集は打置て不學の物に成にけり。村上天皇の御時。源順と云人和漢識者也。於文道は家を興す名儒なれは不能左右。歌道に取ても名望異に他けれは。（他に異歟）後撰の撰者として。梨壺の五人の隨一たり。仍此萬葉集を讀とき て奉る。猶も智分の不及事をは。靈佛靈社に詣て祈申けるとそ。少々相殘て後代の人のよみ出したることもあれとも。皆

順か驥尾につきたる事とも也。是よりして萬葉集をは人の見弄ける物といへとも。依事槩大概計所宣なり。

已上第十段畢。

第十一段者撰萬葉以下。其名ある人々の事を書て。かの歌に得失ある事を云り。此事又序の大事。惣しては歌道の簡要なり。古より歌仙多といへとも。貫之爲道宗匠。而を此人盡心力して。歌人の歌の躰におきて。さま〳〵の喩を取て是を判せり。心あらん人よく〳〵に等（了簡歟）して。其心をうる物ならは。得失をしり。自道の本主に相叶歌をも可讀出也。されはいくたひも此判の詞と彼等か歌を見合て可了簡。其上に此集にある貫之か歌とも書ぬきて。其躰を見意得て歌をよむへし。

いにしへのことをも歌をもしれる人おほからす。

とは。歌人雖多其名。まめやかに道をしれる人まれなる事を云り。

つかさくらゐたかき人をは。たやすきやうなれはいれす。

高位高官の人歌にも。其得失あるへけれとも。御心をなして此判には不載と云なり。

ちかき世に其名きこえたる人。

とは。延喜以往の近代を云なり。

僧正遍昭。

俗名良峯宗貞。其父安世と云しは桓武天皇の御子なり。而を閑院左大臣冬嗣に給て其子とす。然而更に姓を良峯と賜。大納言大將に至。宗貞其子也。仁明深草の天皇の御時。左右なき近臣にて。五位の少將にて補藏人頭。天皇崩給けれは。即入慈覺大師室。出家して大眞言師となる。有驗の擧世に聞えけれは。文德天皇の御時。御惱の事有けるによつて。被召て參內して。加持し奉るに法驗揭焉なり。仍法眼いく程ならす越任して僧正に成なり。是延曆寺に被任僧綱の初也。出家の人なりしかと。前唐院の拾封の宣旨を蒙て。慈覺大師の聖敎も此人管領しけりとて。元慶寺と云所に住す。又此所を花山と號す。仍花山僧正とも云也。歌の躰事は不及注尺。留心能々可見之。（以下錯簡歟）、、、にも平城の宮の御宇太上天皇とのみ有。尋平城宮と御自稱もありし也。世繼といふ物語に。昔高野女躰の御代に。天平勝寶九年に左大臣橘の卿の家にて。諸卿大夫等集て萬葉集を撰たりとかく。國史等の正文にはあらされとも。此世繼物語も一條院の比書たる物なれは。空事をかくへからす。かくて聖武の御撰に治定すれは。代は十六代。年は百八十余年になる。此序の十つき百とせあまりには又不符合。眞名序の歷十代過百とせとかく。假名序に百年（を歟）にあまりといふに付て。古人會尺して十六代を十代と歷とかき。八十余年をもゝとせを過と書かとも云。文章にかゝる事もあれとも。若は一二代。若は十年の內の事こそあれ。十

六代百八十余年の事を如此かくへしとは不覺。所詮聖武の御勅撰に治定すへきならは。此序の說は誤なるへし。次萬葉集撰者の事。左大臣橘諸兄。中納言大伴家持等か勅を承て撰する所歟。諸兄は天平寶字元年に薨したる人也。此集に此人の年々の歌あまた入たるに。寶字四年以後のうた無之。又家持は參議中納言迄は昇たれとも。此集には左大辨まての歌見たり。又此集に當主の御製を入奉。十四代に及たり。先十二代をは諡號載奉る。聖武孝謙二代をは只御製御歌なと書り。依之彌聖武の勅にて勝寶の比撰られたりと云こと治定する也。大かた聖武の御撰なりとも。延喜の比まてはさまては遠しとすへからす。而を心うつくしくよみうしなひて。更に人のみさるものに成にけり。假名といふ物は嵯峨の御時弘法大師書。

在原業平。

平城天皇の御子阿保親王と申人おはしき。此親王の御子あまたありし。中納言〔王咲歟〕行平并此業平等是也。業平は右近五郎とも云。仍阿保親王の五男なりと云說あり。これに付て舊より異說有。五男なりと云とも。必しも太郎次郎と云ことやあるは〔やはある歟〕。此人に限て五郎中將と云へきに非す。是は背おさなくに五節に出仕しけるに。無四度計てふところ櫛をおとしたりけるを。かたへ殿上人共笑て節の君と云ける。櫛をおとしたりけるを櫛の君とも云ける。櫛の字の篇を略して。五節の節に返して言出したりけるを。其後に又かくし題に。節の字のさうかうをのけて即とよひける。其より五郎中將と云。隨分秘說の由口傳すれとも。強これ程に叶へりとも不覺事也。但昔も勸修寺朝忠と云し人。殿上人の中にて五郎と發言したりけるを。父三位右大臣定方の聞て勘當したりける。有故事歟。此中將色を好む心甚て。特にしらるゝ事多かりき。伊勢齋宮に密通す。第一勝事也。又二條后のいまた姑の五條后に同宿の時。又密通しけるほとに。せうとの人憤てもとゝりを切てけり。其長髮の程奥州の方に下向すと云云。此人のふるまひさま〳〵の事共あれ共。伊勢物語なとの才覺なりぬへければ略之。

文屋康秀。

眞名序には文琳とかける。是は彼康秀か異名なり。眞名序を奏覽の本にあらすと云所見には。遍昭を花山僧正とかき。業平を在原中將とかき。康秀を文琳と書。是等を此說とする也。(此康秀事は委不見歟。)

宇治山の僧喜撰は。よめる歌おほく聞へれは。かれ是をかよはしてよくしらす。

と云々。此喜撰宇治に隱居のよしそみえたれ共。明にいかなる人とは聞へす。但光孝仁和御門の御時。奉勅て和歌の式を

作進と云々。然は歌仙撰有ける段勿論。然而よめる歌多からぬ事太不審也。又名字に付ても異說有。孫姫と云人又歌の式を作るに。喜撰基泉と云人をふたり出して。喜撰か歌にそ今の我庵はの歌をのせ。基泉。木のまよりみへ〔みゆる(昭和古今集序註)〕つる谷の螢かもいさりするあまの海へ行かも〔つた(同上)〕。又樹下集と云ものに喜撰か歌とて。けかれたる燃〔なお(同上)〕たふさはふれし極樂の西の風ふく秋のはつ花と云々。是等喜撰か詠と云事。古來の說あれとも。又無實說。其よめる歌おほよきこへ〔く歟〕ぬよし。貫之書留たる上は。わか庵の歌の外はあるましきや。而を爲兼卿玉葉集を撰する時。喜撰と治定して此歌か書入たり。無故實之至。第一失錯也云々。

をのゝ小町はいにしへのそとほり姫の流也。なかれとはよます。りうとよむ也。小野小町か事不分明。仁明承和の比の人。出羽郡司か女。顏色無双の人也云々。或說に。弘法大師の作らしめたまふ玉造といふ物なり。是玉造の小町と云者。むかしは色形はなやかなりしか。老衰たるさまを詩につくらしめ給たる也。然而小野。玉造。其姓各別の上。他人たりといふ事無疑。いかさまにも老後は沈淪して。奧州の方にて令死去頓。實方朝臣下向の時に。ふるき首の目の穴より。薄の生出たりけるをみて〔浮歟〕。とりのけたりとも言也。衣通姫とは應神天皇御子二流の皇子と云人の女也。其姉は人皇十九代允恭天皇の后也。其妹容顏絕妙にして。其色衣にとおりて照かゝやきけり。仍衣通姫と云。天皇きこしめして。七たび使をつかはしてめされけれは。皇后に憚申て不參給。七たびまてめされけれと。猶いなみ申されけれは。御使中臣烏賊津と云人。七日迄不食して。庭中に伏して憂歎申けるほとに。不得止してまいり給ひけり。後に和歌の浦に跡をたる。是を玉津島明神と申也。又住吉四所神殿の中に。此明神其一とす。昔の歌の道を好給けるに依て。今も此道をまもる神にましますと云々。又或抄云。玉津島明神奉崇給事。家々に云樣有。それも無謂。當流所習は。光孝天皇御惱有し時。御祈禱あこ曙に。赤袴着たる女房枕に立て云。立かへり又も此世に跡たれん其名うれしきわかのうらなみ と。御門御夢に見へけれは。夢中に誰人そと問給ふ。衣通姬と答たまふ。仍仁和三年九月十三日。右大辨源隆行勅使として。和歌浦玉津島の社を造立して。次信遍上人勸請して奉崇本地聖觀音。是妃和歌浦に垂跡事は後立跡の歌に見たり。續古今後京極攝政歌。いか斗わかの浦風身にしみて宮はしめけん玉津島姬。新後撰爲家。あとたれしもとのちかひを忘すはむかしにかへれわかの浦なみ。御門を戀奉せ。我せこかの御返事。小車の錦のひもをときかけてあまたはれすなたゝひとりのみ。又說云。我せこに三義あり。若男。我男。和男。(たはやかなる義也。)

わかせこかくへき宵なりさゝかにの蜘のふるまひかねてしるしも。是は允恭天皇末皇子にておさなくおはしましゝ時。仁賢い姫宮をあはせ奉らんとしけるを。允恭衣通姫に思つき給て更不用給。世にわひたる身にておはしけるを。允恭忍てかよひたまひけるを。允恭の父仁德天皇制してゆるしたまはす。恐ましまさゝりけれは。奉戀給て。姫の家にぬき置給ける允恭の御衣を。彼御かたみと思てきまします。允恭戀給魂蜘蛛と成て。彼着衣の中にはいり居たり。捨とも又は入ぬ。たましひ成と心得て。定來給はんすらんとて讀給ふなり云々。小野小町おもひつゝの歌は業平を戀ひてよめり。色みへての歌は。大江惟章か妻となりし時。心かはりして。藤原朝行か聟に成ける時によめる歌也。文集の心をよむ。白居易龍珍也人好色にして。心一方ならさりしを作て送云。悲不還空人之心。似山花易數〔散歟〕。わひぬれはの歌。文屋康秀三河掾に下時。可具之由云時返事也。

大伴黑主。

是は志賀の黑主とも云。園城寺地主也云々。仁和の初つかたまて存生。彼之時大嘗會の和歌を獻するよし見たり、或說には陰陽の人歟。後撰集に志賀の唐崎にて祓して。祿にあつかるよし見たりと云々。已上六人詠歌幷得失の次第。先々云かことく。道の大事にて。貫之力を入て尺したる事なれは。能々料簡して。歌の躰をは思分へき事也。

此ほかの人々その名聞ゆる。

と云り。そのさましらぬなるへしと云にいたるまては。近き代に取ても。多歌よみあれとも。上の人々には及はし。歌の道にも深からぬよしを云なるへし。

已上第十一段畢。

第十二段は延喜の御時。此古今集を被撰し事を謂をのへたり。

すへらき。

天皇とかく也。上古には尊ひてはみことゝ申。人代と成ては。天日嗣を受給ぬれは。すへらともすへらきとも申す。兼てみことゝも申す。中古よりはみことゝ申事はたえにけり。又すへらとは大八洲國を管てしろしめ御謂なるへし。但萬葉集にはすめろきともよめり。詞の通するなるへし。

あめのしたしろしめすこと。よつの時こゝのかへりになん成にける。

とは。此御時天下をしろしめして。九年に成ぬと云心なり。寬平九年に讓を受たまふ。同十年に改元。昌泰元年とす。同四年に改元。延喜元年とす。同五年四月に此集を撰調られし也。うちまかせては。御門の天下を治たまふを。讓を受給ふ次の年よりかそふる也。然は八年と云へきを。受禪の年を加

へて九年と書也。是も非無其例。此御門御年十四にして讓を受給ふ。聰明叡哲にまし〳〵て。萬の道を興したこなひ。絕たる跡をつきたまふ。仍自萬葉集以來。歌の集なと相つく事なかりしを。かやうに集撰て。後代の龜鑑となしたまふ。されは萬葉集は上古集にて。珍重すへき事なれとも。世もあかり人も朴にして。歌のさま今の世にあはぬ事とも多し。仍歌を學はんと思はん人は。此集を見明て。不可知爲本。此中に取ても。寛平已後の人の歌のさまをこひれかふへきよしを。定家卿なとも被口傳たり。こひれかふへき也。

あまねきおほんうつくしみの浪。やしまの外まてなかれ。ひろきおほんめくみのかけ。つくは山の麓よりもしけくおはしまして。

と云々。是は眞名序には仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。淵變爲瀨之聲。寂々閉口。砂長爲巖之頌。洋々滿耳。此句と同心なり。凡先段にも如載。允眞名序をかゝせて。此を（土書）等代にして。假名序を作ると說も有。或又假名序をみて。眞名序を撰しかくとも云。此眞名序は紀納言息大内記淑望か筆也。此淑望は又貫之か舅也。前後之間は難知之。一案之内にて相談して書事は無疑。且此兩序を見るに。眞名序を本にして書かと見たる所も有。或は又假名序を（註）うつしたるかとみゆる所も有。何樣にも此眞名序文躰[illegible]也。其中に今の仁流秋津洲之外句妙也。今までも和歌序をかゝんに。此[illegible]をおもはへて可作云々。且句の[illegible]は淑望も[illegible]書得之歟。依之[illegible]言子息の名を假て書之歟とも云り。八洲の外なかれとは。初段に云所の大八洲國の事也。此大八洲に取て。日本紀に神代あまたの異を載たれとも。其中には大日本豐秋津洲。淡路洲。伊豫。筑紫洲。壹岐。對馬。隱岐。佐渡。此大八洲之說をなるへし。且舊事本紀と云書に。此八の洲に各神まします也。日本紀には此神の御名まては不載。筑波山麓よりとは。常陸國に有山の名なり。彼山を詠せる歌は。先段にも所載。筑波根のこのもかのもの歌を引たる也。彼歌にも麓と云事はなけれ共。今の序には上におほんめくみのかけと云によりて。下に麓と〻云。このもかのもとは此面彼面なり。又此方彼方とも云。同心なり。延喜五年四月十八日云々。本朝帝紀と云物には。四月十五日と云說有。又十八日は初て勅を承し日なりとも云。或は又奏覽の日なりとも云。古より兩說有。紀友則。同貫之。凡河内躬恒。壬生忠岑は。時にとりては此道の達者として名望異に他なり。（他に異也）仍淺位且卑に不拘して撰に[illegible]しけろ也。此四人に仰て。ふるき歌をも。又時の歌をも。みつからのまても獻つらしめけれとも。まめやかに撰定する事は。貫之一人か所爲なり。此集を被撰ける時。大内の承香殿の東なる所にて撰之。近代和歌所と云事は[illegible]村上の[illegible]

時。依撰集之[illegible]會にて撰之。是[illegible]と云。[illegible]撰者をは[illegible]と云。[illegible]又今

[illegible]七年十三年[illegible]貫入之[illegible]依之十年[illegible]奏[illegible]に

て。奏覽[illegible]後年の事也[illegible]云[illegible]四月十八日上覽の日也。[illegible]の歌入[illegible]云々。萬葉集にいらぬ舊歌云々。此事[illegible]不審之事也。

これか中に梅をかさすよりはしめて。

とは春の部の事也。梅の歌よ[illegible]に立春の心。[illegible]なとを詠したるをこそ入たれとも。時のけいふつにとりて。梅花はことに色も香も[illegible]て。梅をかさすより初てとはいへる歟。

ほとゝきす。

とは夏の部。

紅葉をゝり。

とは秋の部。

雪をみるにいたるまて。

とは冬の部。

つるかめによそへて。君をおもひ人をもいはひ。

とは賀部。それよりさしとして戀部事を云。

秋はき夏艸を見てつまをこひ。

といふ是也。又たい（ちま）歸て別の部の事を云。

あふさか山にいたりてたむけをいのり。

とは是なり。

[illegible]るは[illegible]夏秋冬にもいらぬくさ[illegible]。

とは雑部なり。又旅、哀傷、[illegible]なとの事也、部を立る次第は前後不同なれとも。大[illegible]を取て。かやうに書たるなり。

すへてちうたはたまき。なつけて古今和歌集といふ。

千首[illegible]といふ也。但現在の歌千九十九首なり。是に付て兩說あり。一には九十九首[illegible]して。大數を取て千首と云也[illegible]く[illegible]此。貫之[illegible]せしは。土佐守に任て。[illegible]に下向したりける間に。延喜御門かくれさせ給。仍不及奏覽して。新撰となつけて私の家の集にしたる物あり。その序に貫之自筆たるに。昔延喜の御宇。[illegible]世之無爲。因人之有[illegible]。令撰万葉集外古今歌一千首云々。然は揚大數千首と云[illegible]前後說同之。又の說には。此集の面に貫之か歌九十九首[illegible]貫之奏覽の時。自の歌を不入して。古今の歌千首を奏覽す。御門貫之か歌をめし御覽して。九十九首を令撰出給て。此集に被書入に依て千九十九首有。今は序は初にみつからの歌をのそきたる時の事也。古來の兩說たれ共。上所謂大數をとれりと云事は。其謂あるかと見へたり。新撰集の序の心も

待合する故に。今の序にも自の歌をも奉しめ給てと書なから。一向に我歌を除けん事不審也。所詮彼說は貫之歌の九十九首あまりたるによつて。料簡して云出せる事歟。眞名序には。各献家集幷古来舊歌。云續万葉集。於是重有詔。部類所奉之歌。勒爲二十卷。名云古今和歌集。此序の如は。先續万葉集と云物を被撰。重て撰定せしめて。古今集と云と見へたり。然に今の假名序に其由を不記して。直に此集を被撰し由を載たり。又件續万葉集と云物今は世に不見。但舊さまには。今の万葉集を皆古万葉集と云。然は續万葉集のならひてありけりとみゆ。但菅家の新撰万葉集と云ものもあれは。彼に對してもや古万葉集の號ありけん。おほつかなし。此新撰万葉集は菅家御存日の事なれは。古今以前に流布する事無疑。

かくのごとくえらひあつめられて。山下水のたえす。はまの眞砂の数おほくつもりぬれは。今は飛鳥河の瀬になるうらみもきこへす。さゝれ石のいはほとなる悦のみそ有へき。

と云々。是は此集のおされて後の世までにつたはり。君の御うつくしみのひろきか故に。人のうらみもなく。悦のみあるへきよしを云て。上段々の心を決する也。あすか川の歌は先段にも所載也。世中はなにかつねなるあすか川と云心をとり。さゝれ石のいはほとなるは。我君はちよにやちよの歌を引よせて書たり。

已上十二段畢。

第十三段は貫之等か自謙の詞を書也。かやうの物を書には。自謙の句とて。其身の器にあらされとも。此事を承。恭も恐もおほき詞を書のふる也。

まくら。

臣等と云心なり。教長卿注には。まくらことは常と云詞なり。枕草子なとゝて。常に手ならす物也と云々。此說は大なる誤なり。顯昭注には丸等也。誤てまくらと云ける歟。教長卿說も誤歟。所詮舊さまには臣等をまくらと書かといふ。是にては枕詞とよみつゝくへしと云々。是は不可用之。まくらとよみきつて。こと葉春の花とよむへきなり。又或本貫之等共書たり。

春の花にほひすくなく。

とは。詞の花の匂ひなきことを恥ち。

秋のよなかきをかこつ。

とは。虚名の世にきこへたることを恐れたる詞なり。是よりこの事の時にあへるをなんよろこひぬる。

と云に至まて。皆自謙の句の一つゝきなり。是よりしもつかた。

人丸なくなりにたれは。

と云より序の終に至まて。又一段なれとも。大綱自謙の句の

中に摘するもくるしからされは。眞名序は此の外自讃の句末に書留たり。人丸なく成りにたれとも云詞。左傳と云替の序に。文王既沒而文不此也（子罕篇）と。此詞をおもひあはせて。人丸既沒れと書。是は歌の方より貫之を聞へしとは也。然は眞名序十代とするかと云義に符合するにや。此ふるき詞を思よせてかきたる。殊勝なれとも。近代は有名無實也。古人序爲なれは。時によつて斟酌するか。口傳にも古實とも云なり。

たとひ時うつり事さりて。たのしみかなしみゆきかふとも。

と云々。此詞公方へむけたることなとに。今の世には更々不可書之。昔はかやうの事大樣なり。近代と成ては。猶此の事をよく辨へて可書之。是はかやうに序なととて書つらぬるのみにあらす。歌を奉らんにも。詞ことに能々思慮して。後難なき樣に可詠也。

このうたのもしあるをや。

とは。文字の事なり。

あをやきのいと。松のはのちりうせすして。

といふより。

いにしへを仰て。今をこひさらめかも。

と云に至まて。第十二段の末にいへることをかきて。此集の世にとゝまり。道を弄けん輩の歌のさまをしり。事の心を得へきやうを書も。此序を書留たるなり。

有古今之鈔者甘露寺殿伊長卿之筆。而又元長卿少々加筆。有斟考之本。希有落予手。舊本頗有虫損等。仍令書寫畢。

一本云

此注則後村上院正平年中。仰中院入道准后（親房公。）而被注。仍宗匠（二條定家。）撫拾於諸家秘説所註也。則先師中書大王（宗良親王。宗匠爲世（二條）仁外孫。）初一見而上奏之。相傳之畢。

桐雲子釋竺源惠梵

本云

寛永廿二年臘月廿八日。於燈下終寫功乎。斯注本相傳當流。口傳等書加。隨分爲證本之處。依令失却。而直拭老眼馳禿筆訖。此本未校本也。烏焉馬誤雖有之。能實而畢。重可加校合也。

竺源叟 行年 六十五

私云。竺源惠梵者兵部卿師成親王之法名也。新葉集載其倭歌。可爲南朝之皇胤。（未詳。）按。凡皇子之名。中古以來以某字爲行字。仁明皇子之康字。文德之惟字。清和之貞字。醍醐之明字等之例也。故後醍醐之皇子皆以良爲行字。寬成。凞成。泰成等。是村上之子也。皆以寬爲行字。則師成亦爲後村上之子。

一校了

續群書類從第四百五十三

和歌部八十八

古今和歌集隱名作者次第

春上　廿四首

春かすみ　基經。昭宣公是也。
雪のうちに　二條后。
梅か枝に　良房。忠仁公これ也。
こゝろさし　同。
野邊ちかく　二條后。
春日野は　同。
み山には　染殿后。
かすか野の　貞元親王。
あつさ弓　同。
きみかため　小松天皇。仁和の御門とも又光孝天皇共申也
もゝちとり　冬嗣公。閑院と申。
をちこちの　猿丸太夫。
おりつれは　延喜天皇。
色よりも　良房。
やと近く　助內侍。
むめの花　惟喬親王。
梅か香を　七條中宮。
ちりぬとも　良房公。
やまたかみ　伊東內親王。業平母。
山さくら　同。
石はしる　朱雀院御うた。
あたなりと　紀ありつね女。
ちりぬれは　猿丸太夫。
おりとらは　文德天皇御うた。

春下　十八首

春かすみ　惟喬親王。
まてといふに　二條后。
殘なく　助内侍。
このさとの　家盛。家持男也。子の事を申也。
うつせみの　同。
さくら花　元良親王。もとよししんわうと申。
春の色も　良房公。
はることに　貞仁公。(信慰)忠平事也。
花のこと　元良親王。
吹風に　助内侍。
まつ人も　染殿后。
鶯の　助内侍。
吹風を　仲平卿。
駒なへて　良房公。
ちる花を　同。
いまもかも　延喜天皇御うた。
春さめに　良房公。
山吹は　(橘)諸兄卿。

夏　十二首

さつきまつ　猿丸太夫。
五月まつ　なりひら。
いつのまに　二條后。
けさきなき　延喜天皇御うた。
夏山に　七條中宮。
ほとゝきす　伊勢。
時鳥　猿丸太夫。
おもひいつる　同。
聲はして　同。
あし曳の　七條中宮。
いまさらに　助内侍。
こその夏　二條后。

秋上　三十七首

わかせこか　(藤原)内麿。冬嗣の父也。
昨日こそ　定明親王。
秋かせの　長盛。
久かたの　人丸。
あまの川　つらゆき。
こひ／＼て　(右大臣)良相公。
木のまより　二條后。
おほかたの　猿丸太夫。
わかために　七條中宮。

物ことに　延喜天皇御うた。
ひとりぬる　伊勢。
いつはとて　伊勢。
しら雲に　延喜天皇御うた。
さ夜中と　つらゆき。
あき萩も　同。
秋の夜は　染殿后。
君しのふ　同。
秋の野に　是貞親王。仁和弟也。
あきののに　良房公。
もみち葉の　仁和天皇御歌。
日くらしの　同。
ひくらしの　猿丸太夫。
我門に　重明親王。
いとはやも　能有。
春霞　人丸。
夜なさむみ　同。
奥山に　猿丸太夫。
秋萩に　仲原家光。
あき萩を　仁和天皇御うた。
秋はきの　平城天皇御歌。
なきわたる　同。
萩のつゆ　平城天皇。
おりてみは　家持。大納言旅人男。
萩かはな　同。
みとりなる　延喜天皇御うた。
もゝ草の　猿丸太夫。
月草に　山邊赤人。

秋下　十六首

きりたちて　長良。閑院公男。
神な月　家持。
ちはやふる　冬嗣公。號閑院。
あきの露
ちらねとも　七條中宮。
秋きりは　良方。
色かはる　是貞親王。
さほ山の　家持。大納言旅人男。
こひしくは　人丸。
あきかせに　猿丸太夫。
秋はきぬ
ふみわけて　清和天皇御うた。
秋の月　貫之。

吹かせの　保忠。八條中納言。
ほにもいてぬ　猿丸太夫。
かれる田に　三條町。

冬　十首

たつた川　聖武天皇御うた。
おほそらの　七條中宮。
夕されは　家持。
今よりは　助内侍。
ふる雪は　仁和天皇御歌。
この河に　長經。
ふるさとは　平城天皇御歌。
わかやとは　桓武天皇御歌。
けぬかうへに　天武天皇御歌。
雪ふりて　寛平天皇御歌。

賀　十一首

わかきみは君か代は共いふ也。　橘淸友。
わたつ海の　左大臣時平。昭宣公一男。
しほの山　良房公。
わかよはひ　二條后。
春日野の　滿子内侍。
山高み　躬恒。
めつらしき夏。　友則。
住の江の秋。　みつね。
千とりなく同。　同。
秋くれと同。　忠岑。
しら雪の冬。　つらゆき。

離別　九首

すかるなく　大伴旅人。これと、よみ候也
かきりなき　なりひら。
たらちねの　紀有常女。
から衣　仲平娘。いもうと
えそしらぬ　紀利貞娘。
あかすして　七條中宮。
かきりなく　敦慶親王。宇多院御子。
かきくらし　伊勢妹。
しゐて行　四條后妹。

羇旅　二首

宮こいてゝ　聖武天皇御歌。
北へ行　利貞女。有道孫。

物名　八首

あなうめに　七條后。
秋はきぬ　友のり。

かくはかり　助内侍。
人めゆへ　同。
ふりはへて　此四首作者不分明由申置候也。
ありとみて
うつせみの
花ことに

戀一　七十一首

ほとゝきす　守平親王。延喜第六皇子。
しるしらす　内侍。
かたいとを　文徳天皇皇子 弘世王。ひろよの大きみとよみ候也。
夕くれは　在原 滋春。
かりこもの　延喜天皇御歌。
つれもなき　七條中宮。
ちはやふる　亘門。中宮六夫。
わかこひは　つらゆき。
するかなる　昭宣公。
ゆふつくよ　七條中宮。
あし曳の　平 貞文。
よし野川　二條后。
たきつ瀬の　藤原 敏行。
山たかみ　つらゆき。
おもひいつる　如覺。九條右大臣師輔子 俗名高光。
ひとしれす　貞信公。
秋の野の　惟喬親王。
わかそのゝ　忠平公。
あしひきの　昭宣公。
なつなれは　國經。中納言。
戀せしと　なりひら。
あはれてふ　助内侍。
おもふには　業平。
わか戀を　宇多天皇御うた。
あさちふの　貞盛女。
ひとしれぬ　伊勢。
思ふとも　みつね。
いてわれを　平中興。なかきとよみ候也。
伊勢の海に　昭宣公。
いせのうみの　貞元親王。
なみた河　陽成天皇御うた。
種しあれは　忠仁公。
あさなく〳〵　藤原 忠房。
わすらるゝ　同。
から衣　協 長盛。

よひ〱に　貞利。
こひしさに　同。
人の身も　橘忠。（ほとこすと忠此一字をよみ侯なり。）
しのふれは　長朝。
こむ世にも　昭宣公。
つれもなき　陽成天皇。
行水に　こまち。
人を思ふ　（紀）文幹。
思ひやる　國經。（中納言。）
夢のうちに　忠仁公。
こひしれと　二條后。
なみた川　陽成天皇御うた。
戀すれは　昭宣公。
篝火に　（滿）長盛。
かゝりひの　帥內侍。
はやき瀬に　惟喬親王。
おきへにも　伊勢。
あし鴨の　有常。
人しれぬ　忠岑。
とふ鳥の　（藤原）仲平。
あふ坂の　宇多天皇御歌。

逢さかの　基康親王。
うき草の　定國娘（いもうと）。
うち詫て　（藤原）公俊。
こゝろかへ　昭宣公。
よそにして　（菅原）惟岳。
春たては　延喜天皇御歌。
あけたては　后宮。
なつむしの　同。
夕されは　（大江）惟章（ひら）。
いつとても
秋の田の　なりひら。
あきの田の　（橘）廣通。
人めもる　忠仁公。
あはゆきの　つらゆき。
おく山の　染殿內侍。

戀二　十四首

うたゝねに　（藤原）仲平。
いとせめて　小町。（又は二條后ともいへり。）
夕されは　つらゆき。
さゝの葉に　同。
わかやとの　同。

河の瀬に　同。
わびぬれは　中原行葉。
わりなくも　聖武天皇御歌。
戀しきに　倂良親王。
よとともに　源當純。
夢路にも　宇多天皇御うた。
秋なれは　惟喬親王。
年を經て　なりひら。
月かけに　ふかやふ。

戀三　廿五首

よるへなく　眞雅僧正。
いたつらに伊勢物語に有。　なりひら。
あはぬ夜の　人丸。
かねてより　躬都貞。人丸男也
こりすまに　聖武天皇御うた。
こひ／＼て　齋宮(掲歌)招子内親王。
しのゝめの　文德天皇御歌。
ほとゝきす　法眼定海。山田皇子御子。
玉くしけ　同。
君やこし　(隠歌)招子内親王。文德姬宮、齋宮也、
むは玉の　人丸。

さよ深て　同。
君か名も　天智天皇御歌。
名とり川　紀貞成。
よし野川　二條后。
こひしくは　仁明天皇御歌。
おもふとち　穎雄二女。近江守、
おもへとも　藤原忠房朝臣。
たきつ瀬の　つらゆき。
わかこひは　在原しけはる。
おほかたは　平城天皇御歌。
池にすむ　藤原兼輔。
あふ事は　定海法眼。
むら鳥の　重明親王。
君により　仁和天皇御歌。

戀四　四十首

みちのくの　在原基平。行平男。
あひ見すは　凡河内躬恒。
いしま行　二條后。
伊勢の海士の　宇多天皇御歌。
あすか川　玄清女。法印。
思ふてふ　寛平天皇御歌。

さむしろに　うち橋姫。
君やこむ　景式王。かけのりの六まみとよみ候也。
月よゝし　常康親王。
君こすは　染殿后妹。
宮木の丶　光明皇后。光明とありかき。
あなこひし　僧都法師。
津の國の　勝内侍。
御よしの丶　天智天皇御歌。
かくこひん　惟喬親王。
あまのはら　紀、親正。
あつさ弓　天智天皇御歌。
さと人の　大江千さと。
おほぬさの　こまち。
すまのあまの　なりひら。
玉かつら　遊子内親王。
たかさとに　素性法師。
いて人は　猿丸太夫。
いつはりの　家長妹。
いつはりと　宇多院御歌。
うつせみの　千さと。
あかてこそ　兼明親王。

わすれなんと　なりひら。
わすれなん　關雄。
たえす行　東人。
しら川の　雅定朝臣。
くれなゐの　染殿后。
おもふより　眞雅僧正。
冬の色に　敏方。
めつらしき　天武天皇御歌。
かけろふの　昭宣公。
ほりえこく　仁德天皇御歌。難波天皇御事也。今の平野明神御事也。
まてといはゝ　玉淵女。
あふまての　源有國。小町姉かたへとあり。
かたみこそ　平顯忠女。

戀五　四十一首

みてもまた
はなかたみ　良相女。
うきめのみ　なりひら。
あきならて　八條弁。
すまのあまの　文屋ありすゑ。
山しろの　延喜御歌。
あひみねは　七條中宮。

あかつきの　[illegible]
たまかつら　[illegible]
わか袖に　[illegible]
山の井の　宇多院御歌。
わすれ艸　[illegible]
こふれとも　二條后。
夢にたに　衣通姫。
こめやとは〔六帖〕　[illegible]
いましはし　[illegible]
今はこしと　[illegible]
月よには　[illegible]
うへていにし　[illegible]
こぬ人を　[illegible]
ひさしくも　紀名虎女。
水無瀬川　行平朝臣。
世中の〔[illegible]〕
こゝろより
われのみや　〔異本〕[illegible]
いまはとて　二條后。
あはれとも　在原滋春。
身をうしと　同。

[illegible]たに　[illegible]
あふ事の　[illegible]
わひはつる　[illegible]
夕されは　[illegible]
わたつみの　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
しくれつる　[illegible]
[illegible]　二條后。
あきといへは　七條中宮。
[illegible]　光孝天皇御歌[illegible]
[illegible]

[illegible]　五首

[illegible]　醍醐天皇御歌。
[illegible]　七條中宮。
[illegible]と　同。
[illegible]に　[illegible]
[illegible]たに　[illegible]

雜上　三十二首

わかうへに　なりひら。

おもふとち　藤原兼輔。
うれしさを　經繼。
かきりなき　忠仁公。
むらさきの　中納言朝行。
をそくいつる　文仲親王。
わかこゝろ　藤原清經。
あまのかは　行房。
あかすして　紀眞岑。
いそのかみ　長成。
いにしへの　惟貞。
いにしへの　同。
今こそあれ　壬生忠岑。
世の中に　平城天皇御歌。
さゝの葉に　同。
おほあらきの　大伴家持。旅人男
かそふれは　忠仁公。
をしてるや　諸兄。
おいらくの　家持。
さかさまに　藤原勝臣。
とりとむる　定國。
とゝめあへす　貞元親王。

かゝみやま　大伴黒主。
ちはやふる　能有。左右のおほいまうちきみ也　右大臣の事を申也
われ見ても　なりひら。
すみよしの　聖武天皇御歌。
あつさ弓　人丸。
かくしつゝ
わたつ海の　高藤女。
わたつ海の　重明親王。
わたのはら　大伴黒主。
なにわかた　同。

雑下　三十三首

世中は　忠仁公。
いく世しも　平城天皇御歌。
かりのくろ　仁明天皇御歌。
あはれてふ　滋春女。染殿内侍にをくれて讀るとなん。
あはれてふ　伊勢。兄におくれてよめる也
世中の　二條后。出家後大原野にてよめるとなん。
よの中は　新田王子。
世の中に　高市親王。
山さとは　忠仁公。
よの中は　二條后。兄に後ての事となん。

世中を　同。
みよしの丶　同。
世にふれは　文德天皇御歌。
いかならん　重明親王。延喜御子。
あし鳥の　天武天皇御歌。
世中の　嵯峨天皇御歌。
よにふれは　敦慶親王。
木にもあらす　高津内親王。桓武皇女。
わか身から　高世親王。
としを經て　なりひら。仁明天皇御世に、[illegible]てたてまつりけるとなん
野とならは　二條后。
われをきみ　中納言昭範女。
なにはかた　藤原兼輔。
いまさらに　[illegible]内侍。
いさこゝに　仙人の歌となん。
わかいほは　三輪明神御歌。
あれにけり　嵯峨天皇御歌。
世の中は[illegible]　惟貞親王。
あふ坂の　こまち。
かせのうへに[illegible]　[illegible]王。[illegible]第十[illegible]子也。
風ふけは歌は万葉。　有常女。

たかみそき高御幣へいなり　人丸。
わすられん　大江惟平。

雑體
短歌

旋頭歌　三首

うちわたす　阿保親王。[illegible]
返し
春されは　昭宣公。[illegible]
はつ瀬川　陰季。

誹諧　三十首

むめの花　惟喬親王。
秋くれは　つらゆき。
あききりの　阿保親王。
花とみて　同。
いその神　崇。たかともは[illegible]
枕より　平貞文。
こひしきか　昭宣公。
ありぬやと　同。
みゝなしの　藤原隆行。
あしひきの　玄賓僧都。けんひんそうつとよみ侯。
おもへとも　昭宣公。

ことならは　四條后。
おもふてふ　二條后。
思へとも　經緯。
われをのみ　景式王。
われを思ふ　平好風。
いてゝゆかむ　紀 有常女。
くれなゐに　源 是清女。
いとはるゝ　藤原 [illegible]定。
うくひすの　[illegible][illegible][illegible]樣（[illegible]たよみ大をみかおすめとよむへし。）
さかしらに　中興 通時。
まめなれと　平 貞文
なけきをは　つらゆき。
人こふる　[illegible][illegible]内侍。
よひの間に　二條后。
うへにとて　在原 行平朝臣。
世の中の　同。
なにをして　藤原 因香朝臣
梅のはな
世をいとひ

大歌所御うた　十七首

おほなほひのうた　五首

あたらしき　作者無之。
しもといふ　同。
あふみより　行平朝臣。
みつくきの　作者無之。
しはつ山　同。

・とりものゝうた　七首

神かきの　聖武天皇御歌。
しもやたひ　同。
まきもくの　美材。
みやまには　平城天皇御歌。
みちのくの　聖武天皇御歌。
我門の　同。
さゝのくま　忠仁公。

返しものゝうた　五首

あをやきを　石神。
まかねふく　藤原 親長。
美作や　仁明天皇御歌。
みのゝ國　源 當純。
君か代は　大江 玉淵。

東歌　十三首

あふくまに　大中臣。東人歌。

みちのくは　融左大臣。
わかせこを　伊勢。
おくろまき　橘諸兄。
みさふらひ　中務仲時。
もかみ川　清原雄。
君をゝきて
さかみうた
こよろきの　藤原經信。
ひたちうた
つくはねの　同。
つくはれの　源能有。
かひうた
かひかれを　源まさすみ。
かひかれを　同。
いせうた
おふのうらに　延喜天皇御歌。

此一帖はしめて撰出者也。
努々他見あるへからさる由申。
永正六年三月日　法印堯智

撰集作者異同考

代々撰集大臣諱名考

古今集

前太政大臣（藤良房。冬嗣公二男。）
菅原朝臣（聖廟。）
東三條左大臣（源常。嵯峨第三子。）
河原左大臣（源融。嵯峨第十三子。）
近衛院右大臣（源能有。文徳第二子。）
左大臣（藤原時平。昭宣公一男。）

後撰集（與前集名號全同者略之。已下倣之。）

菅贈太政大臣（聖廟。）
贈太政大臣（時平公。）
太政大臣（忠平。謚貞信公。昭宣公四男。）
閑院左大臣（藤原〔冬嗣〕嗣。內麿三男。）
比巴左大臣（仲平公。昭宣公三男。）
左大臣（藤實賴。淸愼公。貞信公一男。）
北邊左大臣（源信。嵯峨第一。）

拾遺集

小一條太政大臣（貞信公忠平。）
小野宮左大臣（淸愼公實賴。）
一條攝政（藤伊尹。謙德公。九條師輔一男。）

三條太政大臣（藤賴忠。廉義公。實賴公一男。）
西宮左大臣（源高明。延喜第一。）
東三條太政大臣（法興院兼家。九條師輔三男。）
粟田右大臣（藤道兼。攝政兼家二男。）
左大臣（藤道長。兼家公四男。）

後拾遺集

堀川太政大臣（兼通。忠義公。九條右大臣二男。）
入道攝政（法興院兼家。）
入道前太政大臣（御堂關白道長。）
法性寺太政大臣（爲光。恒（德歟）光公。九條師輔九男。）
宇治前太政大臣（賴通。法成寺道長男。）
閑院太政大臣（公季。仁義公。師輔公九男。）
帥前內大臣（藤伊周。儀同三司。中關白道隆一男。）
堀川右大臣（藤賴宗。法成寺關白二男。）
土御門右大臣（源師房。具平親王男。）
關白前左大臣（師實。號京極。宇治賴通二男。）
左大臣（源俊房。師房公一男。）
右大臣（源顯房。師房公男。）
內大臣（藤師通。京極關白師實公男。）

金葉集

六條右大臣（源顯房公。師房公男。）
太政大臣（源雅實公。顯房公一男。）
攝政左大臣（藤忠通。法性寺。知足院忠實公男。）
內大臣（源有仁。花園。輔仁親王一男。）

詞花集

六條前太政大臣（藤師實公。宇治關白一男。）
贈左大臣（藤長實公。修理大夫顯季男。）
花園左大臣（源有仁公。）
太政大臣（藤實行公。春宮大夫公實男。）
關白前太政大臣（法性寺忠通公。）
內大臣（實能公。公實卿二男。）
右大臣（源雅定公。久我雅實一男。）

千載集

法成寺入道前太政大臣（道長公。）
法性寺入道前太政大臣（忠通公。）
後二條關白內大臣（師通公。京極師實男。）
大宮右大臣（俊家。號小野宮。堀川賴宗男。）
堀川左大臣（俊房公。）
久我太政大臣（雅實公。顯房公男。）
八條前太政大臣（實行公。公實卿男。）
中院右大臣（雅定公。雅實公男。）
德大寺左大臣（實能公。公實卿二男。）

大宮前太政大臣（伊通公。[illegible]宗通公男。）
後三條内大臣（公教公。實行公男。）
大炊御門右大臣（公能公。實能公男。）
久我内大臣（源雅通公。雅實公男。）
入道前關白太政大臣（基房公。法性寺忠通二男。）
入道前太政大臣（師長公。宇治惡左府男。）
攝政前右大臣（兼實公。法性寺殿三男。）
左大臣（經宗公。贈[illegible]經實公男。）
右大臣（[illegible]實[illegible]公。公[illegible]公男。）
内大臣（藤良通公。九[illegible]兼實公一男。）

新古今集

貞信公（忠平。）
清慎公（實頼公。）
謙德公（伊尹公。）
忠義公（兼通公。）
廉義公（頼忠公。）
東三條入道攝政（兼家公。）
法成寺入道攝政太政大臣（道長公。）
京極前關白太政大臣（師實公。）
宇治前關白太政大臣（頼通公。）
二條前關白内大臣（師通公。）

（[illegible]千載稱後二條。此集無後字。與大二條可混乎。）
知足院入道前關白（忠實公。後二條師通一男。）
一條右大臣（藤恒佐。土御門左府良世公七男。）
法性寺入道前關白太政大臣（忠通公。）（此集各加[illegible]字。）
一條左大臣（源雅信公。敦美親王一男。）
九條入道右大臣（師輔公。）（此集加入道字。）
土御門内大臣（源雅通公[illegible]。）
後德大寺左大臣（實定公。公能公男。）
攝政太政大臣（藤良經公。兼實公二男。）
入道前關白太政大臣（兼實公。）
入道左大臣（藤實房公。公教公男。）
前太政大臣（頼實公。經宗公男。）

新勅撰集

富家入道前關白太政大臣（忠實公）（新古今ニ知足院。）
後法性寺入道前關白太政大臣（兼實公。）
後京極攝政前太政大臣（良經公。）
井手左大臣（橘諸兄公）
西三條右大臣（源光公。仁明帝子。）
九條右大臣（師輔公。）
九條太政大臣（信長公。大二條關白一男。）
大炊御門左大臣（經宗公。亞相經實四男。）

三條入道左大臣（實房公。公教公男。）
六條入道前太政大臣（賴實公。經宗公[illegible]。）
大宮入道內大臣（實宗公。大納言公通卿男。）
鎌倉右大臣（源實朝公。右大將賴朝男。）
前關白（藤道家公。光明峯寺後京極殿一男。）
關白左大臣（藤教實公。九條殿。光明峯寺道家公一男。）
前內大臣（源通光公。通親公男。）
入道前太政大臣（藤公經公。西園寺實宗公一男。）
前左大臣（藤良平公。兼實公三男。）
內大臣（藤實氏公。常盤井公經公一男。）
小野宮右大臣（實資公。右衞門督齊敏三男。）

續後撰集

洞院攝政前左大臣（教實公。光明峯寺殿一男。）
三條內大臣（藤公教公。又十訓抄三條。此集無後字。）
後久我太政大臣（通光公。通親公男。）
西園寺入道前太政大臣（公經公。）
醍醐入道前太政大臣（良平公。兼實公三男。）
後土御門內大臣（源定通公。通親公四男。）
入道前攝政左大臣（道家公。後京極殿男。）
攝政前太政大臣（兼經公。號岡屋。猪熊家實三男。）

前關白左大臣（良實公。道家公二男。）
前左大臣（實經公。道家公三男。）
前右大臣（[illegible]公。[illegible]公二男。）
前內大臣（基家公。後京極殿三男。）
前內大臣（藤家良公。理相忠良公二男。）
右大臣（藤[illegible]公。[illegible]公一男。）
內大臣（藤[illegible]公。[illegible]實一男。）

續古今集

粟田關白贈太政大臣（藤道兼公。[illegible]粟田左大臣ト云。）
光明峯寺入道前攝政左大臣（道家公。）
岡屋入道前攝政太政大臣（兼經公。[illegible]男。）
大織冠（內大臣[illegible]。天智帝八年十月五日改姓。）
佐保左大臣（長屋王。天智孫高市王男。）
北[illegible]贈太政大臣（房前公。淡海公第二男。）
儀同三司（[illegible]公。[illegible]二男。）
中御門右大臣（藤宗忠公。[illegible]宗俊[illegible]男。）
贈太政大臣（藤經實公。大炊御門。京極關白師實公三男。）
花山院前右大臣（[illegible]公。[illegible]大臣兼雅男。）
後花山院入道太政大臣

入道右大臣（花山定雅公。忠經公男。）
前内大臣（鶴殿基家公。）
入道内大臣（中院通成公。大納言通方卿男。）
攝政（鷹司兼平公。）
前内大臣（藤公親公。實親公男。）
内大臣（近衞家基公。基平公一男。）
左大臣（二條師忠公。良實公三男。）
右大臣（九條忠教公。一音院忠家公一男。）

新後撰集

後一條入道前關白左大臣（實經公。）
稱念院入道前關白左大臣（兼平公。）
後光明峯寺攝政左大臣（家經公。）
前關白太政大臣（基忠公。兼平公男。）
入道前關白左大臣（二條師忠公。）
中院入道左大臣（雅定公。）
後九條内大臣（基家公。）
花山院入道左大臣（定雅公。）
花山院内大臣（師繼公。）
土御門入道内大臣（中院通成公。）
入道前太政大臣（西園寺實兼公。公相公一男。）
前太政大臣（山本公守公。實雄公三男。）
太政大臣（德大寺公孝公。相國實基公男。）
左大臣（二條師教公。師忠公男。）
右大臣（鷹司冬平公。基忠公男。）
前内大臣（藤實重公。公親公男。）
内大臣（一條内實公。家經公男。）

玉葉集

野宮左大臣（藤公繼公。西園寺實定公男。）
衣笠前内大臣（藤家長公。亞相忠良二男。）
九條左大臣（道良公。普光園殿男。）
前關白左大臣（二條良實公。）
關白前左大臣（一條實經公。光明峯寺三男。）
入道太政大臣（常磐井實氏公。公經公一男。）
前太政大臣（藤公相公。實氏公二男。）
前左大臣（山階實雄公。公經公三男。）
左大臣（藤基平。岡屋兼經公一男。）
入道前右大臣（花山定雅公。右大臣忠經公男。）
前右大臣（忠家公。洞院攝政男。）
前内大臣（鶴殿基家公。後京極殿三男。）
前内大臣（藤公親公。三條右大臣男。）
内大臣（大炊御門冬忠公。内大臣家嗣公一男。）
前右大臣（京極公基公。實氏公一男。）

續拾遺集

普光園入道前關白左大臣（二條良實公。）
九條前攝政右大臣（二條公。洞院攝政一男。）
前關白左大臣（一條實經公。）
近衞關白左大臣（基平公。岡屋殿一男。）
前關白右大臣（鷹司基忠公。稱念院兼平公男。）
前攝政左大臣（一條家經公。實經公一男。）
德大寺左大臣（實能公。左衞門督公實五男。）
醍醐入道前太政大臣（良平公。九條兼實四男。）
常磐井入道前太政大臣（實氏公。）
冷泉太政大臣（西園寺公相公。）
山階入道左大臣（實雄公。）
萬里小路右大臣（公基公。實氏公一男。）
前內大臣（堀川師繼公。花山忠經公二男。）
大炊御門內大臣（家經公。右大臣師經二男。）
二條關白太政大臣（教通公。）
深心院關白左大臣（近衞基平公。）
近衞關白前右大臣（家基公。）
歡喜園前攝政左大臣（鷹兼忠公。兼平公二男。）
前關白太政大臣（鷹司基忠公。）
前攝政左大臣（二條師教公。忠教公一男。）
關白前太政大臣（鷹司冬平公。）
大宮前太政大臣（藤伊通公。亞相宗通公。）
中院入道前內大臣（雅通公。）
大宮入道內大臣（西園寺實宗公。亞相公通男。）
花山院前內大臣（師經公。）
入道前太政大臣（實兼公。）
入道前太政大臣（公守公。）
入道左大臣（公衡公。兼實公男。）
前內大臣（三條實重公。公親公男。）
前內大臣（源通雅公。）
（私ニ云。源氏無通雅。是乃中院通雄也。）
左大臣（近衞家平公。家基公男。）
右大臣（二條道平公。兼基公男。）
一條內大臣（內實公。）
內大臣（近衞經平公。家基公二男。）

續千載集

近衞前關白左大臣（基平公。）
圓光院前關白太政大臣（鷹基忠公。）
後光明峯寺（家經公。）
後近衞關白前左大臣（家基公。）
前攝政左大臣（九條師教公。）

前關白左大臣（近衞家平公。）
前關白太政大臣（鷹司冬平公。）
關白前左大臣（二條道平公。）
關白內大臣（一條內經公。內實公一男。）
井手左大臣（橘諸兄公。）
後久我內大臣（通基公。）
三條入道右大臣（實親公。[illegible]寺公房公一男。）
山本入道前太政大臣（公守公。）
後德大寺入道前太政大臣（公孝公。實基二男。）
六條內大臣（源有房。右少將有通子。）
入道前太政大臣（實兼公。）
太政大臣（實重公。）
前內大臣（源通雄。中院通基公男。）
左大臣（後山本實泰公。公守公男。）
前右大臣（公顯公。實兼公次男。）
右大臣（花山家定公。右大將家教男。）
前內大臣（中院通重公。亞相通賴男。）
內大臣（花山師信公。師繼公男。）

續後拾遺集

關白太政大臣（冬平公。）
芬陀利花院關白內大臣（一條內經公。）
前關白左大臣（道平公。）
前關白右大臣（九條房實公。己心院殿男。）
中院入道右大臣（雅定公。）
後德大寺入道前太政大臣（實基公。）
後西園寺入道前太政大臣（實兼公。）
後花山院內大臣（師信公。）
入道前太政大臣（實重公。）
前太政大臣（通雄公。）
前左大臣（實泰公。）
入道前右大臣（花山家定公。）
左大臣（鷹司冬平公。[illegible]公男。）
右大臣（[illegible]公。[illegible]男。）
內大臣（西園寺[illegible]公。[illegible]公男。）

風雅集

深心院關白前左大臣（基平公。[illegible]山莊近衞前關白。）
淨明寺關白前右大臣（[illegible]公。[illegible]近衞關白。）
後稱念院前關白太政大臣（冬平公。）
後光明照院前關白左大臣（道平公。）
前關白左大臣（基嗣公。後淨明寺經平公男。）
前關白右大臣（鷹司師平公。冬教公男。）
入道前關白左大臣（九條道教公。己心院殿男。）

前關白左大臣（一條經通公。內經公男。）
關白右大臣（二條良基公。道平公男。）
中院入道內大臣（源通冬。亞相通忠男。）
三條入道前太政大臣（實重公。）
竹林院入道前左大臣（公衡公。）
中院前太政大臣（通雄公。）
後淨明寺左大臣（近衛經平公。家基公男。）
今出川前右大臣（公顯公。實兼公男。）
後花山院前內大臣（師信公。）
今出川入道前左大臣（兼季公。實兼公三男。）
後山本前左大臣（實泰公。）
妙法三寶院入道前內大臣（源通顯公。中院通重公男。）
棲心院內大臣（內實公。玉葉已來一條內大臣。）
前太政大臣（久我長通公。中院相國通雄男。）
前左大臣（洞院公賢公。後山本實泰男。）
前內大臣（三條實忠公。內大臣公茂公男。）
前內大臣（大炊御門冬信公。內府冬氏公二男。）
西園寺前內大臣女（藤實衡公女。）
光西寺前內大臣女（藤冬氏公女。）

大臣同名考

後拾遺 家經（入玉葉）　後光明峯寺攝政
同 經實　同 六條太政大臣
同 忠家　一音院關白
同 良基　後普光園院太政大臣
同 基房　菩提院入道關白
金葉 兼經　岡屋關白
金葉 兼房（入玉葉）　高野大政大臣
後拾遺 公經　西園寺入道太政大臣
同 雅通　久我內大臣
金葉 忠教　報恩院關白
公基　萬里小路右大臣
師信　後花山院內大臣
詞花 實重　三條入道太政大臣
金葉 道經（入新拾遺）　知足院右大臣
千載 有房　六條內大臣
同 家實攝政　猪隈攝政
同 公衡　竹林院入道左大臣
[illegible]　花山院入道右大臣
[illegible]　德大寺太政大臣
[illegible] 經忠　堀川關白右大臣
千載 實家　一條太政大臣
千載 師教　己心院攝政

新古今 家基（新古今業覺法師）　淨妙寺關白

同 忠家（大納言。）　吉田內大臣

新古今 具親　入道內大臣（堀川。）

千載 基忠（右衛門督。）　圓光院入道關白

後拾遺 師經（參議。）　醍醐右大臣

同 良經　後京極攝政

千載 經平　淨妙寺左大臣

金葉 經通（中納言懷平子。）　前關白（二條。）

詞花 公重（通季子。）　前內大臣（竹林院。）

勅撰作者考

同姓同名諱

後拾遺 藤義孝（謙德公次男。）　同 藤義孝

後拾遺 藤爲世（忠輔子。）　新千載 藤爲世（正二位大納言爲氏子）

後拾遺 源國光（頼國男。）　千載 源國光（大納言師頼男。）

千載 藤重綱（重基男。）　續千載 藤重綱

同 藤隆親　新勅撰 藤權中納言隆親

同 藤行家（行岡男。）　同 藤行家（知家男。）

後拾遺 藤爲家　新勅撰 藤右衛門督爲家

金葉 藤爲忠　同 藤爲忠

千載 藤經平（通俊男。）　續後撰 藤經平（衣笠內府男。）

詞花 藤忠兼（續後撰從三位忠兼）　玉葉 藤忠兼

同 藤爲實　新後撰 藤爲實

新拾遺 藤隆資　續拾遺 藤參議隆資

新續古今 藤賴氏　玉葉 藤賴氏

金葉 源顯房（遠江守從五上。六條顯房曾孫。仲房子。）　續千載 源權中納言顯房（北畠一品亞相師重男。）

玉 藤行房　續千 藤行房

千 藤定成　玉 藤定成

新古 藤忠定　續千 藤忠定

續拾 藤爲成　續千 藤爲成

新拾 藤中納言公宗（山階左大臣實雄男。）　風 藤大納言公宗（號北山西園寺。內大臣實衡男。）

金 藤實綱（日野三位資業次男。）　千 藤中納言實綱（三條內大臣公教一男。）

千 藤定長（權右中辨光房四男。）　藤定長（法名寂蓮。俊成子。）

後撰 源仲正（右大臣能有孫。大藏大輔當平子。）　源仲正（兵庫頭。號馬場。頼國孫。頼綱子。頼政父。）

異姓同名

金 源顯仲朝臣（從三位神祇伯右大臣顯房三男。）　金 藤顯仲

後拾 大江爲基（攝津守。參議齊光男。）　風 藤爲基朝臣

後拾 源經任　續拾 權大納言藤經任

後拾 橘爲仲
後拾 藤爲長（種王次男。）
後拾 惟宗爲經
後拾 源親範
新後撰 藤親範
後拾 高橋良成
新勅 祝部忠成
詞 藤宗經朝臣
同 橘廣房
後拾 源忠季（宮内大輔從三位顯仲子。）
藤忠房
藤輔仁（玄上男。）
拾遺 源經房（中納言。大納言俊賢子。）
後撰 藤成國
後拾 源師賢
古今 源公忠（民部卿。光孝帝孫。國紀子。）
藤國茂本ノ

王 藤爲仲
續後撰 大藏卿菅爲長
太宰權帥藤爲經
千 參議平親範（贈正一位左大臣。從四位範家子。）
同 高階良成
續千 大江忠成朝臣（刑部少輔。大膳大夫廣元子。）
同 源權中納言宗經
同 大江廣房（刑部少輔。海東。因幡守廣茂子。）
同 左中將藤忠季
續古 源權中納言忠房
千 輔仁親王
千 中納言藤經房
同 民部成國
續後拾 中宮大夫藤師賢
續後撰 三條公忠
藤仲文

詞花 橘俊成
金 源爲成
源俊實（正二位大納言。隆國孫。隆俊子。）
後拾 坂上定成
續拾 平行氏
後拾 橘季通
金 平基綱（伊勢守。安藝守重義孫。）
新勅 藤行盛（教成子。）
新後撰 源俊定（具定男。）
後拾 源師光（賴國男。）
續拾 藤師光
後拾 中原賴成
金 從三位藤賴氏
千 大中臣爲定
王 源定宗（式部少輔。大納言顯雅孫。顯宗子。）
新後 大江宗秀（掃部頭。永井備前守

千 皇太后宮大夫藤俊成
續千 藤爲成（續拾ニ藤爲成。）
千 權中納言藤俊實
千 藤定成
新後撰 祝部行氏
詞 藤季通
新勅 藤基綱
王 平行盛
新後撰 前中納言藤俊定
金或千イ 源師光（右京大夫。左大臣俊房孫。亞相師賴子。）
續拾 中原師光（大外記師綱孫。師季子。）
後拾 藤賴成
續拾 源賴氏
王 藤爲定
王 藤定宗
新後 藤宗秀

…時元子。)	
前中納言[illegible](參議有親孫。大納言時繼子。)	大[illegible]([illegible]紹元子。)
續拾 藤長綱	新千 前[illegible]長綱(參議爲守孫。治部[illegible]子。)

僧同名

千 尊圓法師	續千 尊圓法親王
千 道[illegible]法親王	[illegible]僧正道性

女房同名

新拾 下野(下野守源致隆女。)	下野([illegible]官女。)
續拾 少將内侍	少將内侍([illegible]守[illegible]房女。母[illegible]親女。)
但馬	玉 但馬([illegible]法師妹。)
中納言(光俊女。)	中納言([illegible]門院女房。)
新千 中務宮旨	新千 中務宮旨
新千 [illegible]道朝臣女	[illegible]道朝臣女(第二女。)
新千 大輔(但馬守源[illegible]女。)	大輔
玉 小辨	後撰 小辨

同人別名

古今 僧正遍昭	古今 良岑宗貞
拾遺 藤高光	拾遺 如覺法師
齋宮女御	[illegible]女王
[illegible]大納言道綱母(拾遺曰。二類本之[illegible]本只云道綱母。)	[illegible]大將道綱母
小大君	三條院女藏人左近
[illegible]女	[illegible]
前齋院六條	[illegible]所
詞 [illegible]	[illegible]大夫[illegible]
千 [illegible]親王	[illegible]親王
円位法師	新千 西行法師
[illegible]門院[illegible]	待賢門院[illegible]
[illegible]後	新古 宜秋門院丹後
高内侍	新古 儀同三司母
新拾 侍從[illegible]女	侍從具定母
前大僧正慈圓	前大僧正慈鎮
藤原秀能	新勅 如願法師
[illegible]門院小宰相	土御門院小宰相
中宮少將	[illegible]門院少將
新勅 中宮但馬	[illegible]門院但馬
新拾 下野	後鳥羽院下野
典侍親子	千 [illegible]典侍
内大臣家小大進	花園左大臣家小大進

新古 宮内卿
少納言[illegible]
安嘉門院右衛門佐
續古 中宮權大納言
續古 大宮院權大納言
新後 院大納言
同 遊義門院權大納言
玉千 贈從三位爲子
新後 藤爲景朝臣
尚侍藤[illegible]子朝臣
春宮少將
永福門院右京大夫
新後 昭訓門院大納言
中[illegible]宗母
中宮大夫公宗母
前中納言俊光女
玉 別當
尚侍家中納言
[illegible]
少將内侍
[illegible]

[illegible]宮内卿
[illegible]子朝臣
安嘉門院四條
今出川院近衛
[illegible]女
從二位[illegible]子
玉 [illegible]大納言典侍
玉 [illegible]
[illegible]門院
[illegible]門院少將
[illegible]
[illegible]大納言公宗母（私云、是別人
歟、[illegible]女。）
[illegible]見院中納言典侍
[illegible]典侍
中納言
[illegible]
[illegible]内侍
[illegible]

新後 從三位[illegible]宣子
新千 少將内侍
玉 章義門院小兵衛督
新古 信濃
新千 [illegible]爲道朝臣女
拾 中宮内侍
拾 [illegible]野内侍
玉 大貳三位
金 待賢門院兵衛
行[illegible]法師孫
[illegible]法師
[illegible]
[illegible]
[illegible]朝臣
[illegible]
[illegible]行房
[illegible]
[illegible]
[illegible]

續千 從三位[illegible]宣子
[illegible]院少將内侍
永福門院右衛門督
新後 下野
續千 大納言顯實母
拾 馬内侍
拾 少式命婦（京極息宅拾遺、注
進。）
金 [illegible]子
千 上西門院兵衛
新千 昭訓門院小督
金 信綱（道[illegible]）
如寂法師
玉 平齊時
大納言公[illegible]
素[illegible]法師
道全法師
如淨法師
[illegible]延法師
[illegible]文

右書應安四年尊賢法師所編集也。余友人家藏一本。乃是貞享中如是菴西順法師自書本也。其書轉寫數經。而魯魚錯簡頗不少矣。余暇日以他本訂校之。再寫之。題曰撰集管見抄。

于時享保十一丙午年秋仲　浪花散人懲齋橋本嘉謹

和歌部八十九

後撰集正義

卷第一

春上

ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりと驚ろかれぬる 藤原敏行朝臣

定家卿師説云。ふる雪のみのしろころもとつゝけたろ。雪のふれは簑をきるへき代に。しろきうちきをきて。春來にけりとおとろけるとよめる歟。万葉集にはみのしろころもといふ事不見哉。此集にみのしろころもぬはすともきよとよめる。中原宗興此歌の後によめりと見ゆ。また古歌とて。

せなかためみのしろ衣うつ時は空行鴈の音もまかひけり

といへる歌のさまもふるく不見。遠人のためにみのしろ衣とよめるにや。蘇我耿恭なとをおもへるうたなれは。上古の歌とは見えす。古説云。簑代衣といへる。清輔卿説同之。宗輿歌は身代衣と詠之。かたみと聞えたり。又古歌云。

山里は草葉の露もしけからんみのしろ衣ぬはすともきよ

是みのしろ衣と覺ゆ。

けふよりは荻のやけ原かき分て若菜つみにと誰をさそはん 兼盛王

此歌大和物語云。正月一日はかりに參ろに。うたよめとありけれは。此うたをよめるといへり。

若菜事見古今注。仍重不能記之。

君のみや野へに小松をひきにゆく我もかたみにつまん若菜を 讀人不知

此かたみは非信之儀也。たかひにといふこゝろ也。籠なかたみといふにそへたるなろへし。

水の面にあやふきみたる春風や池の氷をけふはとくらむ 紀友則

水の綾は水の波の慈に似たる貌也。波文也。文をはあやとよ

詞 あはゑ。
ことにつきて
つみせられたるにはあらす。おほやけの御使に付也。とには
公の字之。夙夜在公なといへり。
月桂事
見古今注。
しら雪のやゝむ詞のみなかるゝ心事は消もきえぬ之けり 伊勢
消のしら玉、古今の注にみえたり。事はなへたる事にはあらす
かなり、華麗心也
きてみへき人もあらしな我宿の梅の初花折つくしてん 讀人不知
師説云。きて見へきとは。來て可見人もあらしと也。
梅花に衣をやとすといふ事
見古今注。
我宿の梅のはつ花ひるは雪よるは月ともみえまかふかな 同
梅花のしろき親。晝は雪とみえ、夜は月とみえまかふなり。
心もておるかはあやな梅の花香をとめてたにとふ人のなき 同
心もてとは。心からといふ詞。おるかはとは、といふ義なり。
あやなとは無益と云之。此おるに情の心にそへたりと見ゆ。
梅花銘事
見古今注。
君かため山田の澤にゑくつむとぬれにし袖は今もかはかす 同

ゑくとは芹也。古説云。風土記云。せりたゑくといへり。萬葉
に。
足引の山澤ゑくを取てこんひたにもあはんおやはいふとも
古説云 ゑくとは惣別若菜の名なり。會供と書之。正月七日
白馬の節會に始て若菜を奏進すれは、會供と云。
梅の花ちるてふなへに春雨のふりてつゝなくうくひすの聲 同
師説云。くれなゐのふりいてつゝと。おほくよめる歌をは。
くれなゐに布を染て ふりいて といふ布をよむと釋するも
のあれと。何もものゝこゑのしらへあけてきこゆるを。ふり
いてゝといひならへるとそきこゆる。うちいつる聲は。すゝ
むしならねと。ふり出るやうにきこゆるなり。なへとはちな
みにといふこゝろ之。因字之。古今にいなおほせとりのなく
なへにと云。同心也。
いもか家のはひいりにたてる青柳にけふや鳴らん鶯のこゑ 躬恒
師説云。はひいりにたてるとは。門の入口をよめるときこ
ゆ。
くれなゐに色をはかへてむめの花かそと〳〵に匂はさりける 同
紅梅白梅色異に替へたれとも。其香此句道に別々ににほは
すといへり。
ふる雪はかつもけなゝん梅の花ちるにまとはす折てかさゝん 貫之
雪は終に消なんものゆへに。梅花のちらぬもちらす心ちす。

今さらは折てかさゝんと云之。まとはすとは迷心之。たとへは雪と花とのちるとふるとに。おもひわかれす心をまよはす也。

巻第二

春中

竹ちかく夜とこねはせし鶯のなくこゑきけはあさゐせられす　藤原伊衡

師説云。よとこねはよるふすとことあらはにきこえたり。古き歌にはたゝありによめれは。かやうの事多かり。

山もりはいはゝいはなん高砂の尾上の櫻おりてかさゝん　素性法師

師説云。高砂は播磨國名所なれと。惣しての山をはたかさこと云一説なり。このうた花山にてよめると云。おのへとは尾上と書之。

古説に云。高砂とは只山惣名之。名所にもあり。此歌にては惣名の山の高砂とおほゆ。塵積成山と云本文より事おこれり。

けふ櫻しつくに我身いさぬれんかこめにさそふ風のこぬまに　河原左大臣

かこめにとは。香共にさそふといふこゝろなり。又は香ならとも云同心也。

朱雀院と申は

有三條朱雀。仍號朱雀院なり。宇多法皇御在所也といふ。後院とはこれなり。

歎きさへ春をしるこそわひしけれもゆとは人にみえぬ物から　讀人不知

草木のもえ出るに。おもひのもゆるをそへたり。

春の池のたまもに遊ふ鳰とりのあしのいとなき戀もする哉　宮道高風

師説云。玉藻にあそふにほとりのいとまなきと云心なり。

古説。玉藻は玉はほむる詞也。又小石のもにあひましりたる貌也。

山風の花のかゝとふふもとには春の霞そほたし成ける　藤原興風

花香勾引(カトフ)也。花の香ぬすめなといへる。おなしこゝろ也。

よふこ鳥の事

見古今注。

巻第三

春下

うちはへて春はさはかりのとけきを花の心のなにいそくらん　清原深養父

打はへてとは打堪へてなり。またはうち任てと云こゝろ也。花のこゝろいそくとは。うつりちらんとするかたちの穏なきよしをいへり。

春の日のかけろふ池のかゝみには柳のまゆそ先はみえける　讀人不知

柳眉。ふるき詩歌につくれり。楊貴妃か時とさらにいへり。

春日さく藤のうら葉のうらとけて君し思はゝ我も頼まん　同

うらとけてとは。内心へたてなく。うちとけてといふこゝろなり。此歌藤氏の人をいはへるにや。はるひさくは春日山に

さくといへり。春日山神は藤氏の氏神也。

あたらよの月と花とをおなしくは哀しれらん人にみせはや　源信明

あたらよとは。萬葉には惜世とかけり。たゝし是は春宵世夜也。只風情なくあたらなり。かならす春月に限るへしといふ人あり。僻事之。依此歌詳しかおもへる人あり。甚不可然乎。源氏物語に。あかしの入道かなかへより消息していへる詞に。入道は人しれすこゝろひとつにたちゐかゝやくはかりしつらひて。十二三日の月のさやかにさし出るに。たゝあたらよのときこえたり。只秋の事なり。古説云。このあたらよは。たとへはものゝいたつらにするを。あたらものなとおしみいふ心とおなし。

あはれしれらんとは。哀知らんには非す。是好友なれかへるこゝろ也。

都人きてもおらなんかはつなくあかたの井との山吹のはな　橘公平女

あかたの事古今の注にみえたり。縣の字をあかたとよむ。おほきなるさと之。井。さらは水くむ井にはあらす。居所なり。しかるに居を井にそへたる也。又は名所とみえたり。

或書云。井都に入たり。此歌もし先祖の芳躅をもとめて。山城井手の里にすみけるときよめる歟。しかれは井との義正説たるへし。彼井出里は山吹のめてたきよしふるくいひつたへたり。

我宿のかけとも頼む藤の花立よりくとも浪におらるな　読人不知

藤なみの事。古今の注にみえたり。波を等閑とよせたるなり

折つれはたふさにけかるたてなから三世の佛に花たてまつる　僧正遍昭

たふさとは手房とかけり。只手を云といへり。みよの佛とは三世の諸佛也。

限なき名におふ藤の花なれはそこゐもしらぬ色のふかさを　三條右大臣

亭主兼輔卿をいはるよめる也。三條右大臣定方とあるしとはいとこなり。そこゐもしらぬとは。ふかき水底を云也。

あまりさへ有て行へき年たにも春にかならすあふよしも哉　貫之

あまりさへとは剩也。又餘年ともおほゆ。この春は有道の春にあはゝやとねかへり。

君こすてとしはくれにき立かへり春さへけふに成にける哉　藤原雅正

若こてといふへきを。字いたらねは。すの一字を入たる也。

またもこむ時そと思へと頼まれぬ我身にしあれはおしき春哉　貫之

貫之此歌あしくよみて。其としの秋身まかりにけりといへり。つらゆきほとの上古の先賢。なを身をうしなふほとの歌のあやまりなさらす。何況哉末代之好士。よく可思歟。

巻第四

夏

時わかすふれる雪かとみる迄にかきねもたはにさける卯花　読人不知

顕註云。墻根もたはにとは。古今集にえたるもたはゝにとよめ

る。おなし心なり。枝のたはみなびける貌也。

時わかす月か雪かとみる迄にかきねのまにまさけるうの花 同

まにまとはまに〳〵おなし心也。垣根の貌なり。

おひみしもまたみぬ戀も郭公月になく夜そまたなかりける 同

明月の皓々たる前にほとゝきすの數聲。ありかたき事なり。そのこゝろをめつらしく見し夜のおもかけによせてよめり。

こかくれて五月まつとも郭公はねならはしに枝うつりせよ 伊勢

よろつ鳥のすたちて。今はとひぬへきおりになりて。父母かはくゝみたてゝ。巣のはたになきて。つはさをのへてとふへきやうををしふるなり。これを鳥のはねならはすと云。

行かへりやそうち人の玉葛かけてそたのむあふひてふ名を 讀人不知

師説云。やそうち人とは八十氏人とかけり。世にあるおほくの人といふこゝろなり。ふるくはかくよめるを。これに宇治川をやそうち川とよむにつきて。近代宇治の里人をやそうち人とよめる歌おほくあり。

葵を逢日とそへたり。四月賀茂祭に。くるまにも人の袖にも付也。もろかつらとも。かつらともよめり。

足引の山下水は行かよひ琴のねにさへなかるへらなり 貫之

琴に灌水流泉の曲といふ事あり。これを山下水といへり。なかるゝを流とそへたり。[illegible]流るともいへる也。

夏の夜はあふ名のみして敷妙のちりはらふまに明そしにける [illegible]

しきたへといふ事。さま〳〵の説あり。この歌のしきたへは夜の床とおほえたり。

萬葉集云。

敷たへの衣手かれて我まつとあらんこ共はおもかけにみゆ

或云。しきたへとはうちまかせては枕をよめり。されとも床とも莚ともよめれは。たゝぬる所の物をはしきたへとよむにや。此歌は衣とつゝけたる心えれ。それもぬるものなれはよめるか。さよ衣をいへるなるへし。また云。

おきていなはいも戀んかも敷妙の黒髪敷て長きこのよを

是も夜の床のうへのすかたとおほゆ。

とゝめえぬ命にあれは敷妙の家より出て雲かくれにき

是は家をよめりとみえたり。又古今の注にみえたり。

常夏の花をたにみはことなしにすくす月日もみしかゝりけり [illegible]

何事もなす事なくて。いたつらにすくるをことなしにといへり。しかるをいたつらなりし時は。永しとおもひし月日も。とこなつのうつくしき花をみれは。一日もみしかくおほゆると云也。

[illegible]ともかくれ所は夏[illegible]よりまかれと思ひなりけり

大和物語云。昔[illegible]大臣女。宇多[illegible]のみこに。[illegible]

[illegible]のみこすみ侍けるに。そこなるうなひこのおとこ。宮をい

となしみけるに。此うなびのよめるといへり。
又云。此わらはにほたるをとりてといへりければ。かさみの
袖に螢をひろひてたてまつるとて。よみかける哥なるへし。
かつらのみこに[illegible]おもひかけて[illegible]。
[illegible]
[illegible]
もひなよめり。夏むしのいたつらに身を燒すてんよりも。我
[illegible]物[illegible]もひ[illegible]
へといふなるへし。
こまかく[illegible]
[illegible]
[illegible]
夏夜[illegible]
かも川の水底すみて照月を行てみんとや夏はらへする
みな月のつごもりの夜。月のてるといはん事いかゝ。此歌に
よめるは。たゝ繊月清光河にうかへる紀をよめるにやあ
らん。
七夕は天のかはらをなゝかへり後のみそかをみそきにはせよ　同
潤七月の七夕の歌とおほゆ。後七月七日のみそきな。まとの
みそきにはせよといへる也。此みそきはたかひにあひあは
んといそく心也。なゝかへりとは。なをいくたびもといふ心
也。
[illegible]はらへ[illegible]七夕まつり[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
うちつけに物そかなしき木のはちる秋の始をけふそと思へは　読人不知
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
にかの[illegible]
秋の夜の心もしろく七夕のあへるこよひはあけすともあらん　同
秋の夜の心ありといふ事もしるへく。二星たま／＼あふ今
夜は。あけすしてもあれかしといへるなり。
天河遠きわたりにあらね共君かふなてはとしにこそまて　同
ふなてとは出船直之心也。只船出也〔マヽ〕。歌の道しらさる人。一
向に船直のよしにおもへり。更たえたり。不然。天河には遠
き渡りさらになけれとも。君か舟出を一年久しくまちくら
すそといへるか。此君はよ夕なるへし。
けふより[illegible]河原はあさなゝんそこるともなくたゝ渡り南　紀友則

師説云。家本にはそこゐともなくといふ説を用侍り。或本にはそよみともなくたゝわたりなんとあり。それは水ともなくわたらんと云心ないふ。但行成大納言の筆にそよみとかゝれたれは。其説につくへし。そよみとはそよ水戸也。そよは詞のやすめなり。水戸は水のふかきおさなり。あせなゝんとはあれなんといふなり。たとへは天河あれて水もなき渡となりなん。さらは河のふかきおもひもなく。水のさはりといふこともなくて。たゝわたりなんといふ也。

秋風のふけはさすかにわひしはた世のことはりと思ふ物から　読人不知

はたとは将字也。文章に将又なとかけり。且又〳〵といふこゝろなるへし。又はまさにといふこゝろともいへり。但唯又〳〵といふ心なるへし。

夕されはおきふく風の音まさる今はたいかにね覚せられん

後中書王此詞論をきゝたまひて。しはしうち案して。只又のこゝろなるへしとそありける。

秋かせの草葉そよきて吹なへにほのかにしつる日くらしの聲　同

そよきてとは草葉そよめく貌也。なへにとは例の詞なり。

秋くれは野もせに虫の織（みたるイ）つめる聲のあやをは誰かきるらん　藤原元善

師説云。野もせとは庭もせ水もせ國もせなといへり。もせは面字也。野面庭面なと也。野面にみちてあまねきよしの詞なり。こゝは機織聲の聞ゆれは。其聲の綾ふは誰かきるへきとよめる也。あやとは綾也。あやしといふ心にはあらす。

巻第六

秋中

おるからに我名はたちぬ女郎花いさ同しくははな〳〵にみん　藤原頼風

古説云。をみなへしを女によそふれは。花をおらは名はたちぬへし。おなしくはさらは我花人のはなとさためて。各かはな〳〵にみんとよめる也。

秋の野の露にをかるゝ女郎花はらふ人なみぬれつゝやふる　よみ人しらす

をかるゝとは。露におかさるゝと云也。このおかさるゝは。露にとつく（嫁）といふこゝろときこゆ。

をみなへし花の心のあたなれは秋にのみこそあひ（わ歟）にたりけれ　同

花のこゝろのあたなるほとに。思ひさためたるかたもなくて。常に人にあきたる時にあふそといへり。秋を節にそへたり。

宿もせにうへなみつゝそ我はみるまねくお花に人やとまると　伊勢

うへなみつゝとは植並つゝ也。一本にうへならへつゝとあり。いつれもおなしこゝろなり。宿もせは庭前のこゝろなるへし。

しら露のをくにあまたの聲すれは花の色〳〵ありとしらなん

是は連歌にしたりける也。上句は人の中よりして。みすのうちへいひ入たりけれは。下句はすのうちよりつけたるな

り。

秋のゝの草は[illegible]

秋のゝの草は緑にても[illegible]

るよといへり。

白露に風の吹しく秋の[illegible] 文屋朝康

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]人の[illegible]

きに。かなしく秋の露の我袖にわきてたくとあやしめる也。

一本にはわかそてひとつなとかけり。皆あやまれる也。

秋の夜の月の影こそ木の間よりおちは衣と身に移りけれ [illegible]

落葉衣ニあらず。羽衣也。むかし天羽衣を着[illegible]おとした

る事あり。ふるき物語にみえたり。

秋のよの月のうへこく舟なれはかつらの枝にさほやさはらん 小野美材

是は秋の夜池に月のうつりけるうへを。舟のこく事あるた

みてよめる也。されは一本には秋の池の月のうへにこくとあ

り。

空となみ秋やよくらん久かたの月のかつらの色もかはらぬ 紀淑望

よく空の遠けれはにや。秋のいろもおよはすして。月[illegible]かつ

らはいつもおなしひかりなるらめといへる也。

[illegible]

[illegible]

の色も。紅葉の水にうかへるにてありけるといへる也。 讀人不知

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]といへるも。これらの心をいへるにや。

[illegible]

行かへりこゝもかしこも旅なれやくる秋ことにかり〳〵となく

北[illegible]之[illegible]南[illegible]之秋[illegible]出來何方にもとゝまらす。こゝを

もかしこも旅そめにおもひて。假々と鳴かと秀句によ

めるなり。

駒迎

八月十五日にかならす相坂山にて國々より献進する駒を請

取。つかひは殿上人位にて。相坂まて行むかふなり。是を駒

むかへと申。進献國々御牧の中に。相坂山にてむかふる駒

は。

信濃國きりはらのみまき。同國望月のみまき。甲斐黒駒の御牧。

武蔵 たちのゝみまき。 同国 をのゝみまき。 同国 おほさかのみまき。
甲斐 をかさはらのみ牧。 奥州 をふちのまき。

みるとに秋にもなるか立田姫紅葉そむとや山もきるらん 同

朝夕毎に秋ふかくなりゆくさまをよめり。山もきるらんとは。龍田姫のあさからすそめたる紅葉の錦を。山はきるらんとなり。たつたひめの錦は山にきせけるそかしといへり。

はらから

一腹兄弟といふ事なり。只又をとゝあにといふこゝろともいへり。

君と我いもせの山も秋くれは色かはりぬる物にそ有ける 同

いもせ山の事。古今第十五戀歌のおくに注之。夫婦にこそ常はなすらへよめるを。是は兄弟の中によめり。只色かはるといふ事をいはん料なるへし。

あたなりと今は見なくに紅葉はを色のかはれる秋しなけれは 同

年々歳々毎秋同紅色のいろもかはらす。其木ことにもみちしけり。これはあたなる紅葉かとほめたる也。

敷しらす君かよはひをのはへつゝなたゝる宿の露とならん 伊勢

なたゝるは洞たると云人あり。とのほかの僻事也。爲名宿とよめるなり。名たるといへは一字不足也。倩之和語の習。一字いひたす也。たとへは千秋万歳をのへたまへる名たるへき。花の露なるへきそといふなり。菊露延齢子細事見古今注。

紅葉ゝを分つゝ行は錦きて家にかへると人やみるらん 讀人不知

着錦歸故郷といふ事。朱買臣か時よりいへる詞也。朱買臣漢武帝爲師範。至會稽大守。其時帝云。富貴不歸郷。着錦如夜行云々。くはしく見古今秋歌注。

山風のふきのまに〳〵もみちはこのもかのもに散ぬへら之 同

師說云。ふきのまに〳〵とは。唯ふくまゝにといふ。おなしこゝろなり。まに〳〵は隨意と書て。まに〳〵とよむなり。又任心ともかけり。君かまに〳〵は君の御心にまかすとよむなり。このもかのもとは此面彼面なり。よもにちる心也。筑波山にこそよめといふ事あれと。いつくにもあるへきなり。

紅葉はのなかるゝ秋は河ことに錦あらふと人やみるらん 同

錦あらふといふ事。本說あるにや。花陽國志といふ文云。成都西城。故錦官。錦工織。(錦脱歟)濯江中則鮮明。故曰錦里。文選注云。蜀有江。織錦之所。其流紅浪除といへり。是心をよめりときこゆ。

立田河秋は水なくあせなゝんあかぬもみちのなかるれはおし 同

此あせなゝんも。只の川の水もなくあせよと讀たりつる。同心なるへし。

木の葉ちるうらに浪たつ秋なれは紅葉に花も咲まかひけり　兼覧

是は白浪の花をもみちのいろにましへたり。

日くらしの聲もいとなく聞ゆるは秋夕暮になれは也けり　貫之

[illegible]云。いとなくは[illegible]に玉[illegible]にあそふ[illegible]なり。

風の音のかきりと秋やせめくらん吹ちるとにこゑのわひしき　讀人不知

一本にはせめつらんとあり。書あやまれるなり。せめくといふ事本說あり。閲の字をせめくとよめり。毛詩に見えたり。注云。閲は恨也といへり。くはしくは古今第十七敏行歌に。老ぬとてなとかわか身をせめきけんといへる所にみえたり。

秋風につらをはなれぬ雁金に春かはるともかへらさらなん　同

つらは行字也。[illegible]飛連續也。文[illegible]云、幾行南去之雁といへり。春かはるともとは。春になりても不歸と云心也。

花鬘

はなかつらとは舞童とにさす挿頭の花なり。九月九日重陽節會に菊の花をかさす。

吹風にまかする舟は秋のよの月の上よりけふはこくらん

水に月のやとれるうへに。木の葉の風におちて。舟のことく浮ゆくをよめるなるへし。

うち山のもみちを見すは長月の過行日をもしらすそあらまし　[illegible]

ひをとは鯀とかけり。宇治川ならてはなきなり。むかし宣旨にて。此川ならてはあるましきよしありけれは。今の世迄も外の川には此魚なき也。

巻第八

冬

神無月ふりみふらすみ定なき時雨そ冬の始之ける　同

時雨四季にわたりて降物なれとも。此歌よりしてひしと冬に定たる也。

獨ある人のきかくに神無月にはかにもふる初時雨哉

きかくは。只人のきかんにと云心也。

神無月時雨はかりはふらすして雪かてにさへなとかなるらん　同

時雨に雪のましはりふるといへり。いつしか冬の甚といふこゝろ也。

神なつき時雨ふるにもくるゝ日を君まつほとはなかしとそ思

是は貫之むすめを七歳にてよめると申。父貫之内裏よりおそくかへりけるを。待わひてよめるといへり。家集にはちゝまつほとはとあり。さてはあまりおさなけれは。君となをして此集に入たり。母なくなりてのち。貫之ひとりしてはくくみやしなひけれは。父をとさらなつかしくおもひけるといへり。

鶯よなとさはなくそ乳やほしきこなへやほしき母や戀しき

とよみけるも。ことしの春にて有けると申。母には二歳にて

わかれたりけると云。神無月の歌は心詞ともによき歌といへり。

霰ふるはやまの里のわひしきはきてたはやすくとふ人もなき　讀人しらす（そ歌）

師説云。たやすくといふへきを。一字をくはへていへる也。轍也。

白雪のふりはへてこそ問さらめとくる便をすくさゝらなん　同

雪の僻にそへて。人のくると云こゝろをよめり。

涙河身なくはかりの淵はあれと氷とけれは行方もなし　同

泪ふかく滿て。身を濡はかりの淵はあれともと云心也。或人云。此歌よくみるに。心と詞と首尾とゝのほらすやあらん。纍々たる數行の涙のあたゝかにて。淵湛たらんには。さえこほるへしや。なきふるしたる涙を滿置たるやうにおほゆ。ちかき世の人の歌に。

身のうさを思ひしとけは冬の夜もとゝこほらぬは泪之けり

切々たる冬泪。なくそこほらさるへき。

梅か枝にふりをける雪を春近みめのうちつけに花かとそみる　同

めのうちつけにとは。眼前にはなはたしく。やかて雪をうたかふこゝろなく花と見るといへり。

この月のとしのあまりにたらさらは鶯ははや鳴そしなまし　同

此月とはしはすなり。しはすのたとへはつめて三十日にかきらて。十日廿日にてもあらは。今すこし春はいく来て。うくひすもはやく鳴なんものをといへり。

巻第九

戀一

まとろまぬかへにも人をみつる哉まさしからなん春のよの夢

常ハ詞に夢にも壁にもなといふ事なり。又本說あり。

或說云。忉利天に七寶宮殿あり。其壁には人のむかしの有さま。又將來の形貌。しる〳〵なからうつりて見ゆるなり。是壁に人を見といふ事の因緣也。

或云。此說さもとおほゆ。正法念經云。忉利天七寶殿壁。古昔天王形并生惡趣等皆現元。當時帝釋人天各七生之相現元。其後生相不現。得初果故也。

或云。むかし夫婦あり。其夫さきたちて亡。其妻背夫を戀慕しふ事限なし。或夜來てむかしの親にて終夜物語して。明曉に及て別ぬ。夢うつゝわきかねておとろきてみれは。たゝかたはらの壁はかりなり。妻云。昔の人とみたれは。壁にて有けりと云けるなり。それよりして壁に人をみると云り。

秋の田のいねてふ事をかけしかは思ひ出るかうれしけもなし

稻をはやいねと人をいとふ詞にそへたり。いねといふ詞は。ゆけと云詞也。かくいとはれし身なれは。思ひ出るといふも。うれしくもなしといふ也。

思ひ川たえすなかるゝ水のあはのうたかた人にあはて消めや　伊勢

顕昭云。うたかたといふこと葉は。眞には雫なとつかへる詞のやうにおもひよる事かは。さはなくては雫かといふよしの詞なり。それた此歌ひとつを見て。うきたる人といふよしに。うたかた人と六字につゝけてよめりと云註は。ふかく見分て。しりかほはかりにのへやる說也。ひとつにつゝけてはいはす。只四字の詞也　萬葉集第十九

はなれそにたてる室の木うたかたも久しき年を過にけるかも

鶯のきなく山吹うたかたも君かてふれぬ花ならめやも

又源氏物語。

かきたれて長閑き比の春雨に古鄕人をいかに忍ふや

つれ／＼にそへて。うらめしうおもひいてらるゝ事おほう侍るを。いかてかはきこゆへからんと御返し。

詠ける軒の雫に袖ぬれてうたかた人を忍はさらめや

ほとふるほとは。けにつれ／＼もまさり侍けり。あなかしこと。ゐや／＼しくかきなし給へりと書けり。ゐや／＼しくと有詞に。心うきたる人といはんたよりなかるへし。或云。うたかたの詞よく／＼尋みるに。すこしといふこゝろとおほゆ。萬葉十七には宇多我多と書り。注云。すこしもといふ詞也といへり。又同注云。雨泡名也ともしるせり。是もあしからす。雨泡なともたゝ片時の物なれは。すこしきなる心といはんも。たかはすやあらん。萬葉云。

あまさかるひなにある我をうたかたのひも（もイ）ときかけて（さけてイ）おもほゆらめや

これら皆少といふ心とみえたり。

降あめに跡たにみえぬうたかたも消てはかなき世を頼哉

是は雨の泡をよめりと見えたり。此集第十三歌也。

讀人不知

ひとをはまさえけり下紐のとけぬにしるき心と思へは

ひとゝは人言也。何事もむかしより人のいひならはしたる言は。誠にて有けると云也。たとへは人の下ひものとけぬにもみゆるといひをきし人の言は。まことにてありけりと（今イ）。おもひしられたるといへる也。此うたはしたひものとけぬに。いひおとしめられたるけしきのみゆる。うれしさよとよめるにや。

紀めのと

淺してふことをゆゝしみ山の井はほりしにこりに影はみえぬそ

ゆゝしみとは。あなゆゝしやなと云。ゆへあるよしの詞なり。所由と書てゆへあるとよめり。其心なるへし。山の井の淺き事は。むかしよりゆへありといへとも。あまりあさけれははほりしそといふなり。

讀人不知

忘ふとはいふ物からにともすれは忘るゝ草の花にやはあらぬ

あまたの本に此とくかけり。草をしのふわすれとさま／＼に申。いつれも心たかはねとも。家本にまかせて。わすれくさにてこゝろをうへき也。

いかにかく心一つをふたしへにうくもつらくもなしてみす覽　伊勢
ふたしへとは二の樣と云事也。ふた心あるさまをうらみていへる也。

ともすれは玉にくらへしますみ鏡人のたからとみるそかなしき　讀人不知
年來の鏡を人にはなちけるにやあらん。ますかゝみとは十寸鏡と書り。ますみの鏡の事也。眞寸鏡とも又は眞澄鏡ともかけり。まろにして如朔日なる鏡也。鏡を玉に取くらへし事。日本紀にみえたり。

嬉しけに君かたのめし言のはゝかたみにくめる水にそ有ける
うれしく思へと。たのめをきしとのはのはかなき事。たゝ籠にくむ水のをとしといへるなり。

行やらぬ夢路にまとふ袂にはあまつ空なき露やをくらん　そゐきけるイ　同
師說云。夢中の泪なれは。あまつそらなき露やをくらんとよめり。

身ははやくならの都と成にしをこひしきとのまたもふりぬる　同
はやくとは速字也。すみやかにと云心なり。身はすみやかにならの都のとく。むかしかたりになりはてたれとも。こひしきことはいまたふりすといへり。

思ふ人思はぬ人の思ふ人思はさらなん思ひしるへく　同
我おもふ人の我をおもはぬか。又人をこふるなる。その戀らるゝ人つれなくてあれな。我思ひしらぬを思ひもしるへくといへり。

わかれをは悲しきことゝ聞しかとうしろ安くもおもほゆるかな
是はをくれけるもとのつまのおやのもとより。よみておとこのもとへやりけるなり。別れはたかひに命にかへて人のおしみ侍るに。わか別こそ後會はんといふ事もあるましけれは。中〳〵うしろやすくおほゆれと云也。

雲井にて人をこひしと思ふかな我はあしへのたつならなくに　同
此歌たゝ人の詠にあらす。芦邊鶴おほくは雲上にて音をなけは。かくよみける也。

伊勢の海にはへてもあまるたくなはのなかき心は我そ勝れる　同
漁人の網の引繩をたくなはといふなり。さま〳〵に申事あれとも。只網引繩なるへし。あまの燒繩といひ。あまの繩燒なといへるも。網の繩のふるくなりたるを海士人の燒ける也。

巻第十

戀二

侘人のそほつてふなる泪川おり立てこそぬれ渡りけれ　伊勢
そほつとはすこしぬるゝ心也。おり立てとは。ひたすらにおもひしつみたるこゝろなるへし。

音にのみ聞こし三輪の山よりも杉の數をは我そみえにし　讀人不知　ヌイ
あはぬものゆへつれなくなり。たつねてゆき〳〵せし事の。

あまたたひ〳〵なりしとにや。

難波潟かりつむあしのあしつゝのひとへも君を我やへたつる　兼輔朝臣

芦筒とは。蘆の筒の中に。うすやうのとくなるものをいふとそ。

あし引の山ゐはすともふみかよふ跡をもみれは苦しかりけり　大江朝綱

山居といひて。病とそへたり。

けふ過はしなまし物を夢にてもいつこをはかと君はとはまし　中将更衣

何期を遥に君はとはてあるらんといふ也。けふあすにかきりたる身のたのみなきを。いつもはるかにあるへき身とおほしてやとひたまはさるらん。はかなしとうらみ申たるなるへし。

我のみやもえてやみなんよと共に思ひはなれぬふしのねのと　平定文

如富士之根煙。我思馴たりといへり。不離とよむ人あり。歌のこゝろをしらさる人なるへし。

春日野の飛火の野守見しものを無名といはゝつみもこそうれ　読人不知

春日野のとふ火の事。古今若菜の歌の所に注之。歌のこゝろは。なき名そとあらそへる返事に。なき名には非す。まことたとかされていへる歌なり。若菜摘得といひて。罪とそへたるにや。

あふ事は遠山すりのかり衣きてはかひなき音をのみそ鳴　元良のみこ

師説云。きぬなとの摺には。おほく遠山をすれるものなれは。かくよめるにこそ。一本に遠山鳥とあり。音をのみそなくといふにことよれるにや。摺の遠山いはれあるうへに。大納言本に遠山すりとあり。

ふかくのみたのむ心はあしのねの分ても人にあはんとそ思ふ　あつよしのみこ

師説云。蘆根はみたれたるものなれは。分てもとおもふ心のあなかちなれは。分たつれてもといふなり。

我袖は名にたつ松の末なれや空より波のこえぬ日はなし　土佐

末の松山清イ

末の松山波もこえなんといへる事をよめり。末の松山の事見古今注。仍重不染筆。

巻第十一

戀三

くれはとりあやに戀しく有しかは二村山も越す成にき　清原諸實

くれはとりとは綾の名也。あやに戀しくは。あやにくに戀しかりしかはといふこゝろ也。綾をは一むら二むらといふを。三河の國の二村山にそへよめるなり。

清輔卿云。くれはとりとは綾の名なり。文王の時に呉國より二疋綾獻之。仍必綾をはくれはとりふたむらとつゝくる也。呉字をくれとよめはなるへし。呉竹と書てもくれたけとよめはなり。くれはとり。雖多説々。呉綾名と心得て。ふるくよめる歌の躰を見るへし。なまはつかしき事。つゝしみていはさらんは。いはんよりはよかるへし。さる事なしとは又おも

ふへからす。
あさかほの花まへにありけるさうし
障子にはあらす。大裏に曹子とて。梅壺桐壺なとのやうに。
こゝかしこにあるつほねの名なり。
百敷はをのゝえくちし山なれや入にし人の音つれもせぬ
もゝしき。さま〳〵の説あり。只大裏の名と可心得也。一或は百仕義と書。又百司儀とかけり。百官の事をつかさとり給へるゆへに。大裏をさ申にや。をのゝえくちし事。古今雑歌注にみえたり。
誰となくかゝるおほみにふかゝらん色を常盤にいかゝ頼まん　讀人不知
師説云。おほみとは新嘗會の祭に卜合人(ウラアヒ)は小忌を着る。卜に不合人の例の束帯したるを。其夜は大忌の公卿といふ也。
月かへて君をはみんといひしかと日たに暮れは戀しきものを　貫之
月かへてとは月替也。來る月と云こゝろ也。事書に見合て可心得也。
いせの海にしほやくあまのふち衣なるとはすれとあはぬ君哉　躬恒
鹽にはなるゝあふといふ事あり。人に馴にそへたり。一所にての戀心なるへし。ふち衣とは藤布の儀にはあらす。いやしき人の衣なるへし。不治衣ともかけり。よき人こそ天子より始めて官位ある人は。そのしな〳〵にしたかひて。衣の様はさたまりたれ。いやしき山夫海人(ヤマカツアマウト)なとのあるにまかせたれは。木を着草をむすふほとなり。故云不治衣。
あらかりし波の心はつらけれとすこしによせし聲そこひしき　兼覧王
御簾こしを洲越とよめるなり。
厭はるゝ身をうれはしみいつしかと飛鳥川をそ頼むへらなる　伊勢
うれはしみとはうるはしきと云事なり。但此歌のうれはしみは愁の心とおほゆ。あすか川はきはめて淵瀬かはりやすき河なれは。この川のとく人のこゝろもかはり安けれは。けふこそつらくとも。またあすはもとのとく。おもひなをす心もありなんといへり。
津國のなにはたゝまく惜みこそすくもたく火の下にこかるれ　紀内親王
師説云。すくもたく火。浦にすむあまなとは。もくつをかきあつめてたけは。心よくもえすして。くゆるはかりのけふりなり。さて下にこかるゝとよめり。津のくにのなにはとつゝけたるは。名にたゝん事のおしけれはといふ心をいはんとて。津のくにとよみたる也。
みるめ苅方そあふみになしときく玉もをさへや蜑はかつかぬ　讀人不知
みるめは鹽海の藻也。湖水に有ましきなり。たまもとは砂交のうきもなるへし。
かつらきやくめちの橋にあらはこそ思ふ心を中そらにせめ　同
日本紀曰。昔大和國有役優婆塞と云。葛城與吉野之間。亘橋祈請神。然而在葛城山一言主神。一夜之間始亘石橋。而行者

日。吾叡龍。作言々ハカリ欲亘橋。行者詞。不可然。行者只欲亘構。一言神忿怒。捕ヘ葛城ノ一言主神。（天武天皇）行者讒奏之由。讒訴出之間。帝驚捕行者。配流於伊豆國。于時白鳳十七年丁酉二月七日云々。一言神猶行者在世。重奏奸偽之隠謀。欲刎行者首。于時勅使所執之劔有表文。勅使驚奏事之由。則不可誅之由綸下宣旨。有赦免。于時大寶元年辛丑五月日夏。後行者大忿云。（非奉）今蒙蒼天。身宿五五之智。作忿約命。重変配所之塵。奈誰恐汝也。護法神ノ練麻縛一言主神。重深谷巣。爲大石在今也。（已上金峯山縁起。）

逢みてもつゝむ思ひの侘しきは人まにのみそ音はなかれける

人まとは人の見ぬ時そ音はなくといふ心なり。

小山田のなわしろ水はたえぬとも心の池のいひはもらさし

いひとは井樋とて。田つくる農夫の水はからひして。田こしにわたすかけひなとのたくひなるへし。

巻第十二

戀四

戀をしこひはといひたりけるとは

古今第十一戀部に。

種しあれは岩にも松は生にけり戀をし戀はあはさらめやも（マヽ）

此歌下句を云歟。大旨此集にきゝしれることはとみゆる。究の歌の上下は古今集歌なり。

我宿と頼むよしのに君しいらは同しかさしをさしこそはせめ（伊勢）

師説云。たのむよしのとは。山のまに〳〵かくれなんなと云。ふる歌のこゝろをよめり。世のうけれは吉野にかくれなんとおもふ所に。君いらはかさしとは。山にいる人柴なとをとりてゐたゝ前にたてゝ。鹿にみえしとかまふる事を。おなしかさしをもさしてんとよめるなり。

野中のしみつ

古今第十七雜歌之所注之。

住の江のめにちかゝらはきしにゐて波の數をもよむへき物を（伊勢）

波はたちよる物なれは。男のたちよる數をもかそへてんといへるによせたる也。

とのはゝなけなる物と聞しかと思はぬためは君もしるらん（讀人不知）

なけとはなをさりにといふこゝろ也。等閑と書り。文の詞にはなをさりならすこそいへると見しに。おもはすなりにけるよといへる也。

おほしまに水をはこひしはや舟のはやくも人にあひみてし哉

はや船。大島とは備前國に有。彼島に更に水のなき間に。陸路より水をとりて。朝夕島人の世をわたる也。彼船を水はこふはやふねと万葉なとにもよめるなり。

よのつねの人の心をまたみねは何か此たひけぬへき物を（伊勢）

なにかとはわれと云心也。欲字の心なるへし。已ともなのれ

共よめり。

高砂の松をみとりとみしとはしたの紅葉をしらぬ也けり　読人不知

松の紅葉。或云。延喜御時ひとの國より献小松あり。この松下葉の紅葉したりけるを御覧して御製云。

下紅葉するをはしらて松のはのうへのみとりを頼ける哉

是よりして松の紅葉とによめると申。

かけろふのほのめきつれは夕暮の夢かとのみそ身をたとりける　御製

かけろふとは。日のかけろふ。雲のかけろふなとも申たれとも。此かけろふは蜻蛉とおほゆ。此虫は夕におほく飛出て。夫婦の儀切也。しかも不至朝之虫也。切に迷戀失身といへり。かゝるむしのはかなきをみれは。我身も夢かとのみたどらるゝと云なり。

かけろふの詞。古歌云。

かけろふの岩垣淵のかくれにはふして死ぬ共なか名はいはし

是はものゝ影とみゆ。

つれ〳〵のはる日にまかふ蜻蛉の影みしよりも人は戀しき

かけろふの夕さりくれは里人のゆつきかたけに霞たなひく

これらは虫とおほゆ。

ひき繭のかく二籠りせまほしみ桑こきたれてなくをみせはや　忠賞

師説云。ふたこもりとは。ひとつまゆにかいこのふたつこもりたるをいふ。桑をこくによそへて。こきたれてなとよむ也。

巻第十三

恋五

蓮葉の上はつれなきうらにこそ物あらかひはつくといふなれ　読人不知

師説云。此歌のはちすはをはすなはとかきて。釋したる人あり。家本には只何事もきこえにやすき事を用い侍れは。はちすはとかけり。蓮葉は池にあれは貝付へき物にあらすとて。はすなはに貝を付るをいはれ有へけれとも。貝付るはすなはゝうらあるものにあらす。うへはつれなきうらにこそと。二句まてよみすへたる歌を。両なきものといはん事。歌の本意なくや。池の蓮の葉にも貝に似たる物あり。うへのつれなくうら物や叶へからん。大納言もはちすはとかゝれたり。

いせの海のあまのまてかた暇なみ存命へにける身をそ恨むる

師説云。此歌先人命云。往年参京極院之次。以女房給草子一帖。被仰云。此抄物或好士得秘蔵物所持也。召庸加一見。即可返上。物躰可然哉。所存如何。依仰た御前披見之際。不能委細。即返上申云。古来書出如此物之時。雖先賢皆少々事決疏通候歟。此抄物又頭大概優美候。但此中あまのまてかたと書て来拙と付て候。此歌あまのまてかたと存候。海邊に蛤と申物砂中に候。其かたの候なるを見て。海人等急これをさしとり候なるを。いとまなしとは読候由其僕申きと。件物其時不

知誰人所近〔近歟〕乎。其又不知之。皆清輔朝臣說。其子跡未知見。歸返上之。後經多年。[illegible]之時。まくかきの[illegible]序書加也。後時申請。[illegible]〔作歟〕[illegible]此抄物之時[illegible]後撰[illegible]作ナト存知[illegible]後時不可注[illegible]之由上[illegible]日注出。[illegible]之由分明也者。庭訓如此。大納言本又まて分明也。彼まくかた。月の笠。同事之字誤也。

或云。左大將家歌合題歟。

左　寄海人戀

藻塩草あまのまくかたならは共戀のそめ木もいとなかりけり

右方申云。あまのまくかたはまてかたといふ說あり。是はいかやうに被定にか。

陳云。まくかたと存て詠也。後撰歌てとくとかよへとも。いとまなみと云は。しほかく事にかなへり。萬葉伊勢物語等にも。しほかくをいとまなしとよめり。一へ齋宮女御歌に。まくかたにあまのかきつるもしほくさとあるも。まてには不叶。

又難云。和泉式部歌に。

いせの海の蜑のあまたのまてかたに折や取らく波の花なみ

此歌にまてとかけり。又室山入道か續鏡集にもまてかたの部に入たり。又しほはまとこそいへ。潟にしほやく事やはある。

陳云。[illegible]歌はまく〳〵書たる本もあり。あまのあまたのいへ[illegible]濱也。まく事は潟に讀也。是土民[illegible]の中に有[illegible]にいとまなかるへきに非す。

右又云。それはまく[illegible]こにもかきるへからす。海人のしわさはさまく〳〵いとまなければ。いとまなみと詠歟。

判者尺。〔俊成入道〕左方あまのまくかたとよめるうへ。戀のそめ木もいとなかりけりといへり。下句も優にしもきこえさるへし。此事かくしも[illegible]へきにおよはさる事なり。但後撰の英明朝臣の歌はあまのまてかたとよめるなり。此事往昔崇徳院御前に侍し時。如上まくと申にかけるは未決[illegible]疑人の事也。心は何もおなしけれとも。まくかた不可用。彼英明朝臣詠歌上手也。事にをきて[illegible]事なとすへきにあらす。

〔藤原[illegible]〕あふ事のかたのへとてそ我は行身をおなし名に思ひなしつゝ

逢事の難さとそへて。方の邊といひて。おなし名とよめり。

〔讀人不知〕さゝら波まなくたつめる浦をこそよにあさしとはみつゝ忘め

さゝら波とはちいさき波の名なり。樂々夏浪とかけり。或云。波名あまたあり。

数經入道云。

をなみ。さなみ。さゝらなみ。はゝのてかへし。はま

ならし。　以上五の波。みなこなみの名也。
其いはれをは何ともいはす。是は其國其所にいひ付たる詞にやあらん。

人をのみうらむるよりは心からこれいまさりしつみと思はん　同

いまさりしつみとは。むかし人に戀られし時。さま〳〵によかれともいはす。のろふときゝしを。いまさりしつみのむくひにや。こゝろくるしく。又わか人を恨るといふなり。のろふとは呪咀する心也。伊勢物語云。むかしおとこありけり。宮のうちにてあるこたちつほねのまへをわたるに。あたみおもふ心やありけん。よしや草葉のならんさかみんといへりけるといふも。男を女の呪咀したるとは也。さて男のよみける。

つみもなき人をうけへは忘草をのかうへにそおふと云なる

うけふとは呪字をよむ。又はのろふとよめり。

しゐて行駒のあしをるはしをたになと我かたに渡さゝりけん　同

まてといはゝねてもゆかなんしゐて行駒の足をれ前の棚橋
古今第十四にみゆ。萬葉歌に。
とゝむるにしゐてつれなく出て行駒の足おれまへのたな橋
おとこいましはしとてとゝまりにけりといへり。此歌の心なるへし。

あさりする時そ侘しき人しれぬなにはの浦にすまふ我身は　同

あさりとは漁人のわさ也。
或云。あさりいさり同事也。但朝にするをあさりと云。暮にするをいさりと云也。
是古老の海人かたしかの説なるへし。

めもみえす涙の雨のしくるれは身のぬれきぬはひる由もなし　よしふかみ者臣

ぬれきぬと云事本説あり。むかしよきむすめもちたりける人。是をかしつきて后にもなとおもひけるに。いく程もなくて。うみおきて母なん身まかりにけり。後の母是をめさましき事に思ひて。さま〳〵にあしき事をのみ父にかたりけれは。父不用。なをやすからすと思ひて。そこしも海のちかゝりけれは。海人をかたらひて。しほたれ衣をとりて。かのむすめかねたるかたはらにかくしをきて。ちゝをいさなひて。日比申せし事そら事ならす。あれはいかにとて。かのしほたれぬれたる衣をみせたり。父まとゝおもひて。むすめをうしなひにけりといふ。是よりしてなき名おふをは。ぬれ衣きるといふと申。周の伯奇か罪をうけしたくひならん。

夕やみは道もみえねは古郷はもとこし駒にまかせてそくる　讀人不知

みちしる駒の事。韓子といふふみにいはく。管仲事齊桓公爲上卿。桓公北征孤竹大寒。日暮失路。仲云。老馬之智可用也。於是放老馬隨之。遂得歸本國。これよりしてもとこしこまみちしるといへり。

巻第十四

戀六

あふことをよとにありてふみつのもりつらしと君をみつる比哉 讀人不知

みつのもりとは水守也、淀にあり。田つくる人のうつみ樋をわたして、淀河の水をうくる也。ときさる時はとゝめ、さならぬ時はかへるやうにあやつる。是を進退するものを水の守といふなり。

しつはたにへつるほと也苦いとの絶ぬるそとは思はさらなん 同

師說云、しつはたはみたれたるよしをいふ也。おもひみたれたるほと也。只はたといへは、字のたらねは、賤のしわさによせて。しつはたといへり。

月にたに待ほとおほく過ぬれはあめもよにこしと思ほゆる哉

あめもよにこしとは。雨夜はよもこしといふへきに。聞にくきうへ、字のたらねはかくよめる也。又は雨に價來しといふこゝろとも申。

人しれす待にねられぬ有明の月にさへこそあさむかれけれ

是はまつ夜むなしく明行空の月に。わか人しれすまちつるさまも。あらはれぬへしといふこゝろ也。

巻十五

雜一

さかの山御幸絶にしせり川の千代の古みち跡は有けり 行平

むかし嵯峨天皇の芹河の行幸のありけることをおほしめし出て。光孝天皇又芹河行幸有けるに。在納言御ともして所詠歌なり。

武云。仁和三年正月廿二日。光孝天皇芹河行幸ありけるに。中納言行平鷹飼にてありけると申。

おきなさひ人なとかめそかり衣けふはかりとそたつも鳴なる 同

おきなさひ。さま〳〵の議家々に申なり。

師說云。おきなさひとは。老て猶されすけるよし也。

武云。おきなさひとは。事うるはしくとゝのほりて。抜群貌也。

元永二年十月内大臣家歌合に基俊。今朝みれはさなから霜をいたゝけりおきなさひゆくしらきくの花。人〳〵おきなさひの事不審申ことはれけれとも。金吾さる事侍りとはかりいひて。打うなつきて更に何とも申されす。秘藏せられけるにや。

武云。おきなさひとは。老て又わかやく心といへり。在納言の心此義にかなへり。基俊卿も此心とみえたり。在納言其日の躰をいふに。もてのほるに。はなめきて。わかやきかへりて侍たりけるとみえたり。いろ〳〵のいとにてすり。狩衣のたもとに大きなる鶴の形をぬひて。件の歌をやかてぬひあらはしたりけるといへり。

翌朝に献致仕表事。尤叶此儀なるへし。又古歌云。

夕霧に立かくれつゝをみなへしなつさひてこそ翁さひなん

是も女郎花のしほれたるを。我にたはふれてわかやけといふにや。神さひまさるとは。栄あらたにて瑞重なる粋とおほゆ。抑或人云。在納言此歌の事に(古今)よりて。攝津國須磨へ配流と申。はなはた僻事也。むかし田邑帝御時つみせられけるとはみえたり。くはしくは古今雑下に彼朝臣の歌の所にみえたり。

照月をまさ木のつなによりかけてあかす別るゝ人をつなかん　河原左大臣

師説云。まさ木のつなとは。正木のかつらつなになひて柚木な引事にそへたり。老後栗綱之次。[illegible]男之言語、あのまさきのつなくりこせといふ。あやしくて問之。答云。山の崎に舟をつなく綱な事也。[illegible]之事、依[illegible]注之。

限なき思ひのつなのなくはこそ正木のかつらよりもなやまめ　[illegible]

師説云。おもひのつなとは、思惜[illegible]心有なといふ事の心なり。なやまめとは、[illegible]云心也。[illegible]字也。

蓮葉(ハスハイ)のはひにそ人は思ふらんよにはこひちの中に生つゝ　[illegible]

師説云、荷の葉と云[illegible]也、

こひ人をよはふといふ事にそへたり。忍戀の心なるへし。

いせのうみの釣のうけなるさまなれと深き心は底にしつめり　みつね

筌(ウケ)を優けなるとそへたり。心ふかく〳〵のおもひしつめる心也、

相坂關幷蝉丸事

見古今雑部歌注。

ひたゝれこひにつかはしたりければ

ひたゝれとは非俗直垂　老夜着綿衣也、

五節事

見古今雑部注。

人のおやの心はやみにあらね共子を思ふ道にまよひぬる哉　兼輔

彼納言のむすめの十六になりけるを。かたちおかしけなりとて。延喜帝にめされにけり。その事のうれしきにたへすしてよみけると申。

あけてたに何にかはせんみつのえの浦島の子を思ひやりつゝ　中務

[illegible]浦島の子傳記云。雄略天皇二十二年。[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

甲生之[illegible]安息于
[illegible]
[illegible]
蟷之金玉、[illegible]鳥子日、昔仗見尋道之時、雖闘玉匱之籠、言了約
成。分手[illegible]去矣、[illegible]江清[illegible]
不値七世之孫、[illegible]鳥子[illegible]時二八歳昔也。至
不堪披玉[illegible]天[illegible]鳥子[illegible]天由之響。重
合満之謂矣。

逢坂[illegible]年乙酉、[illegible]百七十
[illegible]二十[illegible]云々
[illegible]之
[illegible]子也云々　[illegible]有之。
の[illegible]
正月[illegible]日六日[illegible]有子細
[illegible]
の[illegible]之[illegible]注之。

思ひきや昔の衣ぬきかへてこき紫の色をきんとは　右大臣

[illegible]云、こきむらさきとは三位の袍を云也。袍は一位より三
位まで同色。四位緋也。五位緋、六位緑。[illegible]五位之時に着五位
[illegible]人袍、[illegible]四位之時着四位袍。四位叙三位之[illegible]大臣袍
色[illegible]四位下左大臣。[illegible]年二月任権中納言。
[illegible]三位[illegible]時九條右[illegible]大將の色をつかはしける歌也。今世
には四位袍黒に公卿に同く[illegible]也。[illegible]説なとにも、叙三位
昔[illegible]袍の由みえたり。[illegible]不是昔事也。

返し

古しへも侍りてけりな打たふきとひたちぬへき天の羽衣　前関白

師説云。とひたちぬへしと云は、任中納言、從高自愛之由、さ
せる子細もなき事を不心得して。其事となき除名人なと[illegible]
たるいたつら事也。河社といふ事にそら事おひたる非也。

まあなれとあたなは立ぬたはれ[illegible]白浪を[illegible]にして、
まあなれとゝは。[illegible]なれとゝいふこゝろ也。古今[illegible]にまの
なるところにはといふ同心なり。たはれ島とは[illegible]に有。
たはるゝといふ心にそへよめる也。たはるゝとは狂たる貌。
餘麗のこゝろ也。古歌云。
たはれなと我はきゝつる[illegible]て（むなしくかへすイ）我を[illegible]せり[illegible]たるを
萬葉云。此歌は大伴黒主を[illegible]かけて[illegible]る
女の。いやしき女のさまにつくりて。夜ゆきて火給はらんと
いひけるに。かゝるすきずきしき女ともしらて。火をとらせ
てかへしやりつ。女おもはすに覺て（狂男だイ）。あしたに此歌をよみて
やりけると申。たはれをとは遊士とかけり。色好と云是也。
おそとは空言なり。

小夜更て君かとまやを今そゆくたちまちの月出もあはなん

月の異名あまたある中に、たちまちの月は十[illegible]
前の月といへり。[illegible]の月也）

小野好古朝臣にしの國のうちてのつかひにまかりくたりて二
とせといふに四位にはかならすまかりなるへくおもひけるを
ならさりければ

好古は太宰[illegible]天慶[illegible]年正月
右近少將。[illegible]四年九月一日[illegible]五十八。
今案之。此歌今年所詠歟。

[illegible]也）（子時[illegible]
[illegible]也）
[illegible]十六
第二
賀茂[illegible]
宇多[illegible]之時、[illegible]した
まひしなり。十一月中酉日也。
寛平元年己酉十一月廿一日己酉、[illegible]也、古今說
[illegible]に、

みこし岡いくそのよゝに年をへてけふの御幸を待てみつらん（[illegible]左大臣）

師說云。北野に御輿岳といふをかあり。延喜十七年閏十月十
七日[illegible]大臣中[illegible]大夫[illegible]にて侍
ける時よみ給へるなり。
一本にみこしをかきてと書たるは。みこしをかにてといふ
[illegible]なき
人[illegible]へと
思ふは僻事也。むかしは鷹狩御らんせんため。嵯峨宇多なと
のこ[illegible]らの野へ行幸ありけるに。御輿を昇居たりけるを御
[illegible]と云、今[illegible]之比[illegible]
宣[illegible]延喜十七年之比は北野神社之義おは
[illegible]す。此比は菅家於鎮西御薨去なりにけるなる

へし。
うつろはぬ心のふかく有けれはここらちる花に[illegible]
[illegible]
花。世人の物云なとみたれたりとにや。またうつろはてのと
か[illegible]
京極[illegible]
筆[illegible]
一ふしにうらみたはて[illegible]
是は平園[illegible]想[illegible]といふ[illegible]ころをよめるにや。
[illegible]
[illegible]
蕭門之[illegible]
結[illegible]見[illegible]子たになかりせはなに[illegible]まゝし
信の子な[illegible]にそへよめる也。
なつきをつたへさせ侍りけるに
是は名次[illegible]名符二字すると云事のある事やあらん。

巻第十七

雑三

としふれはわかくろかみも[illegible]のみつわくむまて[illegible]
作者[illegible]女は筑前[illegible]のものなり。すき〳〵し色このみけ
る女なるへし。[illegible]まてと云て。三輪[illegible]まてとそへたり。

年の老たる貌をみつわくむと申也。或老人云。みつわくむと
いふ事。老人のかゝまり居貌也。左右の膝立てやとしたる形
也。まさにみつ輪ありとみゆ。
[illegible]
[illegible]
か不審也。老かゝまりたれはとて三の輪あるへしや。この詞
あしく心得て。今案によめるにや。
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
なすへし[illegible]
に一人の童子來示云。汝か家の面に大河あり。彼河の南に万
仞の[illegible]
請。然者汝等父立ニ可還壯年者云々。二人の子一夜一同に此
夢を見て。大に[illegible]
々[illegible]
之[illegible]
に黑く容貌二十はかりとみゆ。一父心二子悅いふにたらす。
于時父悅云。汝等之運土埋淵。[illegible]してのゆへに。今みつわ
さするほとになれりと云なりとそ傳をしへはへりし。

押檜垣女歎事、富樫家記云。肥後國遊君檜垣嫗。老後ニ落魄ノ者也。家集にいはく。住所もなくなりて水汲程になりて。桶引さけて出しなり。國守御前に出給ふ道に指合たれは。目さとなるもの見付て。いかにかくはと見とかむれは。守なにそと問けるに。名たかき檜垣なりと。人のいふを聞てよひ出れは。はつかしけれとかくれ所もなきに。桶さしをきて居たり。いかてかかくはあるそ。おもひ煩ひ詠ける歌といへり。白河とは件所にある河の名也。

宮の瀧むへも名におひて聞えけり落るしら泡の玉と響けは　法皇御製

菅家御記に。

昌泰元年十月廿日。太上天皇鷹狩せさせ給ふ。其夜ゐめの宮におはします。つふさなる事は式部大輔長谷雄朝臣注せり。上皇盃たひ〳〵くたりて後。夜中にならんとするほとに。上皇右大將菅原朝臣に仰られて云。博士の家はいまたかならすしもうつら雄の丞ものにたのしはす。あけんあしたに片野におはしまさんとおはしめす。御ともにまいらん事如何。菅原朝臣御ともに候すへきことを奏す。廿一日つとめて出たゝせたまふ。御供に候人〳〵。常陸大守貞數親王。權大納言右大將菅原朝臣。參議勘解由長官昇朝臣。四位右兵衛督藤原清綱朝臣。右近衛中將在原ともゆき朝臣。左兵衛佐源善朝臣。五位備前介藤原朝臣春仁。これらをはしめて都て五人。廉館に坂上宿禰六位已下のつかさとるもの八九人。とに御ともにつかまつる事をゆるされたり。大鷹片野御道は（生駒）鷹しつ〳〵たまふ。歩行の鷹下野の折に鷹事を之。廿二日宮瀧をさして出させたまふ。その夜は山城のつゝきの何某のふろを旅にとゝまらせたまふ。賀蒼のへるはす。星月あらはにみゆ。寒さ卒廿三日大和國高市のこほり右大將のさうにやとらせ給ふ。廿四日ひさつ寺におはしましてぬかみたまふ。聖珠法師山のくたもの煎茶をさゝけてすゝめまいらす。瀧のもとにいたらしめ給て。西五里はかり吉野のこほりの瀧にやとらしめたまふ。廿五日宮瀧につきてあそふ。たちやすらふに岩のくろゝ事をもしらす。其瀧のありさまはめくり三四町はかり。たかくさかしかられとゝをとはいとたかく。はやくなかれたろいは。つもれる雪のくつれかゝるかとし。水の中の所々に大きなる石あり。あひさる事遠きは一丈あまり。ちかきは七八尺。此わたりの人々木をきりとりて。石のあいたにわたして。橋としてすゝみわたりて瀧をみけり。あやうき事きはまれり。さらにいふへくもあらす。水のかたはらにひとつの草の庵あり。いほりの中にひとりの女あり。ゝ九十はかりなり。馬なとのあるなみ。おところき出てあつしみ見る。さふらひの人々女にとふて云。こゝにすむ事いくとせ。水のそこいくらはかりなる。女答云。こゝにすみてより以來

十年よりささにはいまいそこ[illegible]
かにとひろあまり五ひろ六ひろはかりなりと申す[illegible]
好士[illegible]なとにのみ[illegible]ふかくこゝろえしらすらん
事を思ひて。彼御記をうかゝひて。をろ〳〵しるして。みち
をとふ心さしあさからすと[illegible]

たらちめはかゝれとてしもむは玉の我黒髪をなてすや有けん 遍昭

宗貞出家の日の歌なり。宗貞[illegible]人にて、仁明天皇に[illegible]
れつかうまつりし[illegible]なり。[illegible]
日崩す。深草山に収たてまつりけるに。今はかき[illegible]
のありさま。たきゝつきぬる煙のするゑ。沙羅林の春の夕ま
て。はるかにまなこにうかひて。[illegible]世にましるへき[illegible]
せすなりにければ。くらまの山に[illegible]
邊にうちやすみつゝ。もとゝり切てけり。母のならにありけ
るかもとへ髮をつかはしける。つゝみ紙にかきつけゝる歌
と申。かの谷川のほとりにてやすみける石はいまたありと
かや。

長門記云。[illegible]とある時[illegible]
之後[illegible]
びに日出度よし申。[illegible]中にいへ[illegible]
る。おほさんまゝにのたまへといふ。こたへていはく。かゝ
れとてしもといひて。むはたまのとやすめたらはとこそは。
と[illegible]侍れと申[illegible]やく〳〵。にやく歌は境に入給に
けり。歌よみはかやうの事にあるそとて。さま〳〵の事申け
るとて。くはしく見彼記。

うへし時哭やしけんたけくまの松にふたゝひあひみつる哉 [illegible]

[illegible]云。たけくまの松は[illegible]たちのまへにおひたり。いつ
[illegible]よりといふ事をしらす。元[illegible]にうへし時とよみたる
おほつかなしといへり。或云。此松むかしよりあるにはあら
す。宮内卿藤原元善といひける人。任にはしめてたちのまへ
にうへたる也。たけくまとはみちの國のたちにある所の名
なり。此人ふたゝひ[illegible]國守になりて下向。後歌は後の度詠す
ると[illegible]ろの歌なり。又たけくまのはなはのまつともよめり。
[illegible]之歌。

武隈のはなはにたてる松たにもわかと獨ありとやはきく

はなはとは山のかけなとのさし出たる所をいふとそ。ちか
く下向したる人はかたりける。抑此松野火にやけにければ。
源満仲任の時に又植にけり。そのゝち又うせたりけるに。橘
道貞[illegible]任之時[illegible]に。[illegible]松事。其[illegible]下向之
時。剪て橋につくりて。のちなかくうせにたり。なさけなき
心はせ。松名ともにくちせす。

しら雲のきやとる峯の小松原繁しけれや日の光みぬ [illegible]

白雲の[illegible]也。

巻第十八

雜四

玉江こくあしかりを船さし分てたれを誰とか我はさためん　よみ人不知

玉江とはつくりたるやうにうつくしき入江也。玉はほむることはなり。小舟とは片舟也。ちいさき船なるへし。

いせわたるかはし袖より流るれはとふにとはれぬ身はうきに見　伊勢

伊勢國なとへわたる河にはあらす。是は多河といふこゝろ也。いせとは五十瀨とかけり。五十瓊。五十嶋。五十日（兒誕在之）なといふとはのこゝろなるへし。かはしとは。しはやすめ字也。たとへはおほくの河をわたる袖よりも流るゝ泪と云也。

今こんといひし計を命にてまつにけぬへしさくさめのとし　女の母

師説云。さくさめの刀自。諸人一同説。しうとめの名のよし金吾も申されければ。さてこそはあらめ。但讃岐入道顯綱朝臣か説とて傳たり。さくさめのとしと云は。早蕨早苗なと申早字のこゝろなり。わか草はつ草の草。未通女。たをやめ。はつせめ。ふうちめ。わかくさめの年にて侍に聞ぬへしとよめるか。しうとめ平懐の事ならは。とはにおとうかたりの字をとりてかくへしとおほえす。すこしつねになき事なれはや。あとうかたりとはいふへき。あとうかたりとてなこ／＼かたりといふ事歟。拾遺にはなこ／＼かたりと書たり。清輔朝臣云。行成卿刀自とかゝれたり。匡房卿讀しは。さめはしうとめの異名なり。としは年にあらす刀自なり。此しうとめ刀自にてありけるなるへし。或云。さくさめのとし。しうとめ也。日本紀にみえたり。能因。顯昭等もとしとはしうとめ也としるせり。

花にたつなき名きよめむもゝしきのひとの心を枕ともかな　伊勢

花にたつとは。あたに世にしらるゝといふこゝろなり。一本に塵にたつと書たるもあしからす。人の心をまくらともかな。とかく我名をたつる大裏うちの人のこゝろを背枕にしてれはや。一夜もわかあたなる名たつといふ事。けにもとはおもはしものと云也。

身のうさをしれははしたに成ぬへみ思へは胸のこかれのみする　同

はしたにとは。半にといふこゝろ也。たとへは昇進もせす沈もはてす。こゝろくるしくおもひすてかたきこゝろなるへし。へみとはへしといふ詞也。

御ときおろしをたまはせければ

御衣のふるきを賜也。或本に御ときおほしと書たり。あやまりなるへし。

巻第十九

離別　羇旅

おり／＼にうちてたく火の煙あらは心さすかをしのへとそ思ふ　貫之

心さすかとは。我家をわすゝなといふこゝろ也。

たひのてうと

てうとゝは調度にかけり。旅の具なるへし。

そむかれぬ松の千歳の程よりもとも〳〵とたに纂にはそせん

師説云。とも〳〵は共にといふこゝろ歟。暮にもあり。そむかれぬといふ心もおほつかなし。このうたなか〳〵に[illegible]ともいはれねと。詞書もなく了簡も不及。集作者部類につふね。清輔朝臣の本におほつ少将とあり。家本には只おほつふね。敦忠中納言の娘。中納言おさなくてよひつけられたりける名を、やかて書たるといふも、まことに無下にうちとけ事なり。名なくは棟梁かむすめともかくへけれと、勅撰作者にかくての仰られたれは。よく定にける名ときこゆ。大納言本にもおほつふれとあり。宮少将これなり。家本には藤原敦敏と書て、少将敦敏と申されき。それか宮少将とかきて、作者目録にもかく書たり。備考といひしを、大納言の本に宮少将とあれは。これにこそはつかめ、すへて此集詞も作者もおほやけ事ともみえす。或初の草案かと見ゆる。いかなりけることにか。

亭子のみかとおりゐたまふ

寛平九年七月廿九日。御位を東宮にゆつり給ふ。春宮于時十三歳。醍醐天皇これ也。さて、寛平法皇と[illegible]行啓しまし〳〵て、寛平九年七月廿九日[illegible]中に[illegible]は鵲[illegible]天河を[illegible]云。本説あり。[illegible]云。漢武帝之時。張騫といふもの[illegible]をつかはして。黄河の源をもとめしめたまふ。天河畔にいたるに。有女浣衣。[illegible]問云。是をは何所と云ふ。女云。是天河也。汝何得到此と云て。一石を与へて以之可為[illegible]。又云。日をふきて行へしとて、[illegible]也。[illegible]本土、武帝以件石[illegible]、見之云。是織女の[illegible]の石也。支機石と云是也。武帝[illegible]。[illegible]と申是也。

巻第二十

[illegible]賀　貫之

とのもも竹も千とせのこゝろすれは人の思ひにかなふ也けり　貫之

天皇の[illegible]たよみ[illegible]賀[illegible]のめてたき事々を。千年のこゝろなとよめるなり。

年星をこなふ

当年星。[illegible]也。[illegible]一見也。其年のほしにあたれる人行之。云年星行也。[illegible]

けうそくなれきさへてさきへ百代に花のさかりを御覧しつゝら　僧正仁教

まさへとはましますといふこゝろなり。或云。脇足は何人なとい[illegible]なれはたてまつりけるにや。玉葉といへるは玉脇足也[illegible]人[illegible]なり。

年の數つまんとすなる重荷にはいとゝこつけをこりもそへ南
こつけとは小黃楊也。子を小にそへあそはしたり。いよ〳〵御子をもたんとあそはしたり。黃楊はよろつのいはひに入木也。

にひいろ

是鈍色衣也。諒闇に着也。椎鈍と中衣なと是なり。しろき衣也。素服は涼衣なるへし。

ねさうをこなふ

とは年三行也。長齋經云。
若有善男女等。修年三之齋戒。忽脫諸苦等。護殊勝福利。其年齋者於年有三箇月。所謂天帝尺爲其主。領廻四天下。檢計衆生所作善惡。其正月三十日向南閻浮提。二月赴西瞿耶尼。三月行北欝單。四月有東弗婆提也。天帝以正五九月巡向南州。注記衆生作業云々。謂年三とは正五九月也。一年三度此贍南州ニアル故ニ云年三也。余三州ハ年二也。源氏玉鬘君（予時卄歲。）の事をいふに。ものをおほししるまゝに。身をいとうき物におほして。ねさうなとをこなはれたまふとかきたるも。此經文の心なるへし。

抑或人云。此集爲躰。古賢のかたり侍しは。歌姿をはしらす。たゝこゝろをさきにせり。其故はよろしきうたは古今集にとりつくされて。そのゝちいくほともへすしてえらひける程に。歌えかたかりけるといへり。おほむね古今集をかきたてける鏡屑なるへし。されとも歌詞には此集の詞と伊勢物語の歌詞をまねふへきにやといへり。
拾遺集の比より其躰とのほかにものちかくなりて。とはりくまなくあらはし。姿すなほによろしとそ。
後拾遺の時。今すこしやはらきて。むかしの風をわすれたり。やゝその時のふるき人はこれをうけさりけるにや。後拾遺すかたと名つけて。くちおしき事にしけりとそ。或先達かたり侍し。
金葉集は又わさともおかしからんとして。やう〳〵なる歌おほかり。詞花千載は大略後拾遺の風なるへし。歌のむかしよりつたはりきたるやうかくのとし。
或云。此集者天曆五年十月。於梨壺和万葉集歌之次。以藏人少將伊尹朝臣爲和歌所之別當。召能宣。元輔。順。時文。望城等撰之。和歌所之根元是也。又云。於此集有家々證本。皆以有異說。先賢云。中書之時。度々雖及內覽。猶以不叶叡慮。仍其間不治定之本。流布于世間歟。
又云。此集證本者花園左大臣家本也。青表紙（自）引開端令書之由いへり。證本之旨表紙令書之云々。
又云。
此集歌都合千四百二十首。

(拾遺歌ニハ六十九首マサレル也。拾遺千三百五十一首。又短歌有之。)

本云 往年治承之比。古今後撰[illegible]。[illegible]之日[illegible]之後。嘉禄三年八月之比。[illegible]之由見彼奥書。

本云 嘉元二年九月下旬之比[illegible]。[illegible]乾元元年之比。自正月十八日及三月畢。古今後撰之両集[illegible]。

[illegible]判

元應元年十月三日[illegible]書訖。

以古本校合書入落字畢。　源[illegible]

以古本令書寫校合訖。

永祿三年八月日　侍從藤判

[右[illegible]以[illegible]文庫本校合]

和歌部九十

難後拾遺抄

後拾遺とてこの比世にかきさはく集あり。人のもたるをいとまのひまに人によませて聞つれは。いとおかしうおほゆる歌もあり。またいかゝあらんとおほゆるもあれは。これをかきいたして。それはさそといふ人あらは。けにともおもはんとてなり。このなかにやんことなき歌よみのよめると。かきつけられたる歌の心えかたきもあれは。それをもおそろしなからかきつけたるなり。是は心のおよはぬにもあらむ。よみ人をも歌のことはをも。かきたかへたるもやあらん。おほかたきゝてはらたちそしる人もありなん。ゆめ／＼。

後拾遺第一

・天暦三年太政大臣の七十賀し侍けるに　よしのふ

たつのすむ澤への蘆のしたねとけ汀もえいつる春は來にけり

これ上手の歌とかきつけられたれはいとおそろし。あふひて信すへけれとも。さはへと云ことはとみきはといふ言葉。おなしことなるうへに。みきはにもえいつるとこそいふへけれ。みきはもえいつるとあれは。にもしいるへうこそおほゆれ。けにくはしからねと。そのわたりのことなれは。もや〔か歟〕うにもよみたるうたもあらん。ふるき歌に。もかりふねいまそなきさにきよ（ナイ）きなるみきはのたつのこゑさはくなりといへるも。おなしことそかし。それもよき歌のなんにこそさふらふなれ。歌もかれはかりはなけれは。いかゝはあるへからん。

民部卿泰憲卿近江守にて歌合しけるに　讀人しらす

春たちてふる白雪なうくひすは花ちりぬとやいそきいつらん

鶯は春花のなりなくものなれとも。しはすによりて。谷よりいつるといふことのあらはこそかくはよまめ。されはもとのこゝろにはあらすきこゆるはいかゝ。

正月二日あふさかの關にて鶯のなくをきゝてよみ侍る　　讀人しらす

ふる里へゆく人あらはことつてんけふ鶯のはつねきゝつと

あふさかの關にて。鶯の初音をきゝていとおかしけれはよめるか。さらはあふさかといふことあるへし。さらすはさせることなし。かねもりかけふ白川のせきはこえぬとよめるは。みちのくにはいとはるかなる所のしら川のせきまてゆきて。みやこへつけやらんとよまれたれはこそおかしけれ。これはかれをまねひたるか。おとりたれは見くるし。なほつけまほしうは。ともの人ひとりしてつけにおこせん。いとやすきことにはあらすや。

選子内親王のいつきとまうしける時人〳〵まいりて梅か枝とまうす歌をうたひけるに

ふりつらん雪きえかたき山里に春をしらするうくひすのこゑ

此歌はもしかきたかへたるにやあらん。ふりつらんはもしふり積るか。

正月七日の子日にあたれりけるに雪のふり侍りけるに　　伊勢大輔

人はみなねの日の松をひきにゆくけふのわかなは雪やつむ覽

この歌はわかなはゆきやつむらんといへるも。おかしきやうなれとも。ひきにゆくとあるこそすへらかにおほえれ。おほよそおさなけなるなり。

正月七日卯の日にあたりて侍りけるにけふは卯杖つきてやといひにおこせて侍りけれは　　通宗朝臣

卯杖つきつまゝほしきはたまさかに君かとふひの若菜なりけり

とふひわかなといへるは。あしうもあらねとも。つゑつきつまゝほしきはとよみたれと。おほよそかなひたることを社さとよまめ。うつゑつきてゆかまほしきとあらはこそあらめ。わかなつむにはかならすつゑをはつくへきとおほゆるはいかゝ。

正月七日周防内侍かもとにつかはしける　　藤原三位

數しらすかさなる年をうくひすの聲するかたの若菜ともかな

貫之歌

つみたむることのかたきはうくひすのこゑするかたのわかななりけり

とよめるは。わかなつみに野へにいてたるに。うくひすの聲するかたたきくほとに。わかなゝむつみためぬとあるこそいうにもあれ。すくにかれをとりて。こゑするかたとよみた

るか。こゝろへしともおほえぬなり。かの歌を本歌にてよみ（古歌）たりける（たるはかゝるイ）歌あらんや。

長樂寺にて　　能因法師

よそにてそ霞たなひく古里のみやこの春はみるへかりける

みやこのふるさとゝつゝきたらましかはとおほゆるかな。またよそにてなん見るへかりけるとあれと。そのことゝもなけれは。けにいうなりけんとおほえぬなり。たゝひとむらのかすみなりけりとよめるこそ。さこそあるとはおほゆれ。

春なにはといふところにて綱ひくを見てよみ侍ける　　藤原節信

はる〳〵とやへのしほちになく綱をたなひく物は霞なりけり

このうたはおかしうよみたるを。おろものゝいひしは。つらゆきか歌にはつふとかはらぬを。いかてえらひいれられたるにかとて。（吾妻）そのとはききたまへさりしか。もしまかせたれは春のつなてはなのつからかすみたなひくものにやはあらぬと。集にいれたるにやあらん。それにはこのうたはかすみのたなひくといふことを本にてあるをとりたれは。さのみこそはあれ。もとやすの親王の歌に。らくひすのねのひのまつのうれしきはきみにひかれてやちよとそ思ふとよまれたるを。よし宣か。

ちとせまてかきれる松もけふよりはきみにひかれてよろつよやへむ

とよめるは。よしのふかよきうたにこそいひつたへたれ。つらゆきか。

わかやとのものならなくにさくら花ちるをはえこそとゝめさりけれ

とあるを。花山院の御歌に。

わかやとのさくらなれともちる時はこゝろにえこそまかせさりけれ

とよまれたるは。なかにも天德の歌合に。かれもりかこひのうたに。

ものやおもふと人のとふまてとよめるは。その折よりいまにいうの歌といひつたへられたるを。そのさきのうたに。こひしきをさらぬかほにてしのふれはものやおもふと見る人そとふとあるを。そのおりもさいふ人もなかりけるにやあらん。またふるきことのあるにやあらん。よくしりたる人にとふへきなり。詩なとにはかゝることいとおほかり。また〳〵またつねにしるへし。

原野の中に鳥おほくむれゐたる所を人〳〵眺望したるところを　　長能

かりにはゆきてもみましかたなふのいしたの原に狩場なり

もしゆきところにやありけん。たゝしこの歌のたいは。とり

おほくむれゐたりとかきたれは。みつとりなともやありけん。さらはきゝすとよまれたるはいかゝあらむ。鳥なれはいつれもおなしことか。花鳥の詩題にあるは。鶯・ほなとおもひならはしたるを。丞相の御詩に。とりのうた（かイ）につるをつくられたることあり。またかりにてもゆきてそ見きしとあるは。みむにては。いかなるとりにても。とりかと見るましきにやはあらん。たかゝりをそへたれと。つゝきのさるへしともおほえぬなり。[illegible]もあるを。いひきかせん人もかなとおもふたまふる也。またたくひのことをよみて。とり（こぞイ）のことをよまぬにもやあらん。おほつかなし。

たいしらす　　　　嘉言

梅かゝをよはの嵐の吹ためてまきのいた戸のあくるまちけり

いとおかしきうたなり。たゝしこれよみたるひとの。この歌かたりしは。梅のかをよもの[illegible]らしの[illegible]ふきためてとこそ。もしかもしにかきたかへたるにやあらん。此定なりしこそいますこしまさりたれ。

題しらす　　　　公任卿

梅かえにふりつむゆきは年ことにふたゝひ咲る花とこそ思へ

はてのおもへは。もしみれにやあらむ。いますこしいひにくきうへに。もしあまりたるなり。

かへる雁　　　　道信中将

ゆきかへる旅に年ふる雁かねはいくその春をよそにみるらん

春は花のあるをみなとよまれたらはこそ。けにともおほえめ。たゝ春をなむよそに見るとあらんは。なにことのいみしかるへきか。また旅にとしふとは。みちのほとにとしをへはこそ。かくはよまめとおもほゆるは。ひかことをおもひたまふるにや。

花見にまかりけるにさかのなやくなみて

なりすけ

こ萩さく秋まてあらは思出てんさかのなゆ（やイ）きし春はその日と

これはおもひいてゝ。なにことのいみしかるへきともみえすこそ。

一條院御時殿上の人〳〵花を見にまかりてつかはしける　　　　實方中將

おれはおしおらてはいかゝ山櫻けふをすくさす君に見すへき

かへし　　　　盛少將

おらてたゝかたりにかたれ山さくら風にちるたにおしき匂を

本歌のこゝろは。この花をおりてきみに見せんとおもふに。花をおらむはおし。いかゝせんとなり。さらはそのこゝろさしのほとをこそいはめ。たゝはなのみおしみたるはいかゝあるへからん。またかたりにかたれといへるか。たゝ人の

ものいふやうにこそおほゆれ。
後冷泉院御時うへのをのこともはな見にまかりて
高倉の一宮にまいりたりけるに　一宮駿河
おもひやるこゝろはかりは櫻花たつぬる人にをくれやはする
うたの心はいはれたれとも。人にをくるゝといふことは。いまいましきとこそおもひならはしたれは。いとはれにいたさんうたには。いかゝあるへからん。
よるさくらの花をおもふ　能因法師
さくら花春はよるたになかりせは夢にもものは思はさらまし
ゆめにもちるとみるこそわひしきといふ歌こそあるやうにおほゆれ。それをよみたるか。これはなにことゝも見えねはいとおほつかなし。
つゝしむへきとしなれはありくましきよしいひはへりけるに三月はかりに白河にまかりたりけるをきゝてさかみかもとよりかくもありけるはといひをこせてはへりけれは　定頼卿
さくら花さかりになれは古郷のむくらの門もさゝれさりけり
ふるさととはたゝふるくなれるいゑをいふか。さらはいはれたり。もしすまぬいゑをいはゝいかゝあらん。これはならのみやこのことをよむよりおこりたることゝそきゝたまへし。

第二春下
ふちの花　齋宮女御
むらさきにやしほそめたる藤の花池にはひさす物にそ有ける
いけにさきかゝるともなくて。いけにはひさすとあれは。いかゝあらん。
第三夏
つくし大山寺といふ所にて歌合し侍りけるによめる　元慶法師
わかやとのかきねなすきそ郭公いつれのさともおなしうの花
此歌はつくしにはへりしほと。良暹といふそうの。わかよみたるとなんいふときゝて。これはふる歌とそきくといひ侍しは。七十のほうしのわかゝみによめりしかは。そらことゝはおほえすとまうしゝを。元慶法師とかきつけられて侍しを。この集えらはれたる人にとひはへりしかは。實源律師かつくしにありけるほと。元慶といふものゝまさしうよみたりしを見しなりとまうせは。そのよしをかきたるなりとおるを。實源かつくしにありけることは。資通大貳のつかひなり。良暹かわか歌とまうししことは。そのさきのことなり。良暹かふる歌をわかといひけるにやあらん。元慶か歌といふことはそらことなり。もし元慶法師か良暹か歌をかきていたしたりけるにや。ありけん。いつれにてもありぬへきこ

となれと。空ことなりとおもふたまふれはかきつくる也。

いにしへをこふることはへりけるころゐなかにて時鳥を聞てよめる　　増基法師

このころはねてのみそまつ郭公しはし都のものかたりせよ

ねてのみそまつといへるは。またなかぬとこそおほゆれ。まちつるにきこゆるとあらはこそさもいはめ。またみやこには。

永承五年六月五日祐子内親王家歌合に　　伊勢大輔

きゝつともきかすともなく郭公心まとはすさよの一こゑ

よしときか歌に。たゝ一こゑのこゝろまとひにとよめるを。まれひよみたれとも。たゝおなしことのおとりたれは。いかゝあるへからむ。

兼房朝臣

夏の夜はさてもやれぬとほとゝきす二こゑきかむ人にとはゝや

一こゑといふことは。よるほのかにたちわたるものなれは。むかし人のよみつたへたるなり。ふたこゑきかは。あかれぬへけれはや。二こゑをきくひとにとはゝやなとはありもやせん。これはいといはれもなき歌かな。

宇治前太政大臣の家の卅講の歌合に　　赤染衛門

なかぬよもなく夜も更に郭公まつとてやすくいやはねらるゝ

この歌合は右方にてはへりしかは。そのほとのことはくはしうさゝたまへしなり。故宮内卿経長は蔵人の弁に相方人にて。その歌ともを四条大納言の長谷にこもりゐられたる所にもてまうてゝ。とひあはせられけるに。まうされけるは。歌はあしうもあらす。さらにといふことはこそ。よしともなういたつらことなれと。まうされけるときゝたまへしこそ。さもあることゝおほえしか。

おなしたい　　赤染衛門

よもすからまちつるものを時鳥またゝになかてすきぬなる哉

これはほとゝきすのつねのことにて。めつらしうもおほえぬうへに。またたになかてといふことはゝ。あやしの人のつねのことはにも。よくもおほえぬはいかゝ。

大弐三位

またぬよもまつよもきゝつ時鳥はな立花のにほふあたりは

花たちはなのにほふあたりはとは。いひなれたるやうに見ゆるを。またぬよもとあるは。いかなるおりすさましうて。またてはあるにかあらん。たゝまたてもきくとあらは。さてもありなん。まつよもとくらへたれは。さはきかまほしうもあらぬにこそとおほゆるなり。

五月五日はしめたるところにまかりて　　恵慶法師

香をとめてとふ人あるを菖蒲草あやしく駒のすさめさりける

この歌のこゝろ。もしわれはかをとめてきたるに。人はすさ

めてとにやあらん。それにてもあるなの言葉こそいかゝあるらんとおほゆれ。あやめなはむまますさめすとはよむらんや。

大貳高遠

むかしなははた橋のなかりせはなにゝつけてか思ひいてまし

これは花たちはなのといふことな本文（かうはイ）にてよみたるにやあらん。そのことゝもならしてうたかいよむらん。誹諧たつぬへし。

題しらす　曾根好忠

來てみよといもかいゑちにつけやらんわれ獨ぬるとこ夏の花

ことのこゝろ。ほかにあるいもにつけにとにやあらん。さらはたいにさやかくへからん。いもはわかいへにのみあるものなるを。ことつてせんとはいひてんや。もしたひによめるかおほつかなし。

泉入夜寒心をよみ侍ける　源師賢朝臣

さよなかにいはゐの水の音きけはむすはぬ袖も涼しかりけり

水は手にこそむすへ。こゝしてやはいかゝあらん。さてむすはぬとはよむそかしとはいふへけれと。あるへきことをこそさもいはめとおほゆるはいかゝ。

第四秋上

七夕於長能家　能因法師

秋のよななかきものとは星合のかけ見ぬ人のいふにそ有ける

されはなかうもみちかうもおほゆるどこそあらめ。いとおほつかなし。

居易初到香山こゝろを　藤原家經朝臣

いそきつゝわれこそきつれ山里にいつよりすめる秋の月そも

此題は居易の集住香山初到夜。秋逢白月正圓時といふ詩なり。されはおもひやるにえもいはぬことなり。としおひて。いまはとてこもりゐるに。やまてらにむかふ夜。八月十五夜にあへりけんはかりのことはいかてかあらん。それをいそきつゝとよみて。としおひてこもりゐるにといふこともなきは。いとみくるしき歌かな。なかにもとしおひてやまにのほるはしられさりけん。

寄依月菜といふこゝろを　公任卿

わすれにし人もとひける秋のよは月てはとこそ待へかりけれ

此歌のこゝろに。なの〳〵月によりて來るといへは。月のあかきに。諸ともにみんとて人のきたるなり。ししらといひし女房の。月かけは山のはたかくなりにけりいてはといひし人につけはやとよめりし歌は。いてはといふことを。心はへあることにてはあるな。ことはもこゝろもかはらさらんは。いかゝはあるへからん。またかのうたはよみよし。これはいてはとこそといふところいとよみにくし。文字あまりたる

ふる歌もあれと。すへらかによまれてこそあるやうにおほゆれ。またたいにちきるともなくて。月に人のきたらむこそいうにもあらめ。月いてんおりちきりたらんは。たゝ月におもひいてゝきたらんには。をとりもやすらん。

花山院の東宮とまうしける洞院におはしましてあきの月をもてあそはせたまひけるに　大貳高遠

秋の夜の月見にいてゝよはふけぬ我も有明の入らてあかさん

はしめのくにいてゝとよみたるは。はしにいてゐてともなけれは。家をいてゝ月みにありくとおほゆるに。つきのくにいらてといへるは。はしにいてゐるとおほゆ。されははしかいへかのほといとおほつかなし。

題しらす　赤染

今宵こそよにある人はゆかしけれいつこもかくや月をみる覧

この歌はよみたるいはれなきにしはあらねと。よにある人のすることはなとやうにあらましかは。いはれぬへきを。おほつかなきうへに。させることならこそおほゆれ。

鈴虫を聞て　公任卿

としへぬる秋にもあかす鈴虫のふりゆくまゝに聲のまされは（ルイ）

四條大納言は歌よみのなかにも。心得ぬ歌なとよむへき人にもあらぬを。いかにあらんとおもふたまふることのあるは。わかひかことにこそあらめとおもひたまへなからも。かきつけて社は。かやうのことしりたらむ人にもとはめとてなり。としへたる秋とは。いかなることにかあるへからん。人もし草木なとこそさもよまめ。秋はとしにそひてあるものを。とりはなちていひてんや。ふし虫をよまれたるか。さらはむしはとしふるものにやあらん。詩なとにとしへたる秋なとつくられ。歌にもかくよまれたらは。けにともおもふたまへんするなり。

後冷泉院御時后宮歌合　伊勢大輔

さよふけて旅のそらにて鳴鴈はをのか羽風やよさむなるらん

よさむなるらんなといふほとは。おかしきやうなれとも。はかせにあたりなといはゝこそあらめ。たゝはかせやよさむなるらんとあれは。ことはたらぬやうにおほゆるは。ひかおほえにやあらん。

土御門右大臣家歌合　源爲善朝臣

秋萩をしからみふせる鹿のねをねたき物からまつそきゝつる

ねたきものから。いとをさなけなり。

第五秋下

第六冬

山の雪を見て　能因法師

紅葉ゆへ心のうちにしめゆひし山のたかねはゆきふりにけり

しめゆふとはなにことにかあらん。もみちをみて。こゝろに

かけしところのゆきふりにけりとは。させることなくこそ
おほゆれ。
第七賀
第八別
ちゝのもとにゐちこにまかりけるにあふさかの關を
こえて爲善かもとへつかはしける　藤原惟規
あふさかのせきうちこゆる程もなくけさは都の人そこひしき
まつはとこそきゝたまへしか。さてはまさるらんものを。こ
れはためよしかかたりしは。のふのりかこのうたをよみて。
おこせて侍しかへりことを。ゐちこにつかはしたりしに。の
ふのりはうせて。ちゝためときか返事をいとあはれにかき
つけてして侍し。いまにうしなはてはへりしとこそ申めり
しか。
第九羇旅
第十哀傷
三條院御時皇太后宮のきさきにたちたまひける時藏
人つかうまつりける人のうせさせたまひておほむさ
うそうのよしたしきことつかうまつりけるをきゝて
山田中務
そなはりし玉のた備をさしなからあはれかなしき秋に逢ぬる
そなはりしとは。なにことをよみたるにか。たまのおくしと
は。やんことなきみやつかへには。たまのをくしといふこと
やあらむ。齋宮のいせへおはするおりに。うちのさいたてま
つりたまふくしをこそ。さやうに人のいふに。これに似すも
やあらん。
道信中將もろともにもみちみんなといひてちきりて
はへりけるにかの人みまかりてのちの秋よみ侍ける
藤原實方朝臣
見んといひし人ははかなくきえにしを獨露けき秋のはなかな
みむと云しこそ。おもふたるところもなけれ。またたいには
もみちとかゝれて。歌にははなとあれは。もしかきたかへら
れたるにやあらん。
としころすみけるをんなにをくれてまたのとしはて
のわさなとしけるに　ときひさ
年をへてなれたる人を別れにしこそは今年のけふにそ有ける
いはれぬにはあらねと。いとこそめつらしうもおほえね。
よしたかの少將みまかりてのちあくる歳のあきいも
うとの夢に見えける
逢事をみなくれことにいてたてと夢路ならてはかひなかり鬼
いとあはれなりけることかな。たゝしあふことをくれこと
にいてたてとも。ゆめならてはえあるましとにやあらむ。さ
らはみなはなにことにか。またくれことにとあるは。ゆめに

見えはこそさもよまめ。ゆめの歌なれは。たしかにもなきにやあらん。

第十一戀一

おんなのいふちかきところにわたりて七月七日

公任卿

雲井にてちきりしなかは棚機をうらやむはかりなりにける哉

この歌ははるかなるくもゐにて契りしに。ちかうなりにたりとにやあらん。さらにたなはたは雲井にてこそちきらめ。もしあふことのちかつくをよまれたらは。そのよしや見ゆへからむ。なよはぬか。おなおそろし。

第十二戀二

大貳高遠かものいひ侍けるをんなのいゑのかたはらにまたしのひてものいひ侍けるをんなの侍けるか門のまへよりしのひてわたりけるをいかてかきゝつけゝむきゝつけて女のもとよりつかはしける

よみ人しらす

すきてゆく月をも何かうらむへきまつ我身こそ哀なりけれ

この歌はすくるつまをもなにかうらみん。みをそうらむるとあらは。いはれたるへきを。あはれなりけれとあれは。こゝろはさなおりと見ゆれとも。つきみてはあはれになん覺ゆるとよみけるな。たゝあはれなりと。月をはすてたるやうにきこゆるはいかゝ。

・男のこんといひけるをまちわつらひてゆふけとはせけるによもこしといひけれはこゝろほそくおもほえて

よみ人しらす

來ぬまてもまたれしものを中々にたのむかたなきこの夕かな

もとはさもきこえたり。すゑのゆふへかなとあるこそ。むけにひたことにて。おもひもいらぬやうにおほゆるなり。またおなしとなれと。ゆふけといふことはもあらまほし。

入道攝政九月はかりの事にやよかれして侍けるつとめてふみをこせて侍ける返事につかはしける

大納言道綱母

きえかへり露もまたひぬ袖の上に今朝は時雨る空もわりなし

わりなくといふことの。さらなることにて。上手の歌ともおほえぬなり。

伊勢の齋宮わたりまかりのほりて侍ける人に忍ひてかよひける事をおほやけにもきこしめしてまもりめなとつけさせ給てしのひにもかよはすなりにけれは

左京大夫道雅

榊葉やゆふしてかけしそのかみにをしかへしてもにたる比哉

もしゆふしてかけしにやあらん。もとのさい宮のおりのやうににたりとよめるなめり。さるにてはさせることもなき

歌かな。

心さし侍ける女のことさまになりてのち石山にこもりあひて侍けれはよみ侍けるに　　前大納言経輔

こひしさも忘れやはする中／＼に心さはかす志賀のうらなみ

うたはなたらかなるやうなれと。すゑにしかのうらなみとあるに。もとにそれにかゝりたることやよまるへからん。いしやまにてよまれけれは。ちかきほとにて。しかとよまれけるとはおほゆれと。歌にも見えねはいかゝはあらん。

たいしらす

たか袖に君かさぬらんから衣よな／＼われにかたしかせつゝ

この歌。かたしかせつゝ。いひさしたるやうにて。いとはやく。

たいしらす　　西宮前左大臣

忘れなんそれも恨みす思ふらむこふらんとたに思ひをこせよ

こふらんとよまれたる。かみに思ふらんとあることはこそあまりにたれ。こふらんこそおもふらんにはあらめ。もしなほもかされていふにては。すゑのおもひといふ。おなしことにはあらすや。

第十三戀三

第十四戀四

としころあはぬ人にあひて後つかはしける

あひみしをうれしきとと思ひしはかへりてのちの歎なりけり　　道命法師

あひみて後またこひしきは。なか／＼くやしといふか。さにやあらんとはをしはかられたれと。そのよしこそあらはに見えね。

題しらす　　藤原元眞

み山木のこりやしぬらんと思ふまにいとゝ思のもえまさる哉

これは人のこるへきか。なにこととも見えぬは。もしかへしにやあらん。

平兼盛

思ふてふ事をいはても思ひけりつらきも今はつらしと思はし

おもふてふ事をいはても思ひけりといはゝ。つらさにもいはしとあらはこそよからめとおほゆるは。もしひかおほえにや。

たいしらす

類なくうき身なりけり思ひしる人たにあらはとひこそはせめ

これはこひかなに事そ。もし人たにあらはといふは。おほかたのこゝろさしか。いとおほつかなし。

君こふる心はちゝにくたくれと一つもうせぬ物にそ有ける

この歌はちゝといふに。ひとつといへるをことにてあるにや。いとゝ見くるしきうたかな。ひとつもうせすとあるは。

なにことのあれはにといふもしもみえぬは。

藤原長能

我心かはらんものかかはらやの下たくけふりわきかへりつゝ

かはらんものかとよみたるは。人をおもふことのかはるましきか。おほつかなし。けふりをわくとはいふらんや。わきあかるやうなりといふもおもひたるか。又清少納言か歌こそすゑはいたく似たれ。

わすれすにまたわすれすにかはらやのしたゝくけふりしたむせひつゝ

かれ〳〵に成侍りけるおとこによめる　藤原範永朝臣女

打はへてくゆるも苦しいかてなを世にすみかまの煙たゆらん

此歌いとおかし〔マヽ〕うよみたる歌なり。よとゝもにとこそきゝしかゝくむすめのおはりとて、承香殿女御の御方におりしかの歌とこそいふめりしか。このしうにてたれともかゝれぬはいかゝ。

露はかり逢そめたる男の許につかはしける

和泉式部

白露も夢もこの世もまほろしにたとへていへは久しかりけり

これくのはてことにもゝとよめるは。ひとつはもゝしなからはこそは。それにたとふるともおほえめ。さらすはこれにたとへたるにこそとも覺め。さらすはこれにたとへたりともおほえす。もしおとこをいふか。本歌あるへし

第十五雑一

月夜中納言定頼か許につかはしける　彈正尹清仁親王

板まあらみあれたるやとの寂しきは心にもあらぬ月を見る哉

月をこそみれとありけるにや。是にてはひさしきにてやあるへからん。

その夜かへしはなくて二三日はかりありてあめふりける日みこの本へつかはしける　中納言定頼

雨ふれは閨の板まもふきつらんもりくる月はうれしかりしを

こゝろはいはれたり。たゝしうれしかりしをやわかとのやうならむ。またもりくる月うれしきにては。やをふかせてもありなんは。〔前歌〕もとの歌はこゝろにもあらすとよまれたるを。をしてうれしかりきとあるも。いかゝはあるへからん。

齊信民部卿のむすめにすみわたり侍けるにかの女身まかりにけれは法住寺といふ所にこもりゐて侍けるに月を見て　民部卿長家

もろともになかめし人も我もなき宿にはひとり月やすむらん

たいはいとあはれなり。またいはれぬにはあらす。たゝしわれもなきや。やすらかにもなからん。

思ふ事ありけるころ山寺に月を見てよみ侍ける

源爲善朝臣

山の端に入ぬる月のわれならはうき世中に又はいてしを

この歌心はあはれなれと。はてのいてしをといへるこそ。たはふれことのやうにてあさはかなれ。おほよそ月のまたいてさらんは。いと不便のことなり。かゝることはよますとこそきゝたまふれ。

月のおほろなりける夜入道攝政まうて來てものかたりしけるにたのもしけなき事といひ侍けれはよめる

大納言道綱母

曇る夜の月とわか身の行末とおほつかなきはいつれまされる

もしおほつかなきにやあらん。またさすかにその事とこそみえれ。

村上の御時うへにのほりて侍けるにうへ御とのこもりにけれはかへりおりてよみ侍ける　齋宮女御

かくれぬにおふる菖蒲のうきねして果はつれなく成こゝろ哉

これはうへのそられをせさせたまひたるを。つれなきとはよまれたるか。さらは見ゆとやあるへからん。わかみか。ひとのおほんことか。みえわかぬ也。

源頼光朝臣女におゝれて侍ける比霜のをきたるあしたにつかはしける　小大君

このころの夜半のね覺は思ひやるいかなるをしか霜はらふ聲

しもはらふらんとは。たれをいかによみたるそ。こゝろえぬらん人にとふへし。

大貳國章妻なく成て秋風の夜寒なるよしたよりにつけていひおこせて侍ける返事につかはしける

清原元輔

おもひきや秋の夜風の寒けきにいもなき床にひとりねんとは

いみしうたゝありにて。おもひたるところもなうおほゆるかな。またさむけきにといへるは。この歌にてはありつかぬやうにおほゆるはひかことにや。

能宣身まかりて後四十九日のうちにからふりたまはりて侍けるに大江匡衡かもとよりそのよしいひをこせてはへりける返事にいひつかはしける

祭主輔親

すみそめにあけの衣をかさねきて涙のいろのふたへなるかな

これはよろこひのなみた。なけきのなみたは。ふた色にそあるとよみたるか。しからはなみたはなけきもよろこひも。こゝろにしみておほゆることにていてくるものなり。けにあかきなみたは。うれへのふかきよりおこりたるにはあれとも。ならへてひとつはあかしとよまんとは。よろこひのなみたはあからはなしといふ。本文なと見えすはいかゝあらん。よくしりたるひとにとふへし。このちのなみたの本文は。むかしからに卞和といふ人。荊山と云山にて。あら玉をえて。

ときのみかとにたてまつれるを。空たまたてまつりたりとて。左のあしをきられぬ。またつきのみかとにたてまつるに。おなしやうにそらたまなりとて。右のあしをきられぬ。またつきのみかとのとき。このたまをいたしいて。三日三夜なきけるに。なみたつきて。つくにちのなみたをもてすとあるなり。さてそのみかとのとはするにすしのへたることはなにともおほえす。このたまのもちゐられぬを。かなしふなりといひけれは。たまつくりに見せられけるに。いみしきたまなりとて。もちゐられたりとあることなり。いはゆる和氏璧とて。くるま十二両をてらすなといひつたへたる也。

第十六雑二

小式部内侍のもとに二條前太政大臣はしめてまかりぬときゝてつかはしける　　藤原範永朝臣

人しれすねたさもねたし紫のねすりの衣うはきにもせん

このうたのこゝろ[illegible]ことはうすきうはきなりとあらは。さもやあらん。たしかにもこそ見えれ。うはきといふこと。歌なとによむへくも見えす。

左大将朝光かよひはへりける女にあたなること人にいはるなりといひ侍りけれは女のよめる

よみ人しらす

ねぬなはのねぬ名のいたくたつれは[illegible]大将のいけふしの枝にねぬことよめるは。ねぬにねるなのたちにけるとよめるか。なくてはねぬなたちにたちたるといひなされなむか。

高階成棟小一條院の御ともに難波にまいるとていかにこひしからんすらんといひをこせて侍けれは

中宮内侍

しはしこそ思ひも出めつの国のなからへゆかは今わすれなん

此歌よまれたる様なるを。なからへゆかはいまわすれなんといふことは。ふるき歌なりと人のいふらんはいかゝ。たつぬへし。ふるきにあるふしなれと。のちの人よくよみなしたるやうもあり。ふるきくをしきと云歌にたのれなきてやなといふことはをとりなからめつらしうなしつゝあれは。おかしうはあるそかし。

第十七雑三

はらからなる人のしつみたるよしいひにおこせて侍りける返事につかはしける　　藤原元真

君をたにうかへてしかな泪川しつむなかにもふちせありやと

ありやといふことは。かたくありと云はありなんや。またしつむといふことは。ふちにしつみ。せには沈ましきか。

世中をうらみ侍けるころ恵慶法師かもとにつかはしける　　平兼盛

世中を今はかきりとおもふには君こひしくやならんとすらん

此歌いとおかし。たゝおもふにはとまみては。きみこひしく
もならんとすらんとあらは此歌はしめにはかなはめ。とすら
んとあるは。すこしたかひておほゆるは。わかこゝろおしう
えたるか。

小一條院高松女御にすみうつり給てたえ／＼に成給
てのころ松風心すこく吹けるをきゝて　堀河女御

松風は色やみとりにふきつらんもの思ふ人の身にそしみける

みにしめはわかみやみとりになりぬらんとこそよまるへけ
れ。まつかせやみとりにならん。それはいかゝことか。

世中さはかしく侍けるころ夕くれに中納言定頼かも
とにつかはしける　堀川右大臣

つねよりもはかなき比の夕暮はなくなる人そかそへられける

いはれぬにあらす。いふへきにのみかそへらるへきことや
あらん。心ほそきほとたにはれたるかたなくなる人そと
あるにこそ。ことはにはあれと。むけにたゝことにこそおほ
ゆれ。なきはおほくそとよまれ。いつまでよそになとあれは
こそいうにはあれ。

返し　中納言定頼

草の葉にをかぬ許の露の身はいつその数にいらんとすらん

つゆのことのすゑにあらましかはとおほゆるは。ひかこと
か。

王昭君をよめる　僧都懐壽

思ひきや古き都をたちはなれこの國人にならんものとは

いとあはれなる歌かな。この國人もいかゝあらん。

第十八番

かつらなる所に人々まかりて歌よみて又来んとい
ひてのちにかのかつらにはまからて月の輪といふ所
に人々まかりあひてかつらをあらためて来るよし
讀侍けるにかはらけとりて　祭主輔親

さきの日にかつらの宿をみし故はけふ月のわにくへきなりけり

此歌はおなしことなれと。すけちかかかたりしは。よしのふ
かかつらのいへに會してまたの日。もとすけか月のわとい
ふところに。おなし人々まかりて。すけちかかはらけとれ
とひとゝものいひ侍しを。なをなと元輔まうし侍しかは。な
ましゐにかはらけとりてよみはへりし。元輔もよしのふも
いかゝあらんとおもふたまへつるに。けしうはあらすつか
うまつりたりとこそまうししか。そのほと入楽にてなんと
侍しは。たつねたまひたらん。

賓方朝臣女のもとにまうてきてかうしをならし侍り
けるに女の心しらぬ人してあらくましけにとはせて
侍けれはかへり侍にけるつとめて女のつかはしける
よみ人しらす

明ぬよの心ちなからにやみにしを朝倉といひし詞はさゝきや

此歌はあさくらやといふ歌の本文にてよみたるにやあらん。あけぬよのといふことや。歌にはありともおほえぬはたつぬへし。やみにしを社たゝことなれ。

第十九雜五

中納言實成宰相にて五節たてまつりけるにいもうとの弘徽殿女御の御もとに侍ける人かしつきに出たりけるを中宮の御かたの人〳〵ほのかにさゝてみならしけむもゝしきをかしつきにてみるらんほともあはれと思ふらんといひてはこの蓋にしろかねのあふきにほうらいの山をつくりなとしてさしくしに日かけのかつらをむすひつけてたきものをたてふみにこめてかの女御の御かたに侍ける人のもとよりとおほしくて左京のきみのもとにといはせて果い日さしをかせける

よみ人しらす

おほかりしとよの宮人さし分てしるき日影をあはれとそみし

かくて臨時祭になりて二條前太政大臣中將にてまつりのつかひし侍けるにありしはこのふたにちんのくしゝろかねのかうかいかねのはこにかゝみなといれてつかひは中宮のはらからなれはにや日かけとおほしくてかゝみのうへにあしてにてかきて侍ける

藤原長能

ひかけ草かゝやく影やまよひけんますみの鏡くもらぬものを

上手のよみたるとはおほゆるを。ひかけにますみのかゝみとつゝけたるは。いかなることにかあらん。たつぬへし。

ある所に庚申しけるに御簾のうちの琴のあかぬ心をよみ侍りける

大中臣能宣朝臣

絶にけるはつかなるねを繰返しかつらのを社きかまほしけれ

たえにけるとよみては。つゝきもいかゝはきこえんすらん。いうなりともおほえぬかな。

第廿雜六

此歌ともはかきおとしてもあらん。ひか心をえてもあらん。まつたゝかきおきて。また〳〵みてそいかゝともおもふへき。こゝろえさらん人に。ゆめ〳〵ちらすまし。このなかにいはれぬにはあられと。かはかりの歌はいとおほくとおほゆるもあれと。それはひとのこゝろなれは。あしらうもおほえす。

天保二季(イ)夏若泉源左衛門異本持來(イ)比校畢

［右雜後拾遺抄以東京帝國大學圖書館本校合］

和歌部九十一

古今打聞上 又秘藏抄

躬恒撰之

ほの〲とあかしの浦の朝霧にしまかくれゆく舟をしそ思ふ
春たつといふはかりにや三吉野の山も霞みて今朝はみゆらん
風ふけは興津しらなみたつた山よはにや君かひとりゆくらん
櫻ちる木のした風はさむからてそらにしられぬ雪そふりける
子日する野邊に小松のなかりせは千代の例になにをひかまし

是等は歌の本とすへしとおほゆるなり。すゑの世の人〲これをそ本とすへき。

一まそを糸　二あしろたまゝ
三みたれさえかき　四むめつさを花
五ゑんしまかき　六やま人
七さゝめ雪　八あさはた
九こやた　十すかゐ
十一さまもらぬ　十二しら玉ひめ
十三たまきつこ　十四うきつこつむ
十五わたむさき　十六わくなみ
十七しまほし　十八もゝかゝり
十九つやはつのはし　廿やなつ
廿一きなけつ　廿二いたけつ
廿三あまのさよはし　廿四こもり
廿五せつた　廿六をしへやし
廿七しさゝまて　廿八みもつ人
廿九みつのひろ前　卅しろ柴の袖
卅一そきた　卅二いしふね
卅三しは舟　卅四あらみさき姫

廿五ことたま　　廿六としのく
廿七かほとり　　廿八春の人日
廿九そはさく　　四十わかれけば
四十一いはせきの蔵
　賀茂祭
一あかき雪　　二すゝしき玉
三鳥のさなか　　四ふけの草[illegible]し
五をしの契　　六ふゆ
　十二月屏風
　冬歌　寛平御時　后宮歌合

一 まそなといとゝいふ事

貫　之

冬の時にはた雪の事[illegible]
おほくかなきまそなの字[illegible]
是等は[illegible]まそなのいとゝいふを[illegible]
ますこうなる也。[illegible]
る色といふ人も有。

二 花咲かあしろたまゝ[illegible]なきはすしもうち[illegible]
あしろたまゝとは草を云也。はそしもとは[illegible]を云也。[illegible]
とはいそく心なり。

人　丸

[illegible]思ふ心を昔にしらせはや
[illegible]昔に[illegible]たる[illegible]也。

四 [illegible]の白妙のむめつきて花を盛にみゆ
とよめる[illegible]ないふむめつさ
を花と[illegible]也。まさかりとは[illegible]さかりたる也。

五 年すてゝ年へし宿をきてみれは[illegible]れつゝ
[illegible]とは[illegible]也。かたゝつきとは所々くつれ
たる也。

業　平

六 山人の[illegible]くれなゐふかき雪をこそふらん
山人とは仙人也。せんにんのきたる衣に[illegible]
家にふる雪はくれなゐなる也。

七 [illegible]にふるに心もあへすされけり
[illegible]ふる雪也。[illegible]にふるなも云
[illegible]すとはたへすといふことゝ云也。
[illegible]かきわけて君か千年の子日をそする
みさはたとは野邊をいふ也。[illegible]ふる雪也。
正月子日の小まつを引とて。きみか千とせ[illegible]と云也。

躬　恒

八 人とはぬかた山かけのこやたには[illegible]火はともしける
あれたる古き堂をこやたといふなり。

僧正遍昭

十
なたや寺ねぬらしつたの音もせすかりきし霜葉のかゝるまめ共

なたや寺とは間にいほりする人也。やたゝ霜葉なたてゝ。しゝのはむをおふなり。みあるはにゝ霜のしゝはむといふ也。

赤人

十一
ふる雪に小野のすみかま埋れてたえすなり行さまもらぬすゑ

さまもらぬすゑとは煙をいふなり。

同

十二
春山にしら玉ひめのたつときはみまくほしけに花をこそこめ

白玉姫とは霞をいふ也。

伊勢

十三
隠男かこさかの道も雪にたえてたまきつこをもかりはやに見

こさかの道とは木こり道也。たまきつことは薪をいふなり。

十四
綿津見のしらさゝのこえ蜑人のうきつこつむしのり釣にゆく

わたつみとは海底也。さゝめとはなみをいふ也。うきつこつむとは舟をいふ也。

閑院

十五
たえ／＼にふかむにわたすわたむきを間渡しねて蜑人やたん

ふかむにわたすとは川のふかき也。わたむきさとはわたし。

ねてとは渡しかねてと云也。なんとはいはうといふ也。

酒井人真

十六
しらせはやわれわく波のつかなくにつれなきよなのきかさらめやは

上ねよとはこふる心なり。つかなく〳〵とはふかく思ふと云也。しなとは女もといふ也。

元方

十七
玉の緒にたえたこえぬあさはつれなわくなる人にしらせし

玉の緒とは命也。たえたはつねにはつかしといふなり。これもわくなみとは恨をいふ也。

朝敦

十七
さ夜ふくる嵐にそらに風ふけはいとゝさえますしまほしの影

しまほしとは月をいふ也。さえますとは光のくまたきなり。

朝敦

十八
秋の田のほなみかゝやくもゝかゝりかりまもたゝ昔わかれせし

もゝかゝりとはいなへ也。かりまとは時のほとなり。

小野篁

十九
つゆなつの空のむら雲とわけてしていたゝきの初音鳴なる

つやなつの空とは夏の朝なり。してのたをさとは郭公をいふ也。

惟則

廿
おすみたつあさまつの空なかれに雲路のかたへかへる鴈金

あさまつの空とは暮の朝の空なり。

上野岑雄

廿一 きなけつとなかむるすゑは八重霞龍田の山はいろもめなくに　貫　之
〔つ脱歟〕きなけとは秋のそらなり。めなくとは見えすといふなり。

廿二 ゆたけつにおきてみたれは白雪の庭もはたらにふりにける哉　人　丸
ゆたけつとは冬の朝を云也。うたゝね也。

廿三 雲はるゝあまのさよはしたえはこそ渡りもすらめ七夕つめは
あまのさよはしとは天河に七夕のわたし給し橋也。夜るわたれはさよ橋と云也。

廿四 片山のしつかこもりにおひに見すきなましりのつく〱し哉　家　持
こもりとは畠をいふ也。杉なとは菁菜(すきな)てふ草のあるなり。土筆春の初生也。

廿五 なかき夜にひとりかもねんせつたにこ遠玉ほこにせな招ねぬ　讀人不知
せつたとは下をとこ也。せなとは夫也。遠玉ほことはとをき道なり。

廿六 をしへやし戀と思へとあき風のさむくふく夜は君をこそ思へ
をしへやしとは男をいふ也。

廿七 しさゝまてねたくそ夜の明にけるあけすはおしくやるしも歸らし
〔くや脱歟〕しさゝまてとはなかしらてと云事也。をしあしとは同男也。

廿八 我とおなしかくなはたゝんともつ人荒増かはるよを出まほし
かくなはとは同心也。ともつとはともたちをいふ也。いてまほしとは世をそむかんとおもふ也。

廿九 天か下はつらん神の身そならはゆたけにそたつみつの廣まへ
みそとは御衣(みそ)也。ゆたけのころもといふなり。七尺にたつ也。おほかたの神のみそきぬを云也。

卅 はかなくてたまきはりにしたらちをの故にそきたる椎柴の袖　因香朝臣
たまきはるとはいのちきはまると云也。たらちを父を云也。しゐしはのそてとは色衣をいふなり。

卅一 たらちおのきえにし日よりきつる哉このもしからぬ椎柴の袖　深　養　父
卅一 そきたもて葺たる宿のあはさらはいかにせんとか我ね初けん
そきたもてとはひきそきたる板のうろはしくもなき也。是〔は脱歟〕にてふきたらん宿はひまあらにこそ。

卅二 松風にふかせてねとをいつるなりあかしの浦のあまのいし船　人　丸
石船は海人の釣に出るとて。ふねの輕きを。いしを入て。おきに出てつりする也。石をとり入たるは石舟と云也。

卅三 淀河にわたりをくるゝしは舟の秋きりふかみともまとはせつ　朝　教

しは舟とはさかりたる舟といへとも。是はよと川によめは。
柴つみたる舟也。
柴船もさきたつふねもなかりけりあらしま風の吹すくるまは
これはさかりたる船もといふこゝろなり。あら島風とは僕に吹海のかせなり。

伊勢

卅四 ます鏡手向にしつるいのりなんあらみさき姫いろゐもそする
あらみさきひめとは男女の中をさまたくる神也。我もちたる鏡をたてまつれは。神の喜といふ也。

貫之

卅五 身につもり暮行年もおしからすことたま春のはなをこそまて
ことたまはるとは明年の春といふ。除夜の歌也。

遍昭

卅六 年のはにきゝふりわたる聲なれと猶めつらしく鳴くきらかな
年のはとは年毎にといふ事也。くきらとはほとゝきすをいふなり。

卅七 かほとりのまなくしはなく春のみそ夢のねしけき戀もする哉
かほとりとはきしの雄とりを云也。それかやくにとなり。しはなくとはしは／＼鳴也。

卅八 あらちをのかるやのさきに立鹿もちかへをすれは響ふとそきく
をのか身に霜をく夢やみえつらん心ほそけにしかそなくなる
あらちをは狩する男なり。黒主のつけ野といふ所を行けるに。あまりにけり。やう／＼夜の明行に。かしらをもちあけてみれは。かたはらのやふに鹿ありけり。その中におしかのありけるかいふやう。今夜われこそ夢を見たりつれ。そのゆめにせなかに霜ふると見えたりつるといひけれは。女鹿のいふやう。よく／＼つゝしむへし。狩なとのあらんするやらん。かりにかまへてあはし。はやあふほとならは。皮はかれて。しほのまかれぬかみゆるやらんといひて。鹿おきて行けり。其夢をふしきの事とおもひて。黒主みけれは。朝立する狩人見つけて。このしか射ころして。皮はき鹽うちなんとしけり。このこゝろにてつけ野を夢野鹿といふ也。委しくは日本紀にみえたり。

讀人不知

卅九 かのみゆる岸へにたてるそか菊のしかみさ枝の色のてこらさ
そか菊とは黄なるきく也、そのゆへはむかし承和御門黄なる菊をあひし給ふけるより承和菊と云、承和の菊といふこゝろ也。しかみさ枝とは下枝。てこらさとはめてたきと也。

讀人不知

四十 身のうさをあまつやしろにわかねけは聞しれかほに鶯そなく
ねけはとは神に祈る事、禰宜に付而申いふ也。

酒井人眞

四十一
いはさきの神いかはかり涼むらんあまのかはらにすめる月影

天川のほとりにいはさきと云所あり。そのもとにおはする

女神なりといふ也。

朗詠部

一浅紅鮮娟。仙方之雪愧色。

たちぬはぬ衣にかゝるゆきの色もはつなるものを梅の匂ひに

紅に匂ふ梅の色なも香なも。しらん人にみせまほしき物そかし。仙人の裳にする雪は色あかしと云也。その雪も此梅には色をはつらんといふこゝろ也。仙人のきる衣はたちぬひたるかたなし。唯をりなせるなり。

二燕昭王招涼之珠。當沙月與自得。

空はれていさこをてらす月の色をすゝしき玉の影かとそ見る

燕昭王の玉は。あつき時にむかへは。すゝしくなりけるなり。其玉ものなてらすに月にたとへたり。

三鶺鴒背上。數片之紅纔殘。

雪をいとふとりのうは毛の紅はちりし紅葉の殘るなりけり

鶺鴒といふ鳥の木葉を背におひたるか。霜ふき嵐もはけしくなれは。よにわふる也。その木葉ゝちりはてたれとも。此鳥の背はかりはわつかに殘れると云也。

四暖泉流處冬草青。

冬くれとなを霜かれぬさいたつま氷らぬ水のぬるきあたりは

あたゝかなる泉のあたりに。冬の草青しと云也。さいたつまとは草を云也。

五昔時契誤。今作參商。

思ひきやなしの契をたちかへりほとは雲井のやとりせんとは

なし鳥はいもせの中ひとりうせぬれは。としふれとも。つかひもなくてやむ鳥也。參と商といふ星は。二いてあふ事なし。一出れは一は出ぬ也。したしかりしからとくなるを。是にたとへたる也。

六朱虚暮菓。[redacted]之世無常。

いかにとよ常なるへしと思ふかは夕影またぬかけろふの世を

蜉蝣といふ虫は朝むまれて夕はしぬる虫也。それに世のはかなき事をたとへたる也。

七十二月異名

正月むつき

むつきたつしるしとてやはいつしかと四方の山邊の霞立らん　紀友則

二月きさらき

きぬさらきとも云也。

三月やよひ

くれて行やよひの空をなかむれは八重のかすみをかへる鴈金　敏行朝臣

四月卯月

卯月とてさくらの花にこつたひていつしかきなく山郭公　源宗于

五月さ月

ほとゝきす五月の雨にうつもれて花たちはなに枝うつりなく　元方

六月みな月

みな月の河へのはらへさよふけてたもとに秋の風かよふなり　小野春風

七月ふみつき

七夕のこゝろもいかにさはくらん稀にあふへきふつき立らん　貞文

八月はつき

初鴈の聲きこゆなりはつきたつあしたの原のうすきりのまに　深養父

九月なかつき

我やとのまかきのうちの白菊もなか月にこそさかりなりけれ　貞文

十月神な月

神な月しくれてのちのこすゑこそからくれなゐの錦なりけれ　素性

十一月霜月

みるまゝに雪けの空となりにけりさらぬにさゆるしも月の空

十二月しはす

何となくしはすの空になりにけりあはれかさなる年の数かな　業平

又秘蔵名あり。

正月さみとり月

年くれてさみとり月に成ぬれは所さへなしこまつひくきの　貫之

二月むめつさ月

鶯のかよはぬ里のやとはあらし花さかりなるむめつさつきに　友則

三月さはなさ月

浅緑へ雨もなきつゝかへるありさはなきつきに春やなりぬる　顕

四月このはとり月

いつまてはなにかもすへき時鳥このはとり月となりなんなん　家持

九月さくら月

神へなるまこともましりの雨布かすー衛にましし月　小野篁

六月いすゝくれ月[illegible]

[illegible]

ほとゝきす[illegible]とて、

七月めてあひ月

[illegible]

七夕のめてゝあひ月まち〳〵つゝいかにこ[illegible]るらん

八月さゝはなさ月

素藝法師

きり〳〵すさゝはな[illegible]わひてあさ[illegible]なり

九月いろとり月

菅原忠言

常葉山いろとり月にな[illegible]こしきたきらす心ちこそすれ

十月かみなかり月

同

よも山はから紅ゐになりにけり時雨ひまなき神なかり月

十一月露こもりのは月

人丸

露こもりのはつきの[illegible]なかむれに[illegible]けにそ成わたりける

十二月年よつむ月

貫之

身のうへにとしよつむ月い[illegible]ても[illegible]きぬ

[illegible]人にみす[illegible]十二月の[illegible]はこの[illegible]ても[illegible]しかための[illegible]也[illegible]すへし〳〵。

[illegible]すかた

あふこの　まれなるいろに　おもひそめ
我身は常に　あまくもの　はるゝ時なく
ふしのねの　もえつゝとはに　おもへとも
逢事かたし　なにしかも　人をうらみん
わたつみの　おきつふかめて　おもひてし
思へはいまは　いたつらに　なりぬへら也
ゆく水の　たゆる時なく　かくなはに
思ひみたれて　ふる雪の　けなはけぬへく
おもへとも　えふのみなれは　なをやます
思へは今は　あしひきの　山下水の
木かくれて　たけき心を　たれにかも
あいかたらはん　色に出ては　人しりぬへし
すみそめの　夕になれは　ひとりゐて
朝な〳〵と　なけきあまり　せんすへなみに
庭に出て　たちやすらへは　しろたへの
ころもの袖に　をく露の　けなはけぬへく

おもへとも　ななけかれぬ　春かすみ
よそにも人に　あはんと思へは　貫之

九旋頭歌

君かさすみかさの山のもみち葉の
いろ神な月時雨の雨のそむる也けり

十誹諧歌のすかた

いくはくの田をつくれはかほとゝきす
してのたをさをあさなく\よふ

古今打聞中

一蒋纒（こもまき）　二富草（とみくさ）
三筆登蟲（ふでつむし）　四東路子（とろみ）
五宇都妙（うつたへ）　六鳴樋
七羽馴鷹（はならしたか）　八香帛（かましめ）
九焼帛（やきしめ）　十假連（かりわらは）
十一黄丹（たけふ）　十二[illegible]
十三[illegible]（みなもしるみ）　十四[illegible]
十五[illegible]　十六[illegible]
十七角柱　十八[illegible]波比古女
十九[illegible]　二十遠近
廿一假初（かりそめ）　廿二里[illegible]白

廿三[illegible]（たまへ）　廿四[illegible]
廿五玉江草　廿六野待人（のとひと）
廿七[illegible]（みえせ）　廿八[illegible]衣（ひをせとり）
廿九水無鳥　三十火焼鳥
卅一過難（まてくし）　卅二小蘭
卅三[illegible]（くたかけ）　卅四[illegible]（うくひすそて）
卅五小家鶏　卅六[illegible]時星（かれときほし）
卅七急々羅波[illegible]　卅八留鳥
卅九玉[illegible]（たまほこ）　四十[illegible]（ちゝろむし）
四十一[illegible]（はまをき）　四十二千々呂虫
四十三幾須（たまかしは）　四十四枕神
四十五玉[illegible]（にはつとり）　四十六魚原
四十七庭都鳥（みさゝめ）　四十八佐波ラ（さゝへことり）
四十九美小々目（みはす）　五十小々江小鳥
五十一[illegible]　五十二[illegible]（おきもあさ）
五十三御[illegible]須（いさゝかけふね）　五十四[illegible]
五十五[illegible]

一蒋纒

けふよりは汀の草はあらしかし菖蒲は軒にこもはこもまき　貫之

二宮草

あすよりは外面の小田に[illegible]

三筆登山

ふてつむし秋も今はと浅茅生にかたおろしなる庫よはるなり

筆つむしは[illegible]を云也。[illegible]也。

岡東呂子

[illegible]

いさやけふ小田のとろみをかけには[illegible]

とろみとは是は稲を云也。これはまつ[illegible]はなり。されはあつま歌といたせる也。

五字都妙

うつたへのすゝりの水とおもふなよ涙もかくそみつくきの跡

うつたへとはまとのすゝりの水と思ふなと云なり。水くきとは筆を云也。

六鳴棹

めかれして栗穂きらすなあなかしこ鳴棹もちてましらをへうなひ

なるさほとは。棹のさきになるこをつけて。それをならして。かた山里にあはといふものをつくりて。さるをおふ也。うなひとはわらはを云也。

七羽馴鷹

たかねより麓のさとにおりきたりつゝ心みるはならしのたか

[illegible]

八

[illegible]

九

あすよりはやきしめたてゝ小山田の實れを[illegible]鹿もこそはめ

やきしめとは。馬なとの尾かみをきりてはさみて。そのあまりを燒て田にたつるなり。そのかみをきて鹿のはま(?)なり。それを[illegible]と云なり。

十

夕暮にかつらき山のたかねよりかりわらはくるほう音すなり

かりわらはとは山賊をいふなり。そみかくたとも云也。

十一

住吉の岸におひたる松かねのあらはるゝまてはにふしてけり

住吉のきしくつれてみえけれは詠なり。はにふとはきしのくつれを云なり。

素性

はにふして麑くそなれる住し里の前の小河をきつゝみけれは

十二　　　　　　　　　　　　　　　　人丸

ふるよりもさらゐの風そすさましき吉野の山のすそのゝ里は

さらい風とは。ふりつもりたる雪を。かせの吹ちらすをいふなり。

同集安貴王歌云。

見渡せは時もきらはぬさらゝ践ふしのたかねに風ひぬらし

十三

浦島か子をとふらひて島津人たゝまかへるしし湊しらむめり

昔丹後國水江浦嶋と云所に。浦嶋太郎と云者。魚をつりけるに。龜を釣あけて船に入てみけれは。女房にてそ有ける。そのかたちたえすめてたかりけれはあひにけり。女の云。我在所へいさといひけれは。船に乗て行ほと（三年歟）に。東は春。南は夏。西は秋。北は冬。みるも面白くて。みれ有と思ひて。古郷戀しくおもふと女にいひけれは。ちいさき箱をとり出てとらせて。是へ猶かへらんと思はゝ。このはこをあけてみる事なかれとてとらせけり。そのふるさとのありさま。見しにも非す。ちいさくみえし木ともは古木になりぬ。大方のあれはてゝありけるに。其浦にいと老たる女ありけり。それに此浦に浦嶋太郎といひける人の妻子は。いつちへ行けるそととひけれは。この嫗いふやう。我か先祖にてありける人こそうらしま太郎とはいひけれ。はや千年はかりの事なり。思ひかけすといひけれは。うちなけきつゝ。かたかたによりて。この箱をおほつかなさにあけてみけれは。老となり。白髪身に取付て老朽て死にけり。其女の頭に女子一人ありけるか。蓬萊よりとふらひに。曉方に其浦へきて。跡をとふらひける也。そのむすめの波をふみ分てくるに。なみのしろくてみえけれは。みなとしらむと云けり。あかつきうみのしらむをみなとしらむと云は此ゆへなり。此浦嶋は雄略天皇廿二年のとし行て。人皇代廿二代めに淳和天皇御時。三百四十九年に本朝に歸來と云々。

十四　　　　　　　　　　　　　　　　兼盛

をちこちの旅人今はたちぬらんひかしの山のひなとしらめは

此ひなとしらむとは。朝日の出るとて。邇あかくみゆるをいふなり。

十五　　　　　　　　　　　　　　　　人丸

われのみそいはたないつる鷺のまた人きかぬはつれをはきく

いはたなとは淵の戸を云なり。

十六

沖つ磯にあさりするまに鹽みちて船ほしけなき海士のしう哉

あまのしうとはあまの人數といふ事なり。海士衆也。

十七

よとゝもにきくそかなしきかく柱たゆますふれる雪おれの聲

かくはしらとは竹を云なり。たゆますとはをやますと也。

十八

さはひこめをく我宿のませの内にかはら蓬はうたゝかれたり

さはひこめとは霜を云也。かはらよもきとは菊をいふ也。うたゝかれたるとはうたてくかれたると云也。

十九

色きえす庭もはたれに降にけり柴のあみ戸をあけてみたれは

いろきえすとは雪を云也。はたれとは斑なり。

二十　猿丸太夫

をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくも喚子鳥かな

をちこちとはあなたこなた也。たつきもしらぬとはたよりもしらすといふなり。をちとは外。こちとはこゝ也。

廿一

いさゝめに思ひしものを多古の浦にさける藤波一夜へにけり

いさゝめとはかりそめといふなり。

廿二　兼盛

奥山のゆつり葉いかにおちつ覧あやめもしらす雪のふれるに

あやめもしらすとは。こゝろなく。よしあしもしらすといふなり。

廿三

水の上にかすかくときわか命いもにあはんとうけひつるかな

水にかすかくとをは無益事にいたせり。うけひとは契を云也。

廿四

山のはを横きりわたるしらさくも月にもまかふ早くけれかし

しらさくもとは白小雲なり。けれとはきえねなり。

廿五

難波江に玉え〔さ脱歟〕さくさのつのくめは駒もいはへて嬉しかるらし

玉江さくとはあしの若はへ也。つのくむをいふなり。

廿六

打むれてすかるかるなるのとこ人ゆつるしみしに打鳴しつゝ

すかるとは鹿を云也。のとこ人とは猟師を云也。ゆつるとは弓の絃をいふなり。

廿七　高光

しつのおか爪木こりにと朝をきていろ／＼衣そてまくりゆく

色ゝ衣とはつゝりを云也。

廿八

山かつのみしかきはりめ衣きて樂き夕はいかてかはぬらむ　行平

是もおなしくつゝり也。はりもてしけくぬひたれは。はりめ衣と云也。

廿九

深山路の木かけこくらき夕暮にやゝすさましくなくみなせ鳥　人丸

みなせ鳥とは梟をいふなり。

三十

日くれぬとこまをはやむるみ山ちの木下すこくなくひもす鳥　同

ひもすとりとは鵯（鴫イ）を云也。

卅一

女郎花さくのへちかき玉ほこを香をなつかしみ過かてにする　赤人

玉ほことは路をいふ也。過かてとはすきやらすと云也。

卅二

つくるへき主やなからん小山田には草ましりのそろゐ生たり　伊勢

は草とはこまかなる草のあれたる所に生る也。そろゐとは菌のいまたちいさきを云なり。

卅三

汐ひれはあまのまてくしひきもなしわか思ふ事を知人もなし　人丸

まてくしとは。あま人の海のしほひかたのすなこの中に。まことといふものゝあるた。すたれの竹の程なゝものをもて。まてのあなにさし入て引出せは。まてと云ものゝつきて出るなり。それをまてくしと云也。

卅四

さ衣のうくひす袖しくちぬへし[illegible]みてておつるなみたに　小大君

さ衣とは小衣也。うくひすそて（とは隙）を隙縫したる衣の袖をいふ也。いもとは女をいふ也。

賤の女か山田にえくの苗なつむうくひす袖をぬらしつるかな

えくのわかなは薺なり。

卅五

夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたなに鳴てせなをやりつる

きつとは狐を云也。はめなゝとは[illegible]はせなと云也。くたかけとはちいさき鶏なり。またきとはまたしき也。せなとは夫をやりつると也。

卅六

小町

暁のたれときほしもやまのはにまていてなくに帰るせなかな

たれときほしとは明星を云也。

卅七

あはち島きゝうこく舟のかちをとを汀の鶴やともときくらん

急々とはいそくと也。舟をこくには櫓の鳴なり。その音を鶴や友と聞らんとそへたる也。しかも鶴の聲に似る也。

卅八

公忠

みゝめ鳥きつゝなくなりわか宿の八重紅梅のはなふみちらし

みゝめ鳥とはうくひすをいふ也。

卅九

たまひまにをきつゝみれは庭の面にみな白妙に雪ふりにけり

たまひまとは朝をいふ也。

四十

業平

ぬるたまに戀しき人をたはふれてなれぬる床の寝覚めつらし

ぬる玉とは夢をいふ也。

四十一

人丸

はま荻のおれはしところにふみ分て夕霧かくれたつそなくなる

・はま荻とは芦をいふなり。たつとはつる也。

四十二

ちゝろ虫よる吹風にさむからしすゝれはいとゝよはる聲かな

ちゝろむしとはきり〳〵すを云也。寒からしとは寒からんと云也。

四十三

よさの浦しほひのかたに波つれてきすかく蟹の袖のけしきよ

よさのうらとは丹後にあり。鷺干のかたは。海士のつれ〳〵すなこをかけは。きすといふ貝をかき出してとる也。蛤子の様にて。蟹はあれとも。はたのあしき也。それをみてよめり。

四十四

いかはかりまくらの神のはこふらん契りしことのまとならねは

枕には神のおはします也。

四十五

赤人

わたつみに沈みてみえぬ玉かしはいつあらはれて君を思はん

玉かしはとは石をいふ也。

四十六

うなはらや沖ゆく船をかへれとやひれふらしけん松浦さよ姫

うなはらとはうみの面也。ひれとは袖ふる也。松浦佐世姫の事なかけれはいはす。

四十七
庭つとり鳥のたれをのみたれ尾のなかき心はおもはさるかも
　庭津鳥とはにはとりを云也。
四十八
波のをとの浦ちならぬに聞ゆるはさはつはに吹松のゆふたつ
　さはつはとは峰を云也。ゆふたつとは風を云也。
四十九　　　　　　　　　　　　　　　　人　丸
みさゝめは櫻かえたに木つたひて花ふみちらしもゝ千鳥なく
　みさゝめとは見鶯とかけり。みれとゝ云也。百千鳥とはうく
　ひすをいふ也。
淀川をのほりくたるにみさゝめは霧よりさきに舟わたるみゆ　　貫　之
　是もみるといふ事也。
五十　　　　　　　　　　　　　　　　　赤　人
かきねつたふさゝえ小鳥よはや行て鶯さそへ春のまうけに
　さゝえ小鳥は鶯のおや也。鶯も老ぬれは。さゝえといふとり
　になるなり。さゝえ小とりとつゝくへし。
五十一
まとゐするゆふすみ人のこゝろ〳〵と神も心をうちとけ給へ
　まとゐはまはり居たる也。ゆふすみ人とは神樂うたふとも
　かくなり。かれかこゝろに神も打とけ給へとよめるなり。日
　本紀ニ云。
　くらやみの天の岩戸もあけぬへしさ夜すみ人を歌ふ神樂に
　秘說ニ云。よひのまは夕すみ人といふ。夜ふけぬれはさよす
　み人と云也。
五十二　　　　　　　　　　　　　　　　貫　之
ちはやふる神の鳥非に立そひて幾代そへぬるゆつかつら木そ
　あし原の中津國に。天稚彥と申す神の家のまへに植たりし
　木也。日本紀委有。
五十三　　　　　　　　　　　　　　　　興　風
千早ふるみわすれ時のみわにゑひてねきか酔〳〵心ならすも
　みわすとは神の祭也。みわとは酒なり。みきといへとも。神
　に奉る時はみわと云也。
五十四　　　　　　　　　　　　　　　　人　丸
おさもあさや神のとつかの太刀もかな我妻招て人こゝろ見ん
　おさもあさとははらたちやと云也。とつかの太刀とは伊弉
　諾伊弉冉尊の御佩給へる太刀也。とつかとは十拳の握い在太

刀也。日本紀に有。事なかけれは不言。

五十五　　　業平

わたつみの波のまに／＼たゆむ也いさゝかけ舟さゝうこけ共

いさゝかけふれとは帆かけたる舟をいふ也。たゆむとはゆらるゝ義也。

古今打聞下

鳥部

一　　　業遠父

しなぬ鳥おちくる磯のなくゝりにかゝる思ひにゆく方もなし

しなぬ鳥とは鶏を云也。なくゝりとは嘴を云也。かゝるはそへたる也。

二

かゝなきのかやゝこ鳥に物とはんわか思ふ人にいつか逢へき

からなきのかやゝこ鳥とは烏鵲を云也。たゝかやことりとも讀也。貫之かの鵄をよめるうた。

野も山も皆白妙に雪ふれはやみのうちまてなくかやゝ鳥

三　　　興風

春の野ゝひめひなとりそあかるなる霞のうちに聲さこえつゝ

雛姫ひな鳥とは雉を云也。春の野にあかる也。

四　　　家持

鶯の梅の花かさぬゐおれはてつたひしたりさゝら（り歟）をと鳥

鶯の梅の花かさをうるはしくぬふにはあらす。うた柴也。さゝりをとは百舌鳥と云鳥也。

五　　　赤人

興津島さしての磯にまとゐしてみつむしなら（す歟）はみなこさも鳥

おきつ鳥は奥にある鳥也。さしての磯と云も。たゝさし出たるいし也。まとゐしてとはまはりいたる也。みつむしならすとはうた（前）ならすといふなり。又水むしともいふへき也。みなこさも鳥とはみさこと云鳥也。

六　　　赤人

わかの浦に汐みちくれはかたをなみ芦へをさしてたつ鳴渡る

たつとは鶴也。あしへとは葦の生たるほとりなり。

七　　　黒主

五月雨の雲間になきこ（お脱歟）すくるなり思はす顔のみつきすことり

黄鳥にほとゝきすとなし鳥也。さま／＼の異名あり。うなひこ鳥。しつこことり。してのたをさ。くきらとも云也。此異名の中に時鳥といふは。いたいけしたれはいひならはせるなり。みつきすこ鳥。たなをさりけれは。秘する名なり。みつきすことりとは。四月五月六月はかりあれは。三月すこ鳥と云也。

八　　業平

ますらなのえんひな鳥をうらふれて涙なあかくおとすよな鳥

ますらをとは下衆男を云也。よな鳥とはうとうと云鳥をいふなり。えむひな鳥とはその鳥の子を云也。此うとうといふ鳥は。海の浜の渊なんとに。穴をほりて子をうむ也。其子を人の取に行は。わひうらふれて。なくなみた紅也。うらふれてはうらむる也。されは世に子を思ふ鳥也。

九　　人丸

山深みつはさたま鳥木居をしてみるにもおつる空なとふとり

つはさたま鳥とは鷲也。こゐとは木にゐたるを云也。わしの木に居て鳥をとふ鳥をにらむれは。其鳥おちて落る也。

十　　貫之

あはれにも子を思ふとてすかれ鳥野へをつく火の灰と成ぬる

すかれ鳥とは雉なり。きしは子をおしみて。野の焼るにもたゝ焼死するなり。

獸部

十一

山の霧に|　|去なやまとはせる物あはれけにすゝかなく也

すゝかとは雌鹿をいふなり。すかるとは雄鹿をいふ也。

十二　　家持

のとこ人すたらんしゝをとらん逆岩やの内にくさ火けふたつ

のとこ人は獵師也。くさひけふたつとは草火煙也。すたらんしゝとはむしなといふものなり。此獣と云ものは。岩屋のうちに取とて。穴の口に草を焼て。けふりを入て薫消すなり。さてうちころしてとる也。

十三　　深養父

さよふけてあさくまきぬに逢ぬるかみえひきくまのうらふれて鳴

あさくまきぬとは猫を云也。みえひきくまとは鼠をいふなり。うらふれてとはうらみてと云也。

十四　　小野篁

宮城野ゝ小萩か下をとことして親をもしらぬ露むすひみゝ

露むすひみゝとは兎の子のちいさき也。兎はうみて後子をみる事なし。子もおやに逢事なし。露をくらひてそたつ也。

十五　　黒主

さ夜ふけて柴の戸たゝく嵐かなましらの聲ををのか宿にて

草部

十六　　伊勢

我宿のかきねにおふるみき草の華もさかりになりにけるかな

みき草とは蓮葉と云草也。

十七　　閑院

あまつ人今やくたりてなかむらんよしろいろ草花さかりなり

あまつ人とは天人をいふなり。よしろいろくさとは牡丹な

り。此花た天人の下て見給也。

十八　元方

詠めわひぬなのかいろ〳〵咲匂ふ蘭のうちのさいさかもはな

さいさかもはなとは萬黨花を云也。

十九　人眞

こやの池のきしふく風の夕まくれ波にかたよるみすも草かな

みすも草とは菱を云也。池沼なんとに。水の上に浮草の様にて在也。

廿　人丸〔かイ〕

つくまえの沼のみしはをふみ分てなく鶴のこゑはあはぬ君哉

みしはとは笠ぬふ菅をいふなり。つくま江とはあふみの國にあり。

木部

廿一　貫之

きみかへんやを萬代のためしかな千世木の枝につるすくふ也

千世木とは松をいふ也。松は千年ふるといふに付て。千代木と云也。

廿二

國近きはみつきの葉に風ふけはむすひそはてぬぬる玉の夢

はみつき葉とはかしはの葉也。ぬる玉とは夢を云也。

廿三　兼藝法師

大井川いそきの筏くたすなりしつのなのこのはいや華して

いそきとは榾を云也。しつのなのことは下衆男也。

雑部

廿四　赤人

夏といへは[illegible]になり[illegible]のもとのあなた此方のゆきゝさほ花

ゆきゝをほはなとは薫[illegible]を云也。

廿五　黒主

さみたれに池のみつ草くちにけりこよひはしけく螢とひかふ

みつくさとは蒲を云也。かま朽て螢となるといふ事在なり。

廿六　閑院

冬くれは四方の楢は葉おつれと霜にあらそふときはいろもき

ときはいろもきとは[illegible]といふ木也。ふゆも枯すして常葉なり。かるかゆへに霜にあらそふと云也。

廿七　小野篁

花さかは吉野の山のひとつもりあなた〳〵にあらしふるなへ

ひとつもりとは雲をいふなり。そとつもりとも。あなた〳〵とはあなかしと〳〵といふ心也。ふるなへ。吹うらなへと云也。

廿八　讀人不知〔[illegible]〕

有明の月入かたにほとゝきすにしのおもすみ鳴すきけい

おもすみとは山のはを云也。

深養父歌云。

おもすみにまた出やらぬ月影をなをたちかくすよひの村雲

富士十名 他本

藤嶽。　鳴澤高根。　常鑄山。　塵山。
二十山。　三重山。　新山。　見出山。
三上山。　神路山。

永享十年五月廿二日書之。如本。

寛保元辛酉年三月下六日書寫畢。

速水房常

〔右古今打聞以古語深秘抄校合〕

新撰髄脳

歌のさま三十一字惣して五句あり。上の三句をは本と云。下の二句をは末といふ。一字二字のあまりたれとも。うちよむに例にたかはねはくせとせす。凡歌は心ふかく姿きよけにて。心におかしき所あるを。すくれたりといふへし。事多く添くさりて（すイ）やと見ゆるかいとわろきなり。一筋にすくよかになんよむへき。心すかたあひくする事かたくは。まつ心をとるへし。つゐに心深からすは。姿をいたはるへし。そのかたちといふは。うちきゝきよけにゆへありて。歌ときこえ。もしはめつらしく添なとしたる也。ともにえすなりなは。いにしへの人おほく本に歌まくらを置て。末に思ふ心をあらはすさまをなん。中頃よりはさしもあられと。はしめにおもふ事をいひあらはしたる。なをつらき（わるきイ）事になんする。今の人のこのむ。これかさまなるへし。

こゝにいふ九首の風躰也。

風ふけは興津しら波立田山夜半にや君か獨りこゆらん

これを歌の本にすへし。

なにはなるながらの橋も作る也今は我身を何にたとへん

これは伊勢の子か中務君にかくよむへしといひける歌なり。

継せしとみたらし川にせしみそき神はうけすも成にける哉

これは深養父か元輔にをしへける歌也。

世中を何にたとへん朝ほらけこき行舟の跡の白波

天原ふりさけ見れはかすかなるみかさの山に出し月かも

和田の原八十島かけてこき出ぬと人には告よ海士の釣ふね

これはむかしのよきうたなり。

思ひかねいもかり行は冬の夜の川風寒み千鳥鳴也

わか宿の花見かてらにくる人は散なむ後そ戀しかるへき

かそふれはわか身に積る年月を送りむかふと何いそくらん

これらなんよき歌のさまなるへき。(右九首の心詞をよくおもふへし。)

歌の病をさくいふ中也しに

とをあまたあくる中に。むれと去へき事は。二所におなし事のある也。たゝしことはおなしけれとも。心ことなるは去へからす。

みやこみやこ同おなしく心こと也さらす

深山には松の雪たに消なくに都は野邊の若菜摘けり

とはことなれとも。心おなしきを猶去へし。

御侍御笠の御み字也

みさふらひみかさと申せ宮城のゝ木の下露は雨に勝れり

すくれたる事のある時は。惣して去へからす。

山二あり本還のなれは病とならす

み山には霰ふるらし外山なる正木のかつら色付にけり

わさと同し事を重てよく所々によむ一體の事也

ことさらにとりかへしてよみ。所〱に多くよめるは。皆さるさま也。其常ともに病にかゝす。

[illegible]

又ふた句に末に同字あるは。世の人みな去物也。句の末にあらは共。とはの末にあるはゝみゝにとゝまりてなんきこゆ。

散ぬれはのちはと後にとみゝにたつ也

散ぬれはのちはあくたになる花と思ひしらすもまよふてふ哉

句をへたゝらても。さらさらんよりは。おとりてきこゆる物也。(此義は初句と第二の句の末の同し字はさのみの病ならす。句をへたてゝ。第一の句の末。第三の句の末の同字を禁することは也。第三の句の末の字末韻也。)

旋頭歌に。

[illegible]

打渡す遠方人に物申す我そのそこに白く咲るは何の花そも

句の末とはの末とにあれ共。くせときこえ後なり。(のゝ字なと上手の歌はみゝにたゝす也。又初句の末の字と末韻の字かはり句へたゝり。さるをさらはす。されと耳にたつ字。ぬ。た。そ。れなとの字有へからす。)

久堅のあまの河原の渡し守君わたりなはかちかくしてよ

凡ことはくいやしく。あまりおひらかなるとはなとを。よくはからひしりて。すくれたる事有にあらすはよむへからす。文字なとのふるきとはなとはつねに讀まし。ふるく人のよめるとはをふしにしたるわろし。一ふしにてもめつらしきとはを。よみいてんと思ふへし。

[illegible]

古歌を本文にしてよめる事あり。それはいふへからす。すへてわれはおほえたりとおもひたりとも。人も心得かたき事はかひなくなんある。むかしの様をこのみて。今の人にことにこのみよみ。われひとりよしとおもふらめと。なへてさしもおほえぬは。あちきなくなん有へき。

これはみな人のしりたる事なれ共。またはか〱しくならはぬ人のために粗畧をくなるへし。

旋頭歌卅八字あるへし。(此儀旋頭歌とはよのつねの三十一字の歌に七文字入たるをいふ也。すへ卅八字也。)

ます鏡そこ成影にむかひゐて見る時にこそしらぬ翁にあふ心ちすれ

ひとつの様。(此儀卅六七字なとによむ歌は一の様にて。旋頭歌にはあらす。旋頭歌は卅八九字有也。此歌はよのつね五句卅一字の中に五文字加たる也。只一の様也。)

かの岡に草かるをのこしかなかりそありつゝも君かきまさんみまくさにせん

又歌まくらに。古詞。日本紀。くに〳〵の歌に。よみつへき所なとを見るへし。

御本奥書

以祖父入道大納言(爲家卿)。自筆本令書寫畢。尤可爲證本矣。

參議藤原朝臣爲秀

右二部以雄崎雅喜本書寫了時文化三丙寅年夏六月

〔右新撰髓腦以圖書寮本校合〕

續群書類從卷第四百五十七

和歌部九十二

和歌深秘抄

愚問賢註奥書頓阿公云。根里紀王の十夢の中に。寳珠を道にかふといへる夢は。釋迦遺法弟子佛法を閑て。俗典を學する事を示すと云事を見及侍しより。深慚愧の心を生して。和歌の廣學をとゞむと書侍り。此段尤不審に付て。堯憲法印へ條々批判を所仰也。其外歌道の奥書を尋申侍處に。先此段返答云。是はわか身を歌の道に卑下してかきける也。既慈鎮和尚之御詞曰。一行禪師の大日經の疏にも。一切の詞みな陀羅尼といへり。佛若我國に出給はゝ。和國のことはをもて多羅尼とし給ふへし。高野大師も阿字をはなれたる詞なし。阿字則顯密の根本なり。多羅尼は是天竺のことは也。日本の和歌道用す。されは大日經の三十一品も。をのつから三十一字にかたとれり。世間出世の道理を三十一字の中につゝめて。衣裏の珠と心得ぬれは。神明佛陀の感應ことにあらはれて。往生の素懐をとけすと云事なし。

　思ふ事なとゝふ人のなかるらん仰けは空に月そさやけき

如此詠給ふ處に。無不審晴侍る也。この詠歌は法華經の文をもてあそはしける由。別紙に有之。

一玉津島明神は衣通姫也。是は允恭天皇の后也。彼御詠に。

　とこしへに君やはきますいさなとり興の玉ものよる時々は

紀州玉津島に祝ひ申なり。和歌吹上一所なり。然にあらいそにて社頭たちかたし。社頭祝と云題にて。堯孝法印歌に。

　七本の松を姿の神かきに君か八千世を猶そいのらむ

此歌玉津島のよし承畢。玉津島はあら磯にて。更に社頭たち得す。此七本の松を社頭に用て。參詣の輩は短尺なと彼松の枝にかけ侍りける。さる歌人まいらせたりしに。短尺を風吹

て海中へ。とりみれは。海中に島ゐなとも見え侍りけりと申傳けり。當社神秘也。本地十一面觀音也。彼とこしへの御神詠。每朝に吟詠申也。綜持院殿御時御靈夢有之。五條俊成卿の屋地に玉津島を勸請。則經賢法印を被別當職にふせられ。予今致懇祈者也。あらあらおそろしい御靈事候哉。此時俗の玉礫を令申候。恐惶々々。

まよはしと頼むちかひな玉津島島もる神も哀とはしれ

御詠殊勝打なきかたく候。賜これをはり候て可申候。今迄たれにても候へ。かやうにしるし付進たる事なく候。

一年中行事の歌合の注に云。南祭。石淸水臨時祭也。三月中午日。（有二時下午。慶上人勤之。）舞人十人。小忌衣摺得を着揷華。左櫻。右款冬。山吹。北祭。賀茂臨時祭也。十一月下酉日。元行已往之酉日也。色目同石淸水。南祭北祭は此兩社にかきる也。年に兩度祭禮當社に多之。かやうにて候。ことなる事なし。

一當座に懷紙を詠候事。先度家綱承候といへとも。慇にうけ給たく候。

飛鳥井家には一首を三行五字に被認候。是は當座の懷紙にて候哉。二條院（宋世。）なとは三行三字にもあそはし候。子細を尋申候へは。いつれもくるしからす。三行五字は昔の人書へからす。慈照院殿若君の御時。三行五字にあそはしけるか。あそはしにくきとて。已後は三行三字にあそはしけるよし。宋世物語有り。雅經卿俊成卿の門弟にて。なにとて後家にかきり。三行五字に被書候哉。是第一の不審なり。三行三字の時は。月と云もしをさへ。定家卿かなにしたゝめられ候時は如何。また後鳥羽院御宇。熊野御參詣道中の懷紙は定家。家隆。雅經。寂蓮。其外二行七字にかきなへり。もし更に定まらす。又爲重卿の一首の懷紙の三字の所を。一字まなを入られける程に四字になる。其懷紙自筆を寫之とめ畢。

秋日同詠榮待十五夜和歌　參議藤原爲重

すむ月のはやゆみ
はりもすくる夜になか
はのあきをいそく
北かな

元日陪　和歌所詠
松影浮水和歌　正二位[illegible]

こけのむすいはねの
みつのわきてまた
松もふかむる千代

のかけかな

委細披見申候處に心得す候。承候ことく。月なきへかなに定家卿被認候。かやうの儀不審にて候。今も冷泉家なとには。爲重卿のことく認候人も候。二條家にはかつて不存候。又雅親卿の三行五字此方にも仕候。是は當座の御會の懐紙にて候。拙老も此御會の時人數にて候。和歌所開闔二十三歳の時被仰付候。一首天下同様候。各へ尋候いたきはやいの時分心願計にて候。

一懐紙の寸尺の事。總にしるし可被下候。四品なとのかたは。長かれ一尺一寸はかりにて候。高檀紙たるへく候。たゝ尋常の仁は一尺七八分はかり。それも貴人なと參會の時は。長を一二分つゝめらるへく候也。又人により候て。一尺四分又は六分にも申付候。已前以面令申候間。不能一二候。

一短册の事。廣さ一寸八分かれ定各存仕候歟。同長を知度候。たんさく箱なとも子細候哉。

短册の長の事。爲世卿頓阿申合候哉。長さ一尺にて候。唯今入見參候。此題岸柳爲世卿自筆にて候。裏書は頓阿。重而子細は堯孝筆跡にて候。御覽候上は不及注候へ共。承候間如此候。短尺箱も是に相應たるへく候。かけこあるましく候。同心葉無之。仍短尺箱に短尺を入候時は。つゝむ事なく候由。可得御意候。（短尺箱長サ一尺二寸五分。横二寸。）

一女の懐紙已前拜見候。雖然總にしるし可給候哉。女の懐紙事。別紙に認可進候。女の懐紙をは披講以後まきて置候。とち候間敷候。同とうほうの懐紙も取かされ候まへにて候。總の懐紙にはとちも候ましく候。かやうの故實已下いかほとも候。御尋に付ては可申候。心うへく候。いまゝてはたれ〳〵にても御尋なく候間。申たる事もなく候。

一當座の題數とり候事。上手貴人又は達者の體は數首仕候由承置候。さやうにあるへく候歟。又題を被出給候時は。硯蓋の蓋に左の手をかけ。右の手にて題をとり退出勿論也。題なとえらはす。たゝ上に子細を尋申。歌を可仕候よし承候。かやうにこそあるへく候哉。又題を給に罷出候時は。あふきをぬきてなき候。題をは取て退出の時は。懐中候へき由申候。故實可蒙仰候。此段申候處なく候。尤珍重候。但題數を取候事は。先達者相はからひてよませ申事に候。なをも以面會具可申候。

一滿願寺殿（堯孝之事也。）古今集相傳の人數承度候。先師に古今傳受の事御尋候注進候。

細川讃岐守成之。（慈雲院道雲事也。）

左大臣。（實量公。轉法輪三條也。）

内大臣。（公保。三條西。）

畠山播磨守則雅。（實能。）

（本ノ）闕可然と。片岡近江守。是は秋の上部まで一度の相傳也。此外になし。堯孝自筆にて書置候間。可入見參候也。

一隣多體文五音相通。

アカサタナ　ハマヤラワ
イキシチニ　ヒミヰリイ
ウクスツヌ　フムユルウ
エケセテネ　ヘメヱレヱ
オコソトノ　ホモヨロヲ

尤可然候。肝要也。あら／＼ぬつらしの御尋候哉。

一いなおほせ鳥の事。秋田といふ題にて。

宋世

秋の田にはらみてなひくこれやこの稲負鳥の契しるらん

此鳥の事承候。〔註脫歟〕委屈案抄に見えたり。又已前も申ことく。卷頭につきては。秋の卷頭又當流なり。かやうの事共に人のしらさる事也。御心安さのまゝ申候。いつれも他見有ましく候哉。

一古今集は延喜聖主の撰集を。何とて定家加奧書。結句貞應の本嘉祿の本なとゝ相違候哉。此段不審無極候。具承度候。此段ふるき事にて候。二條家冷泉家の相違歟。但貞應之本奧書に。傳于嫡孫。可爲將來證本之由あらうへは。自余に准すへらす。

一伊勢物語の事。飛鳥井家に相傳申事。さやうにも候哉覽。伊勢物語彼家に相傳の事さも候らん。如此の事は支證明鏡たるへき家肝要候。いかさま可入見參候。秘歌の所さしなと（本ノ）に付ても。　新續古今集被撰候時。　雅世卿先師に誓文をもて相傳候。已前御披覽の事候間。不及是非候。

一古今六流の事。いつれの家にて候哉。賴風なとも一流のよし蒙仰候つる。さやうにも候哉。彼六流の事申つたへ候分。賴風。俊頼。定家。家隆。雅經。知家なとの事候哉。但俊頼は經信卿の傳也。夢想なとゝ申事に付て血脉なし。俊成卿定家朝臣は基俊の說をうけられたり。家隆雅經等は定家の跡たるへし。知家同。此外顯昭なとも色々申旨あり。よく／＼猶引勘〔勘歟〕可申候。

一混本歌。旋頭歌の事いかゝ。委細存知仕度候。これらはまつりことにてよむ子細有。以面會可申候。

一物の名の事。をか玉の木。百和香。川なくさ。さかりこけ。くたに。のちまき。此等の事ふるくうけ給る說に云。をか玉の木は大晦日に門松をたてけるに。そのそはにわり木をたてそへたるに。來年の月の數をひいてたてける。それをゝか玉の木といふ也。文字には證載木。かやうに書侍りける。百和香。せんほうの時。花ひらを入てもち候籠の裝束の名といへり。又合香といふ人あり。いつれを是とすへきにや。是又不

詳。消なくと云事。たゝ河霧といへる人有。又ある本にたなと云草のよしいへり。是又具にしるし給ふへし。さかりこけの事。たゝ我由たとの木にかつらのさかりたるをいふ。又ある説あり。又日影のかつらといふ物のよし申也。くたにといふ草は糸なとまく／＼たるのよし也。[illegible]頭あり。あとにけつり花とす。[illegible]よしさたに[illegible]すみよしの岸の忘草の事。[illegible]花のよし注たる本あり。何れも證義は難説たるへし。可承之。

此集々更に[illegible]をいふも[illegible]にも[illegible]の事。[illegible]よしの[illegible]の時に入て。はり一封して進上あり。[illegible]よし申上。[illegible]御目ひとつにて御覧有し。もとのことく上封して。返しつかはされけるあひた。楚忽に相傳の義あるへからさる事とも也。御入魂ともの段。毎事すてかたく候てしるし付候。相かまへて／＼外見なゆるさるへからす。[illegible]可申候也。

一人丸赤人の事。二名一體のよし相承有。これは白樂天白居易二名一體の儀をもてかつらにおもり。[illegible]よりあしかへされて赤人と云。白樂天か[illegible]を[illegible]をかうふり。[illegible]に付けけるなり。[illegible]して[illegible]白居易といふ。[illegible]の[illegible]けり。此儀いかゝ[illegible]も[illegible]候。

一古今集序に。立田川のもみちは。御門の御目にはにしきと見給と書て此歌あり。よし野山の櫻は。人丸か心には雲かとなんおほえけるとかきてその歌なし。或人云。崇徳院俊頼朝臣に古今集を召ける時なし紙有。その時に此歌なんありける。さては一大事と[illegible]しるし[illegible]にも[illegible]に御覧のすさ[illegible]。なし紙[illegible]とて[illegible]せられて。[illegible]をすり侍るよしたしかにしめさろ。仍

[illegible]に[illegible]と見ゆる[illegible]芳野の山の花のよそめは[illegible]にはへ[illegible]しかり。[illegible]候か。[illegible]々たれ人の説にて[illegible]申わけかたく候。いつれにも他言ゆめ／＼有また[illegible]には[illegible]人丸[illegible]の[illegible]にあそはし候な給候。[illegible]細に見えて候。

[illegible]しの山今[illegible]のおもかけに見しよのこすや[illegible]しら雲此御歌にてなを先段治定仕候と存候。誠以無冥加。かたしけなく今存候事。無窮期候也。

一[illegible]撰事。飛鳥井宗雅自筆の古今集の眞名序に撰喜と有。堯孝法印實[illegible]公に[illegible]進候自筆にも宗[illegible]におなし。此段不審。冷泉家は例の書あやまりの撰喜といへり。御不審尤に候。今も撰喜。仕候事勿論候。子細條々ある事に候。かきあやまりの義不存候。堯孝は古今集三部ならては書寫不仕候。御心得の爲に申候。

一喜撰は清和天皇御出家の御法號にて候由承候。誠に後御[illegible]

に。

我庵は都のたつみしかそすむ世を宇治山と人はいふなり

此うたは發心修行の間住給へり。たつみは東と南との間也。菩提ねはむには不至とあそはしける由有。かくのとく申說もあり。更にすてらるへからす。

一五ケの髓腦と申候は。新撰髓腦。是は公任卿作也。能因法師歌枕。仲實卿綺語抄。淸輔奥儀抄。俊賴朝臣無名抄。此等を申也。いつれも名物たるへき哉。又俊賴の無名抄あるに。長明無名抄といふ外題不審の事也。もしかはり候哉。此兩册同名御不審無余儀候。愚老も同心也。

一打聞と申事は撰歌の時の事にて候や。常德院御時。於江州五十首宛詠進仕候子細存知仕度候。打聞と申は。於大樹撰歌のときの事にて候。この時は五十首あて先詠進仕候。我等も進上候。惣して撰歌の時は。たひ〱名のかはる事候。宋世（采女イ）の歌に。浪の打きて人しれすとつゝけられ候も斷にて候。其ころ二階堂河内民部なとゝ申人とりさた候歟。つゐに全部はて候はて。大樹むなしく成給候事。無念至極候。

一土佐日記の事。於歌道最上の子細候哉。慈照院に貫之自筆の本有。此日記の事。彼自筆本此方に候つるを。慈照院殿尭孝に御尋の時進上仕候。土佐の國へ配流の時。道すからの事を自筆に書候。歌なともあまた候。世あかりたる手跡にて。さらによみ分かたく候つる。歌道の奥旨には非す。唯自筆の處世にたくひなく。賞翫の物にや侍らん。風土記と申候て貫之作候物。是こそ奥儀至極に侍れ。此本世に希になり侍とそ申畢。

一水の柏の事。或御柏と書。又三角柏と書。いつれを是とすへきにや。但ふるきうたに。

おもふこと水の柏にとふむしのしつむにうかふ我淚哉

水の柏といふ。太神宮へ神供を備るに。伊勢島よりたてまつる草也。彼兩宮にないて。集神秘のよしあり。此柏を水へなかしけるに。しつむには神供を備へす。うかふに神供を備るよしあり。此歌のこゝろたしかにしつむにうくはとよめる。心相應侍にや。御覺悟の段尤候。我等も同心此事に候。

一古今集序。

この殿はむへもとみけりさき草の三葉四葉に殿作りせり

むへは道理とかけり。さき草は檜木といへり。三葉四はに申旨あり。しゐて御尋候間注付候。七代の事也。七代とは末代の事也。いかにも秘せらるへき事也。

一都鳥よふこ鳥の事。已前得尊意候條。不及注付。

一思ひ草の事。八雲御抄にには月草といへり。但爲重卿千首の題に。寄月草戀。寄思草戀とある時には。さらに別とみゆ。先年褒貶の時も種々さたあり。思ひ草は茅草也。尾花かもとの思ひ

草とよめるも此事也。花咲へからす。釋尊獅子の座に書（故歟）も此草也。何事も諸願成就の草といへり。後成恩寺殿歌林良材といふ物に。千草とあそはしたり。もし相違歟。いかにも〳〵ひせらるへき事第一の相傳也。

思ひ草葉末に結ふ白露のたま〳〵きては手にもたまらす

俊頼の歌なり。これも此茅草と心得へし。

一むらかしはの事。堯惠云。

家隆

あらし吹遠山もとのむら柏たか軒はより雪はらふらん

此村柏は雪はらふこしきといふ物也。かしはの霜枯て。むら〳〵残りたるに嵐の吹躰を。こしきに似たるによりて讀るといへり。

さる說こそ候へ。更にすてられ候ましく候。なをも申旨あり。かしはに七種の口傳あり。期面會候。

一山たち花の事。八雲御抄のことく牡丹の事にて候哉。然者古今集のやまたち花の歌も同前歟。尤此說にて候。さしたるならひ有とも不存候。

一きくをおきな草といふ人あり。八雲御抄に。をきな草と白頭草といつれも別と見えたり。

八雲御抄のことくたるへし。但彼御抄にも相違ともありて。相傳の子細有之。

一古今集部の名の事かやうに相傳あり。

一。ふるとしの巻。
二。はつ花の巻。
三。花なみの巻。
四。はつ秋風の巻。
五。山風の巻。
六。初時雨の巻。
七。さしくし（すイ）の巻。（或本曰さゝれいしの巻）
八。うき雲の巻。
九。もろこしの巻。
十。うくひすの巻。
十一。あやめの巻。
十二。あた夢の巻。
十三。思ひのまき。
十四。花かつみの巻。
十五。おほろ月夜の巻。
十六。わたり川の巻。
十七。うきふれの巻。
十八。十九。無。（或本ニ十八。あすか川の巻。十九。たかおの巻。）
二十。はつ春の巻。

又云。同部異名事。
一。はつさくらの巻。
二。うらつたひの巻。
三。山風の巻。
四。うくひすの巻。
五。月の前の巻。
六。〔ゆィ〕わさふみの巻。
七。行春の巻。
八。にはたつみの巻。
九。くれのおもの巻。
十。しなかとりの巻。
十一。うす紅葉の巻。
十二。玉つはきの巻。
十三。思ひ寐の巻。
十四。かろかやの巻。
十五。あさ衣の巻。
十六。した鴫の巻。
十七。夕暁雨の巻。
十八。久かたの巻。
十九。木の下風の巻。
二十。ゆふつゝみの巻。

万葉集にもかくのごとく侍るやらむ。さうもんの巻と有は戀の部なり。此時なたく〵一大事の相傳と思ひ侍り。かやうにしるし候説有之。すてられましく候。一日閑談可申候。此抄物等之事。箱の底を出さるへからす存知旨候。

一重而旋頭歌の事申入候。旋頭歌といへるは。かみに歸るとよむは。むかしにかへるとよむなり。神代は句もさたまらす。出雲の八雲の詠歌より三十一字に成て後。五句の躰を詠するに。心あまる時には。六句の詞を用て。昔の躰に似たる也。むかしの躰に似たれは。かみにかへるといふ也。されは古今の序に旋頭といへり。是も上に歸るといふ義なり。濱成の式には此歌を變本と名つく。双本も本にならへといふは。彼も是もみなむかしに歸るなり。胸にも腰にも終にも。七字五字をもそふる也。胸の七字をそへてよみける歌。

萩の花お花くす花なてしこの花女郎花又藤袴槿の花

混本歌といへるは。もとにひたゝくとよむなり。本にひたゝくといへるも。むかしにかへるこゝろなり。五句の一句をのそきて。四句に心をつくす也。さためぬむかしに似たると云詞也。終の句を除てよめる歌。

あさかほの夕かけまたす散やすき花のなそかし

委細披覽申候。尤珍重々々。古今集にはすてに六流と申候上は。相傳の家たゝ肝要候哉。

一友則。　仁明天皇の御時。嘉祥二年十二月二十六日に生して。延喜五年九月一日五十七歳にして死す。

躬恒。　文徳天皇の御時。齊衡元年九月三日に生して。延喜六年三月三日死す。延喜の御時五十三歳也。

忠岑。　陽成院の御時。元慶七年五月十八日に生して。天慶二年九月二日九十七歳にて死す。朱雀院の御時五十二歳也。四十の歳御門へめさる。其先は定國大將隨身也。具にしるし給候。此記さも候哉らん。ふしき事いかにも〳〵可尋之。尚以きとくなる事ともをしるし給候ものかな。たゝ妙に存候。

一披講の時の時宜承度候。

讀師は短冊なと返し候人にて。是は貴統の方の役にて候。講師と申候は懷紙短尺よむ人にて候。是は若き殿のやくにて候。先したよみをよく〳〵可仕事にて候。先年慈照院殿年始の御會に。懷紙を萬葉書にあそはし候。冷泉爲富卿講師えすして。俄に虫を煩とて退出。則堯孝仕候聞。いかにも〳〵けいこ有たき事に候。かやうの義いかほとも候へとも先略之。又懷紙を取かさね候は式師にて候。披講の事也。讀師にも御座候。けんたいと申て。堪能の事候哉。講師のならひはよむにあらず。講ずるにあらずと申つたへ候。御しけ〳〵參會の上は不及申候へとも。かたのことく申付候畢。

一竹園抄と申て。會席の時宜色〳〵しるしたる抄物有。竹園はもとより親王の御から名也。いつれの親王やらん。もし宗尊にて御座候哉。後一身諸御意候に。相違之段在之。いつれの親王にて御座候哉らん。不能一二候。もとそと彼一帖拝見申候。相違も二ヶ處まてにて候間。家に不用候。其御心得をなされ候へく候。

仙洞の御歌合に人にかはりて堯孝法印。

いまよりは緑の洞もよそならぬ竹の園生の陰をあふかん

後成恩寺殿判云。みとりのほらもよそならぬといへる。よそならぬいかゝ侍らんと有。みとりの洞はもとより仙洞の御事なり。然るによそならぬにとかめ給ふ事いかゝとて。後日に堯孝法印一條殿へ御不審あるよしあり。いかゝ。此緑洞竹園の御事はまきれなし。歌合難説なと後日に不審ある事。古来これおほし。氣過て見をはるたとへなれとも。たしなみけ**いこゝろさしの行所これなり。**

一定家卿俊成卿に歌道まさり侍るとてよめる。

たらちねの及はず遠く跡ふりぬ道をきわむるわかの浦人

此うたあまねく人あやまりて。かやうにさた有。是は左大臣家の百首の歌也。後京極殿たいかにも稱美申されける歌也。

公方樣の御抄物虫はらひの時拝見候。定家卿歌なと下句なとをみななをし被遣たる　後京極殿御自筆有。

一家隆卿は猪隈中納言光隆息にて侍りけるよしあり。家隆卿

は定長の筆とみえたり。彼家は光隆。家隆。祐隆。季隆。々冬までにて斷絕と云々。

承候をくにては。家隆は道よりも歌よむ事をは本と申して侍るよし。俊成卿被申けりとあり。甘露寺なとも此一流。愚老開闔もちゝはしめて。甘露寺親長。冷泉爲富。和歌所の寄人にてはへる。

一御家の集とも銘具にしるし可被下候。頓阿をは泰尊ともあり。又感空とも有。いかゝ。

泰尊已後高野山にて感空と申候。其後頓阿と申候。仍家集の事承候。閑吟愚草。(頓阿。)松葉愚草。(經賢法印。)又我尊かをは御尋候。はゝかり多候へとも。松塵愚草とやらん可申候にや。草庵集。續草庵集。いつれも頓阿歌にて候。

一出題の事。とても御免の上はなを可蒙仰候。

題の事。七首。十首。十五首。二十首。二十五首。三十首。三十五首。三十六首。五十首。七十首。(七夕にあらす。)百首。百五十首。三百首。三百五十首。三百六十首。七百首。千首。なをもあるへく候へとも先進之候。飛鳥井家三十六首出さるよし承候。不審にこそ候へ。さのみ此方と彼家ちかひ有ましく候。題の事はいかにもやはらけてよまれ候はゝよく候へく候。

一定家卿藤河百首を難題と申。さやうにも可有之事哉。彼藤川百首のうちに難題も候。さしあたりて難題の百首なとゝ外題に書候事。心得かたく候哉。かな題の事は先年注進入候。

出題の事は。いかにもやすくとよめ候はんする題を。けいこには可然候。いくたひもたゝ堀川院の百首題肝要たるへきなり。細々愚問賢注御覽し候へく候。聊術講尺の儀不可然候。委細以書狀申候き。

一鹿苑院殿。常德院殿御詠。已前注被下て候へとも。なを此一冊にのこしをきたく令存候。

鹿苑院入道太政大臣家にて。題をさくりて歌よみ侍し時。述懷の心を權大僧都堯孝。

われまては三代につかへて玉津島かひ有神の光をそみる

この金玉おもしろくうちをきかたくこそ候へ。誠に三代になり候事。わか身もおなし事にて候。ためしすくなくこそ。

我も三代人も三代まて馴きつゝともにそみかく玉津島姫

御覽候ことく御自筆にて。殊更御判在之。等持院殿。寶筐院殿。鹿苑院殿。頓阿。經賢。堯尋。公私此三代にて候。此時御自筆御書御覽し候て。常德院殿廻此堯感律師被下候。面目至極候哉。御尋に付て此一冊にかきれて令書寫畢。

常德院殿御判在之。

なにはのよしあしもしらす。きゝしまゝの事ともを。承候に付てしるし畢。其御家の事も家道中絕の處。此方爲門弟御心さしまことにくありかたく覺候て。ひすへき事をもかへ

りみす。筆にまかせ申候。名をは和歌深秘抄とつけ候て可然候哉。以前の贈答申候憚入候。〳〵。

まよはしと心をつけは玉津島神の冥もなとかなからん

明應二年卯月日　　堯憲

追加

撰歌三ヶ之大事

一人の抄物善悪借用あるへからさる事。

一涯分可然歌抄等尋出可致忠節候事。

一撰歌中の事他言有へからさる事。

已上此三ヶ條を文言にのせ。寄人まて起請文を書候事在之。猶子細期面會候也。

〔右和歌深秘抄以東京帝國大學圖書館本校合〕

桂明抄

三日月　夕月夜　上絃月　望月

不知夜月　立待月　居待月　臥待月

廿日月　下絃月　有明月

三日月は三日の夕ほのかに出初たる。余儀なく候。夕月夜は月のはしめの月。朔日比よりの夕月夜になと。源氏物語にもかきて候へは。月の大小によりて。一日二日の夕よりも出現ある事分明候歟。十日あまりのころまても。暮天に出るほとの月を。夕月夜とよみならはし候哉。

上絃月は。七日八日九日此兩三夜のうち。月によりて半月にみえ候をよむ事にて候。

望月は十五日にて候。これも月によりて。十四五六日の間に。みちたる月の事を詠候。望に蝕のあふ事。暦道の難儀にてきための事候歟。

不知夜月は十六日にて候。望にひかれて。こよひならぬ月をも申候はんつれとも。打まかせて十六日の月をいさよひと申候。雲間木の間なとやすらふをも。いさよふと申候なり。

立待月。十七日にて候。これも望によりて。一夜にかきらぬ事に候へきなり。

居待月。十八日にて候。子細は同前候。

臥待月。十九日をよみならはして候。源氏物語に。女樂試の日を正月廿日はかりの事と書候て。臥待の月はつかのさし出たる心もとなしやと候。後遊宴廿日斗の事とて。臥待の月さし出たると候へは。十九日の夜のことくおほめき。餘情有てかきなし候にや。紫式部筆のにほひありかたくおもしろく候。

廿日月といふ題にて。爲重卿永德の比の歌に。

かそふれは昨日の月の臥まちも猶宵のまは過て出にき

近代の歌も證歌に引用候事其例おほく候。八雲御抄に。臥待は廿日月とあそはして候も。望月によりて廿日夜にもよみ候はんずる事。不審なく候へとも。月の百首なとに題に出し候次第。十九日の月にあきらかに見え候。廿日月是又無餘儀候歟。下絃月。廿一日二日三日の月。半月にみえ候ほとの事にて候。たゝ弓張月と候題には。上絃をよむへきよし口傳候也。有曙月は曉かけてよち出る末の月にて候。又廿日よりうちの月をも。殘月になよひては有明と申へきよし先賢申傳候也。

此小冊依室町殿御所令註進候也。誹善菩薩戒尼鏡秀令書云々。

文安五年七月日　　和歌所舊老法印在判

承應元壬辰仲冬十一日。於仙佐倫閑寫之。前々段々祖父入道之御自筆也。此小冊借用或方へ間。奥識紙書之事。

金吾校尉益經

續群書類從卷第四百五十八

古來風體抄上

和歌部九十三

やまと歌のおこり。其きたれる事とをいかな。千はやふる神代よりはしまりて。敷島のくにのことわさとなりにけるよりこのかた。そのこゝろおのつから六義にわたり。そのことは萬代にくちす。かの古今集の序にいへることく。人の心をたねとして。よろつのことの葉となりにけれは。春のはなをたつね。秋の紅葉をみても。歌といふものなからましかは。色をも香をもしる人もなく。なにをかはもとのこゝろともすへき。この故に代々のみかともこれをすて給はす。氏々のもろ人もあらそひもてあそはすといふ事なし。よりて昔も今も歌の式といひ。すいなう。歌枕なといひて。あるひは所の名をしるし。あるひは疑かはしき事をあかしなとしたるものは。家〳〵我も〳〵と書置たれは。同しことのやうなから。あまた世にみゆる物なり。たゝこの歌のすかたことはにおきて。よしのかはよしとはいかなるをいひ。難波江のあしのあしとはいつれをわくへきそといふことの。なか〳〵いみしくときのへかたく。しれる人もすくなかるへきなり。しかるにかの天台止觀と申文のはしめのことはに。止觀の明靜なること前代もいまたきかすと。章安大師と申人のかきたまへるか。先打きくよりことのふかさもかきりなく。おくの義もおしはかられて。たうとくいみしくきこゆるやうに。この歌のよきあしき。ふかきこゝろをしらんことも。詞をもてのへかたきを。これによそへてそ同しくおもひやるへき事なりける。さてかの止觀にも。先佛の法をつたへたまへる次第をあかして。法のみちのつたはれることを。人にしらしめたまへるものなり。大覺世尊のりを大迦葉につけ給へり。迦葉阿難につく。かくのことく次第につたへて。師子にいたるまて廿三人

なり。この法を傳る次第をきくに。たうときもおこるやうに。うたもむかしよりつたはりて。撰集といふ物もいてきて。萬葉集よりはしまりて。古今後撰拾遺なとの歌のありさまにて。ふかくこゝろをうへきなり　たゝしかれは法文金口のふかき義也。これは浮言綺語のたはふれには似たれとも。ことのふかき旨もあらはれ。これをえんとして佛のみちにもかよはさむため。かつは煩惱すなはち菩提となるかゆゑに。法花經には若說。俗間經書(略之。)資生業等。皆須正法といひ。普賢觀には。なにものかこれつみ。なにものか是福。罪福無主。我心自空なりとときたまへり。よりていま歌のふかきみちも。空假中の三諦に似たるによりて。かよはしてしるし申なり。歌のよきことをいはんとては。四條大納言公任卿はこかねの玉の集と名つけ。通俊卿の後拾遺の序には。ことはのぬいもののことくに。こゝろ海よりもふかしなと申給れと。かならすしも錦ぬいもののことくならねとも。歌はたゝよみあけもし詠しもしたるに。なにとなく艷にもあはれにもきこゆる事のあるなるへし。もとより詠歌といひて。こゑにつきて。よくもあしくもきこゆるものなり。このこゝろは年比もいかて申のへむとはおもふたまふるをこゝろにはうこきなから。詞にはいたしかたく。むねには覺えなから。口にはのへかたくてまかりすきぬへかりつるを。いまあるたかきみやまに。このやまと詞のみちのかけをも。ふかくしろしめせるあまりに。歌のすかたをもよろしといひ。詞をもいみしともいふとは。いかなるをいふへき事そと。すへて歌をよむへきおもむき。あまのたくなは事なかくとも。もしほ草かきのへてたてまつるへきよし仰せいたされたる事あり。これはまとにこのみちをつくは山のしけり。わたつうみのそこまても。ふかくしろしめしたるあまりに。たつねおほせらるゝとなり。よにある人は。たゝ歌はやすくよむ事とのみこゝろをえて。かくほとふかくたとらんとまてはおもひよらぬものなり。しかるをこのみちのふかき心。なをことにのはやしをわけ。ふむてのうみをくむとも。かきのふへきとはかたかるへければ。たゝかみ萬葉よりはしめて。中古々今。後撰。拾遺。しも後拾遺よりこなたさまの歌の。ときよのうつりゆくにしたかひて。すかたもこと葉もあらたまりゆくありさまを。代々の撰集にみえたるを。はし〳〵しるし申へきなり。それにとりて歌の姿こゝろ申のへかたしとても。ことに佛道にかよはし法文によせて申なすと也。なをわたくしのためのことなとこそあらめ。きみもみそなはさんとは。むねとはまつと竹とのとしをいひ。鶴とかめとのよはひなとをこそひくへかりけれと。そしりいふ人もありぬへきを。身にとりて淺茅かすゑの露。もとのしつくとならんと。あすを待へきにあらぬを。和歌のうらのなみのをとにのみおもひをかけ。住の江のまつの色にこゝろをそめ

て。鹽やのけふり一方になびき。いりえのもくつさま〳〵にかきつめむとの。このみちの爲もかへりてをろかにやとて。もしふてのあとのしはしもとゝまり。松の葉の散うせさらんほとは。をのつからあはれをもかけ。又そしらんともがらも。このみちに心をいれん人は。よろつよのはる千年の秋の後は。みなこのやまと歌のふかき義によりて。法文の無盡なるをさとり。往生極樂の緣をむすび。普賢の願海に入て。この詠歌のこと葉をかへして。佛をほめたてまつり。法をきゝてあまねく十方の佛土に往詣し。先は娑婆の衆生を引導せんとなり。建久ときこゆる年のやとせ。ふん月のなかの十日比。くさの庵夕風すゝしく。こけの袖もあさつゆしけきにつけて。する墨もかつあらはれ。老の筆のあともいとゝみたれなから。しるし終りぬるになむ。この集をはいにしへよりこのかたのうたのすかたの抄と名つくといふ事しかなり

三十一字のうたのはしめは。更に申もことふりにたれと。そさのをのみことの出雲のくにゝいたりて。みやつくりしたまふ時。やいろのくもの立けるによみたまへる歌。

八雲たついつも八重垣つまこめに八重垣作るそのやへ垣を

あまつかむのみむまこ。わたつみひめに住かよひたまひけるを。うのはふきあへすのみことをうみをきたてまつりて。わたつうみの宮にうつりたまひける時に。よみたまへる御歌。

おきつ鳥かもつく島にわかいれし妹は忘れしよのこと〳〵に

かくよみたまひたりけれは。とよたま姬の御返し。

あか玉の光はありと人はいへと君かよそひし貴くありけり

となんありける。これらは神代のことなるへし。人の世と成ては。おほさゝきのみかとゝ申ける。みこにおはしましける時。おなしき御おとうと宇治わかこと申けると。くらゐをたかひにゆつりたまふとて。なにはにおはしましけるを。位につきたまふへきほとちかく成ける時。王仁といふ人のいふかりおもひて。よみてたてまつりける歌。

難波津にさくやこの花冬こもり今を春へとさくやこのはな

この事は應神天皇と申人の代となりて。神武天皇より十六代にやおはしますらん。この應神天皇と申は宇佐の宮八幡大菩薩におはします。その御皇子このかみをおほさゝきのみこと申。その御をとうとを宇治わかこと申けり。みかとうちわかこをやとに御愛子におはしましけん。東宮にたてまつらせたまひにけり。そのゝちみかとかくれおはしましにけれは。東宮位につきたまふへきを。いかてかわれこのかみをおきたてつりては位につかん。おほさゝきのみこはやくらゐにつきたまへと申たまひけるを。又われはこのかみなりとも。宇治わかこをまつ位にとおほしけれはこそ。太子にはたて〳〵まつらせ給ひけめ。いかてか父の御こゝろさしをたかへたてまつらん。宇

治わかこはやくくらひにつきたまへ[illegible]。われはなにはにおはしましにけり。又宇治わかこ[illegible]に[illegible]にけり。そのほとにくに〳〵のあまとも[illegible]のつ[illegible]の[illegible]ちにもてまいれは。我は天皇にあらす。難波へもてまいれと仰せられけれは。なにはにもてまいれは。又うちへもてまいれと仰せられけれは。うちかちもてまいるほとに。なにもくちそんしけれは。あまとも[illegible]けるといふことも。この御をりのをなり。かくて三とせをへけるほとに。宇治わかこのたまはく。我このかみの王の心さしをむくふへからす。久しくいきて天下をわつらはさむやとて。わさとなるやうにてかくれたまひにけれは。おほさゝきのみこ聞たまひて。なにはよりいそきおはしまして。いかて我をすてゝ。さきにはたちたまふへきそ。いきいきかへりたまへと。何にむかひてかなしみたまひけれは。宇治わかみこいきかへりたまひて。わきゐたまひて申たまはく。これは天命なり。かきりあることなり。いかてかとゝまらんと申たまひて。又仰にふしてうせたまひにけれは。おほさゝきのみこ素服したまひて かなしみたまひて。うち山のうへにみさゝきなとしたまひてけり。そのゝちなんおほさゝきのみかとつゐにくらゐにつきたまひにけり。これを仁徳天皇と也。そのゝちたかとのにのほりて。民の家〳〵を御らんしつかはすに。民の家に烟たゝす。たけきてのたまはく。民の家にけふりたゝす。ちかつくにたにかゝり。ましてとをつくに〳〵いかならん。いま三年はくに〳〵のみつき物な[illegible]つり[illegible]ありなんと[illegible]三年[illegible]するに。民の家々みなけふりたちけり。御らんして。民とめり。われすてにとみぬと[illegible]て申たまはく。とめりとはのたまへと。御[illegible]殿しか〳〵あり。なに事かとみたまへると。みかとのたまはく。いまたきかす。民とんて[illegible]まつしといふことをと。さてよみたまへる御製也。

たかきやにのほりてみれは煙たつ民のかまとは賑ひにけり

摂民ともまいりて。いまは三年すてに過てけり。みつき物そなへたてまつらんと。[illegible]と仰られて[illegible]なを今四年はみつきものなたてまつりそ。七年をすくしてたてまつれと。七年す[illegible]に[illegible]たみ[illegible]たるわかきをいはす。材木をかたにかけてきおひまいりて。みやつくりほとなくしけりとなん[illegible]御門は[illegible]におはしますこと八十七年なり。すへて御年は百貳十七年なんおはしましける。御門の第一の御[illegible]は[illegible]へなと[illegible]なりとそ。[illegible]には申

一傳[illegible]

[illegible]おくへつかはしたりけるに。くに[illegible]るを。すさま[illegible]。

うねめなりけるものゝよみ侍る歌。

あさか山影さへみゆる山の井のあさくは人を思ふものかは

かくよみたりけるにそ。おほきみのこゝろもとけにけるとそ

聖德太子片岡山をすきたまふ時。みちのつらにうへ人あり。太子御馬よりおりたまひて。むらさきの御そをぬきて。うへ人にたまふとてよみ給へる歌。

しなてるや片岡山のいゐにうへてふせる旅人あはれ親なしおやなしになれなりけめやさすたけのきみは親なしいゐにうへてふせるたひ人あはれ〳〵

これは旋頭歌なるへし。

うへ人返しをたてまつる。

いかるかやとみの小川のたえはこそ我大君の御名は忘れめ

太子宮にかへり給ひて後。つかひをつかはしてみせ給ひければ。うへ人すてに死去しにけり。太子かなしひ給ひて。あつくはうふらしめたまひ。つかなとたかくつかれけるを。大臣馬子宿禰七のまうち君なとそしりたてまつりていはく。君はたうとき事かきりなし。みちのほとりのうへ人はいやしきものなり。しかるを御馬よりおりてかたらひたまひ。又うたをたまふ。そのしぬるに及びて。あつくはうふると申ければ。その人〳〵をめして。かたをかにゆきて。つかをあけて見るへしとおほせられければ。ゆきてあけて見るにそのかはねなし。棺のうちはいとかうはし。たゝのこりける物とてはたゝみて棺のうへにおけり。たゝ太子のたてまつれりしむらさきの御そのみそなかりける。まうちきみたちおほきにあやしみなけきて。そのよし申ければ。太子ふかく戀慕し給ひて。つねにそのうたを誦したまひけり。

聖武天皇東大寺をつくり給ひて。供養あらんとての日。行基井難波の岸にいてゝ。南天竺の婆羅門僧正をむかへられけるとき。僧正菩提のきしにつきて。たかひに手をとり。ゑみをふくみて物かたりし給て。行基菩薩のよみ給ひける歌。

靈山の釋迦のみまへに契りてし眞如くちせすあひ見つる哉

婆羅門僧正のかへし。

かひらゑに共に契りしかひありて文珠のみかほ逢みつる哉

又行基菩薩またわかくおはしける時。智光法師に論義にあひたまへりけるを。智光すこしけうまむの心にやありけん。わかきかたきにあひたりとおもへるけしきなりければ。歌をよみかけられける。

まふくたか修行に出しかた袴我こそぬひしか其かたはかま

かくいはれて二生の人にこそおはしけれと歸伏しにけり。この事は行基菩薩のさきの身に。やまとの國なりける長者なといひけるは。國の大領なとやうのものにやありけむ。その家のむすめのいみしうかしつきける。かたちなといとおかしかり

けるを。門もりする翁(をみなイ)のありけるか子に。まふくたといふ童ありけり。十七八はかりなりけるか。その家のむすめをほのかにみて。人しれすやまひになりて。しぬへくなりにける時。はゝの女そのよしをとひきゝて。我子いけてたまひてんやと。もらしいひいれたりけれは。むすめ大かたはやすかるへきやうなる事なれと。むけにその童のまゝにてはさすかなりぬへし。さるへからん寺にゆきて法師になりて。學問よくしてさえある僧になりてきたらん時。あはんといはせたりけれは。かくときゝていそきいてたちける。わらはのきるへかりけるにかまはもてこ。われぬいてとらせんといひけれは。母の女よろこひなから。忍ひてまいらせたりけるを。かたはかまをなんぬいてとらせたりける。さて寺にゆきて。師につきて學問をしてひろしけれは。二三年はかりにほとなくことのほかの智者になりにけり。さてのちきたりけれは。こよひといひてあひたりけるほとに。このむすめにはかに消入やうにてなくなりにけり。法師あさましくかなしくおほえて。やかて寺に歸て。道心ふかく起して。いよいよたうとくなりにけり。それなん智光法師なりける。されとわか童名まふくたといふこと。僧の中にはさしもしらせさりけるを。年へて行基といふわかき智者のいてきたりけるに。論義にあひたるほとに。そのむかしの名をかくいひて。我こそぬひしかそのかたはかまといひけるにおもひつゝくれは。我もと道心想しはしめし女は。すなはちこの行基にこそおはしけれと。我身をたうとき僧となさむとて。しはしかりにかの女とうまれてみえたりけるとこゝろをうるに。いよいよたうとくめてたくも。はちおほえさりけるに。善智識はまことに大の因縁なるものなり。この智者は智光頼光といひて。一双のたうときものなり。頼光はさきに極樂にまいりにけり。智光はその生所をみむとねかひて。後に夢に極樂にまいりて。極樂のありさま萬たらにかきて。智光かまんたらとて。よにつたへたる人なり。

又行基菩薩菅原寺の東南院にしておはりとりたまひける時。もろもろの弟子ともにをしへいましめていはく。山の虎は身をやふる。舌の釼は命をたつ。くちとしてはなのことくにすれは。のちあやまつとなし。虎はしにてかはをのこす。人は死にて名をとゝむと。またよみたまひける歌。

かりそめのやとかしかる我を今更にものな思ひそ佛とをなれ

又いはく。

法の月久しくもかなと思へともさよふけぬらし光かくしつ

かくよみて身心安穏にしてそおはり給ひける。

傳教大師のえいの山を建立すとてよみ給へる歌。

阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわかたつ杣に冥加あらせ給へ

かゝれはこのくにゝむまれもしきたりもする人は。權者も正

者もみな[illegible]
とすかたをかさり[illegible]人
の心もすなほにして[illegible]心
もふかく[illegible]
集なといふこともなかりけるにや。たゝ山上憶良といひける人
なむ[illegible]
あらさりけれ[illegible]
けん。代になへてつたはらす。みたる人もすくなかるへし。
たゝ萬[illegible]
たるはかりにそ。さる事ありけりとみえたる。宇治の平等院の
寶藏にそあなるときくとそ。少納言入道通憲と申もののしりた
りしもの。むかし[illegible]
し。此憶良と申は柿本朝臣人丸なと同ときのものなり。すこし
人丸より[illegible]
に唐にわたりなとしたる[illegible]
皇の御時になむ。橘諸兄の大臣と申人勅をうけたまはりて。萬
葉集をは撰せられける[illegible]
しゐてえらふとはいともなかりけるにや。公宴の歌もわたく
しの家々の歌も[illegible]
ゝに入れたるやうに[illegible]
丸なむとに歌のひしりにはありける。これはいとつねの人に

[illegible]すかたこ
ゝろにかなへるのみにもあらす。ときよはさま〳〵あらたま
り。人の心もうたのすかたも。折につけてうつりかはるものな
れ[illegible]まてをかゝ
[illegible]ひてなむ
[illegible]御時。紀
[illegible]とも。このみちにふ
[illegible]古今集はゑら
ひたてまつらしめ給ひけるなり。この集の比をひよりそ。歌の
よきあしきもとにゑらひさためられたれは。歌の本體にはた
ゝ古今集を仰き信すへき事なり[illegible]古今集のゑら
はるゝとは。代々おほくへたゝり[illegible]の
すかた詞つかひもとの外にかはれるへし。其後村上の御時。又
[illegible]おほし
めしけるにあはせて。かみに左右の大臣にて。小野宮のおとゝ
[illegible]かくいたれる人
々なるうへに。しもに又大中臣のよしのふ。清原元輔。源の順。
坂上の是則なといふものともさへきこへけるをめして。梨壺
[illegible]伊勢はそ
の時藏人の少將にものしけるを。その所の別當とさためおほ
[illegible]ふる歌とも

をも記したてまつらしめ給ける。さてなん勅ありて。後撰集は撰したてまつらしめ給ひける。梨壺にはたゝ小野宮のおとゝなんうけたまはりける。萬葉集はもとはひとへに眞名かなといふものにかきたるものにて。才智あるものはよみ。もししらぬ人。まして女なとはえよまぬ物にてそありけるを。この御時なしつほの五人かつはさためあはせて。源順むれと才智ある物にて。和してなんつれのかなをはつけはしめたりける。それよりのちなむいまは女なともみるとにはなれるなるへし。古今集のゝち後撰集のえらはるゝことは。延喜五年よりのち。朱雀院の御時をこそはへたてたれは。わつかに四十四年なとや程へて侍けん。されは時の大臣より初て。大中納言より下さま。大納言にて西宮のおとゝ高明公。源氏の大納言。朝忠の中納言。敦忠中納言なと。ことに歌よみおほかりけるうへに。古今集に入る人〳〵のそのゝちよめる歌もおほく。女も伊勢。中務。承香殿の大輔なといひても。すへて歌よみおほかりけるゆへに。君も詩歌のみちふかくまし〳〵て。勅撰もかさねてありけるなるへし。そのゝちの集にのこれるうたをひろへるよしにて。拾遺集となつけたるなり。よりて古今後撰拾遺これを三代集と申なり。然を大納言公任卿この拾遺集を抄して拾遺抄となつけてありける。世の人是を今すこしもてあそふほとに。拾遺集はあいなくすこしおされにけるなるへし。この拾遺集も又後撰集ののちいくはく久しからされとも。猶古今後撰にもれたる歌もおほく。當時の歌よみの歌も。よき歌おほかりけるうへに。[illegible]おほく入られたれは。よき歌もまことにおほく。又すこしみたれたる事もましれる故に。[illegible]時よりやう〳〵くたりにけれは。今の世の人のこゝろにもことにかなふにや。ちかき代の人の歌よむ風體。おほくはたゝ拾遺抄の歌をこひねかふなるへし。そのゝち久しく撰集はなくて。歌よみはおほくつもりにけるほとに。白河院の御時撰集ありて。通俊卿うけたまはりて。後拾遺は又のちにのこれるをひろへる儀となつけられたるなり。此集とものの歌を見るに。歌のみちのすこしつゝかはりゆけるありさまは見ゆるものなり。古今の後の後撰は。いかなるにか歌もふるきすかたをむねとし。詞も昔にふるきさまにかゝれたるか。いみしきことなるとそ申つたふめる。歌の中にそ贈答なとのおほくつゝきたる所の、すこしみたれたる所もあるなるへし。後拾遺の歌は。かみ村上の御時のなしつほの五人か歌をむねとして。それよりこのかた拾遺の後久しく撰集なくして。世に歌よみはおほくつもりにけれは。公任卿をはしめとして。長能。道なり。道のふ。實方等の朝臣。女は小大君。いつみ式部。むらさき式部。清少納言。赤染衛門。伊勢大輔。小式部。小辨なと。おほくの歌よみともの歌つもれる比ほひ撰けれ

は。いかによき歌おほく侍けむ。されはけにまことに面白く。きゝちかく物にこゝろえたるさまの歌ともにて。おかしくはみゆるを。撰者のこのむすちにや。ひとへにおかしき風體なりけむ。ことによき歌ともは。させる事にもなき（はイ）さまの歌のすこしさき〳〵の撰集に見えはするに。たけ（か異）のたかくたはれなる（りにけるイ）（たとちイ）へし。又その御時。大納言經信卿いますこし先達なるをゝきて。中納言通俊卿の撰者にて承り給はるといへること。すこしはおほつかなきことなり。されはにや難後拾遺といふ物ありとかや。かの大納言の歌の風體は。又ことにたけたかきをこのみ。ふるきすかたをのみこのめる人と見えたれは。後拾遺の風體をいかに相違して見侍けむおかし。これゝの院は御位おりさせ給ひて。堀川の院の御時。又このみちこのませ給ひ。百首の歌人〳〵にめすことなとありて。其又つきにける後。鳥羽院また位おりさせ給ひ。しらかはのはなみの御幸なといふ事ありける後。わか御時の勅撰後拾遺はかりはあかすや覺しめされけむ。かさねて撰集あるへしとてなん。源俊頼朝臣勅をうけ給はりて。金葉集はえらはれたるなり。其後又崇德院位おりさせ給ひて後。左京の大夫顯輔卿うけたまはりてえらへる。これを詞花集と申なり。大かた撰集は古今集より後。後拾遺までも。卷軸廿卷。うたのかすも大略千うたなとにてある。拾遺抄こそ抄なれは十卷にかきけるを。金葉集は拾遺抄を存けるにや。二の集は十卷に撰したるなり。又後拾遺よりさきの私撰にはあらて。わたくしにえらへる集ともあまたあるへし。能因法師は玄々集と云。其後良暹法師は打聞と云。又撰者なくて麗花集と云。樹下集なといひてあまたあるを。後拾遺えらふとき。能因法師の玄々集をは。なにとかありけんのそけるを。詞花集には勅撰にあらぬをはとて。玄々集の歌をおほく入たれはにや。後拾遺の歌よりもたけある歌とも入て。集のたけもよくみゆるを。又今の世の人の歌のさまてならぬにや。ことのほかの歌共のあることそ人申へき。又崇德院の撰はおほくはみな詞花の體にみなされ。をかしくそみえたるへき。歌のありさまのかはりゆくほとも。撰者のこゝろ〳〵も撰集にみなみゆる事なるへし。かくて其後又故後白川院のおほせ事にて。老法師撰集のやうなるものつかうまつりてたてまつり侍し。千載集と申。むかしのかしこき人々に及へからぬ身にて。撰集のつゝきにしるし申は。きはめてかたはらいたき事なれと。すてに勅によりてえらひたてまつりて。其又御納受ありて。蓮華王院の寶藏におさめられ侍りにしかは。撰集のつゝきにはゝかりなから申つらぬるものなり。大かたはこのちかき比となりて。わたくしの打聞撰集せぬものはすくなかるへし。そのおもむきは當時の歌おほく。又をの〳〵かひき〳〵にしたかひて。歌のかすもよきほとにはからひつゝそしたるへき。それをこの千載集は。たゝ

わかおろかなる心一によろしと見ゆるをは。その人はいくらといふ事もなく記し付て侍しほとに。いみしく會釋すくなきやうにて。人すけなかるへき集にて侍るなり。しかあれともいまはそのことちからをよはぬことになんありける。

大かた歌のみちのよしあしさたむる事は。さきにも申たるやうに。ことはをもて申のへかたし。漢家の詩なと申物は。その體かきりありて。五言七言といひ。韻を聲をさるところ〳〵かきりあろうへに。上下の句を對し。あるひは絶句。或は四韻。六韻。八ゝ。十ゝとも皆さたまれるゆへに。よしあしもあらはにみへ。又人の學問したる程も顯るゝものなれは。さすかにをして人もえあなつらぬものなり。しかるにこのやまと歌は。たゝかなの四十七字のうちよりいてゝ。五七五七々の句三十一字としりぬれは。さすかにやすきやうなるによりて。くちおしく人にあなつらるゝ方の侍なり。中〳〵ふかくさかひに入ぬるにこそ。むなしき空のかきりもなく。わたのはら波のはてもきはめもしらす。おほゆへきことには侍へかめれ。さて今は歌のすかたこと葉も。折につけつゝやう〳〵替りまかる事。撰集ともにみへたるを。まつ萬葉集よりはし〳〵申侍へし。しかるをこの集ははしめには四季をたて。春の歌よりなともせす。たゝ大部は時代をたてゝ。ふるき事をはしめとしたるなるへし。初のまきのはしめには。泊瀬朝倉の宮の御宇天皇代。大泊瀬稚武天皇の御製をそはしめのうたとはしろしおきて侍める。是は雄略天皇と申。神武より廿二代にあたらせ給へるにや。されとも三十一字の歌をはし〳〵しるし侍へきなり。

これも四季をたてなともなにかはとて。たゝはしめのまきよりしるし付侍なり。しかるをまつ長歌短歌といふ事。もとよりあらそひ有事なり。しかれとも是には萬葉集に付て長歌をは略すと申侍なり。此事は古今集よりうたかひの侍之。その故は雜體のまきに短歌部とかきて。まさしきその歌のとはの所には。貫之かふる歌たてまつるときそへてたてまつれるなかうたと書〔[illegible]〕。又みつね。たゝみねか歌の所にも。おなしくそへてたてたてまつりける長歌とかきて侍之。それを崇德院に百首の歌人〳〵にめしゝ時。をの〳〵か述懷の歌は。みな短歌によみてたてまつれと。教長卿の奉書にて仰られて侍しかは。各短歌とかきてなかうたをよみてたてまつり侍にき。また俊賴朝臣の口傳にもたしかには申きらさるへし。それを淸輔朝臣と申しゝものゝ奥義とかいひて。髓腦とてかきて侍るなるものには。ひとへになかきをは短歌とさためかきて侍とかや。大形はかやうの事は萬葉集をそ證據とはすへき所に。萬葉にはすへて卅一字の歌をは短歌反歌なとかきて。いかにも長歌とはかゝす侍なり。たとへは柿本朝臣人丸か作歌一首幷短歌二首とも三首とも申たる也。みな短歌といへるかすには卅一字のう

たにて。なかきをはたゝむねとの事にて長ともかゝす。まして短歌とかゝす。たゝ作歌一首とも二首ともいへるは。みな長歌にて侍なり。されはなかきをも長歌とはかゝされとも。卅一字をみな短歌とはかきつれは。なかきはかたかひなく長歌とみへぬ。卅一字の歌を長歌とかける所はひと所もなきなり。それをはいかゝおもして卅一字を長歌とは申へき。たゝし古今集歌と云所は。こと葉のとくうつりわたるなりといへるも。さまてとくうつら難所／＼もてふるき歌ともには侍めり。昔はたゝ詠するになかくは詠せられす。みしかくいひきり／＼詠するなり。又卅一字の歌は詠するになかく詠せしかはたゝ。よりて詠のこゑにつきて。短歌といひ。なかうたとも申成へし。いかにも歌は詠のこゑによるへきにこそなき事なれは。集とも萬葉集にはまさしくみしかけれは卅一字を短歌といへり。しかれは又長をは短歌といふへしと見へたるなり。されは古今集に短歌部とはたてなから。こと葉にはそへてたてまつれる歌とかきたれは。ふたつの說にして事をきるましとおもへるにや。よろつのことに兩說あるつれの事なり。しかれとも萬葉集の事をいひなから。ひとへに卅一字の反歌短歌を長歌といふらんすいならに。古今集をはしはしみさるに似たり。又拾遺集にはとかくことゝはす。長歌部とたてゝ。人丸かよしのゝ宮にたてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。[illegible]たてまつれたる長歌な[illegible]なかきをこそ長歌。みしかきをは短歌反歌としるし侍なり。

[illegible]

春過而夏來良之白妙能衣乾有天之香來山

はるすきて夏きにけらし白妙のころもほすてふあまのかくやま

[illegible]二首

樂浪之思賀乃辛碕雖幸有大宮人之船麻知兼津

さゝなみのしかのからさきさきくあれと大宮人の舟まちかねつ

左散難弥乃志我能大和太與杼六友昔人二亦母相目八毛

さゝなみのしかのおほわたよとむとも昔の人にまたもあはめやも

幸于紀伊國時川島皇子作歌

或云山上臣憶良作云々。

白浪乃濱松之枝乃手向草幾代左右二賀年之經去良武

しら浪の濱松かえのたむけくさいく代までにか年のへぬらん

幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麿作歌

潮左爲二五十等兒乃嶋邊榜船荷妹乘良六鹿荒嶋廻乎

しほさゐにいとこの嶋へこく舟に妹のるらんかあらき嶋わを

山上臣憶良在大唐時憶本鄕作歌

去來子等早日本邊大伴乃御津乃濱松待戀奴良武

いさことももはや日の本へ大とものみつの濱松まちこひぬらん

文武天皇
慶雲三年丙午幸于難波宮時志貴皇子作歌

葦邊行鴨之羽我比爾霜零而寒暮夕倭之所念

芦へゆく鴨のはかひに霜ふりてさむき夕へにやまとし思ふ

太上天皇幸于難波宮時歌

大とものたかしの濱の松かねをまくらにぬれといへと（しき）思ほゆ

大行天皇幸吉野宮時

三芳野の山の下風さむけくにはたやこよひも我ひとりねん

元明天皇
和銅元年戊申天皇御製

大夫之鞆乃音爲奈利物部乃大臣楯立良思母

ますらをのとものねすなるものゝふのおほまうち君楯立らしも

この御歌なとこそ女帝の御歌にまことにめてたくありかたく覺え侍れ。

和銅三年庚戌春二月從藤原宮遷于寧樂宮時御輿停長屋原廻望古郷作歌

一書云。太上天皇御製也。

飛鳥明日香里乎置而伊奈婆君之當者不可見香聞安良武

飛鳥のあすかの里をおきていなは君かあたりはみえすかもあらん

已上第一卷。

難波高津宮御宇天皇代　仁德天皇

磐姫皇后思天皇御作歌　四首之内

君之行氣長成奴山多都禰迎加將行待爾可將待

君かゆきけなかくなりぬ山たつねむかへか行むまちにか待ん

右歌山上憶良類聚歌林載也。

秋田之穗上爾霧相朝霞何時邊乃方二我戀將息

秋のたのほのうへにきりあひ朝霞いつへの方に我戀やまん

かすみはかく秋のうたにもよみて侍なり。霞にも夏もふゆも風ふかすしつかなる朝けには。山きはかすみわたりて侍るものなり。

大津皇子贈石川郎女御歌

足日木乃山之四付二妹待跡吾立所沾山之四付二

あしひきの山のしつくに妹まつと我たちぬれぬ山の雫に

おなしことふたゝひかへしてよむ事は。ふるくはかやうにのみよみて侍之。

石川郎女奉和歌

吾乎待跡君之沾計武足日木能山之四附二成益物乎

われをまつと君かぬれけむあしひきの山の雫にならまし物を

幸于吉野宮時弓削皇子贈與額田王歌

三吉野之玉松之枝者波思吉香聞君之御言乎持而加欲波久

みよしのゝ玉松かえははしきかも君かみことを持てかよはく

舎人皇子御歌

大夫哉片戀將爲跡嘆友鬼乃益卜雄尚戀二家里

ますらをやかたこひせんとなけゝともしこのますらを猶戀にけり

柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌　長歌等之内

反歌

石見乃也高角山之木際從我振袖乎妹見都良武香

石見のやたかつの山のこのまよりわかふる袖をいもみつらんか

後岡本宮御宇天皇代　有間皇子自傷結松枝歌

磐白乃濱松之枝乎引結眞幸有者亦還見武

いはしろのはま松かえを引結ひまさしくあらは（まさきくあらはまたも）またかへりみん

家有者笥爾盛飯乎草枕旅爾之有者椎之葉爾盛

家にあれはけにもるいひを草枕旅にしあれはしゐのはにもる

飯なといふ事は。此ころの人はうち〳〵にはしりたれと。歌なとにはよむへくもあらねと。むかしの人はこゝろのけはれなくて。かくよみける成へし。このうた歌さまいみしくをかしき歌なり。

太寶元年辛丑幸于紀伊國時見結松歌　柿本朝臣人麿

後將見跡君之結有磐代乃子松之宇禮乎又將見香聞

のちみんと君かむすへる岩しろの小松かうれをまたもみんかも

已上第二卷。

柿本朝臣人麿從近江國上來時至宇治河邊作歌

物部能八十氏河乃阿白木爾不知代經浪乃去邊白不母

ものゝふのやそうち河のあしろ木にいさよふ浪の行衞しらすも

同人歌

淡海乃海夕浪千鳥汝鳴者情毛思努爾古所念

あふみのうみ夕なみ千鳥なかなけは心もしのにむかし思ほゆ

しのにといふことはゝ。むかしの歌には常にかくよみて侍り。

長屋王駐馬寧樂山作歌

佐保過而寧樂乃手祭爾置幣者妹乎目不離相見染跡衣

さほ過てならの手向にをく幣は妹をめかれすあひみしめとそ

磐金之凝敷山乎こえかねてなきはなくともいろに出んやも

大宰帥大伴卿讃酒歌　十三首之内

酒の名をひしりと思ひし古しへのおほきひしりのとの宜しき

中々に人とあらすはさかつほになり見てしかも酒にしみなむ

たゝにゐて語らひするは酒のみて醉なきするに猶しかすけり

さけなとも。この比の人も。うち〳〵にはことのほかにゑひにのそむなれとも。大饗なとのはれにはまねはかりなるを。はやくははれにもおかしきとになんしける。されはこの人もかくほめてよみけるなるへし。

沙彌滿誓歌

世間乎何物爾將譬旦開榜去師船之跡无如

已上第三卷。

相聞

岡本天皇御製　長歌等之内

山羽爾味村驂去奈禮騰吾者左夫思惡君二思不在者
山端にあちむらこまはすくれ共我はさむしゑ君にしあらねは
淡海路乃鳥籠之山有不知哉河氣乃己呂其侶波戀作實將有
近江路のとこの山なるいさや河けのころ〳〵は戀つゝもあらん

柿本朝臣人麿歌　三首之內

未通女等之袖振山乃水垣之久時從憶寸吾者
夏野去小牡鹿之角乃束間毛妹之心乎忘而念哉
なつのゆく小鹿の角のつかのまもいもかこゝろを忘て思へや

大納言兼大將軍大伴卿歌

神樹爾毛手者觸云乎打細丹人妻跡云者不觸物可波
榊にもてはふるといふをうつたへに人妻といへはふれぬ物かは

藤原宇合大夫遷任上京時常陸娘子贈歌

庭立麻手苅干布暴東女乎忘賜名
にはにたつあさてかりほししき忍ふあつまをんなを忘給ふな

大伴郎女歌之內

狭穂河乃小石踐渡夜干玉之黒馬之來夜者年爾母有糠
さほ河のさゝれ踏渡りむは玉の駒のくるよはとしにもあるか
右郎女者佐保大納言卿之女也。初嫁一品穂積皇子。被寵無儔。而皇子薨之後。藤原麿大夫娉之。

太宰大監大伴宿禰百代戀歌之內

孤悲死牟時者何爲牟生日之爲社妹乎欲見爲禮
戀しなん後は何せんいける日の爲社妹をみまくほしみすれ

笠女郎贈大伴宿禰家持歌　廿四首之內

やほかゆく濱の眞砂もわかこひにあにまさらめや奧津島守
みな人をねよとの鐘は打なれと君をし思へはいねかてにかも
あひ思はぬ人をおもふは大寺の餓鬼のしりへにぬかつくかと
これは垣のしりへにと申なり。されと又餓鬼をも寺にはかきてもつくりてもあれは。かよはしてかけるなり。

湯原王贈娘子歌

波之家也思不遠里乎雲居爾也戀管將居月毛不經國
はしきやしまちかき里を雲ゐにや戀つゝをらん月もへなくに

廣河女王歌（穂積皇子孫女、上道王女也。）

戀草乎力車爾七車積而戀良苦吾心柄
こひくさをちからくるまになゝ車つみてこふらく我心から

大伴宿禰家持贈坂上家大嬢歌　雖絶數年復會、相聞往來云々。

萱草吾下紐爾著有跡鬼乃志許草事二思安利家理
わすれ草我下ひもに付たれとおにのしこ草ことにしありけり

家持和坂上大嬢歌

月夜爾波門爾出立夕占問足卜乎曾爲之行乎欲焉
月夜には門に出たち夕けとひあし卜をそせしゆかまくをほり

同大嬢贈家持歌

云々人者雖云若狹道乃後瀬山之後毛將會君(余賦)

とにかくに人はいふとも若狹路の後せの山の後もあはむ君

更大伴宿禰家持報贈坂上大孃歌之內

吾戀者千引石乎七許頸二將懸母神之諸伏

吾戀はちびきの石をなゝばかりくびにかけても神のもろふし

坂上大孃者右大辨大伴宿禰宿奈麻呂卿女也。卿居田村里、號曰田村大孃。但妹坂上大孃者、母居坂上里。仍曰坂上大孃也。

已上第四卷。

大伴淡等謹狀

梧桐日本琴一面(對馬結石山孫枝。)

此琴夢化娘子曰。余託根遙島之崇巒、晞幹九陽之休光。長帶煙霞、逍遙山川之阿、遠望風波。出入鴈木之間。唯恐百年之後空朽溝壑、偶遭良匠、散爲小琴。不顧質麁音少、恆希君子左琴。即歌曰、

伊可爾安良武日能等伎爾可母許惠之良武比等能比射乃倍和我麻久良可武

いかにあらん日のときにかも聲しらん人のひさの上我枕せん

僕報詩詠曰。

許等々波奴樹爾波安里等母宇流波之吉伎美我手奈禮能許等爾之安流倍思

ことゝはぬきにはあり共うるはしき君か手なれの琴にし有へし

琴娘子答曰。

敬奉德音。幸甚々々。片時覺。即感於夢言。慨然不得止(默)(此默)故附公使。聊以進御耳。

天平元年十月七日　附使進上

得保都必等麻通良佐用比賣都麻胡比爾比例布利之用利於返流夜麻乃奈

遠つ人まつらさよ姫つまこひにひれふりしよりおへる山の名

このまつらさよ姫は大伴佐提比古か妻なり。さてまろ(手彦)人唐にわたりけるとき。しゐてわかれをおしみて。やまのみねにのほりてひれをふりて。こきはなれゆくふねにみをけるなり。それよりかのやまをまつらやまと申なり。松浦やまは在肥前國也。

敢布私懷歌　三首之內

阿麻社迦留比奈爾伊都等世周麻比都々美夜故能提夫利和周良延爾家利

あまさかるひなにいつとせすまひつゝみやこのてふりわすられにけり

このみやこのてふりは。みやこのふるまひといふ事なりとそ申。

已上第五卷。

天平二年庚午冬十一月[illegible]時由[illegible]亦人作歌

反歌

若浦爾塩滿來者潟乎無美葦邊乎指天多頭鳴渡

わかの浦にしほみちくれはかたをなみあしへをさしてたつなきわたる

右年月不記。但偁從駕玉津嶋也。因今檢注行幸年月以載之焉。

神龜二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌

反歌

萬代見友將古八三芳野乃多藝都河内之大宮所

萬代にみるともあかむやみよしのゝたきつかうちの大宮ところ

三年丙寅秋九月十五日幸於播磨國印南野時笠朝臣金村作歌之内

反歌

玉藻苅海未通女等見爾將去舩梶毛欲得浪高友

たまもかる海少女らかみにゆかんふなかちもかな浪高くとも

山邊宿禰赤人作歌之内

反歌

不欲見野乃淺茅押靡左宿夜之氣長在者家之小篠生

いなみのゝあさちをしなへさぬる夜のけなかくあれは家ししのはる

天平五年癸酉山上臣憶良沈痾之時歌

士也母空應有萬代爾語續可名者不立之而

人なれはむなしかるへし萬代に語りつくへき名はたてすして

右一首山上憶良臣沈痾之時藤原朝臣八束使河邊朝臣東人令問所疾之状。於是憶良臣報語已畢。有須拭涕悲嘆口吟此歌云々。

天平八年丙子夏六月幸于芳野離宮之時山部宿禰赤人應詔作歌之内反歌

神代よりよしのゝ宮にありかよひたかくしれるは山河をよみ

諸兄公時參議左辨也、天平九年任大納言。同十年任右大臣。天平十六年任左大臣也。

冬十一月左大臣葛城王等賜姓橘氏時御製歌

橘者實左倍花左倍其葉左倍枝爾霜雖降益常葉之樹

たちはなはみさへ花さへそのはさへ枝に霜置とましときはの木

已上第六卷。

雜歌

詠天

あまの河雲のなみたち月の舟ほしのはやしにこきかくされぬ

右一首柿本朝臣人丸歌集出云々。

詠月

山末爾不知夜歴月乎將出香登待乍居爾夜曾更降家類

山端にいさよふ月をいてんかとまちつゝをるによそふけにける

詠雲

あなしかに河浪たちぬまきもくの檜かたか根に雲ゐたつらし

詠山

いにしへのとはしらぬをわれ見ても久しくなりぬ天のかく山

詠河

初瀬河なかるゝ水尾の瀬をはやみ井提こす波の音のさやけさ

佐檜のくま檜隈河のせを早み君してとらはよらんいひかも

羈旅歌

旅人のまきなかすてふにふの河ことはかよへと舟そかよはぬ

君か爲うきぬの池にひしとるとわかそめし袖ぬれにけるかも

右一首人麿集出之々。

寄草

月草に衣はすらんあさ露にぬれての後はうつろひぬとも

寄稲

石上ふるのわさ田はひてすともつなたにはへよもりてせく覧（つゝをらんイ）

寄草

鹽みては入ぬる磯の草なれやみらくすくなくこふらくの多き

已上第七卷。

春雜歌

志貴皇子御歌

石そゝくたるひの上のさはらひのもえ出る春に成にけるかも

山邊宿禰赤人歌

あすよりは若菜つまんとしめしのに昨日も今日も雪は降つゝ

我せこにみせんと思ひし梅花それともみえす雪のふれゝは

厚見王歌

かはつなく神南河にかけみえていまかさくらん山ふきの花

夏雜歌

山部宿禰赤人歌

こひしくはかた見にせんと我やとに植し藤浪今咲にけり

大伴宿禰家持唐棣花歌

なつかけて咲たるはねす久方のあめうちふらは移ろひなんか

夏相聞

大伴坂上郎女

夏の野のしけみに咲るひめゆりのしられぬ戀はくるしき物を

秋雜歌

岡本天皇御製歌

夕されはをくらの山に鳴鹿のこよひはなかすいねにけらしも

湯原王きり〳〵すの歌

夕月夜心もしのに白露のをくこの庭にきり〳〵すなく

冬雜歌

太上天皇御製

波太須珠寸尾花逆葺黒木用造有室者迄萬代

はたすゝき尾花さかふきくろきもてつくれるやとは萬代までに

この第八巻始終四季をたてたり。

已上第八巻。

大寶元年辛丑冬十月太上天皇大行天皇幸紀伊國時

歌十三首之内

妹かためわれ玉もとむおきへなる白玉よせこ興津白浪

ふちしろのみさかをこゆと白妙のわか衣手はぬれにけるかも

きの國の昔弓雄のひゝくやも鹿とりなひかし坂の上にそある

獻弓削皇子歌之内

さよなかとよはふけぬらし鴈金のきこゆる空に月わたるみゆ

已上第九巻

春雑歌

久堅のあまのかこ山このくれに霞たなひくはるたつらしとか

昨日こそ年はくれしか春霞かすかの山にはや立にけり

春相聞

寄鳥

春されはもすのくさくきみえす共我は見やらん君かあたりは

寄花

河の上のいつもの花のいつも〳〵きませ我せこ時わかめやも

夏雑歌

詠蟬

もたもあらん時もなかなん日くらしの物思時に鳴つゝもとな

詠鳥

さゝつやと君かとはせるほとゝきす小竹（野説以）にぬれてこゝに鳴成

夏相聞

寄花

よそにのみ見つゝやこひん紅の末摘花の色にいてすとも

秋雑歌

わかまちし白茅子さきぬ今たにも匂ひにゆかな遠方人に

皆人は萩を秋といふいなわれは尾花かすへを秋と思はん

詠蝦

みよし野の岩もとさらす鳴かはつむへもなきけり河のせきよみ

詠鳥

秋の野の尾花か末になくもすの聲聞らんかかたきくわきもこ

秋相聞

足引の山田つくるこ秀ずとも縄谷延よもるとしるかね

寄露

秋穗乎之努仁押靡置露消鴨死益戀乍不有者

秋のほをしのに押なみ置露のけかもしなまし戀つゝあらすは

この歌につきて申へき事の、かつはすきぬる比侍しなり。其[illegible]は前中納言匡房卿の集には見えぬことなれと。つらゆきか集に[illegible]の御時[illegible]親王御屏風の歌に夏かくらといふことをよめるうたの二首侍なり。その一首は。

河やしろしのにおりはへほす衣いかにほせはか七日ひさらん

今一首は。

行水のうへにいはへる河やしろ河浪たかくあそふなるかな

これを俊頼朝臣の歌[illegible]しれる人なし。たゝおしはかりに[illegible]て。夏神樂をするなり[illegible]とみえたり。河の[illegible]ぬ衣をほして。久しくひぬよしをいへり。神樂にはかなはすやと。そらおほれにやいへるなり。それを[illegible]首歌を歌合につかはれて侍しに[illegible]はやしろといふ事をよみて。方人にとはれて[illegible]いはく、これは夏神樂といふ事也。その神樂にはさまく河にさかきをたて。[illegible]神供をそなふ[illegible]の[illegible]に見へたりと申たる[illegible]しくたえたりときこゆ。それをしかかきたる[illegible]あらは。はやくその[illegible]をいたすへしとなんして侍し也。此歌を申やらは。この貫之かしのにおりはへの歌[illegible]してことはにはいたさゝれとも。かの[illegible]に河やしろにて[illegible]たるありさまかきたりけむを。河やしろのありさまはかりをよみて侍りけるなるへし。しのにおりはへといへるは。万葉集の歌の詞に。つねにうちはへ[illegible]といへることはにつねによめるなり。おりはへといへる。又同しこゝろなり。[illegible]あらす。かのぬのひきの瀧なといふやうに。たきの糸のつねにおちたるを。いかにほせはか七日ひさらんといへるなり。つねにといはんとて。ひさしきよしを七日とも八日ともいふ。又歌の[illegible]なり。されはかの四季の御屏風に。夏瀧落たる所にて神樂したるを。そのありさまをかくよめるなるへし。よりて二首の歌ともに。かはやしろの夏かくらに同し心なるものなり。それを俊頼朝臣のころもほしたる歌は。神樂とも心えすとかきたる[illegible]いへるものゝ。われ神樂をしれりとて。このつらゆきか[illegible]を夏かくらのうたにてあらんとて。萬葉集のしのゝことはをはえ心えすして。しのをおりてたなにかくなりと。[illegible]をもつくりたるにや。それを萬葉委曲見たらんものはうたかひおもふへきを。ひとへにしのをおりはへの詞につきて。篠を折てたなにつくるなりと。清輔もかきて侍とかや。顯昭法師もそのまゝに申けるなるへし。貫之は萬葉集のことはにつきてよみて侍を。かやうに心え申なすを。つらゆきみはへらは。いかにおかしくも奇怪にもおもひ侍らまし。

[illegible]

[illegible]之下[illegible]八方

あさ霞かひやか下になくかはつ聲たにきかはわかこひんやは

このかひやかしたの歌。又もとよりやう／＼に人申事なり。これはやまさとゐなかなとに山田つくるなるものは。夏田うへつるのちより。秋になるまては。庵をつくりて。あやしのものゝこともなとをするゑをきつゝ守らせ侍るなり。またさなへなと申て。わかはなる時より。鹿猪のしゝなと申物もまうてきて。ふみそんしくひなとするをゝはんれうにまもらするなり。それによるは又蚊なと申物も。人けにつきてつとふ事なれは。蚊遣火のためにも。その火に香ある物ともをとり入てふすほらせて。けふりをたやさねは。鹿猪なとも人けをかきてまうてこさなれは。その火をつねにけたさらんために。ゐたる庵のしたに又こしをかさねて。その煙を雨なとにもけたしかために。いほりの下に蚊火をたておきて侍なるに。又田のあたりなれは。かはつのあつまりきて。ゐのしゝなとにおちて。人けにつきてつねになくにこそ侍なれ。あさかすみとは。さきにもみえたるやうに。秋も夏もましてたやさぬけふりなとも。山きはにかすみわたれる成へし。この歌は上は同し事にて。しもはすこしかはりて。このしふに二所入て侍なり。今一首かするゑの句は。しのひつゝありとつけんこもかもといへり。これもかれも戀によせたるなり。かくやまのなかにさとをはなれて。いほにすゑたるものを。おの／＼やとをこふらんの山によそへたるなり。これを又河のよとみなとに。ふしつけなといふ事のやうにして。魚をあつめてとらんとて。やなつくりおほゐていなゝかへは。かひやといふそと申なるへし。それに又かはつもつとふにや。さらはかはつをかふにそあるへき。又ちかく内大臣家の百首のとき。顯昭法師かひの蠶室にかへるのあつまりくるなりとさへ申たりき。むけにみくるしかるへし。又この集にはかひやとはさゝされ共。山田もるをのをく蚊火のともいひ。又こゝろあへはあひぬるものを。をやまたの鹿猪田もることなともよめる。これらもみな山田もろ庵ともの同し心なり。されはかひやかしたは無疑山田の庵なるへきなり。

寄花

小男鹿のいるのゝすゝきはつ尾花いつしかいもか手枕にせん（本名）さきぬ共しらすしあらはもたもあるを此秋萩をみせつゝも哉

冬雑歌

相聞

降雪のそらにけぬへくこふれとも逢よしなくて月そへぬらしあは雪のちさと降しきこひしくはけなかく我や見つゝ忍はん

右歌柿本朝臣人麿歌集出云々。

已上第十卷。

古今相聞

正述心緒歌　一百卌九首之内

何爲命繼吾妹不戀前死物

なにせんに命つきけんわきもこに戀せぬさきにしなまし物を

思依見依物有一日間忘念

思ふよりみるよりものは有物を一日へたつる忘るとおもふな

寄物陳思

石上振神杉神成戀我更爲鴨

いそのかみふるのかみ杉かみなれや戀をも更に我はするかも

山科のこわたの山に馬はあれとかちよりそくる君を思ひかね（異イ）

道のへのいちしの花のいちしるく人みなしりぬ我戀つまと

たらちねの親のこふこの繭こもりこもれる妹をみる由もかな

劔刀諸刄利足踏死々公依

劔たち諸はの利にのほりたちしにゝもしなん君によりては

こと玉のやその衢に夕けとふうら（うらなへはイ）まさにせよ妹にあはんよし

玉桙の道ゆきうらにとゝへは妹にあはんと我に云つる

右歌等皆柿本朝臣人丸歌集云々。

正述心緒

獨ぬと床くちめやもあや蓆緒になるまてに君をしまたん

若草のにゐた枕をまきそめてよをやへたてんにくからなくに

寄物陳思

結紐解日遠敷細吾木枕蘿生來

むすふひもとかむ日とをし敷妙の我こまくらにこけ生にけり

をはたゝのいたゝの橋のこほれなは桁よりゆかんこふなわきも子

宮材引いつみのそまにたつ民のやむ時もなくこひわたるかも

足引の山田もる翁のをく蚊火の下こかれのみ吾戀をらく

右歌さきにかひやの事に申つるうたなり。こゝには蚊火とかけるなり。

千はやふる神のいかきも越ぬへし今は我身のおしけくもなし

たまもかるゐてのしからみうすきかも戀のよとめる我心かも

湊いりの芦分小舟さわりおほみわか思ふ君にあはぬ比かも

浪間よりみゆる小島の濱ひさ木久しくなりぬ君にあはすして

うな原のおきつなはのり打なひき心もしぬにおもほゆるかも（いほイ）

譬喩歌

紅のこそめのころも下にきは人の見らくに匂ひ出んかも

かくしてや猶やゝみなん大荒木の浮田の森のしめならなくに

已上第十一卷。

寄物陳思

山代のいはたの森に心をそく手向したれはいもにあひかたき

心あへはあひぬる物を小山田の鹿猪田もるともりしもらすも

[illegible]きこゆるたきのしらなみのおもしろく君かみえぬこの比

たきをはかくこの集にも神の如なとよみたれは。かはや
しろもたきある河上にてするなるへし。

石はしるたるひの水のはしきやし君にこふらく我こゝろから

君かあたりみつゝをゝらん伊駒山雲なかくしそ雨はふるとも

忘艸わか下ひもにつけたれと鬼のしこ草猶こひにけり（かきもしみゝにおふれとるイ）

中／＼に人とあらすは桑子ともならましものを玉のをはかり

さひのくまひのくま河にこまとめて馬に水かへ我よそにみむ

羇旅發思

玉勝間あへしまやまのゆふ霧に旅ねしかねつなかきこのよを

住吉のきしにむかへるあわち島あはれと君をいはぬ日はなし

已上第十二卷。

雜歌

いくしたてみわすゑまつる神主のうすの玉蔭みれはともしも

月も日もかわりゆけとも久にふる三室の山のとつみやところ

已上第十三卷。

雜歌

相聞　駿河國歌

さぬらくは玉の緒はかりこふらくはふしの高根の鳴澤のこと

武藏國

戀しけは袖もふらんを武藏のゝうけらか花の色にいつなゆめ

下總國

鳰のかつしかわせをかへすともその悲しきをとにたてめやも

あのをとせすゆかん駒もか葛飾のまゝの繼橋やます通はん

常陸國

筑波ねのそかひにみゆる足尾山あしかるとかもさねみえなくに

そかひとはおひすかひなといふやうに見ゆるなり。され
はかのきくの歌に。

かの見ゆる岸へにたてるそか菊のしけみさ枝の色のてこらさ

といへる歌も。むかひのきしにそかひに見ゆるときよめ
るにや。

承和のみかとのきなるいろをこのみたまひけれは。き菊
をそかきくといふなりと申事一は。いつよりいふ事にかお
ほつかなし。

上野國

かみつけのくろほのねろのくすはかた悲しけこらにいやさかりくも

陸奥國

あひつねの國をさ遠みあはなはゝ斯努比にせんと紐結はされ

譬喩歌

遠江國

とほつあふみいなさほそ江の澪標我をたのめてあさまし物を

雜歌

山鳥のおろの初尾に鏡かけとなふへみこそなきよそりけめ

あさか潟しほひのゆたに思へらはうけらか花の色に出めやも
春へ咲藤のうらはのうらやすにさぬるよそなき比をし思へは
にひむろのこときにいたれははた薄ほに出し君か見えぬ此比
みそらゆく君にもかもなけふゆきて妹にことゝひあす歸りこん
鳥てふおほをそ鳥のまさてにもきまさぬ君をころくとそなく

　譬喩歌

み社のそかへにたてるかほか花なさきいてそねこめてしのはむ

　この歌もそかへにたてるといへるなり。

　挽歌

かなし妹をいつちゆかめと山菅のそかひにねして今し悔しも

　以前歌詞等闕上山川名也云々。

　已上第十四卷。

　天平八年丙子夏六月遣使新羅國之時使人等各悲別贈
　答及海路上慟旅陳思作歌之内

大舟に妹のるものにあらませははくゝみもちてゆかまし物を
大伴のみつにふなのりこきいてゝはいつれの島に庵せんわれ
天さかる鄙の長路をこき[ひ(万葉)]くれは明石のとより家のあたりみゆ

　右歌柿本人丸歌云々。

　已上第十五卷。

　有由緣雜歌

安積香山影副所見山井之淺心乎吾念莫國
あさか山影さへ見ゆるやまの井のあさき心をわか思はなくに

　右歌、傳云、葛城王遣于陸奥國之時、國司祗承緩怠異甚。于時王意不悦、怒色顯面。雖設飲饌、不肯宴樂。於是有前采女、風流娘子。左手捧觴、右手持水、擊之王膝、而詠此歌爾。乃王意解悦、樂飲終日。

朝霞香火屋之下乃鳴川津之努比管有常將告兒毛欲得
あさかすみかひやか下になくかはつ忍ひつゝありとつけんこもかも

　右歌、又ことに申つるかひやかしたの歌之。集右狀云。河村王宴居之時彈琴而即先誦此歌以爲常行也云々。

　詠玉掃鎌天木香棗歌

玉掃苅來鎌麿室乃樹與棗本可吉將掃爲
玉はゝきかりこかまゝろむろの木となつめかもとゝかきはかん爲

　境部王詠數種物歌之内　穗積親王之子也。

虎尓乘古屋乎越而青淵尓鮫龍取將來劍刀毛我
虎にのりふるやをこえて青淵にみつちとりてこん劔たちもか

　獻新田部親王歌

勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之
かつまたの池は我しるはちすなししかいふ君か鬚なきかこと

　謗佞人歌

奈良山乃兒手柏之兩面尓左毛右毛佞人之友
ならやまのこのてかしはの二面とにもかくにもねしけ人かも

池田朝臣嗤大神朝臣奥守歌

寺々之女餓鬼申久大神乃男餓鬼被給而其子將播

寺々のめかき申さくおほみはのをかきたはりて其子はらまん

大神朝臣奥守報嗤歌

佛造眞朱不足者水停池田乃阿曾我鼻上乎穿禮

佛つくるいかにたらすは水とゝめ池田のあそか鼻の上をほれ

平郡〔群〕朝臣嗤歌

小兒等草者勿苅八穗蓼乎穗積乃阿曾我腋草乎可禮

童へも草はなかりそやほ蓼をほつみのあそうかわき草をかれ

穗積朝臣和歌

何所曾眞朱穿岳薦疊平郡〔群〕乃阿曾我鼻上乎穿禮

いつこにそあかにほる岡こも疊へくりのあそか鼻の上をほれ

豐前國白水郎歌一首

とよ國のきくの池なるひしのうれを摘とや妹かみ袖ぬるらん

已上第十六卷。

天平十八年正月。白雪多零。積地數寸也。於時左大臣橘卿率大納言藤原豐成朝臣及諸王諸臣等。參入太上天皇御在所。中宮西院。於是降詔。大臣參議并諸王者令侍于大殿上。諸卿大夫者令侍于南細殿。而則賜酒肆宴。勅曰。汝諸王卿等聊賦此雪。各奏其歌。

左大臣橘宿禰應 詔歌一首

布流由吉の白髪までに大君につかへまつれはたふとくも有か

紀朝臣清人應 詔歌一首

天下須泥雪おほひてふる雪の光をみれはたふとくもあるか

葛井連諸會應 詔歌一首

新年のはしめに豐の登之しるすとならし雪のふれゝは

大伴宿禰家持遥繼緒歌之内反歌

安良多麻乃登之可敝流麻泥安比見禰婆許已呂毛之努爾於母保由流香聞

新玉のとしかへるまてあひみねは心もしのにおもほゆるかも

東風(越俗語東風謂之安由乃可是也。)伊多久布久良之奈呉乃安麻能都利須流乎夫禰許具可久流見由

あゆの風いたくふくらしなこの蜑の釣する小舟漕かくるみゆ

こしの海の信濃の濱をゆきくらしなかき春日も忘れて思へや

右歌等天平廿年春正月廿九日大伴宿禰家持歌。

見潜鸕人作歌

賣比河波能波夜伎瀨其等爾可我里佐之夜蘇登毛能乎波宇加波多知家里

めひ河のはやき瀨毎に篝さしやそとものをはうかはたちけり

右歌。巡行諸郡當時所屬目作之。大伴宿禰家持。

已上第十七卷。

太上皇御在於難波宮之時歌七首之内

左大臣橘宿禰歌一首

保里江爾波多麻之可麻之乎大皇之美敷禰許我牟登可年弖之里勢婆

御製歌一首和

多萬之賀受伎美我久伊弖伊布保里江爾波多麻之伎美弖々都藝弖可欲波牟

玉しかすきみかくいていふ堀江には玉敷みてゝつきて通はん

已上第十八卷。

天平勝寶二年三月一日暮眺矚春苑桃李花作

春のそのくれなゐ匂ふ桃の花下てるみちにいてたてるいも

わかそのゝすもゝの花か庭にちるはたれのいまた殘たるかも

攀折堅香子草花歌一首

物部乃八十嬬等之挹亂寺井之於乃堅香子之花

もの〻ふの八十のいもらか汲まよふ寺井の上のかたかしの花

夜裏聞千鳥喧歌二首之内

夜具多知爾寝覺而居者河瀬尋情毛之努爾鳴知等理賀毛

よくたちにねさめてをれは河せとめ心もしのになく千鳥かも

過澁谿埼(見巖上樹歌一首(樹名都萬麻))

磯上之都萬麻乎見者根乎延而年深有之神佐備爾家里

四月十二日遊覽布勢水海船泊於多祜灣望見藤花各述懷四首之内

藤浪のかけなるうみの底清みしつくいそをも玉とそわかみる

守大伴宿禰家持也。

たこのうらのそこさへにほふ藤波をかさしてゆかむみぬ人の爲

次官內藏忌寸繩麿歌也。

天平勝寶三年

新年之初者彌年爾雪蹈平之常如此爾毛我

あたらしき年の初はいやとしにゆきふみならし常かくにもか

右一首歌。正月二日守館集宴。于時零雪殊多。積有四尺焉。即主人大伴宿禰家持作此歌。

以七月十七日遷任少納言。仍作悲別之歌。贈貽朝集〔使〕使掾久米朝臣廣繩之館二首

荒玉乃年緒長久相見氐之彼心引將忘也毛

あら玉の年のをなかくあひ見てしかの心ひき忘られめやも

伊波世野爾秋芽子之努藝馬並始鷹獵太爾不爲哉將別

いはせのに秋萩しのき駒なへてこ鷹狩たにせてやわかれん

便附大帳使。取八月五日。應入京師。因此以四日設國廚之饌。於介內藏伊美吉繩麿館餞之。于時大伴宿禰家持作歌一首

之奈謝可流越爾五箇年住々而立別麻久惜初夜可毛

しなさかる越に五とせすみ／＼て立別まくおしきよひかも

五日平旦上道。仍國司次官已下諸僚。皆共視送。於時射水郡大領安努君廣島。門前之林中。〔預歟〕設餞饌之宴。于此大帳使大伴宿禰家持和内藏伊美吉繩麿捧盞之歌一首

玉桙の道にいてたちゆくわれは君かこと〻を思〔負歟〕ひてしゆかん

已上第十九卷。

天平勝寶六年正月四日氏族人等賀集于少納言大伴宿禰家持之宅宴飲歌三首之内

霜のうへに霰たはしりいやましにあれはましこむ年のを長く

霞立春の初をけふのことみつとおもへはたのしとそおもふ

右一首左京少進大伴宿禰池主歌也。

惜龍田山櫻花歌

立田山みつ〻こえこし櫻花ちりかすきなんわか〻へるときに

獨見江水浮漂〔糞歟〕怨恨〔貝歟〕見玉不依作歌

堀江より朝塩みちによるこつみ貝にありせはつとにせましを

右二首兵部少輔大伴宿禰家持作歌。

反歌

家つとにかひそひろへる濱波はいやとしく〱（しく〱にイ）に高くよすれと

我せなを筑紫へやりてうつくしみ帶はとかなくあやにかもねん

右一首妻服部呰女。

萬葉集卷第二十抄之畢。

さてこの萬葉をは後拾遺の序に申たるは。この集の心はやすきことをはかくし。かたき事をあらはせり。よりてまとへるものおほしとそかきたるを。いとさにはあらぬにやとおほえ侍なり。此集のころまては。歌のことはに人のつねによめる事ともを。とき〱のうつりかはるま〻には。よますなりにたることはとものあまたあるなるへし。もろこしにも文體三たひあらたまるなと申たるやうに。此歌のすかた詞も。時代のへた〻るにしたかひてかはりまかるなり。むかしの人のかたき事をあらはし。やすきことをかたくなして。人をまとはさむとおもへるにはあらさるへし。た〻〱かきやうのもしつかひにとりてそ。うちまかせての事につかふもしをもか〻す。とかくかきなしたる事そおほかるへき。たとへは春の花とも秋の月ともいへるうたを。やすくさはか〻て。まなかなにひともしつ〻かきて。波流乃波奈。阿伎之都伎なとやうにかき。又おなしく一字にかくにとりても。こ〻かしこもしをかへつ〻もかき。又卅一字の物をた〻十餘もし廿よもしなとにもかきなしたるところ〱の侍なり。まことにすこしはまとはさむとにやとも申つへかめれと。それもことはをかよはして。かくもいふそなとみせんとなるへし。されと近來もさやうのもしつかひにはか〻れて。まとふものもある歟へし。又歌ともはまことに心もおかしく。ことはつかひもこのもしくみゆる歌ともはおほかる

へし。又萬葉集にもあれはとて。よまむことはいかゝと見ゆる事ともゝ侍なり。第三の卷にや。太宰帥大伴卿さけをほめたる歌とも十三首まていれり。又十六卷にや。いけたの朝臣。おほみはの朝臣なとやうのものともの。かたみにたはふれのりかはしたる歌なと。まなふへしともみえさるへし。かつはこれらはこの集にとりての誹諧歌と申うたにこそ侍めれ。又まことに證歌にもなりぬへく。もしつかひても證になりぬへき歌ともゝおほく。おもしろくも侍れは。かたはしとはおもふ給へなから。おほくなるにて侍なり。又ふるき詞のいまは人よますなりにたるも。かくこそはありけれと。人にみせむため記し入て侍り。又拾遺集なとにも入。さらてもおのつから人の口にある歌とも。もらさむもくちおしく。かき記し侍るほとに。なにとなくかすおほく侍めり。萬葉集の歌はよく心をえてとりてもよむへき事とそ。ふるき人申をきたるへき。又ふるき歌は。上句にいへることをすゑにかへして。ふたゝひいふ事はつねの事なるを。いつよりいひそめけることにか。やまゐとなつけてよますなりにけり。これらはかの古今集の紀淑望かまなの序にいへる。大津皇子のはしめて詩賦をこのみしより。かの漢家の文をうつして。わか日域の俗とす。民業一たひあらたまりて。和歌漸くおとろへにたりと云り。もしかのころほひよりこのかた。詩のやまひとて。さる事ともになすらへていひそめけることにや。歌の式といふものは。光仁天皇と申御時。參議藤原濱成つくりたると申そ式のはしめなるへき。そのゝちこなたさこ。ひこ（孫イ）姫喜撰なとか式とて。さま〳〵のやまひともをたておきて侍なり。その中同し事かへしてふた度よむ事と。又おなし心ふた所よむ事とは。むねとさるへきことに今はなりはてにて侍り。そのほかの病ともはさりあふへき事とも見え侍らす。それらをさらんとせは歌かへりてみくるしくなり侍なん。されと式ともに申たる名はかりは。さる事有とはかりは人しるへくやとてかきつけ侍なり。

濱成卿式に七病と云は。

一には頭尾。　二には胸尾。　三には腰尾。
四には黶子。　五には遊風。　六には聲韻。
七には遍身といへり。

やまひのありさまともは式にみえたり。事なかくうるさくて略之畢。御覽すへからん人は。式ともを御覽すへし。

喜撰か式あるひは四病をたてたり。

一には岸樹。　二には風燭。　三には浪船。
四には落花。

あるひは八病をたてり。

一には同心。　二には亂思。　三には欄蝶。
四には渚鴻。　五には花橘。　六には老楓。

七には中飽。　八には後悔。
これらも式にみえたり。此中にはしめの同心の病そむねとさるへき事とみえたり。殘りはさりあふへきにあらさるとなり。それをさらは。ふるきよき歌とも。みなことやふれ侍ぬへし。

又四條大納言公任卿の新撰髓腦といふものあり。俊賴朝臣の口傳と申か髓腦と申か。又能因法師のかきたる物なと。ふるくもちかくもさま〳〵かき置て侍めり。これらはおもはくみな同しことともに侍めれは。しるし申に及はす。御らんすへからん人は。それらをたつねて御らんすへし。これはたゝさる事ありとはかりに。その名はかりをしるし申侍なり。そのなかにむかしの歌に。同しことふたたひかへしてよめることを。公任卿としよりの朝臣なとさへ。いかにおもひ申たる事にか。なにはつの歌をさへ。この花は梅のはななり。今は春へとさくやこの花といふは。よろつのはななれは病にあらすといひ。あさかやまの歌も。はしめのやまの名はにこりていふへし。あさくはといへるは。やまの井のあさきこゝろなり。又みやまにはまつの雪たに消なくにといへる歌も。はしめはおくやまをいふ。みやこはのへといふは宮なり。されはこれらはやまひならぬよしに申たるこそ。いかにさは侍るにか。たゝむかしの歌はわさと二たひいへるなり。病といひなる事は。時代のあらたまりへたゝりて。物しりたてける人ともの。式をつくりなとしけるほとに。やまひとかをたてゝ。いひなやましてけるそとてこそあらまほしけれ。ふるき歌ともをさへあらぬさまにいひなせる事。あやしくみえ侍る事なり。先達の事を申はよしなけれとも。又今少あかりての人のよみけむ心にたかひていひなす事は。いますこしはゝかりあるへき事なれは申侍なり。又このちかきころもうけ給はれは。長歌にも短歌反歌にも。韻の字のなと申なる。いとみくるしき事なり。詩の病なと申事になすらへて。式をつくり病をたてなとするほとに。韵の字のなと申事は。たゝ歌にとりては。かみの五七五のおはりの句。しもの七々の句の終りのもしなとを。韻の字に同しもしを置るは。はゝかるへしなといふはかりなり。まことに歌にはなにしにか韻はまことにはあるへき。詩には切韻といふもの有て。その韻に入ぬれは。その韵のもしともをつくれはこそ。まことに韻といふことは申ことなれ。歌にはたゝかみの句の終りの字。下の句の終りの字のなにとなんあるなとこそ申を。詩の韵になすらへて。はてのもしの事いはんとて。韵の字のなとうち申はかりにこそあるを。誠しく程なき三十一字の歌のうちなとに。むねの句には五七の七の句のおはり。なかの五字の終。七々の句ことの終りなとを。韵の字のなと申らん事とも。いと〳〵みくるしく侍る也。漢家の學問なともせぬものなとの。物しりかほせんとて。

かたのことく文のはし〳〵なと老の後にならひて。毛詩にいへるは。史記にいへるはなと申らん事。いと見くるしく侍り。歌はたゝかきへてこゝろすかたよくよまむとこそすへき事に侍れ。

萬葉集より後古今集の撰せらるゝ事は。としは百四五十年。代は十四五代にやなりて侍らん。その程たにふるきことはののこれるは。つも。かも。けらし。へら也なとやうのことはかりやあらん。さらて萬葉集につれによめるはしきやし。よしゑやし。もとななとやうのことはゝ。むけに絶にけることはとみえたり。されは萬葉集の比の後より。歌のありさまのかはりにけるほとは。これにてをしはからるゝことなり。又萬葉集にいへる歌ともの中に。

初春のはつねのけふの玉箒手にとるからにゆらく玉のを

この歌は萬葉集に入れる本もあり。入らさる本もありと申。これをとしよりの朝臣の口傳に申たるは。玉はゝきといふは。春のはつねの日。こまつをひきくして。はゝきにつくりて。ゐなかの人の家にこかふやを。ねむまのとしむまれたる女の。こかひするに物よきをかひめとつけて。それしてはきそめさせて。いはひのことはにいふ歌なりとそいひつたへたると申を。能因法師の帥大納言經信卿にかたりけるとて申たるは。むかし京極のみやす所と申は本院の大臣（時平のおとゝ。）のむすめなり。延喜帝の女御にたてまつらんとせられけるを。日ころよく〳〵いとなみて。すてにそのよになりて。いたしくるまなとよせて。女房かつ〳〵のるほとになりて。にはかに寛平の法皇御幸ありて。御車よせけれは。このおとゝおもひかけぬけしきにてさはかれけれは。われいたしたてんとて。帳のうちにいらせ給ひけれは。たゝあふきておはしける程に。内より藏人御つかひにて參りて。夜いたくふけぬ。いかなることそとたつね申させ給ひけれは。おとゝよろこひなから。このよしをおつ〳〵申されけれは。しはし御返事もなくて。とはかりありて。しきりにしはふき申されけれは。いとあへなく。これはおいほうしたまはり貞とおほせられけれは。いとあさましきことにて。いたしくるまにのりける女房みなおりにけり。世の人いかゝいひさたしけんとこそおしはかられ。藏人かへりまいりて。このよしをそうし申けれは。物もおほせられさりけり。そのみやす所の。むかし三井寺のかたはらに志賀寺とて。ことのほかにけんし給ふ所有とてまいり給ひけるに。かの寺ちかくなりて。所のさま面白おほえ給ひけれは。御車の物みをひろらかにあけて。みつうみのかたなとみつかはしける程に。いとちかく岸のうへに。あさましけなる草の庵のありける。まとのうちより。ことのほかにをいおとろへたる老ほうしの。まゆのしものしたよりめをみあはせたまひたりけれは。いとむつかしきもの

にもみえ貞るかなとおほして引入せ給ひにけり。さてかへらせたまひて後。老法師のこしふたへなるか。杖にすかりてまいりて。けむさんし侍し老法師こそまいりたれと申させ給へと申けれは。しはしはきゝいるゝ人もなかりけれと。ひねもすにたちて。あまりにいひけれは。かゝる事なん申物侍と申けれは。しかる事あらんと仰られて。みなみおもてのひかくしのまにめしよせて。いかなる事そととはせ給けれは。しはしはかりためらひて。志賀にこの七十余年はかり侍て。ひとへに後世ほたいのことをいとなみ侍りつるに。はからさる見參をつからまつりて。いかにも〳〵ことおもひなく。今一度見參せんの心のみ侍て。ねさふらふもねられす。起てもやすくゐられす侍れは。年比のおこたひのいたつらになりなむ事のかなしさに。もしたすけもやせさせおはしますとて。杖にすかりてなく〳〵まいり侍也と申けれは。いとやすき事なりとのたまひて。みすをすこしあけて見えさせ給ひけれは。おもてのしわかすもしらす。まゆはしろき雪なとにもまさりて。みなおいかはりて人ともおほえす。誠におそろしけなるさましてまほり入て。とはかりありて。その御てをたまはらんと申けれは。申にしたかひて御手をさしいたしたまへりけるを。わかひたいにあてゝ。よろつも覺えすなき入て。かのてにとるからにといふ歌をよみかけ申て。この世に生れ侍て後九十年に及ひ侍ぬる。かはかりのよろこひ侍らす。このえんをもて。おもひのことくに彌陀の淨土に生れ侍りなは。かならす道ひきたてまつらん。又淨土に生れさせ給はゝ。みちひかせ給ふへしと申てなきけれは。御返し。

よしさらは誠の道にしるへして我をいさなへゆらく玉の緒

とそ侍られける。これをきゝてよろこひなからかへりにけりといへるを。この歌は萬葉集の廿の卷にあれは。此物かたりとの外のそらと成へきを。萬葉集のよき本といふは。廿の卷の歌の今四五十首はかりなき也。その本にはこの歌みへす。いかなる事にかおほつかなしとかけり。この事をおもひ給ふるは。この歌はたとひ萬葉集にあるにてもなきにても。いかにもむかしの歌にこそ侍めれ。それをふるき歌をも。いまある事のそのことにかなひたる時は。詠しいつることはある事にや。かの志賀のひしりいまよめるならは。手にとるからにといはんことはしかありとも。そのまいりたりけむ日。もし春のはしめのはつねの日にしもあらすは。玉はゝきにことによそふへしともおほえすやあらん。なか〳〵さやうのひしりなとのこのふるき歌をしりて。てにとるからにといはんれうにおもひいてゝ。かくいひいてたらんは。たまはゝきも今すこしおかしくもやあるへからん。大方はこれのみにあらす。伊勢物かたりにも。やまとのくにゝ女とすむ男。としころふる程に。かうちの國高

安の郡に又いきかよふ所いてきにけり。かくてかよふほとに。もとの女おきつ白浪たつたやまとよめるをきゝて後。かうちへもおとこいかすなりにければ。かのたかやすの女よめるとて。

君かあたりみつゝをゝらん生駒山雲なかくしそ雨はふる共

とよみてなかみいたすに。からうしてやまと人こむといへりなとかきて侍を。これまた萬葉集の第十二巻のうたなり。伊勢物語はまことにあることをかけり。又ゐなか人なとのありさまは。さしもなきことをもおかしきさまにかきなし。ものをもいはせ歌をもよませたる事もあれは。ふるき歌にあひたることのあるときは。そのうたをいはせても侍らん。又まことにふるき歌をはしらねとも。ゐなか人なとのよみあはせたるとも侍らん。又おなしき物かたりに。男みちのくにまてすゝろにいにけり。そこなる女京の人はめつらかにやおもひけん。せちにおもへる心なんありける。さてかの女のよみけるとて。

中〳〵に人とあらすはかひこ（蠶子）にもならましものを玉の緒計

これ又萬葉集の同しき第十二の巻の歌也。されはこれもみちのおくの女のことをおかしくいはんとて。萬葉集の歌のさもありぬへきをいはせたるにもやあらんともおもひたまふるを。又やまと物かたりにも。むかし大納言なりける人のみかとにたてまつらんとて。かしつきたまひけるむすめを。うとねりなりける物の見てよろつのこと覺えさりければ。ゆくりなくとりてみちのくにゝいにけり。あさかの郡あさかやまにいほりをして住けるほとに。たちいてゝやまの井にかけをみるに。ありしにもあらすなりにけるかたちを見るもはつかしくて。よみてきにかきつけてなく〳〵なりにけるとてかける歌。

あさかやま影さへみゆる山の井のあさくは人を思ふ物かは

とよめりけりとかけり。

此歌なとはまして萬葉集にとりてもむれとある歌。古今集にも歌の父母とて序にもいたせる歌を。やまと物かたりにかくいへり。これもふる歌をかのやまのなかにゐていひいてゝ書付けるにや。又この物かたりのよゝのふることにて。かつらきの王の采女かふるき事をいひて。大きみのこゝろをやはらけゝるにやとも。すこしはあやしき事ともになん。いかにもふるき歌を。折節につけて。かなへる事によみいつるもある事なるへし。されはかのはつねのけふの玉はゝきの歌のみにもあらず。かゝる事ともはある事なりとしるし侍なり。

さてこのてにとるからにゆらく玉のをのうたは。まことにある本なき本あるとに侍めり。そのかみよりみたまへし萬葉集には入て侍りき。又木工のすけあつたかと申しものゝ部類して。四季たてたる萬葉集。あまた人のもとにもちたる本也。それにも春のはしめの歌のなかに書入て侍りき。それを當時

ある人の證本と申し本をかきうつして侍には。此歌いらす侍也。されは此抄にもかき入す侍なり。（以下自養老廿年迄也）されとも萬葉集の心の歌にては一定侍へし。又大かたは萬葉集の事は猶申へき事も侍なり。なにとなきことなから。人もおほん心うへくやともおほえ侍也。この集をは　聖武天皇の御時撰せらるゝ事は無疑侍うへに。誠にさそありけんと見へて侍なり。聖武天皇位に廿五年おはしましけるほと。ならひに御位おりさせ給て。太上天皇とてしつかにおはしまして。天平勝寳八年五月に太上天皇かくれおはしましにけり。又橘左大臣諸兄のおとゝは。そのとしの正月に致仕して。前左大臣とて侍りけるか。そのとしの八月に改元ありて。天平寳字元年と申ける。又の正月にたちはなのさきの左大臣はとし七十四にて薨し侍にけり。されはそのさき萬葉集はさためて撰進し侍にけん。それに大伴宿禰家持と申歌人は。この御時はしめは宮内少輔。又越中守より少納言になりて侍めり。景雲元年に左京大夫になり。寳龜十一年にそ參議になり。延暦まてありて。中納言になりて侍めり。この集の家持卿のかの越中の國におりて。少納言になりてのほりける時のうた。國の人の歌たとまておほく入て侍なる。又この家持卿の父大伴大納言旅人の歌なともいり侍めり。されはこの人の歌の集なとなこそは撰者におくりて侍りけめ。さてかの卿の歌もおほく入にけるこそはとそみえて侍れと。すこしは猶撰者もおほつかなくは侍事なるへし。なを人も御心えむためにみゆる事ともをしるし申侍りぬるなり。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　權中納言在判

本云

右一帖賢觀父雅經卿筆跡。

以右奥書榮雅自筆之本令書寫了。

甲申六月七日一校了。　　　　集陰

以藻島井（榮雅公。）之御本令書寫之畢。

佐々木氏

無適子肅敬

古來風躰抄下

とし月のあらたまりかはる。はなもみちの色につけても。うたのすかた詞は思ひよそへられ。そのほとしなくもみるやうにおほゆへきものなり。春のはしめ。雪のうちよりさきいてたる。のきちかき紅梅。しつのかきれのむめも。いろはことくなから。にほひはおなしくたおる袖にもうつりかほり。身にしむことゝちするを。はなのさかりになりぬれは。よしのゝやまのさくらはのこれる雪にまかひ。まして雲ゐのはなのさかりは。しら雲のふきなれるかと心もをよなかたきそ。春ふかくなるまゝには。ゐての山ふきにかはつのなき。きしのふちなみ

に。ゆふへのうくひす春のなこりおしみかほなるなとも。さま〳〵身にしむこゝちするを。いはかきぬまのかきつはた。やましたてらすいはつゝしなとまて。ほとにつけてはこゝろうつらぬにあらす。卯月にもなれは。かきねの卯花にほとゝきすのたちしのひ。まかきのなてしこのあさ露にひらけたるほとなとは。又たくひわすれぬへきを。さまてならぬ道のへのあふちのはなのかせにうちかほり。庭のあちさゐのよひ々にをける露に。夕つくよのほのかにやとれるなとは。いみしくすてかたくみゆるを。五月の五日こゝのへのうちをおもひいつれは。たちはなのうちかほれるのきちかく。あやめの御こしかきたてたるに。みはしのまへよりみなみさまに。なにとなきときの花を左右にたてわたしたる程。あやめのかにかほりあひたるほとなと。たとへんかたなきもあり。夏ふかくなりぬれは。夕くれに。いけのはちすのいろ〳〵ひらけたるは。みつさへかほるこゝちするなとは。この世のほかまて思やらるゝものなり。秋の風たちぬれは。まかきのをみなへしにむしのこゑ〳〵つゆけく。野への秋はきにしかのつまとへるなとは。さらにいふへきにもあらす。しをにふちはかまなとはさまてならぬも。むかしをわすれす。ゆめのまくらにかよひけんも。あはれあさからす。秋ふかくやう〳〵しくれゆくまゝには。よもの山のこすゑいろふかくなりゆき。まかきのきくしもにうつろひゆくなとは。いふへきにもあらぬを。とやまのしくれもことにぬらしけるにや。ぬるてのもみちのわきて色ふかきをおりてみれは。枝さしなとはなつかしからすなから。いろのふかさもあはれに。はしのたち枝。まゆみのもみちなとは。あたちのはらまて思やられて。かえてのもみちは葉のさま枝くきまて。近くてみるさへあはれになつかしくそみえたる。冬になりゆくまゝには。あしのかれはに霜をきまよひ。みきはのこほりにとちられ。まして雪ふりぬれは。いはほにもさくはなとうたかはれ。つゐのみとりのまつのうへの雪なとは。としさへのこりなくなるにつけて。そてのこほりも。身にしみまさる心ちしてこそはおほゆるやうに。歌のすかた心もたゝかやうによそへてこゝろうれは。まことにすかたたかく。きよけにもえんにも優にも。またさまてならねと。ひとふしおかしきさまも。ほと〳〵につけつゝよそへられぬへきことなり。さていまは古今集の歌はしめよりところ〳〵申侍るへし。

古今和歌集

春歌

ふるとしに春立ける日よめる　在原元方

年の内に春はきにけり一年をこそとやいはん今年とやいはん

この歌まことに理つよく。又おかしくもきこえて。ありか

たくよめる歌なり。

春立ける日よめる　紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

この歌古今にとりて心もことはもめてたくきこゆる歌也。ひちてと云ことはや。いまのよとなりては。すこしふりにて侍らん。つも。かも。へらなりなとはさることにて。それよりつき〳〵すこしかやうなることはともの侍なるへし。

題しらす　よみひとしらす

春霞たてるやいつこみよしのゝよしのゝ山に雪はふりつゝ

この歌はたてるやとかきたる本も侍れと。よき本にはみなたゝるとかけるなり。歌のたけすかたなといみしく侍るを。いまのよにはたゝるのことはふりにたるへし。たてるにては又あまりにつよく。しなのなくるゝなるへし。

二條の后のはるのはしめの御うた

雪の中に春はきにけりうくひすのこほれる涙今やとくらん

たいしらす　よみ人しらす

梅かえにきゐる鶯春かけてなけともいまた雪は降つゝ

これらはいまの世にもいみしくおかし。

雪の木にふりかゝれるを　素性法師

春たては花とやみらんしら雪のかゝれる枝にうくひすのなく

これ又いみしくおかしきを。みらんのことは。いまのよにはすこしもちゐかたきなり。わさとよめると見ゆるは。おかしくもみゆるに。源のよりまさと申しゝものゝよみて侍き。

題しらす　よみ人しらす

心さしふかく染てしおりけれは消あへぬ雪の花とみゆるか（らんイ）

これはさきのおほきおほいまうちきみの歌なりとかけり。

此集の詞にはこゝろことははいみしくおかし。これよりのちはやう〳〵略して申へし。

春のはしめによめる　藤原言直

春やとき花やをそきと聞わかん鶯たにもなかすもあるかな

寛平御時后宮の歌合のうた　源まさすみ

山風にとくる氷のひまことにうちいつる波や春のはつ花

題しらす　讀人しらす

みやまには松の雪たに消なくにみやこは野への若菜つみけり

歌たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる　紀貫之

かすかのゝわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人の行らん

寛平御時后宮歌合のうた　源宗于朝臣

ときはなるまつのみとりも春くれは今一しほの色まさりけり

雁のこゑをきゝてこしへまかりける人をおもひて
よめる　凡河内躬恒
春くれは雁かへるなりしら雲の道ゆきふりにことやつてまし
題不知　讀人しらす
おりつれは袖こそにほへ梅花ありとやこゝにうくひすのなく
已上此歌ともいつれもすかた心いみしくおかしく侍り。そのうちこのうた。梅をおりける袖のふかくにほひけるを。こゝにははなはなけれとも。うくひすのかをたつねきてなくらんこゝろ。めてたく侍る也。
水邊に梅のはなさけるをよめる　い　せ
春ことになかるゝ川をはなとみておられぬ水に袖やぬれなん
なきさの院にてさくらのはなをみてよめる　在原業平朝臣
世中にたえて櫻のなかりせは春の心はのとけからまし
題しらす　よみ人しらす
石はしる瀧なくもかな櫻はなたおりてもこんみぬ人のため
石走とをき。たきなくもかなといへる。もしつかひのめてたく侍なり。
はなさかりにみやこをみやりてよめる　そせい法師
みわたせは柳さくらをこきませて都そ春のにしきなりける
歌たてまつれとおほせられしときよみてたてまつりける　つらゆき
さくら花さきにけらしも足引のやまのかひよりみゆる白雲
けらしもといへるも。この歌にはかきりなくめてたくきこゆ。
やよひの潤月ありけるとしよめる　い　せ
さくらはな春くはゝれる年たにも人の心にあかれやはせぬ〔ま[illegible]〕
としたにもといひ。あかれやはせぬといひ。はけさせる心すかたかきりなく侍なり。

春下

僧正遍昭につかはしける　惟喬みこ
櫻はなちらはちらなんちらすとてふる郷人のきてもみなくに
このおほんうたすかた。このみこいかてかくはよみたまひけるにか。
雲林院にてさくらの花のちりけるをみてよめる　承均法師
櫻ちるはなのところは春なから雪そふりつゝきえかてにする
六帖寺せ
奈良のみかとの御うた
ふるさとゝなりにし奈良の宮古にも色はかはらす花そ咲ける
題しらす　よみ人しらす
かはつなくゐての山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を

たちはなの清友かうたなり。

やよひのつこもり雨のふりけるに藤のはなをおりて人につかはしける　なりひらの朝臣

濡つゝそしゐて折つる年の内に春はいくかもあらしと思へは

しゐてと云ことはに。すかたもこゝろもいみしくなり侍なり。歌はたゞ一ことはに。いみしくもふかくもなるものに侍るなり。

夏歌

奈良のいそのかみてらに郭公をきゝてよめる　そせい法し

いそのかみふるきみやこの郭公こゑはかりこそ昔なりけれ

月のおもしろかりける夜あかつきかたによめる　清原深養父

夏のよはまたよひなから明にけり雲のいつこに月やとるらん

みなつきのつこもりの日よめる　みつね

なつと秋と行かふ空のかよひちはかたへすゝしき風や吹らん

秋歌

秋立日うへのをのこともかものかはらに河逍遥しけるともにまかりてよめる　つらゆき

河かせのすゝしくもあるか打よする波とゝもにや秋は立らん

是貞親王家歌合歌　大江千里

月みれは千々にもの社悲しけれ我身ひとつの秋にはあらねと

讀人しらす

奥山にもみちふみわけ鳴鹿のこゑきく時そ秋はかなしき

朱雀院のをみなへしあはせに　左のおほいまうち君

女郎花秋のゝ風に打なひき心ひとつをたれによすらん

秋歌合しけるときよめる　紀淑望

もみちせぬときはの山は吹風の音にや秋をきゝわたるらん

神のやしろのあたりをまかりけるときいかきのうちのもみちをみてよめる　つらゆき

ちはやふる神のいかきにはふ葛も秋にはあへす移ろひにけり

仙宮にきくをわけて人のいたれるかたをよめる　そせい法師

ぬれてほす山ちのきくの露のまにいつか千年を我はへにけん

この歌。ぬれてほすとをける五もじの。ことにめでたく侍るに。又山路の菊の露のまにといへるも。ありかたくつゝけて侍によりて。すゑの句もなにとなくひかれて。いみしくきこゆる也。

しらきくのはなをよめる　みつね

心あてにおらはやおらん初霜のをきまとはせるしら菊の花

みやつかへひさしくつかうまつらてやまさとにこもりける時よめる　藤原關雄

おくやまのいはかき紅葉ちりぬへしてる日の光みる時なくて
せきをかすみける山さとはいまの禪林寺也。

題しらす　よみ人しらす

たつ田川もみちみたれてなかるめりわたらは錦中やたえなん
龍田川もみちはなかる神なひの三室の山にしくれふるらし
この二首のうた。さきのは奈良の帝聖武天皇の御歌。つきのは柿本人丸か歌也。
秋はきぬもみちは宿にふりしきぬ道ふみわけて問人はなし

二條后東宮御息所と申ける時御屏風にたつ田かはにもみちなかれたるかたかきたる所をよめる　業平朝臣

ちはやふる神代もきかす立田川から紅に水くゝるとは
神代もきかす龍田河といへるわたりのめてたき也。

なか月のつこもりにおほゐにてよめる　つらゆき

夕つくよをくらの山になく鹿のこゑのうちにや秋はくるらん

冬歌

たいしらす　よみ人しらす

おほ空の月のひかりしさむけれは影みし水そまつ氷りける
梅の花それともみえす久かたのあまきる雪のなへてふれゝは
この歌人丸か歌と申。

雪ふりて年のくれぬる時にこそつゐにもみちぬ松もみえけれ

賀歌

右大將藤原朝臣四十賀のうしろの屏風のうた　そせい法師

かすかのに若菜つみつゝ萬世をいはふ心は神そしるらん

秋　みつね

住吉のまつを秋かせ吹からにこゑうちそふるおきつしら波

別歌

題しらす　中納言行平朝臣

立別いなはの山の嶺におふるまつとしきかはいまかへりこん
この歌あまりにそくさりゆきたれと。すかたおかしきなり。

よみ人しらす

かきりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心にをくらさらめや

しかの山こえにていしゐのもとにてものいひける人に別ける時よめる　つらゆき

むすふ手のしつくにゝこる山のゐのあかても人に別れぬる哉
この歌。むすふてのとをけるより。しつくにゝこる山のゐのといひて。あかてもなといへる。大かたすへてことはことのつゝき。すかた。心。かきりなく侍なるへし。歌の本たいはたゝこの歌なるへし。

羇旅歌

もろこしにて月をみてよみける　　安倍仲麿

天の原ふりさけ見れはかすかなるみかさの山にいてし月かも

おきのくにゝなかされけるときふねにのりて出たつとてよめる　　小野篁

わたの原やそしまかけてこき出ぬと人にはつけよ海士の釣舟

人にはつけよといへる。すかたこゝろたくひなく侍なり。

題しらす　　よみ人しらす

ほの〳〵とあかしのうらの朝霧に島かくれゆく舟をしそ思ふ

柿本朝臣人麿歌なり。

此歌上古中古末代まて相叶へる歌也。

朱雀院奈良におはしましけるときたむけ山にて　　すかはらのをとゝ

このたひはぬさもとりあへす手向山もみちの錦神のまに〳〵

戀歌

たいしらす　　つらゆき

よしの川岩なみたかく行水のはやくそ人を思そめてし

よみ人しらす

我こひはむなしき空にみちぬらし思やれとも行かたもなし

こひせしとみたらし河にせしみそき神はうけすも成にける哉

このうたはいせものかたりの歌なり。なりひらの朝臣のうたにやおほつかなし。いかにもめてたき歌とも也。

戀すれは我身はかけとなりにけりさりとて人にそはぬ物ゆへ

このうたなとは。たゝこのころの人のうたのめてたきにて侍也。

小野小町

思つゝぬれはや人の見えつらん夢としりせはさめさらましを

みつね

我戀は行衛もしらすはてもなし逢をかきりとおもふ斗そ

大納言國經

明ぬとていまはの心つくからになといひしらぬ思そふらん

よみ人しらす

さむしろに衣かたしき今夜もや我をまつらんうちのはしひめ

そせい法師

今こんといひしはかりになか月の有明の月をまちいてつる哉

河原院左大臣

みちのくのしのふもしすり誰ゆへに亂初めにし我ならなくに

五條の后宮のにしのたいにすみける人を行衛しらすなりて又のとし梅のはなさかりに月のかたふくまてあはらなるいたしきにふしてこそ泣てよみける　　なりひらの朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

月やあらぬといひ。春やむかしのなとつゝけるほとのかきりなくめてたきなり。

哀傷歌

さきのおほいまうちきみをしらかはにをくり侍ける夜よめる　そせい法し

ちの涙おちてそたきつるしら河は君か世まての名にこそ有けれ

姉のみまかりにけるときよめる　壬生忠岑

せをせけは淵と成てもよとみけり別をとむるしからみそなき

藤原利基朝臣右近中将にてすみける曹司のみまかりてのちの庭のすゝきしけりけるをみてよめる　御春有助

君かうへし一村すゝき虫の音のしけきのへとも成にける哉

甲斐国にまかりて身まかりける時よみける　在原滋春（業平朝臣子在二郎君といふ）

かりそめの行かよひちとそ思こし今はかきりのかとて成ける

雑歌

二條后春宮御息所と申ける時大原野にまうて給へりけるに御車より御うちきをたまはりてよみける　なりひらの朝臣

大原やをしほの山もけふこそは神世のことも思いつらめ

五節の舞姫をみてよめる　良岑宗貞

天つ風雲のかよひちふきとちよ乙女のすかたしはしとゝめん

たいしらす　よみ人しらす

我心なくさめかねつさらしなやをはすて山にてる月をみて

ちはやふるうちの橋守なれをしそ哀とはおもふ年のへぬれは　藤原興風

たれをかもしる人にせん高砂のまつもむかしの友ならなくに

をのゝたかむら

しかり迎そむかれなくにことしあれは先嘆かれぬあなう世中

おきのくにゝなかされ侍てよめる

思きやひなの別におとろへてあまのなはたきいさりせんとは

たいしらす　よみ人しらす

いさこゝに我世はへなん菅原やふしみの里のあれまくもおし

わかやとはみわの山もと恋しくはとふらひきませ杉たてる門

これは三輪の明神の御歌と申。

ふる歌にくはへてたてまつりける長うたのおくの　たゝみね

反歌

君か世にあふさか山のいはし水こかくれたりと思ひける哉

誹諧歌

たいしらす　左のおほいまうち君

もろこしの吉野の山にこもる共をくれんと思ふ我ならなくに

この歌は。漢朝に商山と申山は。吾朝のよしのゝやまのや

うに南に侍なり。よりてかくよめるか。誹諧のこゝろにて侍なり。

いせ

難波なるなからの橋もつくる也いまは我身を何にたとへん

このうたは。なからの橋くちにしのち。またつくらされとも。橋はつくりつへきものなるゆへに。つくるなりとよめるか。又誹諧の心にて侍也。

讀人しらす

世をいとひ木本ことに立よれはうつふしそめのあさの衣なり

已上古今集。

萬葉集はときよひさしくへたゝりうつりて。歌のすかた詞うちまかせてまなひかたかるへし。古今こそは本たいと信仰すへきものなれは。いつれもおろかならねと。そのなかにもことなるともをところ〳〵しるし侍なり。つきに又後撰集歌はしすこし又ところ〳〵申侍へき也。

後撰和歌集

春歌

正月一日二條后宮にておほうちきをたまはりてよめる　藤原敏行朝臣

ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおとろかれぬる

題しらす　閑院左大臣

なをさりにおりつるものを梅花こきかに我や衣そめけん

山邊赤人

我せこにみせんと思し梅花それともみえす雪のふれゝは

春中

やまとのふるの山にてよめる　僧正遍昭

いそのかみふるの山へのさくら花うへけん時をしる人そなき

讀人しらす

かへるかりをきゝてよめる

かへるかり雲ちにまとふこゑす也霞吹とけ春のやまかせ

春下

題しらす　ふかやふ

うちはへて春はさはかりのとけきを花の心やなにいそくらん

月のおもしろかりける夜はなをみて　源信明

あたら夜の月と花とを同しくはあはれしれらん人にみせはや

あかたの井との家より藤原のはるかたにつかはしける　きんひらかむすめ

都人きてもおらなんかはつなくあかたの井との山ふきの花

題しらす　よみ人しらす

山櫻咲ぬる時はつねよりも峯のしら雲たちまさりけり

まことやいつれのころよりたれかいひそめける事にか。後撰にはたいしらすよみ人もとかき。拾遺には題よみ人しらすとかくなりと。ちかき世の故人も申ときゝて。その

かみはさやうにもかき侍しを。なをふるき本ともあまたたつね侍しかは。さま〴〵にかき[illegible]たゝ女たとのかきうつす[illegible]に。さやうなることを人の申いてたるにこそとみえ侍しかは。後白川院の三代集かきてたてまつれとおほせられし時に。[illegible]なを古今のおなしことにかきてたてまつり侍にしなり。よりてこれにもその定にかき侍にしなり。

やよひはかりに[illegible]よみ侍ける　　僧正遍昭

折つれはたふさにけかるたてなから三世の仏に花たてまつる

やよひに閏月あるとしつかさめしのころ申文にそへて小野宮のおほいまうち君の家につかはしける　　つらゆき

あまりさへありて行へき年たにも春にかならす逢よしもかな

かへし　　左大臣

つねよりものとけかるへき春なれは光に人のあはさらめやは

夏歌

夏のよふかやふか琴ひくをきゝてよみ侍ける　　藤原兼輔朝臣

短夜の深行まゝに高砂のみねのまつかせふくかとそきく

かつらのみこのほたるをとりてと侍けれはかりき[illegible]つゝみて　　うなゐ[illegible]

[illegible]かくれぬものは[illegible]身よりあまれる思ひなりけり

次一首には[illegible]のみこすみたまひけるを。かの宮の童女のおとこみこを思ひかけ申て。男みこのほたるをとりてと侍けるに。かさみのそてにつゝみてたてまつるとてよめるともいへり。それをかつらのみこをおとこみこかとこゝろえて。このころものにかくものなとの侍なるこそいとみくるしく。

秋歌

たいしらす　　あめのみかとの御うた

秋の田のかりほの庵のとまをあらみわか衣手は露にぬれつゝ

秋の歌とてよめる　　ふかやふ

いく世へてのちか忘れんちりぬへき野への秋萩みつるよの月

冬歌

たいしらす　　よみ人しらす

神無月ふりみふらすみさためなきしくれそ冬の初成ける

ひとりぬる人のきかくに神無月にはかにもふるはつ時雨哉

山に入とてよめる　　増基法師

神無月しくれ許を身にそへてしらぬ山ちに入そかなしき

題しらす　　よみ人しらす

雪ふりて年のくれぬる時にこそつゐに緑の松もみえけれ

この歌は古今にあり。かれはついにもみちぬとあり。そのことはすこしはいかにそきこゆるを。この集にはつねにみとりのとあるは。よきには似たれとも。又もみちぬよりは心のおとるなり。いつれもいかにそおほえなから。年寒してしかうしてのちに。松柏ののちにしほむことをしると云心のいみしくて。いつれをもえもらし侍らぬなり。

戀歌

いひかはしける女のなをさりに云にこそあめれといへりけれはつかはしける　　つらゆき

いろならはうつる許もそめてましおもふ心をえやはみせける

おほつふねにものゝたうひつかはしけるをさらにきゝいれさりけれは　　閑院三のみこ

大かたはなそやわかなのおしからん昔のつまと人にかたらん

かへし　　おほつふれ

人はいさ我はなき名の惜けれは昔もいまもしらすとをいはん

大納言國經卿の家に侍ける女なしのひてゆくするまてちきることはへりけるをにはかに贈太政大臣の家にわたり侍にけれはせうそこをたにかよはさすなりにけれはこの女の子のとしいつゝ許なるか本院のにしのたいにあそひけるかひなにかきてはゝにみせたてまつれとてかきつけ侍ける

昔せし我かねことのかなしきはいかに契し名殘なるらん　　平貞文

返し　　よみ人不知

うつゝにて誰ちきりけんさためなき夢ちにまとふ我は我かは

女のもとにきぬをぬきをきてとりにつかはすとてよみ侍ける　　伊尹朝臣

すゝか山いせをのあまのすて衣しほなれたりと人やみるらん

ことといてきて後京こくのみやすんところにつかはしける　　元良のみこ

侘ぬれは今はたおなし難波なる身を盡してもあはんとそ思ふ

たいしらす　　よみ人しらす

思つゝへにける年をしるへにてなれぬるものは心なりけり

菅原大臣家に侍けるをんなにかよひけるおとこなかたえて又とひ侍けれは

すか原やふしみの里のあれしよりかよひし人の路もたえにき

雜歌

仁和帝さかの御時の例にてせりかはの行幸したまひけるひ　　中納言行平朝臣

さかの山みゆきたえにしせり川の千世のふる道あとは有けり

よの中をおもひうらみて侍けるころ　　なりひらの朝臣

侘わひぬいまはかきりと山里につまきこるへき宿もとめてん

相坂の關に庵室してゐたりけるときに行かふ人を
みてよみ侍ける　せみまろ
これや此行もとまるも別てはしるもしらぬもあふ坂のせき
かしらおろし侍ける日　僧正遍昭
たらちねはかゝれとてしもむは玉の我黑髮をなてすや有けん
左大臣家にて題をさくりて歌よみ侍けるに露の字
をとりてよみ侍ける　藤原國たゝ
我ならぬ草葉もものは思けりそてより外になす白露
祝歌
左大臣家に子とものかうふりし侍けるによめる
つらゆき
大原やをしほの山のこ松原はやこたかゝれ千世のかけみん
今上のみこにおましく\けける時太政大臣の家にわ
たりおはしましてかへらせたまふ御をくりものに
御本たてまつるとてよみ侍ける　太政大臣貞信公
君かためいはふ心のふかけれは聖の御代のあとならへとそ
おほんかへし　今上御製
敎をくことたかはすは行末の道とをくとも蹈はまとはし
以上後撰集。
拾遺和歌集
春歌
平貞文家歌合に　壬生忠岑
春たつと云許にやみよしのゝ山もかすみてけさはみゆらん
承平四年中宮賀の屏風の歌　紀文幹
春霞たてるをみれはあらたまのとしは山よりこゆる成けり
霞をよめる　山邊赤人
昨日こそ年はくれしかはるかすみかすかの山にはや立にけり
若菜をよませたまひける　圓融院御製
春日野におほくの年はつみつれと老せぬものはわかな成けり
入道式部卿宮子日によみ侍ける　大中臣能宣
千とせまで契しまつもけふよりは君にひかれて萬世やへん
權中納言義懷さくらのはなおしむ歌よみ侍けるに
よめる　藤原長たふ
身にかへてあやなく花をおしむ哉いけらは後の春もこそあれ
亭子院歌合によめる　紀貫之
櫻ちるこのしたかせはさむからて空にしられぬ雪そ降ける
この歌は。古今に承均法師。はなのところは春なからとい
へるうたの。ふるきさまなるをやはらけてよみなしたれ
は。すゑのよの人の心にかなへるなり。
夏歌
屏風に　源順
わかやとのかきねや春をへたつらん夏きにけりとみゆる卯花

夏のはしめに讀ける　源しけゆき
夏にこそ咲かゝりけれ藤の花まつにとのみも思ける哉
天德歌合に　平兼盛
み山いてゝよはにやきつる郭公あかつきかけて聲のきこゆる
東宮にさふらひけるゑにくらはし山に郭公鳴たる所ゑよめる　藤原實方朝臣
五月やみくらはし山のほとゝきすおぼつかなくも鳴わたる哉
この歌まことにありかたくよめる歌なり。よりていまの世の人歌の本躰とするなり。されとあまりに秀句にまつはれり。これはいみしけれと。ひとへにまなはんことはいかゝ。
九條右大臣家の屏風によめる　平兼盛
あやしくも鹿のたちとのみえぬ哉をくらの山に我やきぬらん
これほとの秀句はこひねかふへし。
河原院のいつみのもとにすゝみてよめる　惠慶法師
松陰のいはゐの水をむすひあけて夏なき年と思ける哉
秋歌
延喜御時御屏風に　紀貫之
荻のはのそよく音こそ秋かせの人にしらるゝはしめ也けれ
七夕　人丸
天河とをきわたりにあらねとも君かふなてはとしにこそまて
少將に侍けるときこまむかへにまかりてよめる　太宰大貳高遠
相坂の關のいはかとふみならし山立いつるきりはらの駒
延喜御時月次御屏風歌　紀貫之
あふさかの關のしみつにかけみえていまや引らんもち月の駒
此ふたつの歌はとり〳〵にまことにめてたき歌也。
屏風に八月十五夜池ある家に遊したる所を　源したかふ
水の面にてる月なみをかそふれはこよひそ秋の最中成ける
この歌又くらはし山の郭公の歌の風躰也。
三條太政大臣の家にてよめる　藤原爲賴
おぼつかないつくなるらん虫のねを尋は草の露やみたれん
これはひとへに優の躰也。
題しらす　よしのふ
もみちせぬときはの山にすむ鹿はをのれ鳴てや秋をしるらん
くれの秋重之かせうそこしたる返事によめる　平兼盛
くれて行秋のかたみにをくものは我もとゆひの霜にそ有ける
これこそあはれによめる歌に侍める。
冬歌

ならのみかとたつたかはに紅葉御らんしける行幸
によめる　　柿本人まろ
たつ田川もみち葉なかる神なひのみむろの山に時雨ふるらし
これ古今の歌也、まことにめてたく侍かな。
たいしらす　　つらゆき
思かねいもかりゆけは冬のよの河かせさむみちとりなく也
屏風に　　平かねもり
ふしつけし淀のわたりをけさみれはとけんこもなく氷しにけり
これ一のすかたなり。期なとはうちまかせぬ歌の詞なれ
と。このうたにとりていとをかしかるへし。
　　清原もとすけ
高砂のまつにすむつる冬くれはおのへの霜や置まさるらん
月をみてよめる　　恵慶法師
天の原空さへさえやわたるらんこほりとみゆる冬のよの月
別離歌
閑所にして故郷につかはしける　　菅贈太政大臣
君かすむ宿の梢をゆく／＼とかくるゝまてもかへりみしはや
物名歌
あらふねのみやしろ　　すけみ
茎もはもみな緑なるふかせりはあらふねのみや白くみゆらん
雑歌
冷泉院東宮の御時月をまつこゝろうへのをのこと
もよみ侍けるに　　仲文（東宮蔵人）
有明の月のひかりをまつ程にわかよのいたくふけにける哉
ありかたくよめる歌也。
水上秋月といへることをよめる　　菅原文時
水の面に月のしつむをみさりせは我ひとりとや思はてまし
とをきところにまかるとて女につかはしける　　大江爲基
わするなよ程は雲井に成ぬとも空行月のめくりあふまて
円融院御時斎宮くたり侍けるに母の前斎宮もろと
もに越侍て　　斎宮女御
世にふれは又もこえけり鈴鹿山むかしの今に成にやあるらん
この歌も秀句あまりなるにや。
恋歌
天徳御時歌合に　　壬生忠見
恋すてふ我名はまたきたちにけり人しれすこそ思ひそめしか
　　平兼盛
忍れといろにいてにけりわか恋はものや思ふと人のとふまて
題しらす　　人まろ
奥山のいはかきぬまのみこもりに恋やわたらん逢よしをなみ
頼めつゝこぬよあまたに成ぬれはまたしと思そ待にまされる

この二首の歌なとは。たゝこのころの人の歌にてもいみしくこそ侍れ。

入道攝政まかりけるに門をおそくあくといひ侍けれはよみていたしける　右大將道綱母

なけきつゝ獨ぬるよの明るまはいかに久しきものとかはしる

雜春歌

ことありてのち　菅贈太政大臣

こちふかはにほひをこせよ梅花あるしなしとて春をわするな

北白川にて花みに人〳〵まうてきたりけれはよめる　公任卿

春きてそ人も問ける山さとははなこそやとのあるしなりけれ

延喜御時南殿のさくらのちりしきて侍けれはよめる　源公忠朝臣

とのもりのとものみやつこ心あらは此春はかり朝きよめすな

左大臣女御入内の屏風に　公任卿

紫の雲とそみゆる藤のはないかなるやとのしるし成らん

しはすのつこもりによめる　きのつらゆき

むは玉のわかくろかみに年くれてかゝみの影にふれる白雪

雜戀

いなりにまうてゝけさうしはしめて侍ける女のこと人にあひて侍けれはつかはしける　長たふ

我といへはいなりの神もつらき哉人のためとは祈らさりしを

このうたいみしくおかしきすかたなり。たゝそのふしとなけれと。歌はかくよむへきなるへし。

哀傷歌

あさかほのはなを人につかはすとて　藤原道信朝臣

あさかほをなにはかなしと思けん人をも花はさこそみるらめ

恒德公の服ぬき侍とて

かきりあれはけふぬきすてつふち衣はてなき物は涙なりけり

たいしらす　よみ人しらす

山寺のいりあひの鐘の聲ことに今日もくれぬと聞そかなしき

少納言藤原むねまさかしかにて出家し侍りときゝてつかはしける　公任卿

さゝ波やしかのうら風いかはかり心のうちのすゝしかるらむ

性空上人のもとにつかはしける　いつみしきふ

くらきよりくらき道にそ入にけるはるかにてらせ山のはの月

南天竺より婆羅門僧正東大寺供養にあひにほたひのなきさにつきたりけるときよみ侍ける

行基菩薩

靈山の釋迦のみまへに契てし眞如くちせすあひみつる哉

返し　婆羅門僧正

かひらゑにともに契しかひありて文殊のみかほあひみつる哉

聖德太子かたをかの山過道人家におはしましける
に飢人路頭にふせり太子馬よりおりてあゆみより
給てむらさきの御そをぬきてうへ人にたまふとて
よみたまひける歌
しなてるやかたおか山にいひにうへてふせるたひ人あはれお
やなしおやなし(セ脫歟)になれ〳〵けめやさすたけのきみはやなきい
ゐにうゑてこやるそのたひ人あはれ〳〵と云。
飢人かしらをもたけておほんかへしをたてまつる
いかるかやとみのをかはのたえはこそ我大君のみなは忘れめ
已上五首上の卷にしるせりといへとも。この集にいれる
をもらさんこそいかゝとて。かさねてかきしるすなり。
已上拾遺集。

後拾遺集

春

正月一日よみ侍りける　小大君
いかにねておくるあしたに云事そ昨日をこそと今日をことしと
みちのくにゝ侍ける時　光朝法師母
出てみよいまは霞も立ぬらんはるはこれよりあくとこそきけ
春從東來といふこゝろをよめる　源師賢朝臣
東路はなこその關もあるものをいかてか春のこえてきつらん
春立日よめる　橘俊綱朝臣
相坂の關をや春もこえつらんをとはの山のけさはかすめる
一條院御ときうへのをのこども春のうたとてこひ
侍けれはよめる　むらさきしきふ
みよしのは春のけしきと霞めともむすほゝれたる雪のした草
たいしらす　いつみしきふ
春霞たつやをそきと山川の岩まをくゝるをときこゆなり
たかつかさとのゝ七十賀の屏風に臨時客の所をよ
める　赤染衞門
紫の袖をつらねてきたるかなはるたつことはこれそうれしき
入道前太政大臣大饗の屏風に臨時客の所を讀侍け
る　入道前太政大臣
君ませとやりつる使きにけらしのへのきゝすはとりやしつ覽
正月はかりつのくにゝ侍ける時人のもとにつかは
しける　能因法師
心あらん人にみせはやつの國のなにはあたりの春のけしきを
後冷泉院の御とき后宮歌合に殘雪をよめる　藤原範永朝臣
花ならておらまほしきは難波江のあしのわかはにふれる白雪
題しらす　大江よしとき
梅かゝをよはのあらしの吹ためてまきのいたとの明る待けり
よみ人しらす

山里はかきねの梅のうつり香にひとりねもせぬ心ちこそすれ

かへるかりをよめる　津守國基

うすゝみにかくたまつさとみゆる哉かすめる空にかへる雁金

白川院にてはなをみてよみ侍ける　大納言長家

あつまちの人にとはゝやしら川の關にもかくや花はにほふと

たいしらす　紫式部

世中をなになけかまし山櫻花みるほとのこゝろなりせは

宇治前太政大臣花みになんときゝてつかはしける　大納言齊信

いにしへの花みし人は尋しをおいは春にもしられさりけり

栗田右大臣家にて殘はなをよみ侍ける　藤原爲時

をくれても開へきはなはさきにけり身をかきりとも思ける哉

夏歌

正子內親王繪合し侍けるにかねのさうしにかきて　さかみ

みわたせは波のしからみかけてけり卯花さける玉川の里

郭公をよめる　能因法し

時鳥きなかぬよいのしるしならはぬるよも一夜あらましものを

はなたちはなをよめる　さかみ

五月やみ空なつかしくにほふ哉はなたちはなに風やふくらん

宇治の前太政大臣三十講の後歌合し侍るに讀侍ける　大納言長家

夏のよもすゝしかりけり月影は庭しろたへにしもとみえつゝ

秋歌

八月十五夜に讀る　惟宗爲經

古しへの月かゝりせはかつらきの神はよるとも契らさらまし

たいしらす　曾ねよし忠

なけやなけ蓬か杣のきり／＼す過行秋はけにそかなしき

叢の露をよめる　範永

けさきつる野原の露にわれぬれぬうつりやしぬる萩か花すり

永承四年內裏歌合に　堀川右大臣

いかなれは同し時雨に紅葉するはゝその杜のうすくこからん

冬歌

承保三年十月今上御かりのつゐてに大井河にみゆきせさせ給ける日よませたまひける　御製

大井川ふるきなかれを尋きてあらしの山のもみちをそみる

かつらのやまさとにてしくれのいたくふり侍けるによめる　藤原兼房朝臣

あはれにも絕す音するしくれ哉とふへき人もとはぬ栖に

落葉如雨と云ことをよめる　源頼綱

木葉ちる宿はきゝわくこともなししくれする夜も時雨せぬよも

藤原家経
もみちちるをとはしくれの心ちして梢の空はくもらさりけり
十月はかり山さとによるとまりてよめる
能因法師
神無月ねさめにきけはやま里のあらしのこゑはこの葉成けり
永承四年内裏歌合にちとりをよみ侍ける
堀川右大臣
さほ川の霧のあなたに鳴千鳥こゑはへたてぬものにそ有ける
たいしらす
和泉式部
さひしさに煙をたにもたゝしとて柴おりくふる冬の山さと
増基法師
冬のよにいくたひ許ねさめしてものおもふ宿のひましらむ覧
障子繪に雪のあしたたかかりしたる所をよみ侍ける
大納言長家
とやかへるしらふの鷹のこゐをなみ雪けの空にあはせつる哉
たいしらす
好忠
岩間には氷のくさひ打てけり玉ゐし水も今はもりこす
賀歌
後一條院うまれさせ給て七夜に人々まいりあひて
女房さかつきいたせと侍けるに
紫式部
めつらしき光さしそふ杯はもちなからこそ千世もめくらめ

三條院みこの宮と申ける時帶刀陣の歌合によめる
大江よしとき
君か世はちよに一たひゐるちりのしら雲かゝる山となるまて
承暦二年内裏歌合に
民部卿経信
君か世はつきしとそ思神風やみもすそ川のすまむかきりは
同四年内裏歌合によめる
式部大輔資業
君か世はしらたまつはきやちよとも何かいのらん限なけれは
羇旅歌
くまのゝ道にておほん心ち例ならすおほされける
にあまのしほやくを御らんして
花山院御製
旅の空よはの煙とのほりなはあまのもしほ火たくかとやみん
みちのくにゝまかりくたりけるにしら川の關にて
よめる
能因法師
都をは霞とゝもにたちしかと秋かせそ吹しらかはのせき
哀傷歌
一條院の御とき皇后宮(定子)かくれたまひてのち
帳のかたひらのひもに結つけられて侍ける
よもすから契しことを忘すはこひん涙の色そゆかしき
圓融院法皇うせさせ給てむらさきのに御そうそう
侍けるにひとゝせこの所にて子日せさせたまひし
ことなと思いてゝよみ侍ける
大納言行成

おくれしとつねの御幸はいそきしを姫にそはぬ旅のかなしさ
小式部なくなりてのちむまごともの侍けるをみて
よめる　いつみしきふ
とゝめ置て誰を哀と思ふらんこはまさるらんこはまさりけり
圓融院法皇うせさせたまひて又のとし御乳母藤三
位のつほねにくるみ色のかみにかきておい法師の
まねにてさしをかせたまひける　一條院御製
これをたにかたみと思を都にははかへやしつるしゐしはの袖
よしたかの少將うせてのち人のゆめにみえける歌
しくれとはちくさの花そちりまかふなに故郷に袖ぬらすらん
きてなれしころもの袖もかはらぬに別し秋に成にける哉
戀歌
東宮と申ける時故内侍のかみのもとに初てつかは
しける　後朱雀院御製
ほのかにもしらせてし哉春霞かすみのうちにおもふ心を
女につかはしける　實方朝臣
かくとたにえやはいふきのさしも草さしもしらしなもゆる思を
公頼にあひくして侍けるに中納言さたより忍てを
とつれけるをひまなきさまをやみけんたえまかち
にをとなひ侍ければつかはしける　さかみ
逢事のなきよりかねてつらければさそあらましにぬるゝ袖哉

宇治前太政大臣家三十講の後歌合に戀の心をよみ
ける　堀川右大臣
逢まてとせめて命のをしければ戀こそ人のいのち成けれ
題しらす　小弁
思しる人もこそあれあちきなくつれなき戀に身をやかへてん
中關白少將に侍けるときはらからなる人にものい
ひわたりけりたのめてまうてこさりけるつとめて
女にかはりてつかはしける　馬内侍（赤染衛門イ）
やすらはてねなまし物をさ夜更てかたふくまでの月をみし哉
たいしらす　いつみしきふ
津國のこやとも人をいふへきにひまこそなけれ蘆のやへふき
清少納言人にしられてたえぬなかにて侍けるにひ
さしくおとつれさりければよそ〳〵にてものなと
いひけるにさしよりて忘にけりなといひ侍りけれ
はよめる　さねかたの朝臣
忘すよまた忘すよかはらやのしたふくけふりした結ひつゝ
夜ことにこんといひてよかれしけるおとこのもと
につかはしける　いつみしきふ
今夜さへあらはかくこそ思ほえめ今日くれぬ間の命ともかな
陽明門院皇后宮と申ける時ひさしく内にまいらせ
たまはさりける時五月五日たてまつらせ給ける

あやめ草かけしたもとのねをたえてさらに戀ちにまとふ比哉　後朱雀院御製

高階なりのふいしやまにこもりてひさしくをとし
侍らさりけれは　いせたいふ

みるめこそあふみの海にかたからめ吹たにかよへしかの浦風

題しらす　左京大夫道雅

涙やは又もあふへきつまならんなくより外のなくさめそなき

心かはりたる人に遣ける　周防内侍

契りしにあらぬつらさもあふとのなきにはえこそ恨さりけれ

こゝろかはりたりける女につかはしける　清原元輔

ちきりきなかたみに袖をしほりつゝ末の松山波こさしとは

たいしらす　よしたゝ

あちきなし我身にまさる物やあると戀せし人をもときし物を

承暦二年内裏歌合に　辨のめのと

戀すとも泪の色のなかりせはしはしは人にしられさらまし

永承六年内裏歌合に　さかみ

恨わひほさぬ袖たにあるものを戀にくちなむ名こそおしけれ

題しらす　いつみしきふ

さま／＼に思こゝろはあるものをおしひたすらにぬるゝ袖哉

長たふ

我心かはらんものかかはらやのしたゝく烟わきかへりつゝ

永承四年内裏歌合に　堀川右大臣

うしとても更に思そかへされぬ戀はうらなき物にそ有ける

題しらす　源重之

まつ島やをしまか礒にかつきせし蜑の袖こそかくはぬれしか

雑歌

例ならすおはしまして位さらんとおほしめしける
ころ月のあかゝりけるを御らんして　三條院御製

心にもあらてうき世になからへは戀しかるへき夜半の月かな

後朱雀院の御時月のあかゝりける夜うへにのほら
せ給ていかなることか申させたまひけん　陽明門院

今はたゝ雲井の月をなかめつゝめくりあふへき程もしられす

こんといひつゝこさりける人のもとに月のあかゝ
りけるよつかはしける　小辨

なをさりの空たのめせて哀にも待にかならすいつる月哉

返し　小式部

たのめすはまたてぬるよもありなまし誰ゆへかみる有明の月

月のいりなむとするをみて讀侍ける　僧正深覺

なかむれは月かたふきぬ哀わかこの世の程もかはかりそかし

五月五日六條の前齋院にものかたりあはせ侍ける

に小辨おそくいたすとて方人こめてつきのものかたりをいたし侍けるを宇治前太政大臣小辨か物語は見所あらんとてまたれけるに岩かき沼といふ物かたりをいたすとて讀侍ける　小辨

引すつるいはかきぬまのあやめ草思しらすもけふにあふ哉

大納言行成ものかたりなとして內の御ものいみにこもれはとていそきかへりてつとめて鳥のこゑにもよほされてといひ侍けれはよふかゝりけん鳥のこゑは函谷關のことにやといひつかはしたりけるをたちかへりこれはあふさかのせきになんといへりけれはよみてつかはしける　清少納言

よをこめて鳥のそらねははかる共世にあふさかの關は許さし

中關白のいみに法興院にこもりてあかつき千とりのなくをきゝてよめる　圓松法師

明ぬなりかもの川瀨に鳴千鳥けふもはかなくくれんとすらん

修行に出たつ日よみ侍ける　增基法師

ともすれはよもの山へにあくかれて心に身をもまかせつる哉

良暹法師大原にこもりぬときゝてつかはしける　素意法師

みくさゐしおほろの清水そこすみて心に月の影はうかふや

返し　良暹法師

程へてや月もうかはん大原やおほろの清水すむ名斗そ

延久五年後三條院住吉にまいらせたまへりけるによみ侍ける　大納言經信

おきつかせ吹にけらしな住吉のまつのしつくをあらふ白波

釋敎

普門品　前大納言公任

世を救ふうちには誰かいらさらんあまねき門は人しさゝねは

巳上後拾遺集。

おほかたみなちかき世の人の心にかなひて。もらすへきもなく侍れと。殊なるともを注つけ侍れは。みないみしくおかしくこそ侍めれ。

金葉和歌集

春歌

ほりかはの院の御とき百首歌めしけるに立春の心をつかうまつりける　修理大夫顯季

うちなひき春はきにけり山川のいはまの氷今やとくらん

東宮大夫公實

春立て梢にきえぬしら雪はまたきにさけるはなかとそみる

藤原顯仲朝臣

いつしかと明行空のかすめるはあまの戸よりや春は立らん

これよりのちはところ／＼をしるしつけ侍へし。

花隨（薫イ）風と云ことを　攝政左大臣
よしの山嶺のさくらや咲ぬらんふもとの里にゝほふ春風
宇治前太政大臣家歌合に　源俊頼朝臣
山櫻咲そめしより久かたの雲井にみゆる瀧の白糸
後冷泉院御時皇后宮歌合に　堀川右大臣
春雨にぬれてたつねん山櫻雲のかへしのあらしもそ吹
ほりかはの院御とき中宮の御方にて風靜花芳と云
こゝろを　としよりの朝臣
梢にはふくともみえすさくらはなかほるそ風のしるし成ける

夏歌

卯花をよみ侍りける　攝政左大臣
うの花のさかぬかきねはなけれとも名になかれたる玉川の里
郭公をよめる　藤原顯輔朝臣
ほとゝきすあかてすきぬる聲により跡なき空をなかめつる哉
さみたれをよめる　參議師頼
五月雨はぬまのいはかき水こえてまこも刈へき方もしられす
水風晩涼といふこゝろを　としよりの朝臣
風ふけは蓮のうきはに玉こえてすゝしく成ぬひくらしのこゑ
家の歌合にはなたちはなをよみ侍ける　權中納言俊忠
さ月やみはな橘のありかをは風のつてにそ空にしりける

二條關白家にて雨後野草と云ことをよめる　としよりの朝臣
此里も夕立しけりあさちふに露のすからぬ草のはもなし
公實卿家にて對水待月と云ことをよめる　藤原基俊
夏の夜の月まつ程のてすさひに岩もろし水いくむすひしつ

秋歌

田家秋晩（風イ）と云こゝろを讀侍ける　大納言經信
夕されは門田のいなはをとつれてあしのまろやに秋風そふく
奈良花林院歌合によめる　權僧正永縁
いかなれは秋は光のまさるらんおなしみかさの山のはの月
きり／＼すをよめる　前齋院六條
露しけきのへにならひてきり／＼す我手枕のしたに鳴也
夜聞鹿聲と云ことをよめる　內大臣家越後
よはになくこゑに心そあくかるゝ我身は鹿のつまならねとも
家の歌合に草はなをよめる　權中納言俊忠
夕露の玉かつらしてをみなへしのはらの風におれやふすらん
堀川院御とき題をさくりて歌つかうまつりけるに
すゝきをとりてよめる　としよりの朝臣
鶉鳴まのゝ入江のはま風におはななみよる秋の夕くれ
攝政左大臣家にてもみちをよめる　藤原仲實

もすのゐるはしの立枝のうす紅葉誰わか宿のものとみるらん

冬歌

深山のあられと云こゝろをよみ侍ける　大藏卿匡房

はし鷹のしらふに色やまかふらんとかへる山にあられふる也

たかゝりをよめる　内大臣家越後

とはりやかたのゝをのに鳴雉子さこそはかりの人はつらけれ

前太政大臣家歌合に雪歌　皇后宮攝津

ふる雪に杉のあをはもうつもれてしるしもみえす三輪の山本

百首歌の中に雪をよめる　隆源法師

みやこたに雪ふりぬれはしからきのま木の杣山跡たえぬらん

攝政左大臣家にて歳暮のこゝろをよめる

藤原永實

かそふるにのこりすくなき身につめはせめても惜き年の暮哉

歳のくれをよみ侍ける　中納言國信

何ことをまつともなしに明くれてことしもけふに成にける哉

賀歌

宇治前太政大臣家歌合に祝のこゝろをよみ侍ける

中納言通俊

君か世はあまのこやねの尊よりいはひそそめし久しかれとは

大藏卿匡房

君か代は限もあらしみかさ山みねに朝日のさゝんかきりは

戀歌

たのめてあはぬ戀と云ことをよめる　源顯國

あひみんと頼むれはこそくれは鳥あやしやいかゝ立歸るへき

實行卿家歌合によめる　藤原道經

戀わひてなさふる袖やなかれいつる涙の川のゐせきなるらん

國信卿家歌合に　俊頼朝臣

よとゝもに玉ちるとこのすか枕みせはや人によはのけしきを

俊忠卿家に戀の十首歌よませ侍ける時ちかふこひ

と云心をよめる　皇后宮しきふ

逢みての後つらからは世々を經てこれより増る戀にまとはん

戀の歌とて讀侍ける　藤原成通

後の世と契し人もなきものをしなはやとのみいふそはかなき

雜歌

おほみねの笙のいはやにてよみ侍ける　僧正行尊

草の庵をなに露けしと思けんもらぬいはやも袖はぬれけり

百首歌のなかに述懐長歌よみてたてまつりける反

歌　俊頼朝臣

世中はうき身にそへるかけなれや思すつれとはなれさりけり

小式部内侍うせてのち上東門院よりとしころたま

ひけることをなき跡にもたまはりけるに小式部内
侍とかきつけられたりけるをみてよめる
いつみしきふ
もろともに苔の下にはくちすして埋もれぬ名をみるそ悲しき
月あかゝりける夜覺門上人につかはしける
僧正行尊
いさきよき空のけしきをたのむ哉我まとはすな秋の夜の月
已上金葉集。

詞華和歌集

春歌

堀川院御とき百首歌めしける時立春の心をよみ侍
ける　大藏卿匡房
氷ゐししかのからさき打とけてさゝ波よする春かせそふく
寛和二年内裏歌合に　藤原惟成
きのふかも霰ふりしはしからきのとやまの霞春めきにけり
天德四年内裏歌合に　平兼盛
故郷は春めきにけりみよしのゝみかきか原をかすみこめたり
初聞鶯と云ことをよめる　道命法師
たまさかに我まちえたる鶯のはつねをあやな人やきくらん
たいしらす　曾禰好忠
雪きえはゑくのわかなもつむへきに春さへはれぬみ山への里

冷泉院東宮と申ける時百首歌たてまつりけるによ
める　源重之
かすかのにあさなく雉のはね音は雪の消まにわかなつめとや
この歌ともみなまことにめつらしけにおもしろく侍なる
へし。
白河にはなみにまかりてよめる　としよりの朝臣
しらかはの春のこすゑをみわたせは松こそ花のたえまなりけれ
三月盡によませたまひける　新院御製
おしむとてこよひ書をく言のはやあやなく春のかたみ成へき

夏歌

たいしらす　能因法師
山ひこのこたふる山のほとゝきす一こゑなけは二聲そきく
大納言公教
まつ程はぬるよもなきを郭公なくねはゆめの心ちこそすれ
世をそむかせ給てのちはな橘を御らんして　花山院御製
宿ちかくはなたちはなはほりうへてみし昔をしのふつまと成けり
たいしらす　よしたゝ
杣川のいかたの床のうきまくら夏はすゝしきふしと成けり

秋歌

つのくにゝすみける比大江爲基任はてゝのほりけ

るに遣ける　　　　　　　　　　　　　　　　　　僧都淸因

君まさはとはましものをつの國のいくたのもりの秋の初風

承曆三年內裏歌合に　　　　　　　　　　　　　顯綱朝臣

たなはたに心はかすとおもはねとくれ行空はうれしかりけり

題しらす　　　　　　　　　　　　　　　　　　右大臣

いかなれはおなし空なる月影の秋しもことにてりまさるらん

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　いつみしきふ

秋ふくはいかなる色の風なれは身にしむはかり哀なるらん

九月十三夜月照菊花といふことをよませ給へる　新院御製

秋ふかみ花にはきくのせきなれはしたはに月ももりあかし鬼

冬歌

題しらす　　　　　　　　　　　　　　　　　　大江嘉言

山ふかみちりてつもれる紅葉はのかはけるうへに時雨降なり

旅宿時雨と云ことをよみ侍ける　　　　　　　　　瞻西上人

いほりさすならの木陰にもる月のくもるとみれは時雨ふる也

たかゝりをよめる　　　　　　　　　　　　　　なかたふ

霰ふるかたのゝみのゝすり衣ぬれぬやとかす人しなければ

戀歌

たいしらす　　　　　　　　　　　　　　　　　實方朝臣

いかてかは思ありともしらすへきむろのやしまの煙ならては

堀川院御時百首　　　　　　　　　　　　　　　修理大夫顯季

わか戀はよしのゝ山のおくなれや思いれともあふ人もなし

たいしらす　　　　　　　　　　　　　　　　　平祐擧

むれはふし袖はきよみか關なれや煙も波もたゝぬ日そなき

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　新院御製

瀨をはやみ岩にせかるゝ瀧河のわれてもゝ末にあはんとそ思ふ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　藤原道經

我戀はあひそめてこそ增りけれしかまのかちのいろならね共

大江公賴にわすられてよめる　　　　　　　　　さかみ

夕くれはまたれしものをいまはたゝ行らん方を思ひこそやれ

雜歌

御修行のほとさくらのはなのしたにてよませたまひける　　花山院御製

木の本をすみかとすれはをのつから花みる人になりぬへき哉

新院くらゐの御とき后宮の御かたにて藤はな年久と云ことをよませ給けるによみ侍ける　　大納言師賴

かすか山北の藤なみさきしよりさかゆへしとはかれて知にき

左衞門督家成布引瀧みにまかりたりけるによめる　　藤原隆季

雲ゐよりつらぬきかくる白玉をたれ布引の瀧といひけむ

家歌合によめる　　左京大夫顯輔

夜もすからふしのたかねに雲きえて淸見かせきにすめる月影

新院百首歌たてまつりける時述懷の歌とて　　藤原季通朝臣

いとひても猶しのはるゝ我身哉ふたゝひくへき此世ならねは

神祇伯顯仲廣田社にて歌合し侍けるに寄月述懷の
こゝろをよみ侍ける　　左京大夫顯輔

難波江のあしまにやとる月みれは我身ひとつもしつまさり鬼

この歌いみしくをかしき歌也。これは拾遺集の菅原文時歌に。

水のおもに月のしつむをみさりせはわれひとりとや思はてまし。といへる歌な。いますこし優にひきなしてみえ侍なり。この歌はむかしの歌にもはちさる歌なり。

大江擧周おもくわつらひてかきりにみえけれはよめる　　赤染衛門

かはらんと思命はおしからてさてもわかれんことそかなしき

この歌はいみしくありかたく。あはれによめるうた也。

新院位におはしましけるとき海上遠望と云ことを
よみ侍ける　　關白前太政大臣

わたの原こきいてゝみれは久堅の雲井にまかふおきつしら波

已上詞華集。

千載和歌集

春歌

立春日よみ侍りける　　源俊賴朝臣

春のくるあしたの原をみわたせは霞もけふそたちはしめける

堀川院御時百首歌たてまつりける時よみ侍ける　　中納言國信

みむろ山谷にや春の立ぬらん雪の下水いはたゝくなり

百首の歌たてまつりける時初春の心をよめる　　待賢門院堀川

雪ふかきいはのかけ道あとたゆるよしのゝ里も春はきにけり

堀川院御とき百首歌たてまつりける時殘雪をよみ
侍ける　　前中納言匡房

道たゆといとひしものを山里にきゆるはおしきこその雪哉

承曆二年内裏後番歌合に霞をよめる　　藤原顯綱朝臣

春たては雪のした水打とけて谷のうくひすいまそ鳴なる

後冷泉院御時皇后宮歌合によめる　　大納言隆國

山里のかきれに春やしるからん霞まぬさきにうくひすのなく

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍ける時十首歌よ
ませ侍りけるに霞の歌とてよめる　　源俊賴朝臣

煙かとむろのやしまをみし程にやかても空のかすみぬる哉

右大臣に侍ける時家に歌合し侍けるに霞の歌とて

よみ侍ける　　攝政前右大臣
霞しく春のしほちをみわたせはみとりをわくる沖つ白波
ほりかはの院御時百首のうちわかなの歌とてよめる　　としよりの朝臣
かすかのゝ雪を若菜につみそへてけふさへ袖のしほれぬる哉
梅花夜芳と云こゝろをよめる
梅か香は己か垣ねをあくかれてまやのあまりにひまもとむ也
百首歌めしける時春歌とてよませたまうける　　崇徳院御製
あさゆふにはなまつ比は思ねの夢のうちにそさきはしめける
　　待賢門院堀川
いつかたに花咲ぬらんと思よりよもの山へにちる心かな
故郷のはなと云心をよめる　　讀人しらす
さゝなみやしかのみやこはあれにしをむかしなからの山櫻哉
百首歌たてまつりけるとき花のうたとてよめる　　藤原季通朝臣
よしの山花はなかはに散にけりたえ〳〵のこるみねのしら雲
堀川院の御とき百首のうちくれの春の心をよめる　　河　内
けふくれぬ花の散しもかくそありし二たひ春はものを思ふよ
夏歌

卯花の歌とて　　仁和寺後入道法親王
玉川とをとに聞しは卯花の(をイ)露をかさせる(のイ)なにこそ有けれ
堀河院御時百首歌たてまつりけるときあふひの歌とてよめる　　藤原基俊
あふひ草てる日は神の心かはかけさすかたにまつなひくらん
かものいつきおりたまひてのちまつりのみあれの日人のあふひをたてまつりて侍けるにかきつけられ侍ける　　式子内親王
神山のふもとになれしあふひ草ひきわかれても年そへにける
暮天郭公といへる心を　　仁和寺法親王守ー
ほとゝきす猶はつこゑをしのふ山ゆふゐる雲のそこになく也
後朱雀院御時一品親王歌合にはなたちはなをよめる
　　枇杷殿皇太后宮五節
たゝならぬ花橘のにほひ哉そよふる袖は誰となけれと
百首歌めしける時はなたちはなの歌とてよませたまひける　　崇徳院御製
五月雨に花たちはなのかほるよは月すむ秋もさもあらはあれ
堀川院の御時百首うたたてまつりける時ともしのこゝろを　　前中納言匡房
照射するみやきか原の下露にしのふもちすりかはくまそなき
題しらす　　としよりの朝臣

あはれにもみさほにもゆるほたる哉聲たてつへき此世と思に

秋歌

秋立日よめる　侍從乳母

秋たつときゝつるからにわか宿の荻のは風の吹かはるらむ

秋のはしめの心をよめる　寂然法師

秋はきぬ年もなかはに過ぬとやおきふく風のおとろかすらん

たいしらす　いつみしきふ

人もかなみせもきかせも萩か花さくゆふかけの日くらしの聲

百首歌たてまつりけるとき秋の歌とてよめる

藤原季通朝臣

野分する野へのけしきをみるときは心なき人あらしとそ思ふ

としなり

ゆふされはのへの秋風身にしみてうつらなく也ふか草のさと

たいしらす　としよりの朝臣

なにとなくものそかなしき菅原やふしみのさとの秋の夕くれ

俊忠卿かつらの家にて水上月といへるこゝろをよめる

あすもこんのちの玉川はきこえていろなる波に月やとりけり

百首の歌のうちしかをよめる　待賢門院堀川

さらぬたに夕へさひしき山里のきりのまかきにをしか鳴なり

たいしらす　讀人不知

おとろかす音こそよるの小山田は人なきよりも淋しかりけれ

源兼昌

我門のおくてのひたにおとろきてむろのかり田に鳴そ立なる

冬歌

たいしらす　いつみしきふ

外山ふくあらしの風の音きけはまたきに冬のおくそしらるゝ

馬内侍

ねさめして誰かきくらんこの比の木葉にかゝるよはの時雨を

羇旅歌

題しらす　藤原範永朝臣

有明の月もしみつにやとりけりこよひはこえしあふ坂の關

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍けるとき關路月と云こゝろをよみ侍ける　中納言師俊

はりまちや須磨の關屋の板ひさし月もれとてやまはら成らん

崇德院に百首歌めしける時たひの歌とてよめる

待賢門院安藝

篠のはをゆふ露なから折しけはたまちる旅の草枕かな

戀歌

堀川院御時百首歌にはしめのこひのこゝろをよめる　源俊頼朝臣

難波江のもにうつもるゝ玉柏あらはれてたに人をこひはや

俊忠卿家歌合に戀のこゝろをよめる

後二條關白家の筑前

思よりいつしかぬるゝたもと哉なみたや戀のしるへなるらん

たいしらす　　いつみしきふ

兎も角もいはゝなへてに成ぬへしねになきて社みすへかりけれ

うらむへき心はかりはあるものをなきになしてもとはぬ君哉

雑歌

上東門院より六十賀をこなひたまひける時よみ侍ける　　法成寺入道前太政大臣

かそへしる人なかりせはおく山の谷の松とや年をつまゝし

題不知　　赤染衞門

物おもはぬ人もやこよひ詠むらんねられぬまゝに月をみる哉

相摸

なかめつゝ昔も月はみしものをかくやは袖にひまなかるへき

已上千載集。

撰集のかすとて。はし〳〵はかりかきいて侍を。おもはすに歌のおほくよろしく侍けれは。いつれもすてかたく侍れと。たゝすこしをかきつけ侍なり。歌のすかたはこの集ともにみえ侍なり。

金葉集は撰者のさほとの歌人に侍れは。歌ともゝみなよろしくは侍を。すこし時のはなをおる心のすゝみけるにや。當時の人のみはしめよりつゝきたちたるやうにて。いかにそみえ侍なるへし。詞華集はことにさまはよくみえ侍を。あまりにおかしきさまのふりにて。されうたさまのおほく侍なり。あしまにやとる月みれはといへる歌は。いとありかたく侍ものを。とよりさまに歌のふりのいかに成にけるにか。その風躰の歌をはゑらはすして。されうたにのみなりにけれは。かつはさかしらするものとも侍りけるにこそ。千載集は又おろかなる心ひとつにえらひける程に。歌をのみ思て人をわすれにけるに侍めり。されとも後拾遺の比までの歌のかすおほくのこりて侍けるなん。集の冥加にはみえける。

この草紙の本躰は。かのみやよりおほきなるさうしをたまひて。かやうのことかきてたてまつれと侍しかは。たゝその御さうしにかきみてんとはかりにて。なにとなきよしなしことをおほくしるしつけ侍しなり。そのうへに生年已八十四のとし。人にもみせたにあはせ侍らす。たゝあさきみつくきのあとにまかせてしるしつけ侍にしかは。いかはかりひかこともおほく侍らんとおほえ侍を。又御らんせんと侍れは。いまさらになをすへきにあらて。又おなしことをしるしつけ侍る心のはかなさ。申かきりなくこそかたはらいたく侍れ。これか

きしるしいて侍しことも。又五年にまかり成にけり。

建仁元年五月日

依式子内親王仰被進之。

本云

古来風躰抄（上下）下巻二条五月日書写之一帖。愚本依有紛失之事。申出新院御本

寫之畢。件御本即家本也。

正中二年林鐘四日。雨中扶病身終微功而已。

藤為基　在判

〔右古来風躰抄以圖書寮本及刊本校合舊本下巻闕今補之〕

續群書類從卷第四百五十九

和歌部九十四

今來風體抄

うた連歌のことは。たゝ四五十年。明匠達の中侍しことを。みゝのそこにとゝめたるはかりなり。さらに天性を得たることもなし。稽古もたらす侍るなり。連歌のことは多年の數奇によりて。世の人もゆるし侍るにや。詠歌の事はすへて立いらさるみちにて侍れとも。ふしきの冥加にてや。四代の勅撰にも歌數おもふまゝにいりて侍らへ。この度の集無爲に申さたして。和序をたてまつれる事。元久の跡かはらす。和漢にたつさへ侍ししるし。みの眉目とも存なり。貞和の比は毎月三度の月なみ百首の會。爲定大納言の點又判なとにて侍しなり。その時の會衆はみな名譽の人々にてありしなり。家の人には爲忠。爲秀卿定衆にて侍し。爲明卿はとき〳〵ましり侍しなり。頓阿。慶運。兼好定衆にて所存を申しなり。（蔭）道英なとは又勿論なり。門眞。霜臺入道。頴阿なともよませ侍し。其比は頓慶兼三人。いつれも〳〵上手といはれしなり。頓阿はかゝり幽玄に。すかたなたらかに。こと〳〵しくなくて。しかもうたことに一かとめつらしく。當座の感もありしにや。慶運はたけをこのみ。ものさひて。ちと古躰にかゝりて。姿心はたらきて。みゝに立さまに侍しなり。爲定大納言はことのほかに慶運をほめられき。兼好は此なかにちとをとりたるやうに。人々も存せしやらん。されとも人の口にある歌ともおほく侍るなり。みやこにかへれはるのかりかれ。此歌は頓も慶もほめ申き。ちと誹諧の躰をそよみし。それはいたくのこともなかりしなり。道英うたも爲定卿ほめ申されき。すく〳〵とよく仕しにや。門眞。藥師寺なとうたよみの名取侍し。頴阿も四條道場にありし比名譽し侍し

にや。此ほか朝月圓照なといふものともの事は。終に不參會侍るなり。家の人々の事はとかく申へきにあらす。されとも世の人口はふさきかたき事にや。其比人の申侍しは。爲定大納言はきはめてけたかく。ゆる〱とたけありて。しかも又もみ〱とあるかたもいてきけるにや。さりともとなを社たのめいつはりのうらみやいつの夕なるらん。此歌は頓阿も難及よしほめ申き。凡天下備和もなかりし上手なり。爲明卿は生得におもしろきさまにはなかりしかとも。まことのみちの人とおもふやうなる歌をよみ侍しなり。たゝしくいさゝか古躰に長あるさまに侍き。おもひきや我しきしまのみちならてうきよのことをとはるへしとはと。元弘の亂のときよみて。人の口にありしより名譽せられ侍りき。爲忠卿は天性の堪能とはおほえ侍らさりしかとも。はれのうたなとはよくよまれしなり。古歌をとる事をこのみき。古今なとはそらにみなおほえられき。まことに道の人とそおほえ侍し。爲秀卿。これは各別のふてい一流の詠歌。又あらぬさまに侍しなり。俊成卿以往のうたこそ本意にてあれ。近比のふていは下品なりと申されしにや。古躰にものさひ。きらひことはなといふ事もなく。おもふさまによまれしなり。されとも天性骨の人にて。やさしくおたやかなるうたおほく侍なり。わすられてのち社さらにおもひしれはかなからぬはいのちなりけりなといふ歌は。殊さら當世の躰おもしろく侍りき。爲重卿は近來の堪能なり。わかきより風骨天性おもしろき歌よみにて侍しなり。頓阿慶運はちと異風なるやうに申侍しかとも。よきうたをは又ほめ申き。玉津島歌合に。またはつくさのわかのうらなみ。偏執の爲忠爲秀もよくよみたると申き。わかくより爲定卿にそひて右筆せられしかは。さためて口傳故實侍らん。生得の骨のあるうたにて。詞心はたらきて。當座おもしろかりしなり。近比は大略宗匠にて侍うへは不及是非。愚意に叶侍し間。公家武家にも譽申侍き。抑此人々の申されしむかしものかたり。おもひいつるに隨てかき付侍なり。ひろく人々にも尋られて。治定せらるへしとなり。

一歌の風躰の事。此人々申されしは。心つよく正しくすくにて。いまた人の詠せぬふせいを。やす〱とつゝけ侍へしとそ承侍し。

一頓阿常に申侍しは。あたらしき心を。やすらかにこと〱しくなくて。うつくしくつゝくへしと申き。こと〱しくはねたる歌をは不甘心由申き。

一初より本歌はかりにかゝりたるはわろし。よく我心中にてよみて。のちに古歌をみるへきなり。

一百首の地歌。文の歌の事。よのつねはさゝめきてはたらかし

たるを文と心得。すくに古體なるを地と申なり。但古風に正しくすくなるを文と申へし。さゝめきたる歌のさしたる事なきを。地と申侍しと頓阿申き。

一たけたかくやまひなく。かゝりよきを。はれのうたと申へし。

一勅撰は續後撰。民部卿（爲家）入道獨してゑらはれたれは。ふていこの集よしと申き。

一寳治民部卿入道の御百首。歌の本にて侍へき由申き。

一新古今ほと面白き集はなし。初心の人にはわろし。心いたら（得イ）ん人は。此集をみん事。いかてかあしかるへき。

一爲藤卿文保百首。爲定卿文保百首なと。よく／＼みるへきなりと。申き。

一なにとしても。昔の上手のうたは。いまの堪能にもまさり侍へしと。頓阿なと申き。

一爲重卿申されしは。歌は同類あれは正體なし。假令里雪の題當座に詠せは。ふしみ。ふかくさなと。人のよみぬへきふせいをすてゝよむなりと申き。但これはいかゝ侍らんと。心中には存せしなり。頓阿なとはいつもふしみにて。あたらしき心あるへしと申侍し。

一爲重卿は心はたらきたる歌をは。よしとはし存せられけるやらん。愚身貞和最初の御百首は。爲定（發イ）卿異風をよみ侍しなり。今度の集に多貞和のうたいれられ侍しほとに。ちといふうにて侍しいかゝと申たりしかは。第一の御百首のうち。初度かよく候と申されき。無覺束事也。其後の御百首詠。爲定大納言合點にて。よく／＼さたしたりしか。わきまへかたき事なり。

一後光嚴院殿爲定卿のさまをよませたまひし事は。愚身青蓮院宮に申さたによりて。如此詠せしめたまふなり。御流の伏見院殿やうはすてられき。いかさまにも異風は不苦事なり。

一左相府より誰をか歌の師にすへきとたつね奉しほとに。爲遠卿は家の嫡勿論なれとも。爲重卿は爲定大納言の右筆をして。おほく故實とも承侍らんと執申き。仍近來は一向爲重卿におほせ談せられ侍しにや。

一本歌をとる事昔は稀なり。後鳥羽院の比おひより。殊人ことに本歌をとり侍にや。そのとり様さま／＼なり。本歌の詞をとりて。ふせいをあらぬものにしなして。本歌のことはをは。上下の句にをきかへたる。常の事なり。これをよしとす。本歌のことは。あかて社おもはん中ははなれなめといふ歌をとりて。ちるはなかわすれかたみのみねの雲とよめる。又本歌の心をとりて。あらぬさまにとりなすうたもあり。遠さかりゆくしかのうら波といふうたをとりて。しかのうらやとをさかりゆく波まよりとよめり。又本歌に贈答したる躰

あり。心ある人にみせはやといふうたをとりて。心あれなとみをおもふかなとよめり。又本歌の心になりかへりて。しかも本歌をへつらはてよむ躰あり。てりもせすくもりもはてぬといふ歌をとりて。おほそらは梅の匂ひに霞つゝとよめり。又ことはかりをとりたるうたも常の事なり。此事は先年頓阿問答の愚問賢註にこまかにしるし侍しやらん。

一源氏狭衣なとのうたをは。歌合なとによむへからすといへり。それも作例は侍らん。

一本歌には堀河院百首の作者まてをとるなり。同は名人の歌をとるへし。勅撰は後拾遺まてをとるへしと申き。但いまは金葉詞花千載新古今なとをとりたらんは。なにかくるしかるへき。此分左相府へも申侍し事なり。連歌には新古今まてもとるなり。譜歌には近代の歌よみの歌をも用なり。

一彼猪申云。歌よみに二の様あり。みちをふかく執する人は。三昧にいるかことく心をしつめて。幽玄のさかひにいりて。人のふるさぬ所を案すへし。又ことかゝぬほとの歌よみは。當座のはちをかゝぬまてにて。それまてはあるへからす。さのみ歌數のはやきもわろし。をそきもしかるへからす。當座のうたは。まつわろくともよみをきて。かされてともかくもなほすなり。貫之はたちなからしつくに濁とよみ。和泉式部ははるかにてらせと云歌をは。骨をおらすして秀逸をえたり。道のほとりにて金をえたるかことし。

一褻ことはたによくは。ふせいのすきたるもくるしからす。はなにかせをこひ。月にあめをねかひなとする事は。上手のしわさなり。さのみこのむへからす。

一うたはことはすくなきをよしと。俊成定家も申されき。連歌はことはくたけてはかなはぬ事なり。

一やすき二文字題なとをは。やうあるやうによみなすへし。野邊虫を野へのむしとよみ。山鹿をやまのしかとよまん事無念なり。

一結ひ題をはまはしてよむへし。又は本歌本説をとりてよむへし。

一歌の題にはうつ文字うたぬ文字あるへし。野外の外の字。江上の上の字なとは。うたぬもくるしからぬ事なり。

一題の文字をあらはさてよむ事は。上手達者のしわさなり。初心の人はしかるへからす。ちかく爲明卿もよみなをして侍き。

一歌の傍題と申事は。題のものにてはなくて。ことものをよみそふるを申事なり。又歌數よむに同事のあるをも傍題と申なり。三首五首のうたにはことに嫌へし。百首なとの時は。雲霞やうのものはいくたひもくるしからす。

一三十一字より多あます事は。秀逸のときはしさいなし。さな

くては無用の事なり。

一寄月。々前。同事といへとも。月前の題にて。雨夜の月入後の月なとはわろし。

一海邊と浦と差別あるへし。社頭神祇又差別あるへし。

一早春の題に立春をよむ事は常の事なれとも。なを差別あるへきよし。爲定卿申され侍さ。

一雜の題にて。季をよむ事は。當季はくるしからす。他の季はわろし。作例はおほし。但かやうの事作例あれはとて。細々に用事はしかるへからす。

一景物は常によみつけたらん名所よかるへし。月雪なとはいつくにもあれとも。めつらしき名所なとをはよまぬ事なり。それも秀逸になれは。くるしからさる事なり。

一歌のやまひは同心の病と第三第四の終の字とを嫌へし。そのほかは細々のうたにはくるしからさるよし頓阿申き。但歌合には猶先途嫌たるやまひとも侍るにや。

一歌合には月の題に有明。花に落花はよむへからす。

一ぬしあることはは詠歌の一躰にしるせり。なか〳〵よむへからす。

春

かすみかれたる　うつろもくもる　はなのやとかせ
あらしそかすむ　月にあまきろ　かすみにおつる
むなしき枝に　花のつゆそふ　はなのゆきちる
みたれてなひく　ゆきのした水　そらさへかすみ
そらさへにほふ　波にはなるゝ

夏

あやめそかほる　すゝしく曇る　あめのゆふくれ

秋

きのふはうすき　ぬるともおらん　ぬれてやひとり（鹿のイ）
かれなて鹿の　おはな波よる（色ときき波にイ）　つゆのそこなる
つきやをしまの　色なる波そ　きりたちのほる
わたれはにこる

冬

わたらぬ水も　こほりていつる　あらしにくもる
やよしくれ　ゆきのゆふくれ

戀

雲ゐるみれの　われてもすゑに　みをこからしの
そてさへ波の　ぬるとも袖の　我のみしりて
むすはぬ水に　たゝあらましの　わかみにけたぬ
きのふの雲の

雜

すゑのしら雲　月もたひれの　なみにあらすな

以上詠歌の一躰にあり。所詮當世なりとも。人の初てよみい

たしたらんことは。なか〳〵よむへからす。

一制詞事

近代おほく禁制のことはありといへとも。いまたその出所不分明。或は定家卿爲家卿の一向止へきのよし申されたるもあるへし。或はそのうたにとりて。わろしと申されたるもあるへし。或は又あまりによきことはにてある間。人毎にこれを用る故に。やめられたるもあるにや。いま所見に随て。少々これを註しいたす。用捨かつ人の所存にあるへし。將來の龜鏡には備みるへからす。みいたさゝるに随て。かきくはへらるへきなり。頓阿慶運なとも。此事はさらに分明に申むねなかりき。

一向不可用詞

けしき　波しろし　ふくあらしかな　みやまへのさと

以上。文應中務卿宮の百首に。民部卿入道爲家亡父不可詠のよしたしかに申候きと云々。

玉のおやなき

みもすそ河の歌合のことはに。俊成の判して云。末の句のをの字や。すこしいかさまによみて侍とよ。順德院御百首に定家卿申云。たまのお柳の子細先度披露し畢。

なか〳〵　五文字

承久二年八月十五夜定家卿判云。末句に不懸合とてこれをきらはれ。文永五年九月十三夜爲家卿判にも。中〳〵いひおほせてもみえ侍らすと難せられ。みなそのうたに付るやうなれとも。近比嫌うへは可被止之歟。

けしき

中務卿親王家三百首の歌合に。爲家卿判云。けしきといふことは。不可詠之由亡父申き。又同歌合に可止之由度々申之。

あめのゆふくれ　みゆるあけほの　ありけれは
おもひせは　心ちこそすれ　ものにそありける
みこそつらけれ　みをいかにせん　はなさかりかも
みれこし　たにこし　うきみ

以上可止之由。慶運(淨辨子)法眼抄にみえたり。

ゆかしき

一嘉應二年十月すみよしのうた合に。俊成卿判云。ゆかしきとおける。まことにうたのことはにあらさるへし。撰集にはとき〳〵あれとも。ゆかしきといふことはなり。誠のことはならぬことははいはさるなるへし。治承二年右大臣家歌合に同判に。ゆかしきといふことは。兒女の嗜せることはにて不庶幾。

かなしき　うれしさ

六百番歌合に俊成卿判云。あまりにや侍らん。又云。かな

しきといふことは。あまりなるものゝ。又うるはしくや。うれしかりけり。かなしかりけりといふ文字を。未練のうたよみはつねにこのみよむなり。けにうれしき事ならては。常によむましき事に祉と申されし。以上四條局阿佛房抄にみゆ。此ことはゝうるはしくかなしき事にはくるしかるましきにや。うれしき同前。

つゝく

廣田社歌合承安二年十二月八日。俊成卿判云。つゝく汐路といへる。きゝよくもあらぬにや。經房卿家歌合建久六年正月。同卿判云。つゝくの詞も。いかにそやときこゆ。六百番同判云。つゝきのことは猶庶幾せすや侍らん。千五百番歌合の判云。こすゑにつゝくといへる。此つゝくなといへることははこひねかふへからす。おほく侍る事にて。さき〳〵も侍を。此歌にとりては。ことさらにつゝくと祉申へかりけれ。此判のこときは。秀逸のときはこれをゆるすへきか。

雪のあけほの

經房卿歌合。俊成卿判云。此ゆきのあけほのといふ事を。いまのよの人常にこのむ。俊恵法師かよみいたせる詞なり。老僧其時もゆるさす申侍き。近く爲定卿文保百首に。おかのやかたのゆきのあけほのといふ歌あり。ことなる秀逸のときはゆるすへき歟。

春のゆふくれ　あきのあけほの

六百番の判に云。はるの曙こそゑんなる事にいひ侍るを。秋のあけほの。はるの夕暮。あたらしくや。

すさむ

千五百番の判云。すさむのことはや。あたらしきやうにきこゆらん。又同定家卿判云。すさむといふことは。ふるく聞ならはすや侍らん。建保二年八月定家卿判に。すさむといふうたを難せすしてかたせられたり。うちたにすさめあさのさころもといふ歌をは。定家卿ほめられたり。

まに

六百番歌合の判云。まにのことは庶幾せられさるなり。

うき人

建仁二年九月水無瀨殿歌合に俊成卿判云。うき人のといへるや。近比も人よみては侍しかと。いかにそやよはきやうにやときこえ侍る。但うき人とよめる歌。難せられさるもおほし。

なさけ

六百番歌合判云。なさけありといひて侍る事は。詩なとには優の詞なれと。うたにはさまて侍らぬにや。又いふ。なさけのことは。よせなくてはこひねかふへからさるにや。

又文永二年八月仙洞御歌合に。なさけの詞ありといへとも。爲家卿難せられす。

うすきり

六百番歌合判云。うすきり。尤よろしからす。又建仁の新宮のうたあはせに。うすきり。頗みゝにたてとも。うたのさまよしとてかたせられたり。

色はへて

六百番歌合判云。いろはへてのことは不可庶幾。

ひちて

古來風躰に。ひちてといふことは。いまの世にはふりてや侍らん。つも。かも。へらなりなとは。さる事にて。かやうなることはのなを侍るなり。僻案抄いまのよにはよむへからさるよしをのせらる。

みらん

これもふるきことは。しかるへからさるよし。古來風躰にみえたり。但頼政かよみたるをはほめられたり。又僻案抄にはなとかこの比もよまさらんとみえたり。

月花をゝのかとよむ事

すみよしのうたあはせの判云。月花をゝのかとよむ事。いとおしくやと難せられたり。

なにかほ

六百番判云。いろかほといへる。尤不庶幾。又云。うちとけたることはなり。又文永仙洞歌合に。爲家卿ありかほといふうた難せられす。

かはす

順徳院御百首。定家卿ことはに。かはすのことは。愚意にをきてそんするむねあり。

あたらよ

千五百番判云。あたらよ。庶幾せさる所存なり。但御室歌合に。あたらよ難せられすしてかたせられたり。

きたへゆくなとのへの字

御裳濯河歌合に。いつくへといふへ文字は。人のよむことにて侍れとも。こひねかふへからす。

よもすから

新熊野歌合に俊成卿判云。よもすからのことは。頗不可庶幾。

おもはぬ　おもはぬまつをなといふことはなり。

貞應元年九月うたあはせに。定家卿判云。おもはぬ中なとにはあらて。かやうのことはをよみ侍る。いつよりよみ侍る事にか侍らん。

ちかふ

永萬二年重家朝臣家歌合に。このたひのうたに。おほくち

かふといふ事のみえ侍は。若このころいてきたる。おかしきことはにて侍やらん。

つきやあらぬ

定家卿云。かやうの名歌の五文字しかるへからす。

雁のおほひ羽

定家卿云。いとおそろし。まさしからすやあらん。

ふるやあられ

建保五年十一月歌合に。定家卿判云。ふるやあられ。やすらかならすやきゝて侍らん。これはや文字を嫌なり。

こなた

貞應元年七月關白家歌合に。定家卿判云。こなた。近年おほし。不甘心。

人こゝろ

貞永歌合。定家卿判云。人こゝろといふ五文字。いまはこのみよむましきよしさたあり。

うとき

うたあはせに定家卿判云。うとき。このころは此ことはいはまほしけになりて侍る。子規にはことかなはすや侍らん。

もみちしにけり

度々の判に。とめところにしかるへからさるのよしさたあり。

あをき

定家卿云。このころのうたは。あをき。しろきにて侍と難し申侍き。

おほかた

文永二年九月爲家卿判云。おほかたのかせの。荒涼にそ侍る。又云。おほかたは月をもめてしといふ五文字あれとも。おほろけならては。此五文字相應しかたしと爲家卿申さる。

つく〳〵と　さくらちる　なと名歌の五文字可斟酌。

草のはら

六百番には俊成卿無子細由被申歟。但近年はいさゝかさたあるか。

名もしろし

是も名歌の五文字なり。

此一卷。みちの數奇たにことなる人あり。老耄をかへりみす。かきてをくりしを。又きゝつたへて。見參ありたきと承しほとに。かきつけ侍りぬ。外見はゆるしたまふへし。

嘉慶二ノ比歟
正月廿四日　　後普光園攝政准三后御判歟
判アリ

辨内侍殿

一右今来風體抄以圖書寮本校合

愚問賢注

やまと歌の道。人昔しれるに似てしらす。誠にこそりて詠するに似て詠せす。もてあそふ者はしけしといへとも。いまた椎林の一枝をもよちす。まなふやからはおほしといへとも。かつて崑山の片玉をもひろはす。錦字角をかけ鳳毛目を青囊の趣向趣に跡なく。風雅の遺言もとむるに所なし。爰に頓公すてに七十有餘の運命をたもちて。亡ふ二十一代の奥旨をわきまへたり。久しく柿本の古風をしたひて。深く山邊の蹤跡をたつぬ。靜に柴の戸の花の陰に徘徊して。春色の暮するをおしみ。ひとり松山の月の下に吟嘯して。秋光のたけなはなるを悲しむ。造次にも倦す。顚沛にも忘れす。道にふけろ輩。これに寄せすといふ事なく。學に志さす人。これに參せすといふ事なし。僕多年の知己なり。一道の先達なり。清莚に宴をひらく時は。金石の交をかたくし。蒼（滄イ）海にいかたを浮ふる日は。鷗鷺の盟をわすれす。延をかけ印をときし後は。曉の鷄いたつらに老の眠を相おとろかし。春の燕猶むかしの事をかたるに似たり。一日閑暇のあまり數ヶ篇目を注す。其々の道意を會せんかため。條々の批判をあふくものなり。是しかしなから達人の用にあらす。稽古の家をうたへんと也。

一頓云。歌は人物いまた定まらさるさきより。其旨存せりといへとも。二儀相わかれて六義起れり。情中にうこき。詞外にあらはる。されは花になく鶯。水にすむかはつの聲までも。歌謠にあらすといふ事なし。物にふれて情性を吟詠する外に。別の事有へからす。萬葉三代集以下。皆古人の情趣なり。只風雲草木に對して。眼前の風景をありのまゝに詠すれはこそいつから發明の趣あるへし。いたつらに古語をかり。舊事を學ふ事なかれ。萬葉を抒情とするにたらす。況や三代集以下。其實はて其花のみ殘れり。貞觀寶龜中より新數風情をめくらして。ありのまゝに詠なり。

難日。和歌の道同詩より起れり。されは詩は志のゆく所といへり。嗟歎するにたらされは詠歌し。詠歌するにたらされは。手の舞足の踏所を不知といへり。先こゝろさしのゆく所に子細あるへきか。只中に動く情をいひ出せるにはあらす。風情のゆく所有へしと見えたり。況や詠歌し嗟嘆するは。皆其上の文をなし興を催す故也。天地をうこかし鬼神を感せしむるも。文花をかさり。風情をもとむへしとおほえたり。しかあれは萬葉の古語も三代集の麗言も。ひろくまなひて。俗言俗意をさるへきなり。凡又歌に治世の音あり亂世の音あり。尤聖代の風情をうしなはすして吟賞すへきにや。三代

集は明時の正雅也。尤軌範とすへし。凡毛詩三百篇に本朝の童謠に似たり。其國の善惡を諷して政を正せり。日本紀に童謠落書の歌も。皆世の治亂備れるにや。しかるに三十一字の詠は素盞烏尊出雲八重垣の詞より起て普く人世に傳れり。その詞つゝまやかにして其旨廣し。六義の中になのつから事を諷せる躰ありといへとも。今の歌おほくは節物に感して詠し出せる也。徒に艶言なのみ翫して。政をたゝす事はなし。しかあれといにしへの聖の御門の人の賢愚をかゝみ。世の興廢をたゝすといへり。尤正雅の趣を得て。寔風の躰を嫌ふへき也。詞をも切嗟し心をも琢磨して。幽玄を先として。一唱三嘆にたへさるやうに詠すへきなや。しからは以前の義勢甚た甘心せすと。此兩篇いつれか是とすへきをや。

注 歌は思ふ事を見るもの聞ものにつけていひ出せる外は異なる事なし。春鶯囀花中。秋蟬吟樹上。こと／＼く歌なれは。善惡邪正を辨へからす。大道廢て仁義起る。和歌の躰品を定るも。猶道の陵夷也と申さんも。其理りなきにあらす。但大輅は椎輪の質にあらす。有識盛に起り。六義十躰定まりて後。猶淳朴の躰計を學ふへしといへる。却て過見なるへきにや。勅撰は萬葉より始り。歌合は寛平より盛にして。道の好惡を定め。歌の勝劣を辨ふ。しかのみならす。濱成式は光仁の詔勅に應し。孫姫式は寛平御制作なのこさる 共に病をのそき躰なを分てり。誰人か是にしたかはさらん。しかれは難の心尤正義に叶へるにや。

一 倭歌の風躰は時うつり事變て。代にしたかひ。俗にひかれてあらたまるへきか。詩も漢魏盛唐一變調なりといへり。歌も萬葉三代集以後度々撰集。あるひは時の褒貶により。或は人の好嫌によりて。一代吟賞の歌あるなや。今の歌いつれの躰を正路としてか模寫すへきそや。

注 漢朝は敵をほろほして國をとる。故に風をうつし俗をかふ。よて詩人才子文躰も代々にかはれり。我國は天神地神の御末。國の皇統として先皇の道を守ゆへに。歌の躰も大に變する事なきにや。但人その時の上手の好所にしたかふはへに。世々にいさゝかおもむくところかはれ共。そのむね萬葉古來風躰抄に見えたり。今時いつれの躰を正路として可模寫哉の御尋にいたりては。寛平延喜の比は此道の中興と見えたり。然るに古今集貫之心には十成せさるにや。新撰三百六十首を撰て。古今歌二百八十首を載て。今撰所玄之又玄也といへり。まして其後の集一代をさなから本樣と用ひかたし。いつれの集もよき歌を本とし。學ふへきか。紀氏新撰を信仰す。三十六人歌合。九品歌。前代十首歌。それよりくたりては。俊頼朝臣のする所秀歌。京極入道中納言鎌倉右相府に注進近來秀歌。并梶井宮へ被進書。被進後堀河院秀歌大躰な

し。常に可被翫鏡歟。心を古風にそめ。詞を先達にならはゝ。諸人不審と侍る。古今肝要書也。

一初心の人心を先として詞を後にすへきか。しかあれとも詞を忘れぬれは歌とはいはれす。歌とゝのほらされは異風異躰に似たり。又詞をかさり躰を先とすれは。胸中の風情いひつゝけられす。此段いかゝ工夫すへきをや。

注 歌は心を先とすへきか。詞を先とすへきか。古来先達さま／＼に申て侍めり。又俊成卿は歌をよむに思ふへき事六ありとて。一心をさきとすへき事と侍る。詞は後也とおほゆるほとに。一詞を先とすへき事と侍るは。又心は次かと覺ゆ。所詮[illegible]へからさる事也。[illegible]而已。意不[illegible]達意[illegible]之[illegible]也といへり。[illegible]又同しかるへし。心に風情を得る事もかたく。風情を得て詞をなす事もかたき也。所詮人[illegible]下[illegible]風情を[illegible]に[illegible]なる詞にてつゝくへきなり。しかあれは心詞ともにえかたし。得かたく事盡たるうへをしるて案すれは。さすかに又出來る事也。[illegible]案して一首もよまんた[illegible]とは申へき也。古逹と申[illegible]に[illegible]人[illegible]。山[illegible]何時[illegible]いへり。何事にも金言者歟。

一歌は心をむねとすといひて。初心の人題にむかひて沈思すといへとも。詞をえされは。そのつから案しよせたる風情もつゝけられす。たま／＼いひ出せるも。みな俗に近くて幽玄の[illegible]なし。又[illegible]より三代集ときを學して詞よりつきて詠吟すれは。只是奥の山。玉鉾の道なとつゝけて。大やうのものに見ゆ。此段いかやうに可學をや。未練の人こ先性情をよく吟[illegible]して[illegible]みみ古集なとを稽古する事は有ましきやらん。[illegible]躰を[illegible]ひ[illegible]詞を先とせんか爲には。最初より廣學をむねとすへきをや。

注 [illegible]木の奥に打向ひて案すへきにや。古歌の材木にて。初より歌をよまんとせんには。好歌出來へからす。但先逹の歌にむかへる心ち。又よめる姿詞見習はん爲には。古歌[illegible]見侍るへし。一向に見て用なしと申こともあり。見たるを[illegible]にて詠へしと申も。共にたかひ侍るへき歟。天台に聞證[illegible]共にきらへるかことし。

一日本[illegible]の[illegible]躰[illegible]萬葉集の姿なとはおほく長歌を先とせり。三十一字の詠はすくなし。古今は歌の中興也正風也。此躰をまなひて可詠か。但さま／＼の姿ありと見えたり。此集の中いつれのもやうをもちてか今の世の軌範とすへき。九品十躰なと様々に分たりといへとも。先常の地歌の意地を申侍るなり。

注 上古に多く長歌を詠す。これ人の物を感する事深く。その心切なるによりて。三十一字に事つくされす。されは長歌を詠

す。中古にも東三條殿の拾遺長歌。後頼朝臣千載長歌。限なきこゝろ誠に常の歌におさまりかたし。今世に長歌の稀なる事は。人の數寄をろかなる故なり。古今の歌の中にも。こと〱くは本様に難用旨先段に申畢。

常の地歌の意地の事。凡歌の地と文と。きはめてさためかたく侍る事也。常の人は一かと有歌をは文と心得。さして目に立所もなく。やすらか成をは地歌と心得て侍るか。すなほにうるはしく明らか成を好歌と申さは。是こそやかて文とも申され。一かと一ふしあらんを地歌と申さるへきにや。むかしは百首なとは地歌をましへてよむ事に申て侍る。今の世にはそれまての沙汰なし。案しとゝのへたるは文となり。取落したるは地歌と申へくや。

一定家卿かゝれたるものに。晴の歌といふ事を別に出されたり。此躰いかやうなる物そや。假令たけたかく心たくみに清けなるを申へきか。常の地歌にはかはるへきをや。一首の題なとは。百首なとの歌の姿にはよみかゆへきか。但數首の中にも。をのつから晴の歌の躰は有へけれとも。短册なとによまむと晴の懷帋と。もし差別あるへきをや。

注 彼晴の歌としるされたる。則秀歌大躰とて侍れは。別の姿にあらすよき歌也。百首一首よみやう各別なるへき事うけたまはりをかす。數おほくなりぬれは。をのつからさま〱の躰も相ましはるはかりにそ侍らん。短册と懷紙と別に案しかふへきにあらす。兼日は日數あれは。殊に深思して心詞を能とゝのふへし。當座は時分程なき故に。さほとみかゝぬ歌をもかくにてそ侍らん。躰各別成へきにあらす。されは白河殿七百首なとに。入道民部卿。冷泉大納言なとの歌は。姿詞同しやうに見え侍るにや。

一本歌を取事。さのみ不可好といへとも。古賢多用ひ來るをや。詩にも奪胎換骨の姿あり。あるひは心をかへて詞をとり。或は言葉をかへて心をとる。萬葉に佐野のわたりに家もあらなくにといふを。定家卿とりて。袖うちはらふ陰もなしとよめる。これ本歌をとる本なといへる。しかるへきにや。又上下に本歌の詞を置てとる常に見ゆ。又戀雜をは季になし。季をは戀雜にとるなとゝ申。いかやうたるへきをや。又萬葉歌なとさなから上の句をとりたるもあり。ふるき都に月ひとりすむと法性寺關白のよめるも。上は同しものなれと。秀逸に成ぬれはくるしみなきにや。又萬葉の詞よりよめる歌も有へし。眞野のかや原面影にしてといへる歌をとりて。爲家卿花の盛をおもかけにしてとよめり。是は詞より案せる歌と聞ゆ。されは詞よりとり付て。秀歌の出來る事も有へきにや。しかあるに心よりよますして詞よりよむは。下品の事なりと申入あり。此段又賢慮おはつかなし。所詮本歌を

とるやう。いかやうなるをよしとすへきや。作例少々しるし申さるへし。
注本歌をとる事。萬葉の歌を古今にも取て侍れとも。むかしは稀にみゆ。正治建仁の比より様になれり。其取様さま〳〵なり。常にとるやうは。本歌の詞をあらぬものにとりなして上下にをけり。醍醐太政大臣。
ちらぬ花のわすれかたみの嶺の雲そをたにのこせ春の山風
本歌。
あかてこそ思はん中ははなれなめそをたに後の忘かたみに
本歌の心をとりて。風情をかへたる歌。
さよふくるまゝにみきはや氷るらん遠さかり行しかの浦波
といへるを本歌にて家隆卿。
しかの浦や遠さかりゆく浪まより氷ていつる冬のよの月
本歌に贈答したる躰。
心あらん人にみせはや津國の難波わたりの春のけしきを
これをとりて爲家卿。
かすみゆく難波の春の曙に心あれなと身を思ふかな
本歌の心になりかへりて。しかも本歌をへつらはすして。あたらしきこゝろをよめる躰。定家卿。
大空は梅のにほひに霞つゝくもりもはてぬ春のよの月
本歌は。
照もせす曇りもはてぬ春のよの朧月夜にしく物そなき
佐野のわたりの雪の夕暮も此類なり。
只ことはひとつをとりたる歌。先の忘かたみの本歌にて俊成卿。
うき身をは我たにいとふいとへたゝそをたに同心と思はん
花の盛を面影にしても此類なり。この歌の詞より案したる歌にあらす。花のちるほとまてはみし。庭のおもかけを殘して身にそへんと思へる。めつらしくおもしろき風情を案して。此心の詠し難を面影にしてと云本歌に一續られたる也。
一ぬしある詞を嫌ふ事。古來沙汰あるにや。但今めつらしく始めて詠し出たらん詞は皆嫌ふへきか。是又爲家卿なときらふへき詞をいたせり。萬葉集三代集にもなき詞の珍らしく耳にたつ詞をは。ぬし有詞といふへきにや。此段又不審。
注ぬしあることはとはその人はしめて詠し出せりと見ゆる事にや。順徳院御製に。甲斐かねは山の姿も埋れて雪の中にかゝる白雲といふ歌を。京極黄門山の姿建保の比秀歌とて聞え候きと注せらる。これは家隆卿。櫻花咲ぬる時は葛城の山のすかたにかゝるしら雲の歌也。其定朝臣。凉しさに秋風ちかくなりにけり又立かへる衣手のもり。入道民部卿。秋風ちかく。近世の歌か云々。新勅撰。白露の玉江の芦のよひ〳〵に秋風ちかくゆくほたるかな。此歌の事なるへし。これらを以

ておもふに。うつるもくもる。花にくらせる。嵐そかすむ。露は袖に。やよしくれ。此るいみなぬしある詞か。

一歌に一向のそくへき詞。近代多く聞ゆ。假令俊成。定家。爲家等の諸方の歌を判するに。此詞は俗言成とも。又一向嫌ふへしともかゝれて。永く用ゆへからさる支證あらは勿論。只當座の判にて。此歌にては此詞聞にくしといはれたらんは。一首の中にわろく置たらん詞なとにてこそあらんすれ。又よくをきたらんには。能なる事もあるへし。凡詞のよしあしは作者の骨法にこそよるへきに。一旦聞よからさるなと申されたらん詞をは永格になしてきらはん事。いかやうにあるへきをや。ぬしある詞。又なかく捨へき詞。いか様に治定すへきをや。

注兩三代宗匠不可詠之由申されたる詞とも侍る歟。言葉のわろきにて嫌はれたるも侍れとも。多は優美なる詞にて。後學末生このみよむほとに。めつらしけなしとて止られたるにや。佛法戒にも通局を明し。法曹律にも輕重をたつ。尤本意を尋知て可斟酌にや。中務卿親王文應三百首に。入道民部卿詞を付られたるには。けしきしろし。なかめ吹。あらし哉。太山への里なとを。亡父不可詠之由申侍りしとかゝれたるにや。今もその外いまるゝ（被禁了）事おほく侍れとも。今の世の人盛に申さゝらん事。申出ても無其要候歟。

一本説をとる事。詩の心をもよめり。又漢家の本文勿論歟。源氏狹衣の詞又無子細をや。六百番判の詞に。俊成卿の源氏見さらん歌よみは口惜き事と申されき。しからは源氏の詞なと幽玄ならんをも。本歌にはとるへきをや。續古今に光俊朝臣中河の心をよめる歌入たり。今も本歌にはとるにや。

注本説本文。詩の心物語の心。さのみ不可詠之由申て侍れとも。常に見え侍にや。よもきふのもとの心。狹衣の草の原。めなれて侍り。源氏は歌より詞をとるなと申て侍るか。須磨に曉かけて月いつる比なれはといへるをとりて。春はたゝ霞計の山のはにあかつきかけて月いつるところ。宇治に御馬にめすほと。ひきかへす心ちして。あさましといへるを。面かけのひかふるかたにかへりみる都の山は月ほそくしてと侍る。艶におもしろく侍るにや。共に京極入道中納言の歌なり。

一本歌をとるには。堀河院百首の作者までをとる。其以後はとるへからさるよし申。此分子細なきをや。證歌には達者のよめる歌をは。近代成とも可取にや。

注本歌は後拾遺なとまての歌也。堀河院百首作者も。俊頼朝臣歌なと近來とる事ありとは。八雲御抄にも見え侍る。かの御百首作者も。人の口にある名歌なとの。それとおほゆるをとるへきにや。證歌には近世先達歌も引用ひ侍る歟。

一末学の人歌をはいかほとも案してよむへき哉。風情もなきを兎角案すれは。中〳〵あしく成事も有へし。先口なからくよみなすへきか。初心より歌を沈思すへきにや。歌かすをよむへきか。又すくなくとも案してよみならふへきをや。凡貫之は一首を廿日によむなといへるも。人の性によるへきなと八雲御抄にあり。此條何様なるへきそや。

注 歌よみに二のやう侍へし。いかにもして道の佳境にいたり。絶妙の歌をもよまんと思ひたらん人は。三昧に入ことくに。心を両眼のかすかなる所にとゝめて。人のふるさぬ所を案すへし。たやすく歌出来かたけれは不可不沈思。三十六人作者等も百首に至るはすくなし。花山僧正。斎宮女御。本院中納言　公忠等なとの集は纔かに侍るをや。殷富門院大輔なは。歌数多よみたりとて。千首大輔と申けり。今の代に誰か千首よまぬ人侍らん。歌のほと拍子はやく成て。能歌よみもいてこぬ事に侍るか。又題とりて事かゝぬほとたによみたらはと申人あるへし。そのほとの稽古はともかくもこそ侍らめとたしはかられ侍。但たやすく出来たる秀歌も侍へし。和泉式部かはるかに照せ山のはの月に。經文の外に功のいりたる所も侍らす。金を道のほとりにてもとめ得たるかことしと故人申侍歟。

一歌の風躰は人のこのみ〳〵なるにや。或はたけをこのむ人あり。或はこまやかに幽玄なるを執する人もあり。言葉のあいそうはもし天性なるへきか。賢慮はいかやうなる躰をかことにとりおもはれ候はん。

注 所詮愚意にそむる躰なく候。古人秀歌と申候は。いつれも心詞に銘し候。

一歌の風情をもとむるといへはとて。花には黄玉。葉には青玉なといふやうなる事は。かへりてあさけりをまねくかうへに。さほと珍しからさるやうなれとも。てにはなとにてちかへて。常の事のめつらしく成風情も有へきにや。さのみめつらか成事をこのみて。花には風を吹せ。月には雲をかけたかりなとするやうに。引ちかへてよめるも一躰なりといへとも。左様の意趣を先とせは。すなほなる方なくて。あらぬ道にや横入し侍るへき。只常のことのしから人の案の及はぬやうなる事を。一かとよむへきにや。

注 委詞の相叶候はゝ。風情道たる事も候ましく候。かたはれ月のかた〳〵は。落ても本に有けるものをといふ歌は。風情のいりほかとて出されて候歟。貫之歌に。ふたつなき物とおもひしをみなそこにやまのはならて出る月かけと侍る。心相似候歟。花に風をもふかせ。月に雲をかけたかり候はん事。態と好候はんは。誠に詮なく候。丹後か歌に。霞つゝ花ちる嶺の朝ほらけ後にや風のうさもしられんと候は。無術おもし

ろき面影にて候。又一かとは秀歌にもあらぬへく候へとも。わさと一かとゝ心さし候はん事。猶非本意候歟。

一歌は題の心を得てよむへしといへり。文字すくなき題をは少様あるやうによみ。結題をはまはしてよむといへり。たとへは野虫をやかて野へになく虫とよみ。山鹿をやまになく鹿なとよまんは。無下の事なるへきにや。又結題に池水半氷といふに。こほれるほとの氷らさるらんと。後京極摂政のよみ。臨期變約戀に。橋のはしかきかきつめてと。俊成卿いへる風情。是はまはしたるといふへきにや。又寄思雨人戀に。いく田の河に鳥も居はと。家隆かゝめる。これらは本説に付て。心をとりてよめるにや。結題のよみやういかやう成へきにか。作例少々記し出さるへし。

[注]結題作例事。

終日對菊　行宗卿

いつしかと朝戸を明て菊の花月のひかりのさすまてそみる

野花留客　俊頼朝臣

秋くれは宿にとまるを旅ねにて野へこそ常のすみかえけれ

殘菊留秋　顯季卿

冬に今は成ぬときけとたのまれす時そとみゆる白菊の花

花下送日　定家卿

木のもとに待し櫻をおしむ迄思へはとなき古郷のそら

霞隔殘花　肥後

立かくす霞そつらき山さくら風たに殘す花のかたみを

紫藤霞松　良暹法師

松風の音せさりせは藤なみを何にかゝれる花と見てまし

池水半氷　定家卿（後京極殿御時之時）

池の面は氷やはてんとちそふる夜比の數を又しかされは

一題の文字を顯はさてよむ事。落葉にいか計吹嵐の風そなといひ。郭公に明日のあやめのねを殘すらんなとよめるは。題の文字なきにや。これはさる一躰にてこそあれ。左右なく初心の人なと用へからさるにや。又假令寄絵なといふ題にて。絵の圖はなくとも。古今なとの絵につきたる詞にてもよむへきにや。寄車なとあらんに。右近馬場のひをりの事なとよみたらんは。車の字なくとも子細有へからさるか。加様の作例こまかに記さるへし。

[注]題をあらはさてよむ事。詩の破題のことし。作例。

殿詩歌合　花添山氣色　定家卿

玉すたれ同しみとりに婦人（ヲチヤメ）のそむるこころもにかほる春風

日吉歌合　紅葉添雨　定家卿

ふりまさる涙も雨もそほちつゝ袖の色なる秋の山かな

右大臣家六首[注]　故郷紅葉　定家卿

うつろひしむかしの花の都とて殘る錦の色そしくるゝ

正治左大臣家　山家夜霜　　定家卿
夢路まて人めはかれぬ草枕をきあかす霜にむすほゝれつゝ
熊野道中御會　河邊落葉　　定家卿
そめし秋をくれぬと誰か岩田河また浪こゆる山姫のそて

一月の百首花の百首なとに。あらぬ季のましりたらんをは。只月の題にては。假令秋の雪をもよみ。秋の霞をもよみなとすへきにや。月百首に月前雪月前霞なと有んに。冬の事をよみ。春の事をよまんはあしかるへきにや。作例おほつかなし。

注此百首入道民部卿我家八月十五夜續歌題候歟。月前霞。月前雪。其季にて候はゝ。猶春の題も冬の題も有ぬへく候に。この二題はかり相交候は。秋にて霞雪をよませんためにてや候らん。彼の一座を未見及候。一向推量を以申上候。

一傍題をはいかやうに嫌ふへきそや。これは五首三首の題につきたる事か。三十首五十首に成ぬれはきらはさる歟。作例同しく記さるへし。

注傍題と申事。ふるくは題の外に異物を詠加へたると申事候か。經盛卿我家の歌合に鹿題にて。嶺に鳴鹿の音ちかく聞ゆ〻紅葉吹おろす夜半の嵐にと侍るを。清輔判に。右紅葉吹おろすなと歌めきたり。抑傍題をはよまぬ事也と申人もあれと。天徳花山歌合にも侍めれは。ひか事にあらしとて。持に定め侍ると云々。又歌數ある中に。端にも奧にもある題の事をよみたるをも傍題と申侍るか。三十首五十首に成ぬれは。さのみ申さぬ事にや。春の歌に霞の題のあらんに。をたいにかすみをよみ。秋に露題の外に又露をよまん事。是をよまては歌難出來候歟。又三首五首は殊に可憚候。それも引見候はゝ。作例はありぬへく候へ共。不庶幾候事にて候へは。邂逅の例も無其詮候歟。但七夕七首なとに七夕河に銀河と讀て。又こと題に天河を讀ん事。くるしかるへからす候歟。

一結題には實の字虚字有へし。假令野徑月なとあらんに。徑の字なとは虚にてあれはすつへきにや。抑寄月と月の前との差別いかなるへきをや。浦月と海邊月なといはん差別おほつかなし。社頭と寄神なと又心有へき歟。

注結題には誠に虚實の字候へし。野外の外の字。江上の上の字等なり。野徑の徑の字はよむへきにや。峯殿御歌合野徑霞はみな徑の字の心をきたりと見えて候。寄月と月前。大躰は同し事也。しゐて差別を申さは。寄月には入後月雨夜月なとによせてよまんも。落題にてはあるへからす。月前をはさやうにはよみかたし。海邊と浦ともおなしやうに候へとも。浦の字には心をきてよめる人おほく侍る。社頭と神とおなし事なれとも。ふみとゝろかし鳴神。一夜めくりの神なとも。寄神戀なとにはよみ侍るへし。社頭にはよみかたく候。

一雜題をとりて季をよみいるゝ事。或說に當季をは嫌はす。他の季をはよむへからすといふ人あり。この事いかやうなるへきそや。

注 雜題に季をよむ事常の事にて候。その時の當季はかりをよむと申說候へとも。いつれの季をもよみて候。作例。

承元二年五月松尾歌合　社頭雜　定家

神かきや我身のかたはつれなくて秋にそあへぬ葛のうら風

建保五年五月歌合　松經年　定家

手向草露も幾代か契置し濱まつかえのいろもかはらす

一贈答の躰はいかなるを本とすへきそや。あふむかへしとかやいひて。心をとりなをす一躰あるにや。子細八雲御抄なとに見えたりといへとも。贈答躰少々記し申さるへし。

注 贈答歌本樣。八雲御抄にのせられたる。淸行。小町。敏行。業平。後冷泉院御製。大貳三位等歌。これに事盡て侍るか。あふむかへしの事も。春日行幸歌出されて侍は不可過之歟。

一艷書歌なとはいかほともこまやかにやさしかるへし。哀傷歌なとは。いかほとも物かなしきやうによむへきにや。大かた戀の歌のよみやうは。四季雜の歌なとにはかはりたるものにや。

注 艷書歌事無才覺候。堀河院御時艷書合歌なとは。常の戀の歌にかはる所なく見え候。哀傷歌はいかほとも物かなしからんとくはたて候はすとも。よき歌はさこそ候はんすらめと覺候。戀の歌四季雜なとにかはりて。別の意地有へしともうけ給はらす候。後鳥羽院御時三躰歌とて。春夏はふとくおほきに。秋冬はほそくからび。戀雜旅は艷にやさしくつかうまつれと仰せられけるとかや。是も一時一會の御沙汰也。いつれの躰を定られたるにあらす。

一法華經の品なとの歌よみやうは。たゝこゝろをとるへき歟。又詞にてよめるも作例あるにや。

注 心をとりてたゝとによまんも。詞にかゝりてそへよまんも。共にくるしからす。六義いつれをすつへきにも候はす。法華經には七喩と申て七の譬候。其外も品々にたとへ多く候。そのたとへをおほくはよみて候。法門にとりてはそへ歌なすらへ歌なとにて候へとも。經のまゝにて候へは。たゝこと歌とも申ぬへく候。代々集釋部に見え候作例を。勘申にをよはすといへとも。

序品　廣度諸衆生其數無有量　俊成卿

わたすへき數もかきらぬ橋柱いかに立たるちかひなるらん

隨喜功德品　最後第五十聞一偈隨喜

谷河のなかれの末をくむ人も菊はいかゝはしるし有ける

これは詞にかゝりて侍るにや。

安樂行品　深入禪定見十方佛

しつかなる菴をしめて入ぬれは一方ならぬ光をそみる

譬諭品　其中衆生悉是吾子

みなしこと何思ひけん世中にかゝる御法の有けるものを

是は心をとりてよまれたるにや。

一歌合の歌は題の心たゝしく。作例つよく。病をのそきてよむへきにや。其外もし口傳の有へきにや。

注さしてうけ給をく旨なく候。題の心正しく。躰うるはしく長有て清けなる。歌の勝事にて候やらんと見え候。後鳥羽院御抄に。歌合の歌をいたく思ふまゝにはよますとぞ。釋阿寂蓮なとは申侍し。別のやうにてはなし。題の心をよく思はへて病なく。又源氏等物語の歌の心をはとらす。詞をとるはくるしからすとあそはされて候。凡歌合の故實は八雲御抄に委細に見え候歟。

一歌の病をさる事は。歌合にはいつれの病を近來はさるにや。四病八病をさのみ去へきにはあらす。當時きらふ病の分しるし申さるへし。當座の歌も近日いつれのやまひをさるそや。くはしく申さるへし。

注近來はさのみ病沙汰なく候。同心病斗を去候。同事二候也。(喜撰式爲第一病。)我宿は道もなきまであれにけりつれなき人を待とせしまに。無字二候。此類候歟。又第三句終字。第四句終字同しく候。新撰髄腦に嫌ひて候。清輔朝臣。しほかまの浦吹風にさり晴て八十島かけてのての字。此類候か。これは聞にくき文字にて候。俊成判には。平頭病も(上下句初字同。)なからんよりはよろしからぬよしかゝれて候。此分は歌合のさらぬ歌も同事候歟。

一歌の字三十一字にあまる事。作例おほしといへとも。殊更よしなき時はあますへからさるか。忠仁公の花をしみれは物思ひもなしなといへるは。聞よくおもしろけれは左右に及はす。よしなき時たけをたかく見せんかため。好みて文字をあます人あり。いかやうなるへき事そや。

注用なくて字を餘す事宜しからす候。中飽病とたてゝ候。但信明朝臣。在明の月の月影に紅葉ふきおろす山おろしの風。(三十四字。)家隆卿。かきりあれは明なんとする鐘のをとに猶なかき夜の月そのこれる(三十三字。)なとは。一字も用なきにあらす。殊勝に候。敦忠中納言。けふそへに暮さらめやはと思へともたへぬは人のこゝろ也けり。是はくれさらめやとにても心は聞え候らん。俊成卿。去年もさて暮にきと思へは春立といふよりやかて物そかなしきと候。是も暮ぬとおもへはと申ぬへきやうに候へとも。氣味ふかく候か。不到住境者難是非候哉。

一名所の景物は。雪月なといふものは。いつくにも有へけれは。作例なくとも。よまん事くるしみあるへからさるをや。

されと月は更科なとよみ。雪は伏見深草なとをよめるは。たよりありて聞よきにや。花郭公なとは作例なき名所にはよむましきやらん。その所にのそみては子細なしといへとも。左右なくよむましき物。いつくにてもわたりてよむへき物おほつかなし。雲霞なといへるは。所定むへからすといへとも。猶證歌のより所あるをよむへきか。又いつくをよみたらんも。子細あるへからさるか。こまかにしるし申さるへし。

注月雪雲霞なとはいつくにもあるものなれとも。よみ付たる所を詠すへきよし先達申さるゝ歟。およそかく心得ぬるうへに。たよりあるやうにとりなし候ぬれは。くるしからす候歟。里に擣衣とよみ。河に螢なとをよみ候事。作例をもとむるにをよはす候歟。草木なとの名をさしたるは。はしめてはよみかたく候。但衣笠中納言。白露の手枕の野のをみなへしたれとかはせるけさの名殘そといふ歌は。證歌を尋ぬるにをよはす。殊勝なるよし。時の歌仙の沙汰し候けるとうけ給はりをき候。

一曉の題をとりて在明寝覺なと詠し。首夏といふ題に。新樹更衣なとをよみたらんは。その難有ましきにや。

注無子細候歟。

一其社壇の披講歌に他社を詠する事有ましきをや。

注その社法樂に他社を詠したる歌。判者のとかめたる事見をよふこゝちし候。たとひ先蹤はありとも不可庶幾事候歟。

抑隱遁の始修學の時。枳里紀王の十夢の中に。眞珠を麨にかふといへる夢は。釋迦遺法弟子佛教をさしをきて。俗典を學する事をしめすといふ事を見及侍りしより。ふかく慚愧の心を生して。和歌の廣學をとゝむ。よて此道奥宗にあふといへとも。古集訓說をうけす。只すきの心のやまさるをもて。江湖斗藪之日。嘯囂中之風光。山林閑居之時。翫塵外之景色。不覺而泉石入膏肓。積來而烟霞爲痼疾。雖似得江山之助。曾以無螢雪之勤候。仍條々御問端一々迷是非。然而維摩無言說に同しからんと。依有其恐。偏以推量之儀注付僻案之趣候。是併管を以て天津空をうかゝひ。蠡をもてわたつ海をはからんかことし。一度上覽の後。被入火中候樣。可得御意候哉。

頓阿上。

貞治第二之曆。沽洗强半之春。爲消永日之爛睡。不顧後時之傍觀。錄一通遺頓公。京極黃門禪門探得顯昭古今自釋。密勘加斯道之奥旨。號曰顯注密勘。今擧短慮之愚問。忽擊數扃之群蒙。非啻達　天聽。剩又征夷大將軍殊被賞翫之。下俚之問。博聞之答。以狗續貂。故銘愚問賢註而巳。

五湖釣翁判

彼一卷加一見候。誠珍重候。寫置度存候。不可苦候哉、爲使可
被申入候。恐々謹言。
三月十日　　義—（私云普廣院殿義教公也）
三位殿
此一冊以正本令書寫校合畢。可爲證本歟。　文安第二暮秋
上旬、鴈來雲晴。虫吟露底之期也。
和歌所老拙法印在判

（右愚問賢注舊本闕今以一本騰寫以秘閣古寫本及圖書寮本
校合）

續群書類從卷第四百六十

和歌部九十五

清輔袋草紙

袋草紙卷一

一和歌會事(公私同之。)
先讀歌詠參其所。(在御前時、　先是置講師圓座。當御前中央置之。(抄
次堪技講師召文臺、
私所置亭主前。)
次召人人歌。各讀次置歌於文臺。(自下臈置之。)
其儀、文臺下近臨之時。膝行置之。以歌下向御所。或說向上
之。
長元六年白川子日〔illegible〕
次召仰講師。
野行幸時〔illegible〕
五位中召堪能者。　私所用位階下臈。但儀式之時多用四位。
花宴〔illegible〕
次歌人應召近參候。
野行幸時土御門右大臣〔illegible〕
次讀師進寄文臺下。取重置之。(若位階次第不審、召藏人令直
保安二年〔illegible〕
之。)一二座人等散勤仕之。(異本、後一條院御時、宇治殿爲
關白勤仕讀師。御幸一座二座御之故也。小野宮右府記見
之。)
其儀、取一通開之、置文臺。(前題時開前歌許。)向下於御前。
(私所向亭主置之。無亭主時、向爲席上之珍人。同等會進之
時。召向講師。)
以下臈爲先。於僧侶并女房歌、不論貴賤、終講之。或人云。
侍以下歌不置文臺。於下講之云々。但近代不然歟。
次講師讀上之。
其儀。延右足、頗及膝讀之。(專不居圓座、乘膝片膝許、)其
音不讀。一句々々讀切之。(但至位署者讀之。)讀畢任余
人不詠之。序讀歌同和歌。有前題之時、同題一巡講了講次
歌。雖及十番之、作時更又讀名字。於位署者不可讀歟。
次可然人々同音詠之。
但初音不助音、次音可加詠歟。又爲後進人不可進詠之。有
序之時。堪能人々詠吟秀句。其後詠歌也。
次詠三反之。又置次歌。(作法同前。於題者不可讀。每題初度
許詠之。)
次臣下歌講了。自簾中被出御製。
其儀。取擲臣下歌。更居位文臺。(非強儀式之時。用本文
臺。)讀師又改之。(四位歎之。)更讀題目講之。度數可倍臣
下歌。於御製者以文下向吾方云々。(嘉保度叶之。講師通俊
朝臣也。)
御製出時。講師可急退。凡歌畢可急起也。又女房歌。諸人歌
講畢時出之。有兩題之時。一題時出之。
嘉保三年三月、內裏御會初度御製。文臺用御硯筥蓋。野行幸
時用楊筥云々。又御製文臺下有置不信之由、通俊卿所申也
云々。
長元六年三月十六日。於白川院子日時。宇治殿(見江記)文臺。用螺鈿
蒔繪硯蓋之由。(見後記。)
一題目讀樣

假令春夜同詠翫夜思　製和歌一首。如假名讀之云々。
御製詠給ヘルト可讀。
一說。云事ナト可讀付之云々。但可依題歟。假令春心在花。
是等類尤可讀付。凡題目可訓讀也。雖然又如三月盡九月盡
不可然。如此事臨時可有用捨歟。又和字別讀之。漢字彼讀之。

一位署讀様
於公家御莚。（女院同之歟。）
六位官姓名。　五位官名。
四位官名朝臣。　三位以上姓朝臣。（但四位宰相准參議。）
親王。（無官可稱位歟。三品親王若一品親王也。）
於親王大臣家。
六位同前。　五位官名朝臣。
四位官姓朝臣。　三位以上官許。　[illegible]。但三位於
其所[illegible]者也。

一題目書様
其日[illegible]同
詠[illegible]應製和歌　公家御莚　是臨幸他所之儀也。
或說。同詠兩字不書。只書詠一首事。如此事唯任意。
保安五年花見御幸。殿下詠之也。
太政入道同詠兩字不書。

其後詩。其所[illegible]。
應令和歌一首（女院。皇后宮。東宮同之。）
是本所之儀也。或有同詠兩字不書。又其日某所。[illegible]或不
書之。
嘉保三年[illegible]。江帥書様。
春日侍　中殿同詠[illegible]　[illegible]詠一首并序。是源右府
天喜年中會詩[1]書様云々。
人々或法[illegible]云々。
但同字序者之外不書之由。見江[illegible]。
詠二首[illegible]和歌　（[illegible]王公[illegible]。）
題、、、　[illegible]
[illegible]、、、
題、、、
[illegible]、、、
是[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
不[illegible]
又[illegible]
[illegible]

字不書。御製[illegible]位署不書[illegible]云々。

一位署書様

於公家。[illegible]同之。

[illegible]

[illegible]

江帥問訣注云。(江進士有直注師語云。堀川院御時和歌。京[illegible]

[illegible]

署云々。)

[illegible]「[illegible]」)

[illegible]云々。

於諸家。

一官姓名

爲諸官司人。於當官若上﨟之時官家。不可書官名。唯亮若

大進可書之。凡諸司長官可准之。[illegible]云。於同姓人家不書

姓云々。但故人多以書之。如此丶藤氏於一所不書之也。

一和歌書様

三行三字書之。

但近代不必然。故老書器黒。顯然可書之。不可執手跡云々。

一探題和歌

探題各別題各分取詠也。若以礼子賦取之時。以採得旬對押

紙書和歌。殊不書題目云々。又披講以後追詠歌不書題目。

只題如前書云々。

天喜四年[illegible]櫻花宴。[illegible]

今日有[illegible]。其儀[illegible]三間以南敷[illegible]圓座。爲諸卿座。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible])

[illegible]

[illegible]

以頭辨召公卿。々々參入[illegible]。次召[illegible]之者。某々等參入

[illegible]子云々。藏人依召入自年中行事障子北。到[illegible]子。取

御[illegible]具。則自公卿座前持來。

大御遊。次殆自下﨟獻和歌。殿上人皆自年中行事障子北參

入。(今度代始會云々。)

東帯人皆置笏於左。予獨置右。當座下ナ置之故也。或曰。如

插而置之也。可置左歟云々。可尋案。

追考。近代人持笏參御前。無行置歌之由申。此儀ニテハ座

ノ上下不可有之歟。

康保三年花宴記云。[illegible]。今日有花宴事云々。仍上達部令侍

此座。此間行事具見陣記。其行事所。上達部御前。以陣高盃先
奉居菓子干物。爰參議道進着納言座。殿上四位着參議座。（左
中弁文範。右兵衛督忠平。）其前立小壺盤。居菓子干物。五位
少將着陣座。其中前立机。外記史廝、辨備於接陣。御酒二三度
之後。居魚物御飯。御酒數度之後。先誦晉句。次有呂律之伎
笛。將監尾張（安居。）還出於軒廊中間。奉仕呂律之舞。不幾還
入。次誦右和歌云々。右花心。此度獻盃。右少辨平朝臣行以右
和歌爲。　次參議伊尹執筆。始新歌隨巡行。各有其歌云々。于
時少內記大江昌言候陣座。聊記小序。其間召右少史坂合部以
方。令取進陣間以下見參。以方見參進左大弁額忠。見畢返給
史。又進左中弁文範。見畢奉仕。令喚權大納言師尹卿。即
自官家可給祿之由奉　宣旨。返給見參於史。其祿守一首選出
之間。參議朝成朝臣單衣給將監圖人等。次右兵大納言亦給
安居代官不給之云々。
長元六年白河院子日記云。（宇治殿義忠記之。）
當日雞鳴以前。殿下移御。依可有子日之興宴也。設宴遊之座。
池水西岸溝淺。東頭東南側立五間班幔之幄。爲上達部座。其
縫之上敷圓座。幄外東西當中納言後。設殿上人召人等座。楽
端壘。未尅主客起座。徘徊中庭。召堪能之輩三讀、有賞物之
興。　次昇座。和歌召人起中守埼則長義忠二人也。而則長早
有故障不候此座。義忠一人候東座末。次故佐範永、平行親等
獻義子、中原［illegible］、在承平、西貫、以子日事行今日歟。中
宮權大夫召義忠。
唯起座候。其後則侯御前奉仕歌序之由。［illegible］退未座。　次有
管絃。次有盃酒。先是淡路守實成。藏人所司當濱［illegible］取檜
破子、各居水邊。々々之東西廣庇御前立灯臺二脚。爲講師之
處、置螺鈿蒔繪御硯筥臺。爲置歌之臺。人々獻歌、其後召義忠
令講之。殿下召義忠。賜綠衣御衣。大納言人々必有纏頭物。
（龍蹄也云々。）
予案之。承平子日時。（眞信公歟。）、貫之獻序。此例歟。寬貫説
云。寬仁二年十一月廿二日。行幸上東門院之時作文也。參議
廣業獻題。殿上料令書可被下歟。又問其體各書之。上達部博
士獻序之時、更不令書。依獻序也。又上達部博士獻序之時。亦
不令書題。召題下博士。臨事有興。
康保二年。朱雀院不立別文臺。
文臺置御前文臺。
一御賀歌作法
書和歌不獻。唯一座之人取盃。ロッカノ［illegible］之。次人抽。次人受
盃。又詠歌。次人差。次第如此展轉云々。凡昔歌宴如此歟。
萬葉集云。天平十八年正月。［illegible］太上天皇御在所［illegible］。左大
臣橘［illegible］詔歌一首。（各［illegible］。）
有件王卿等應詔作歌。依次奏之時、不記其歌、漏失云々。是又

此儀也。
又陣座饗宴儀同之。
故物ニカハラケトリテヨミ侍ケルトイフ。大略此儀也。
勸盃先讀始也。
實信僧都後拾遺云。
範親カ許ニシハ、元輔カ許ニ會シテ又ノ日。元輔カ月輪トイフ所ニ同人トマカリタリシニ。カハラケ範親カトレト云侍シニ、能宣ハエツカウマツレト云侍シニ、ナホナホトモ範永カ申侍シカハ、元輔カヨミ侍。

さきの日に桂の宿をみしゆゑは今日月の輪にくへきなりけり

能宣モイカヽハヨマムト思給ヘツルニ。ケシキハアラスヤト小声ノマツリタリトコソ申シカ。其會所東ニテ賀茂ナリト申ケル。

又能宣集云。春日侍人アマタシルシラスマカテ來リテ酒飲侍ニ。紅梅ヲ瓶トテ。丹後掾曾禰好忠カハラケトリテサシ侍ルトテ。

我せこか袖白妙の花の色をこれなん梅とけふそしりぬる

返

淺きこそ色にはすこしは梅かゝはなる匂ひしそゝる

紅梅ヲ白ク讀ル。イハレストト人アマタ申ケルニヨリテナルヘシ。是等ヲ盃取トハ云ナリ。

同集云。小一條太政大臣(貞信公。)白川殿ヲ公忠親王ノ所分ニ依テ九條大臣ノシリ玉ヘル。上達部殿上人ナトアツマリテ。公忠親王ノ家ナリトテ。古事ヲ戀ル歌ツカフマツレト仰侍シニモ。カハラケトリテ。

白河の水のこゝろもいにしへの秋をはけふや思出つらむ

人々感嘆云々。是又盃侍、大臣公御盃□事如何。但爲饗應歟。又唯吾盃ヲ持ナモ可云ニヤ。

此歌後拾遺問答。ソノカミノ秋何事ノ有ケルソ。無其事テハ不叶。　貫之、今ハ侍レハヤ云々。

一盃後讀歌法

□□御作文時計ヲ置テ。讀人歌讀之云。置之盃也。不居講席之座云々。或說者隨時古今有如此事。寬平法皇宮瀧遊覽時。源昇朝臣、在原友于朝臣(行平中納言息。)讀白紙云々。記云、即　菅朝臣　紫其題云。

やた烏頭におきてしのゝかみ句の末におき題の歌よめ

侍臣等頃ヲ聞テヨリ口食挿管絃ヲ忘、昇友于・匏管池吟。還不能成、大歎曰。臣等歌與菲不及於如道等耳、然而臣等頗知和歌道善之惡之。今夜需窮力屈。遂懸其恥。如道等不知其道。自以爲辭。悲哉不知道者之風。實由人所宜在大理也。以道言之。其有無各可其當者也云々。有興云々。

故人語云。先年殿上人々詠和歌之間。泰憲民部卿爲歌人。有興、之由人々被申。而辭急不由テ欲退出。人々留之。民部云。進退

和歌可退出云々。人々承諾。仍和歌ヲ書テ封之退出云々。披講之期聞之矣。件署并題計ヲ書テ。奥ニ書テ云。於和歌者可追進云々。人々感歎之。且者不安之由云々。凡得名人中々事云出ンヨリハ道遂一事也。有歌合之比。長元歟。小式部内侍入歌人之時。母泉式部爲保昌妻。在丹後國。定頼卿小式部内侍局前立寄テ戯テ云。イカニ丹後ヘ人ハ被遣候哉。未被参歟ト云テ起時。式部取直衣袖云。

大江山いくのゝ道の遠けれはまたふみもみす天のはし立

定頼卿ヒキヤリ逃ト云々。

六月中入秋節之日。關白殿下遣使頼朝臣許歌云。

みな月のてる日の影はさしなから野邊もや秋の錦成らん

凡秀歌ニハ劣返事ハ不云。是故實云々。如此之難不爲耻辱歟。

小野宮右府記。立后。(寛仁二年十月十六日戊子。御堂第三女。)

大閤執盃。進居上頭。攝政遷座。向右大臣。三囘巡之後。大閤戯云。右大臣可勸盃我子。余執盃勸攝政。々々度左府。々々獻大閤。々々度右府。次第流巡。大閤呼下官云。欲讀和歌。必可和者。答。何不奉和乎。又云。誇タル歌ニナムアル。

此世をは我よとそ思ふ望月のかけたることもなしと思へは

余申曰。御歌優美也。無方酬答。滿座只誦此御歌。元稹菊詩。居易不和。米賞歟。終日吟詠。諸卿響應余言。數度吟詠。大閤和解。殊不責和。夜深月明。扶各退出。

今案。秀歌劣返事不云之由云々。

一和歌昔詐事

是前聞也。日本紀竟宴歌多事。先新院宗宴。故左京有詐被書。世以傾之。不知也。但如此事得人之所爲歟。

又兩題有詠一首事。或所海士橋立。紅葉。戀。三首題講。範永朝臣遅参シテ臨講之時。以三首題詠一首和歌。

戀わたる人にみせはや松の葉もした紅葉するあまの橋立

又有兩題之時。唯詠一首多先蹤。高倉一宮歌合後宴。以二首題上達部之中同詠之。而宇治殿下令詠一首。

有明の月たにあれやほとゝきすたゝ一聲のゆく方もみな

又故左京三月盡歡戀歌兩首被講之時。叢觀法印詠三月盡許。

春のくるゝ道にきむかへ郭公かたらふ聲にたちやとまると

凡如此事不可勝計。但是詠秀歌之時。昔有人望之人所爲也。件歌二首皆以秀逸也。又歌有詠昔事。今殿下使頼朝臣詠卯花歌云。

卯花のみなしらかとちみゆる哉賤か垣ねにとしよりに鬼

位署不書。テ獻之。人々奇恩之處。其名顯歌中云々。是獨歩之時事也。又直ニ實名ヲ讀事モ有。万葉集ニ憶良歌ニ云。

おくらは今はまけ南こなくらんそのこの母も我な待覽

一取和歌事

御製若ハ當座主君詠歌之時。其道之長若ハ為席上之珍人。懷之可退出云々。不堪情思之由也。

高倉一宮歌合之後宴和歌。宇治殿御歌云。

有明の月たにあれやほとゝきすたゝ一聲のなく方もみん

大二條殿内大臣之時。懷之退出云々。是顕其道之長。以入望歟。於事得人ノ所為也。況如御製哉。先年於新院有和歌。而有宜御製。故左京後日雖懷之。猶有恐容退出云々。

一和歌若連歌云出事

不得之處。故左京殿曰。女房自殿中和歌ヲ云出事。一度所聞也。其勞非詠非讀。言語道斷云々。

俊頼朝臣ハ極大事也トソ申ケル。但至連歌ハ更不可有詠儀歟。

一條院御時。源兼澄陪從侍ニ。大入道殿御前ニ候給テ御云。歌一首可仕。仍一句申出。ヨヒノマニ。暫停滯。被責次云。キミチシイノリヲキツレハ。又停滯。又被責仰之。次云。マタコフカクモ〔又停滯。又責。次云。イ〕オモホユルカナ。一句々々隨思得申出之。希有之由万人褒譽。入道殿下賜御單衣云々。是ハ何樣ニカ申出ケン。尤不審。

一連歌骨法

連歌ハ本末只任意詠之。雖然至鎖連歌。發句ハ專不可詠。末句又如然之時。任口早速ニ不可發。當座ノ主君若ハ女房等ヲ暫ク可相待也。有遣々時詠出之。尤宜歟。我等之時ハ非沙汰之限。近代和歌云云。連歌ノ不云切ハワロキ事也云々。案之。不可必然歟。万葉集云ク。サホ川ノ水ヲセキアケテウエシタナ。

又後撰云。白露ノヲクニアマタノ聲スレハ。

又伊勢物語云。カチ人ノワタレトヌレヌエニシアレハ。ヲクヤマニ船コクヲトノキコユルハ。是等皆吉連歌也。又延喜御集云。菊宴之時。中務宮ニハニヲリテ。カサシノ花ヲヽリテ奉リタマフニ。タヽニハトヲホセラレケレハ。

野邊ニユキテオリツルコトハトテ。末ハナクテ奉リ給ヘリケレハ。霜ノ中ニウツラヌ花ヲアハレトヤミルトナン云々。

又齋宮女御ノ集云。サツキヤミオホツカナサノイト、マサランド。如此之句不可云連歌。又故實云。唯臨時ナニトナク云出給事歟。但於今者只之可為證跡歟。若又集ノ儲事歟。廣可見之。拾遺集連歌云。中將ニ侍ケル時。右大辨源致方朝臣許ヘ八重紅梅ヲ折テツカハストテ。右大臣藤原實資。流俗ノ色ニハアラス梅ノ花。致方ツク。珍重スヘキモノトコソミレ。

又余且華林院歌合判詞云。大津ノ濱無下ニ俗流也。近俗云

心歟

うれしさは大津の濱に立浪のかすもしられぬ君か御代哉

詩云。　菊開似過仙　　源時綱

露蘭塵隔到眞境。　風篝（莖イ）叢暫流俗名。

流俗者人間ヲ謂云々。然者人間ノ色ニハ非ト連歌ニハシタルカ。或人云。連歌元意趣ヲ末ニ答也。

師大納言云。女房歌讀懸時ハ。不聞之由ヲ一兩度可不審。女房又云。如此云之間廻風情。猶不成又問。女房ハユカミナイハス。其間猶不成ハ別事ニ候ケリトテ可遁。是究意祕說也云々。

或說ニハ返歌ヲ髣髴ニ無其事云ナ。女房不聞之由ナ云ナ。又シカ〳〵ト云。猶不聞之由ナ云時。別事ニ候ケリトテ可遁云々。又同女房ノソヘ事云ニハ。不知事ナラハサシモサフラハシト可答。イカニモ無相違答云々。

先年或女房許ニ小貝卅一ニ歌ヲ一文字宛カキテ或人遣之。女房予ニ可讀解之由ヲ示。凡不及力。仍折萩枝。其葉ニ無其事字ナ卅一ヲ每葉書テ遣之。件所ニ又不得讀。經兩三日之間。萩葉カレテ字不見。爲遺恨之云々。一說也。

俊重君於或宮原讀女房。于時持藤花。女云。ソレカウラハト云々。俊重不知其故。默而止了。後日其由ヲ語顯昭。俊頼云。後撰ニ藤ノウラハノウラトケテト云歌不知歟如何。答云。知給俟。藤ヲ持タルヲ見テ。ソレカウラハト云ハ。非件歌之意哉。如此事不能教事云々。

一大嘗會歌次第

先從國々註進所々名於行事辨。下作者許。作者撰便宜所々(各可避禁忌。)諷詠之。進行事辨所。以風俗歌下樂所。(以之人々作樂。)以屛風歌下繪所。(以之書圖之。)若和歌有遲々之時。所々名ニ書調先進之。和歌ハ追進之。(件調作者計之。)又風俗歌并進常事也。書和歌之時。家々之說不同也。輔親無讀等假名。次風俗并屛風歌等書一紙。義忠假名。別紙。　資業之流眞名。別紙。家經之流歌假名。詞眞名。一紙。(又以神樂歌爲初。自餘人以稻春歌爲初。)匡房眞名。別紙。(但天仁度假名也。)以下人々皆眞名。別紙。但故左京詞眞名。歌假名。一紙也。長和以上人書樣不憚也。進覽之時可有禮紙也。

宮内少輔伊行云。件歌先被下清書所。而又書三通。進辨許。一通(一紙。)書稻春歌神樂兩首(一枚續書。)風俗歌八首。一通(二枚書。)屛風歌十八首并稻春歌ナハ下ミミ。風俗ハ下樂所。屛風歌下繪所。又云。行成并伊房書體秘書有。靈有筆抄。書寫之間口傳也。　件書悠紀ノ歌ハ假名書之。　主基歌ハ眞名也。作者皆如此存。清書人又可然云々。但近代不必然歟。

大嘗會。　天武天皇御宇。白鳳二年癸酉十一月始之。但其不見。而自承和御宇出來。但歌少々顯。詞悠紀主基國名。其初丹

波播磨也。其後因幡。美濃。尾張。近江。但馬。近江。備前。美作。備前。三河。伊勢。備中。隨令卜用其國。但當其名常一兩ナ下之國。近來以後偏悠紀國近江。主基國丹波備中等々勤也。但冷泉院時主基國播磨也。

和歌作者。

光孝天皇御時大伴黒主也。（古今集以之號當今執其歌。不審。件歌黒主等長歌。而仁和時非作者歟。）

輔親。　能宣。　三條院。

輔親。　爲政。　後一條院。　儒者皆從此時。

輔親。　義忠。　後朱雀院。

資業。　家經。　後冷泉院。

實政。　經衡。　後三條院。

實政。　匡房。　白川院。

匡房。　行家。　堀川院。

匡房。　正家。　鳥羽院。

顯季卿出家後替之。

敦光。　行盛。　新院。

顯輔。　敦光。　近衛院。

永範。　茂明。　一院。

俊憲。　範兼。　二條院。

顯廣。　永範。　新院。

永範。　清輔。　高倉院。

範季。　季經。　當今。　崇德院。

俊光。　季經。　今上。

大嘗會和歌宣下狀

左京大夫藤原朝臣顯輔

右中辨源朝臣雅綱傳宣。權大納言藤原朝臣宗輔宣。奉勅。宜令件人勤仕大嘗會悠紀所和歌者。

康治元年八月十九日　修理東大寺別當兼左大史算博士

攝津守小槻宿禰（政重也。）

宣旨請文書樣　大博士師光草。

某位某官姓朝臣名解　申請　宣旨事

一紙（被載可勤仕大嘗會悠紀和歌狀。）

右去月日宣旨。同月日到來偁。某辨傳宣。某人宣。奉勅。宜令件人勤仕大嘗會悠紀所和歌者。謹所請如件。仍注事狀。謹解。

是ハ[illegible]也

年號月日　　官位

謹請

大嘗會某方和歌事

右任　宣下旨可勤仕之狀。所請如件。

年月日　（是ハ顯上人請文也。大橋政宣下之時者御旨ト可書云々。）

行事所獻和歌之消息書樣

獻上
主基方和歌二通
右滿八旬之季算。致數度之忠勤。於今度者可預優恤也。以此旨可令奏聞給歟。敦光謹言。
十月八日　　式部大輔敦光
〔謹上右中辨殿イ〕

一和歌序故實
維順朝臣語曰。故師(匡房。)曰。和歌序ハ有書樣。學テ可書事也。其說ト云ハ無式法無樣。唯以所記書之。如此之知ヲ爲學也云々。况於假名序乎。只任意任口可述事歟。但雖然書テ序和歌題等ハ聊可分別書。序ハイタクタワレス。ウルハシク可書。於和歌序題ハ優豔ニ可㴱(深イ)書也。兼盛紫野子日序ハ愼テ所書也。又日記ハ其體異之。其句具メ寄來所可諷書也。且ハ故序等ヲ多可見之。不能委。序ナ書ニハ諸官ノヤマトヨミ尤可知之。

序代庭訓
序代者古賢猶以爲難云々。雖故何者偏依風俗用倭語其體弱。又風情漢事其體强。不弱不强。不少不多。首尾相兼。華實共備。故以爲難而已。又序題雖宜。和歌至于拙者。遺恨第一。詠吟如何。所謂珍美也。又序題當其選。辭退無詮之事也。儻非黃絹之douban。[illegible]

神祇官。カウツカサ
大臣。オホイマウチキミ
參議。マシヘハカル　又八座ナヘヤ　クラノツカサ
左右大辨。オホイオホトモヒ
侍從。オモトヒト
監物。オロシモノ
皇后宮。キサイノミヤ
圖書寮。フムノツカサ
大學寮。フムヤノツカサ
玄蕃寮。テツシハラヒノツカサ
主計寮。カソフルツカサ
隼人司。ハヤトノツカサ
大藏省。オホクラノツカサ
大膳職。オホカシハテノツカサ
主殿寮。トノモリノツカサ
正親司。オホキムタチノツカサ
采女司。ウ子ヘノツカサ
東西市司。
齋院。イツキノインノツカサ
左右近衛府。チカキマモリノツカサ

佐。マツリコトノ人
大納言。オホイモノマウスツカサ
少納言。スクナクモノマウスツカサ
史。サウクハン
内舎人。ウチト子リ　ウト子リ
大皇太后宮職。オホキオホキサキノミヤノツカサ
中宮。ナカノミヤノツカサ
内藏寮。ウチノクラノツカサ
治部省。オサムルツカサ
諸陵寮。ミサヽキノツカサ
主稅寮。チカラノツカサ
刑部省。ウタヘサダムルツカサ
織部司。チリヘノツカサ
木工寮。コタクミノツカサ
典藥寮。クスリノツカサ
内膳司。ウチノカシハテノツカサ
彈正臺。タヽスツカサ
春宮坊。ミコノミヤノツカサ
修理職。ツクリヲサムルツカサ
左右衛門府。ユケヒノツカサ

太政大臣。オホイオホイマウチキミ　オホコトノオホヘツカサ
中納言。ナカノモノマウスツカサ
外記。トノシルスツカサ
中務。ナカノマツリコトノツカサ
内記。ウチノシルスツカサ
皇太后宮。オホキサキノミヤノツカサ
大舎人寮。オホト子リノツカサ
縫殿寮。マイトノヽツカサ
雅樂寮。ウタマイノツカサ
民部省。タミノツカサ
兵部省。ツハモノヽツカサ
囚獄司。ヒトヤノツカサ
宮内省。ミヤノウチノツカサ
大炊寮。オホイノツカサ
掃部寮。カモリノツカサ
造酒司。サケノツカサ
左右京職。ミサトノツカサ一[illegible]
齋宮寮。イツキノミヤノツカサ
勘解由使。トクルヨシカンカノルツカサ
左右兵衛府。ツハモノト子リノツカサ

右馬寮。兵庫寮。鎮守府。
大宰府

一撰集故實

時大臣父一人歌、雖非秀逸必可入之。其外ノ公達又人々隨宜可優事也。雖歌宜非指テ重代。又非人ナト無其聞者不可入之。於無双歌ハ無左右。又撰者之歌ハ有秀歌一首ハ次歌ハ一兩ハ可入之。是故實也。現在者ナハ撰定、故者ナハ隨宜歟。以前撰集入歌ヲハ好テ不可入之。此條後撰ノ劣于集之由頗難之故也。但至秀逸歌ハ無左右。同題歌并似歌ナ等可相並也。時節去隔ハ非沙汰限。秀歌ハ一所ニ不可並。所々ニ可相交云々。故大納言隆國可書云々。以前撰集ニ一事ハ必可遣也。故萬葉集。古今。後撰。拾遺マテ各別也。或人ノ云。古今ニハ題不知。讀人不知。後撰ニハ題不知。讀人モ。拾遺ニハ題讀人不知。如此賞云々。然而末代末不必分別。是輕々詩篇之失歟。讀人不知ト書事可有儀。一ハ其實不知作者歟。一ハ雖書名字。世以難知其人。下賤卑陋之輩。一ハ詞ニ有憚歟等也。又歌後著作者ハ撰人善惡ニ有憚歟。故人憚說ナ不聞歟也。仍古今ニハ萬葉以往歌ナ皆讀人不知。或ハ其後ニ著之。所謂奈良帝。人丸等也。如此事尤可斟酌事也。又連歌ヲ歌一首ニ取成テ入撰集常事也。

後撰云。

白露のおくにあまたの聲すれは花の色々ありとしらすや

又云々集云。

時共に山廻りする時雨哉ふるにかひなき身とはしらすや

是ハ清道遺歟。今一人ハ其損歟。但以末句爲言歟。

一萬撰集子細

萬葉集和歌四千三百十三首。此中長歌二百五十九首。但本々不同。未明定歟。

此集撰以前未定之撰。是付奈良之事存歟。橘諸兄歟。尻以聖武御宇大臣之時號平城帝。（見國史。）但至大同付山陵號之。如古今序ハ時歷十代、數過百年云々。然者和銅桓武御時。但今案、一後撰集ハ寶字三年以後年號不載。一次持天平勝寶以後官不見。所載之官唯内舍人。越中守。兵部少輔。少納言。右中弁等也。就中公卿之時歌不載之。

一古今集云。貞觀御時。萬葉集ハ何比ニ被撰タルソトト被問之時。文屋有季詠云。ナラノミヤコソフルコトソコレト云々。又野宮歌合時。源順稱云。ムカシナラノミヤコノフル歌ヨミシ時云々。而桓武ハ此京ニ遷都之帝也、於平安宮撰集ニハ。専不可稱奈良ノ都ノ古事ト。又桓武ハ延曆三年甲子十一月十一日戊申遷幸長岡宮之由見國史。其以前代始經一兩年ノ間。撰和歌事ヲ不爲先歟。就中後帝作歌之由無所見。方々有疑殆。予按之。此集聖武撰歟。其故後帝御時和歌始興之由在

古今序。隨能令作和歌云々。(是一。)同序。人丸同時ノ奈良之帝時撰萬葉集之由云々。而桓武時ハ人丸不可逢。計其年齡。殆及百六十歲。隨人丸死去之間歌載彼集。(是二。)又皇代記云。天平元年正月十四日奏請歌云々。(是三。)但如彼集天平勝寶二三八年歌等載之。若孝謙之時ニ太上皇後撰之歟。(如金葉并詞華集。)又寶字元三年歌在之。展轉之誤歟。如此者雖當聖武之撰。古今ノ序十代文難避者也。但文筆之習若過若減。皆存大數之儀。余數ヲ棄テ取十代歟。同序云。于茲フルキ事チモシリ。歌チモシレル人讒二三人云々。而所上ハ六人也。又雖稱千歌廿卷。實ハ千九十九首也。如此ハ付文花不必精定數歟。若十代字之誤歟。撰者或稱橘大臣。或稱家持。作大臣實字元年薨卒云々。彼集桓武之撰ナラハ相違。家持延曆四年薨去云々。共以前遷都造營之間。撰歌之條有疑。猶可謂聖武之撰。抑或人云。如世繼物語ハ萬葉集ハ高野御時諸兄大臣奉之撰云々。高野ハ孝謙也。然者叶愚義。孝謙時太上天皇所撰註歟。但引見彼書之後可左右。此集末代之人稱古萬葉集。源順集ニモ古萬葉集ニト云事アリ。是有新撰萬葉集者ハ菅家萬葉集等之故歟。新撰萬葉集ハ延喜御時抄出之云々。五卷也。萬葉集者ハ所在稀云々。而俊綱朝臣法成寺寶藏本ヲ申出書寫之。其後顯綱朝臣又書寫。自此以來多流布ス。至予今在諸家云々。山上憶良類聚歌林一本書也。　在同寶藏云々。

[illegible]

人丸勘文

一人丸當及大同朝事

天智天皇。(大津宮。)　十年。

天武天皇。　十五年。(爲太上天皇及大寶年中。

見萬葉集。)

又云。幸難波時赤人作歌。

但至赤人歌ハ若聖武時歟。不詳。

持統天皇。(藤原宮。)　十年。十一年讓位輕太子。號曰太上天皇。(或本如此。)

有人丸。(見萬葉集并讃。元年丁亥萬葉集人丸歌始於藤原御字。)

文武天皇。(藤原宮。諱輕。)十年。

萬葉云。[illegible]皇子獵於安騎野時人丸作歌。輕ハ此帝名也。持統代。

元明天皇。(諱阿閇。)　七年。

萬葉云。和銅三年二月從藤原宮遷寧樂宮。(平城宮也)

元正天皇。(諱氷高。)　九年。

有赤人。(見萬葉。)

聖武天皇。(諱豐櫻彥。)　(平城宮)二十五年。

有赤人家持等。家持神龜元年甲子。至天平寶字三年正月爲因幡守。於國有詠歌。(萬葉第二卷見之。)

皇代記云。天平元年己巳正月十四日、癸□□、同八年丙子。建立東大寺。同九年丁丑、每國造釋迦像、立國分尼寺。今年疫瘡。公卿以下百姓沒死不可勝計。同十七年乙酉、初五月菖蒲冠。昔出今與也。天平十六年甲申四月。幸於難波。八月、天皇急發病惱、幸奈良宮、勝寶元年己丑七月二日甲午讓位於女皇。孝謙天皇也。

袋草紙卷二

高野姬
孝謙天皇（諱阿閉。平城宮。）　在位十年。（勝寶八　寶字二。）

此帝御製在萬葉集。聖阿閉皇女。（三歟）

同集載勝寶及寶字元年歌。

月日。太上天皇。光明皇后。主上相共幸行由見之

又世間有萬葉集抄序物。（不知作者。）件序云。柿本朝臣人丸歌集云。天平勝寶五年在二月。於左大臣橘卿之東家。宴饗諸卿大夫等。予時主人大臣聞々々如此。件大臣橘諸兄公也。年號又孝謙時也。人丸至于此時哉。從天武至天平勝寶五年。八十二年也。以前年相加百歲計歟。（七）

淡路廢帝　平城宮
廢帝天皇。（諱大炊。）　六年。寶字八。（自二年戊戌。至八年甲辰。）但二年孝謙治天故除之。

高野姬重祚　平城宮
稱德天皇。　五年。（天平神護二。景雲四。又除景雲四歟。）

白壁王
光仁天皇。　十六年。（二歟）（寶龜十一。天應一。）

寶龜三年。濱成朝臣奉　詔撰和歌式。

山部　平安宮
桓武天皇。（諱山部。）　在位廿五年。延曆三十一月十一日戊申。遷都長岡京。同十三年甲戌十月廿一日辛酉。車駕遷于新京平安京。）

平城宮長岡平安宮御宇。生年卅四即位。遷位後十五年。延曆廿五年丙戌三月十七日崩。七十　葬山城柏原陵。延曆廿三年十月。幸和泉紀伊國等。（經日還御。）

平城天皇。（諱安殿。）　在位四年。大同四。

大同四年四月十一日禪位。天皇自春寢食不安。讓位皇太子。（讓嗟也。）十一月遷大嘗會。造平城宮。依太上皇命也。十二月遷平城水路。依此有事。讓太上皇之臣可配流之由宣下。此間出家云々。弘仁十四年癸卯閏月。（廿三日。）自平城先太上天皇諸司。天長元年甲辰七月七日崩。（五十一。）葬大和楊梅陵。

平城
帝見召文。

天武以後至大同百卅八年。人丸天武御時庭從由見萬葉集。然者以前年曆相加減。定及百五六十歲死。尤有疑。

赤人又起於元正。共長命之條。勞難信受。

如萬葉集。人丸始自天武至文武。如家集者甚。赤人始自元正至聖武。於以後者指證據不見歟。（是一。）

古今云。

古鄕となりにしならの都にも色はかはらす花はさきける　奈良帝御歌

又云。

萩の露玉にぬかんととれは消ぬよしみむ人は枝なから見よ　讀人不知

又云。

龍田川紅葉みたれてなかるめり渡らは錦なかやたへなん

此歌。或人云。奈良帝御歌也。

如古今。於萬葉集以往人者。直不書其名。後注之。以之思之。古里歌後奈良。次歌二首以往奈良。人丸同時帝也。（是二。）

難者云。

一者世間奈良帝御時集ト云物有。件集有此歌三首。二者古今目錄。（仲實撰。以三首歌注一帝。）非奈良帝兩人儀如何。

答云。

古里歌載件御集之條。愚昧之後叢謬書入歟。從往古載三首。古今異位署書樣不同歟。至仲實目錄者失之歟。（或諸家集。或在生撰云々。或後人集云々。彼集若以後人書出歟。）

難者云。

同人歌位署書樣不同之條。古今之習也。有其事歟。於載書籍無不審歌者。直書其名。至傳聞巷其說不慥歌者。後注其名也。非仲實之失歟。

答云。

然也。但先賢難辨。分明不注事。以後輩之凡慮。詳之如何。若存此儀。彼御集猶難爲證跡。

大和物語云。

昔奈良ノ帝ニツカウマツリケル采女ヲ帝召テ。又モ不召ケレハ。心ウカリテ夜ヒソカニ出テ。サルサハノ池ニ身ヲナケテケリ。帝キコシメシテ歌ヨミタマヒケル。

わきもこかねくたれ髮を猿澤の池の玉藻とみるそ悲しき　人丸

帝。

猿澤の池もつらしなわきもこか玉藻かつかは水そひなまし

同帝龍田川ニ紅葉面白カ御覽シケルニ。

龍田川もみち葉流るかみなみの御室の山に時雨ふるらし　人丸

帝。

龍田川紅葉みたれて流るめりわたらは錦なかや絶なん

同帝イハテト云鷹ヲウシナヒテ。

イハテオモフソイフニマサレル

奈良ノ帝ノ[illegible]ニオハシマシケルトキ、[illegible]眼寺坊ニオハスルニタテマツリタマフ。

みな人のそのかしめつる藤袴君かためにとけふそ折つる

返事。

折人のこゝろのまゝに藤袴うへ色深くにほひたりけり

次第如此。今案ニ。三首ハ同帝ト書之。其後更ニ奈良帝ト書也。各別帝ト見。ハテノ前ノ歌ハ聖武天皇御製也。仍略帝名ノ前之故也。初三首者以往ノ奈良帝也。人丸同時之故也。然而前帝之儀同叶古今之意也。(是二。)又采女ノ歌ナラヌ事。大同帝ノ時ナラハ此京也。而実宿田ヲ大和ノ猿沢池ヲ不可行。此京豈無大河哉。以之思之。作帝非大同帝也。(是四。)已上理四。　然而猶奈良帝。非一人之説可分明也。仍作者異説之以往奈良帝ハ聖武天皇也。委見別記。　如日本紀、続日本紀編纂異説。又歌人有其数。萬葉ニ多ハ載此時歌。集中天平元年二月十四日奏諸歌之由見同記。(是一。)又書云、猿沢池ニ身ナゲタル采女。アメノ帝ノ御時也云々。一名聖武天皇ヲ申ス御諱天皇。此故ニアメノミカトト云。又平城宮ニ御故。一名テ称奈良帝歟。(是二。)

難者云。如古今目録。號天智天皇也如何。　答云。作帝一名號天智。開別天皇之故也。雖然於作者一切不得其撰。近江大津朝也。以同號同帝事。以之可知歟。奈良帝御集。御堂行幸後朝之御製。此又東大寺歟。大同帝御時不聞。(是三。)已上理三。　難者云。如皇代記。於平城天皇注ニ奈良之帝。至聖武無其註如何。　答云。如此號更註書無。或得世俗。天智天皇俗ニ號近江帝。不注皇代記。聞僧院時人號仁和帝。又不

注云。件歌見萬葉集。

萬葉集第二卷云。

柿本朝臣人麿在石見國臨死時自傷作歌一首

かもやまのいはねしまける我をかもしらすといもか待つゝあらん

柿本人麿死時妻依羅娘子作歌二首

けふ〳〵と我待君はいわ代に交りてありといはさらめやは

只にあはゝあひもかねてん石川に雲立渡るみつゝ忍はむ

丹比真人　擬柿本人麿之意報歌一首

あら波に寄くるたまを枕にてわれこゝなりと誰かつけ南

今案。此歌次第。依時代年紀之次第ヲ立歟。而此歌等藤原宮御宇天皇代之次。寧樂宮和銅四年并霊亀元年九月歌等之前ニアリ。若人丸和銅以前ニ死歟。但聖武御時見在之由難也。不可信受。随此次時代前後有相違。萬葉撰者所注出也。

同集第十五卷云。

天平八年丙子夏六月。遣使新羅國之時。使人等各悲別贈答。及海路之上慟旅陳思作歌。并當所誦詠古歌一百卌五首云々。

此中多有人丸歌。但不註其名。所謂

七夕仰觀天漢各陳所思作歌

年にありて一夜妹にあふ七夕の我にまさりて思ふらんやも

此歌大使歌之次ニ有。

夕されは秋風寒み我せこかときあらひ衣ゆきて早きん

是又如拾遺集人丸歌也。詞書モロコシニ使ニマカリケル時ヨメル云々。已上到筑紫歌也。以之思之。人丸和銅以前死去之條雖指南耳。

追考。　遣唐使大伴宿禰作手麿記云。日本大使山城史生上道人丸。副使陸奥介從五位下玉手人丸云々。件使等天平勝寶元年四月四年進發。同二年九月廿四日歸着紀伊國云々。又人丸集ニ有入唐之由歌也。若此人丸歟。但異姓歟。又各詠歌之處。無人丸歌。若同名人歟。

一撰萬葉集或稱大同朝疑桓武時事

古今序云ク。

カヽリケルサキノ歌ヲ合セテナン萬葉集トナツケラレケル。カノトキ・ヨリコノカタ。トシハモヽトセアマリ。ヨハトツキニナンナリニケル。所謂。

桓武廿四。　平城四。　嵯峨十四。　淳和十。
仁明十七。　文德八。　清和十八。　陽成八。
光孝三。　宇多十。　醍醐八。(昌泰三年。　延喜五年。今年也。)

案之。計之法多ハ取始テ棄今。而既有十代之字。相當桓武歟。(是一。)大同朝即位之間纔四年。宛如電光。偏陵之後又有專。不安穩。豈有撰集之興哉。(是二。)

貞觀御時。萬葉集ハイツホトニエラハレタルソトヽハレケレハヨメル　　文屋有季

神無月時雨降おけるならのはのならの都のふるとそこれ

案之。大同帝ハ平安宮御宇也。於此京撰ル集ヲ奈良ノミヤコノフルコトヽイハム。コレ如何。(是三。)　已上理三。

萬葉者云。如古今眞名序ハ。平城天子詔侍臣撰萬葉ト書如何。答云。此平城天子ハ桓武若ハ聖武等也。更非大同之朝。如古今序ハ時歴十代。數過百年云々。然者當桓武。而多其疑。

一後集ニ寛平三年以後之年號不載。一家持延暦二年任中納言者也。而公卿之時歌不載。就中桓武作歌之由無所見。予案之。聖武之撰歟。多其理。一如古今序。人丸同時奈良御時被撰之由見。一天平元年正月十四日奏諸歌之由。見皇代記。一能令作歌云々。至十代文ハ以若過若減皆存大數之儀。素條取十代歟。

考物云。猶聖武撰也。古今序十代百年。文選序摸書之歟。作序云。時更七代。數逾千祀云々。然而實七代不過云々。又千歌廿卷書千九十九首也。人丸既沒。和歌不在斯。是文選文王雖沒。得在此乎摸也。

右管見之所及。粗勘錄之。抑如書綴者人麿者聖武之臣。萬葉者同帝之撰歟。於大同之說者。皆雖採不見者也。但僅守一隅之士。難決萬代之疑。恐以翰文勿爲指南矣。以勸。

仁平三年月日　　前和歌得業生由達宿禰上

家持所歴官位

天平（本ノマヽ）　年任内舍人。十七年正月從五位下。十八年丙戌三月少輔。六月越中守。廿一年四月從五上。天平勝寶六年甲午四月兵部少輔。十一月爲山陰道使。天平寶字二年戊戌六月因幡守。六年正月兵部大輔。八年正月薩摩守。神護景雲元年八月太宰大貳。四年六月民部大輔。九月左中辨中務大輔。寶龜元年十月正五位下。三年二月式部權大輔。五年三月相摸守。九月右京大夫。六年十一月左衛門督。七年三月伊勢守。八年正月從四位上。九年正月正四位下。十一年二月參議。九月右大辨。天應元年四月春宮大夫。六月左大辨。（大夫如元。）十一月十三日從三位。延暦元年閏正月。坐氷上川繼反事。先移京外。四月有詔宥罪。復參議春宮大夫。同六月以本官出爲陸奥出羽按察使鎭守府將軍。在任不幾。七月十九日任中納言。（大夫如元。）三年二月任持節征東將軍。四年八月薨。後廿余日其屍未葬。大伴繼人竹良與等殺中納言藤原種繼。事發覺下獄。按驗之。事連家持。由是追除名。

古今集　和歌千九十九首　此中長歌五首。

延喜五年四月十八日。令友則貫之躬恒忠岑等撰之云々。撰和歌所内御書所也。此集宣下并奏覽之年月不審。如假名序。延喜五年四月十八日仰其々等。不入萬葉集歌令奉古新云々。此日之宣下歟。如眞名序。延喜五年四月十五日（本十八日撰事歟）。臣貫之等謹序云々。如此々日參差歟云々。

眞名序其說ニハ。假名序ヲ爲摸シテ。淑望書模之眞名云々。或說ニハ。爲書假名序。先令淑望書士代之草也云々。予案之。件序實ハ紀淑望書云々。淑望書模之後相違也。非大事。何可假日閑之草哉。土代之儀ナラハ。件序模假名序之許也。就中歌仙之得失ヲ註之條。何貫之所爲。重案之。貫之カ先以假名書土代。令書眞名序歟。而假名序流布之條有疑。其後本ニソ初ニ書眞名序。奥ニ假名序ヲ書テ侍シ。若有所存歟。又陽明門院御本（不書御本云々。）無序。若可有序否之儀ニテ。兩樣雖書序。遂ニ上奏本ニ不載序歟。而後日各書加之歟。但仲實之撰如目錄。從日令上奏也。而延喜七年大井行幸歌二首。同十三年亭子院歌合歌二首在此集。件歌等諸本ニ無相違。猶以不審。

抑貫之集云。延喜御時ヤマトウタシレル人々ヲメシテ。昔今歌ヲ令テ奉。承香殿ノ東ナル所ニテ令撰給。初日ノ夜暮マテトカクイフ間ニ。御前ノ梅木ニ郭公ノ鳴ヲ。四月六日ナレハメツラシカリ玉マヒテ。召出テ歌令讀給フニ奉歌。

こと夏はいかゝ鳴けん郭公この暮はかりあやしきはなし

是雖無年號。叶四月十八日之儀。但六日ハ書寫之失歟。十八日ト六日之字ト相似可謂。魯魚章草之誤是也。一證也。方々難決斷云々。予談會顯廣。或人之次以問此事。答。先年相尋

基俊君之處。答云。延喜五年四月十八日上奏日也。序ハ貫之以假名書土代。令淑望草者也。而共依有興不棄。假名序又上奏以後歌入之條。貫之不堪俊美追入之也。仍奏覽本ニハ無件歌等云々。予重問云。會釋尤可然。但不審有二。一者上奏本之流自世間ヘ不見。何可然。次ニ不堪俊美追入秀歌ハ。圓亭子院歌合。貫之ガ櫻散歌可入之。答云。件歌ハ古今集ニ承均法師。櫻散花ノ所ハ春ナガラト云歌ニ同意也。仍不可入之歟。今予重云。此儀ナラハ新撰集ニ入件歌之條如何。答云。於件條不及力云々。新撰集貫之一人シテ撰之集也。而不入古今歌ヲ多以入之。貫之ガ意ニ存秀逸之由歟。然者件歌等追可入之。此儀猶以難指南歟。

追按。此事猶基俊義宜歟。能因玄々集序云。昔延喜天曆以往三代之明主。降勅撰茲道。而入其倫華藻之作。是則王道之臣。訪於衆心凍詞。儒林河漢之才。以列作者歌序云々。如此用貫之序歟。然者又上奏日四月十八日之由見古也。又撰集後出入事非無例。後中書王月歌。(ヨニフレハ。)撰入拾玉集。當薨去後納言出之云々。撰集之習歟。但古皆ノ集私撰止如何。櫻散之歌ヲ不追入。自歌之故歟。

古今證本陽明門院御本。(貫之自筆。)是延喜御本相傳也。後顯綱朝臣申賜。其後轉々シテ於故公信朝臣許燒失之。此本無序也。小野皇太后宮御本ハ貫之自筆假名序也。)於古燒失之。以伴本之流通宗朝臣自筆本是也。其由被書表紙。

花薗左府御本。(貫之妹自筆假名序。)是閑院贈太政大臣本轉々來云云。所令進新院也。其後不書。是等本皆無紺表。與普通本異。此集萬葉集歌少々載。又家持。貫之太夫集歌多以入之。彌讀人不知。又大江佐國。藤原仲實等各取目錄。而仲實目錄有恐避歟。彼集號奈良帝聖武御製也。作三首注大同朝御製。於一首(古里ト成ニシ奈良ノ都ニモ。)大同トモ可見。又龍田川歌。人丸已違和。定聖武御製也。人丸死去歟載萬葉。隨年紀玄隔。不可過大同朝。古今ニモ二首ハ歌後ニ注其名。(古里歌ハ。)先註其名似分別。

後撰集和歌　千三百九十六首

天曆五年十月日。昭陽舍撰之。讀頭。紀時文。大中臣能宣。清原元輔等。以昭陽舍為撰和歌所。萬葉集之點合撰之。(梨壺五人也。)一條攝政伊尹為別當之時。爲此所之別當。(有事行文。)于時有和歌之宣旨。而不入此中。不審云々。此集未完ニテ止之云々。仍本無目錄。但證本ハ朱雀院御本。又有天暦云々。(是ハ寛永本也。)作閑院日集。不審有少々。就中以兼盛歌稱兼覽王歌。

則。

けふよりは荻の燒原かきわけて若菜つみにと誰を誘はん

又云。

雨やまぬ軒のした水數しらすこひしきことの増るころ哉

前歌ハ大和物語ニ業平トテアリ。後歌ハ在彼家集。而此集ニ或本ニハ無名。或本ニハ無覺大君トハ書。是和讃之人直歟。凡書ノ僻事ハ荒涼ニ不可直云々。無名ハ本ハ以讀尺爲大君。而天暦目云歸本無云々。皆貝云々、凡無情家集歌多入此集。而或有讀人不知、尤不審。

所謂

きみまつのはにかゝるなりけり　又云。

山ふかみ消せぬ雪のかなしきは

わするとは恨さらなんはしたかの　又云。

難波潟みきはのあしのおひしより　又云。

家ゐせんとは思ひきや君

遠近の人めまれなる山さとに

是等類也。

凡如此事撰集輩歟。

拾遺抄ニハ中務歌(うくひすの聲なかりせは雪消ぬ)

補親歌(宿處)アシヒキノヤマホトヽキスサトナレテ

於本讀人不知。皆是無疑作歌也。遊覧歟。近代集ニモ多有之。

又此集有不審。業部第三業平歌云々。

よひのまにはや慰めよいその上ふりにし事も打拂ふへく

返事。

わたつみとあれにしとは今更にはらはむ袖や泡に消なむ

此歌ノ詞如伊勢集。カクテミヤストコロナヤマセタマヒケレハ。アツマリテ後ニ。紀貫之人トイフナ。コノハシメノナトコ。アカラサマニシモニオリヨ。物イハントイハセタレハ。カヘリコトニ。コヽロチシハシナクサメテトイフ。古事ノハシチナムイヒタリケルト云々。予按之。此始男トイフハ御集ハ仲平也。御息所ハ七條后也。若仲平ヲ書讃歟。但後撰之時仲平大臣也。然不可書名。和讃之人所爲。又業平元慶四年卒去云々。七條后仁和四年十月六日入内。如此時代相違。凡業平會合伊勢事有疑。

伊勢集伊勢物語有一首。

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪哉

又業平集歌有三首。皆後撰歌也。所謂。

いせの海にうかふあまともなりにしか

たのめつゝあはてとしふるいつはりに

よひのまにはやなくさめよ

是等也。但此歌等無伊勢物語。業平集并後撰之失歟。又タノメツヽノ歌ハ在古今集。躬恒歌云々。

又有増基法師云物。而此増基ニハ玄々集ニ入者也。永延以後人歟。付中件歌(カミナツキシクレハカリヲミニソヘテ)無増基日記。尤不審。彼後撰ノ作者ノ増基ハ。若大和物語ニ侍

增基君歟。件人ハ殿上法師云々。

拾遺集和歌　　千三百五十一首

同抄和歌　　　五百八十六首 或四

花山院勅撰云々。

此集中ニ源順和萬葉集歌ト云物アリ。或萬葉ノ古語ヲ翻和ニナセルナリ云々。或萬葉歌ヲ爲本歌詠返歌也。予案之。返歌之儀歟。一ハ藤經衡和後撰歌ト云物アリ。後撰ノ中ニ優歌ヲ百首計書出。其返歌ヲ詠也。以之思之。彼順カ所爲ヲ模歟。一ハ萬葉集ニ是ヲ和タルトミユル歌ナシ。是ヲ返タルト見歌間々アリ。

所謂　順和萬葉云。

思ふとも心の内をしらぬ身はしぬ計にもあらしとそ思ふ

萬葉云。

朝霧のほのに逢みし人ゆへにいのちしぬへく戀わたる哉

戀しなん後は何せんいけるみの爲社人は見まくほしけれ

順歌云。

獨ぬる宿には月のみへさらは戀しきとのかすはまさらし

萬葉云。

玉たれのこすのまとおり獨ゐてみるしるしなき夕月夜哉

增鏡あきよき月のうつろへは思はやまてこひこそまされ

順歌云。

涙川そこのみくつと成はてゝ戀しきせゝに流れこそすれ

萬葉云。

わきもこか袂やゝくると白妙の袖ひつ浴になきし思ほゆ

思出ておきはなく共いちしろく人のしるへく嘆きすな夢

是等ノ類也。注勘順和萬葉出所見也。

君こふる涙の床にみちぬれはみをつくしとそ我は成ぬる

涙川底のみくつと成はてゝ戀しきせゝに流れこそすれ

ひとりぬる宿の隙よりいつる月泪のゆかにかけそうく覧

獨ぬるやとには月の見えさらは戀しきことの數はまさらし

作歌等經衡カ和後選歌ト書マセタリ。又本歌等非萬葉歌。少以有不審。但於和歌者無相違。爲之如何。

此集不避新選集歟。又有目錄。作同違有失錯。以曹尹註作忠。(ワレヒトリコシノヤマチヲコシカトモ)御堂御屏風歌也。作者稱輔尹。隨在家集。又佐忠ハ天暦御時人也。佐國難廣才者。暗和歌道故歟。

後拾遺抄和歌

通俊卿一人撰之。如序承保之比奉之。應徳三年九月十六日奏之。其間及十有年奏覽之。件本彼令伊房卿清書之處。件人歌唯入一首之故、腹立不書之。仍令[illegible]書寫之云々。證本號黑本。燒表紙之故云々。其[illegible]并佐國等也。于時

有様々信用隨者。此説之業字先證也。不審之如何。但貫之云
私撰之後ニ東御氣色云々。于時有勅。後拾遺ト云撰。世以謂撰
信之撰歟。通俊見之云々。于時件書々令見合撰之。云被
撰之由傳。而後日有沙汰。更不被云々。此世流布之本。更有其
之由。見目錄序。又御字古今後撰之作者多ヲ不入之。無撰歟
入之。是無撰作者也。但不失錯歟。後人撰通集只後撰存作者
也。仍存歟。名作多。反獨入之歟。
此集拾遺之云々。伊勢等少々載之。失錯歟。有目錄。四巻部
立撰也。

金葉和歌集　六百五十四首(此外遺歌十六首。但流布本定也。)

白河院御讓位之年。院被仰權一人奉　俊頼撰之。天治元年月
日奉之。大治元二年之間上奏之。此集末不定也。奏覽之後
度重調。第三度之度。以中書本集之覽之。而作本後有種異。
但撰者許ニ無此本云々。件本在故待賢門院。而今前大相國卿
出書寫之。無撰者云々。件本一首猶在撰非云々。唯拾遺集
等入之。拾遺ハ撰ニ歲テ撰者ニ之内入之也。第前撰責之ヲ古
野山葉ノ白雪何消ニノ歌也。世間ニ流布本ハ第二度本也。
近代人歌等也。雖而被時作打聞集也。上覽本打紙云々。白薄
書之云々。唯有兩代集。于今白河院在兼本。雖其不奉之。若爲御
不審之者歟歟。

詞花和歌集　四百九首

新院御讓位之後。故在京一人撰之。天養元年六月二日奉之。
奉院上。爲進之後撰紛。被製少々。件本歌書。數代。同以撰等
撰被除。予雖爲使持參之本。被撰本ハ有目色紙草紙自筆也。
金葉集付流布本。第三度本撰不留之。件本無有人之故也。

宣下状云。

被　院宣云。自中古以來。不入勅撰集之外和歌等。宜被撰集
者。仍被進彼件。敦長謹言。

六月二日　　参議敦長奉

謹上左京大夫殿

抑撰之此集閣後拾遺撰時。若有事也。此集爲謹。又末代撰歌
仙。隨金葉集以後年序不幾。爲之如何。　予于時不堪。而今奉
此集之後有思慮。見之有扶持歟。而前問承所存披陳。其後有
不審之事。一切不令見合給奏覽之。還有御下事。爲御使持參
彼集之間。何見之也。古歌有其實。年長申其由。其時被除之。
不見合撰之條。世以爲不審耳。

伊勢物語　和歌二百五十首(但本々不同。)

業平朝臣所爲也。偏非後人作歌耳。古今之圖歌有與之書歟
集。又不書自他。隨便同人歌様書列之。若是密事ナ令混之故
歟。万葉集多入之。又其名曰有二義。有密事之故。爲構備事之
由。號伊勢物語。謂ニ伊勢ハ傳ト云故也。一ニハ齋宮事ヲ爲

歟。故號伊勢。是正義歟。泉式部本以齋宮事最先書。

一大和物語　和歌二百七十首（此中連歌三首。但本々不同。）

作者不審。先朱雀院御時天暦始事歟。先帝延喜御宇也。大キオホイモウチキミト號ハ貞信公也。有兼盛并檜垣嫗等歌也。

又其名日和語由歟。有古今集歌等少々。

六帖　和歌四千六百九十六首（此中長歌九首。旋頭歌十七首。但本本不定也。）

貫之女子所爲之（也歟）。故號紀家六帖。兼盛重之等歌載之。

撰集之後。又集出來事流例也。古今集之後。貫之一人奉之。撰新撰集。是玄々中玄三百六十首云々。古今集之外歌多入之。

予茲知。古今偏非貫之一人之進止歟。件集未撰終間。延喜八年正月任土佐守。即赴任。承平五年上洛之時。延喜崩御云々。

作序云。貫之倭歌曰。將以上獻。橋山晩松。愁雲之影已結。

湘濱秋竹。悲風之聲忽斷。傳勅之納言亦已薨逝云々。此納言

如補任者兼輔卿歟。

後撰未定云々。

拾遺集之後有抄。集中妙詞歟。是又勅撰也。

後拾遺有續。新撰髓集中歌也。一人撰集尤有其理。

金葉集之後。頁玉集出來。顯仲入道撰之。同除彼集（歌脱歟）。

詞花集之後。拾遺古今出來。教長入道撰之。同除彼集歌。予按之。撰集無私事。雖且識者不賞事也。何次必如此撰玄之玄歟。

傍人之所爲別事也。

撰集秀歌漏常事也。惡歌入又不可勝計歟。貫之櫻散歌不入古今并後撰。而四條大納言爲貫之第一秀歌。但梨壺五人誤哉如何。

後拾遺究竟歌三首漏。所謂堀川右府歌。

春雨にぬれてたつねん山櫻雲のかへしのあらしもそふく

隆經朝臣歌。

引駒の數よりほかにみえつるは關の清水の影にそ有ける

兼方朝臣。

去年みしに色もかはらす咲にけり花社物は思はさりけれ

是也。又金葉集三首漏。所謂江帥歌。

こほりゐししかの辛崎打とけてさゝ浪よする春風そ吹く

故將作歌。

我戀はよし野の山のおくなれや思いれともあふ人もなし

顯俊卿歌。

播磨ちやすまの關屋の板ひさし月もれとてやまはら成覽

此歌ハ播磨チノニクシ。ハリマカタト改テ入ヨト被申ケルチ。作者然者不可入云々。仍不入之。予按之。カタハ尤神妙。タヽシチニテモ不可除之。相互ニハキ事也。

拾遺撰之時。公任卿チルモミチハチキヌ人ソナキト云歌チハ。花山院モミチノニシキヽヌ人ソナキト直テ可入之由有

御定。不可然之由被申ケレハ。如本ニテコソ被入タルニ。近代之人諸事如此。又凡歌善惡昔ヨリ難辨事也。シカレハ四條大納言樣々書ヲ撰ルニ。以或歌ハ入之。以或歌入後。就中自作ハ善頭尤難辨事也。上手モ然歟。後冷泉朝臣詩歌中得秀歌和歌卅首許ヲ書出。其中不昔心歌少入之。秀歌又多不入之。文時三位ハ帶見草中倫ト云題之時。存不作得之由。蒙衣伏所。保胤來云。今度御作如何。答。力不及。不得庭也云々。而草案ヲ見。露葉濕月照霜中。有此句。保胤云。已秀句。作不得之由如何。仍用此句。世以稱秀逸云。

一諸集人名不審

萬葉集

萬一明日香河原御宇。(皇極也。)　萬一泊瀬朝倉御宇。(雄略天皇。)
同高市岡本御宇。(舒明天皇。)　同近江大津御宇。(號天智天皇。
又號中大兄王。萬一中大兄近江宮御宇天皇。)
同明日香清御原御宇。(天武天皇。)　同後岡本御宇。(齊明天皇。々極重祚也。)
同藤原御宇。(持統天皇。)　萬廿先太上天皇。(日本根子高瑞男清足姫天皇也。)
萬一太上天皇。(持統天皇。大化三年讓位於輕皇太子。)　藤原夫人。(明日香清御原御宇天皇之夫人。字曰大原大刀自。即新田部皇子母。)　輕皇子。(文武天皇也。)　萬一間人皇女。(元明天皇也。)　萬五三注アリ門部王。(後賜姓大原眞人氏也。)　高安王。(後賜姓大原眞人氏也。)　春日王。(志貴皇子之子。母曰多紀皇女也。)
境部王。(穗積親王子。)　榎井王。(志貴親王子。)　海上女王。(志貴皇子之女。)　酒人女王。(穗積皇子之孫女也。)　以玄繼女王。(六人部王之女。母田形皇女。)　萬八高田女王。(高安之女。)　賀茂女王。(長屋王女。母曰阿部朝臣也。)　廣河女。(穗積皇子孫女。上道王之女也。)
左大臣長兒。　今案。(大納言卿之夫人。或人云。萬葉ニ自明ト云ハマロアキトヨムト云々。而件名不見。若是人歟。)
藤原朝臣八束。(或書云。八束改名。後眞楯ト云々。房前第三子也。)
石河朝臣廣成。(後賜姓。高向朝臣氏也。)
大伴宿禰三依。(佐保大納言第二子也。)
丹比眞人乙麿。(戶主眞人第二子。)
野氏宿奈麿。(萬五梅花歌卅二首作者中。大令史野氏宿奈麿。天平二年正月事也。)
田氏肥人。(同五梅花卅二首歌作者中。少令史田氏肥人。)
磯氏法麿。(同所陰陽師磯氏法麿。釆法而歟。)　志氏大道。(同所算師志氏大道。)　榎氏鉢麿。(同大隅目榎氏鉢麿。)
村氏彼方。(同壹岐目村氏彼方。)　小野氏淡理。沙彌滿誓。(造筑紫觀音寺別當。俗姓笠朝臣麻呂也。)　弁基。(春日藏

首。老法師名也。）　石河女郎。（字曰大名兒。）　筑紫娘女。
（字曰兒島。）
大伴郎女。（今城王之母也。作王後賜姓大原眞人。）（萬廿。上總國大掾正六位上大原眞人今城云々。萬四。大伴郎女和歌四首。右郎女者佐保大納言卿之女也。初嫁一品穗積皇子。被寵無儔。而皇子薨之後。時藤原麿大夫娉之郎女焉。郎女家於坂上。仍族氏號曰坂上郎女也。）
紀女郎。（名小鹿也。鹿人大夫之女。大貴王妻。）
田村大孃。（右大辨大伴宿奈麿卿女也。號里名。）
（右田村大孃幷是右大辨大伴宿奈麿卿之女也。卿居田村里。號曰田村大孃。但妹坂上大孃者母居坂上里。仍曰坂上大孃。于時姉妹諮問。以歌贈答。）
坂上大孃。（右大辨大伴宿奈麿卿之女也。號里名。）　唐棣（第七卷ノ。草歌中只唐棣花月草。）
已上傳師說并許注之。

古今集
源宗于。　源忠。　源貫。　平中興。
宮道潔興。　藤勝臣。　難波萬男。
菅野忠臣。　下野雄宗。（式部大輔範永ハ古物ニ女子名也。メツラシト云如何。）　寵。（或說テウ。女房名也。）
小野小町。（如此表彰傳者。其姓玉造氏也。小野ハ若住所名歟。且或人云。件傳弘法大師所作云。小野ハ貞觀之比人也。然[illegible]花人歟。）

後撰集
敦實親王。　源寬明。　源等。　源俊。
源宗城。　藤時雨。　源善。　藤雅正。
藤清正。　源濟。　源淳。　藤守正。
源[illegible]。　字子女五首。（[illegible]）　小野道興（女イ）

拾遺抄
藤長能。　平公誠。　[illegible]信正。　藤惟成。
源直[illegible]。　藤國光。（仲文本名也。見家集。）　藤輔尹。

後拾遺
藤義忠。　大江公資。　坂上重成。　藤經理。
藤範永。　菅原為言。　藤惟孝。（伊勢）　橘資成。
坂上定成。　藤國行。　藤賴忠。　藤孝善。
遠。　[illegible]遠。
遠ハ女房名也。[illegible]。古今集ノ女[illegible]。向後人定[illegible]ニ送テ[illegible]稱遠[illegible]云々。

一 雜談
後拾遺ハ末代[illegible]也。[illegible]ハ有[illegible]云々。先序別様云々。[illegible]人之云[illegible]。予[illegible]之不當也。件人[illegible]因首也。皆以[illegible]所[illegible]。[illegible]日之[illegible]。又[illegible]小[illegible]。

後方參後朝亭。花コソノ歌、十八撰集中請。□部云。コソト云
字不快也云々。後方退出。於侍中云。此殿ハヤムコトナキ人
ト思食テ。物不覺給ハニコソ。四條大納言ノ第一ノ秀歌ニ。
花コソヤトノアルシナリケレトイフ歌ハ不知給ヤトテ退出
云々。仍付此名。住吉神主國基歌多人之前故云々。
又號後拾遺ト云事アリ。世以爲通俊卿之所爲。而近年俊頼朝
臣ノ息子俊惠相語云。吉時女房逝去之後。俊遺物ヲ開見之
處。故通俊草案々々。其中有件歌後拾遺之草案。被頭之手跡也。
若俊頼爲號云々。予被之。昔以師口状執筆之由草歟。　金葉
集之時有種々異名。其中有實アルシ第一名云々。是孝善五品
懐親之所付也。　撰集ノ私昔ヨリ有事歟。四條大納言中書王
御歌(ヨニフレハモ・オモフトシモ)存日入於金玉集。大王
沒後除之。可悔之。　詞花集之時。如此名不聞歟。但詞花ノ詞
字音讀死詞。有禁忌之由貴人申。依ノ難歟。　金葉名予心中
ニ傾思。其故ハ自何見之處。傷ハ混葉之時。先世間ニ金葉
花而云々。以之思之。金葉ノ世間ニ流有不吉歟。而此集之後。
無程白河院崩御。撰者又逝去。
鳥守達高云。古今後撰拾遺等ヲ號三代集。拾遺ハ花山院御撰
也。而花山院以花之大臂合ノ御詞度ニ有三代集ノ御事有如
何。予云。不知。此事尤有興。件事如何。鳥守答云。祕事也。以
往ハ相加万葉集號三代集。而拾遺用萬葉之後。棄萬葉用拾遺云
々。

歌合事

或物云。宇治殿下被仰云。齋宮女御歌合。左右歌忠見一人讀
之云々。予見實宗集實也。左料右料共ニ讀之。又同女御天暦
十年歌合。(麗景殿女御歌合。)左歌ハ能盛。右歌中務。各一
人讀之云々。
卅講歌合時。相摸所詠云。
五月雨はみつのみ牧のま菰草刈ほすひまもあらしとぞ思
此歌講出之時。殿中鼓動及郭外云々。
江記云。俊兼曰。先年土御門右府大納言時歌合。棟仲爲講師。
而有讀落之由歟。敵方難之。棟仲當坐誦古萬葉集讀宜證歌
一首云々。右府後日被感曰。當坐讀宜歌之旨。雖似據對。至處
言者無便事也云々。
郁芳門院根合時。江記云。右中辨師頼曰。尾張守許孝善來向
所。(住吉神主。)歌未見之前破却。可入孝善歌之由申請
所入云々。)後時左右相挑之間爲敢々。匡房卿云。右大辨通俊
歌。至予者不可被挑。先年書状今猶有之。其書云。和歌之道雖
能宜思案不可恐之。於貴殿者深所恐申也者。件書状爲明鏡。
何可忘彼書哉。俊兼聞之大咲云々。件歌合左方人以中納言中
將(今入道殿下。)爲言目无心云々。隨殿下頻令制止給。少年
之人不知和歌案内。何爲殿上人々言目哉。就中累葉風无此僻

云々。（已上見江記。）
和歌者人ノ心々也。定頼卿問四條大納言云。式部赤染何勝歌讀候哉。答云。非一口之論。式部ハコヤトモ人ノイフヘキニトイフ歌ヨム者也云々。定頼云。式部歌ニハ。ハルカニテラセ山ノハノ月ナコソ世以稱秀歌之如何。答不知案内也。クラキヨリクラキミチハ經文也。イカテオモヒヨリケントモ不可思。末ノハルカニテラセハ。彼ニ被引テ出來レル詞也。コヤトモ人チトイヒナキテ。末ニヒマコソナケレトヨムハ。凡夫ノ可思寄事ニ非スト云々。而江記云。良暹云。式部赤染共只歌仙也。但赤染鷹司殿御屏風歌十二首中十首ハ秀歌。又賀陽院歌合時多秀歌。如屏風ハ式部不可及候人云々。予案之。何可信大納言之説。何付良暹之儀哉。但就ニモ如歌合ハ赤染健歌讀也。又式部歌不入度々歌合。所謂花山院并長元等也。但長元歌合時。有中宮亮資善。權亮經房。大進義通。藏人橘季通。源頼家。平經章。此雖歌不入云々。
同六年白河院子日ニ義忠則長等皆召人。範永資宗ハ爲役人。但頼家ハ六位時也。範永不入之如何。古ハ能被執事歟。近代豈然乎。承暦歌合時。俊頼。賢上人。其後。國基。輔弘。周防内侍。伯母等歌不入之。又通宗ハ依爲歌仙。此度遣昇殿不入之。後番幾一首入之云々。但今時亦復如此。經信顯綱等歌不入之。經信卿云。凡不讀今度歌云々。

古今集之時。有公忠并祭主輔基等不入之。雖然末代被知名事倍於入輩。輔基ハ後撰ニ又不入之。纔拾遺抄ニ一首也。少不堪歟。（ヒトフシニチヨヲコメタルツエナレハツクトモツキシキミカヨハヒハ。）異本書入之。
後拾遺時有俊頼其後不入之。金葉集之時。大弐資通依不入シテ腹立。俊頼朝臣許に來云。不入今度集。不可敢遺恨。貴殿遇後拾遺之時。而不入之給カトモ。今日ハ奉撰集給。向無モ後集ニ能入事モ候ナント云々。其後詞花集時一首入云々。清輔執了。件人姓中原也。而撰集之度返本姓。坂上是則苗裔之故等共姓也。有興之。予金葉詞花兩度之撰。逢千歳一遇之遺之。遺恨第一也。初ハ幼少。後ハ撰集者之子息之歟無入之傳云々。大恐也。曾祖父隆經朝臣後拾遺作者。將作又入之。故左京金葉集作者。四代之箕裘。至予之時闕之。遺恨云々。
素意ハ紀伊守重經也。號紀伊入道。此一宮紀伊ノ夫也。騎馬ニテ楢葉ノ御牧ノ政所前ヘ過ニ。下人出來咎之云。無止事御牧ナ不下馬テ過ハ何物ソ。入道云。紀伊入道素意。後拾遺ノ作者ニハアラスヤト云々。下人無答シテ令過之云々。
右衛門尉孝善ハ號青衛門。色青之故也。少有嗚呼氣之人。平繼（經イ）之時ハナノレハ撰集ノ作者也。如此不可申云々。古今傳稱事歟。
從昔執道ハ有興事也。是能於花山院詠三月盡歌云。

心うき年にも有哉はつか餘こゝのかといふに春の暮ぬる

此歌講時。四條大納言春ハ卅日ヤハアルト云々。長能此後聞此事テ伏病。聞万死一生之由テ。後大納言以書訪之。返事云。其承了。此病ハ別言也。春日ハ卅日ヤハ有ト仰候シ、ウク思給テ罷之間。不食ニ成テ已今明相罷云々。其後遂以死去。大納言大被歎云々。歌人専荒涼ニ不可難歟。

以言詩云。文峯按轡白駒景。詞海艤舟紅葉聲。是以言與齊名被試之日所作也。本ハ駒過景葉落聲ト作云々。而此覺後中書王之處。被仰白字宜由。仍改作云々。齊名以爲怨讎曰。實手懸片手。何言云々。齊名臨終被訪。御報云。思問旨悉猶千萬。但白字事不忘歟云々。是見江談。

帥大納言最後ニ讓俊頼云。在古今。松秋風フクカラニトイフ歌。任大臣テ大饗セム日。吾所詠ノヲキツ風ノ歌。中門内ニ入テ史生之座ニ着被如何云々。俊頼答云。此仰如何。彼御歌ハ各不可劣者也。雖然依爲古今歌。有限先任大臣候ハンニ。御作ハ一大納言ニテ。爲着者テ南階ヨリ被昇テ。對座ニ居ナントコソ存候ヘト云々。帥答云。サハサモアリナンヤ。如何カアルヘカナントテ有感氣云々。

源頼實ハ無術執此道テ。參詣住吉テ。秀歌一首令詠テ。可召命之由祈請云々。其後於西宮テ。

木葉ちる宿は聞わく事そなき時雨するよも時雨せぬよも

ト云歌ハ讀也。當座不甚之。其後又參詣住吉。同祈請。夢示云。秀歌ハ讀メリ。非彼落葉歌哉云々。其後存遂之由請歟。又其身六位之時夭亡云々。

天徳歌合之時。兼盛正衣冠參陣テ經日侍候。シノフレト色ニ出ニケリ我戀ハトイフ歌。勝畢ヌトキヽテ。拜舞テ退出。自餘ノ勝負ヲハ不執云々。

長元歌合ノ日。輔親キヌサアリシテ簾入テ聞之。其歌ニ。

黒髪の色もかはらぬ戀すとてつれなき人に我そおひぬる

トイフ歌ヲ讀タリト思テ。勝負ヲ聞ニ參入也。而敵方ヨリ。

あふまてとせめて命のおしけれは戀こそ人の命なりけれ

トイフ歌ヲ講出ヲ聞テ竊退出云々。非敵之由ヲ存歟。

道業三位ハ帥大納言息也。八條ノ山荘ノ障子ノ繪ニ。歌合ニ令讀テ撰テ令書。作者經衡。家經。範永。經衡。頼家等也。經衡爲後座ニ撰入之由ヲ存不入。甚以遺恨。人上臈也。何事之有哉。家主ニ欲謝名籍テ。撰和歌之日。懐名籍シテ參向。於寝殿テ家經ト撰之。經衡寄ニ寄テ聞之ニ。家主云。秀歌何ヲ可入哉。家經云。無左右ソレヨリサキニ人コサリケリト云々。是經衡歌也。聞之不取出名籍シテ竊歸了云々。誠道有興事也。

袋草紙卷三

範永朝臣若之時於遍照寺詠月云。

住人もなき山里の秋のよは秋のひかりもさひしかりけり

于時四條大納言出家シテ住北山長谷。定頼卿以此和歌等送此大納言。此歌ヲ深感歎シテ。此歌表ニ書云。範永誰人哉。和歌得其體。範永聞此事不堪感。向定頼卿テ乞取後懸草テ。納錦袋爲重寶云々。此歌範永爲藏人之時。月夜ニ定頼參内。藏人一兩同車シテ向遍照寺。終夜遊覽之時所詠也。

鳥羽殿前栽合判者ハ堀川左府也。件日記云。匡房卿詠ノ萩歌可有御芳心之由云々。而其座ニ忘却シテ定劣云々。但判者無偏頗。件歌云。（アキカセニソヨクチトノミタエスシテイツラハヽルノチキノヤケハラ。）右行宗歌勝。（モノコトニアキノケシキハシルケレトマツミニシムハチキノウハカセ。）勝劣玄隔歟。執之條如何。匡房歌入ハ只此許也。古ハ皆如此。今人ハ稱嗚呼歟。行宗歌二首入。今一首ハ合公實卿論ニ又勝云々。三宮被仰云。匡房ニ合テ勝之條。是猶打美家之顏也云々。

於或所シテ人々歌讀ニ。右衛門尉季兼詠云。ウクヒスノハツネヤナニノイロナランキケハミニシムハルノアケホノ。住吉神主國基在此座。已秀歌被讀之由ヲ存。不安カリテ其後不食ニ成テ。無他導突知讀サテウスヽミニカクタマツサトミユルカナトイフ歌ハヨムナリ。其後人々ヲ招テ出歸鴈題ヲ取出此歌。人々褒譽ス。仍散消畏云々。

前大相國語曰。故東宮大夫公實爲近衛司之時。於範永山莊テ人々和歌ヨムニ被行向。先差酒テ出題。其間大夫實無佗事。額ナヽサヘテ沈思ニ入給。範永見之云。知無之入忍ナム秀歌不可有讀。有興云々。

右ハ如此世業雖之公達茜大夫ノ山莊ニ行向哉。

元慶ハ大山別當也。筑紫ニテ詠歌云。

我やとのかきねなすきそ郭公いつれの里もおなしうの花

而上洛之時。於山崎邊シテ下女ノ曰歌ニ唱之。元慶聞之甚淺云々。而雖後拾遺云。此歌ハ筑紫侍時。良暹吾歌トナンイフトキヽテ。是ハ古歌トコソ聞シカト云侍シカハ。七十法師ノ若上ニ讀タリシカハ。古歌ト申虚言ナラスト申テ。元慶カ歌トアレハ。撰者ニ問侍シカハ。實源律師筑紫ニアリシ時。元慶カマサシクヨメリシテミタルナリ、申ハ。其由ヲ存也云々。實源首通大貳ノ任ニ下向。良暹カ稱吾歌事ハ其儀也。良暹歌ヲカキテイクセリケルニヤ。元慶ハ僻事也云々。

南陸ハ海橋立也。藤親國宗也。爲見月實殿ノ南庇ヲ不着云々。康國カ池水ハアマノ河ニヤカヨフラント讀ハ於所テ詠也。月明夜歩行ニテ行向ヘルニ。夜フケテ人モ子タラント思ニ。實殿ノ南面ニ着座一人月ヲミテ居テ。于時相互ニ乘興詠此歌。曉更ニ歸ト云々。

加久夜長刀帯節信ハ数寄者也。始テ逢能因テ相互ニ有感。能因云。今日見參ノ引出物ニ可見物侍トテ。自懐中錦小袋ヲ取出。其中ニ鉋屑一筋アリ。示云。是ハ吾重寶也。長柄橋造之時鉋クツナリト云々。于時節信喜悦甚テ。又自懐中紙ニ裹物ヲ取出。開之見ニ。カレタルカヘルナリ。コレハ井堤ノカハツニ侍云々。共感歎シテ各懐之退散云々。今様人可稱嗚呼歟。

源經兼下野守ニテ在國之時、或者便書ヲ持テ向國府。不叶之間。無術之由ナントイヒテ。ハカ〱シキ事モセス。冷然トシテ出テ一二町計行ヲ。更ヨヒカヘシケレハ。不便ナリトテ。可然物ナト可賜カト思テ。ナマシヒニ歸來ニ。經兼云。アレミタマヘ。ムロノヤシマハ是ナリ。ミヤコニテ人ニカタリタマヘト云々。彌額立無有テ出云々。

河内重如ハ蒔田次郎判官代下﨟者也。而從吾高キ女ニ思カケテ。艶書ヲカキテ自持來奉之。其歌云。

人傳はあけもやすると思ふまにわれか使に我かきたるそ

女感歎シテ任身云々。

月夜ニハ河内國ヨリ徒歩ニスミノエニユキテ夜ヲアカスト云々。古ノ歌仙ハ皆スケルナリ。然者能因ハ人ニスキタマヘ。スキヌレハ秀歌ハヨムトソ申ケル。

能因ハ古曾部ヨリ毎年花盛ニ上洛シテ。宿大江公資カ五條東洞院家云々。件家ノ南庭ニ有櫻樹。賞翫其花云々。勤童丸ト云童一人相從之云々。公資ハ謂公仲ニハ當云。数寄給ヘ。スキヌレハ歌ハ讀トソ諷諌シケル。是公仲カ子有經所語也。

能因ハ凡小食云々。兼房朝臣許ニ逗留之間。如案不尋。後ニ飯ハカリヲ食テ過云々。兼房君アヤシミテ食物之時伺見之處。勤童丸ヲ召寄テ。彼懐ヨリ紙ニツヽミタル物ヲ取出テ加飯食之云々。如粉物云々。何等物乎云々。不審云々。

人々大原ナル所ニ遊行ニ各騎馬。而俊頼朝臣カ俄ニ下馬。人々驚問之。答云。此所ハ良暹カ舊房也。イカテカ不下馬哉。人々感歎シテ皆以下馬云々。是能因之先蹤歟。能因兼房車後ニ乗テ行之間。二條東洞院ニテ俄下テ數町歩行。兼房驚問之。答云。伊勢御家跡也。彼御前栽結松于今侍。イカテカ乍乗可過哉云々。松木ノ末ノミユルマテ不乗車云々。

件良暹房于今在云。或僧語云。障子良暹カ所書付之歌未消。

山里のかひもあるかな郭公ことしもまたて初音きゝつる

此歌在後拾遺定頼卿歌ニ末同カ。何レカ先ニ詠哉。舊宅ノ下馬ハ尤可然。竹田大夫國行ト云者陸奥ニ下向之時。白川關スクル日ハ。殊装束ヒキツクロヒムカフト云々。人問云。何等故哉。答云。古曾部入道ノ秋風ソフクヤ白河ノ關ト讀レタル所ヲハ。イカテカケナリニテハ過云々。殊勝事歟。

能因實ニハ不下向奥州。為詠此歌。竊ニ籠居シテ下向奥州之

由ヲ風聞云々。二度下向之由アリ。於一度者實說。書八十島記。
長元歌合之時。經信卿ハ生年十八也。爲參河權守。令見經長卿爲藏人辨。件ノ歌合等ヲ爲評定。以經長四條大納言長谷ニ遣之。經信所望シテ乘經長車後ニ參上也。納言云。彼人何料光臨乎。經長云。爲承御評定之趣。所望テ參上之由。納言有興之由ヲ示。仍件判定詞等ヲ具以聞之云々。
經信卿歌云。
大ゐ川岩浪たかしいかたしよ岸の紅葉にあからめなせそ
後拾遺ニ入之。而經信依禮部ニ乞請テ出之。無下ノ寄歌也。爲後見有恥。枉テ可止云々。仍除之。而後年俊頼朝臣入金葉集如何。
江記云。往年有六人黨。範永。棟仲。頼實。兼長。經衡。頼家等也。至頼家者彼黨頗思低之。範永曰。兼長常有劉伶境之疑。(此經衡所怒也。)
又云。俊兼曰。頼家又稱此由。爲仲後年自奥州進歌於頼家。件歌心所遺之人君與我也云々。頼家怒曰。爲仲當初不入於此六人。今稱君與我生遺之由不安事也云々。
頼綱朝臣ハ遇藻因云。當初能因住東山之比。人々相伴テ行向清談。能因云。我達歌ハ所好者也云々。又云。能公秀歌ハ五首也。而相加能因歌ハ六首云々。件歌ハ。
郭公きなかぬ宵のしるからはぬるよも一夜あらまし物を
予撰之。彼五首歌何哉。若貫之カナク一聲ニアクルシノヽメ。公忠カ山路クラシツ。兼盛カ暁カケテイマソナクナル。實方カクラハシヤマノ郭公。道綱母ノミヤコ人子テマツラメヤ郭公。是等歟。尤不審。
故人語云。兼盛ハ和歌ヲ得度ニ沈思云々。而元輔難之。如此案ハ不可堪。予ハ任口詠之讀ト思時雖深沈思云々。
經信卿歌云。
沖津風ふきにけらしな住吉のまつのしつえをあらふ白波
當自歎云。古今ニ。
すみよしの岸を秋風吹からにこゑうちそふる沖津白波〔六帖〕
此歌ノ七間四面ノ寢殿ノ南面ニ御簾ノ所々破中ニ。何宮ナト申テ御座サムニ參シテ。中門廊ヨリ入テ。寢殿ノ階間ニ參テ給官仕事ハ此歌也云々。
長房朝臣云。秀歌一首持ハ讃岐。二首持ハ上手。三首ハ難有事也。而吾ハ三首持云々。所謂。
霜またき八重さく菊の丸籬に見ゆるに霜のおけるなりけり
月影は山のはいつるよひよりも更行空そてりまさりける
貴人云。是ハ後冷泉院御時。霽月ト有御ニ。出月題所詠也云々。年來□院女房宮ニテ。小時ニ任テ近衞使テ還時。□院女房許歌云。

年を經てかけし葵はかはらねとけふのかさしは珍しき哉
公實卿歌云。
ふもとをはうちの川霧たちこめて雲ゐにみゆる朝日山哉
自歎云。是ハカハキリノフモトヲコメテタチヌレハトイフ歌ヲ盜也。歌ハ如此可盜也云々。誠以有興云々。
朗詠集江註云。春霞カスミテイニシ隔金ハ。註云。或人云。躬【躬恒一本作忠岑】恒于時八月也。瀧口戸参。簾侍竹臺下時。秋雁適鳴。有勅令獻和歌。三反唱春霞字。人々嘲哢。受躬恒貫之瀧口戸稱云。到佳境云々。次讀了人々感。今案。古集爲佗歌可召云々。不審侍。
俊頼歌云。
みつの海とおつる泪は成にけり戀しき人もなみと聞しに
故公實卿云。ミツノウミノヽ字ハ。ヲソロシクヲケルモノカナ。後生ハ嘲置字ヲト云々。
故將作許ニテ左京被詠歌云。
あふと見て現のかひはなけれ共はかなき夢そ命なりける
俊頼當座感歎云。人ハウツヽニトソヨマム。ノヽ字油瑩ノ上ニハナアフラヒク所也トテ深感之云々。詩歌ハ只一字也。
後拾遺ニ兼盛歌云。
あさちふの秋の夕暮なく虫はわかをしたにものや悲しき
我等ハアサチフニトソヨマム。ノヽ字甚深ノ字歟。
公實卿云。長能歌。
霰ふるかたのゝみのゝかり衣ぬれぬ宿かす人しなけれは
道濟歌云。
ぬれ〳〵も猶かりゆかん箸鷹のうはけの雪を打拂ひつゝ
是ハ武忠信貞也。長能歌ハ武忠カ謀ニツキ〳〵シククチワキノコヒテ。體ヲセメテヲトリテ出來ニ。道濟歌ハ信貞カマコトニヨクテ。ウチステタルヤウニテ。ノサヒマテサシアユミテ出來樣也。無勝劣云々。但此歌ハ相挑テ四條大納言ニ申ケレハ。道濟カ歌ナナム被感歎之由申侍如何。歌仙モ晴時歌ヲ人ニ乞常事也。花山院歌合時。高遠卿令讀好忠。永承ノ時相撲申請堀川右大臣歌。清正任紀伊守之後。申還昇セル歌。フケヰノウラニヰルタツノ。忠見ニ所令讀也。見後集。匠作歌無清正集。爲時ハ當初道濟ニ詩ヲ乞請。而後年ニハ爲時道濟一雙ノ文士被番云々。
眞如院僧都公圓ハ定頼卿孫也。ワカヽリケル時。錦織ノ僧正行觀許ニ侍錦織八郎ト云童ヲ得意ニテ侍ケリ。彼童歌ハ不讀ケレト。此僧都ノ境節ニハ相扶ケレハ。歌讀ヲホヘアリケリ。僧都三井寺ニ御座之間。人々相サソヒテ日吉三位許行ヌトキヽテ。定有和讚ト。イカヽスラムトイトヲシクオホエケレハ。日入ホトニ三井寺ヨリ歩行ニテ日野ニユキテ相問ニ。コノ常緣ニイテヽ〻ヽスミケルニ相合テ相尋之處ニ。山家秋月ヲ可詠之由侍ニ。凡思ヤルカタナカリケルニ。今ナム心

ヤスキトテ。悦テサリケナクテイリヌ。于時此歌ヲ詠テ竊ニ令取テ歸云々。

いか斗さひしからまし山里の月さへすまぬこのよゝせは

當座有褒。彌擧歌仙名云々。

故證観法印語云。三井寺ニ有増珍ト云物。忠命法橋之親弟也。少和歌ニ不堪也。而思重代テ常ニ以受歌心ニククツクル。于時同朋ノ中ニ有凶人者。此事ヲ令露顯支度テ。兼日ニ出題催之。如先々攝受歌テ參衆會所。臨時結構僧云。先日題悪之故。今夜可改題云々。各承諾。時術盡テ大不請シテ云。署々ニワスルキミカナトテ起座逐電。萬人解頤云々。

増珍ハ無止事學生。被請野干者也。人來云。其日可修佛事。導師可令渡給云々。増珍承諾。期日ニ敎所ニ行向テ。車中ヨリチリテ入堂中テ着座。堂莊嚴如法。但人僧膳ヲ出從簾中。少怪思テ不食之。先登高座修次第事之間。頁神分之時御明之光黄ニ變ス。簾中ニ有物忿氣。彌成怪テ不委シテ下ッ。布施又簾中ヨリ出。綾羅錦繡之類也。珍皈房見之。皆牛馬骨也。于茲知。野干所爲。後日令見彼所ニ無人家。空地ノ草深處也。佛經并佛具等又如馬牛骨尿也。増珍爲耻辱秘之云々。但神分時燈光變。簾中物忿之條尊事也。

俊頼歌云。

信濃なるきそちの櫻咲にけり風のはふりにすきまあらすな

是ハ信濃國ハ極風早キ所也。仍スハノ明神ノ社風祝ト云物ヲ置テ。是ヲ春ノ始ニ深物ニ籠居テ祝シテ。百日之間尊重スルナリ。然者其年凡風閑ニテ爲農業吉也。自ラスキマモアリ。日光モ令見ツレハ風不納云々。其意也。是ハ能登大夫資基ト云人俊頼ニ語云。如此事承之歌ニ讀ト思也云々。俊頼答云。無下ノ世俗事也。如此事更々不可詠。不便云々。仍存其由之處後日詠之。尤腹黒事歟。五品後悔云々。

或人語云。先年人々詠和歌。而其後公片方ニ寄テ沉思。染感氣テ高聲ニ詠云。メサマシキマテチルモミチカナト云々。顯仲入道聞之。傍ニアル馬助某和歌難成之由ヲ歎ニ敎云。早取此句。元句ヲ可構云々。馬助如敎訓元ヲ構テ獻之。披講之處。馬助依下﨟先講此歌。于時金吾有大興違之氣。入道微笑。其後講金吾歌。聞之入道云。馬助コソ參寄ラレニケレト云々。金吾彌有不請之氣云々。可用意事歟。

人ノイト不知古歌ナトハ可讀事歟。無見知テ入撰集ナトハ吾物ニ成。後拾遺ニ永胤カ。イツカタヘユクトモ月ノミエヌカナタナヒク丶モノソラニナケレハトヨメル歌ハ貫之歌也。

天の原たなひく雲のみえぬよは行月影そのとけかりける

又同集ニ良暹カ春ノミヤ人ウチムレテトヨメルモ。一條院御時。殿上人共月見中ニ或人選歌云。

うらやまし雲の上人うちむれておのか物とや月をみる覧

金葉集ニ顯仲卿ノ鳥ト丶モニソネハナカレケルト云句モ一條攝政集歌也。又今右府入道ノ心チサヘモツヽシツルカナト云歌モ。中比ノ人歌也。入道打聞。又同集云。永縁僧正ノキクタヒニメツラシケレハ郭公ト云歌ハ。隆資入道カ四要講ニ高判官代政業カ所詠也。而永縁同詠也。政業數月之前ニ獻之。故爲（元）彼人歌。而永縁許云。彼人歌ハ有其數。予カ歌ハ是計也。加之烈講師之中。何無會釋哉云々。結衆僉議シテ隨宜永縁歌。永公拭感涙云々。就中秀歌也。政業カ不運歟。詞花集ニ安藝カヨメル。コノタヒハカリカナシヤハナシト云歌又予歌也。一字不違也。被用安藝歌。爲政業之跡。甚以難堪歟。

某所御屏風詩ヲ匡衡以言奉之。而匡衡定有秀句事ヲ以言深不審ス。稱生侍ヲ會テ匡衡家女房ニ竊語云。近日殿ノ所召何事哉。女房云。常ニ物ヲ案被書付之外無他事云々。以言云。件草若被破弃ルアラハ取テ可給。後日女房草案ノ破棄ヲ與之。以言讀之見ニ纔有一句。晩寺鐘聲渡水來。以言作上句云々。寒谿樹色埒霜變。以之入彼屏風詩中。又匡衡上句云。孤舟掉影穿煙去云々。同爲件屏風詩。世以存作合之由。以言上句作勝由云々。

朗詠集江註云。三壺雲浮。七萬里之程分浪。　註云。都良香神仙策也。　良香私通彼家女。善縄作云々。竊取件破却紙。開讀所作詩云々。予案之。以言事此物語ノ轉々歟。將逐此跡構事歟。江相公王昭君詩注云。爲澄景作。藏置枕筥中。而殿上人之作文時。澄景稱王昭君可作之由。人々得意。各開筥得之云々。

菅輔昭爲宇多院藏人之時爲試。假賦隔花遙勸酒詩。以輔昭爲序者。而疑嚴閣之助座。閑院不令往反人。件序落句云。添於李門之浪二年。朝恩未及。踏蓬壺之雲十日。夜飲已酣云々。世以稱秀逸。而文時卿云。踏蓬壺之雲一日ト可書。折指テ計ケル者哉。文時卿尙齒會序云。少於樂天三年。猶已衰齡也。實雖不及三年。付文花書之云々。如此事和歌ニモ可用意也。

後拾遺嘉言歌云。

梅のかをよはの嵐の吹ためて槇の板戸をあくる待けり

經信卿難云。ヨメリシ人ノイヒシハ。ノキニアラシノフキタメテトコソキヽシカ。ヨハノアラシノフキタメテ荒凉ナリ。又アクルハヨノアクルニソヘムトニヤ。ワルクナリニタリト云々。尤有謂事歟。凡此集ニハ歌ヲ多直云々。隆經朝臣立春歌モ。本ハハルコトニソラノケシキノカハラヌハトアルヲ。野ヘト被直タリ。如此事多侍。ヨクナリタルコトモアリ。コレハイカヽ可待カラン。

共時御屏風歌攝衣所ニ集盛詠。

コロモウツヘキトキヤキヌラム

紀時文作色紙形ヲ書之時抑筆ヲ云。見在ニ搢衣ヲミテ。衣可打時ヤキヌラムト詠之條如何。仍被問兼盛之處。申云。貫之延喜御時御屏風駒迎所ニ。イマヤヒクラムモチ月ノコマト詠。有此難歟如何。于時時文閉口云々。

住吉神主國基良暹カ歌ヲ難云。マクリテト云詞ヤハアルト云々。良暹云。ヤシホノコロモマクリテニシテ如何。僻事也。國基云。紅ニハマフリテト云事有。ソレヲ書誤也云々。良暹暫案テ又云。

かさこしの嶺よりおるゝ賤男のきその麻衣まくりてにして

ト侍ルハ。是モマフリテヲ誤歟云。國基閉口。

仁和寺一品宮(恕子。)參詣天王寺之時。御共人令參住吉詠和歌。俊頼君歌云。

幾かへり花さきぬらん住吉の松も神代のものとこそきけ

故將作當座ニ難云。マツハ神代ノト可侍ト云々。俊頼無左右答。予案之。共以有理有興。

萬葉集云。〔新〕田部親王勝間田池ニ遊テ御意ニ有感緒。還不忍。於〔時婦〕語婦人曰。今日遊行見勝間田池。水影濤々。蓮華灼々。何怜斷腸。不可得言。乃婦人作此戯歌云。

かつまたの池は我しる蓮なししかいふ君かひけなきかと

如此ハ彼親王無髭之由ヲ人以存也。而故證觀法師云。如歌ハ彼親王以外大髭也。是ハ汝ヲ無髭人ト如云也。勝間田ニハ無蓮。已虚言也ト讀也云々。甚深義之由。人々所感歎也。和歌者有興事也。無止事人及帝王ニモ達事ヲ其道也。所望申文若ハ名籍ニモ制之先蹤也。源重之小一條大將(濟時。)奉名籍トテ制歌。

みちのくにあたちのま弓引かとて君に我身を任せつる哉

梨下座主明快若侍時。蓮仲法師イカテ志ノヨシヲ欲達之間。不思懸所ニテ契申テ。悦之餘ニ進名籍トテ制歌。

嬉しさに命絶ぬる物ならはなからんよにもこのな忘るな

座主返事。

誰さきとしらぬ命に縮めてはそらと人になりもこそすれ

予追先蹤叙位之時。故鳥羽院中文ニ制歌。

やへ〱の人たにのほる位山老ぬるみにはくるしかり鬼

是有募申事。四位ニ度々漏、、昆弟等ハ至四品。無聽事ヲ思テ所詠之。實有御感。其後叙四品。仰云。重代者カタホナル事タニアリ。尤有興之歌體雖別樣。御哀憐之至歟。此所望之始ニ仰云。是ハ歌讀明鏡。爲此道宗者也。尤可然云々。其後空漏云々。又取御氣色之所ニ。和歌凡事忘却申云々。如此毎度和歌出來之故。乍恐所進覽也。末代勝事也。世以珍重之由謳歌云云。又新院御給ヲ申ニ度々漏シカハ。十二月廿日此事次ニ奏聞歌。

位山谷のうくひす人しれす音のみなかれて春をまつ哉

明年御給所給也。競望人有其數。而仰云。依優和歌給滿輔云
々。何面目如之哉。雖不堪事。依此道度々有面目。是多年稽古
之所致歟。愚詠百首歌。
梅の花同しれよりはおひなからいかなる枝の咲おくる覽
ト云歌ヲ故北政所令褒給テ。前頭行上ニ御給ニテ叙從五位上。
次新院ニ奏歌。叙正五下。次依申文歌叙四位。三箇度加級皆
以勸賞也。二世難忘之故。聊記付之。此度加級之度。殿下之參
河君ノ云送タル返事云。
梅の花かぬれぬ枝と思ひしをあまねくめくむ春も有けり
平兼盛申文奥ニ書歌。
澤水におひゆく影をみる鶴のなくね雲ゐに聞へさらめや
藤原國行除目申文制歌。
徒に成ぬる人のまたもあらは云合さてそれをはなかまし
堀川院御時。息男俊重式部丞所望申文ニ制歌　俊頼朝臣。
日の光あまねき空のけしきにも我身ひとつは雲かくれ侗
返事奏　　宣旨周防内侍。
何か思ふ春の嵐に雲はれてさやけき影は君のみそみむ
此度拜任云々。
又中原範政申文ニ制歌。
さきにつむなけきは下に埋れてけす（下﨟）の思ひは苦しかり鬼
平兼盛駿河守之時。彼國女夫ノ伊豆國ニ妻ヲマウケテ不來
ノ由ヲ訴ヘケル申文ニ書付。
横はしる清見か關に關すゑていつろふとは永くとゝめよ
于時重之陸奥ヨリ上洛之間。此所ニ宿。女カハリテ和之。
關すゑぬ空に心の通ひなはみをとゝめてもかひやなか覽
肥後國ノ遊君檜垣老後ニ落魄者也。家集云。住所モナクナ
リテ。水クムホトニナリテ。桶ヒキサケテイツルニシモ。國
守神拜ニイデタマフミチニサシアヒタレハ。目サトナルモ
ノミツケテ。イカテカクトミトカムレハ。守ナニソトヽヒケ
レハ。名タカキ檜垣也ト人ノイヒケルニ。マヘニヨヒツレ
ハ。ハツカシケレト。カクレトコロモナキニ。桶サシヲキテ
居シカハ。イカテカクハナリシソトアルニ。オモヒワヒテ。
老はてゝかしらの髮も白川のみつわくむまて成にける哉
シラカワヽ件ノ所ニ有河也。如後撰ハ大貳興範ニアヒテ詠
之云々。
壬生忠見幼童之時。内裏ヨリ有召。無乘物テ難參之由ヲ申
ニ。而竹馬ニ乘テ可參之由有御定。仍進此歌。
竹馬はふしかちにしていと弱し今ゆふかけにのりて參覽
忠見ハ貧敝ニテ住田舍者也。而天德歌合之時。有勅被召上テ
朱雀門ノ曲殿ニ宿ス。田舍ノ裝束ノマヽニテ。柿ノ小袴衣ヲ
于今持テ懸肩云々。此時事ヲ申家集云。攝津國ニ年來身ヲシ
ツメテ籠居タルヲ。其時帝聞召上サセ給テケリ。ユフサリ藏

人所ニ候テマカリイテニケルアシタニ。俊頼朝臣シテ仰給ケル。

みしかとも何共しらす難波潟浪のよるにて(に集)返りみしかは

御返事進。

住吉のまつと仄に聞しかはみしこ(ち集)しちを(しぬ集)や夜かへりけん

又云。先帝御時凡河内躬恒候ケン例ニテ。御厨子所ニ候ヨト仰事アルナ。其後宣旨ノチソケレハ奏セヨトナホシクテ蔵人許ニ。

櫻花たかき梢のなひかれはかへりやしなん待わひぬとて

御返。

待わひてかへらんものかきしかけの山の櫻は雲ゐなり共

サテ宣旨給テ御厨子所ニ候テ進ル。

年をへてひゝきの灘に沈む舟波のよ(陸奥)するを待にそ有ける

播磨ニモカヨヒケルヨシミエタリ。伊豆國ニ下向之時。ヨシアルウカラメノイヒタル。

音にきゝてめにはまたみぬ播磨なる響の灘ときくは誠か

返事。

年ふれはくちこそまされ橋柱昔なからのなたはかはらて

童名ハ名多也。

橘爲仲朝臣赴任國奥州之時。右大臣殿ヨリ裝束給ニソヘタマヘル。

玉さかに思も出る時もあらはこれそきなれん物とみよとそ

驚ナカラ急参テ。式部丞廣綱シテ奉御返事。

みなれたる心ならひにたまさかも思忘るゝひまや有へき

是見家集。御返事可持参事歟。

貫之集云。世中ノ心細覺テ。常ノコヽチセサリケレハ。源公忠朝臣許ニ此歌ナナムヨミテ送ケル間ニ。殊ニ病ニナリテナモクナリニケリ。

手にむすふ水に宿れる月影の有かなきかのよに社有けれ

カヘシセムトオモヘトモ。イソキシモセヌホトニウセニケレハ。キヽテトロキテアハレカリテ。彼送歌ニ返讀加ヘテ。オタキニ誦經セサセテ。河原ニテヤカセケルトソ。

濱コソト云童ノ四十九日ニ。誦經文ニ書テ送歌。慈心上人。

押てるやよさの濱社戀しけれ泪をよするかたの(みイ)なけれは

(清家。)

横川覺超僧都導師ニテ和之。

世中に有てかひなき我かみをかく惜まるゝ人にかへはや

或女房ノ佛供養ノ導師ニ實源律師請タルニ。事ノ不叶ケニテ。人ナムトモミエサリケレハ。如形申上テイテムトスルニ。簾中ヨリ硯筥ヲシイテタルヲ取テ。敢見ケレハ有歌一首。

玉筐かけこに塵もすえさりしふたおやなからなきみとをしれ

後朝送和。

けさこそは明てもみつれ玉筐ふたよりみより泪流れて

同律師攝州ナル下萬ノ堂供養ノ導師ニ請タルニ。說法ノ間雜人共サマ〴〵ノ聲ニマシリアヒテ。說經モ聞ユヘクモアラサリケレハ。說經ヲトヽメテ高座上ヨリ詠ケル歟。

津國のあしかり聲の高けれはおなかまと社云へかりけれ

此後歎々聲一切ニ不聞。難波津ノ家風ニテ聞知也。

雲居寺上人瞻西或所ニテ說經之間。雨モリテ袂ニカヽリケレハ。高座ヨリヲルトテ。袂ノヌレ打ハラヒテ詠云。

古しへも今も傳へて語るにもゝりやは法のかたきえけれ

惠心僧都ハ和歌ハ狂言綺語也トテ不讀給ケルヲ。惠心院ニテアケホノニ水ウミヲ眺望シタマウニ。ヲキヨリ船ノユクヲミテ。或人コキユク舟ノアトノシラナミト云歌ヲ詠シケルヲキヽテ。メテタクヘイナ。和歌ハ觀念ノ助緣トナリヌヘカリケリトテ。其ヨリ讀給ト云々。サテ廿八品幷十樂歌ナトモ其後讀給云々。

俊賴君云。折節ニカナヒタル歌ヲ詠ハ。ヨムニハマサレル也。先年前齋宮伊勢ヨリ歸京之時御供ニ候。ヨトノソタリニ御船付テ。人々不寢アカスアヒタ。ムカヒノ市ニ郭公一聲ナキ行。萬人斷腸。自御船ハ女房聲ニ竊ニ。ヨトノワタリノマタヨフカキニト詠タリシ。臨時メテタカリシ者也。人々感歎シテ今ニ難忘云々。

範永朝臣歌ニハ谷鶯一聲ソスル。染肝膽歌。以之後人爲第一秀歌之由。雖案心中所存也。而余人必シモ不然之氣也。而或人語云。古老傳語云。範永云。我身ノ今生秀歌ハ此歌也ト稱云々。愚意添頭彼意。深所自愛也。

時棟語云。忠文民部卿爲大將軍下向之時。宿駿河國清見關。軍監清原滋藤夜詠曰。

漁舟火影寒燒浪。　驛路鈴聲夜過山。

將軍拭淚云々。　見江記。

橘太君榮職ハ內記大夫取任子。古曾部入道之孫也。管絃和歌仙經讀歌唱末代之好士也。十月許下向武藏之路ニ宿ヲ尋テ。或家ニ菊花開敷シテ尤多情。雖家狹付花艷テ宿此所翫花。入夜法華經一卷有誦之聞。ヲクノカタヨリ人來テ終夜聞之。及曉八卷讀了程ニ。此人申還戶ヲ叩。〔[illegible]〕橘アヤシムテ問之。聲ニ付テ詠云。

古へのその姿にはあらねとも聲はかはらぬ物にそ有ける

トイヒテヲクノカタヘ歸入。橘太周章テ無左右云暫物可申。于時女立歸ヲトス。橘太ヲモワク。先返歌之後可有左右。而無計器。仍無何事詠云。

古へのその姿にはあらねとも聲はかはらぬ物としらすや

其後言談開子細ニ。壯年ノ當初所相語之女物也。爲或國廳官

妻城下之由雖聞。不能子細者也。而相互爲白頭。不慮ニ今此處談舊事。拂曉去云々。尤有興事也。此返歌之體一說歟。於非好士難存事也。橘公舊好士ニテ相稱。尤有興之。後生爲付心。聊記置之。

内匠頭清則於或所言談之次ニ。故可參拜之由存知之處ニ。乍思自然罷過者也。予云。何等之故乎。内匠云。清則ハ石見守國房之外孫也。彼朝臣和歌之間。(此詞疑ラクハ落字乎)聊故實ヲ所書置。先可見合也。内々不見ハ自加難事出來テ。雖秀逸歌成瑕瑾者也云々。必參上テ可承仰也云々。予云。御平給如何。内匠遙巡(逡巡)シテ含咲矣。

或人語云。美濃守知房所詠之歌。伊家(辨。)聊感歎云。優讀給ヘリ云々。知房腹立云。予ハ非詩事ハ非歟。而和歌頗劣伎。如此被仰云。尤奇怪也。自今以後不可讀和歌云々。優詞可用意事歟。

中院右府入道許ニ參。清談之次曰。故將作常被申云。於物肝心ヲ可見也。後撰ユハ。ナキナソト人ニハイヒテアリヌヘシ心ノトハヽイカヽ答ン。又。ヱニカケルトリトモ人ヲミテシカナヽヲナシトコロヲツネニトフヘク。是等彼集肝心也云々。又云。歌讀ハ萬葉ヨク取マテ也。是ヲ心得テヨク盗ヲ歌讀トスト云々。

京極太殿ノ御詩。宇治ニ有白河院御幸。依餘興不盡。今一日可逗留之由ヲ被申。而明日有還御ハ花洛當大白方。宇治從京當南。故爲之如何。殿下懷遺恨。而行家朝臣申云。宇治ハ不當花洛南。喜撰歌云。

わか庵は都のたつみしかそすむよをうち山と人はいふ之

然者何憚候哉。殿下以此由奏聞。院仍還御延引。殿下甚有感氣。人又爲美談云々。或人云。喜撰カ住處ハ宇治ニトリテ東終云々。尤可當巽方歟。

新院位御時。於中宮(皇嘉門院。)御方。殿上人等有小弓事。以物不書造紙ヲ被出懸物。其表紙書云。

アトナキコトノアトヽコソミレ　元忘却。

コレヲミテ思ヒモ出ヨハマチトリ

是殿下御作云。人々有不審之氣。而資仲卿云。是拾遺抄侍事歟。小野宮右大臣幼童之時。馬内侍許ニ渡テ小弓ヲ射給ニ。物不書造紙ヲ出懸物。而翌日清愼公送歌云。

いつしかとあけてみたれは濱千鳥跡あるとに跡のなき哉

若此意歟ト云々。曩祖事覺悟之條有興之由。人々感歎云々。如此事臨時難覺悟事也。

則詠江註云。四條大納言六條宮ニ被談曰。貫之歌仙也。宮曰。不可及人丸。納言曰。不可然。爰書秀歌十首。後日被合。八首人丸勝。一首貫之勝。此奇特云々。(ナツノヨハフスカトスレハホトヽキス)自此事起卅六人撰出來歟。件撰有不審。所謂深養父。元方。千里。定文等不入之。此人々豈劣賴基仲文元眞

等類乎。件撰中ニ秀逸歌云。

朝日さすみねの白雪むらきえて春の霞はたなひきにけり

此歌腰句人々相分論之。或云。未消之心也。又云。頗消之意也。好忠等論云々。是見江注。予案之。未消之儀不甘心乎。

和歌ハ好テ有無益事。大江公資大外記所望者也。僉議之時。諸卿皆是拜任宜之由。而小野宮右大臣云。懷抱相撲シテ秀歌案之間。公事闕如歟云々。諸卿解頤。依此空不拜任云々。以相撲爲妻之比也。公資依爲相撲守號相撲。本名ハ乙侍從云々。

昔ハ獄前ニ栽菊云々。藤六輔相(中納言長良孫也。)過獄前。于時獄囚一人走出テ。抱之入獄門內云。朝ノ歌仙之由承之。爲題此菊可令詠一首云々。輔相即詠云。

人や植し已やおひし菊の花しもとにうつろ色のいた(たイ)さよ

獄囚感歎シテ免之云々。甚以無益歟。

和歌ハ昔ヨリ無師。而能因始長能(伊賀守也)ヲ爲師。當初肥後進士トイヒケル時。モノヘユクアヒダ於長能宅前テ車輪損了。仍車取遣之間。入彼家テ始面會。雖有參仕之志。自然過之間。幸有如此事。其由ヲ談相互契約。能因云。和歌者何樣可讀哉。長能云。山フカミオチテツモレルモミチハノカハケルウヘニシグレフルナリ(ラシイ)。如此可詠云々。自此爲師。仍玄々集ニ多入長能歌也。予案之。件歌ハ嘉言歌也。仍以後進歌爲證哉。若口傳僻事歟。

賀陽院一宮歌合ニ能因歌云。

春霞しかの山こへせし人にあふこゝちするはなさくら哉

時人不得意之由ヲ稱云々。或人問能因云。此御歌世以爲不審。其趣如何。能因無答。仍興遊シテ起座退去也。時能因竊云。故守(伊賀守也)ハ歌ヲハカヤウニヨメトコソアリシカトツフヤクト云々。稱故守長能也。

文時卿云。

ひもろきは神の心にうけつらん比良の高根にゆふ髮せり

順問云。ユヘ如何。文時順主不知ケリナトテ無條答云々。

白河院於鳥羽殿九月十三夜池上月和歌ニ。序者經信卿歌云。

照月の岩間の水に宿らすはたまゐる數をいかてしらまし

無池字之由世以傾之。俊頼語云。此由經信シカイフナリニヤトテ無他答云々。

同和歌御製云。

池水にこよひの月をやとしもて心のまゝに我ものとみる

是ハ女房堀川殿(大宮右府(大イ)女。)歌也。而內々ニ今日和歌イカヽト御尋之處申此歌。已秀逸歌也。仍仰云。汝歌ニ不似合。可爲我歌トテ御製公云々。

此度歌ニハ有不思議事共。高松宰相公定ハ無月歌ヲ詠ス。世人稱無月宰相。

又故治部卿能俊卿歌云。

池水に影をうつして秋の夜の月のなかなる月をこそ見れ

是ヲハ號天變少將云々。于時少將也。

故兵衞佐入道顯仲白河殿御會ニ柳臨池水云題ヲ詠云。

かつまたの池も綠にみゆるかな岸の柳のいろにうつりて

時人號勝間田兵衞佐云々。件池水ナクテ。舊ク範永等池ニハイヰノアトタニモナシトヨミキタルヲ如此詠故也。

先達モ誤事アリ。良暹ハ郭公ナカナクト云コトヲ長鳴トイフ心ト存也。於俊綱朝臣許五月五日詠郭公歌云。

宿近くしはしなかなけ郭公けふのあやめのねにも較へよ

懷圓嘲哢云。ホト丶鳴ハシメテ。キストナカムルニヤト云々。

又良暹於或所語云。一日江州ヨリ上洛之間。於會坂時雨ニ逢。石門ニ立入テカシコクヌレスト云々。是優興儀歟。而懷圓問云。關石門ニハ何樣ニ被立入哉。門侍歟云々。懷圓咲テ。其ハ石ノ廉テ侍。不知給歟。不便々々云々。良暹閉口。懷圓度々嘲哢者也。但爲仲歌ニ。(アツマチニコトツテヤセシホト丶キスセキノイハカトイマソスクナル)如此者石門歟。又彼失。

近藏人君意馬ト云モノアリテ好士也。鷄冠木ヲハ紅葉ト存テ。於或所モミチノモミチトヨミテ被咲云々。

又能登大夫資基ハヒコホシツメトイフコトヨミテ被鼓動。

如此事能々可尋知也。

俊頼朝臣抄物云。

うくひすのかひこのなかにほと丶きすひとりむまれてしやか父にゝてなかすしやかはゝにゝてなかすうのはなの

丶丶丶丶

此歌句違亂。若是長歌ノ旋頭歌歟云々。予見數本ニ亦其句不違亂如何。件歌在彼集第九卷。家持歌也。

鸎之生卵乃中霍公獨所生而己父爾似者不鳴己母似而者不鳴宇能花開有野邊從飛翻來鳴令響橘之花乎居令散終日雖喧聞吉幣者將爲遐莫去吾屋戶之花橘爾住度鳥

如此讀ハ全不違亂。彼人ニ和漢之才非同日之論。定有存歟。非顯短。唯爲不審書置之。後人可評定歟。

高倉一宮歌合。歌人。左大貳三位。江侍從。伊勢大輔。出羽辨。小辨。相摸也。右資業。兼房。家經。範永。能因五人也。今一人ノ所ヲ兼長經衡競望之。而兩人入者女房一人不足。又一人ヲ抽入者。於同者有怨望。又共ニ不入者女房一人可除。宇治殿思食煩。于茲堀川右府以加賀左衞門任テ吹擧。無許容。是未至之故歟。仍以兼長經衡等有試。當座ニ賜題云。水邊欵冬。兼長歌云。

いかなれは岸にやへさく欵冬のひとへに池の底にみゆ覽

經衡歌云。

池水に咲かゝりたる歟冬をそこにしつめる枝とみるかな

右府判云。持也。是入腐人ナ。女房不足之所ニ入左衛門之志云々。滿座兼長時ト思ヘリ。然間兼長服暇ニ成テ遂人經衡。

昔事能有清撰歟。

曾禰好忠三百六十首歌云。

なけやなけ蓬か杣のきり／＼す過行秋はけにそ悲しき

長能云。狂惑ノヤツ也。蓬カ杣ト云事ヤハアルト云々。

曾丹ハ丹後掾也。而始ハ號曾丹後掾。其後ハ號曾丹後。末ニ華薦テ號曾丹也。此時好忠歎云。イツソタトイハレンスラムト云々。

花山院御時。中納言義懷ハ外戚。惟成辨ハ近習之臣ニテ。各執天下之權。而院竊出內裏幸花山テ出家。兩人聞出テ追參上。院已爲比丘。惟成本鳥ヲ切。又義懷ニ語云。在外戚テ執權御座ツルニ。更爲外人テ世間交衆。ミクルシカルヘシ。早出家。義懷存之由ヲ稱テ同出家。依人教訓テシタレハイカヽト世人思ケルニ。始終尊テ過云々。飯室ニ住テ詠歌也。

みし人も忘れのみする古里にこゝろなかくもきたる春哉

惟成ハ後ニハ賀茂祭日ツサツノモチテ一條大路ヲ渡云々。

入道中納言顯基ハ後一條院ノ近習之臣也。而長元元年四月十七日院崩御。同廿二日奉送上東門。此日於大原出家。生年廿七。時人落淚云々。其後横川籠居之比。上東門院ヨリトハセタマヘリケレハ奉就。

よをすてゝ宿を出ぬる身なれとも猶こひしきは昔之けり

院御返。

ときのまも戀しきとの慰まはよは二度もそむかさらまし

此人ハ本自道心者云々。文集詩云。古墓何世人。不知姓與名。化爲道傍土。年々春草生。尋常詠之云々。又常云。配所ニテ月ヲミハヤト云々。

御堂大井河遊覽之時。詩歌之船ヲ分テ。各被乘堪能之人。而御堂被仰云。四條大納言何船ニ可被乘哉。大納言云。可乘和歌之船云々。此度チルモミチハチキヌ人ソナキトハヨムナリ。後日大納言云。イツレニ可乘ソト被仰シニコソ。ミナカラモ驕心セシカト云々。又有後悔。乘詩船テ是許ノ詩作タラマシカハ。名ハアケテマジト云々。凡オホエアル人也。

一條院御時。寛弘二年上表請辭納言。藏人右中辨經通奉　勅就第返表。將仰殊加一階之由。納言月來有愁不出仕。今上表。仍殊優也云々。此度表事。納言招匡衡云。欲上辭表。而依時爲英才。相語齊名以言等令挑之處。猶不叶意趣。貴殿計り被書闕云々。匡衡慇ニ承諾。歸家テ有愁歎之氣色。于時赤染相尋云。何等事哉。答云。如此之後輩才學優長也。而勝彼書闕事。極難有無術事也云々。赤染暫打案云。彼人ハユヽシク有飭慢

之人也。吾身ノ先祖無止事者ニテ沈淪之由ヲ若不書歟如何。
尤可有其旨云々。匡衡云。彼紫草ヲ見ニ無此趣。尤可然云々。
仍打立ニ云。五代之太政大臣之嫡男。亡祖忠仁公ト云ヨリ次
第ニ數上テ。而我身ノ沈淪之由ヲ書テ持參之處。深感歎シテ
面門開之氣色也。仍用之云々。是以和歌之思高巧出者有興云
々。

經信卿四條大納言ニ不劣人也。御堂御時如此分詩歌管絃之
船。而何船可乘ソト不進心之間。仰云。乘管絃之船可獻詩歌
云々。珍重々々。

以意空事ノ不叶意ハ和歌也。ヨクモヨクヨマムト思時。別様
ニ被讀。打ヤリノコトモ吉時アリ。又數日案モ俄事モ。唯可
然テ出來者也。又可劣トモ不覺人ニ被讀ハ歌也。

九條殿大納言之時。元三可用魚袋。不候之由令申給ニ。貞信
公吾若ヨリ用魚袋。アヘ物ニスヘシトテ令奉借給ヘルヲ。後
日ニ返上之時。付松枝令副給。歌ハ貫之ニ所召也。所謂。

春風に氷とけたる池の魚はちよまつ蔭にすまむとそ思ふ

世繼物語ニハ彼家ニ行向テ被仰タリトソ侍。貫之集ニハ御
消息アリトソ侍。イカニモヨマムトオモヒケムニ。サマテモ
ナキニヤ。何集ニモ不入。

又明尊僧正ノ九十賀ハ宇治殿ノセサセタマフナリ。杖歌ハ
召伊勢大輔。

萬代をたけの杖にそ契りつる久しくつかむ君かためにと

賴基ハ承平中宮御賀杖歌ヲヨム。能宣ハ大入道殿御賀ニヨ
ム。二代勤此役。依重代召之。定テ勵マシ侍ケメトモ。是又不
入物歌也。此賀歌ハ宇治殿。大二條殿。堀川大臣。土御門右大
臣等讀給ヘリ。序者土御門殿也。其一句云。[illegible]八十之廻。如來
猶不示九々之蔵。若師亦所難量也。時人珍重之由謳歌云々。

杖返歌ハ。前律師慶暹歌也。彼僧正弟子也。

君を祈る年の久しく成ぬれは老のさかゆく杖そうれしき

此律師ハ歌仙也。又無極聖人也。偏欲無上道不思名利。而爲
凡僧事傍輩聊下之。百日間籠居シテ某所祈之。退出之路ニ有
公請參內。乍高座上宣下律師。其後歷十箇日辭退云々。又觀
念ノ上人也。金色ノ阿字ヲ前懸テ。墨字ノ阿字ヲ後ニ懸觀
也。墨字變金色云々。

伊勢大輔上東門院中宮ト申時初參。輔親娘也。歌讀覽ト心ニ
クヽ思食之間ニ。八重櫻ヲ或人進之。御堂御前御座之時。件
花枝ヲ大輔許ハサシツカハシテ。御硯上ニ檀紙ヲ置キ。同サ
シツカハシタルニ。人々屬目イカヽ申ト見アヘルニ。トハカ
リアリテ。硯ヒキヨセテ。墨ヲトリテシツカニヲシスリテ。
歌ヲカキテ進之。御堂トリテ御覽スルニ。誠キヨケニカキタ
リ。

いにしへのならの宮古の八重櫻けふ九重ににほひける哉

殿ナハシメタテマツリテ萬人感歎。宮中鼓動云々。又彼人第一歌也。卒爾ニモ不寄事也。

又大二條殿小式部内侍ヲオホスコロ。日來者御所勞ニテ久アリテ。平愈シテ參上東門院給ニ。小式部内侍大盤所ニ祗候。令出給トテ。死(シナン)トセシハナト不問ソト被仰テ。スキタマフヲ引留テ申ケル。

しぬ計歎きに社は歎きしか生てとふへき身にしあられは

不堪感情。カキイタキテツホトニオハシテ懷抱云々。凡如此事境々(チリチリ)多聞 數日ノ事別様又不可勝計歟。

堀川院中宮御方ニ令渡給テ。以藏人永實御所ニアル薫物ノ火桶中テ參ト有仰ニ。參テ申出ニ。周防内侍給書タル小火桶ヲサシイツトテ。

カスミコメタルキリヒヲケカナ

永實無程取之。

ハナヤサキモミチヤスラムオホツカナ

範永之孫清家子ニテ新藏人ナレハ心ニクヽ思テ。フル物ニテ試之ニ。尤有興事也。後ニ主上聞食テ被仰云。不永實ハ我耻ナラマシト云々。伊勢大輔カコハエモイハヌ花ノ色哉トイヒシニ不劣覺事也。

予先年如此事ニ逢。關白殿近衞御所女房ノ車寄ノ前ニ人五六人女房ト言談。而有事次テ薫物ヲ一嚢被出。人々競取之。越中守顯成取見之。已非薫物。人々咲之分散。翌日ニ又同所ニ人々祗候。此日ハ予モ候。然間自女房中送書狀。開見之ニ有歌 薫物ニコヽロヲソサノ程ハミエニキト云々。元句不覺也。人々興遊各讓子(合イ)予。心中ニ案様。昨日此所ニ御座ケム人々ノ御沙汰也トテ 欲遁而可見讓無人。默止ハ予耻之由存之間。虚薫物ト云事有カシト覺悟。仍須臾廻思之處。如形成篇詠云。

玉たれのみすの内よりいてしかは空薫物と誰もしりにき

北政所聞食テ御感無極テ。實薫物一嚢ヲ下給。予今納宮中。和歌爲體雖異。臨時有面目。世以爲美談。仍暫所書置也。後日可改弃。抑此度空薫物之句多出來。仍此歌彌惡歌ニ成乎。難堪。

予應保二年三月三日昇殿。來十三日中宮御方可有貝合事。仍俄所仰下也。同七日賜和歌題二首云々。同日可被講。廻風情早可初參云々。仍不擇吉凶。件夜付籍了。(御所高倉殿。)翌日御會。(東向御所。)月卿兩三。雲客數十。講了不立座。又出題二首(範兼出之。)躑躅交路。一戀。是爲試予歟。即時各終篇一隱名テ歌合也。予殊應召籠題尺也。雖然猶成恐。不邁(存イ)位階。居範兼雅重等下 御簾ヲ被上。次第講歌。彼是相互難陳。範兼殊爲張本テ定勝負間。雖有僻不能口入。而半講ノ後勅定云。清輔今夜不致和歌沙汰ト思食云々。小突鼻氣也。心ニ恐

々シテ相待紕繆之處。濁露歌ニ此モ彼モト詠歌出來。範兼難云。此モ彼モハ筑波山之外ハ不可詠。彼山ハ八方ニ有面。々方々ニ有景之故也。何平地ノ路ニ可然哉。顯廣云。然也。近歌合ニモ如此難歟。予云。基俊判歟。顯廣此時承伏テ然也ト云。範兼傍若無人ニ成テ。然者爲嚴之由稱。于時予云。雖然事外ノ僻事也。于茲重家云。基俊カ書置事ヲ末生難稱僻事歟。予云。基俊カ說ヲ末生以今案難ハ尤可然。基俊ヨリ先達若有申事ハ如何。人々尤有興。有證歌者可出ト被責。響詞滯ス。頗有其責。予申云。躬恒カ假名序ニハ。漢河ニ烏鵲ノ與利羽ノ橋ヲ渡テ。此モ彼モニ行加布ト書タル樣ニ覺悟ス如何。于時主上ヨリ奏始テ。滿座鼓動及簾中。範兼少キ有興違之氣。仍定勝。範兼顯廣カ同心時如虎。開證文復如鼠也。此事非今夜。後日モ世間ニ鼓動テ感歎無極之。但萬葉集ニハ是面彼面ト書。顯然者普通事也。知タルハ不高名。不知カ不覺也。後聞。中院右府入道云。依和歌聽昇殿。翌日參御會テハ覺悟ト深感歎云々。後日參九條大相國許。此事ヲ被云出云。以嗜道テ昇進。可自愛事哉ト深有感。予云。承曆歌合之時。通宗朝臣昇殿云々。被申云。未承及先蹤。彌日出事也云々。兩丞相感歎。頗增面目者也。

俊綱朝臣家ニ詠水上月歌講之。而田舍兵士中門邊ニ宿テ聞此事。青侍ニ語云。今夜ノ題ヲコソツカウマツリテ候ヘト云々。侍云。有興事也如何。兵士詠云。

水や空々や水ともみえわかすかよひてすめる秋のよの月

侍來テ申此由。萬人驚歎テ詠吟ス。且感且耻テ各退出云々。

俊綱朝臣下向播磨之間。於高砂各詠和歌。而大宮先生藤原義定詠云。

われのみと思ひこしかと高砂の尾上の松もまたたてり鳧

人々感歎。良暹云。女牛ニ腹ツカレタルヒカコトト云々。白有如此事也。

能宣父賴基ニ語云。先日入道式部卿御子日ニ宜歌仕テ候。賴基問之如何。能宣云。

千年まて限れる松もけふよりは君にひかれて萬代やへむ

世以稱宜云々。賴基暫詠吟シテ。カタハラナル枕ヲトリテ打能宣云。慮外昇殿。有帝王御子日之時。以何歌可詠哉。ソサフヒノ不覺人哉云々。能宣須臾ニ起テ逐電云々。

大樣意ニ染ヌル事ニハ宜歌出來者也。然者道雅三位ハイ一歌仙トモ不聞ニ。齋宮密通間。歌ハ多秀逸也。所謂。

あふ坂は東路とこそきゝしかと心つくしのなにそ有ける

今はさは思絶なむとはかりを人傳ならていふよしもかな

オタヘノハシヤコレテラム。ユフシテカケシソノカミニ。キ

クヨリホカノナクサメソナキ等也。
此外ハ不聞者也。思マヽノ事チ陳ハ。自然ニ秀歌ニシテアル
也。是志在中。詞顯外之謂歟。此齋宮ハ三條院第一皇女也。密
通之由風聞シテ。自上マモリメ被付テ難逢之間戀慕歟也。或
人露顯之後宮出家。又身ニ大瘡共多イテヽ薨去云々。
能宣朝臣齋院宰相ト嫁後。五月五日所送歌。
　三島江におりたちしより菖蒲草又とさまかねをもみぬ哉
無返事歷數日。聞病惱之由到其家。人曰。亡後歷八日云々。有
遺書。披見之時。
　おりたちし三島の道やあせに鐵おひし菖蒲いれも枯に鬼
イノリケンコトハユメニテカキリテヨトモ此間事也。
小一條院女許ニテ曉ノカネチキヽテヨミタマヘル。
　曉のかれの聲こそ聞ふなれこれを入あひと思はましかは
或人云。是ハ違歌也。院曉徹トテクチスサヒタマヒケルニ。
末ハ女ノ申ケルト云々。但又習書ニハ依此歌罪業甚重之由
云々。然者皆院御作歟。
能宣逝去之後。四十九日中ニ叙爵シテ侍之由。輔親許ヘイヒ
ツカハストテ。
　いろ〳〵に思ひやる哉墨染のたもともあけになれる泪を
返事云。
　墨染のあけ（に（後拾））の衣をかさねきてなみたの色のふたつなる哉（へ（後拾））

輔親ハ長元七年十一月五日叙三位。十月廿日殊勅以神寶奉
伊勢使ニテ。歸參シテ獻若珠一顆。於神宮奉仕御祈之間。自
然在寶殿前樹云々。此賞也。且同九年後一條院崩御云々。輔
親ハ長曆二年正（六イ）月爲月次使下伊勢之時。於途中卒去云々。
義忠ハ爲大和守之時。遊浮吉野河之間。入水死去云々。
中關白爲少將之時。語赤染之兄弟女。而忘給之後。彼女奉戀
關白。日暮卷上南面簾テナカメ居。然間直衣人寄香茜入來。
彼戀也。女有悅心會合。其後夜々來。但曉夕無車馬音。以長緒
着針着直衣袖。朝此緒留南庭樹上。其後無來。是魅之所爲歟。
又件女懷姙遂則產一鮑衣。開之見之。多有血無他物云々。見
江記。赤染歌。
　やすらはてねなまし物をさよふけて傾く迄の月をみし哉
江記云。赤染ハ赤染時用女也。依隱右衛門志尉等號赤染衛
門。實ハ兼盛女也。離別彼母之後。稱有女子。欲尋取之處。母
指南稱不然之由。相論之間。爲違檢非違使時用沙汰之間。而
彼母密通相住之間。彌稱兼盛子之由。深稱時用子云々。兼
盛可令對面之由申云々。
素性ハ住石上良因院。仍寬平法皇宮滝遊覽間。號之良因朝
臣。而付此名稱入道之人尤傳事也。入道ハ素性舍兄也。爲左（右イ）
近將監。詣父遍照許。而遍照云。法師子ハ法師ナルソ吉トテ。
推令剃頭云々。

天平勝寳元年遣唐使中。有副使陸奥介従五位上至手人丸。山城史生上道人丸者。而柿本人丸集中ニ有入唐之時歌。若此翟歟。但大使正五位上勳四等大伴宿禰佐手丸妻字奈刀自。於途中爲海神ニ被取。端正美麗之故也。悲歎之間。彼是各詠歌。而無人丸。兩人之歌非柿下之趣顯然也。今度爲守護奉振神達。大和國カムノ大明神。山城アハノ神。出雲土河。越中ノツクハチノ神。越前氣比ノ神。信濃スハノ大明神。合八所云々。今二所不註如何。

元年四月二日進發。同年十月廿九日到唐風門泊返歌。六月十七日參帝御在所。同年四月三日出唐。同年九月廿四日到紀伊國云々。見佐手丸記。

故物語ノ歌ノ入撰集ハナシト申カヤ。後拾遺雜一ニ藤爲時歌。

我ひとりなかむと思ひし山里に思ふとなき月もすみけり

是ハ源氏物語歌也。彼物語ニハイリヌトオモヒシト侍カヤ。件物語ハ紫式部カ所作也。爲時女也。仍詠歟。紫式部ト云名有二説。一此物語中ニ紫巻ヲ作甚深之故得此名。一一條院御乳母之子也。而上東門院ニ令奉トテ。吾ユカリノ物ナリ。アハレト思食ト令申給之故有此名。武藏野ノ義也。

猿丸太夫家集寂先歌ニハ。

白菅のまのゝ萩原ゆくさこさきみこそあらめまのゝ萩原

此歌如萬葉集高市黒人妻歌也。若猿丸太夫ハ件人歟。然者女房也。而如家集者送女許之歌コレ男也。集失歟。又マノヽ榛原在萩由之處。萬葉集ニ寄木歌ニ詠之。有不審。但摺衣之由多詠。是大萩歟。仍取木部歟。

重之歌云。

やかすとも草はもえなむ春日野は唯春の日に任せたら南

コレ在忠見集。御屏風歌也。隨無重之集。而如十五番用重之歌如何。

八幡臨時祭ハ先朱雀院御時被始行也。件歌ハ貫之奉之。其歌云。

松もおひまたもこけむす石清水行末遠くつかへまつらん

又云。

石清水まつかけ遠く影みえてたふへくもあらぬ萬代の影

而能宣集。冷泉院御時始テ石清水臨時祭行給ニ。可唱之歌奉之侍シニ。

君かよにみな底すめる石清水流れてちよに仕へまつらん

此時更又被改歌歟。尤不審。

オソクトクツボニサキヌル梅花トイフ歌ハ貞信公歌云々。而公忠辯集云。枇杷大臣左大臣ニ成給ヘル年ノ春。御慶ニオホキオトヽオハシマシタレハ。御アルシコヨナクツカフマツリテ。御カワラケアマタヽヒニナリケルホトニ。權中納言

敦忠君ノ御前ノ梅花ヲカサシテ。

遲くとくつゐ（ツヒイ）に咲ぬる梅の花たか植をきし種にか有らん

オホキヲト丶。

（集可考之）折て見るかひもある哉梅の花ふたゝひ春にあふ心ちして

ツカフマツル。

色もかもことしの春は梅の花二たひ匂ふこゝちこそすれ

如此ハ敦忠卿歌歟。

第四靜慮歌は或人惠亮和尙歌云々。而如堀川右大臣集ハ。山ナル僧。

櫻花第四靜慮にさかせはや風災なくてちらしと思へは

返事大臣。

櫻花第四靜慮にさけりとも眼識なくていかゝ緣せむ

又僧。

さくら花第四靜慮にもしさかは下地の眼識かりて緣せん

返事。

下地の識かりて緣せは櫻花よしとはみえし無記にのみして

如此ハ非惠亮歌歟。惠亮ハ惟高親王ノ御持僧也。彼大臣ニ不可逢。年紀玄隔也。尤不審。但往年事聞キテ今答之歟。最後返歌同大臣答也。此歌等ノ心色界ニハ凡有十八天也。其中上九天ヲ第四靜慮トハ云。彼所壞劫之時風災ノ不到也。風不寄所之故如此詠。眼識ナクハトヨムハ。彼所ニハ無五識也。五識トハ眼識。耳識。鼻識。舌識。身識也。物ヲ見聞ト思時ハ。初靜慮ノ識ヲ借ル也。初ニ慮ハ下地也。然者次歌ニハ下地眼識借テ緣セムトハヨム也。緣ハモノヲキヽモミモスル意也。終歌ニハ無記トヨムハ。借記ノ識ハ無記也。無記トハ物ノ善惡ヲ不見。究意之名無色（六色イ）云々。

式部最後歌云。

有限は下の眼識そなふともうへのはなをはいかゝ緣せん

（但此ハ識不叶云々。）

後拾遺三條院御製云。

心にもあらて此世をなからへは（にイ）戀しかるへき夜半の月哉

此歌山科抄ニハ三條院御コヽチヨロシカリケルヒマニ。月ヲ御覽シテ心ホソキコトヽモキコエサセ給ケレハ。皇后宮ノヨマセタマヘル御歌云々。何說ヲ可用哉。但皇后宮ノ御歌ニ義叶歟。

金葉集八幡別當光清歌云。

なにことに秋はてなから棹鹿の思ひかへして妻をこふ覽

此歌ハ藏人君意尊。此集撰之比。十月許參詣八幡テ聞鹿鳴テ詠也。而後日向俊賴亭。有忌之事不對面。仍紙端ニ書此歌テ。以小兒一日比於八幡所詠歌也。而光清歌ト存テ入之云々。意尊歌ハ又戀部有一首。

あはす共なからんよには思ひ出よ我ゆへ命たえし人そと

是ハ於左京御許テ詠歌也。コレヨミ人シラストテ入之。一首ハ稱人歌。一首ハ讀人不知云々。殊阿黨難堪之由。所々誹行之者也。尤有謂。

希代歌

神明御歌

大神宮御歌

長月にさやけき影のみえぬる(れ歟)は塵の恐れはあらすとそ思

是ハ長元四年六月七日祭主輔親參齋宮之間。俄ニ雨下風吹テ。齋宮自託宣テ。帝御事ナムト被仰テ。御ミキタヒ〳〵メシテ盃給トテ詠給歌也。輔親奉御和云。

おほち父むまこ輔親かみよまてにいたゝきまつる皇御神

草のはなひくらまたす露のみのをき所なく歎くころ哉

是大中臣輔弘無關之時。祭主事ヲ祈念シテ子タル夢ニ云へ(ミユルイ)ル歌也。

宇佐御歌

ありきつゝきつゝみれ共いさきよき君か心を我忘れめや

是孝謙天皇弓削法皇ニ讓位。和氣清麿爲使令申宇佐宮給之時。歸來テ奏不許之由。仍法皇怒テ清麿ノ足ヲ切テ。ウツホ船ニ乘テ流云々。時宇佐宮ニ流寄。彼神清麿カ清膝ヲアワレミテ。誦此歌テ清麿膝ヲ撫給シ時ニ足滿足云々。今和氣氏祖也。

我たのむ人徒になしはてはまた雲わけてのほるはかりそ

ゆふ襷かくる袂はわつらはしとけは豊にならむとをしれ

此次歌ハ寛弘元年十二月七日高遠卿夢ニ所見也。年四十許ナル女人捧青色紙書テ。賀茂ノ上御社ヨリノ使ト稱テ來云。此文ヲ取之開見。此歌一首。此後拜任大貳云々。見家集。

平野御歌

白壁のみかとのおやのおほち社ひらのゝ神の心なりけれ

今案。白壁ハ光仁天皇也。其曾祖父ハ舒明天皇。其曾祖父ハ欽明天皇也。是平野明神云々。

稲荷御歌

長きよの苦しきとを思へかし何歎くらんかりのやとりを

是ハ近年事也。或僧聊有相論事。稲荷ニ百日參詣。祈念スル夢ニ見也云々。

春日御歌

ふたらくのみなみの岸に家ゐして今そさかへむ北の藤波

或人云。是ハ南圓堂ノ壇突之時。翁出來突此境トテ誦此歌。

春日明神ノ變化云々。

大原野御歌

時の至ゝ折をしらぬも哀也つとめてもみよくる、日やなき

是コモリタル修行者詠之。

食とするこのはゝ風に散はてぬ露の命をなにゝかけまし

此歌御返答。又或云。此歌ミノヽ国山田郡三輪社神御歌云々。

三輪明神御歌

戀しくはとふらひきませ我宿は三輪の山もと杉たてる門

古今歌飲。但上下セリ。又後集ニハ不注此由。

住吉御歌

夜や寒き衣や薄きかたそきの行あひのまより霜や置らん

是社破壞之由奏帝王トテ見夢歌也。

住吉の岸もせさらむ物故にねたくや人にまつといはれん

託宣御歌云々。

むつましと君はしらすや瑞垣の久しき代より祝初めてき

昔奈良帝幸住吉給テ詠云々。ワレミテモヒサシクナリヌスミヨシノキシノヒメマツイクヨヘヌラン。于時明神現形シテ答給歌云々。或物ニハ此本歌慈覺大師歌云々。

北野御歌

作るともまたもやけなん菅原やむ(ぬイ)ねの板まのあはむ限は

是圓融院御時。內裏燒亡ノ造營之間。被造裏板ニ蟲ノ喰歌云々。

貴布禰御歌

奥山にたきりておつる瀧つせに玉ちるはかり物な思ひそ

是和泉式部詣貴布禰詠云。モノオモヘハサハノホタルモワカミヨリアクカレイツル玉カトソミル。于時男聲ニテ式部カ耳ニ聞歌云々。

熊野御歌

道遠し年もやう〳〵おひにけり思ひおこせよ我も忘れし

是陸奥國ヨリ毎年ニ參詣シケル。女ノ年老テ後夢ニ見歌也。

天宮御歌

キスカサタテマツラムト。立願テスクシケル人ニ示給ケル。

音にきく衣笠山をまたみねは濡つゝそふるあめの宮には

蟻通明神御歌

七わたに曲れる玉のおゝぬきて蟻通しともしらすや有覽

是昔彼明神ノ社邊ニ旅客ノ宿夢ニ示給歌云々。

新羅明神御歌

唐船にのりまもりにとこしかひは有ける物をこゝの泊に

是智證大師歸朝之時。爲守護從新羅來神也。今在三井寺云々。

佛御歌

東北或僧夢ニ。キヨケナル僧三人寄合テヨミケル歌。一人ハアハレナリ。次僧ヒハクレカタニナリヌレト。又次僧ニシヘユクヘキ人ノナキカナ。是無疑佛菩薩歟。見定賴集。

朝とにはらふ塵たにある物を今いくよとてたゆむ成らん

是ハ行チツトメテクルシカリケレハ。曉方ニマトロメル夢

ニ。小僧林上ニアリテイヒケル歌。
かくはかりこちてふ風の吹をみてちりの疑殘さすもかな
是少將聖人ト云人。後生ノ事ヲ思テチタル夢ニ見歌也。
音たてゝものはいはねと夕暮のはゐ拂ひつる聲は聞えす
シノヒテチコナヒシケルニ。カ（蚊）ノクヒケレハ。アフキシテウチハラヒツヽネフリケル夢ニ。僧ノ讀カケヽル。歌ハ蠅也。詞ハ蚊也如何。

清水寺觀音御歌
猶たのめしめしか原のさせも草われ世の中にあらん限は
物思ケル女ノハカ〳〵シカルマシクハ。シナムト申ケルニ示ケル。
なにか思ふ何かなけくよ世中はたゝ朝顔の花のうへの露
梅の木の枯たる枝に鳥のゐて花さけ〳〵と鳴そわりなき
此ハテノ歌ハ。マツシキ女清水寺ニ百日參。ナク〳〵祈念スル夢ニ。御帳ノ中ヨリ小僧出來テ云ケル歌。

六角堂觀音御歌
とへかしなあしひたくやのま近きに九重照す月は物かは
あやしくも左（カイ・ヤイ）のみゝの聞えぬる風のするあとかき心みむ
此次歌ハ故白河院三條殿ニ御テ。六角堂百度マイリ。人々無往反之路テ退轉之時。人夢ニミエケル歌也。此後三條殿燒亡云々。

山深く年ふる我もあるものをいつちの月のいてゝ行らん
是智縁上人伯耆大山ニ參テ罷出ケル。曉ノ夢ニミエケル。

辨才天詩
三千世界眼前盡。十二因縁心裏空。
上句ハ於竹生島都良香案也。下句不能思得。而其後夢ニ辨才天所被示云々。

天人歌
乙女子かおとめさひすもから玉を乙女さひすも其唐玉を
清御原天皇彈琴給之時。神女降テ舞歌云々。

仙人歌　松浦仙答歌
玉嶋のこの河かみに家はあれと君をやさしみ顯さすあり

權化人歌
聖德太子　救世觀音化身
しなてるやかた岡山にいひにうへてふせる旅人哀親なし
達磨和尚　文殊化身
いかるかやとみのお河のたえは社我大君のみなは忘れめ
是達磨餓人躰ヲ作テ伏チミテ。太子讀給返歌也。
行基菩薩　文殊化身
法華經を我えし事は薪こりなつみ水くみつかへてそゑし
靈山の釋迦のみまへに契りてし眞如くちせす逢みつる哉
波羅門僧正ノ答歌

伽毘らゑに共に契りしかひありて文殊のみ顔逢みつる哉

是ハ東大寺供養ノ導師ニ被請テ來臨之時。於難波津船ヨリ下給時。行基波羅門ノ手ヲトリテ詠給歌也。波羅門ノナハ菩提，南天竺伽毘羅衛國人也。天平勝寶ノ比也。

傳教大師

阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我立杣に冥加あらせ給へ

是中堂建立之材木取ニ入杣給之時歌也。

弘法大師

かく計達磨なしれる君なれはたゝきやた迄も至る之けり（へき哉イ）

いふならくならくの底に入ぬれはせちりもすたも別れさり鬼

慈覺大師

大方にすくる月日を詠むれは我身に年のつもるなりけり

日沒偈之意也。

雲のさて降春雨はわかねともあまのかきほはおのか物々

藥草喩品之意也。

慈惠僧正

そのかみの雲ゐのにはに餘れりし草の莚もけふやしく覽

右樹下集天台大師忌日ニ詠之。千僧讀一之意也。

空也聖人歌

一度もなもあみたふといふ人の蓮の上にのほらぬはなし

書市門歌也。

聖寶僧正

花の中めにあくやとて分ゆけは心そ共にちりぬへらなる

是ハハチハシメニテ。ルチハテニテヨメル歌也。

玄賓僧都

みわ河の清き流にすゝきてしわかなを更にまたは汚さし

惠心僧都　源信

みつは皆滅ひはてぬる旅なれは道なる屍とたにいはれよ

是ハ道路ナル屍ヲ見テ詠也。

檀那僧都　覺運

何のその誘らん人の惜からん清きをすむといふにや有覽

是馬内侍ニ名立テ送歌也。

奝然法橋

旅衣たち行道のとをけれはいさしら雲のほともしられす

是入唐之時。イツハカリ可皈來ト人ノ尋ケレハ詠歌也。

千觀内供

極樂ははるけき程ときゝしかとつとめていたる處之けり

空也上人

增賀上人

みつはさす八十餘の老の波くらけのほねにあひにける哉

書寫上人性空

千年ふる松たにくゆる世中にけふともしらてたてる我哉
是ハ松樹ノ切クヒニ火ノモユルチミテ詠歌也。

佛神感應歌

貫之

かき曇りあやめもしらぬ大空に蟻通しをは思ふへしやは
是ハ貫之紀伊國ヨリ上洛之道ニテ。俄ニ乘レル馬ノ不行之處。道行人云。此ハ此處ニイマス神ノ所爲ナラム。年來社モナクテシレル人モ不侍ト。イトウタテ御座神也。先々如此事侍ト申ケレハ。御幣モナケレハ。只手チアラヒテヒサマツキテ。神イマシケモナキ山ニ向テ。抑ナニ神トカ申ト問ハ。アリトホシノ神トナン申ト云ニ讀申歌也。其後忽ニ起テ。ツ子ヨリモ驗也云々。

赤染衞門

かはらむと思ふ命は惜からてさてもわかれん事そ悲しき
頼みては久しくなりぬ住吉のまつこの度のしるしみせ南
千年よとまた綠兒にありしよりたゝ住吉の松を祈りき
是ハ江擧周和泉去任之後重病惱。而有住吉之御祟之由。仍奉幣彼社之時。三本幣ニ各所書歌也。其時人夢ニ。白髮老翁社中ヨリ出來テ取此幣テ入。其後病平愈云々。

能因

天のかは苗代水にせきくたせあまくたります神ならは神
是實國朝臣爲伊豫守下向之時。數月不雨降。民歎思之時。守相語能因云。詠歌可祈請三島明神云々。于時所詠歌。仍大雨下テ三日三夜不止云々。

經信卿

君かよはつきしとそ思ふ神風やみもすそ川のすまむ限は
是承曆二年殿上歌合也。其後或人夢ニ。唐裝束ノ女共立居テ詠吟此歌。各感歎云。依此歌帝王御寶算可增長云々。遂七十七ニテ崩御云々。

おとなしの川の流はあさけれと罪の深さにゐこそ渡られ
是參詣熊野之女。チトナシカハノ邊ヨリ被返テ。ナクナク詠之。此後無事參詣。

津守國基

年ふれと老もせすしてわかの浦に幾代になりぬ玉津嶋姬
是ハ堂建立時。壇石取ニ紀伊國ニ渡ニ。若浦ノ玉津島ニ神社アリ。尋聞ハ衣通姬ノ此所チヽモシロカリ給テ。神ト現テ垂跡給也ト。彼渡人申タリケレハ。ヨミテ奉也。其夜夢ニ唐髮上テ。裳唐衣キタル女十人計出來テ。ワレシキニ慶ニイフナリトテ。可取石ヤウモ敎之。夢サメテ如敎求之ニ。如夢告有石。令打破之。一度ニ十二顆ニ破テ。壇ノ飾石ニ尅云々。

修理進(某妹。)

思出つやなき名のたつはうかりきと荒人神もありし昔を

是故待賢門中宮之時。女裝束一具失了。宮中鼓動。此女或局女房被嫌疑。仍泣々參籠北野所詠歌也。其後實犯出來。（イ本ニ無之）半物敷島也。

故顯輔卿

身をつみて照しおさめよ増鏡たか僞りしくもりあらすな

是白河院御在生之時。依人讒言無實出來。御氣色不快之時。大唐鏡ヲ進北野トテ。鏡臺ノ裏所書歌也。其後無實露顯云々。雖末代無陵遲事也。

江都督

堯母廟荒。春竹染一掬之涙。徐君墓古。秋松懸三尺之霜。是於安樂寺行曲水宴。自所書之序文也。披講之時御廟鳴云々。肥後大進忠兼語云。下向肥後之時。有故老之府官語云。件曲水宴之時文人云々。仍問廟鳴實不。答云。實也。始ハ御後山方響鳴。其響近々也。而漸近聞。後ニ御廟中ニハ聞云々。

亡者歌　小野小町

秋風のうち吹ことに（ふくたひことにイ）あなめ〳〵おのとはいはし薄おひけり

人夢ニ野途ニ目ヨリ薄ヲイタル人アリ。稱小野。此歌詠。夢サメテ尋見ニ有一髑髏。目ヨリ薄生出タリ。取其髑髏テ閑所ニ置云々。此知小野屍云々。

義孝少將

しか計契りし物をわたり河かへる程には忘るへしやは

是ハ死去ストモ。シハラクトカクナセソトイヒケルヲ忘ニケレハ。妹女ノ夢ニ見ケル歌。

しくれとは千草の花そちりまかふ何ふる里に袖ぬらす覽

昔契蓬萊宮裏月。今遊極樂界中風。

是賀縁闍梨ノ夢ニ見也。

きてなれし衣の袖もかはかぬにわかれし秋に成にける哉

又年妹夢ニ見之。

高遠卿

古里へ行人もかなつけやらむしらぬ山ちに獨まよふと

薨去之後。忌ニ籠ケル僧ノ夢ニ見之。

奥山の行ゑもしらぬ山中にあはれ幾代をすきんとすらん

蛇道ニ落之由ヲ示テ。息子ノ夢ニ見之。

公信中將逝去之後。

朝ほらけくらしとなとて思ひけん獨もしての山は越けり

逢事をみなくれとに出たてと夢ちならては逢よしもなし

長濟律師

たらちめの歎をつみて我かゝく思ひの下になるそ悲しさ

是卒去之後。母ノ歎テ子タル夢ニミエケル。

橘爲仲朝臣

思ひきや常世の國のとたちにもひとり都を忍ふへしとは

是保安二年十一月十一日夜。猶孫保昌カ夢ニ。爲仲公家ニ奏

トテ。申文ヲ書テ見合侍。書ノハシニカケルトソ見家集。

堀川院御製

秋風のいなはの音に誘はれていつゝの宿をいてにける哉

是ハ崩御之後。或人ノ夢ニ見之。

右大將通房カクレ給テ後。宇治殿御夢ニ彼御歌トテ見ケル。

燈火の光はあまたみえしかとくらきやみにもまとふ比哉

右少辨定通

古里をわかれし秋をかそふれはやとせになりぬ有明の月

逝去之後經年序。或人夢ニ月明夜殿上ニ候也トテ詠歌也。新院因幡内侍ハ彼辨物申ケル人也。此事ヲ聞テアハレカリテ子タル夢ニミエケル歌。

思出てゝ忍ふとのはきく時はいとゝなみたの玉そ數そふ

此人ハ命ヲ奉テ。一日爲辨官由神明ニ祈請テ。拜任之後即逝去ノ人也。

思ひいてゝ後に哀といふよりも限の折そとはゝとはまし

是或女物云ヲトコ逝去シ。彼時不聞テヤミシ事ヲ後悔シテ。伏タル夢ニ見之。

故將作　顯季

〔つ歟〕おきのすむ山端我に敎へなんみしにもあらぬ宿は住うし

是薨去之後。人夢ニ見歌也。

別路は涙の雨のしけゝれはみのしろ衣ほすひまもなし

是前大相國侍中。某云者夭亡之後。弟僧ノ夢ニ異躰ノスカタニモミエケレハ。ナトカヽルモノハキタルソト問。返事ニ詠之云々。彼侍モ件僧モ凡和歌ノ行方不知者云々。希有事也云々。

臨終歌　參河入道入滅時

雲の上に遙に樂のおとすなり人にとはゝやそら耳かもし

蓮仲

草のはにかとてはしたり郭公しての山路もかくや露けき

是ハ人ノモトニテ俄ニ絶入タルヲ。カキイタシタリケルトキ。イキイテヽ草ノ露ノアシニサハリケルニ。郭公ノナクヲキヽテヨメルナリ。

河口重如號山二郎判官代

たゆみなく頼みをかくるみた佛人やりならぬ誓たかふな

是モシナムトシケル時讀也。

幼兒歌

神無月時雨ふるにもくるゝ日を君待程はなかしとそ思ふ

是ハ人ノコノヤツナリケルカ。母ノモノヘユキタルヲマチカネテ。シクレノシケル日ヨメル。

鶯よなとさは鳴そちやほしきこなへやほしき母や戀しき

コレハマヽハヽノモトニアリケルニ。チヰサキツチナヘノアリケルヲ。ワカハラノコニハトラセテ。マヽコニハトラセ

サリケレハ。ウクヒスノナクチキ丶テヨメル歌也。

賤夫歌

時雨する稲荷の山のもみち葉は青かりしより思初めてき

是ハ泉式部稲荷ヘマイリケルニ。シクレノシケレハ。ミチニアヘリケル牛飼童ノアチ丶ヌキテ。キセタリケルチカツキテ。ウレシキコトナリト云テヤミニケル。後ニコノ童式部カモトニキタリケレハ。ナニコトニナトタツネケルニヨメル歌也。無便心ノアリケルトナム。但閑巷物語難信仰事也。

こはた山すその丶嵐寒けれは伏見の里もいこそねられれ

是ハ俊綱朝臣ノ伏見ニ侍リケルニ。ヨルタ丶スミアリキケルニ。アヤシノ宿直童ノツチニフセリテナカメケル歌也。聞之小袖ヲヌキテタマヒケリトソ。下臈ノキルツ丶リトイフモノヲハ。コハタトイフト云々。

乞者歌

ととはゝあるしなからもゑてしかなねはしらね共引心みむ

是ハ人ノ家ニ入テ乞食シケル法師ニ。女ノ琴ヲヒキテ。コレヲケフノ布施ニテカヘリ子トイヒケレハヨメル也。或人云。此乞食ハ三形沙彌也云々。

行ひのつとめて物のほしけれは西をは頼むくる丶方とて

是ハ乞者ノツネニクルカ。東方ニキタル人ハモノヲトラセス。西方ニキタル人ハツネニトラセケレハ。ソコニテ讀メル也。

已上佛神及權化聖人故。以此縁令綱羅之。衆生併可爲出離生死之因耳。

一誦文歌

吉備大臣夢違誦文歌

あらちをのかるやのさきにたつしかもちかへをすれはちかふとそきく

問夕食歌

ふなとさへゆふけのかみにものとはゝみちゆく人ようらまさにせよ

沐浴間槌鐘誦文歌

よひのかねつかさるさきにゆあみよとみゝつまなくにいひてしものを

夜行途中歌

かたしはやつかせゝくりにくめるさけてゝゑひあしゑひわれゑひにけり

逢死人時歌

たまやかたよみちわれゆくおほちたろちたらまたらにこかれちり〳〵

見人魂歌

たまはみつぬしはたれともしられとも結ひとゝめつした

かひのつま
三返誦之。男左女右ノツマヲ結ヒテ。三日ヲ經テ解之云々。
鷄鳴時歌
よみつとりわかゝきもとになきつとり入（な（拾芥抄））みなきゝつゆく
たまもあらし
志々虫鳴時歌
しゝむしはこゝにはなゝきそしゝらはゝかしゝにしつか（かしまつかやに（拾芥抄））
とにゆきてなきおれ
蛇食時歌
東や高間のやまにふれつくろおろたいてかたのきまへお
かし
霍亂誦文歌
しらたみはいくせわたりてつゝるてといくせわたりてこ
ゝのせそかし
〔東ヤ日向ノウミニサヲタテヽソレヲミル〳〵アヘレシ
ラナミイ〕
胸病誦文歌
むねのうへのうへきをすればかれにけりこひのあめふれ
うへきはやさん
造酒歌　家持如萬葉集。
なかとみのふとのりことゝいひはらへあかふいのちもた
かためにする
已上各三返誦之云々。
知坎日歌
かん日はたつにはしめてとをにとをひとつたらぬはさつ
きなかつき
夜書歌
やちまたや　まもりやちまたやゆめかちまたやそのこ
しなすな
馬腹病歌
しらなみをとりしのきゝてみとかとにつなくわかむまた
れかゝとはむ
又云。
しほやまにしほつかつくろしほつなにわかむまつなくむ
まのはらやむ
庚申セテヌル誦文
しやむしはいれやさりれやわかとこをれたれとねぬそね
ゝとれたるそ

丞相御所參拜之次尋申云。此本次第如何。仰云。此本ハ淸輔手自所令書進二條院之草子也。崩御之後。故皇后宮令傳給。其後自件皇后宮所給領也。又尋申云。嚢草子名。令釋

云。而此本不候如何。仰云。然也。件釋ハ頗戲言歟。仍奏覽之本ニハ。依有其憚不書之歟。我ニ書テ給タリシ本ニハ。件ノ本ハシニ書タリキ。其本六角東洞院炎上之時燒之。此名者智袋也。又才學袋也。入袋常隨身。仍有此名。又令書進事等皆虛事歟。然者又虛言袋也ト釋タリシ奧記ハ。令賜後令書注御歟。實此本頗以貴重深秘歟。不可披露。穴賢々々。

建久二年二月一日以或證本交合了。

或本奧書云。

此書日有風聞。請召　從內裏懇望之。叡覽之後。相具御造帋可書進之由有　宣旨。仍書寫。平治元年十月三日進覽之。寄怪雜記。在生之間及天覽之條不便々々。兼又不可及外見之由有其誡。可秘云々。　在判

永仁四年九月廿五日書寫之。　執筆中臣在判

觀應三年壬辰於茅屋終書功了。雖爲學業之妨。可備讚佛之因云々。　執筆長坂

文字散々之間。頗雖備證本。僻字多々有之。必可校佗本者也。

自中書相渡了。　爲旨

雖爲佗家之本。尙可秘之。

于時慶安元年戊子初秋上旬於武州江府書寫之訖。　清尋

貞享二年乙丑仲春吉辰。

〔右袋草紙以萩野由之氏所藏本校合〕

和歌部九十六

袋草紙遺編

囊字四義籠

一者　其形囊也。

一者　智囊也。

一者　動納囊隨身也。

一者　多備事。故虛言袋之義也。

維法花之妙字中。如無量之義籠。

和歌舊儒藤原在判

一和歌合次第（內裏儀）

兼日定和歌題幷左右頭念人等。　天德時。以更衣藤原脩子同有序等。爲左右頭。　承暦時。藏人頭實政爲左頭。右方依無藏人頭。以位階上﨟用俊綱。（殿上歌合。尋常時以藏人頭用之。）　亭子院時。以女六女七宮等爲左右頭。　郁芳門院根合時。左右頭女房也。　天德四年時。藏人頭伊尹朝臣於御前書分也。　永承四年時。五位藏人俊長執筆。書分左右云云。

次左右各定雜事。（有定文。）

定文書樣。

定

歌合右方雜事

一奉幣。

一秡事。（其所行事々。）

一文臺。

一籌刺。

一燈臺。

一饗。
一女房檜破子。
一裝束。
年月日
各有行事。（郁芳門院根合時。江記說也。）
次祈禱奉幣。
承曆時。（八幡賀茂祈願可競馬云云）
郁芳門院根合。（石清水。賀茂。稻荷。住吉。北野云云。是右方也。）
次方人男女有破事。（當日有反閇。）
次御裝束。（當日早旦。）
天德儀。（清涼殿西面。　永承兩度不分明。但古記云。西對云云。）
承曆。（清涼殿東面。）
天德御裝束儀。西宮記云。
早朝藏人雜色以下參上。供奉御裝束。其儀西廂皆懸新御簾。（納仁壽殿也。）第五間（渡殿間也。）立御倚子。大盤所倚子也。）南方立御几帳。立置物御机。（在御座南。）南四間垂簾。爲左方女房座矣。北二間爲右方座。御前渡殿南北。各敷綠端三枚。爲樂所召人座。（此等鋪設依仰諸司令重（敷歟）云云。）
如御記。暫撤清涼後涼兩（闕歟）度中渡殿北部云云

永承四年土御門右府記云。
御裝束。御殿（西對。）南廂四間。卷廂四間御簾。下母屋二間東西庇御簾。東第三間立殿上御倚子敷毯。南廣廂除御座間東西。鋪綠疊各三枚。爲左右公卿座。當上達部座末簀子敷疊一枚。爲左右方殿上人（客脱歟）座。御前間廣廂。去長押南三四尺許。敷圓（一歟）座二枚。講師座。簀子敷圓座。爲籌刺座。同母屋東間并東廂。爲中宮御所。母屋西間簾中。殿下令候給云云。　同六年根合儀同也。（見同記。）
承曆殿上記云。
撤晝御座。敷二色綾毯代。立侍御倚子。當御座間并廂左右。敷（雨皮）南面疊各一枚。爲大臣座。同間各敷綠端疊。爲自余公卿座云云。
郁芳門根合（御所六條院。江記云。）
寢殿南廂也。垂母屋六間并左右庇御簾。爲御所并女房所候。中央間二間。東者郁芳門院御所。西者一院御所也。其中立御屛風。關白候簾中給。其左右各三間。女房所候也。南庇左右妻各三間。敷高麗端帖三枚。中央間二間左右。各敷圓座一枚。爲講師座。南簀子敷左右各第二三間。敷紫端帖二枚。爲右方殿上人座云云。次左右方人參入集會所。承曆時。（左方弘徽殿。右方下侍。）　郁芳門院根合。（左東殿寢殿。右同御湯殿。）自餘不分明。

次剋限宸儀出御。　天德時。(申尅。)永承四年。(戌尅。)同六年根合。(御殿油後云云。)承曆。(戌尅。)亭子院。(巳尅。)郁芳門院根合。(及申剋始之云々。)根合。江記云。關白候簾中給。剋限出自御所御簾西妻。(本ノマヽ)候於簾下給。上皇又上御簾給。(高三尺余許云云。)又天德歌合時。上御簾之由。見御記。

次　有召。公卿相分着御前座。(或兼日分之。)永承根合。土記云。爰有御云。上達部相分可着者。以前有議云。子姪有殿上之人々。各可候其方云々。暫持疑待重仰云。依位次可相分者。

次左奏。　有或時無時公奏之。　天德幷永承兩度奏不見。承曆。左奏左大將藤原朝臣。(後二條殿。)無右奏。亭子院時。左中務親王。右上野親王奏之。亭子院時。左奏付櫻枝。右奏付柳枝云云。承曆時。經信卿記云。次數度蒙催之後。頭辨實政朝臣經東簀子進參。申於殿下云。奏候。隨殿下令候氣色。依有天許被御其由。頭辨退去之後。殿下令日大將云。奏可持參者。大將起座。經簀子。於東障子後。(左近少將隆宗取之立砌。件奏付松枝。)指笏候取之。入自座末經孫庇。當御前間膝行。懸膝於長押。捧候松枝。主上令取奏。又大將持枝膝行。左廻起去。至初所返給松枝復座。主上披覽。令置倚子左方。奏書樣。和歌十五首。其題々。年號々。唐紙(下繪。)有懸紙。左少辨季仲書之云云。

次右奏。

次立左文臺。天德時。童女四人舁之。永承兩度六位舁之。承曆。五位六位等。亭子院時。五位右童結髮。郁芳門院根合。左五位六位。右童女二人。長元三十講歌合。左右共六位藏人上﨟持打敷。

次置員刺具。舁人如文臺。或時無此事。內裏歌合員刺多小舍人也。郁芳門根合時。依上皇仰無員刺云云。

次立右文臺幷員刺具等。但天曆幷承曆。右方先立之。自余左爲先。

天德歌合。西記云。右方令持洲濱二机(一歌一籌。)參上。自御湯殿西邊獻。童子一人(着青色。)執地敷立御前。(高欄下。)一人敷地敷之後舁之立其上。次小舍人實正執銀花柳枝下居砌。次小舍人二人舁員指洲濱。置實正前。次左方自殿上侍方參上。童女一人執地敷。々御前坤如右。(頭書)如御記、小庭也次童女四人舁洲濱立地敷上。小舍人二人於砌下取傳。置員指前云云。　永承四年殿上記云。左方參入。舁文臺持參小板敷上。右方舁文臺置殿上侍。戌剋出御。左方舁文臺持參御前。(六位舁也。)立孫庇東第二間。亦舁員刺具。置簀子敷東方。(六位同舁之。)右方亦立同西第二間。置同簀子敷西方。(六位舁之。)敷所圓座各一枚。爲員刺座。(左右以大舍人一人爲員刺。)關白左相府直衣候御簾中。講歌未始之間。相府先覽左右文臺員刺具等。　同六年根合。同記云。左洲濱居御前。員刺小洲濱六人。一人捧置初洲濱

東邊。右方亦如左云云。承曆歌合。殿上記云。右方直自侍方昇文臺立御前。次員刺具。次左方云云　郁芳門根合。江記云。左方立文臺。登自東二棟廊前階。經寢殿東并南簀子。自南面御座間立之於燈臺北。（先敷打敷。）右方五位儀也　其童宿裝束也。第一童持敷物。自西并南簀子參入。登於御前間。敷圓座北。第二童持枕几帳一本。是爲文臺。乃置於錦帖之上云云。

次隨召供燈臺。　六位役之。隨便一兩所立之。講師前短燈各一本。根合時。最先供兩方燈臺云云　是依入夜始歟。又天德時以脂燭照之由見御記。左近少將伊渉。右近少將助信等役之云云。四條宮春秋歌合時。亦以如此。左少將忠俊。右少納言伊房。居兩講師中央云云。

次置講師并判者圓座。六位役之。

次奏參人音聲。　或時無此事。亭子院時。左黃鐘調。歌伊勢海。右雙調。歌竹河。以方殿上人等用之由見彼時記。　承曆時左雙調。次歌席田云云　根合時（郁芳門。）左方乘船。歌席田參上云云。經信記云。承曆時。藏人少納言基綱來上達部座後中云。（侍歟）欲仕令音聲。殿下令候御氣。天許了。方人招出三位侍之從令吹笙。侍從下立御障子後吹之。方人下立砌云云。

次召講讀師等。　先召講師。次召讀師。（各用圓座。）亭子院歌合時。左講師爲女房卷御簾五寸許讀之云云。　野宮歌合。橘正通一人讀兩方歌云云。

永承四年歌合　北御門右府記云。次召講師。左經信。右資仲。先自簀子敷。昇自御座間着圓座。（先是短燈臺各一本立。講者圓座北長押。御所西對南座之。）次左頭中將。右頭弁。各自廣廂進。居講師並講者後。取歌授講者云云。

承曆二年歌合。經信卿記云。次召講師。左師賢朝臣（名歟）入自上達部座末。候菅圓座。右通俊朝臣同參候。次左右籌刺者簀子座。左實政。々々經上達部前。候文臺傍講師後。右俊經。々々同進候。次被仰左右講師可進參之由。次左右籌刺童着座。（左若狹守子有賢。右丹波守子家隆。）次召藏人。被仰可敷判者座之由。藏人取菅圓座一枚。置（菅歟）御前間右程下。是新儀歟。依御氣色。皇后宮大夫起座。經簀子着圓座。次頭弁取子日歌令授講師。々々讀之云云。予今案。以讀師稱後居歟。籌刺幼稚之故有後居。有後居之時無讀師歟不審也。又天德歌合。或人記云。以講師。

次仰判者。　卅講歌合時。講師（或一）以前召判者之由見記。判者多爲公卿別座。而中三位不座列之故先召之歟。　判圓座臨期仰之。藏人役之。

次臨技講期。撰堪能者一兩。可進參之由仰之。根合時。左通俊卿。右匡房卿。應召候判者後長押上。殿上人候長押下云云。

次講和歌。　先左讀師取歌開之。授講師。々々讀之。次方（々歟）舉聲詠之。次右作法同前。一番若持者。二番猶出左歌。後云者負方

出之。若有持時付先番負也。亦有物合之時。先合其物。讀師取出之。講師受取之。置長押上。判者定勝劣。其後歌合云々。左右講師陳是非事無憚。(見永承歌合。)承曆歌合之時。經信卿記云。頭辨取子日歌授講師。々々讀之。方人依御氣色兩三度詠吟。次讀右歌。左大丞三度詠吟。關白被仰左右云々。有所申者各可申者。右講師幷後居起難次第。判者被申云。左猶勝候者。籌判之籌云々。　永承六年根合。土記云。左方經家進。居洲濱下取出根。長基進取藥玉。置御前長押上。以根曳展一丈一尺許。右資綱進取出根。其家受取置御前如左方。根長一丈三尺許也。(寬治根合作法又如此。)亦云。四番祝持。五番不因前番勝負。左方先可進者。是相撲最手。競馬十番等例也云々。同四年歌合時。最後番不依先次左先讀云々。見同人記。

次判定。　天德時。小野宮殿聊稱申不堪之由。請天裁云。自余不然歟。

次講畢。左右講師籌刺等退座。

次勝負舞。　雖負員多。最後番勝者可奏勝方舞歟。　根合。江記云。右方人議云。第十番歌若勝者。可奏勝方舞。是相撲時雖多負。最後番若勝者。奏納蘇利之故也。右中辨(師賴。)童時習此舞。適在此方。可用意云々。　天德時雖有方負。遲奏歌曲云々。

次勝方拜。　承曆時左方有拜。自余無所見之。　經信卿承曆歌合記云。殿下宣。左方。上達部云。若可有拜歟。人々被申云。拜尤可候者。公卿幷方殿上人列立庭中。(三行。六位又有五位後。)再拜復座。

次盃盤事。　天德歌合時。御厨子所供菓子干物。(重信陪膳。)次供御酒。左大臣起座獻盃云々。見西記。亦歌講以前。賜酒饌於方公卿云々。　永承幷承曆時。此事不見。自余歌合皆有此事。女房中或檜破子云々。　祐子內親王歌合時。盃酌數巡後講和歌云々。

次御遊事。　召堪能公卿幷殿上人等。令(同イ)藏人置御遊具。天德時地下召人相交由見御記。　承曆時用之。　永承兩度共無召人。　根合時依一院御忌月無御遊事云々。　永承根合時。主上令吹御笛。此由見土記。

次大臣以下賜祿。

大臣夏裝束一襲。大納言白合御衣一重。參議白單重御衣。自余疋絹。　三十講歌合時。判者中三位賜祿。(蘇芳生御袴云々。)春宮大夫。(賴宗。)中宮權大夫。權大納言等被曳馬云々。　祐子內親王歌合時。右大臣(大二條殿。)內大臣(堀川殿。)判者也。)各被曳馬云々。前駈者取之。　上東門院菊合時。人々賜御衣由。見假名記。自余歌合皆有祿。但式法不分明。　三十講歌合時。中三位賜祿。東簀子數起拜之間。超卿相座。是情感之余。不知手之舞足之蹈歟云々。

次有宿願事。後日果之。　三十講時。左勝方人八幡十烈。亦參詣住吉社講和歌云云。　永曆時。八幡賀茂競馬。根合時。左賀茂競馬。右八幡競馬云云。自余歌合無所見也。　承曆歌合。五六月依御忌月。三十日遂賀茂競馬。遂所事雖叶之故也。仍先八幡奉幣。（有告文云云。）

一歌合日裝束　亭子院幷天德歌合束帶。　永承四年。（傍書）（關白殿直衣云云。見殿上記。）　承曆時無所見。定束帶歟。（直衣布袴云云。直衣下襲。或本用後帶云云。）　三十講幷寬治時。直衣或衣冠。判者輔親卿直衣布袴。（直衣下襲用後事云云。）知足院入道殿仰云。經信卿語云。件日賀陽院東門より上達部の前驅あり。見之（行歟）猶親也。かひ練重ねを着。日出かりし事也云云。かひ練重は紅行に裏は張也。　四條宮春秋歌合。公卿或東帶或直衣。殿上人皆束帶云云。　祐子內親王歌合。大臣以下大納言以上烏帽子直衣。殿上人不得進（狩衣）從云云。獻歌者依召候南簀子云云。

主上御服不分明。若御直衣歟。但亭子院歌合時。檜皮色御衣。僧面色御袴之由。見假名記。

一歌合判者講讀師幷題者或撰者清書人等（但密儀幷次所不載之。）

天德四年歌合（二十番左勝）（去年殿上侍臣鬪詩。爾時命婦等相語曰。男已鬪文章。女宜合和歌云云。）
判者。　左大臣殿。（小野宮殿。）
講師。　左。左衛門督延光朝臣。
　右。右近衛中將博雅朝臣。
讀師。　不見。
撰者。　左。朝忠卿。　右。平兼盛。
題者。　勅題歟。
左歌。銀鶴含欵冬一枝。以黃金作八重葩。以青銀作數行葉。各書一首。　右歌。以色紙書小字。詠花樹歌。各結付其枝。題好鳥付。又令持其鳥嘴。至于春霞暮春首夏戀之詞。或在人手。或載漁舟云云。

寬和二年歌合（左勝。二十番。）
判者。　中納言義懷。
講師。　左。權中將公任朝臣。　右。左近將監長能。

永承四年歌合（十五番）（十一月九日。左右持。）
判者。　正二位權大納言源師房。
講師。　左。從四位上左馬頭源朝臣經信。
　右。從四位上右中辨藤原朝臣實仲。
後居。　左。藏人頭正四位下右近衛中將兼春宮亮右京大夫源朝臣資綱。
　右。藏人頭正四位下左中辨藤原朝臣經家。
題。　式部大輔國成朝臣。
撰者。

清書。　左歌。　兵衞佐師基。
　右。　侍從中納言乳母。故行賴女。
左。造松枝置匣中。以洛右索枝。其葉書和歌。
右。銀硯筥納草子十帖。繪以題趣。書以和歌。
五番
同六年根合(右記云。去三月晦。聞召堪能上達部一兩殿上人
等有弓事。畢有木雞獻。依其勝負有可令鬪根之仰云云。)
判者。　內大臣堀川殿。
講師。　左。　齋院長官長房朝臣。　　如土記。講師左良
　右。　右近中將隆俊朝臣。　　基。右基家云云。
題者。
撰者。
清書。　左。　散位公經。　　右。　兼行。
土記云。公經近日依處分事。付檢非違使廳使者。頗不落居事
歟云云。
左方。洲濱立松鶴。右立八足机一脚。其上置和歌一卷。五首書
此一卷。右立大鼓一面。其前立胡蝶舞童六人。其翼書和歌云
云。
十五番左書
承曆二年歌合
判者。　大納言顯房。(有雖判。不知作者。)
講師。　左。　左中辨源師資朝臣。
　右。　右中辨藤原通俊朝臣。

後居。　左。　頭辨藤原實政朝臣。
　右。　但馬守橘俊綱朝臣。
題者。　實政朝臣。
撰者。　左。　經信卿。　　右。
(頭注)
顯昭傳聞。右方匡房令撰之云々。
清書。　左。　左大辨伊房。(以金泥書之。)
　右。　藏人辨伊家。
左歌以方磬爲文臺。以鏡十六枚爲磬。其面以金泥書和歌云云。
右歌卷物三卷。各隨題目圖其趣。書和歌納銀透筥云云。
延喜十三年亭子院歌合(寬平法皇也。)
勅判。　臨期爲判者。令藤原忠房給之處。不參云云。仍勅判
　也。
講師。　左。　女房云云。御簾卷五寸許云々。
讀師。　題者。撰者無所見也。
(マヽ)
者自然流布云云。
(頭注)
霞歌付梅花時。鳥歌付橘。自余歌造鶴舟入。籌令持左右。無
　分別。尤不審。
故春宮大夫(師賴。)歌合。俊賴判之。而其俊加難判。賀陽院歌
合。經信判。櫻題歌。伯母與匡房合之。判者定持。而伯母大
學縁して後日訴申殿下。經信聞之。以消息且陳述。伯母亦陳
之。但區々末生之意。件番勝負無私見之如何。　奈良花林院

歌合。其後判。後日作者宗延法師出陳帖。　皇后宮春秋歌合。堀川右府判（猶歟）。大輔雁歌依病負畢。而有病歌古歌合に多由を稱て。於以有執氣。　高倉一宮歌合。同大臣判。資業卿櫻歌定負。後日宇治殿下閑居院（之誤）。資業參入候氣色。殿下令問云。誰人哉。答云。資業。被仰云。何等事哉。申云。可訴申之事候。亦仰云。如何。資業竊に彼櫻歌を讀上云。是以何所惡て負候哉。除（深歟）懸思給候云云。殿下暫案仰云。所申尤然云云。資業逡巡て申云。是を爲承候。百除憐思給也。有悅氣退出云云。　凡和歌評定。叶傍輩之意事極大事也。況面々作者意哉。先賢皆如此。能々可用意事也。　長元歌合時。經信卿生年十八也。爲參河權守。舍兄經長卿爲藏人辨。件歌等を爲評定（云歟）。以經長四條大納言長谷に遣之。經信所望經長車後。參納言公。被何料光臨哉。經（信歟）長云。爲承御評定趣所望て參上也。納言有興之由を示。仍件判定詞等を具以聞之云云。

長元歌合の日。能円（ら歟）衣裳して竊入て聞之。戀歌に。

黑髮の色もかはりぬ戀すとてつれなき人に我そ老ぬる

といふ歌を讀りと思ひて。勝負聞に參入也。而敵方より。

逢ふまてとせめて命の惜けれは戀こそ人のいのち成けれ

と云歌を講すと聞て竊退出云云。非歟之由存歟。

高倉一宮合。歌人。左大貳三位。江侍從。伊勢大輔。出羽辨。小辨。相摸也。右資業。兼房。家經。範永。能円等也。今一人を兼長經衛競望之。而兩人入女房一人不足。亦一人を抽入は等同者有懇望。又共に不入は女房一人可餘。宇治殿思食煩。于茲堀河右府以加賀左衛門抂て吹擧。無許容。是未至之故歟。仍兼長經衛等爲試當坐賜題云。水邊款冬。兼長歌云。

いかなれは岸に八重咲山吹のひとへに池の底にすむらん

經衛歌云。

池水に咲かゝりたる山吹を底にしつめる枝とみるかな

右府判云。持也。是入兩人て女房不足の所に入左衛門を志也云云。滿座は兼長勝と思へり。然間兼長服假に成て。遂被入經衛云云。昔事能有淸撰歟。

（此事有上啓）或物云。宇治殿下被仰云。齋宮女御歌合は左右歌忠見一人讀之云云。予見彼家集實也。左料右料共に讀之。

（同）又同女御天曆十年歌合。（號麗景殿女御歌合。）左歌は兼盛。右歌は中務各一人して讀之云々。

（同）三十講歌合時。相摸所詠の

五月雨はみつの御牧のまこも草苅ほす隙もあらしとそ思

此歌講出時。滿座殿中鼓動及郭外云々。

江記云。俊兼曰。先年故土御門右府大納言時歌合。棟仲爲講師。而有露被褒由歌。敵方難之。棟仲當坐稱古萬葉集。讀出證歌一首云云。右府後日被感。予曰。當座讀宜歌之旨。雖似攙對。

至（稻歟）虛言者於無便事也云々。

（同）郁芳門院根合時。江記云。右中辨師賴曰。尾張守許孝善來向所。鹵莽（住吉神主。）歌未見之前破却。可入孝善歌之由申請入之云々。彼時左右相挑之間可爲嗷々。匡房卿云。右大辨通俊歌。至予者不被挑。前年書狀于今猶有之。其書云。和歌之道。雖能宜忠岑不可恐之。於貴殿者深所恐申也者。件書狀爲明鏡。何可忘彼書哉。俊兼聞之大咲云々。件歌合に左方人以中納言中將（今入道殿下。）爲言口无心云々（北本）隨殿下頻令制止給。少年之人不知和歌案內。何爲殿上人之言口乎。就中累葉之祖風无此例云云。（已上見江記。）

一古今歌合難（尋古跡可載。）

延喜十三年亭子院歌合（勅判。）

二番櫻

左　　躬　恒

さかさらん物ならなくに櫻花おも影にのみまたき見ゆらん

右　　貫　之

山さくら咲ぬる時はつねよりも峯の白雲立まさりけり

左。らんと云事ふたつあり。右は山峯といふ事またありとて。持になりぬ。

賀陽院歌合に。以此例山與峯に准據て。耋與日疑病。又俊賴基俊同引此例。以山峯稱病。但此評定少有不審。彼判詞能可了見歟。就中以山峰爲病は。河を讀て淵瀨とは不可詠歟如何。

三番

右　　是　則

みちよへてなるてふ桃の今年より花咲春におひそしにけるとしと云へきとをよとよめりとてまく。

四番櫻

左　　伊　勢

磯上ふるのやしろの（山イ）さくら花（イ无）こそみし花の色やのこれるこそなこひて。ことしの心なしとてまく。

七番

左　　躬　恒

わか心春の山へにあくかれてなかなかし日をけふも暮しつ

右（勝）　　貫　之

さくらちる木の下風は寒からて空にしられぬ雪そ降ける

左。なかなかしと云事にくし。いちすくめてかたすへたるやうにて。つふやけりとてまけぬ。

二十一番

左（勝）　　〔源元方（躬恒とも）（亭子院歌合）〕

けふよりは夏の衣に成ぬれときる人さへはかはらさりけりきる人さへはあちきなしとてまく。

(頭書)私考。寛平御時后宮歌合歌。古今。
ちられ共かねてそおしき紅葉はゝ今は限の色とみつれは
又考。同歌合。

七番左 勝　小式命婦
足引の山かくれなるさくら花散のこれりと風にしらすな

右　中務
年ことに来つゝ我みる櫻花かたみも今はたちなかくしそ

左歌。いとおかしくてさそありなん。右歌。いつこそ頗荒涼也。今はといふとよしなきとなり。仍以左爲勝。

天徳四年内裏歌合(判者小野宮殿。)

三番 鶯

左 勝　朝忠
我宿の梅か枝に鳴うくひすは風のたよりに香をやとめこし

右　兼盛
白妙の雪ふりやらぬ梅かえに今そ鶯春と鳴なり

右歌。春となくとそらとなりとて負乎。今案に春となくとは春になりたるけしきになくなり。

八番 款冬

左 勝　源順
春ふかみ井手の川なみ立かへり見てこそゆかめ山吹の花

右　平兼盛
ひとへつゝ八重山吹はひらけなん程へて匂ふ花とたのまん

左歌いとおかし。あゝ事なりときこゆ。右歌は八重山吹の一重つゝひらけは。ひとへなるやまふきにてこそあらめ。心はあるにゝたれとも。やへさかすはかひなくやあらん。又下句のはて。上の句のはてに同しもしあり。仍以左爲勝。

九番 藤

左　朝忠
(頭註)續古今云天徳歌合例歌
紫に見ゆる藤なみうちはへて松にそ千代の色もかゝれる

右 勝　兼盛
我ゆきて色見る計住吉の岸に藤なみおりなつくしそ

水なくて藤なみといふこと古歌におりおりあり。されと尋人なけれは。さてとゝまれる歟へし。歌合にはいかゝあらん。とによせぬはいはれなし。猶水岸なとにそよすへかりける。歌はきゝけなり。右。おなし波あるに。岸によせたれはたよりあり。かくそふるきしにある藤なみと。をしなへていふ事にはあらす。御氣色もさやうにそみゆる。小臣問源大納言。尤難也。暫持疑之間。右方人申云。左歌。藤浪水によらすいかゝと愁申事。理無可然。仍以右爲勝。是爲例。國信卿歌合に隆源歌に。無水て波讀を爲難。作者陳云。貫之歌に。

待つけて諸共にこそかへるなれ波より先に人のたつ覽
といふに。重難に。天徳歌合にも。古もなきにはあらねと
も。歌合には猶可避之由有と云々。予今案に。古今集。
我宿にさける藤波立かへり過かてにのみ人のみるらん
云々。又有萬葉集如何。又云。
藤なみの花は盛に咲にけりならの都をおもほゆやきみ

十一番　初夏

左持　　能　宣

なく聲はまたきかれとも蟬のはの薄き衣をたちそきてける

右　　中　務

夏衣たち出るけふは花櫻かたみの色もぬきやかふらん

左歌は夏のはしめとおほゆれと。右はたちいつるとあれは。左よりはよしとそおほゆる。されと歌から同とて爲持。

十二番　卯花

左　　忠　見

道とをみ人もかよはぬ奥山に咲るうの花たれとおらまし

右勝　　兼　盛

嵐のみさむきみ山の卯の花はきえぬ雪かとあやまたれつゝ

左右山の卯花をしもおもひよりけんそいかゝ。右。同やまなれとさままされり。仍爲勝。

十四番　時鳥

左持　　忠　見

さよふけてねさめさりせは時鳥人傳にこそきくへかりけれ

右　　元　眞

人ならはまてといふへきを時鳥ふた聲とたになかて過ぬる

左はきかむともおもはてねさめけんそあやしき。歌からおかし。右。人なりとも今一聲きかんとて。まてといかゝいはん。しはしまてなといふ心か。ことたらぬ心ちそする。いつれもおなしほとの歌なれは持にす。

十六番　戀

左勝　　朝　忠

人傳にしらせてしかな隱れぬのみこもりにのみ戀や渡らん

右　　中　務

むは玉の夜の夢たにまさしくはわか思ふ事を人にみせはや

左。いとおかし。つゝき事なけれとさてありなん。右。よるといふとはぬはたまとそいふよし。むはたまとかけり。かきあやまれるにやと共由奏すれは。誤あらはいかゝと仰事あれは。左勝。

十八番　戀

左持　　本院侍從

人しれす逢をまつまに戀しなは何にかへたる命とかいはん

右　中務

ことならは雲井の月と成なゝん戀しきかけや空にみゆると（上脱字）

左右さても有なん。右。上下句首字同にくさけにきこゆ。

左人まうせと。させる難にはあらぬにこそ。仍爲持。

應和二年内裏歌合（五月四日。判者不注。若判詞歟。）

六番　待郭公

左勝　侍從佐理

五月雨にふりてゝ鳴と思へともあすの爲とや音を殘すらん

右　靫負藏人

菖蒲草ねを深くこそほりてみめ千年も君もひかんと思へは

ほとゝきすといふ事なけれと。歌のすかたきよらかなりとて。左勝。

八番

左持　[illegible]助文則

夜もすから待あかしつる時鳥いつかは聲をきくへかるらん

右　美作藏人

菖蒲草下たねもえぬに時鳥いつかとまたて聲をきかはや

歌のすかたまさりたれと。またねも見えぬにと。わたくし心あるににたりとて。持になりぬ。

九番

左　文章生共政

五月雨のけふまて忍ふ時鳥いつかあくまて聲をふりてん

右勝　倉命婦

夜もすから待明しつる時鳥いつかあやめの音をはきくへき

戀のこゝろににたりとて左負。

野宮歌合（天暦三年八月十八日。判者闕。）

二番　女郎花

左勝　帥君

玉のをゝみなへし人のたゝさらはぬくへきものを秋の白露

右　有忠朝臣

くらふ山ふもとの野への女郎花露の下よりうつしつるかな

有忠か歌誤ちあり。うちすきたり。くらふ山まてもとめありきけんといなしかたやまことにいひにくきことをこそそへてはよめとて。

天暦歌合に以此句吉備中山霞を爲難。近代歌合に又少々此難出來。但前大相國歌合に立田山霞難之。而判者故寄作。古今集の龍田山の鶯聲の歌をひいて不爲難之。

四番　蘭

左勝　清君

わかれゆく秋ををしらに鳴虫は涙をさへつゝめかねらん

右　守文

あたしのゝ草むらにのみましりつる匂は今や人にしられん

守文。あたしのゝ花。なたかゝらされはにやあらん。あり所しる人すくなし。辨君歌。かみには花もなくてしもに匂ふとある。おほつかなし。ことなる事はなけれと。いまひともしをくして。しらにとあるをすこしまされり。

五番　草香

左　　左衛門

とこ夏の露うちはらふよひことに草のかうつる我袂哉

右勝　　爲憲

野へことに花をしつめはくさ〳〵のか移る袖そ露けかりける

左衛門君すこしやはらかなれとも。かみの草の詞も上のくさにて。下はかりをかくしたれは心もえす。人にかくれん人の。身をのみかくして。かほ見られんはいはれなしとて負。

九番　苅萱

左勝　　小榮人

ゆく秋の風にみたるゝかる萱はしめゆふ露もとまらさり鳧

右　　菅野忠延

移しうへはつかのまもなく苅萱のみちよの數をかそふ計そ

忠延かみちよのかすといへる。秋のゝかるかやにはあらて。春の山へにさきたる桃のはなとなんおほゆるとて負。

十番　虫聲

左勝　　但馬君

淺茅生の露ふきむすふ木からしにみたれても鳴虫の聲哉

右　　橘正道

秋風に露をなみたと鳴むしの思ふ心をしる人そなき

此の虫の音は露ふきむすふといへる。いひなれたりなと定ほとに。正通か申すやう。木からしとは冬の風をこそいへ。この比の風をもいはゝ。雨をも時雨とやいふへからんと申をきゝて。みすのうちよりそかゝる事はふるきことをこそはためしにはせめ。

木枯の秋の初風吹ぬるをなとか雲ゐの鴈の音せぬ

又

我宿のわさたもいまたからなくにまたき吹ぬる風の風

なといへるは。冬のあらしを秋のはつ風といへるにや。そのわたりをさため申たまへとあるにつけてかちぬ。

三十講歌合(長元八年。判者中三位。)

三番　池水

左　　資業卿

千世をへてすむへき水をせき入て池の心にまかせてそみる

右勝　　四條大納言(或本中納言)

年をへてすむへき君か宿なれは池の水さへにこらさり鳧

上眞實秀歌之故歟。尤可然。以之思之。當家主人君は時貴

人准據之可用意事也。又雖有少々咎。敵歌劣は隨運て判定常事也。

承暦後番歌合の祝歌に匡房卿詠云。

君か代は行衛もしらすわたつみの苗代水に成かへる迄（字脱）

是勅判云。長元歌合にも。山の海と成あちなしと被定たり。是心似たり。左歌は心行ても不覺とて定持御。

又賀陽院歌合時。通俊卿歌雖犯病。敵歌依不勝被定持。是先例也云々。又郁芳門院根合之時。判者右方人竊示云。一二番歌右勝也。然而依無益所持列也云々。如此之用意先蹤也。

又判者里亭有判定事。判者一人求强理。極大事也。故老云。判者勿强難之。勿强好之。唯難遁所許を可咎云々。而如前金吾之判大略放言也。不甘心。又於當座難判定。其後於里亭閑加取捨之詞常事也。野宮歌合も可然。

又判者爲撰者常事歟。皇后宮春秋歌合。左歌は判者大臣撰之云々。

又判者爲作者之時。至我歌者所加判故實歟。但人々心々也。基俊云。或所歌合相兼判者之時。判詞之爲判者之人不詠歌者例也。假雖詠歌。於自作之番不加判。是故實也。仍不加判云々。（大治三年八月西宮歌合基俊爲之所判顯仲卿所定持者也）雖然殿下歌合時。又有勝負。若是御定歟。顯仲卿爲判者之時。以我歌皆爲負。（中御門中納言歌合。）俊賴朝臣爲判者之時。以我歌定負。（殿下歌合。）

將作殿爲判者之時。有勝負。（右武衛歌合。）六條右府爲判者之時。有勝負。（根合。）經信卿爲判者之時。有勝負。（扇合。）堀河右大臣爲判者之時。有勝負。（永承根合并四條春秋歌合。）輔親卿爲判者之時。以吾歌爲持。（但一首也。三十講歌合。）

但六條右府以下は人に代て詠也。

故人云。和歌判者は非荒凉者之所爲。一者家重代者若は達道者。次者高貴有威權人云々。予今案。雖如此之輩。皆難遁誹謗歟。弘徽殿女御歌合義忠判之。家經并相撲等加難判。承暦二年歌合。六條右府判之。又有難判。不知作。

上東門院菊合（十番。長元五年十月。）（御堂女）

判者。

講師。左。中宮權亮藤原兼房朝臣。　右。左少辨源經長朝臣。

讀師。

郁芳門院根合（十番。寛治七年。左右持。）（白河院皇女）

判者。　右大臣。（六條右府。）

講師。　左。四位侍從藤原宗綱朝臣。　右。右近少將源能俊朝臣。

讀師。　左。藤原季仲朝臣。　右。右中辨源師賴朝臣。

題者。匡房卿。
撰者。左。右大辨通俊。　右。右大辨匡房。
淸書。源大納言雅實書左右歌。
江記云。源大納言雅實書兩方歌。左方愁之。天德詩合時。道風書兩方詩。强不可爲愁事也云云。
左以沉作鏡筥。以懸枕爲和歌䉼(料紙)紙。縹色ゝ紙。以水精爲籍軸。一卷書五首。右以枕几帳一本爲文臺。銀手歌云。居其帳白浮泉綫。其上銀銅薄色紙形染之。書和歌云云。

十番 同院前栽合(嘉保二年。右勝。)
判者。左大臣。(堀河源左府。)
講師。左。左中辨宗忠朝臣。　右。右近少將能俊朝臣。
讀師。不見。
撰者。同。

十番 宇治大女寛子 皇后宮春秋歌合(天喜四年。左勝。四條宮。)
判者。內大臣。(堀河右大臣。)
講師。左。權亮藤師基ゝ。　右。亮藤師基ゝ。
讀師。左。頭中將源隆俊。　右。頭中將顯房。
題者。
撰者。左。內大臣。　右。民部卿長家。
淸書。左。兼行。(以眞名書之。)　右。左兵衞督經任母。
土記云。前一日左方人向內大臣家(判者。)撰和歌。右方向民部卿家(長家。)撰定。民部卿以自作多入。方人含咲者衆云云。亦云。左方和歌書之人相違。忽議定云云。日來定故入道中納言息。(行成卿女。)而觸穢云云。仍語暫典侍故參議輔正女。稱所勞不書云云。仍有殿下御氣色。以兼行以眞名令書之云云。左。銀舟盛和歌葉子十帖。畫工圖歌意。右。鏤金銀鏡臺。以和歌二卷爲鏡枕。各繪歌意。以金爲表紙。

十五番 同宮扇合(寛治三年。右勝。)
判者。民部卿源經信。
講師。左。侍從宗信。　右。辨基綱。
讀師。
撰者。

十番 村上皇女規子 野宮歌合(天祿三年九月二十八日。左勝。員八番。)
判者。前和泉守源順。有判詞。
講師。加賀掾橘正通。讀兩方歌。

後朱雀皇女 祐子內親王歌合(永承五年六月五日。)
判者。內大臣。(堀河殿。)
講師。家經朝臣一人。讀兩方歌事。或本ヽ、
讀師。
以女房爲左。以男爲右。各相番合之。和歌又造各草。其間互施風流云云。

後朱雀皇女 正子內親王造帋合(三番。)

判者。不見之。
講師。左。四位少將。　右。兵衞佐。
左。銀透筥入古今草子帖。右〔[illegible]〕紫造紙一帖。右。銀透筥納給
遺番六帖新歌繪草子一帖。
麗景殿女御歌合（十二番。左勝。）
判者。
講師。左。延光朝臣。　右。保寛朝臣。
十番
弘徽殿女御歌合（長久二年。右勝。）
判者。大和守藤義忠朝臣。（有宗經相撲事雜判。）
講師。
京極御息所歌合（延喜二十一年三月。左大將戰敗。二十二番。
左右放歌。）
判者。大和守藤忠房。
春日詣以忠房所獻之歌返被合云云。
法成寺
御堂歌合（長保五年。七番。右勝敗。常非歌合儀。）
判者。左衞門督公任。
講師。
三條太政大臣前栽合
無判者。
講師。左。紀時文。　右。平兼盛。
宇治殿
三十講歌合（長元八年五月十六日。左勝。）
十番
判者。祭主二位輔親。
講師。左。左少將經長。　右。右少將資通。
讀師。左。右近少將行經。　右。中宮亮兼房。
左。以十枚書和歌。納銀透筥。右。作銀鐵枝插內。銀葉各書
和歌十首云云
寛治七年
高陽院歌合（左勝。）
七番
判者。帥大納言經信。
講師。左。右大將基[illegible]。　右。右中將宗忠。
女爲左。男爲右。相番合也。
一撰者故實　雖非秀逸。可然云〔之〕公達并重代者歌必可入之。又雖
重代後生未練歌不可有議之由。匡房卿所示也。但不秀逸之
時事也。於秀歌者不可依人。寛治根合。右撰者匡房卿也。作
記云。大輔（俊實。）歌中五月雨歌尤宜。唯水押沈來等若爲
病歟。仍不入之。戶部（經信。）邊歌須一首必入也。然而於不快
也。仍不入之。故伯母歌一首必可入之。是頗甚。能宜。輔親。伊
勢大輔。伯母。安藝等六代相傳之歌人。兼俊新說。等無用意
哉。然而無宜歌。仍親歌可收拾之由。度々示之。賴綱朝臣好此
道經年之者也。其舞雖俊朝臣歌須入一首。而無宜歌。又讚左
方歌之由有風聞。仍不入之。抑女房歌中淺沼。（人々云。太遼
遠也。）仍除之。件沼在陸奧。京都所爲一月余路也。不可逢今
日事。所引之菖蒲定黃損歟云云。又云。大貳女房歌時鳥歌入

之。爲譜代歌仙之故也。紫式部。故六貳三位幷件女房也。亦云。左方不得等一。以孝善（靑侍門。）歌立一番。以成元盧橘之歌立二番。若非佳境者。如然耄歌不可必入之云云。　長元歌合時。四條大納言入道居長谷。左方人々行向令撰歌。能因時鳥歌云。

時鳥きなかぬ宵のしるからはぬる夜も一夜あらまし物を

入道云。歌合には不似云云。仍不入之。予案之。夜と夜と何不快之故歟。又月歌云。

月影の更にひろまとみゆる哉朝日の山をいてやしぬらん

此歌可入云云。而聞能因歌之後云。更字別樣也。不可入云云。歌事古今依人歟。於秀歌者少々雖有瑕瑾可撰入歟。先蹤多存。天德歌合。順歌云。

こほりたにとまらぬ松の谷風にまた打とけぬ鶯の聲

不留ヌ。不解ヌ。如近代之說は病也。但近代義難指南歟。　三十講歌合に堀川右大臣歌に。

あふまてとせめて命の惜けれは戀こそ人の命なりけれ

介禮。々々。又病也。亭子院歌合にらんらんを定病。是同事也。但大宮左府語云。此歌有病事。作者幷方人不覺悟。講時判者又感歎云。歌者本來者也云云。此時作者大臣有病事を始覺悟して責躬給之處。遂無沙汰勝畢。後日相改之。白筆集には命のおしきかなと被書。事外劣也云云。　皇后宮春秋歌合に大輔歌云。

さ夜ふかく旅の空にて鳴鴈はをのか羽風やよさむ成らん

是は無左右病也。而作者縱雖誤。撰者皆（他）多方人等不覺悟哉。唯不堪優美。取出之又入之歟。彼歌合假名記にも存之由見。件記者大輔歟。長家卿云。己か羽風や寒氣かるらんと可讀云云。誠々末生猶不甘心事也。

重服人歌合作者以無恒事歟。一條院御時。弘徽殿女御歌合。相摸爲重服者讀之。見（且本）摸之歌判也。判者骨法雖存當仁之由。當座仰者一重者稱不堪可固辭歟。天德歌合判詞云。左右歌讀合畢。勅小臣曰。可定奏勝劣者。逡巡奏云。小臣雖纔備三十一字。難弁勝劣之義。伏請天裁。勅云。不定勝劣。已失今日興結後代瞽歟、速猶可定申者。過天氣不許。表空慮之尤拙而已云云。又三番詞云。右講師博雅朝臣誤讀柳歌。左方云。須讀申櫻歌。而誤讀申柳。於今者不可讀申歟者。以左歌論申旨奏聞、仰云。可被定申者。小臣奏云。左方之所申非無謂。如是事只隨時之議。但依人之誤。何無其歌。仍令讀申。于時博雅朝臣頗變色。速不讀之。雖讀揚其音振被由。右方人咲云云。

廿番

左　忠見

戀すてふ我名はまたき立にけり人しれすこそ思ひそめしか

右（勝）　兼盛

忍ふれと色にてにけり我戀は物やおもふと人のとふまて
小臣奏云。左右歌共以優也。不能定申勝劣。勅云。各尤可歎美。但猶可定申者。小臣讓大納言源朝臣。(西宮殿也。)敢屈不答。此間相互詠揚。各以請我方之勝。小臣頗候天氣。未給勅判。令密詠右方歌。源大納言密語云。天氣若在右歟者。因之遂以右爲勝。有所思暫持疑也。但右歌甚好矣云云。故老云。此日兼盛正衣冠參陣。終日祗候。聞此歌負之由。拜舞退出。至自余歌勝負は不執云云。

長元八年三十講歌合記云。左右每番和歌。判者(輔親。)以相定。第四番題菖蒲。而左方先讀、擬奏歟。次右方出菖蒲歌。依有乖違改獻同題歌、各判決之後。右方題之次第已以違亂。待御定之後。可獻次歌者、殿下仰云。天德歌合時。一題依違。兩歌奔競。乃是勝負未決之前。辭論秀興之故也。而今評定之後。奈何論議。不致前詞。何有後來哉。仍右方歎罷奏歟。又至于講照射之比。右歌有燈之詞。左方云。以照射稱燈。古今之作所未聞也。彼此交爭。左方遂勝云云。

永承四年歌合。判者土御門右府記云。次左頭中將。右頭辨。各自唐廂進居籌刺。弃講者後取歌授講者。此間主上直勅下宣日。可申歌善惡者。事起卒爾。既忘進止。因然之間稽首稱唯云云。

同六年殿上根合。同人記云。二番左先進。右亦進。右方根少許長歟。而相論未有一定之間。按察大納言押左詞云。彼此持可定者。爰內府(判者。)大咲曰。勝負不定之時請持。是巳稱負也。右方殊無陳詞。爲負畢云云。又云。一番菖蒲。左方先讀。方人舉聲詠之。次右讀一兩詠之後。內府(堀川右大臣。)被申云。今夜根事爲先。勝負在彼。主于和歌。必不可被定勝負歟。有猶可被定申之仰。仍被定持。二番時鳥歌也。右方讀云。右勝。五番歌。(最後番。)內府被申未列之由云云。

皇后宮春秋歌合。土記云。二番。右七夕。左春日祭。以春日祭不論善惡爲持云云。判者堀河右府。

郁芳門院根合時。六條右府爲判者。一番左右歌講之後。左右方未申左右之間。判者被申云。可爲持。依爲一番也。二番歌讀了。後日左右可申各理。其後左右相互致難。後評定之。或時判者難之、又陳之。常事也。承曆歌合時は、一番左右歌讀畢後。關白殿仰曰。共有無事判申。此後方人難陳之。

永承四年歌合時。一番左右歌讀畢後。內大臣殿(大二條殿也。)曰。春日と讀歌は爭可負哉云云。于時殿下(宇治殿。)有甘心氣。仍無左右爲左勝。歌曰。

春日山岩根の松は君かため千年のみかは萬代そへん

此後無止事神明を奉懸歌をは定勝。左右共同詠つれは爲持。且是勝劣依有恐歟。

又寄祝たる歌なは不負云云。雖如此存。誠に秀逸之時定勝負

常事也。
三十講歌合
一番　月
左勝　　長家卿
夏の夜も涼しかりけり月影は庭白妙の霜と見えつゝ
右　　赤染
宿からそ月の光もまさりけるよのくもりなくすめはなり兒
右は一番歌とよみたり。はしたなく思ひたれと有限て。左
そおかしきおほえありて時になん云云。
又野宮歌合。寄祝歌被定負。如此事隨時て可斟酌歟。一番左
歌は可優之由。故人所申也。然侯哉。前大相國參議之時歌合
は故將作判也。其詞云。右勝と可申とも。左一番は猶思給て
持由云云。古今歌合に一番右勝例多不見者也。但弘徽殿女御
歌合。義忠判之。
一番　霞
左　　相摸
春のくるあしたの原の八重霞日をかさねてそ立まさりける
右持　　侍從乳母
春は猶千種に匂ふ花もあれとをしこめたるは霞なりけり
このあしたの原。ひとゝころにやへよりもまさりて立そ
ふとはへるは。かしこはかりに春の心いふせく見えはへ
り。
小野宮右大臣歌合
一番　春花色
左　　少將君
露をきてあすもみるへき花なれと暮ゆくをしき花の色哉
右持　　友則
ほのかなるおりはわかれと花の色の霧たちさゝる秋の夕暮
今殿下歌合
一番　旅宿鴈
左　　俊頼
限ありていそき立ぬる庵の内に誰をたのむの鴈したふらん
右持　　源定信
武藏野に旅ねする夜の淋しきにたのむの鴈の鳴そうれしき
野宮歌合
九番　苅萱
左持　　小業人
行秋の風にみたるゝかる萱はしめゆふ露もとまらさりけり
右　　菅原忠延
移しうへはつかのまもなく苅萱のみちよの數をかそふ計そ
此かるかやの歌は。忠延かみちよの歌といへる秋のみか
るかやにてはあらて。春の山へにさきたるもゝの花とな

ん思いてらろゝ。とのはゝこはく見ゆれと。すまひくさ露
にはうつろ物にそ有ける。

顯昭考承曆後番歌合

一番　子日

左勝　皇后宮美作

ふた葉なる子日の松を引うへて花さく春は君そみるへき

右　匡房

けふよりは子日の松をひきうへてやな万代の春をこそまて

勅判云。尤可仰也。

此等之外殊不見及者也。〔已上歟〕義忠判は有由緒。右を多令勝之由。彼持人申云云。若件故忘法猥致偏頗歟。將優左歌之儀。近代之會稀歟。次歌合等は依爲蜜儀。又不存故實歟。就中至俊賴は依爲判者輩優吾歌歟。　又御製者不負云云。古今之間有御製之歌合。延喜十三年亭子院歌合。有御製二首。無左右爲勝。件歌合勅判也。仰云。御製爭可負哉云云。　皇后宮春秋歌合。或記云。左十番祝有御製云云。滿座傾耳。所陳是非。已爲左勝。左方人不同右歌而起座。頗有稱雄之氣色。是御乳母三位入左方。俄申下御製歟云云。左本紙破取歌程。押葉紙端。主上蜜々渡御簾中云云。右歌雖詠住吉松已負畢。爲御製之池のみつくきにころよもなし。左せきいろゝわろしとてまく。

五番　瞿麥

左勝　定賴

とこ夏の匂へろ庭はから國におれろ錦もしかしとそ思ふ

右　赤染

庭のおもにからの錦をしく物はなをとこ夏の花にそ有けるなをとこなつわろしとてまく。

八番　照射

左勝　公資朝臣

さ月やみ天津星たにいてぬ夜はともしのみ社闇にみえけれ

右　赤染

五月やみほくしにかくろ灯火のうしろめたきを鹿やみろ覽

右にとのはのきこえいみしうおかしとあるほとに。左ともし火とあろ。うたかひあけて申せは。右ほくしにかけたりといひたれは。ことさらにほくしといふことなしと申に。ともしひは家なとにともしたろをいふとかたく申せは。とはりとて左勝。

予今案。非無證歌。萬葉歌に。

山のはに月かたふけはいさりする蜑のともしひおきに

奈津左布云云。同集。久かたの月は出にけりいとまなくあまのいさり火ともしあへろみゆ。又考。同集。きの國のさかひの浦に出て見れは國のともす火浪間よりみゆ。

九番　祝

左　　　能因

君か代は白雲かゝるつくはねの峯のつゝきの海となるまて

右勝　　藤原爲盛女〈爲房朝臣代歟〉

思ひやれやそ氏人の君か爲ひとつ心にいのるいのりを

海も山になり。山も海にならはあしかりなん。海はうみ山は山にてあらんこそよからめ。いま〳〵しとて左負。

弘徽殿女御歌合（長久二年二月。判者義忠朝臣。）

七番　蛙

左勝　　良暹

みかくれてすたく蛙の諸聲にさはきそわたる井手のうき草

右　　赤染

かへるへき道もとをきに蛙鳴さはへに日をもくらしつる哉

やまとうたは事のおこりやかてあるをよむなり。かはつは夕くれより鳴はしむるものとしりて侍るを。澤へに日をくらしつと侍れは。つとめてより聞はしめて、をのゝえをくたしけん人のたとへにおほえ侍。さてすたく蛙は聞ところもまさりて。末代にはかゝるをは有かたくや侍らんとそ見え侍。

十番　祝

左持　　永成法師

君か代は末の松山はる〳〵とこす白なみの數もしられす

右　　赤染

なぬかゆく濱のまさこの數とにいはほとならん程なへこ君

なぬかゆく濱のまさこといふそけ。祝のかたにはたしかに侍れと。ふるとのかきりはへり。末の松山はうたすかたはおかしけれと。男女のいかにそやある恨みの歌とおほえて。祝のうたにはきこえす侍れはとて持なり。

義忠朝臣歌合（萬壽二年五月五日於任國合之。自判之。）

七番　瞿麥匂露

左

なてしこの露に匂へるませの内に其色ならぬ草もめてたし

右勝

なてしこはとこ夏に咲草なれと露に匂へる色はことなり

左。ませのうちのをくさをさへめてたしとよめる心は。むさし野のむらさきのたとへをひきて。この花のめてたきよまんとするほとに。心はあまりて詞のたらぬ也。右。ふることなれは。歌の姿はあらはれにけれと。させることはなけれは。すまひくさのかちかたにとるならん。

八番　水上夜螢

左

五月雨のやみはあやなし汀なる螢のひかりかくれなけれは

右

いさり舟棹さしのほる水のうへにほたるは夜そ光ましける
左。やみはあやなしとよめる。色こそ見えねと云ニハ難の
なこかましさに。右いさり舟。さしすきてかゝり火の見え
ねは。歌の面のつゝき心えかたくて。西の京のつゝみのこ
ゝちしてなん。

永承四年内裏歌合(判者土御門殿。)

八番 池水

左勝 侍従乳母

君かためのとかにすめる池水にむれたる鶴は心してゐよ

右 伊勢大輔

池水のよゝに久しくすみぬれはそこの玉もゝ光見えたり

玉藻はひかりやはあるとて負。

皇后宮春秋歌合(天喜四年四月二十日辛巳。判者堀河殿。)

十番
一番 臨時客

左勝 小式部命婦

春たては松引つれて諸人も萬代ふへき宿にこそくれ

右 八月十五夜月 伊勢大輔

くもりなき空のかゝみとみゆる哉秋の夜なかく照す月かけ

空にさたまりて鏡のあるかとて負。

三番 櫻

左勝 内大臣

春雨にぬれて尋ん山櫻雲のかへしの嵐もそふく

右 駒迎 隆經朝臣

ひく駒の數より外に見えつるは關の清水のかけにや有らん

みつのかけにとある。心えすとて負。

予傳聞之。馬迎也と被難云云。

四番

左 大輔

山里のかきねに春やしろからんかすまぬ先に鶯の鳴

右持 鹿鳴草 美濃

おりやせんおらてやあらん秋萩の露も心をかけぬ日そなき

かすまぬ先に。こゝろえす。まつかすみこそとて負。

五番 子日

左勝 頭中將顯房

いつれをかわきて引まし春の野になへて千年の松の緑を

右 鴈 大輔

さよふかく旅の空にて鳴鴈はをのか羽風や夜さむ成らん

まことに身にしむ歌也。藤内大臣殿おかしからせ給ふ。左
より右歌夜ふたつありとて右負。

六番 梅

左持(勝歟) 相摸

いはまもる水にそやとす梅の花木末は風のうしろめたさに

右　鹿　　長家卿

高砂の尾上の鹿をゆく舟はうら悲しくや過かてにきく

しかをゆく舟と心えす。末はいま〳〵しとてまく。

公基朝臣歌合（康平六年十月。判者範永朝臣。）

三番　菊

左

いつのまに紫ふかく成ぬらん初霜はかりをけるしら菊

右　　津守國基

我宿のまかきに菊をうへさらは花みぬ冬やさひしからまし

左。歌合のうたにしつへし。なたらかなり。されと右や思ふ心あらん。右歌つゝきよからねと心あり。

四番　鹿

左

鹿の音をねさめの床にきゝそめてあやなくぬるゝ我袂かな

右勝

夕されは峯のあらしやさむからん聲ふりたてゝ鹿の鳴なる

左右歌のこゝろににたるとやいふへからん。右。あらしのさむさに鹿のなきたる證あるへし。されとうたからのけはひおかし。

承暦二年内裏歌合（判者六條右府。）

一番　子日

左勝　　實政朝臣

子日するあまたの人の引つれて君か千年をまつとこそみれ

右　　公實卿

君か世に引くらふれは子日する松の千年も數ならぬかな

右人にて匡房申樣。ひきくらふるに松の千年の不數と。君かちとせをまつのほとこそ。おひ先あさきにそへて。左のちとせ數すくなくなんと申。師賢一人してまたはこそすくなからめ。天下の人の皆心をよせて待らん千年は。數しりかたくなんあるへきといはふるに。あまたの人のまつほと。けに無限事なりとて。判者左勝とのたまふ。

二番

左持　　藤孝善

谷河のをとはへたてすまかねふくきひの中山霞こむれと

右　　伊家

いつしかとけさは霞のたなひけは春來にけりと空にしる哉

霞のたゝすまゐこそ心得す。籠といふ不隔といふ。同事なれは病とて制たるを也。霞は吉野山會坂山なとまちかくはひかれたるをうちすてゝ。きひの中山まて。あまり除なん。順か判したるは。さか野を過てをくら山まて尋ゆきけんいかゝとそ申たれといふを。師賢。霞は所やはわく。奥山と山の峯にも谷にもわかすなん立を。如何にいつしか

とは何事にてしるへきにか云はかりにや。みよしのゝと云こそけにときこゆれ。霞をすゝきにたとふへきならす。本歌あらんといへは、判者なも歌めきたりとて定持。

〔[illegible]〕経信記云。私案。事非難歟。不隔與籠非同事歟。予案之。此難自願躰出來事歟。延喜十三年歌合云。ふりはへて花見にくれは小倉山いとゝ霞の立かくすらん云云。花歌に小倉山聞つかれと無其難。

四番　櫻　　　　題季

左

尋ねこぬ先にもちらて山さくらみる折にしも雪とふるらん

右持　　　　通俊卿

春のうちはちらぬ櫻と見てし哉さてもや風の後めたきを

右人云。さくらはをしむことこそあれ。いとへる心ちす。左云。貫之かこの下風はといひたる社櫻のすくれたる歌。此うたとおなし。右云。かれはそらにしられぬといひて。雪ふらしたれはこそめてたけれ。これは見ぬさきにとくちらてといひたりと云。師賢云。いとふにはあらす。古今にをならはさかすやあらぬさくらはなといひたるは。はなをおしむあまりとこそ見えたるを。さは花をいとひたるにや。右歌は春よりのちは花ををしまぬこゝろあり。右云。かきりあれは春のうちこそ花をしむめれ。たつことやすき花のかけかはといふ歌あり。

経信記云。私案。取積不可然。

六番　菖蒲

左勝　　　　道時朝臣

あやめ草なにの俤に引そめてかゝらぬ宿のつまのなからん

右　　　　匡房

けふよりはつまとそ頼むあやめ草かりそめぇと思はさら南子の日ならぬにためしとひきかくるこそ。あやめしらぬ心ちすれと申せは。なにのをにもためしといふ事なくやはある。右。やともなくてつまをそたのむとあるに付てなん。さらにこゝろえられぬといへは。大納言けにさることゝて右負畢。

八番　五月雨

左勝　　　　道時朝臣

五月雨に玉江の水やまさるらん芦の下葉のかくれゆく哉

右　　　　爲家

五月雨の隙なき比は伊勢の蜑のもしほの煙絶やしぬらん

たおかし。右けふりたゆ〔[illegible]〕といふこと禁忌有と云云。

経信卿記云。又咎之絶煙本便事歟云云。

十番　月

左　　　　師賢卿

水草ゐてかけさへみえぬにごり江は底まで照す秋のよの月

右 勝　　匡房卿

おほつかなこや有明の空ならんよるともみえす照す月影

水のにごりたらんたに月のすまんやはうたかはし。ましてひまなきみくさに。いつくよりかは水のそこにわけいりてすみわたるらん。古人さやかなる月を心にいれて見んには。よもすからこそみあかさめなと。たゝ今ねおきたらんやうにおとろき心ちすなといへと。おかしとて勝畢。

經信記云。左方云。景不見江。月何浮景乎。此難左方難存思。作者所執。仍撰入也。諸人之所難。不知所避者也云云。

十一番　鹿

左 持　　正宗卿

夕されはをのゝ萩原吹風にさひしくもあるか鹿の鳴らん

右　　公資卿

霧ふかき山の尾上にたつ鹿は聲計にや友をしるらん

閑人こそ心すみさひしき事もはへめ。鹿の心にはなにかさひしくもあらん。右、山の尾上おほつかなき心ちしなから持となん。

經信記云。右人難云。末字不快。私案。是右勝定詞也。

十二番　紅葉

左 勝　　師賢卿

吹からにちる紅葉はのしたかへはうらやましさは風のたゝ

右　　匡房卿

龍田山散もみち葉かきてみれは秋はふもとにかへるなりけり

花もみちちるをおしむつねの事也。したかふ風をうらやみ侍こそ。右。あかて過ゆく秋のふもとにかへりきなは。秋をおしむ〔衍歟〕人なくやといへは。これもかれもおなしやうなれと。於左勝ぬ。

經信記云。此歌本入權辨伯耆守歌。不快事也者。以書改。不快難不知所避。作歌は。

雜木の梢はいつこおほつかなみなその原は紅葉しにけり

十三番　雪

左 持　　實政朝臣

ふる雪の日數つもれはしからきの檜の青葉も見えす成ゆく

右　　通俊卿

雪ふれは見えしときはの山そなきみな白妙の梢のみして

松の葉白きよしの山といふも。山はかくれぬにこそとてまけ畢。

二十番　戀

左　　經信卿

わたつみにみるめ求むる蜑たにも千尋の底にいらぬ物かは

右 勝

戀すとも泪の色のなかりせはしはしは人にしられさらまし
　戀といふ事なしとて負畢。
經信卿記云。有難無證云々。(肯書)私案之。上古歌未有一定。有如此
難。而末代人甚此難歟。時難稱宜云々。又此中有不知事之中。
非宣喜等多由所見也。
承暦後番歌合　前判
十番　月
　左　　　公　定
月影のいたらぬくまはなけれとも雲のうへはのとけし
　右勝　　　公　實
くもりなき影をとゝめは山のはに入とも月を惜まさらまし
　右人云。あかあかしたにてこそあかしくらしもいはめ。雲の
　上と下とをはいかゝくらへんとて。右勝とす。
(頭書)符親心歟。無由負。
十一番　鹿
　左持　　　紀　伊
秋風そさむく吹らし妻こふる聲高砂にをしか鳴也
　右　　　匡　房
戀わたる妻ならなくに山ひこのこたふる聲を鹿や聞らん
　右。山ひこはなにの聲をこたふれは。鹿はきくといふこと
　あるへし。但左よからねは持になりぬ。

四條宮歌合(永保三年三月二十日。判者通宗卿。)
五番　藤
　左　　　藤　仲　實
白露に色ますはひとなりにけりこきむらさきにさける藤波
　右負　　　源　有　賢
月にそひて匂ひそまさる藤の花ちとせの春を思ひこそやれ
　白露とよまれたる。あるましきにはあらねと。このつら
　にはよますもありなん。右。君かちとせといひたれは。とも
　かくもいふへし。
六番　戀
　左持　　　仲　實
おもひかねつれなき人のにてみんと哀命のなしくも有かな
　右　　　藤　時　房
我戀や来つむ花の色ならん紅にのみぬるゝ袖かな
　来つむ花のもしつかひ。かみしもにわたりて。またなにに
　ぬるゝそとおほつかなく。なみたとはまことなしとて負
　畢。
賀陽院七番歌合(寛治八年八月十九日。判者經信卿。)
一番　櫻
　左勝　　　中納言君
山さくら匂ふあたりの春霞風をはよそに立へたてなん

右　　通俊卿

春風は吹ともちるな山さくら花の心を我になしつゝ

判者令申云。左歌いとうろはし。右。花は心やはあらんと思ふたまふれは。左猶勝と申へし。

二番　櫻

左持　　筑前

紅のうすはなさくら匂はすはみな白雲とみてや過まし

右　　匡房卿

白雲とみゆるにしるしみよしのゝ吉野の山の花さかりかも

左歌心は（遠歌）違て雲とみつれと。近くみれは紅匂ふ櫻なりけりとよめる也。さらは山なとにかけて。とをきことはやあるへからん。右。めつらしけなけれと。別離不見。持と也。

（頭書）顯昭等云。（七字）三の字五。のゝ字五也如何。

女房陳状云。詠心は野邊に咲みちたる花の白妙に雲のことくなる中に。紅のうすはなのましりたるに。櫻にこそと驚也。山かならすあるへしともおほえすと云々。又輔親（頭書）[illegible]か母に申しとを幼少にて承しかは。同字三はいかゝせん。四以上あらん歌なは。歌にいともいたさしと申しに。右歌しの字四候に。持と被定たるかくちをしきなりと云々。予案之。内裏歌合に貫之。

櫻ちる木の下風はさむからて空にしられぬ雪そ降ける

らの字四なり。寛和歌合彼先祖能宣歌云。

春のくる道のしるしはみ吉野の山にたなひく霞なりけり

のゝ字四つあり。此歌等皆勝如何。

三番　櫻

左勝　　周防内侍

山櫻をしむ心のいくたひかちる木のもとに行かへるらん

右　　顯綱朝臣

花ゆへにかゝらぬ山そなかりけるこゝろは春の霞ならねと

かゝらぬ山といふと中ころの歌なり。皆人しれり。又霞はかゝらぬとはよまれてやあらん。おほつかなしとて負。

四番　櫻

左持　　讃岐

やちよへん宿に匂へる八重櫻やそうち人もちらてこそみめ

右　　正家卿

風のをともあとけき宿の春なれは匂ふ櫻をあくまてそみる

左句。上とにやもしや多からん。尤花をあかむはいかゝあらんときこゆれはとて持。

三番　郭公

左勝　　周防内侍

夜をかさねまちかね山の郭公雲の（あなよそにたイ）よそにて一聲そきく

右　　顯綱朝臣

あくる迄まちかね山の郭公けふもさかてやゝれんとすらん

共に唯同事に侍る。左は時鳥聞たり。右はまたきかねは。前にも聞たるをそ勝と申ける。

予今案之。左納言家歌合に今聞哉に不聞哉。負事歟持也。

一番　月

左持　　中納言君

くもりなき玉のうてなにてる月はいとゝ光をみかく成けり

右　　通俊卿

月影をひるかとそみる秋のよをなかき春日と思ひなしつゝ

春と日とは若同事にやと申かは。通俊者文字かはりたり。〔脱字〕同事不侍と陳申を。詞かはりたれと同やうなれは。於避とこそ聞給るうちに。

山さくら咲ぬる時は常よりも峯のしら雲立まさりけり

といふ。歌合歌にてはいとよき歌也。それに猶さるへし〔脱カ〕とこそ被定たれと申侍しか。ともかくも人申さゝりしかとも。左歌のいともまさらさりしかは。殿下にいかゝと申侍りしに。例なといかゝと侍りしかは。かゝるおり持なとに定たるおりも坐よし申て。持と被定。

四番　月

左勝　　讃岐

秋の夜はいとゝなかくそ成ぬへき明るもしらぬ月の光に

右　　正家卿

ときは山下葉の露の数ことに影さしそふる秋のよの月

右。山のみねは露はなくらん。又下葉といふことはいかなることにかとて負。

二番　雪

左　　筑前

ふみゝける鳰のあとさへをしきかな氷の上にふれる白雪

右勝　　匡房

みかり野はかつふる雪に埋れて鳥立もみえす草かくれつゝ

にほのふみゝけるといふ事。人こそふみも見め。にほの心をはしりかたくこそ。又あとさへをしきとは。あとをなしみたりとみゆるものを。右。たかゝりに草かくれといふとは。鳥の草にかくれたるを申とにや。是は草をよみたるとこそ見えたれ。されと雪の草をかくしたるとも申らん。さらは右のかちにや。

一番　祝

左持　　中納言君

君か代は萬代までにさしてけり三笠の山の神の心に

右　　通俊卿

君か代は天のこやねの尊より祝ひそそめし久しかれとは

左右無止事神奉掛て侍めれは。勝負申かたし。

四番　祝

左持　　讃岐

萬代といのりそつくる君か代は山田の原のしたつ岩ねに

右　　正家卿

きみか代はかねてそしろき春日山二葉の松の神さふろまて

左よろつ代又(右歟)君か世。いかゝとおもふたまふれと。おほかた持と申へし。

郁芳門院根合(寛治七年。判者六條右府。)

二番　昌蒲

左持　　藤孝善綱賀(信イ)代

あやめ草引手もたゆく長き根のいかてあさかの沼に生けん

右　　入道帥上

君か世のなかき例にひけとてや淀の菖蒲のねさしそめけん

左人云。あやめをはなにをよめるにか。古歌にはあやめくさとこそよめれ。あやめは別物名なり。判者云。さうふをあやめといふ事けふはしめす。いはれぬ事なり。但右歌はしたゝかにつかうまつれり。左歌はあさかのぬまによせて。根をはひくてもたゆくなかしとよみたろ。をたかひたる心ちすれとも。すかた歌めきて侍れは持と申。

江記云。右方人云。淺鹿沼間在陸奥。自京一月路也(有脱歟)不可逢今日事。所引之昌蒲黄損歟云云。永承四年殿上根合選歌無草字。而被撰入。況右大弁通俊已所撰之後拾遺入之。今所難先後不覺云云。

三番　郭公

左勝　　堀河殿

ふた聲となとかきなかぬ時鳥さこそみしかき夏の夜ならめ

右　　雅俊卿

なかすとて打もふされす時鳥聲待人もねかたかりけり

左はいと〳〵をかし。右。上下とたかひたる心地して。またほとゝきすきかすとて負畢。

江記云。右方人云。於御前專不詠夜短詞。依濫•(脱歟)於世之一首。郢詞三所なとか。さこそ。ならめ等也。如此詞二所於凡詠。三所乎云々。

四番　時鳥

左持　　大貳

一聲をまたれ〳〵て郭公幾夜とかふにこよひ鳴らん

右　　匡房卿

夕つくひいれは小倉の山のはにをちかへり鳴ほとゝきす哉

左。いたくふるめきたれと。右。いと〳〵みゝとをし。かゝろとはふるき歌合にもよからぬことはとありけれは。いつれもをとりまさらすなん。

六番　五月雨

左持　孝善

五月雨のひましなければ袖たれて山田は水に任せてそみる

右　匡房卿

つねよりも晴せぬ比の五月雨は天の河原も水やますらん

袖たれてといへる。なにことゝもきこえす。天河原に大水出も。あめしたゝめにくゝや。

江記云。右方云。袖たれての儀頗不優。又有奔申之義。可謂禁(歌病)俳。又天河水や益れる。是後撰之歌なり。尤不可爲難云々。

九番　戀

左持　顯季卿

さりともと思ふはかりや我戀の命をかくるたのみ成らん

右　小別當左兵衛督俊實

思ひかねさてもやしはし慰むと只なをさりに頼めやはせぬ

左人云。右戀といふもしなし。いかゝ。右人云。天德歌合朝忠歌に。人をも身をもうらみさらましと有歌。世人の乘口名歌。かの時又勝となん被定けると也。左人云。承暦歌合時左戀歌。その詞なしとて負。即今日判者大いまうちきみなんかの時も判給へると申は。大臣云。かのうたはわたつみのはるかなるそこに。海士人のいれるよしをのみいひて。思たのむといふ事もなし。古歌(深歌)にも詞にも戀ともなけれとも。その心あるはみな除とかにもせぬもの也。左右歌同程なれは持となん。

國信卿家歌合(康和二年四月二十八日。衆議判。)

十四番　夏戀

左勝　俊頼朝臣

夜とゝもに玉ちる床のすか枕みせはや君に夜半のけしきを

右　基俊

波のよる岩根にたてるそなれ松またねもいらて繼明しつゝ

れといふ事ふたゝひあり。またねつよきものにこそ。右。子松かくあたなるとにたとへられたる心得すとて負。

實行卿歌合(永久四年二月四日。)

判者修理大夫。　讀師。(家信。道經。)　講師。(俊頼。仲實。)

一番　子日

左　俊頼朝臣

春日山ふもとの小野に子日してかとを神にまかせてそみる

右　大夫上

子日する野への小松をもろ人の君かよはひに引かくるかな

左。子日の松をさしをきて神にとよするも。あしかるへき事ならねと。今日の事にはかなはすや。また松といふことあらまほし。右。めつらしからねとなひやかなれは。勝と申つへけれと。左一番なとは憚思給て。持とや申へから

ん。

二番　霞

左　　　　　　　　宰相上

浅緑かすめる空のけしきにやときはの山は春をしるらん

右勝　　　　　　　顯輔朝臣

年ことにかはらさりけり春霞たつ田の山の峯のけしきは

右。霞なとはさほ山にこそよみまうてくれ。龍田山はもみちのにしきなと申きたるなりと。左人のたまふは。さらにくせなるへからす。立田の山の鶯の聲とこそよめれ。左。ときはの山も春をしるらんとよめるこそ。をのれ鳴てやなといへるをおもへるにや。にぬ事にてなん。かれは鹿の心あるものにてしるにこそ。山はしらんとかたくなんとて負。

〔頭書〕金葉には。としことにかはらぬ物は春霞たつ田の山のけしきえけり。

三番　櫻

左持　　　　　　　少將實能

花さかり末の松山風ふけはうす紅のなみそたちける

右　　　　　　　　仲　實

高砂の花のしら雲たちにけり我やまもりになりやしなましまちかき花さく山をきて。末の松山おもひかけす。又松花とおほゆ。うす紅といふことは。そのかみよみたりし後今はよます。右。花のしら雲といふ事。さたまりてあるやうなりとて持とす。

六番　夏草

左　　　　　　　　女　房

うつら鳴夏のゝ草はおひにけり朝ふす鹿も見えぬはかりに

右勝　　　　　　　大夫上

行なれし道わすられて夏草の結ふはかりに成にけるかな

うつらは秋なんなく。夏はなかすと右人いへは。證歌こそはいたさるへけれと。不出はあやまてるにや。右。むすふはかりに成にけり。のかひし駒の心ちすといへれは。むねとのふしにはあられと。右勝にや。

八番　月

左勝　　　　　　　俊頼朝臣

軒はよりもりくる月をわきもこか玉もの裾に宿してそみる

右　　　　　　　　顯輔朝臣

いかはかりてる月なれやまくつはふ杜の下草かすみゆく迄たまものすそにやとしてそみるとある有かたし。木なとにうつるをこそやとるとはいへ。光はかりこそあらめ。月の形はやとりかたくや。されと右古くて負歟。

十番　雪

左　藤兼能

さらぬたにくる人もなきわか宿に路たえまさるけさの白雪

右 勝　仲實

いつのまに降つもりぬる雪なれはかへる山ちに道まとふ覽

雪にみちたえぬなとは。山里なといひてこそあらまほしけれ。又雪にたえぬるなたえまさるとはいかなる事にか。右。かへる山ちになと歌めきて勝にや。

十三番　祝

左 持　爲忠

みつかきの久しかるへき君か代は天照神や空にしるらん

右　顯輔朝臣

限りても君か千年は岩淸水なかれん世にはたえしとそ思ふ

伊勢八幡御事。をとりまさり申さんは。をそれ侍りとて持。

同家歌合(元永元年六月二十九日。判者修理大夫顯季卿。)

一番　夏月

左 持　俊賴朝臣

光をはさしかはしてやかゝみ山峯より夏の月はいつらん

右　大夫上

夏のよの月は心に入ぬれは明ゆく空のうらめしきかな

光さし来に月出けんとある。なかたえて思ひ出たるやう也。右歌合にも山峯またかれりとて負にければ是同事也。又右人峯より夏月は出らんとある。秋冬は谷よりいつるかと侍る。さもある事ときこゆ。右はなひやかなれと。近歌合歌と左方に侍は持と申へし。

二番　夏月

左 持　實能

空さえて涼しき夏の月影は夜のみしかさそ秋にかはれる

右　長實

夏のゝの萩の下葉の下露のつゆくまもなく照す月かな

左。歌から心ゆかぬに合て。月歌によそへていひならはしたる事也。夜みしかしとある無便心ちす。右。夏草の多かるを置なから。萩の下露。秋の歌とおほゆ。仍持なるへし。

三番　夏月

左　源仲正

夏の夜の空さえわたる月影に氷の衣きぬ人そなき

右 勝　大進

見るからに光すゝしき夏の夜の月のかつらに風やふくらん

空さえわたりて氷の衣きぬ人なしと侍。冬の歌とおほゆ。右。月のかつらうためきたり。

四番　夏風

左 勝　實能

夕されはしのゝをさゝを吹風のまたきに秋のけしきなる哉

右　　橘敦隆

夏衣たつ夕風のすゝしさにひとへに秋の心ちこそすれ

右方にしのゝをさゝといふ事なしと云へと。さはある事なれと。くさなきものならは祉なとてか。右ひとへに秋の心ちすといへる。あしく心えたる事也。夏といはんにこそいはれたれ。歌合なとにはかやうの事はよくおもふへし。

五番　夏風

左勝　　琳賢

難波かたさゝなみよする浦風にてるみな月も涼しかりけり

右　　修理大夫

から衣すそのゝ草は吹風におもひもあへす鹿や鳴らん

さゝなみ聞ならはす。しかといひてこそさゝなみとおもへるにや。となり。右。から衣といふ事かきたかへたるによりてまけぬ。

（顕昭）夏衣をかきかへたる也。

十三番　寄泉戀

左　　右兵衛埃

逢ことは片山かけの石井つゝ結ふ心はいつかとくへき

右勝　　顕輔朝臣

我戀はむすふ泉の水なれや絶すなかれて袖ぬらすらん

むすふ心。うちきゝはきこえたるやうなれと。泉をむすふはものを結ふにはあらぬ事なり。水くみあけてなとする事なりとて負。

十四番　寄泉戀

左　　下野守經家

岩代の野中の清水むすへとも戀をはけたぬ物にそ有ける

右　　人不知（大夫殿歟也）

つれもなき人諸共に夜もすから結ふ泉とおもはましかは

いはしろの野なかの清水心得す。むすひ松なとこそ人しりたれ。野中のしみつはいなひ野にこそありときこゆれ。

（今殿下）證歌やあらんといへと。出さるは負ぬ。

内大臣家歌合（元永二年七月日。判者修理大夫。）

一番　草花

左勝　　季通朝臣

さま〳〵の花にしをけは白露も秋は色をそきためさりける

右　　基俊

白露のをりたす萩のから錦鹿のよるきる衣なりけり

（右勝）左露の心かちてなん。露をりたすとはいかに。露霜をたてぬきにこそよみたれ。露の錦をおるならんは人に侍る。

左　草花　　道經

あたし野の萩の錦やとこならん露ふしあかす女郎花かな

露ふすこそめつらしく。露をくとこそ申つたへたれ。

左　曉月　　　　　　宗圓

夕つくひいるやをそきと久かたの空すみわたろ弓張の月

右勝　　　　　　忠季

東路やふなきの山の木のまよりほのかにみゆる夕つくひ哉

左。ゆふつくひこそみゝにたちて。またゆみはりの月に空すみわたろらんともかたし。右。はしめのくのや。はてののこそよしなけれ。

左　月　　　　　　尹時

夕されや天津空なるしらま弓とみれは月そ山のはにいる

右勝　　　　　　行盛

出るよりさやけき月の光哉入日のかけの空にや有らん

左。しらま弓とよめれは。月とはきこえにたるに。とみれは月のとよめる如何。このころにては月ともしらさりけるにや。右。日の光のさしそふそ心えぬ。日の光あるほとは。月の光はいかゝあらんと思ひ給ふれと。尙可勝にや。

左持　月　　　　　　女房

よひのまに出る影たにさやかなり月みつ空を思ひこそやれ

右　　　　　　基俊

なくさむるほとこそなけれ宵のまにわれて入ぬる更科の月

月みつ空心えす。みたんおりこそと心はへはあるにこそ。これはみつそら。みたぬ空のならひてあるにやとおほえてなん。右。さらしなとよみて。山なくてはよむことにや。證歌不審也。

右勝　尋失戀　　　　　　忠隆

過したにうかりし物をなそもかく行衛もしらすつらさそふ覽

第二句そふろき歌なれと。題心は侍なれは爲勝。

右同　　　　　　基俊

思ひかね淸水くみにと尋ぬれは野中ふる道しをりたにせす

なにをにか戀といふ事は見えす。水くみにとてまとゐたるなんみゆろ。仍左勝。

或所歌合(永久四年七月二十一日。仲實朝臣判之。)

一番　女郎花

左　　　　　　源經兼

雄子たつ交野のみのゝ女郎花かりそめにたに誰かさらなん

右勝　　　　　　道經

女郎花露のをきかほみせしとやすそのゝ霧の立隱すらん

左。無風してなひくとよめるとはりなし。右。無山してすそ野いかゝとみゆれと。ふるくもよめり。心おかしとて勝。

六番　薄

左　　　　　　忠隆

しら露の玉ぬきかくるいと薄吹なみたりそ山風の風
右勝〔マヽ〕　　爲忠
むすひをくのへの朝露分行は玉ときちらす花薄かな
左。めつらしからねとさて有なん。右は露むすふといふを
おほつかなし。秋のはしめには有かたくや。末つかたに露
むすほゝれて。霜となるといふ事のあるなり。これはまた
しとて負。

十五番　月

右　　藤國親（西住入道也）
宿ヽに詠むる人はあまたあれと空には月そひとりすみける
もしやまひありとて負。

俊忠朝臣歌合（長治元年五月二十六日。判者俊頼朝臣。）

左持　郭公　　筑前公
待人のやとをはしらて時鳥遠の山へを鳴て過なり
右　　道經
まつほとも心そらなる時鳥いとゝ雲井に鳴わたるかな
左歌はれてまつらめやと云古歌に心こと葉たかはすと。
右人の難さもときこゆ。又左人云。右歌空と雲井と同心の
病と申。さもきこゆれと。これはふかきとかにあらす
とて持と申。
右　戀　　俊忠
我戀は海士のかるもにみたれつゝかはく時なきなみの下草
泪のした草は不審。もとにあまのかるもとよまれたる同
ものにや。さては病とや申へからんとてまく。

師頼卿歌合（天仁二年冬。判者俊頼朝臣。）

左勝　水鳥　　橘敦隆
池水や夜半に冴らんうきねする鴨のはかひにつらゝゐに兒
左おかし。かものはかひにつらゝゐるなとこそ。まとには
あらぬをなれと。歌のつねのことなれはとかにあらす。
左勝　霜　　師頼卿
初雪のふるやとそみる難波かた芦の葉ヽにをける朝しも
右　　敦隆
八重葎しけりし庭も荒はてゝいくたひ霜かをきかされつる
左歌いひなれたり。右。心はおかしけれと。末のつるいか
ゝとみゆれは。基俊難判云。左。歌からおかしけれと。霜の
あしたに雪ふるかとそみゆる。うたかはれんは義ならぬ
こゝちなんする。

今案下　内大臣家歌合（元永元年十月二日。判者俊頼。基俊。）

左持　殘菊　　信濃
苔のむす岩ねに殘る白菊は八千世咲とも君そみるへき
右　　藤時昌
霜かれにわれひとりとや白菊の色をかへても人にみゆらん

岩根の菊心えす。兩判者ともに是を難なり。又俊頼判云。獨と人と未事切云云。仍持也。其餘は不難也。

左　時雨　源俊隆

さ衣の袂そせはしかつけとも時雨の雨は心してふれ

基俊云。さころも又せはしとよめる重言病也。仍負云云。

左勝　戀　攝津君

たえすたく室の八しまの煙にも名をしまさる戀もする哉

右　顯國

盃のしひて逢みんとおもへはや戀しき事のさむるまもなき

俊頼云。たえすたくといへる。僻事ともや申へからん。かのむろのやしまはまとに火をたくにはあらす。野中にしみつのあるか。けのたつか煙とみゆる也。それをたくといはん事かたし。右はたくみにおもしろけれと。かならすよまろへきさまのなきなり。又のむといふと大切也。さきの歌めきたれは勝ともや。基俊云。むろの八しまにたえす火をたくと。なにゝ見えたるにか。むろのやしまといふ事有二。一は下野にむろの山と云所あり。一は人の家にかなへにむろぬりたるをよめりとぞ。或ふみにみえたる。たとへはいつれにてもたえす火たくといふ事みえす。右。こひしきとのさむるまもなき。心えすとて負。

左負　戀　兼昌

戀せしと思ひなるみに寄波のかへりてそれもくるしかり鳧

俊頼云。いつもし名歌なれはうちきくにおもひいてらる。古人如此事はさるへしとそ。されはをとるへきにや。

左勝　戀　通經

あふ事の今はかた野に成ぬれはかりに音せし人もとひこす

右　忠隆

つゝめともあまる涙はもる山のなけきに落る雫なりけり

俊頼云。かた野となりぬれは。かりにことこそ云へけれ。次歌。あまる涙。心有とて勝。基俊云。共難も無。心とゝめたる所もなく。なけうたなとのやうに侍れと。かりに音する人のなからんは。今すこし心ほそく侍り。

關白殿歌合(保安二年九月十二日。判者俊頼。基俊。)

左持　山月　女房

木間より出るは月のうれしきに西なる山のにしにすまはや

右　源明賢

み空はれ所もわかす照月のかけもてはやすこしの白山

俊頼云。木の間より月いつるといふ事如何。本文歟。西なる山のにしにすまはやもそこはかとなし。右。かけもてはやすこしのしら山と申は。雪あらまほし。白山の名はかりにてはいかゝ。基俊大略同之。

左同　俊頼朝臣

こよひしもをは捨山の月をみて心のかきりつくしつるかな
俊頼云。をはすて山の月はなくさめかねつとこそよめれ。心つくしにはあらす。基俊同之。

右　野風　　宗　國

秋の野の花すり衣吹かへし色ならなくに風そ身にしむ
俊頼云。花すり衣とはなにの花してすれるそ。萩かはなすりとこそよめれ。基俊同之。

左　庭露　　宗　國

庭もせに玉ときちらす白露をみたれてぬけるいと薄かな
俊頼云。いとすゝきをよめる證歌を可進。基俊不咎之。

（頭書）五月雨にかさとり山はこえゆかし花すり衣かへりもそする

無動寺歌合（保安三年二月二十日。判者俊頼。基俊。）

左負　櫻　　僧　行　眞

里もあれよ人もふりよ山櫻見てこそをのゝえをもくたさめ（マヽ）
俊頼云。花さきそめては。ほとなくをのゝえのくちんは。あまりなりとて右勝。基俊同難也。但爲持。

左負　春雨　　僧　俊　宗

右

しめ〳〵とふる春雨のなかりせはいかてかみまし花の濡色
俊頼云。ぬれ色はもみちなとこそめてたけれ。花はぬれてまさると見えす。雨をはいとひこそすれとて左勝。
基俊云。左。あめこほこ。見しらぬ心地す。右。しめ〳〵とよめるをは。ふるうたに見えす。爲持。

右　苗代　　僧　隆　實

かせかはを瀬々のいせきに堰とめて水引かくる小野の苗代
俊頼云、はしめの五字みゝにとゝまる。おもひかけぬ所の名は。ことはにひかれて。思ところありてよむへきなりとて左勝。

左　戀　　隆　實

人しれぬ身のみ思へはうしまとに引ほす網のいはて過ぬる

左勝　　相　聞

世々ふとも誰かしるへきわたつみの底のみくつの思ふ心は
俊頼云。あみのいはて過ぬと云事全不知。暫爲右勝。基俊云。あみのいはて。古歌に見えす。右。わたつみにみくつとよむらんをおほえす。川にこそよむめれ。されともしつ（字脱歟）ゝたる也とて右勝。

奈良花林院歌合（判者基俊。）

右　雪　　中納言教緣俊覺作云々

雪ふれは青葉の山もみ隠れて常磐の名をやけさはおとさん
右一篇中に二の難有。あをはといふときはかならすみかくれてと云也。萬葉には水隠とそかける。しかれは浪の下

くさかはつなとをそみかくるとはよめる。山をみかくる
とよめる歌。いまたむかしにもあらす。

左　雪　　僧信永

水の面もみなふる雪に埋れぬ立かやなけく池の鴛鳥

水の面のみな雪にうつもれぬらん。またきかぬことにそ。鴛
とりのなけくとよめらん。またこそ見いれて侍らぬとて
左勝。

左　同　　信慶得業

うちきらしあまきる空とみゆる程にやかてつもれる雪の白山

うちきらしあまきる空。已に事舊也。又雪のしら山は夏冬
わかすつもれる雪なり。今うちきらすにおとろきて。山と
なるへきにあらす。

右　同　　式部君

巻向のあなしひはらも埋れてかゝるみ雪もふれはふりけり

あなしひはらとよめる歌未見。あなしのひはらとこそよ
め。

左　祝　　教縁

千年とは色にいてゝはいはし水流れんほとは君か世なれは

ちとせの色はいかやうなる色かして侍らん。色にいつと
いふことは。花もみちなとこそよめ。水いろにといふは家々
集に不見。

左　祝　　信永

打むれて岩にねさす小松はのきくの千年は君そかそへん

うちむれてといへる歌に。小松葉のとよめる詞きゝつか
すとて。右勝。

左　同　　勝超

うれしさはおほつの濱に立波の數もしられぬ君か御代かな

おほつのはま無下に俗様也。

廣田社歌合(大治二年八月二十九日。判者基俊。)

寄菊祝　　忠季

君かため千代まつかけに住よしの神やうへけん岸の白菊

すみよしのきく。かくよめらん歌不覺。住吉にはしのふ
草。わすれ艸。松なとをこそよめ。證歌きゝてこそ勝負可申
云々。

予案之。非無證歌。亭子院菊合是則歌云。

波とのみうちこそみゆれ住の江の岸にのこれる白菊の花

顯輔朝臣歌合(長承三年九月十三日。判者基俊。)

右負　月　　亭主

夜もすから富士の高根に雲きえて淸見か關にすめる月影

有二難。一は雲よもすからきゆるとよめり。雲は夜もすか
らきゆるものにあらす。須臾に生。須臾に滅者なり。二は
ふしのたかねをよむには煙をそよむ。雲をはよめりとも

見えす。されは相撲歌に。
　夜とゝもに心空なる我戀やふしのたかねにかゝる白雲
とよめるをは烟をゝきて雲をよめり。無本意とて負云云。
作者被證文云。朗詠集終夜雲盡月行遲と申詩侍如何。判者問口云云。予案。相撲歌不負持也。
（頭書）
　顯昭考。万葉に富士ニ不讀羅ハ、て。或雲或雪を詠歌多如何。イ本勘物。維摩經云。如空中雲。須臾散滅云々。崇德院御製。定なき雲にこの世を（たとへ歟）ゝふれはなみたの雨もとまらさりける。寂然。風にちるあなしの雲の大空にたゝよふほとそ此世なるらん。寂昭。たなひくとみれはきえぬるうき雲のありとこの世をたのむへきかは。

右（勝）戀　　　　　　　顯　方

天河雲のかけはしとたえしていかてか月のすみわたるらん
天河に無雲梯。只有鵲。詩にも烏鵲橋とつくれり。橋と梯とその儀不同也。河や池にわたすをは橋と云。此岑より彼谷にわたすをは梯と云。同事なれと義異也。但此難は侍れと。いひしりてきこゆとて。右爲勝。
（頭書）
　顯昭考。瞻西上人漢晴月明歌。天河雲のかけはしかきたえてなにより月のすみわたるらん同。如何。

右　月　　　　　　　藤　雅　親

秋の山みねの嵐に雲はれて空さえわたる有明の月

一首中帯二巨病。一は蜂腰。一は鶴膝也。和歌作式。准詩八門立八病云。一首中同字有三爲蜂腰。有四は爲鶴膝者。此歌同字四。能字三有。左右古歌也。不及判。
予案之。不用。
　櫻ちる木の下風はさむからて空にしられぬ雪そふりけるら字四。
　春のくる道のしるへはみ吉野の山にたなひく霞なりけるる字三。の字四なり。是等皆歌合歌也。無其沙汰。或持或勝。
家成朝臣歌合（長承四年。判者基俊。顯仲等也。）

左（持）月　　　　　　　宗　國

三笠山あまきる雲のなきよにはさしくる月の影そのとけき

右　　　　　　　　爲　眞

天河よとむ淵あらは久かたの夜わたる月をしはしとゝめよ
基俊云。あまきる雲ひかとにこそ。雪をそよみはへる。右。久かたの夜わたる月又ひかことなり。よるをはむはたまとそよみはへる。共にひかことなれは持とすへし。
伯判云。左右共になたらかなり。なきよにそいますこし思ふへかりける。されとよとむふちも心ゆかねは。左勝とすへし。
（頭書）
　顯昭考云。萬葉云。しらくものせんとにかあらん久方のよわたる月のみえすおもふは

同家歌合(保延九年。判者基俊。)
左 祝　季通朝臣
君そみんはこやの山に數しらすをの〳〵たてる松の齡は
はこやの山に有無數松樹云々。此言出何書哉。非本文者作者不可詠。又有證歌哉。
左 持 祝　少將內侍
高砂の尾上の松に吹風は萬代とこそかねてきこゆれ
右　忠兼
位山生そふ松の年をへてたえすも君かさかゆへきかな
左。たかさこの松にいはひをよせて。たゝ松の萬代なるときこゆる。右。自古祝をよむには。長生久視の心をなんよむ。偏に榮官榮祿の心かよみて。已忘仙算遐齡心あやしく侍る。左右祝の心うすし。爲持。
或所歌合(保延四年。判者基俊。)
左 戀　新宰相中將公能
紅に袖の雫は成にけり身にしみわたるこひのなみたに
上句の袖のしつく。下句の戀のなみた。同事侍。病とや申へからんとて負。
右 持 戀　殿下參河
波のよるほのみしま江の芦のねのなかれて人を戀わたる哉
左右歌あはれに侍り。但右平頭病に侍めれと。なとて人をとよまてはいかゝよむへき。此なんは判者のつみにて唯持と申へし。
予案之。天德歌合云。
ことならは雲井の月と成なゝん戀しき影や空にみゆると
方人改訴申。殊非咎之由被定云。
一故人和歌難
難後拾遺云。(經信卿所爲云々。)
田鶴のすむ澤邊のあしの下ねとけ汀もえ出る春は來にけり
是は上手歌と被書付はいとおそろし。仰て可信とも。澤邊と水際とは同事なるか上に。みきはにもえいつとこそいふへけれ。みきはもえ出とあれは。に文字(可歟)三十入覺。けにくはしかられと。かやうによみたるうたもあらん。
かりにこは行てもみましかた岡のあしたの原に雉子鳴なり
此歌詞に鳥〻群居たる形かきたるとあるは。水鳥なとにや有けん。さらはきゝすとよまれたるはいかゝ。鳥なれは何も同し事か。花鳥と詩題に有は。鶯と思ひならひけるを。丞相の御時に鳥の方に鶴を被作事もあり。
行かへる旅にとしふる鴈金はいくその春をよそにみるらん
春は花のあるなとよまれたらはこそけにとも覺め。唯春をなんよそにみるとあらん。なに事のいみしかるへきそ。又旅に年經とは。道路に年をへはこそかくはよまめ。

小萩さく秋まであらは思出んさか野をやきし春のそのひを
是は思ひても何事のいみしかるへきそ。
櫻花盛になれは古郷のむくらの門もさゝれさりけり
古さとはたゝふるくなれる家を云歟。然者有謂。若今は不住家を云はいかゝあらん。是はならの都をよむよりおこりたることゝこそ聞たまへしか。
なかぬ夜も鳴夜も更に時鳥まつとてやすきいやはねらるゝ
此歌合には右方にて侍しかは。そのほとの事はくはしく聞給ひし也。故宮内卿經長は藏人辨にて左方人にて。そのうたともを四條大納言の長谷籠居られたる所にもてまうてゝ。とひあはせられけるに申されけるは。歌はあしうもあらす。さらにと云詞を。よしもなういたつらことなれと申されけると聞給へしこそ。さたあるをくおほえしか。
思ふてふとをはいはて思ひ皃つらきも今はつらしと思はし
おもふてふとをいはて思ひけりといはゝ。つらさをもいはしとなとはこそよからめと覺如何。
わか心かはらん物かかはらやの下たく煙下（わきかへり）むせひつゝ
かはらんものかとよみたるは。人を思ふとのかはるましきか不審也。煙をはわくとはいふらんや。わきあかるやうなりといふをおもへるか。
山のはに入ぬる月のわれならはうき世の中に又はいてしを
此歌心はあれと。はてのいてしをこそたはふれことのやうにてあさはかなれ。おほよそ月のまたいてさらんは。いと不便の事也。かゝる事はよますとこそ聞たまふれ。

後拾遺問答云。　問は經信卿。　答は通俊卿。
空になる人の心にさゝかにのいかにまたけふかくて暮さむ
問云。ふみとなくてたゝかゝさらんとはいひてんや。證歌を可承。答云。此歌さゝかにのいかくと歌の面によみて。それにかのふみかくことはそへたれは。なにしにかあなかちにふみと云ふ詞は侍らん。そへたるをはかくのみこそ。猶問。あらはにふみやるときゝてとはへるめれは。たゝかゝさらんといへるは。猶ふみなとあらましかはまさりなまし。
後冷泉院御歌。
よそなれと杉の村立しるけれは君か住家のほとそしらるゝ
問。いとおかしうみたまふ。但しるといふとやあまたあらん。答。しるきとしらるゝとは用心と不覺侍と。くせと被仰成む人はけにさも申つへかりけり。
都へといきの松原いきかへり君か千年にあはんとそ思ふ
問。いきかへりといふことはいま〳〵しかるましや如何。
答。いきかへりといふはいま〳〵しき事とは如何に。ゆきかへりといひたる心にこそ。蘇生の心にはあらぬにや。猶

問。往還の義こそ侍けれ。蘇生の義にてまうけるいとあやし。但猶祝歌なり。さもよみなす人はへらはいかゝはへらん。いにしへ人もさることこそ有れ。

紀にけるはつかなるねを引けかけらるゝを杜きかまほしけれ

問。たえにけるはつかなるねをとはいつれを云そ。又葛のなとにいかなる事にか。答。たえにけるはつかなるねは御簾中のをの音あかぬ心をよめは。聲のやみぬれはたえたるといふ成へし。かつらいなとは葉陰に隠る事とこそ思給れ。此琴はまことにはひかす。口中の曲を侍なといかはへる。

おひたつを待と頼めしかひもなく波こすへしときくは誠か

問。若菜松山と云をよみたるか。その心ともなくして難なみこすとよみてはありなんや。證歌や侍らん。答。するの松なくてよむは常のとにや。

松かけて頼めし人はなけれとも浪のこゆるは猶そ悲敷

と伊勢かよみたるはさもいふへきにや。猶問。伊勢か歌はさ侍けり。但後は題に松に池のこしたるをよみたると書たれはにや。又其後部類集ともに入て侍らんや。

けさはしも思はん人はとひてまし妻なき閨の上はいかにと

問。女歌にてはつまとはよみてんや。たゝつまなき宿とよみたるか。さてはよしなうこそおほゆれ。つまなきこひをわれはするかなといふをを思ひたるにや。それはいはれたるものを。答。これはいかに侍へきことにか。たゝ年来伊勢なとさきはつまといふ事は。男女のならひはこれかれつまといふと聞て侍つる也。男は女をつまといふ。女も男をつまといふなり。女をつまといふへしとなにゝ見えたるにか。是は證歌おほくや侍らん。まつ伊勢物語につまもこもれりわれもこもれりといへる歌は女の歌にて。男のむさし野にこもりたりけれは。野をやかんとしけれは。女のよみ侍けるなり。つまもこもれりとは。われか男をいへるなるへし。我もこもれりとは女のことにや。猶問。のたまはせたることといはれたり。世に春日野と申侍めるに。おほくはめをつまといふ。若はまたわか草といふ。又或本にはのたまはするやうに。めおとこの中をつまといふともかゝれたるやうに覺は。いつれか一定ならんと申かたし。さて伊勢物かたりはそのうたの心をあんし侍るに。若書たかへたるにや。又女の男にかはりたるにやとも思ひたまふる也。その故はこれおとこ人のむすめをぬすみて。むさしのにゐてくるほとに。ぬす人なりけれは。國の守にからめられにけり。女をは草むらの中にをきていにけれは。みちゆく人この野はぬす人ありとて。火をつけんとするに。女いよむとかゝれて侍めり。されはふたりなから

こもれりとは見え侍らす。是先歌たかひたり。又わか草のといふは。おとこのことはにてこそいはれてはへらめ。女のたちまちにおとこをわかしといはんもいはれす。又わかくさといふとはへめれと。あしひきの山。あらたまのとしなといふやうに。わかくさのつまなとはよまれて侍にこそあめれ。このうたを古今に題よみ人不知とかきて。かすか野となをされてはへめれは。これにつけてもうたかひのこれるや。日本紀にすさの（吾既撰）をのいつもやへかきつまこめにとよみ。又明日天皇の皇后に送歌に。あひおもふつまのとよみてはへるは。又萬葉にはよろつの事ともかうもかゝれて侍ものなれは。さためかたら侍れと。妻と書てつまとよみ。又嬬も孋をもつまとこそはよみて侍めれ。さればは字書に妻の儀也とこそ釋せられてはへれ。さたまらすといひなから。さすかに春字を秋とよみ。雪を霞とはよまれはへらぬものをは。所名にも朝妻吾妻をはつま〳〵とこそはいひつたへて侍れ。したしきをつまとよまは。夫字父母兄弟の字をもつまとよまれて侍らんや。但式部はなか比の上手にて侍れは。おとこをつまとよみて侍はゆへ侍らん。されは偏に難す（ニモ）へきに侍らす。唯證歌を承て。心のうたかひをたゝはやと思なり。
（前書）又和泉式部かおとこにつかはしけるうた。五月五日。詞花。

あやめくさかりにもくらんものゆへにねやのつまとや人はみるらん

予案之。萬葉集詠松浦佐夜姫歌云。

遠つ人松浦さよ姫つま戀にひれふりしよりおへる山の名

如此は男をもつまといふ歟。又云。

七夕のつま待宵の秋風にわれさへあやな人そ戀しき

かく侍はおとこをつまといふにこそ。

落葉埋路題を清成法印詠歌云。

紅葉散秋の山へはしらかしの下はかりこそ道はみえけれ

懐圓君（道濟子。）云。無題心路已露顯云々。

良暹歌云。

板まよりもりくる月の影みれは宿はあらして住へかり鳬

同人云。歌の五文字と童女の頭とはすへらかなるへしと云木馬の字尤別様也。貫之かあれたるやとの板間よりとよめるは。歌の中間にて何共きこえす。これはおひたゝしと云。

走井阿闍梨堂源歌云。

今は唯ねられぬ睡そ友とする戀しき人のゆかりと思へは

故將作難云。ぬるにとりてこそいと云事はあれ。ねられぬいといふとやはあるへき。不得心云云。
（前書）顯昭云。相如歌云。夢ならて又もあふへき君ならはねられ

ぬいをもなけかさらまし

昔[illegible]祐見等共に詣竹生島之時遭洪水、大津小舟漬洞水て[illegible]如斯許見けるに、範祐詠云

水うみに思はさりせは[illegible]嶋のまかきの島とみてやすきまし

聞及云。此歌有失[illegible]、仍不知之。範祐不然之由を問詞。還問之時其父の公[illegible]之許参て申此由、[illegible]沈思云。なとかきて不書。又[illegible]も有[illegible]云、[illegible]と曰ては留とこそ可讀けれ、遣ゐるは後日の恥也云々。

凡和歌には不可[illegible]若は不得心之詞なとは不可讀、能可擇物也。然者[illegible]由安次官清行和歌式云、凡和歌者先花後實、不[illegible]古言[illegible]随所名亭物異名。只[illegible]之中求[illegible]、玉之中得玉。長抛瓦礫之耻、先風月之思花、人詞林翠花、少其榮氣者。捨兮不採、昤渇時汲泉。無其嘉名、忍而不飲、是詞人遺風也。莫忽緒云々。随貢陽院七番歌合ニ、

時鳥今そきくなるとなりにも吹つる笛の音をはとゝめて

判者不思懸之由を被書稱。又時人嘲弄之云々。延喜十三年亭子院歌合云。

かた岡の朝の原もとよむまて山郭公今朝よりそなく

とよむまてと講出時下。満座解頤。仍不講終して止畢云々。近の歌仙前金吾基俊は。白露をしくけにぬける女郎花と讀て被咲。顕仲入道にたれこめてと讀て、納息兵衛佐と被云。古今にあるたれこめて病時詠之故歟。前泉州道經は紫のにほへるいもと詠すへきにと讀て[illegible]被云。隆縁といひし僧はおほをそ鳥にとよみて。おほをそとりの僧と被云。如此事よく〳〵可思慮也。故左京當被讀云、古讀とて無下に下劣の事は不可讀。先年白河院にて有和歌云。師時朝くましれといふことを讀、咲被仰云。無下にうたてあり。汝程のもの如此事知不やはある。歌には古もよめりとて。如此事は不可詠事也云々

此事不審。俊忠朝歌にそくましれと云事はよめる。

[illegible]云。俊忠を申遣給歟。

[illegible]相似鼓動二字之聲。仍禁之。雲東天末。文選月賦。相似天間二字之聲。仍忌之云々。

詩[illegible]と云事、昔常作之。近代忌之。人煙又近代忌之不作云々。風起于青蘋之末。(文選風賦。)相似青貧二字之聲。仍忌之。虎嘯風起。(孝經)風おこるとは不讀。風は聲に可讀云云云。

式部大輔匡家語云、道雅三位の八條にて。人々鹿歌讀に國房歌云。(康平之比。)

秋のゝに萩咲ちりてすむ鹿は是や世にふるかひよとそ鳴

聞之。經衡云。此歌いとおかしくよめり。まして淳和院邊にて尼原中にて讀ましかは。いま少しおかしからましと云けれは、一座解頤、萬人鼓動侍けりと云々。

〔頭注〕秋の野に妻なき鹿の年をへてなと我戀のかひよとそなく

近家に歌合に。或人。

よをへつゝいなみ野にたつ棹鹿は何をかいよと鳴明す覽

と讀を。判者基俊此事を爲證據。少以不重。〔寄生〕後度歌はふるかひと連たれはこそおかしけれ。只かひよといふ字許は爭可不詠哉。若忌之は古今淑人歌如何。漢家筆にも如此事可侍。保胤庭申序云。古人守之。今人守之。有國卿云。古の人もり今の人もり。多人守哉と嘲哢云々。

忠峯依宜旨獻歌云。

白雲のおりゐる山と見えつるは高嶺の花や散まかふらん

躬恒云。府生大誤歟。帝王に奏歌に雲下居とは爭詠哉。帝位をは雲上と云。避位を下居給と申。就中に末句に散まかふと讀る。尤可有禁忌云。

予案之。帝王御前にて下と云事。尤可有禁忌歟。但拾遺抄云。康保三年二月二十一日。梅花下に御倚子立て有御宴時。源廣信朝臣歌ニ云。

おりてみるかひも有かな梅の花いま九重に匂ひまさりて

此も可有禁忌歟如何。但彼は雲下居とつゝきたる故重歟。如此物語多無實歟。但末代之作法。如此事避には不如歟。

〔頭書〕顯昭考云。此事有俊頼髄腦。但大和物語云。延喜御時。召躬恒仰云。月を弓張と云事は何心そと。是か由仕れと被仰は。候階下仕し。照月を弓はりとしもいふ事は山へをさして入はなりけり。祿ニ大褂かつき畢。又。しら雲の此方にしも下居は天津風より吹てきつらし云云。或人云。問。此歌貫之難弓。但定說難知歟。但後撰歌云。しら雲の下居山と見えつるはふりつむ雲のきえぬなりけり。

郁芳門院根合に周防内侍歌に。わか下もえのけふりなるらんとよめる。又人のもえんけふりの空にたなびく。有禁忌之由人申けりと云云。作者の山かと思ふに。先女院崩御之後に。内侍は遁にしとそ。俊頼朝臣書置る。然而江記云。人々遺慶賀之由於周防掌侍許如何。是十番歌宜之〔マヽ〕由也云云。同根合時。右一番歌に多津の居と詠。後日左

宗固云。

此一帖は清輔朝臣の袋双帋の遺篇にして。奏覽以前の本なるへし。世上流布の袋双帋四帖の内。歌合事部立なく。唯雜談の部に五ケ條許入たるを。此遺篇には此事有上卷と書入あり。此書頭書多は顯昭の書入とみゆ。くましねの條下に。顯昭云。俊忠を思遣給かとある。父顯輔卿の事。若又兄清輔朝臣事か可考。二條爲定卿書入もあり。

世上流布本奥ニ。尋申云。藻草子名。今釋云。而此本ニ不使如何。傳云。然也。作釋ハ顚戯言歟。仍奏覽本ニハ依有其憚

不書之式。我ニ書ニ給タリシ本ニハ。件ノ本ハシニ書たりき。其本六角東洞院炎上之時焼之。此名者智袋也。又才學袋也。入袋常隨身。仍有此名。又合書諸事皆虚事歟。然者又虚言袋也ト釋タリシ。(下略)宗固云。今此遺箇の端に嚢字四義箇。一者其形嚢也。一者知嚢也。一者納嚢隨身也。一者名僻事。故虚言袋之義とアルニ合考て。此書全双帋の遺篇たる事をしるへし。二條院へ奏覽本ニハ此釋を除れたりとみゆ。流布本奥書。建久二年とあり。その筆者未詳とも。後に書たる物ゆへ。文に大同小異あれとも。此書の袋双帋たる事は分明なり。惜哉此書も又未脱稿とみゆ。今の流布本も疑に略本歟。中院家(通茂公。)御本も流布の本にて。所々文字を直されたるやうにみゆる也。此一帖尤珍書たり。窓外に出すへからす。

續群書類從卷第四百六十二

和歌部九十七

井蛙抄第一

風躰事

新撰髄脳云。(公任撰之。)凡歌は心深くすかたきよけにて。おかしき所あるをすくれたりと云へし。ことおほくそへくさりてよみたるはわろきなり。一すしに姿すくよかなるへし。姿心相具する事かたくは。先心をとるへし。其姿と云は。うちきゝきよけにて。ゆへ有て歌と聞へ。若はめつらしくそへなしたる也。いにしへの人多く歌枕をおきて。すゑに思ふ心をなんあらはしける。又云。凡詞いやしく。あまりおいらかなることはなと。〔は(らしイ)からひてすくれたる事にあらすはよむへからす。かもイ〕しらへらなとふるきを。つねによむまし。又古くよめることをふしにしたるはいとわろし。俊頼口傳に云。大方歌のよしと云は。心をさきとして。めつらしきふしをもとめ。詞をかさりよむへき也。心あれ共詞かさらされは。歌おもてはめてたし共聞えす。詞かさりたれ共。させるふしなけれは。よし共聞えす。めてたきふしあれ共。優なる心詞なきはまたわろし。けたかくおもしろきを一の事とすへし。これらをくしたらん歌は。世のすゑにはおほろけには思かくへからす。金玉集といふ物有。其集なとの歌こそはそれをくしたる歌なめれ。それを御らんして。御心をえさせ給ふへき也。

古來風躰云。歌のよき事をいはんとて。四條大納言公任卿はこかねの玉の集となつけて。通俊卿の後拾遺の序には。詞ぬひものゝことくに。心うみよりもふかしなと申されためれと。必しも錦ぬひものゝことくならね共。歌はたゝよみあけ。もしは詠しもしたるに。なにとなく艶にもあはれにも聞ゆる事のあるなるへし。もとより詠歌といひて。聲につきて能もあしくも聞ゆ

る物なり。

詠歌大概（被進梶井宮抄。）云。心はあたらしきをさきとす。人のいまたよまさる心をもとめて是をよむ。言葉はふるきをもとめて用ゆへし。ことはゝ三代集を出へからす。風躰は可效堪能先達之秀歌。不論古今遠近。よろしき歌を見て其躰にしたかふへし。又云。つねに「古歌の景氣を觀念して心にそむへし。殊にイ」見習ふへきは。古今。伊勢物語。後撰。拾遺。三十六人集の中に。殊に上手の歌を心にかくへし。人麿。つらゆき。忠岑。伊勢。こまち等のたくひ也。和歌の先達にあらすといへ共。「時節の景氣。世間の盛衰。物のよしをしらんためには。イ」白氏文集の第一第二の帙を常にとりもてあそふへし。深く和歌の心に通する也。和歌に師なし。たゝふるき歌をもて師とす。心を古風にそめて詞を先達に習はゝ。誰人か詠せさらんや。

新撰髄腦云。いにしへのよき歌。

世中をなにゝたとへん朝ぼらけ漕行舟の跡のしら波

あまの原ふりさけみれは春日なる三笠の山に出し月かも

貫之。躬恆。中比の上手也。今人のよむは此人の流なり。

つらゆき歌

思ひかねいもかりゆけは冬のよの川風さむみ千鳥鳴也

みつね歌

我宿の花見かてらにくる人は散なんのちそ戀しかるへき

かね盛歌

かそふれは我身につもる年月を送りむかふと何急くらん

此歌はつらゆきか云。歌の中の本躰にすへしといひけり。

攝津國のなからの橋もつくる也今は我身を何にたとへん

是は伊勢の宮す所の中務君に。なからむよにはかやうに歌はよめといひけり。

戀せしとみたらし川にせしみそき神はうけすも成にける哉

是は深養父か元輔にをしへける歌也。かやうに歌はよむへきにこそ。

五條歌合の判に。歌はかならすしも才學をふるひて。繪師のゑの具をつくし。つくもつかさの木の色をさま〴〵にゑりすへたるやうにはあらさるへし。たゝよみあけうちなかむるに。けにもとおほえて。おかしくも聞ゆるすかたなんあるへき。たとへは在中將の月やあらぬとよみ。紀貫之かしつくににこるといひをきたるやうなるへし。

京極被進右府將軍抄云。近世の人はたゝ思ひえたる風情を三十一字に云つゝけむとをさきとして。さらに姿詞の趣をしらす。これによりて世の末の歌は。たとへは田夫の花の陰をさり。商人の鮮衣をきけるかとし。然者大納言經信卿。俊賴朝臣。左京大夫顯輔。清輔朝臣。ちかくは亡父卿則此道を習ひ侍りける。其後と申ける人。此輩末の世のいやしき姿をはなれて。常

にふるきをこひねかへり。此人々のおもひ入てすくれたる歌は。たか代にもをよひてや侍らむ。

大納言經信

ゆふされは門田のいなは音つれてあしの丸やに秋風そ吹

君か代はつきしとそ思ふ神風やみもすそ川のすまん限は

おきつ風吹にけらしな住吉の松のしつえをあらふ白波

俊頼朝臣

山櫻咲にし日より久かたの雲井に見ゆる瀧の白糸

落瀧つ八十氏川の早き瀬に岩越波は千世の數かも

これははれの秀歌の本躰と申へきにや。

鶉鳴まのゝ入江のはま風に尾花波よる秋の夕暮

ふる郷は散紅葉にうつもれて軒のしのふに秋風そ吹

是は幽玄に面影かすかにさひしきさまなり。

あすもこむ野路の玉川萩こえて色なる浪に月やとりけり

思ひ草葉すゑにむすふ白露のたま〳〵きても手にもたまらす

是はおもしろく見所有て。上手のしことゝみゆ。

うかりける人を初瀬の山をろしよはけしかれとは祈らぬ物を

是は心ふかく。詞心にまかせて。學ふ共いひつゝけかたく。誠にをよふましき姿也。

顯輔卿

葛木や高間の山の櫻花雲ゐのよそにみてやゝみ南

秋かせにたな引雲の絶間よりもれ出る月の影のさやけさ

高砂の尾上の松を吹かせの音にのみやは聞わたるへき

清輔朝臣

冬かれの森のくちはの霜の上に落たる月の影の寒けさ

君こすは獨やねなんさゝの葉のみやまもそよにさやく霜よを

難波人すくもたく火の下こかれうへはつれなき我身なりけり

なからへはまた此比やしのはれむうしと見しよそ今は戀しき

先人俊成事

又やみんかたのゝみのゝ櫻かり花の雪ちる春の明ほの

世中よ道こそなけれ思ひ入山のおくにも鹿そ鳴なる

住わひて身をかくすへき山里にあまりくまなきよはの月かな

なには人あしひたくやに宿かりてすゝろに袖のしほたるゝ哉

立かへり又もきてみん松島やをしまのとまや波にあらすな

思ひきや榻のはしかきかきつめて百夜も同しまろねせんとは

いかにせん室のやしまに宿もかな戀のけふりを空にまかへん

基俊

あたらよをいせの濱荻おり敷ていも戀しらに見つる月哉

契り置しさせもか露を命にてあはれことしの秋もいぬめり

八雲御抄云。第一に歌のよきやうは。只すくにえんなるへき也。然るを此躰心にまかせていひかたき故に。心こもりて艷なるは第二也。えんならんとすれは必心たらす。心すくならむと

すれは又艶ならさる也。只えんならすといふ共。心をたしかによむへし。返々やさしきをこのむへからず。

同御抄云。させる事なき事をよくいひつゝけ。めつらしからぬ事をあたらしくいひなすへき也。むかしよりよみたる詞。いつれかいはゝめつらしかるへき。たゝいひなしからによりてめつらしき也。上句くたけたらは。下句かまへてすくに。下句くたけたらは。上句をすくによむへし。上下共にすくなるは本也。上下ともにくたけたるは。秀歌にこれなきかす。

又云。詮する所。奥義の肝心。すくに歌をよめとをしふるをせんとする也。努々他のやうを好むへからす。

京極（定家卿）被返衣笠（内大臣）状に云。まつ歌は只和國の風にて侍るうへは。先哲もくれ／＼かきをける物にも。やさしくものあはれによむへき事とそ見え侍る。けにいかにおそろしき物なれと。歌によみつれは。優に聞なさるゝたくひそ侍る。それにもとよりやさしき花よ月よなとやうの物を。おそろしけによめらむは。なにのせんか侍らん。抑も此十躰の中には。何も心あるやうにすきて。歌の本意と存る姿は侍らす。きはめて思ひえかたう候。とさまかうさまにてはつや／＼つゝけらるへからす。よく／＼心をすまして。其一境に入ふしてこそまれにもよまるゝ事に侍れ。されはよろしき歌と申歌。とに心のふかきをのみそ申める。あまりに又ふかく心をいれんとて。ねちすくせは。入ほかのいかへり歌とて。堅固ならぬ姿の心えられぬは。心なきよりもうたてくみくるしき事にて侍る。此さかひのゆゝしき大事にて侍る。倚々能々斟酌あるへきにこそ。

私云。心ある躰といふ事能々心得へき事也。近日の人は風情のめつらしく興ありてたくみ出したる。心あると思へり。さらにしからさる事也。風雲草木の感につけても。又世間盛衰なとにつけても。思入たるを心あるとは申也。故戸部申されしは。貫之か櫻ちる木の下風のうた。風情おもしろくめてたけれ共。是をは心ある歌とは申さず。遍昭僧正出家の時めのとのもとへ。たらちねはかゝれとてしもむは玉の我くろかみをなてすやありけん。是こそ心ある歌の本よと申されき。是すなはち家の庭訓也とたしかに申されし也。これにてよく／＼心うへし。

六百番歌合　餘寒

左持　季經卿

なをさゆるけしきにしるし山櫻また冬こもる梢なるらん

右　中宮權大夫

したふへき冬には雪のをくれゐて春ともいはすさえ渡るらん

右方申云。左歌。初五文字に題皆あらはれたる念なし。左陳云。初五文字に題の字よむ事不勝計。左方申云。非珍。判云。此兩首歌。姿は優にこそ見え侍るめれ。大かたは近来

の歌よみの聲。姿詞はしれるかしらさるか。偏曲折徴妙の風情を不盡之外は非珍の由に被存申之條。不被甘心事にや。但右の歌。雪のをくれゐてといへる詞。いますこし思ふへくや侍らんと見え侍れと。末の句よろしく侍るにや。勝負不分明歟。

廣田社歌合　述懐

左　實家

昔よりめくみひろ田の神ならはさりとも秋の心しるらん

右　登蓮

いつまてと我世の程をたのみつゝはかなく過る月日成らん

左歌。めくみひろ田のなといへる心は。あまた見え侍る中に。秋の心をよせられて侍るは。いとおかしくこそ侍るめれ。宜將愁字作秋心といへる詩の心なるへし。右歌。ことはに花をもとめ。文に玉をかされ共。詞つゝきもしすくなに聞えて。よろしくこそ見え侍れ。誠之至深者共詞先詞。文之偏質者共躰少躰と云て。これひとつのすかたに侍るへし。左はさりとも秋のといへる心あはれに聞ゆ。右ははかなくすくす月日なるらんとよめる姿風躰にかなへり。又猶持とす。

西行御裳濯河歌合

をしなへて花の盛に成にけり山の端ことにかゝる白雪

判云。右歌。うるはしくたけ高く見ゆ。左。こともなくうるはし。勝とや申へからん。

同歌合

花にそむ心のいかて殘りけん捨はてゝきと思ふ我身に

判云。右歌いとおかし。但左歌なをともなくよろし。勝とや申へき。

同歌合

吉野山やかて出しと思ふ身を花散なはと人や待らん

判云。左歌ともなくよろし。勝とや申へからん。

同歌合

左勝

霜さゆる庭の木葉をふみ分て月は見るやととふ人もかな

右

山川にひとりはなれて住をしの心しらるゝ浪の上かな

右歌いみしく艷には聞侍れと。左歌猶姿詞よろし。かちと申へし。

私云。わつかに卅六番歌合に。こともなくてよろしと云事。三所にかゝれて侍る。判者本意爰にて侍るへし。

順德院御百首

春よりも花はいく日もなき物をしゐてもおしめ鶯のこゑ

かやうにやすらかにもとめ出しくさりつゝけ候ても。三

代集以上の姿は候物を。され共かたはらくるしく好み候輩。かゝる心の候へかし。

かけしあれはおられぬ波もおられけり汀の藤の春のかさしに

五句非新造。風情始出來候。如此事殊難有令悅目候。

ともしてこよひもあけぬ玉くしけ二村山の峯のよこ雲

五句卅一字悉秀逸。如撮玉。光明照耀殊勝候。

人ならぬ岩木もさらに悲しきはみつの小島の秋の夕暮

此卅一字又毎字難押感涙候。尤玄之玄最上候歟。

中務卿親王文應三百首に。

音羽山はな咲ぬらしあふ坂の關のこなたに匂ふ春風

毎句美麗に候。かくこそあらまほしく候へ。珍重〳〵。

雲拂ふ夕風わたるさゝの葉のみやまさやかにいつる月影

たゝかやうにやすらかに。うつくしくこそ有たく存候へ。

當流撰者初度撰之時。自詠を撰入られたるは。定至極本意歌なるへし。風躰本様の爲に書出之。

千載集には撰者初は十一首也。勅定によりて廿五首を加て卅六首也。十一首殊玄之玄なるへき故に注之。

皇太后宮大夫俊成

みよしのゝ花のさかりをけふみれはこしのしらねに春風そ吹

夕されは野への秋風身にしみてうつら鳴なりふかくさの里

月さゆる氷の上にあられふり心くたくる玉川のさと

浦つたふ磯のとまやのかち枕きゝもならはぬ風の音かな

あはれなるのしまかさきのいほり哉露をく袖に波もかけけり

思ひきやしちのはしかきかきつめて百夜も同し丸ねせんとは

たのめこし野への道芝夏ふかしいつく成らんもすの草くき

あふ事に身をかへてとも待へきをよゝをへたてん程そ悲しき

住わひて身をかくすへき山里にあまりくまなきよはの月哉

雲の上の春こそさらに忘られね花はかすにも思ひ出しを

いたつらにふりぬる身をも住吉の松はさりとも哀しるらん

新古今京極歌は自余撰者并爲叡慮被入之間非自撰。仍新勅撰歌注出之。

權中納言定家

名もしるし峯の嵐も雪とふる山櫻戸の明ほのゝそら

久かたのかつらにかくるあふひ草空のひかりにいくよ成らん

天の原おもへはかはる色もなし秋こそ月のひかりなりけれ

あけは又秋のなかはも過ぬへしかたふく月のおしきのみかは

しくれつゝ袖たにほさぬ秋の日にさこそみむろの山は染らめ

ちりもせし衣にすれるさゝ竹の大宮人のかさすさくらは

松か根を磯邊のなみのうつたへにあらはれぬへき袖の上哉

戀しなぬ身のをこたりそ年へぬるあらは逢世の心つよさに

こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくや藻鹽の身もこかれつゝ

くるゝ夜は衛士の焼火をそれとみよむろの八嶋も都ならねは

逢事は忍ふの衣あはれなとまれなる色にみたれそめけん
たれも此あはれみしかき玉のをにみたれて物を思はすも哉
しのへとやしらぬ昔の秋をへて同し形見に殘る月かけ
おさまれる民のつかさのみつき物ふたゝひきくも命なりけり
百敷のとのゐを出るよゐ〳〵はまたぬにむかふ山の端の月

續後撰　　前大納言爲家

明わたる外山の櫻よの程に花咲ぬらしかゝる白雲
あたになと咲はしめけんいにしへの春さへつらき山櫻哉
天河とをきわたりに成にけりかたのゝみのゝさみたれの比
龍田山よその紅葉の色にこそ時雨ぬ松の色も見えけれ
染あへすしくるゝまゝに手向山紅葉をぬさと松風そ吹
いすゝ川神代のかゝみ影とめて今もくもらぬ秋のよの月
みしめゆふ三輪の杉村ふりにけり是や神代のしるし成らん
老らくのおやの見るよと祈りこし我あらましを神や受らん
逢までの戀そ命に成にける年月長きもの思へとて
たのましな思ひわひぬるよゐ〳〵の心はゆきて夢にみゆらん
みちのくのまかきの嶋は白妙の浪もてゆへる名にこそ有けれ

續拾遺　　前大納言爲氏

はるかなるふもとはそことみえわかて霞の上に殘る山の端
吉野山いくよの春かふりぬらん尾のへの花を雪にまかへて
春の夜の霞のまより山の端をほのかに見せて出る月影
いまよりの衣かりかれ秋風にたか夜寒をか鳴てきぬらん
かけやとす月のかつらもひとつにて空よりすめる秋の川水
須磨の浦や關の戸かけて立波を月に吹こす秋の鹽かせ
露霜のをくての稻葉色付てかり庵さむき秋の山風
紅葉はの秋の名殘の形見たに我とのこさぬこからしの風
さゆるよのあらしの風に降そめてあくる雲間につもる白雪

餘情

忠岑十躰云。餘情歌。
我宿の花見かてらに來る人は散なむ後そ戀しかるへき
今こんといひし計に長月の有明の月をまち出るかな
思ひかねいもかり行は冬のよの川風さむみちとり鳴也
音羽川せき入て落す瀧つせに人の心の見えもする哉
和田のはら八十島かけて漕出ぬと人にはつけよ海士の釣舟
此躰詞標一片。義籠萬端。

四條大納言(公任卿。)和歌九品。

上々　　言葉たえにしてあまりの心さへある也。
ほの〳〵とあかしの浦のあさ霧に嶋かくれゆく船をしそ思ふ
春立といふはかりにや三吉野の山も霞て今朝は見ゆらん

上中　　言葉うるはしくあまりのこゝろさへ有也。
太山にはあられふるらし外山なる正木のかつら色付にけり
相坂の關のしみつにかけみえて今やひくらん望月のこま

日吉社歌合奥書云。五條。俊成卿。）
おほかたおかしきを云。この理を云きらんとせされ共。もとより詠歌といひて。たゝよみあけたるにも。うちなかめたるにも。何となく艶にも幽玄にも聞ゆる事のあるなるへし。よき歌になりぬれは。其ことは姿の外に景氣のうかひたるやうなる事のあるにや。たとへは春の花のあたりに霞のたな引に。秋の月のまへに鹿のこゑを聞。かきねの梅に春の風にほひ。峯の紅葉にしくれのうちそゝきなとするやうなる事のうかひてそへる也。つねに申様には侍れと。月やあらぬ春やむかしのといひ。むすふての雫ににこるなといへる。何となくめてたく聞ゆる也。かやうなるすかた詞によみにせんと思へる歌は。ちかきよには有かたき事なるを。此ちかきとしより此かた見え侍りと云々。

六百番歌合　殘暑

右　　　信定

秋あさき日かけに夏は殘れともくるゝまかきは荻の上風

列云。右は有餘情の躰侍るへし。なすらへて可爲持。

千五百番

左　　　有家朝臣

時雨には色もかはらぬ高砂の尾上の松に秋かせそふく

京極黄門判云。左歌雖有餘情。可謂無殊事。

井蛙抄第二

取本歌事

八雲御抄に。これ第一の大事也。上手をにみゆるなり。しかあれと。またいと上手ならぬ人も。ふる歌よくとる人も有。上手の中にもふる歌えとらぬも有。此二様有。一は詞を取て心をかへ。一は心なからとりて物をかへたるも有。言葉を取て風情をかへたるはよし。風情をとる事は尤見苦し。心を取て物をかふとは。たとへは古今歌に。月夜よしよゝしと人につけやらはこてふにゝたりとよめる。萬葉に。我宿の梅咲たりとつけやらはこてふににたりちりぬともよしといへるをとれり。〔是は心も詞もかへすして。梅を月にかへたる計也。かゝるたくひイ〕これにかきらす。詞を取て心をかへたるは又おほし。萬葉の歌なとをは。本歌とるやうとしもなく。すこしをかへてよめるもおほし。人ことに夏野の草のしけくともいもとわれとしたつさはりなはと云歌をとりて。とは夏野のしけくともとよめり。足曳の山たちはなの色に出て我こひなむをやめんかたなしといふを。山たち花の色にいつなととれり。めかり鹽やきいとまなみくしけのをくしとりてたに見すといへるを。なたのしほやきいとまなみとはとれり。須磨の海士の鹽やきゝぬの藤衣まとをにあれはいまたきなれす。是をしほやくあまの藤衣とは。さなから歌をとるとしもなくとれり。又雫ににこる山の井のと

いへる。人丸の結ふ手の石まをせはみおく山の岩かきしみつあかすも有哉といふ歌をとれり。しかのみならす。三わの山しかもかくすか。ゆく水にかすかく。みなせ川ありて行水。をに出ていはぬなといへる。萬葉集のふるき詞をとれり。古歌に有たになかに有しといへるを。後撰集につらからぬなかに有こそうとしといへるなとも數しらす。上古はかくのことし。中比は歌取事まれ也。近代はまたおほし。其中にわさとめかしく耳に立て。これをとりたるを詮にて。わか心もをはもなきは返々此道の魔也。尤好むへからす。近代俊頼歌なとはやう〳〵とる事になりにたり。それもなをちかき歌をとるに似たり。歌をとらんには猶ふるき歌なとるへき也。東三條左大臣。(源常。嵯峨源氏。左大臣左大將。齊衡元年薨。卌七。)おりてかさゝん老かくるやとといへるを。みつれか老もかくれぬこの春はとよめる。すこしちかきよのためしなり。こゝろなかりせは霧きえぬとよめるは。谷より出る聲なくはといへるをさなからとれり。されとこれは歌を取作法にあらす。歌とるに自然にかよへるか。猶ふるき歌とる。ことにまめなる人の所為。まことに一事なれと。我とめつらしくよみたらんには。なをおとるへくや。すへて末代の人。いまは歌の詞もよみつくし。さのみあたらしくよき事は有かたけれは。只よは〳〵とある歌は。よろつ人にかはりたる處もなき事を。上手のけちめあらんとて。おそろしき萬葉の詞。ふる歌とりなとして。まへかはらふは。かならすよくよめりと思はれと。すこしけちめあらんとするなめり。二句なとはいかゝせん。三句とる事尤しかるへからす。凡古歌の詞いたくとるをは。先達なんする事なり。

筱蓬椎井宮抄に云。古歌をとりてあたらしき歌を詠る事。五句の中に三句にをよはゝ。すこふる過分めつらしけなし。二句のうへに三字四字是をゆるす。猶是を案せよ。同事を以て古歌の詞を詠るは頗念なし。花をもて月を詠し。月をもて花を詠す。四季の歌をもて戀雑の歌を詠し。戀雑の歌をもて四季の歌を詠す。かくのときの時古歌を取に難なし。

足曳の山郭公。　三吉野のよしの山。

久かたの月のかつら。　ほとゝきす鳴やさ月。

玉ほこの道行人。

かやうの詞またく幾度なり共はゝからす。

年のうちに春はきにけり。　月やあらぬ春やむかし。

櫻ちる木のした風。　ほの〳〵とあかしの浦。

かくのときのたくひを一句にてもさらに詠へからす。

私云。本歌をとれるやうさま〳〵也。一の様は古歌の詞をうつして上下におきて。あらぬ事をよめり。

名取川春の日数はあらはれて花にそしつむせゝの埋木

本歌 名取川瀬々の埋木あらはれはいかにせんとか逢見そめけん

なをさりの小野の淺茅にをく露も草葉にあまる秋の夕暮
本歌 淺茅生の小野のしの原忍ふれとあまりてなとか人の戀しき
散花の忘かたみの峯の雲そをたに殘せわすれかたみに
本歌 おかてこそ思はん中ははなれなめそをたに後の忘かたみに
春のよのあけのそほ舟ほの〳〵といく山もとを霞きぬらん
旅にきて物かなしきに山本のあけのそほ舟興に出見ゆ
大とものみつのはま風吹はらへ松ともみえし埋む白雪
いさ子共はや日本へ大とものみつのはま松まちこひぬらん
たをやめの袖もひあへす飛鳥風たゝいたつらに春雨そ降
たをやめの袖吹かへすあすかかせ都をとをみいたつらに吹
乙女子かかさしの櫻咲にけり袖ふる山にかゝる白雲
をとめ子か袖ふる山のみつ垣の久しき世より思ひそめてき
見すもあらすみもせぬ影の半天にあやなく霞む春のよの月
みすも非す見もせぬ人の戀しくはあやなくけふや詠暮さん
一やう本歌にかひそひてよめり。
鶯のなけともいまた降雪に杉の葉しろき相坂の山
梅かえにきゐる鶯春かけてなけ共いまた雪は降つゝ
思ふとちそこ共しらす行暮ぬ花の宿かせ野邊の鶯
おもふとち春の山邊に打むれてそこ共いはぬ旅ねしてしか
きり〳〵す鳴や霜よのさむしろに衣かたしきひとりかもねん
さむしろに衣かたしき今宵もや我を待らん宇治の橋姫

萩か花ま袖にかけて高圓の尾上の宮にひれふるやたれ
高圓の野への秋萩いたつらに咲か散らん見る人なしに
たへてやは思ひありともいかゝせんむくらの宿の秋の夕暮
思ひあらは葎の宿にねもしなんひしき物には袖をしつゝも
深草の里の月影さひしさも住こしまゝの野邊のあきかせ
年をへて住こし里を出ていなはいとゝ深草野とやなりなん
一のやう。本歌の心にすかりて風情を建立したる歌。本歌に贈答したる姿なと。古くいへるも此姿のたくひ也。
消なくにまたやみ山を埋むらん若菜摘野も淡雪そ降
み山には松の雪たに消なくに都は野へのわかなつみけり
鳰の海や月の光のうつろへは浪の花にも秋は見えけり
草も木も色かはれ共わたつみの波の花にそ秋なかりける
卯花のまかきは雲のいつことて明行月の影やとるらん
夏の夜はまた宵なから明ぬるを雲のいつこに月宿るらん
天河遠き渡りに成にけりかたのゝ御野のさみたれの比
あまの川とをき渡にあらねとも君かふなては年にこそまて
久かたの中なる川のうかひふねいかに契りてやみを待らん
ひさかたの中に生たる里なれは光をのみそたのむへらなる
しかの浦や遠さかり行波間よりこほりて出る在明の月
さよふくるまゝにみきはや氷るらん遠さかり行志賀の浦浪
ゆく春もよるはこえしととまらなんくるゝまかきの山吹の花

夕暮の籬は山と見えなゝん夜はこえしとやとりとるへく
春よりも花はいくかもなき物をしゐてもおしめうくひすの聲
濡つゝそしゐて折つる年の内に春は幾日もあらしと思へは
うきよりは住よかりけりとはかりに跡なき宿に移たてる門
山里は物の淋しきことこそあれよのうきよりは住よかりけり
霞ゆく難波の春の明ほのに心あれなと身を思ふかな
心ある人に見せはや津の國のなにはあたりの春のけしきを
人とはゝ見すとやいはん玉津島霞む入江の春のあけほの
玉津島よく見ていませ青によしならなる人の待とはゝいかに

一のやう。本歌の心に成かへりて。しかもそれにまつはれすして。妙なる心をよめる歌。是は拾遺愚草中につれにみゆる所也。

大空は梅のにほひに霞つゝ曇も果ぬ春のよの月
照もせすくもりもはてぬ春のよの朧月夜にしく物そなき
駒とめて袖うち拂ふかけもなし佐野のわたりの雪の夕暮
にはかにも降くる雨かみわか崎のゝ渡に家もあらなくに
高砂のおのへのしかのなかぬ日もつもり果ぬる松のしら雪
秋風のうち吹毎に高砂の尾上の鹿のなかぬ日そなき
名取川いかにせんともまたしらす思へは人をうらみつる哉
なとり河瀬々の埋木あらはれはいかにせんとか逢見初けん
秋の色にさてもかれなて堀江こく棚なしをふね我そつれなき
堀江こく棚なしをふねこきかへり同し人にや戀わたりなん
やとりせしかり庵の萩の露はかり消なて袖の色に戀つゝ
秋の田のかりほの庵の匂ふまて咲る秋萩見れとあかぬかも
白妙の袖の別に露おちて身にしむ色の秋風そふく
白妙の袖わかるへき日を近み心におせふなきにしもあらす
秋はいぬ夕日かくれの岑の松よもの梢の後もあひ見む
山高み夕日かくれの淺茅はら後みんためにしめさらましを
契をきしすゑ野のはらのもとかしはそれ共しらしよその冬枯
石上ふるからをのゝもとかしはもとの心はわすられなくに
尋ぬれは思ひしみわの山そかし忘られねもとのつらき面影
三輪の山いかに待みん年ふとも尋ぬる人もあらしと思へは
白妙の衣手かれていくかへり草な冬野の夕暮のそら

本歌不見。[illegible]立待と妹に告せよ

一のやう。[illegible]一ふしをとれる歌。

初[illegible]にはへる山の櫻花[illegible]雲かとそみる
[illegible]ふ山に朧月のあおきる[illegible]にして
玉ほこの道もやとりも白雲に風の吹しく[illegible]路のしの原
しら雲に風の吹しく[illegible]
[illegible]とは我たにいとふいとへたゝそをたに同し心と思はむ
[illegible]はむ中は[illegible]忘れ[illegible]に
[illegible]すから月にうれへて[illegible]なく[illegible]にむかふ[illegible]

たゝにおいて見て[illegible]はある人におかふ[illegible]
わすれしの人たにとは[illegible]かた[illegible]にふり[illegible]とも
忘れしのゆく末まてはかたけれはけふをかき[illegible]とも
　本歌二首を引てよめり。

千五百番歌合　　　　定家

はてはたゝあまのかるもをやとすにて枕定むる[illegible]
[illegible]しあふ[illegible]なそ[illegible]あまのかるも[illegible]
よゐく\に枕定むる方もなしいかにねしよの夢に見へけむ
　　　　[illegible]

老となる物とはしり[illegible]しかりとてそむかれなくに月を[illegible]
大かたは月をもめてし是そ此つもれは人の老と成もの
しかりとて背かれなくに[illegible]しされは[illegible]かれ[illegible]世中

一取古名歌句事

廣田社歌合　　　　季定

こきはなれしほちを行は淡路島かくるゝまてになかめつる哉
五條判云。左歌。すかたはよろしくこそ侍を。下句やかの
かくるゝまてにかへり見しなといへる。名歌のめてたく
侍るをは。いかゝときこえ侍る也。ふるき歌一二句とるも
つねの事なれと。櫻散ゝ[illegible]言葉。はゝかるへくはへる也。
私云。惠慶能因すてにさくら散とをきて侍り。かやうの
事人にしたかふへきにや。あかりての人は別の事にて。
[illegible]　今の世の人はなをはゝかるへしとにや侍らん。
[illegible]にはせきとおそ花のしからみかくへかりけり
[illegible]はふかりけり世をいたれにとこしなひもなく

一[illegible]事

[illegible]時。
　今こんとつ[illegible]し月の有明の月にをしかつ[illegible]
此歌はことからやさしとて勝にき。されと定家朝臣當座にて
[illegible]につかに二句こそおはり[illegible]侍れ。かや
うにあ[illegible]たる歌は[illegible]句をおきかへて。上句を下におくへし。
侍りあ[illegible]たるこそよけれ[illegible]もとの置所にて。むね
の句とむすひ句と計かはれるは。難とすへしとなん侍し。
[illegible]大納言[illegible]良[illegible]消息云。近来諸人上手名誉之輩。
偏好詠[illegible]一樣。[illegible]情[illegible]之時。自身同詠云々。亡父不許此事。
三代集已下古歌之三句を取渡て用自歌事。同題同心殊誡[illegible]候。
萬葉集古歌長歌旋頭等之詞。随其體可詠之由申候き。毎人雖詠
之。少々覺悟事。

　　　　　　　　家隆卿
泊瀬山うつろはんとや櫻花色かはり行峯のしら雲

　　　　　　　　範永卿
春霞たな引山の櫻花うつろはんとや色かはり行

さひしさに柴折くふる山里ゝ身より思ひの煙やはたつ

さひしさに類をたにもたゝしとや柴折くふる冬の山里

如此類作。

中務卿親王御歌云。

音羽山はな咲ぬらし相坂の關のこなたに匂ふ春風

民部卿每句花麗。返々かくこそ有度候へ。珍重〳〵。

なとは山をとに聞つゝ會坂の關のこなたに年をふる哉

私云。此歌本歌已及三句。殊有賞美之詞。可謂不審。

九條前内府被付詞云。本歌似過候歟。古歌句之在所及三句

爲同處者候。先達中無念之由候歟。

六百番歌合

右

思ふとちそこ共いはす行暮ぬ花の宿かせ野邊の鶯

左右共に無難之由申之。

判云。右歌は素性法師の思ふとち春の山邊にうちむれて

そこ共しらぬ旅れしてしかといへる歌を。とりすくせる

にや侍らん。是は鶯に花の宿かれる。あまりさへ艶なるに

や。ふるからすは持なとにや侍らん。

一萬葉本歌事眨

千五百番歌合

左勝　　　　　　　　　　　　　　左大臣

誰をけふまつとはなしに山陰や花の雫に立そぬれたる

右　　　　　　　　　　　　　　雅經

山風の吹ぬるからに音羽河せきいれぬ花も瀧の白浪

左はかの萬葉の山の雫に我たち濡れぬといへる歌の心を

とりて。花の雫にたちそぬれぬると云る。心いみしく艶に

見え侍るを。右又人の心のみえもする哉といへる歌を思

へる。おかしからさるにはあらす侍れと。猶中古の歌は

萬葉の心にをよひかたかるへし。仍以左爲勝。

同歌合

左　　　　　　　　　　　　　　有家朝臣

朝日陰にほへる山の櫻花つれなく消ぬ雪かとそみる

右　　　　　　　　　　　　　　定家朝臣

櫻花うつろふ春をあまたへて身さへふりぬる淺茅生の宿

左。朝日かけとをき。つれなくきえぬ雪とみゆらん。風情

いとおかしく侍るへし。右。うつろふ春をあまたへてとい

ひ。身さへふりぬるあさち。心のやみのへらすにや侍らん。

あはれもかくへくやとおほえ侍れと。たをたの朝日かけ

をむかしの夜の鶴の侍らましかはとゝ。心なくかへておほ

え侍れは。勝負すてにまとひて。同科とや申へく侍らん。

同歌合

左　　　　　　　　　　　　　　季能卿

駒なめてこせの春野を朝行はあさきか原に雲雀鳴也

右　俊成卿女

吉野の[illegible]上の[illegible]に花そ散りける

左[illegible]の春[illegible]といへる。萬葉集なとおほえて、殊に[illegible]るを。下句こそ何のはらといへるにか侍らむ。管見のものよみた[illegible]みとか[illegible]侍れ。萬葉集に[illegible]の山野にはつらつ[illegible]といへる[illegible]におほえ侍り。右はことなる事は侍られと。すかたことはとかなく侍るにや。大かたは萬葉集に[illegible]おかしき[illegible]なる[illegible]とそ。ふるきものも申侍き。巨勢のはる野。しゐてこひねかふへきにはあらさるにや。無事なるにつきて。右勝とや侍らん。

六百番歌合

左勝　定家朝臣

かはれたゝわかるゝ道の野邊の露。命にむかふ物も思はし

判云。左。命にむかふや。萬葉集なとに侍るめれと。殊に不可庶幾よし。

愚管抄云。(源承法眼。萬葉集歌取事)

寶治百首に　正三位知家

過きつる里をはるかに鳴島のかけろのをのかしのゝめの空

今夜もやさのゝをかへの秋風にさゝはかりしき獨かもねん

これらは當家に申たかひて。彼萬葉の名所とりてよめる姿なり。此ふりの歌その比よりおほゝいてきたり。

[illegible]なしみに[illegible]てふ時に[illegible]へる紅葉[illegible]かり也

光俊朝臣

いちか袖まきもく山の朝霧に匂ふ紅葉のちらまくもおし

[illegible]大崎の[illegible]にまは[illegible]せまけれと百舟[illegible]といひなくに

是は右[illegible]乙丸[illegible]之時歌也。非吉事。

文永二年[illegible]山[illegible]首歌合

[illegible]小[illegible]の[illegible]に[illegible]の[illegible]らん

百[illegible]の[illegible]につに立渡る雲にもあれや時なしも待

是は[illegible]云々。有[illegible]。

はりまかたあさこく船のほのかにも見え渡る山は淡路島かも

まゆのこ雲井に見ゆる阿波の山かけて漕舟泊りしらすも

本歌をとる姿をあらはにそれときこゆ。とく〱しく立耳を秀逸とおもへは。當家これをゆるさす。

前中納言定家

白雲の春はかさねて立田山をくらのみねに花匂ふらし

古歌[illegible]

白雲の立田の山の瀧の上之小鞍嶺爾開乎爲流梅花

駒とめて袖打はらふかけもなしさののわたりの雪の夕くれ（あらなくにイ）

くるしくも降くる雨か三わか崎さのゝ渡に家もなくして

こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくや藻鹽の身もこかれつゝ

淡路島松帆乃浦之朝名藝爾玉藻苅管暮菜寸(二)[illegible]藻鹽燒

菅海末通女

新勅撰　石清水臨時祭　禁中

散もせし衣にすれるさゝ竹の大宮人のかさすさくらは

さゝ竹の大宮人の家にすむ佐保の山をはおもふやも君

海邊引網　　　從二位家隆

波風ものとかなる世の春にあひて網の浦人たゝぬ日そなき

網能浦之海處女等之燒鹽乃念曾燒吾下情

是らに本歌をとれる心詞。實治以後の歌人の是をまなへる風躰。なすらへて是しりぬへし。

已上法眼抄。

古來風躰云。萬葉集の歌は。よく心をえて。とりてもよむへき事そと。ふるき人申をきたる也。

一物語歌取本歌事

後鳥羽院御抄云。歌合の歌なは。いたく思ふまゝによますとそ。釋阿寂蓮なとは申しゝか。別の樣にてはなし。題の心をよくおもはへて病なく。又源氏物語の歌の心をはとらす。詞なとるはくるしからすと申き。すへて物語歌の心をは。百首の歌なとにもとらぬ事なれと。近代はそのさたもなし。

六百番歌合　蟬　勝　　女　房

鳴せみの羽におく露に秋かけて木陰すゝ敷夕暮の聲

判云。左歌。羽におく露に秋かけてなといへる。すかた詞殊にえんにおかしくも侍るかな。尤當然。

同歌合　枯野　　女　房

みし秋を何にのこさん草の原ひとつにかはる野へのけしきに

右申云。草のはらきゝつかす。

判云。左なにゝのこさん草のはらといへる。艶にこそ侍るめれ。右方人草の原を難申之條。頗るうたゝあるにや。紫式部は歌よむ程よりも。ものかく筆はことに殊勝の上。花のえんの巻はことに艶なるもの也。源氏見さる歌よみは遺恨事也。

千五百番歌合

左　　俊成卿女

かけきよき花の所は有明の月もえならすすめる空哉

左歌。花の所のあり明の月。えならす見え侍らん。ともに女人のうたはかやうにこそとえんに見え侍に。よき持に侍るへし。

源氏 琴の音も月もえならぬ宿ながらつれなき人を引やとめける

正治百首　　左大臣

よし野川岩もる水のわきかへり色こそ見えね下さはきつゝ

源氏 思ふとも君はしらしなわきかへり岩もる水の色しみえねは

井蛙抄第三

代々宗匠不庶幾之由被申たる詞とも有。あるひは優美ならさるにより。或は義理のたかひたるにより。或は詞のおしきにはあらねとも。時俗のきほひよむによりてとゝめられたり。しかるを今の後學末生。禁制の詞と名付て。書もって侍れ共。つや〳〵其いはれをわきまへす。傳の制戒にも通局をあかし。法曹の律にも輕重をたてたり。其みなもとをわきまへすは。いかてかあやまりなからん。よて先達のいましめられたる遺屬。その後代々の用捨。管見のをよふ所。少々是をしるす。是につきて能々了見をくはへて。これをまもり是を可謹。

一なかめ

中務卿親王文應三百首御歌に。

むら雲のうつれはかはるなかめ哉夕立しつる山のはの月

　民部卿入道殿云。是はさせる難にては候はね共。事次に申上候。あはれはあはれなる事。なかめはなかむる事に詠候へし。あはれといふ物。なかめといふもの。別に有様に共躰は不可詠之由。亡父まさしく申候き。又第四句もつよくきこえ候にや。

六百番歌合　枯野　　有家朝臣

いろ〳〵の花ゆへ野へに立出しなかめまてこそ霜かれにけれ

　判云。なかめまてこそといへる。もしは枯野の野へなたかむれは。なかめてといはん。とかはなかるへけれと。すへてなかめは強て不可庶幾にや。

同歌合　　有家朝臣

あまの原それ共みえぬなかめ哉去年のなこりの雪の曙

　判云。あまのはらとをける。宜はきこえ侍るを。此なかめ哉といふ詞の近來みえ侍る。未甘心覺え侍り。定て僻心に侍らんかし。雪の曙も。ちかくよりつねの事になれるにや侍らん。

圓位上人勸進百首　　定家朝臣

はれくもりをなしなかめのたのみたに時雨にたゆる遠の里人

左大臣家歌合　夜深待月　　定家朝臣

よをかさねたゆます久になかめする山のはをそき月を戀つゝ

六百番歌合　寄遊女戀

　左勝　　定家朝臣

心かよふゆきゝの舟のなかめにもさしてかはかり物は思はし

　判云。左歌。下句さしてゝと云る詞。舟の秀句にもとめたるやうにきこゆらむ。

同歌合　春曙

　左持　　女房

見ぬ世まて思ひのこさぬなかめより昔に霞む春の曙

　右　　定[illegible]

思ひ出はおなしなかめにかへるまて心にのこれ春のあけほの

判云。両方春曙。左はむかしにかすむといひ。右はこゝろにのこれといへる。心すかた共にいとおかし。よき持に侍るへし。

一けしき

中務卿親王文應三百首

雲までもあはれにたへぬけしき哉秋のゆふへのむら雨の空

民部卿入道殿云。是も次に申上候。けしきと云詞。强不可好詠之由亡父申候き。

同御詠云。

しくるへきけしきをみする山風に先さきたちてふる木葉哉

けしき以前に申上候。

法眼(源承。)抄云。中野禪尼(俊成女。)建長元年に四十八願の文を歌によみて。法文のとはり思ふやうありとて。點あふへきよしきこえ侍しかは。いなひかたくて。しるしつかはし侍しとき。歌見しれる神妙也とて。故實共をしへ侍りし中に。けしきと申詞好よむへからすゝ申侍りき。先人に尋侍りしかは。同しやうに申侍りしか共。いまの世にははゝかる人も侍らし。漢語をは不可好詠事歟。

六百番歌合　枯野

隆信朝臣

霜枯の野へのけしきを見ぬ人や秋の色には心そめけん

判云。右歌。心詞あしくはみえさるにや。但つね躰なるへし。

千五百番歌合に。

左勝　女房

歸雁かすみのうちに聲にして物うらめしき春のけしきや

五條云。左歌。かすみのうちに歸るかり。景氣ことにみゆるやうにこそ侍れ。

同歌合　三宮

行かよふ人たにあらはとひてまし山路の菊の秋のけしきを

京極之判云。歌の姿詞よろしく侍るへし。

六百番歌合　賭射

右勝　家隆

梓弓春の雲井に引つれてけしきことなるけふの諸人

判云。左。復舊假之由なるへし。右。又氣色ことなるなといへる。なにとなく朝儀をほめたるへし。亦持とや申へきにや。

圓位上人勸進百首　定家

あさなきに行かふ舟のけしきまて春をうかふる浪の上哉

一中〳〵に

中務親王

中〳〵によそにも見しと思ふこそ人めをしのふあまり之けれ

民部卿入道殿云。是ハ上句ふちとけてや侍らん。
　私云。雖不有他難。中〳〵の事は其沙汰なし。
一みやまへのさと
一吹あらしかな
中務卿親王
きゝなれぬ松の嵐もかねてより思ひしまゝのみ山への里
　民部卿入道殿云。深山邊の里。吹あらし哉。不可詠よし。亡父禪に申候き。隨分加制止候。
一しろき
同御歌に。
波かくるむこのうら風音さえてあは島しろく雪そ積れる
　民部卿入道殿云。しろきと申詞。亡父申旨候き。
順徳院御百首
駒とめてしはしはゆかし八橋のくもてに白きけさの淡雪
　京極黄門云。八橋のくもて。試々おほく候へと。古歌にも詠來候。近年しろきと申詞。あしかるへきとには候はね共。末生初學毎人毎首詠候故に。あまりに滿耳て嘔噦の思ひ侍。
八雲御抄云。定家しろき。あをき。吹あらしかな。嵐ふくなり。にて。のみ侍ると云も。詞のわろきにはあらし。人ことにこのむなにくむなり。

私云。家持卿しろきを見れは夜そふけにける。秀歌本躰にて侍れは。詞のわろきにてはあるへからす。優なるにつきて。人ことに好みよみけるなるへし。所謂御製のすきのはしろき相坂の關。式子内親王の初雪しろしをかのへの松。慈鎭和尚のわか山のはに雪しろし。家隆の雲井にしろき峯のかけはし。是等をはしめて。其比きほひよみける程に。にくまれけるにや。殊に御製のあらしもしろき春のあけほの殊勝の間。向後可爲無念。不可詠之由。和歌所にてさた有けるとそ語申されし。此字堅可憚愼者歟。
千五百番歌合
　左　　　　　顯　昭
散まかふ花を雪かと見るからに風さへしろし春の曙
　左歌。風さへしろき春の曙といへる。下句よろしくこそ侍るめれ。
秀能すゝめの五首に。　　　　定　家
天津風初雪しろしかさゝきのとわたる橋の有明の空
正治二年九月院御歌合　曉雪
明ぬるか梢おれふす松かねのもとこり白き雪の山のは
一一字の秀句聲のたかひたる事
中務卿親王御詠云。
雲のゐる遠山鳥のたそ櫻こゝろなかくも殘る花哉

民部卿入道云。委詞珍重候。但山鳥の尾と存候。緒非本意候。

同御詠云。

山鳥のをたえの橋にかゝみかけなかきよ渡る秋の月影

山鳥の緒の事。以前に申上候き。是委詞たくみに候歟。

一まに

六百番歌合　左　季經卿

打むれてすみれつむまに飛火野の霞のうちにけふもくらしつ

判云。左歌のさまはよろしきやうに見え侍るを。すみれつむまにと云る。まにのことは不可庶幾にや。

同歌合　左　顯昭

この世には心とめしと思ふまになかめそはてぬ春の曙

右方申云。左歌のまにの詞。實に不足に聞え侍り。右をこそまさると申侍らめ。

同歌合　兼宗朝臣

散つもる花をふましと思ふまに道こそなけれ志賀の山こえ

右方申云。左歌。と思ふまに。不快歟。

判云。左の思ふまにも。右方申狀頗可然歟。

西行御裳濯河歌合に。

足引の山かけなれはと思ふまに梢につくる日くらしのこゑ

判云。左歌。梢につくる。心ふかくゆへ有て聞ゆ。但此まにといへる詞そ。人々よむ事なから。猶思ふへくやと覺え侍る。かやうの事は人かへりてわらふへき事也。しかれ共一身思所をつゐてに申出る也云々。

一あさあけ

衣笠内府御歌

おく山の谷の杉生の朝あけに獨きゝつる時鳥哉

京極黄門朝曙を七文字に詠候時。あさけの風はとよみ候。實正の字をあさあけに候。此詞猶三字に詠之。あの字書加之時。七字は八字に成候はきゝよく候。此あの字を五字に任候事。頗不甘心思給候。

一なにかほ

西行御裳濯川歌合　左

たちかはる春をしれ共見せかほに年をへたつる霞之けり

判云。左歌。姿心相叶て見ゆ。但見せかほにといふことはゝ。我も人もよむ事也。さは有なから。猶歌合ときにはひかふへきにやあらん。かつは歌のさまによるへし。

衣笠内府　わかものかほ

京極黄門。此詞自他雖非不詠事候。打解詞に候。

順徳院御百首

花鳥の外にも春の有かほにかすみてかゝる山のはの月

鶯花之故圀。錦繍之山川にあらすとも。風月之景気。煙霞の興趣。見所まさり候歟。

院五十首　月照瀧水　　定　家

秋の月袖に瀾にし影なからぬるゝかほなる布引の瀧

權大納言家三十首　旅泊

漕よせてとまる泊の松風をしる人かほにいそく夕暮

大納言典侍早世時　　為　家

とはれてもことのはもなき悲しさをこたへかほにもちる涙哉

内裏秋五十首歌合　　定　家

おさまれる民の草葉を見せかほになひく田面の秋の初風

新後撰　　法印定為

はかなくも思ひ捨てしおなしみを世に有かほに何なけくらん

六百番うたあはせ　　定　家

白菊のちらぬは殘る色かほに春は風をもうらみける哉

戀侘て我となかめし夕暮もなるれは人の形見貌なる

文治百首

よもすから花立はなを吹風のわかれ貌なる曉の袖

一つかねを

衣笠内府御歌之時。

京極黄門。東綺。雖古今歌詞。頗無品物候。

一ねるやねりそ

僻案抄云。ねるやねりそとは。何か申にかと尋申しかは。かくとふはさる歌よまんと思ふかととかめられ侍き。萩かるおのこのゆふへきたはなけれは。枯たるえたをねちよりてゆはむとするよしか。此歌まねひよむへからすとて侍りし。

一ひちて

僻案抄云。ひちてとはひたしてと云こゝろ也。此詞むかしの人このみよみけるにや。古今にはおほく見ゆ。後撰にはすくなし。今の世の歌によむへからすとそいましめられし。

一紅葉しにけり

寶治百首時。中納言爲經卿詠内々被見合之時。ふるし申たる事は候はね共。愚意にはしめて可斟酌之由被注付之云々。

一あたら夜

千五百番歌合

左　　左大臣

明はては戀しかるへき名殘哉花の陰もるあたらよの月

右　　内大臣

侘人の住とはきけと足曳の山のかひある岩つゝし哉

左。花のかけもるあたらよの月。誠に名殘おほく侍るへき事也。右。山のかひある岩つゝし。おかしくは侍るへきを。侘人のすむとはきけとゝ云る。管見の老者不覺悟侍り。其間暫も左まさるへきにやと可申侍處。極以難其恐多。

あたら夜の詞。雖爲嘗覧事。强不可庶幾所存也。仍持とすへく侍るにや。如斯申狀御恐惶々々。

八雲御抄云。あたら夜といふけ。萬葉には惜夜といへり。それにあらす夜也。風情なくあたらよ也。

一なさけ

千五百番歌合

左負　顯昭

さきぬとてたつねてみれは白雲のまよふも花の情ならすや

五條判云。なさけの詞も。よせなくては。ことにこひねかふへからさるにや。

六百番歌合

左負　有家朝臣

さり共と待へき程のなさけかは人たのめなる蜘のふるまひ

判云。南方のくものふるまひ。ともに優なるに似たり。但左中五字。詩なとには優詞なれと。歌にはさまて侍らぬにや。

玉葉集十六　前大納言爲氏

六十あまり老ぬる年のしるしとて君かなさけのみにあまる哉

一こもる

千五百番歌合

右　寂蓮

あかつきの鴫たつまてもなかりけりいなはにこもる宿の夕暮

京極黄門判云。いなはにこもるといへる。霞中花の色。霧中庵。わか草のつま。おやのかふこならては。とはりならすやきこえ侍らん。

一かはす

順德院御百首

秋風や千草なからにみたれけん花咲かはす宮木のゝ原

宮城野の原の千草の花のみたれあへる氣色尤美麗に侯。かはすの詞於愚意聊存旨侯。

續拾遺　爲家

手花にむすふ薄の初尾花かはす袖さへ露けかりけり

貞應二年　爲家

雁かねの羽うちかはす白雲の道行ふりは櫻なりけり

六百番歌合　定家卿

をちこちになかめやかはすうかゐ舟やみを光のかゝり火の影

一月花をのれとよむ事

一いつくへなといふへの字

西行御裳濯河歌合に。

世をうしとおもひけるにそ成ぬへき吉野の奥へ深く入なは

判云。大方は此いつこへと云への字は。非久ふるくもちかくも人よむ事にはあれと。こひねかふへきにはあらさる

也。これも思ふ所を此次に申いつる也。

八雲御抄云。わか戀といひ〳〵。その心となし〳〵。あはれたりといひて。そのすゑにつや〳〵実なる事もなき歌おほし。すへて歌にはこゝろえてよむへき事のある也。いかなれはおほつかなと云五文字は。けにもおほつかなき事なとをいひたるはよく。それかいともとならぬは。ゆゝしく見くるしき事也。又能も聞えぬともおほし。さもこそは。物さひしかる。物わひしかる。思ひかな。物ゆへに。ものにそ有ける。ありと思へは。いはまほしき。せまほしき。なになりなといへる詞はいとよくもなし。又あらましな。してしかな。見てし哉なといふ事はつれの事なれと。なにとやらんにくし。きくはまことか。あらんとすらんなとも又にくし●おもほゆるかな。心地こそすれなとは。なか〳〵狂したるかたも有ぬへし。又下句になにゝ有明の月といひはて。なにを松そ吹なといへる。めつらしからぬ秀句は。むけのゑせ歌よみの好む事也。俊頼抄にいへる。かくのこときの詞の中に。わひしかりけり。悲しかりけり。へらなとは。まとにさもと聞ゆ。みわたせは。また〳〵なとは。なにかはあなかちにくるしからん。

千五百番　保季朝臣

山深き秋をみるにも思ふ哉是よりおくの夕暮の空

京極黄門判云。思ふかな。おもはまほしく侍るにや。

一玉のを柳

西行御裳濯河歌合

山かつのかた岡かけてしむる野のさかひにたてる玉の小柳

左歌。さる事ありと見る心地して。めつらしきさま也。末句のをの字やすこしいかゝ。さもよみて侍るかとよ。

一みゝとなき名所

中務卿親王文應三百首に●

春雨の降にけらしなをつらのあとかは柳ふかみとりなり

是又あとかは柳。或人の詠之時。如此事癈忘。至愚難覃之由。亡父申候き。

鶯の物うかる音にうらふれて野上の方に春そ暮行

第四句不便候歟。

かけろふの岩かきふちの草かくれあるかなきかにとふ螢かな

上句不便歟。

かりほさすしつきの田井も露ちりて尾花吹しく秋の夕かせ

此田井も疎遠の間。不能申是非候。

家居して誰すむならし玉嶋の此河上に衣うつこゑ

夜半にふくうら風さむみあらきたののさかの里は衣うつ之

已上二首憚と存候。

みなふちのほそ川山そ時雨めるまゆみの紅葉今さかりかも

山の名やさしからす候にや。

こま山の嵐やさむきいつみ川わたりをとなみ千鳥なく也
あへの島（あへしまのイ）岩うつなみのよるさえてすむとも閑ぬ千鳥なく也
むろの浦の南千の方のさよ千鳥なき島かけてせと渡る之
已上三首撰と存候。
吹おろすあそ山あらし今朝さえて冬野をひろみ雪そ積れる
よもすから此市柴をおりたきて雪にそあかす大はらの里
已上二首撰と存候て罷過候。
古郷はときつのはま（里イ）のいそ枕山こえてこそ波に成ぬれ
是又愚心迷て不分明候。暫罷過候。
ちとせ山これや昔のさゝれ石岩ほにふるき苔の色かな
此やま少似大嘗會歌候歟。
以上。
衣笠内大臣家御歌云。
五月雨にわたるあさせもなかりけりみな淵山の谷川の水
京極黄門。みなふち山谷其謂候。名所顛不庶幾候。
中務卿親王御うたに。
このねぬる朝露わけて玉垂のこすのおほ野に秋はきにけり
民部云。ことからたくみに目出度候へとも。猶撰候歟。

井蛙抄第四

一同名之名所
いなはやま
古今八　中納言行平
立別れいなはの山の峯におふる松としきかは今歸りこん
此名美濃因幡両國に有。みのは稻葉と云所。因幡は當國一宮宇倍宮山也。皆松有。行平卿因幡國司なり。任の時や詠しけんおほつかなし。新古今十。續拾遺六。又十六。新後撰三有。
此名所皆以在納言詠爲本歌。
千とせ山
拾遺十　能宣朝臣
ことしより千とせの山は聲たえす君か御代をそ祈るへらなる
丹波國也。又出羽有同名。千載十光範の歌も。大嘗會歌丹波也。
をくら山　、、峯
萬八　岡本天皇
夕されはをくらの山に鳴鹿のこよひはなかすいねにけらしも
山城國。　嵯峨邊也。
萬九短歌
白雲のたつたの山の瀧の上の小倉の峯にひらけたる櫻の花は
をくらの峯は大和國也。小倉山に不可混亂。
かみなび山　、、御室山　、、杜

千載廿　義忠朝臣

ちはやふる神なび山の榊にをときしてそいのる萬代の爲

丹波國、大嘗會歌也。

古今五　忠岑

神なびのみむろの山を秋ゆけは錦たちきる心地こそすれ

よみ人しらす

立田川紅葉はなかる神なびのみむろの山に時雨ふるらし

大和國也。神なび山。神なびのみむろの山下流歟。神なびの杜

とよめるも大和也。

古今九

神無月時雨もいまたふらなくにかねてうつろふ神南の森

是も大和といへり。但古今に源さねかつくしへゆあみんとてまかりけるに。山崎より神南の森まておくりにまかりてといへる。大和にてはあらし。みやこの西の方にやとおほゆ。かうなひを云といへり。

をとは　ゝゝ瀧　ゝゝ河　ゝゝ山

古今ひえの山なるをとはの瀧を見てよめる

たゝみね

おち瀧つたきのみなかみ年つもり老にけらしな黒き筋なし

拾遺十　いせ

音羽川せき入て落す瀧つせに人の心の見えもする哉

古今十二　よみ人しらす

やましなの音羽の瀧の音にたに人のしるへく我戀めやも

同十一　在原元方

音羽山をとに聞つゝ相坂の關のこなたに年をふる哉

續古今一　定家卿

音羽川雪けの水も岩越て關のこなたに春はきにけり

西坂本の山科とともに山城國也。瀧と川とは逢坂所歟。をとは山は限山科歟。

ふしみ　ゝゝ里　菅原　ゝゝ山　ゝゝ田居

後撰十八　よみ人しらす

名にたてゝふしみの里と云ことは紅葉を床にしけは也けり

後拾遺十九　俊綱朝臣

都人くるれはかへる今よりは伏見の里の名をもたのまし

山城國也。

古今十八　讀人不知

いさこゝに我世はへなんすか原や伏見の里のあれまくもおし

後撰十七

すかはらや伏見のくれになかむれは霞にまかふ小初瀬の山

大和國也。

新古今　俊成卿

ふしみ山松のかけより見わたせはあくる田面に秋風そ吹

萬葉
大藏の入江ひゝくやいめ人の伏見の田居に鴈わたるらし
伏見山。ふしみの田居は。みな山城の伏見也。新古今にふしみの野への草枕と侍るも。山城の伏見也。
古今
たこのうら　ゝゝの崎
するかなるたこのうら波たゝぬ日はあれ共君を戀ぬ日はなし
駿河也。
萬十九　　家持(編九)
田子のうらの底さへ匂ふ藤波をかさしてゆかんみぬ人の爲
越中國布勢海也。兩所不可混亂。先年或歌仙多古の浦藤浪にこひぬ日はなしの本歌によせて詠したりしを。故戸部被難侍き。
萬十八
たこの崎この暮しけき時鳥きなきとよめははた戀めやも
是は駿河國也。
あきつ野　秋津の小野　をのゝ秋津
萬四
三芳野のあきつのをのゝ野上には跡みすへをきてみやこには宮(萬葉)
同一
よしのゝくにの花散あひあきつのゝへにみやはしら
やまとの國也。
同四
かくてのみ戀(レイ)やわたらん秋つ野にたな引雲の末(過イ)とはなしに
同七
あきつ野に朝ゐる雲のうせゆけは昔も今もなき人おもほゆ
紀伊國也。予細見萬葉集。
同七
岩藏の小野の秋津に立わたる雲にしあれや時をしまさるまたね(萬葉)
山城國也。
さの　ゝゝ渡　ゝゝ船橋　ゝゝ中川　ゝゝ岡
萬三
くるしくも降くる雨か三輪か崎さのゝ渡りに家もあらなくに
やまとの國也。
萬十四
かみつけのさのゝ船橋取はなしおやはさくれと我さくるかへ
千載十四　　源仲綱
住なれしさのゝ中川瀬絶してたかれかはるはなみたなりけり
三所捌所賦。萬葉十四に。上野のさいゝくゝたちおりはやし我はまたんかとしこすとも、とよめるは。舟橋同所賦。
萬三　　赤人
秋かせのさむき朝けをさのゝ岡こゆらん君に衣かさましを

紀伊也。

眞野　〻浦　〻入江　〻萩原　〻萱原　〻濱邊　〻池

萬四

まのゝ浦のよとのつき橋心にも思ふやいもか夢にしみゆる

金三　としより朝臣

鶉鳴まのゝ入江の濱風に尾はな波よる秋の夕暮

萬三

いさやこらやまとへはやく白菅のまのゝ萩原手おりて行ん

やまとのくに也。

萬三

みちのくのまのゝ萱原とをけれと面影にして見ゆといふ物を

まのゝ浦のよとのつき橋は攝津國。又まのゝ浦同。まのゝ入江は近江。まのゝ萩原はやまと。まのゝかやはらは陸奥也。先年宗匠亭會。或仁まのゝかやはらを湖邊に詠し侍りしを。故民部卿可詠直之由。子息を使にて被仰き。如此混亂尤可分別事也。

萬七

とよ國のまのゝ濱邊のまさご地のたゝにもあれは何か嘆かん

豐前國也。

萬十一

まのゝ池のこすけを笠にぬはすして人の子を額まつへき物を

これは攝津國也。

しらすけのみなと

續古今　九條前内大臣

松陰の入海かけてしらすけのみなと吹こす秋のしほ風

遠江國しらすかといふ所を被詠云々。しらすけのまのゝ萩原に不可混。

角田川

新勅撰十一　盛方朝臣

すみた川せきりに結ふ水のあはのあはれなにしか思ひ初けん

新後十八　法印清譽

都鳥いく世かこゝにすみた川ゆきゝの人に名のみとはれて

伊勢物語に。むさしの國としもつふさの國とのなかにある。すみた川のほとりにいたりてと云り。

萬十四（三歟）　辨基法師

まつち山夕こえくれていほさきのすみたかはらに獨かもねん

駿河國也。都鳥こゝにもあれやいほさきのすみたかはらも名こそかはらねとよめり。

片岡　〻朝原　〻山　〻杜

萬二

かた岡のむかひのみねに椎まかはことしのなつの陰にせんかも

古今五
霧立て鴈そ鳴なる片岡の朝のはらは紅葉しぬらん
拾二十
しなてるや片岡山のいひにうへてふせる旅人あはれおやなし
片岡の朝原。かたをか山の同異はしりかたく侍れとも。皆大和國なるへし。
新古今三　紫式部
時鳥こゑまつ程はかた岡の森のしつくに立やぬれまし
片岡の森は賀茂片岡社の杜にて侍れは山城也。新勅撰片岡の杜の木葉も色付ぬと侍るも同所歟。能因か夏の日のかけにすゝみし片岡の梓は稲そ色付にける。(續古今)西行。山かつの片岡かけてしむる野のさかひにたてる玉のを柳。これらはかならすしも非名所歟。
しかの浦
拾二十　公任卿
さゝなみやしかの浦風いかはかり心のうちのすゝしかるらん
萬七
さゝなみやしかつの浦のふなのりにのりにし心常忘られぬ
志賀。しかつ。共に近江國潟水同所也。しかの大わたも同し。
萬十五
しかの海士（うらイ）のひとひもおちす焼鹽のからき戀をも我はする哉
筑前國しほうみ也。しかの海士のめかりしほやきなとよめるも是也。近江志賀。筑前は志賀也。
わかの浦　わかの松原
萬　赤人
わかの浦に汐みちくれはかたをなみ芦へをさして田鶴鳴渡る
紀伊國也。玉津嶋も此うらの内なり。
萬　聖武天皇
いもにこひわかの松はら見渡せは潮干のかたに田鶴鳴渡る
河内國也。
續古今　光明峰寺殿
伊勢嶋や一志の松原見渡せは夕鹽かけて秋風そ吹
是はいせ也。
よと　六田　大淀
古今
山城のよとのわかこもかりにたに來ぬ人頼む我そはかなき
淀のわたり。淀川。淀野。皆山城國同所也。
萬七
音にきゝめにはまたみぬ吉野川六田（なるイ）のよとをけふみつる哉
萬九
蛙鳴六田のかはの河柳ねもころ見れとあかぬ君かな
やまとの國也。新古今にもたかせさす六田のよとの柳原みと

りもふかく彼か井出も同所なるへし。伊出は山城のまとにそ。お
つたかはらと申所に有由申人有。おやしきやうに聞侍る。

萬七

いましくもみぬやと見むし玉吉野の大かはなゝのくなるせ

これも同所なるへし。

大淀の松につらくもあらなくにうらみてのみも帰る浪かな

是は伊勢國淀也。今別の事なけれ共。由緒のよせて入侍る。
人の不審したる事有し程に書付て侍。よどゝいへる所は攝津
國也。與注之。

後西園寺

野上よりはるかにみれは八幡山ふもとの川や大よとの淀

是も亦同前。

玉川　野田ゝゝ　野路ゝゝ　ゝゝ里　井手ゝゝ

拾十四

玉川にさらすてつくりさら／＼にむかしの人の戀しさやなそ

萬葉には此下句なにそこの此こゝたかなしきとあり。是は
武藏國也。

新古今　能因

夕されは鹽風こしてみちのくの野田の玉川千鳥鳴也

千載四　俊頼朝臣

あすもこん野路の玉河萩こえて色なる浪に月宿りけり

後拾遺二　相模

見わたせは浪のしからみかけてけり卯花咲る玉川の里

此三首玉川在所同異難知。或云。陸奥。或はつのくにか。

千載二　俊成卿

駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井手の玉川

是玉川は山城也。

新古今　後鳥羽院御製

玉川のをしの羽風にけみえて色なる浪にかけつなく也

伊勢物語は野路玉川井手玉川同所歟。

つゝ井　淀ゝゝ　まのゝゝゝ　眞木ゝゝ

拾遺

まのゝ浦の淀のつき橋心にも思ふやいもか夢にし見ゆる

攝津國か。金葉續古今以下連綿在之。

後拾遺　相模

ふみ見ても物思ふ身とそ成にけるまのゝつき橋と絶のみして

これも同所か。千載俊頼朝臣歌。又まのゝつき橋と詠す。

萬十四

あの音せすゆかんこまもか葛飾のまのゝつき橋やます通はん

下總國也。此橋代々集連綿。

金二　顯仲朝臣

五月雨に水まさるらしさわた川まきのつき橋うきぬ斗に

やまとの國歟。此橋共名相似歟。不可混亂。
大原　ヽヽ小鹽　ヽヽさえのゝ沼
詞花十　良暹
大はらやまたすみかまもならはれは我やとのみそ煙たえける
北山の大原也。
萬四
大原のこのいちしはのいつしかと我思ふいもに今夜逢ぬかも（ぬるイ）
古歌枕に北山大はらにおなしく書れたり。
古今
おほはらやをしほの山もけふこそは神代のことも思ひいつらめ
ともに山城國なれと是は西山なり。大はら社邊也。
後拾遺　良暹
ほとへてや月もうからん大原やおほろのし水すむた計そ
これは北山大はら也。
金六
たしほ山松風さむし大原やさえのゝぬまやさえわたるらん
西山なり。
小野　ヽヽ篠原　ヽヽ船橋
金葉　公實卿
雪の色をうはひて咲る卯花にをのゝ里人冬こもりすな
大原ちかき小野也。惟高のみこの御くしおろしてすませ給
ひしも。けんしにうき舟のかくれて住しも此所也。松かささ
なともをの也。ふかやふか補陀落寺も小野也。ふかやふか住
けるゆへに。山里と申人もあり。さもやと覺ゆ。
古今
淺茅生のをのゝしのはら忍ふ共人しるらめや云人なしに
後撰　源等
淺茅生のをのゝしの原忍ふれと餘りてなとか人の戀しき
古歌枕には山城國としるして侍り。大原小野と同所と思へ
るにや。
續古今　藻壁門院少將
露しけきをのゝしの原いかに又おまりて旅の袖ぬらすらん
續拾遺　定修律師
旅人の宿かり衣袖さえて夕霜むすふをのゝしのはら
是等は都ちかき小野とはおほえぬ也。近江に小野といふ宿
有。しのはらと云所あり。これらはあつま路なれは。旅の歌
にも可相叶歟。但不聞先達説。雅章の儀也。凡野をはいつく
も小野とよむ。非名所歟おほし。眞言小野流といふは山科の
小野也。小野古江は伊勢國也。
詞花　俊雅母
夕霧に小野の舟橋をとすえたなれの駒の蹄くるかに
共國不分明。

玉江　三島江の玉江

拾遺　　貫之

夏かりの玉江の芦をふみしたきむれゐる鳥のたつそらそなき

古歌枕に越前の國といへり。

萬七

み嶋江の玉江のこもをしめしよりをのかとそ思ふ未からねと

攝津國と云々。これはよと河也。みしま江にしほのみつなと

ゝよむ人の有し。ひか事也。

みつの江　ゝゝの吉野

後撰十五　　よみ人しらす

あけてたになにゝかはせん水のえの浦島のこを思ひやりつゝ

丹後國也。

新古今十七　　季能

みつのえの吉のゝ宮は神さひてよはひたけたる浦の松かせ

攝津國也。此よしのみよしのゝ吉野に不可混。

宇治　ゝゝ山　ゝゝま山　ゝゝのつ

古今

我庵は都のたつみしかそすむ世をうち山と人はいふ之

山城國宇治川の邊也。喜撰かすみかはみむろのおく也。河の南北を宇治といふか。

萬一

うちま山朝風さむし旅にして衣かすへきいもゝあらなくに

古歌枕大和國としるせり。權法印定顯宇治ま山を宇治川の邊のやうによまれて侍し。定有子細歟。

同

秋の野のみ尾花かりふき宿りせし宇治の都のかりほしそ思ふ

大くら　大くら山　ゝゝの入江

詞十　　能宣朝臣

みつきつむ大くら山はときはにて色もかはらす萬代をへん

近江國也。大嘗會歌也。後拾遺にも有。

萬九

大くらの入江ひゝく也いめ人のふしみの田井に鴈渡るらし

山城國宇治川也。俗にをくらといふ所也。

松山

後拾遺八　　定頼

松山のまつのうら風吹よせはひろひて忍へ戀忘れ貝

讃岐國也。

後撰十一　　贈太政大臣

松山につらきなからも波こさむをはさすかに戀しき物を

陸奥末松山也。

おほしま　ゝゝ峯

萬十五

筑紫ちのかたの大島しましくもみねは戀しき妹をゝきて來ぬ
備前國也。
萬二
いらか家もつきて見ましを大和なる大島嶺に家もあらましを（なくにイ）
國分明也。
おきつしま　ゝゝ山　ゝゝの濱
おきつ島あら磯の玉も鹽みちて隱ろへゆかはおもほえんかも
紀伊國といへり。
あふみの海おきつしま山おきまへて我思ふ妹に戀のしけ行
國分明也。おきつの濱和泉國。
古十七。　忠房
君を思ひおきつの濱に鳴田鶴の尋くれはそ有とたに聞
新古今　定家
ことゝへと思ひおきつの濱千鳥なく〳〵出し跡の月影
三津　ゝゝ小島
古十七
をしてるや難波のみつに燒鹽のからくも我は老にける哉
萬十一
白まなこみつのはにふの色に出ていはすてのみそ我戀らくは
萬四
大とものみつとはいはし茜さしてれる月夜にたゝにあへり共

萬八短歌
難波かたみつのさきより大舟にまかちしけぬき
後撰十七。
難波津をけふこそみつの浦ごとに是や此世をうみわたる舟
以上攝津國也。
古廿　黒主
をくろ崎みつのこ嶋の人ならは都のつとにいさといはましを
陸奥也。
萬十
いさこ共はやひのもとへ大とものみつの濱松まちこひぬらん
攝津國也。
續拾五　祝部成賢
浪よするみつの濱邊の浦風にこよひもさむく衣うつ之
近江國坂本のみつのはま歟。
たかし山　ゝゝ浦　ゝゝ濱
新勅撰　鎌倉右大臣
雲のゐる梢はるかに霧こめてたかしの山に鹿そ鳴なる
金葉八　紀伊
をとに聞高師の濱のあた波はかけしや袖のぬれもこそすれ
高師山。高師浦は遠江國也。
萬一

大とものたかしの濱の松かねを枕にすれといへしおもほゆ
古歌枕に和泉國と云り。(可考。此歌不見萬葉。管見歟。)

なこ　ゝゝ海　ゝゝ濱

萬七
なこの海あさけの名殘けふもかも礒の浦はにみたれてあらん
越中國也。(私云。此歌攝津國と云。可考。)

萬
住吉のなこのはまへに駒なへて玉ひろひしてつれは忘れす
攝津國也。

おふのうみ　おくの海　あふの浦　ゝゝ川原

萬四
あふの海の汐干の潟のかた思ひいそきやゆかむ道のなかてを
右門部王任出雲守時。娶部内娘子也。未有幾時。既絕往來。累月之後更起愛心。仍作此歌。贈致娘子云々。仍此うみ出雲國也。

新古今十四　定家朝臣
尋見るつらき心のおくの海よ汐干のかたはゆふかひもなし
若おふの海同所歟。以前歌被詠歟。又おくの海陸奥か。

續古今　順德院御製
うし迚も身をはいつくにおくの海の鵜のゐる岩も波はかけ鬼
此國又不審。

拾遺十八　人丸
おふの浦に舟乘すらんわきも子かあかもの裾に鹽みつらんか
歌枕に伊勢國と云り。大の浦同所歟。

おふのうら　ゝゝ河原

萬十八　福丸
思にそ我は思ひしおふの浦のありそのめくりみれとあかれす
越中國也。布勢海云々。

古廿　伊勢
おふの浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならすもねて語らはん
いせの國也。

萬八　聖武天皇御歌
おふの浦のそのなか濱による波のゆたけくも君を思ふ此比
遠江國也。

萬十一
まこもかるおふの川原のみこもりに戀こし君かひもとく我は
下野國也。但萬三に。おふの浦の川原の千鳥なかなけはわかさほ川の思ほゆらくにとある。出雲國也。おふの川原も同出雲國にや。

ふた見のうら　ゝゝ潟

古今九　兼輔卿
夕月夜おほつかなきを玉くしけ二見の浦は明てこそ見め

言葉書に。たゞまの：へまかりけるときに。二見のうらにとまりてと有。

金八　大中臣輔弘

玉くしげ二見の浦のかひしけみまきゑにみゆる松の村たち

詞書に伊勢の二見の浦にてよめるといへり。

新勅撰　家衡卿

我戀はあふともしらす二見かた明くれ袖に波そかけゝる

尾張國と云り。

あさか　ゝゝ浦　ゝゝ潟　ゝゝ沼　ゝゝ山　ゝゝの山

萬　弓削皇子

夕されは鹽みちきなん住吉のあさかの浦に玉もかりてな

攝津國也。

萬十四

あさかかた鹽干のゆたに思へらはうけらか花の色に出めや

國不分明。

古十四

みちのくのあさかの沼の花かつみかつみし人に戀や渡らん

萬十一

あさか山かけさへみゆる山の井のあさき心を我おもはなくに

ともに陸奥國也。

萬八　市原王

ときまちておつる時雨の雨やみて朝かの山はうつろひぬらん

尾張國といふ説有。

かゝみ山　ゝゝの宮

古十七

かゝみ山いさ立よりて見て行んとしへぬる身は老やしぬると

近江國也。

萬三

豐國のかゝみの山にいはとたて隱れにけらしまてときまさす

豐前國也。不吉所也。不可詠。此歌にて知ぬへし。

續拾　僧正隆辨

神代より光をとゞめて朝熊のかゝみの宮に澄る月影

伊勢也。

なから　ゝゝ橋　ゝゝ濱　ゝゝ山　ゝゝ宮

古十五　讀人不知

逢事はなからの橋のなからへて戀わたるまに年そへにける

新古今十七　惠慶

春の日のなからの濱に船とめていつれか橋ととへと答へぬ

萬六短歌

うみをなすなからのみやにまきはしら

橋。濱。宮。みな攝津國所也。

後撰十七

世中たいとひかはらにこしか共うき身なからの山にそ有ける

拾十　能宣

さゝ浪の長柄の山のなからへてたのしかるへき君か御代かな

あふみ也。

みしま　、、江　、、浦　、、野

萬十一

みしますけいまたなへ之時またはきすやなりなんみ島すか笠

新勅十一　行能

数ならぬみしまかくれにこく船の跡なき物は思ひ成けり

攝津。伊豫。伊豆有同名（私云。此歌名所水島かくれか。源氏にも有。）

後拾一

みしま江につのくみわたる芦のねの一よの程に春めきにけり

これは攝津國みしまとは別所也。

續後撰十八　好忠

浪の上にみしまの浦のうつせ貝むなしきからに我や成なん

攝津國也。但みしま江とは別所也。

萬十七　家持

やかた尾の鷹を手にすゑみ嶋野にからぬ隙なく月そへにける

越中國也。萬十七。みしま野をそかひに見つゝ。ふたかみの山とひこえて。雲かくれ行と有は。大和國にもやとおほゆれ共。萬十六に。しふたにのふたかみ山にわしそ子うむといふ。さしはにも君かためにそわしそこうむといふといへり。是はふたかみ山も越中ときこえて侍る也。

野路　、、篠原

後撰十六　長能

あつまちの野路の雪まを分てきてあはれみやこの春をみる哉

近江國也。千載新勅撰等歌も同所と見ゆ。

新古四　基俊

高圓の野路の篠原末さはきそらや秋風けふ吹ぬなり

大和國也。

あへ　、、の田面　、、市路　、、島山

萬十四

さか越てあへの田面にゐるたつのともしき君はあすさへもかも

古歌枕不注國。

萬三

やきつへにわか行しかは駿河なるあへの市路にあひしこらはも

國分明也。いつれも住吉のあへのと同所にはあらさる歟。

續古十　為家卿

あへ嶋の山のいはかねかたしきてさぬる今宵の月のさやけさ

大和國云々。

かつら　、、川　、、の里　、、山　、、宮　、、潟

續後撰　　　　　　　　　　實　方

桂川かさしの花のかけ見えしきのふのふちそけふは戀しき

金葉

こよゐわか桂の里の月をみておもひのこせることのなきかな

川。里。同所。山城也。

新勅撰七　　　　　　　　　匡　房

久方の月のかつらの山人もとよのあかりに逢にけるかな

丹波國。大嘗會歌也。

古今かくし題

秋くれと月のかつらのみやはなる光を花とちらす斗に（をイ）

是は山城歟。桂川邊也。今も桂宮院と申所有。

後九條内大臣

春のよのおほろの月のかつらかた山まてつゝく海の中道

是はつくし也。

とは　ゝゝ田　ゝゝ田の浦　ゝゝ山松

詞花三　　　　　　　　好　忠

山城の鳥羽田の面を見わたせはほのかにけさそ秋風はふく

國分明也。

萬十二

郭公とはたのうらにしく波のしはしも君を見んよしもかな

國不審。若伊勢とはの浦歟。

しら鳥のとは山松のまちつゝそ我戀わたる此月比を

是は山城の鳥羽也。

みむろ　ゝゝ山　ゝゝの岸　ゝゝ外山

萬七

我きぬの色にそめたりあちさけのみむろの山は紅葉したるに

拾七

神なひのみむろのきしやくつるらん龍田の川の水のにこれる

いつれも大和國也。

萬三　　　　　　　　　　大織冠

玉くしけみむろと山のさね葛さねすは終にありとみましや（新撰古今ニ如此入之説ニハ有カテマシチト在之）

山城國也。

なきさはの森　なきさの森

萬二　　　　　（私作者方ニハ依羅女王ト有之）人　丸

なきさはの森にみはすえ祈とも我大君はたかひしられす

續古今　　　　　　　　衣　笠

村しくれ幾しほ染てわたつ海の渚の森の色に出らん

ともに紀伊國也。若同所歟。なきさの院は攝津禁野の邊也。

まつち山

萬九

あさもよひきえ行君かまつち山みゆらんけふそ雨はふりそね

やまと也。

る澤邊にはつなかぬ駒もはなれさりけり。其心おなしきゆへに。なはたつをふしにしたる。それも耳たつやう也。

判云。左歌は俊惠法師歌に相似の由右方申云々。かやうの心はさらてもつれの事之。但平定文か歌拾遺に。たゝにはよらて春駒のつな引するそなはたつときくと詠せるは。女によせて。なはたつとはいへる之。是はひとへに繩をたつといへる。尤凡なるにや。

同歌合

左　女房

むさし野にきゝすも妻やこもるらんけふの煙の下に鳴之

右方申云。賴政歌に。霞をやけふりと見らんむさし野につまこもれりときゝすなく之といへるに歌似たり。

左陳云。不入撰集者。不見及有何難乎。

判云。左歌。賴政か歌之條誠不可避取事也。撰集の外はしゐて不可引出。

千五百番歌合

左　顯昭

あつま路を雪に打出て見渡せは波にたゝよふ浮嶋か原

判云。左歌。雪に打出てといへる。波にもことよりておかしくは侍るを。すこし思ひ出らる事そ侍る。作者は見をよはずも侍らん。

建久二年左大將家百首に。

あしからの關路こえ行しのゝめに一むら霞む浮島かはら

正治二年内大臣家歌合。

駒とめて打出の濱を見渡せは朝日にさはく志賀の浦浪

雖似昨今事。徐達遐邇之聽。打出見渡詞。東路眺望心。大略相同此兩首歟。右歌。氷句難頗無詮。風體似聊有心歟。

私云。二代判非一准歟。

六百番　旅戀

左 持　顯昭

きさかたやいも戀しらにさぬるよの磯のね覺に月かたふきぬ

判云。左歌。始終いひくたして見え侍り。たゝし基俊と申ふる人の。伊勢のはま荻折しきてといひし歌を。土代とせるよとやみえ侍らん。

同歌合

右　寂蓮

思ふよりうきに馴たる袂哉なみたや戀のさきにたつらん

判云。右は後二條殿女房筑前か歌心すこしをとれる也。千載集所入也。件歌裏注之。

思ふよりいつしかぬるゝ袂かな涙そ戀のしるへ之ける

文字のをき所いく程たかはす侍るへし。

一をなしてにをはの字あまたある事

千五百番　忠良卿

浦ちかきあしやの里に日はくれて波路の霧に海士のいさり火

京極黄門判云。上下句のにの字。なきよりはいかにそやきこえ侍るにや。

中務卿親王御歌

白雲の跡なき峯に出にける月のみふねも風を便に

にの字あまたさし合歟。小町か花の色はうつりにけりないたづらに我身よにふるなかめせしまに。是は秀逸に候へは別の事か。

一初五文字事

六百番

うしつらしあさかの沼の草の名よかりにも深きえには結はて

判云。初にうしつらしとをける。艶書なとにはさも侍りなん。歌合には戯言なる樣にや侍らん。

家成卿家歌合に

いのりつゝ五十鈴の川の水上にまかせても見る君か千年を

基俊判云。いのりつゝも。はしめの句の上にをくへしともおほえす。是等をしとにこそ侍るめれ。凡ふるくよめるうつくしき詞をわさと讀んと侍る之。これらは非道の事にこそ侍るめれ。

西行御裳濯川歌合

左負

あやめつゝ人しるとてもいかゝせん忍ひはつへき袂ならねは

判云。忍ひはつへきたといへる。すゑの句はいとおかし。始五文字やいかにそきこゆらん。

左

なへてならぬよもの山邊の花はまつ吉野よりこそ種は取けめ

右

秋になれは雲ゐの月のさかゆるは月のかつらに枝やますらん

判云。左初句。右中五文字。ことに歎美の詞にあらすやあらん。持なるへし。

井蛙抄第六

雜談

故宗匠被語申云。續古今は正元之年西園寺の一切經供養の時。民部卿入道一人可撰進之由。直に被仰下侍しを。其後被加撰者。結句眞觀下向關東。將軍家(中務卿宗尊親王。)此道御師範と成て。每年關東より被申とて。我思ふさまに申行へり。民部卿入道。我撰の歌の外は。一事以上不有申子細とて口を閉侍き。和歌評定の時治定の事も後又申改。かやうにこそ評定には治定侍りしに。何樣事哉之由被申けれは。いさなにと候ける哉らん。鶴の內府參被申行侍候と。眞觀返答しけり。仙人のわ

たましのやうに。鶴に物を負すれはと。民部卿入道利口し申されけると云々。集治定の後。所存相違の事とも一卷に書て。常磐井入道相國のもとにつかはす。爲家往還陳陣時。勅撰之者故實二百ヶ條秘事を祖父入道より相傳のよし書たる此事也。爲教卿常磐井相國に隨逐の間且及異。詞書に百首にと侍るを。百首歌にとあるへきかなと躰の事共之。ちゝとしたる大旨。なにか秘事にてもあるへきと云々。

民部卿被申云。寛元六帖人々讀大略誹諧の詞也。民部卿入道詠に誹諧躰多しと。常磐井入道相國。故京極中納言入道被申候。風躰には異とてしはしは不被請云々。彼六帖歌躰に諸人の歌なりて。暫は歌損して侍りける也。一條法印云。常磐井入道相國薨し給ひて後。入道民部卿入のもとへ遣状に。此道の眼。年久の悲歎無休。就中寛元六帖俗に近く。續古今撰者無秀逸と被申事。殊難忘事也云々。

故宗匠云。俊成は圓玄にて難及。定家は義理ふかくして難學。たゝ民部卿入道躰を可學の由。深相存也云々。

又云。民部卿入道被申けるは。亡父歌殊勝なれとも。歌見しらさらん子孫みたりに撰入せは。あしかるへき歌多し。我歌はをろかなれとも。たとひ歌しらさらむ子孫か撰出たりとも。さまてあしかるましき歌を詠し置て侍る也云々。

又云。二條左兵衛督爲定は此道門弟なる故に。緣者（爲氏男。）に成て細々會合しき。ある時酒宴の雜談に。教定卿。故中納言入道殿御詠に。長月の月の有明のしくれゆへあきの紅葉の色もうらめしといふ御詠。染心肝殊勝におほえ候の由被申候時。禪門盃をもたれたるを打置て氣色あしく。是はなにか面白候哉らんと申されけれは。それまては白地にもかやうに被仰。無本意事也。是は百番歌合にも書入て候へ共。風躰不可然。勅撰なとに可入歌にあらさる由僕に申侍しに。是をしも被稱美之條不得其意云々。此歌玉葉に撰入。不思儀事也云々。

戸部云。歌は人にも見合可去禁忌也。中納言入道内裏御會行路柳に。道のへの野原の柳もえ初てあはれ思ひの煙くらへやと詠らる。後一院御覽せられて後。定家卿可停出仕之由被仰下之旨被申禁裏。經日數後出仕をゆるされて後。殊更蒼陣して。道の事如此御沙汰。有氣味之由殊自愛云々。先達猶如此。後學可存知者也。

又云。中納言入道歌は心得られぬとて。後鳥羽院被御覽なけすてさせ給ひけるか。又被御覽時。深意ありけるとて御感ありけりと云々。以之思之。先達歌とも見侍らは。能々心を付て見侍るへき事なり。

又云。中納言入道慈鎭和尚に進ける狀に。我歌の事を書に。西行法師所詠日本第一歌人といふといへとも。亡父歌に比するに十分一に不及云々。

或人語云。西行自歌を番て。（宮川百首。）定家少年此判をこひけり。被判之後。西行人のもとに遣しける狀に。侍從こそ歌判していたして候へ。是もよからんするけにこそと云々。

後鳥羽院遠所より九條內大臣（于時權大納言。）へ被遣勅書を見侍しかは。歌事能々可有稽古。法性寺關白昔最勝寺の額を書。老後に門前過る每に赤面すと云々。

妙音院入道仁平御賀の時琵琶を彈す。孝博聞て。中將殿御琵琶こそ漸々ひはに成にたれと云々。われは鬼神をもひきへしつへく思ふに。孝博申狀頗無念の由思はれけるに。尾張左遷の後。孝博か詞を思合云々。物道如此。相構て昨今の詠の見苦を覺るやうに可有稽古云々。

戶部云。新勅撰時。光明峯寺殿より鍋との歌事を執申さるゝ時。撰者御返事に。後京極殿鍾愛御子として。三十七にならせ給候。尤其仁と申へく候へ共。御風躰猶存旨之由被申子細云々。但なきぬへき夕の空を郭公またれんとてやつれなかるらん。是等は宜のよし被申云々。

又云。家隆は寂蓮か聟之。寂蓮相具して大夫入道和歌門弟になりき。禪門被申云。此仁末來の歌仙たるへし。見參の度に難儀なといふ事をはとはす。いつも歌よむへきさましき心は。いかに侍るへきそといふことをとふとて被感云々。

某任語云。土御門院小宰相（家隆女。）被申けるは。故二位の歌には。心得にくき歌なとは候はず。高砂のをのへの鹿のなかぬ日もつもりはてぬる松の白雪といふ歌を。心得にくきやうに人思へり。深く思へは心得にくし。あさ〳〵と心うれは。殊にやすくこゝろえらるゝ歌也と云々。

或人云。新勅撰えらはれける時。梅の歌に花やかなる歌なしとて。撰者周章せられけり。猶も壬生二品歌中にはあるらんとて撰はれけるに。いく里か月のひかりも匂ふらん梅咲山の峯の春風。といふ歌を見出て被入云々。

故宗匠語云。亡父卿の人とはゝ見すとやいはん玉津島かすむ入江の春の曙の歌は。建長詩歌合時。かむや紙のたてかみのうらに書て。祖父に見せ申されし時。見つとやいはんとかゝれたりしな。見すとやと。そはに被書たり。作者は猶所存とけすなから。みすとやと書て被出云々。

小倉黃門禪門云。後嵯峨民部卿入道に被仰けるは。爲氏卿は見すとやいはん玉津島袖ふる山にかゝるしら雲。有人曰哉。そこには是程秀逸はいつれかあると被仰下云々。

戶部云。白川殿七百首の時。民部卿入道は御製の御數を見合て八十首詠す。冷泉大納言（爲氏。）は。わかものはおほく仕れと。禪門ゆるされ一百首これを詠す。還御の時違者とこそ見えつれと。直に勅定有けり。

又云。彼七百首の時。眞觀まいりて。短册を泉の水のなかに風

に吹入られ。てのこひ布のかせにてとりあけなとして見くるしかりけり。如此事尤可有用意云々。

祝部行氏語云。少年時祝部忠成（新勅撰作者。）にあひて侍りき。草子なと見て歌よみ侍りしかは。たゝ歌はあを雲にむかひて案せよ。今より古歌にかゝりては。うるはしき歌よみには成ましと申き云々。

故宗匠云。民部卿入道は信實朝臣をは無雙の歌よみに思はれたりき。續後撰卷頭に入んとて。立春歌十首計書て給はらんと。云つかはされたれは。それは何の御要にか候覽とて書ても出されす。卑下の心も幽玄之き。百首をよみ。民部卿入道に點をこひたる歌中に。はつせ山の谷／＼と云歌。山法師のやうにや候らんと。詞を付てつかはしたれは。其日夜に入て中院へ尋來れり。對面して只今何事に御渡そと被尋けれは。谷々山法師のやうなると承候事か面白候て參て候云々。すきのほとやさしかりき。

辨入道の書たる續後撰の雜といふ物を先年見侍しに。成茂あつまへ下て。すてはてす塵にましはるかけそはゝ神も旅ねの床や露けきと云歌の詞に。涙のこほれけれはとかゝれたるを。よくそ其時涙のこほれける。一の幡さしの寂西か蚊虻にて。詞かきなとにかやうの事あるそとかけり。誠に他に異なる門弟也。隆信と定家と一腹の兄弟也。それより殊にあさからぬ門弟たる歟。

信實朝臣女三人あり。みなよき歌よみなり。藻壁門院少將は殊に秀逸也。をのかねにつらき別のおりとたに思ひもしらて鳥やなくらんといふ歌を感して。京極黄門老後に古今を書てあたへらる。奥書に。國母仙院少將殿（敦信イ）。依爲此道之堪能。不顧老眼之不堪書寫之云々。

少將內侍は先うせて兩人は殘れる。藻壁門院少將老後に出家して。法性寺舊跡に住けるころ。平親清女あつまよりのほりて。さる名譽人なれは見參せんとて。法性寺宿所へ尋まかりけり。持佛堂にいりて。障子こしに。かやうに草ふかきすみかにわけいらせ給ふ御心さし。此道の御すきも殊におもしろくそ。老のすかたも見えまいらせたく候へとも。をのか年の心をとりせられまいらせしとて。けさんはし候はぬそといはれける。ゐなかつとなとつねは送りて文にてやさしく優にこそ侍れ。

申承り。辨內侍は老後に尼に成て。坂本の北にあふきといふ所にこもりゐて侍けり。龜山院きこしめして。七夕御會の時。題をつかはされけれは。七夕衣に。秋來ても露をく袖のせはけれはたなはたつめに何をかさまし。とよみて侍りけるを。けにさこそとあはれからせおはしまして。つねに御とふらひなと侍りけるよし。あふきに行宣法印とて。ふるきものゝ侍りしかかたり侍りき。

戸部云。弘長仙洞百首は。

（西園寺 正二位藤原）常磐井相國實氏

（正二位藤原道殿）九條前內府基家

（正二位藤原）冷泉大納言爲氏

（信實朝臣也沙彌）寂西

（正二位藤原）衣笠內大臣家良

（大納言爲家卿號中院法名融覺）民部卿入道

（正三位行侍從藤原）行家卿

淸撰七人に被仰。世これを七玉集と號。常磐井入道相國老後の晴の歌之。所心及執してよむへし。から尾とりたる馬に唐鞍をきて。百疋引たてたる樣に詠すへしと被申けり。誠に歌ともにおほやけしく。たけたかくうるはしき躰之。當家二代歌も此百首殊規模之。百首は是を本にて詠すへし。さて衣笠前內府の歌殊勝之。多勅撰の中にあり云々。

故宗匠云。民部卿入道時。衞門督僧都なにかしとやらんいひし僧。歌の事とひに常に來き。歌は誠をさきとすへし。道理にかなふへきよし申さるゝを聞て。後日に來て。先日承りしにつきて。歌を一首詠して候。かやうに候へきかと申き。

富士の山同し姿のみゆる哉あなたおもてもこなたおもても

道理をさきとすへしとて。かやうの事にてはあるましとて。わらはれ侍りき。

又云。民部卿入道に古今の說をうけんとて參せし時。法師にて聞書なとはしなれたる程に。其爲に定爲をくして侍しかは。今日はさし合事あり。後日に可參の由被仰て。內々なにとて人をつれたるそと申されき。仍後日に一人まかりて說をうけ侍りき。

又云。民部卿入道申されしは。歌をは一橋を渡るやうによむへし。左へも右へもおちぬやうに斟酌すへき之。心のまゝによむへからす。又申されしは。塔をくむやうによむ。塔をは上よりくむ事なし。地盤よりくみあくるやうに。下句よりよむ也と云々。

今出川院近衞局（龜山院官女）被語云。故大納言子（伊平中山相國猶子）共歌よませしに。伊賴卿。覺道上人。寶伊僧正なと。わかくてさい〳〵よみき。吾身は九に成し時。池水と云題を。兄共の歌をみれは。みなうす氷とよみて侍りし程に。同しさまにてあひなしと思ひて。池のみきはのあつ氷とよみたりしを。大納言興に入て。此あつ氷の歌いつれよりもよし。いかにも始終歌よみになるへしと申されしか。續古今より此かたゝいきて五代勅撰にあひて。うた數もあまた入て侍るは。父の詞の末をとりて侍ると語られき。詩なともつくりて。余作集にも入。佛法にも立入て。一生不犯の禪尼也。法華經千部よまれたるよし聞侍りき。うるはしく宮仕なともせす。續古今時。五月に菖蒲かさねのきぬきて。今出川中宮と申候しにまいりて。權大納言となつきて。車よりもおりて。まかり出て侍しなと申されき。誠にあつ氷山口しるくめつらしく。優美よまれし人也。

戸部云。京極中納言入道へおに或申けるは。歌は餘宗大納言束帯にて陣座に着て。公事をこなひたる様によむへし。資雅三位か水干かりやうにて。小鷹すゑて打出たる様にはよむへからすと云々。民部卿入道も。亡父はかやうにこそ申しゝかと。人毎に申されけりと云々。

又云。新勅撰の時。所望の仁歌を出したる。心にあふ事かたかりけり。撰者當座に[illegible]

又云。中[illegible]門[illegible]わか[illegible]此道不堪之[illegible]とて。世にましはりにく[illegible]出家せんと思ひ立ていとま申に。日吉社にまうて給ひけり。其次に慈鎮和尚にまいりて。所存のおもむきをのへて。いとまを被申けるに。和尚[illegible]はいくつそととはせ給へり。廿五になり侍る由申されけれは。いまた[illegible]へき年にては侍らす。思ひとゝまりて。道の稽古をふかくつみてのうへの事之と被仰ける。御教訓によりて出家をも思ひとゝまりて。先五日に千首歌をよまれけり。よみ終りて父に見せ被申けれは。先立春歌十首をみて。立春なとかやうに出來たる宜由被仰て。見終られて後。壬生二位に見すへき由被仰けり。つゐに道の宗匠として。父祖のあとをますますおこされたる事。慈鎮和尚の恩德なり云々。

德大寺には歌のまと云所あり。寢殿の西の角の間也。是後德大寺左府西行に[illegible]ける所なり。一條法印云。左大將家六百番歌合時。左右人[illegible]日々に參て[illegible]て。左右申詞を被書けり。自餘人[illegible]不參しあれ共。[illegible]には毎日に參て。いさゝかも有けれ[illegible]にはこしりて[illegible]を持たりける。[illegible]はかまくひをもたてゝいさかひけり。殿中の女房例の獨鈷かまくひと名付られけりと云々。

六條中[illegible]云。[illegible]時。[illegible]木とてたかる。[illegible]はよみつれ[illegible]有心と[illegible]是を無心といふ。有心には[illegible]。無心には光[illegible]也。水無瀬の和歌所に[illegible]をへたてゝ無心[illegible]あり。庭に[illegible]。風吹て殊におもしろき日。有心の方[illegible]慈鎮和尚。心あるところなきとか中にまたいかに[illegible]の松風と云歌をよみ。無心のかたへ送らる。宗行卿。心なしと人はのたまへとみゝしあれはきゝさふらふそ軒の松風と返歌を詠しけり。耳しあれはかなさかしきそと。上皇御定ありてわらはせ給ひけり。水無瀬殿御堂長老(茶一上人。)水無瀬三品の説とて被語云。此和歌所の軒の松は。上皇御こゝろをとゝめさせ給ふ木也。はるかの御所の後。此松にをしつくへしとて歌を送らる。いにしへは花そあるしをしたひける松は人をも思はさりけり。此御歌を出されて後程なく。松はかれにけりと云々。

戸部云。遠所十首御歌合。家隆卿詠に。

またやみん又やみさらん白露の玉をきしける秋萩の花
といふ歌を。京極禪門。あはれ大夫入道のまたや見むかた野のみのゝ櫻かりにはをとりたる物哉。又やみんにて。又や見さらんは不足なき物をと云々。
また云。秀能後鳥羽院叡慮には無双の歌よみと被思召けり。中納言入道は御所に被思召たる程はなし。家隆卿申程無下の歌よみにはあらすと被申けり。
又云。新古今に。父秀家身まかりて後。寄風懐舊をよめるとて。秀能歌被入たり。兄秀康これ程の面目なるへくは。首をもはねらるへしとて。うらやましかりけり。
六條内府被語云。歌よみにはみなつねに好詞あり。後久我相國はなにやと云ことを。第一句にても第三句にてもこのみよまれけり。後鳥羽院勅定に。例の通光かやとおほせ事有けり。千五百番歌合時の御百首には。此相國被申行て。端作詣太上皇御消といふ所を平出に書へしとて。皆其儀にしたかふ。其後に此義なし。只此一度也。
戸部云。大嘗會歌は仁安六條院御時大夫入道詠之。貞應後堀川院御時被仰京極中納言。堅申子細。仁安も非當時之上。現任公卿不詠。儒者若は諸大夫なとの家より出たる輩詠來故也。可擧申其仁之由。西園寺内々被申之間。家隆知家等可爲其仁歟之由申之。是皆自諸大夫家出たる故也。
又云。知家卿父顯家非堪能。此道事殊微弱。京極中納言家立置讀之。彼家説も父よりは不受。中納言入道其家説かやうなるそとをしへたてられ。器量たりとて。歌合なとにも毎度稱美之。新勅撰に數なとも被賞翫。老後まて御門弟にて侍りしか。中納言入道逝去之後。向背の心出來て。寶治御百首歌。非當家風儀事共おほくよめり。不知思事之。文保大嘗會歌。隆教卿詠之。内々自御所戸部之允萩井をよめる歌に。露もろきと云句有。もろき字懸意。又いはむらの杜に。みちありと木のもと草のかきはまて我昔の世をいはむらの杜云々。此事日本紀に神あれ一草木皆物いふといへる。非吉事。昔か世をいはむらといへるも。かならす稱美ともさためかたし。山守にいはゝいはなんとよめる。とかむる心なりなと被申しを。やかて御不審ありて。在老に尋たつねありしに。大嘗會歌。後難いつの才覺にて難申候哉らんとつふやくと聞えて。貞應大嘗會時。中納言入道詠錄。知家卿吹擧事なとの所に。計算をさして被進き。
いはむらの杜は已日紫宸殿也。其夜有明卿鳥自所作参之時。於陣中被尋之輩。
閑開井寄御物語云。深山月。知家卿。
昔思ふ高野の山のふかきよに曉とをくすめる月かけ
叡感尤甚。なにかな頭にと被仰ける。皆ふし可然物なしとて。居続を十帖下さる。給はるとき。いそき住吉御幣に可進と

申。人感之云々。

小倉（黄門。）云。隆博卿は行宗には無題にをとりて世も思へり。誠にさこそ侍りけめ。龜山院御時。山城國名所を賦する百韻御連歌侍しに。よのつねのやさしき名所は大略過にて。いまは俗にいひつけたる。からすきかはな。四の宮かはらなとやうの名所をもとるへしとさたありし時。爲氏卿ちきりしのみやかはらさるらんと被付たりし。叡感も有。諸人奇特におもひて。隆博卿すこしの相對にも及かたきよし。人〳〵心に思ひたり。勅定に隆博つけよと御事侍りけれは。つらからすきかはなへてにたのまゝしと被付たりし。さすかなりといふ御沙汰侍りき。

基任云。中院禪門北野參籠之時に。北神までの社名を賦して連歌侍りしに。冷泉亞相中將殿といふを賦して。こひのみちうしやうとのみなけくかなと被付けるを。滿座感歎無極き。禪門柳と云句に。老松ちからよはき春かなと云句を付られたりし。様もなけれとも。そゝろにおもしろかりしと。觀意（基任父。）共座席に候て語侍き。

故宗匠云。民部卿入道被申候しは。歌合に人の許へ行には。連歌發句一二句案して。何人何木何舟橙のつれの賦物にあてゝ用意する也。會の本さまにはかに連歌すへしなと云事あるに。そゝろに發句を案して。人またれなとすへからすと被申候。

又云。民部卿入道貞觀かはや人の薩摩のせとなとよみて。人をおとすとて。つねに笑はれ侍き。

或人物語云。中院禪門と阿佛房とねられたる所へ。爲氏まかりて。ふんにてこはつくりて。あかり障子をあけていらんとせられけるを。阿佛房障子の尻をさゝへて。あかり障子をかくし題にて。一首あそはし候へ。あけ候はんと被申けれは。とりあへす。

古しへのい（にイ）ぬきかかひし雀の子立あかりしやうしとみる覽

とよまれけれは。あけてわらひて入られけり。たはふれなからしにくき心にてこそ有けん。源承法眼說とてかたりき。

故宗匠云。民部卿入道爲敎を車の尻にのせて。さか（嵯峨）より冷泉宿所へ出られけるに。爲敎卿あにのあしさまなる事共被申けり。禪門ともかくも返事もなくて。みちにこゑとる車のあるをみて。やせうしにこゑ車をそかけてける。といふ連歌をせられけるを。爲敎よりすちりあんしけれ共つゐにつけさりけり。冷泉にて車よりおりらるゝとて。つゐにえつけぬな。あにのとのならはつけてましと被申けり。

又云。後嵯峨院御幸の時。辨內侍。少將內侍。御連歌のれうに御車にめされけり。爲氏殿上人の時。御幸の御供にまいられしに。すてに御車の出る程に。櫻の枝を花かめにたてられたる

を。おりてとられけるを御覽せられて。爲氏か花をぬすむに。連歌ひとつしかけてよとおほせられけれは。辨内侍。しら波の立よりておるさくら花といひけれは。ちらしかけてそにくへかりけるとつけられたりける。とりあへぬ時分の狂句なから。こまかにつきたる。誠に達者所存也云々。

同院御時吉田泉にて御連歌ありけり。女房辨内侍。少將内侍めされて簾中に候けり。民部卿入道女房の申次にて。簾のきはに祗候せられける。耳おほろにて。瀧のひゝきにまきれあひて。きゝわかれさりけるほとに。御連歌もしまさりけるに。爲教少將山より柴をおりて。瀧のおつる所にふたきて侍けれは。水の音聞えす成にけり。そのゝち御連歌しみてけるよし。辨内侍日記に書て侍り。

六條内府被語云。龜山院御時。三代集作者賦物にて御連歌あるへしとて。宗匠に被仰て後進せられけるを。御前資平卿とわか身と祗候して書寫し侍しに。源當純を爲兼見て。あれは當純にてこそ候へと申。宗匠(爲世卿。)當純の條勿論。定家卿自筆本如然候よし被申候しな。猶常純之由申ける時。勅定に急古今本を可披見由被仰下ける時。召寄られて備叡覽。當純條無子細。定家卿貞應本傳て。嫡孫可爲將來證本之由加奧書本也。爲兼卿閉口。事躰ゆゝしかりし由被語申き。

小倉云。文永龜山殿五首歌合。近比嚴重の公宴也き。大殿執柄大臣あまた被参候き。其時山紅葉愚詠に。散ぬへき秋の嵐の山の名にかねてもおしき木々のもみちはと詠したりしを。再三御詠吟。叡感之氣。山階左府申座におりて。向御前揖して。案天德之例。天氣依有右衆盛歌被付勝字畢。此歌可申請勝字由被申。人々同申之由。眞觀申云。相手歌。をくら山いま一たひもしくれなはみゆきまつ間の色やまさらん。今一たひのみゆきまたなんの芳躅も難被弃捐の上。紅葉にちりぬへきと詠す。古き歌合に多以爲難。仍難勝之由申候。仍被定持。眞觀議勢傍若無人也云々。

又云。連歌本歌二句にわたるへからさるよし有沙汰也。それも事によるへきにや。後嵯峨院御時。御連歌あやしきと云句に。ほともなくけふの日かけもくれはとりといふ御製つきて後。難句にて連歌つかすして程ふる間。難句をして及違亂。此句可返給之由有勅定しに。民部卿入道それも可爲撫民御計之由被申けるに。爲氏卿何條さる事は候へきそと被申けるを。上手つけ候へ。融覺かなひぬとも覺候はすと被申けるを。聞いれぬ躰にて。たゝにやこえむ二村の山と被付たりけり。叡感頗なり。滿座感嘆しき。是は本歌宜讀三句者也。

平中納言(惟輔卿。)云。圓光院殿仰云。諸道をうかゝひて見るに。いつれもおろかならすといへとも。とに無盡期事は除目の事と和歌の道と也云々。わか身雖不携此道。於和歌者深信仰云

々。又云。伏見院後伏見院に申をかるゝ條々内。向後勅撰あらは。永福門院と入道前關白とに可被申合云々。此條後照念院殿たしかに御物語ありし事也云々。伏見院御製と後照念院殿御歌とは御風躰各別也。しかるにかやうに御をかれける事。究竟にいたりぬれは。御意の通する事おもしろき事也。或人云。時代不同歌合に。定家卿被合元良親王ける時。元良親王といふ歌よみのおはしける事。はしめてしりけると利口被申けり。家隆は小町につかふ。まことに定家相手不被書もことはり也。但後鳥羽院當御候。元良親王殊勝歌よみ也と御有けれは。御意にはわろき相手共おほしめされさりけるにこそ。後歌合に公任卿不入。秀逸三首なきゆへと云々。長德寬弘比より空の月日をあふくにこそ侍りけるに。さすか御歌合にかゝる程の秀歌三首もなとかなからむ。後代不審也。

故宗匠被語云。はれの歌よまんとて。法輪にまいりてよみし也。若ものとも〻法輪へまいりてよむへし。所からのすこさにもとに歌出來するなり。

戶部被語云。建保五年四月十四日。院庚申五首時。御教書に非秀逸者可令獻者云々。京極黃門ひとり非秀逸者不可獻之由事。諸所請相伴と請文を被進。希代事也。仍其時非殊深思。秀逸まことに出來せり。はなにそむくる春の燈。をのれにもにぬ夜半のみしかさ。あらは逢夜の心つよさに。これら皆此時の歌也。

其比家隆のもとより新院御歌を京極へ進とて。庚申をもてあつかひて。あまりに風情つきて。古反古なと見候中に。此一卷を見出して候。思に點なとあへとて。人のたひたる物にてそ候つらん。むかしよりかしこき御目をろかなる日と。さのみかはりたる事も候はぬ程に。あしからす見候につけて。まいらせ候よしの狀をつかはす返事に。庚申いかゝし候へき。今はたゝくひほねいたく。水ほしく案しなりて候に此歌給て候。庚申さまたけし御ようなりとおもひて候へはとて。此御歌の殊勝なる事さま〳〵かきて。此道事禁裏の御事は申に不及。此御所は詩の御沙汰はかりとのみ思ひまいらせて候へは。かゝる不思議なる御事にて候ける。いまはたゝ下す歌よみ侯はゝ。私の太良次郎なと申もの〻いひかひなく候なと。さま〳〵にかゝれたる侍り。

戶部云。高辨文學上人以五首詠て京極黃門許に持來。皆其心珍重之。佛法興行。心通無隱驗之由。記錄被書載。栂尾明惠上人は此道數寄異他之。仍新勅撰に被撰入。又日遣心集といふ集を書て。歌をあつめられたり。文學上人數寄者相續歟。心源上人語云。文學上人は西行をにくまれけり。其故は遁世の身とならは。一すちに佛道修行の外不可他事。數寄をたてゝ。こゝかしこにうそふきありく條。にくき法師なり。いつくにても見あひたらは。かしらをうちわるへきよし。つねのあらましにて有

けり。弟子共西行は天下の名人なり。もしさる事あらは。可爲珍事となけきけるに。或時高尾法華會に西行まいりて。花の陰なとながめありきける。弟子とも是かまへて上人にしらせしと思ひて。法華會もはて坊へ歸りけるに。庭に物申候はんと云人有。上人たそととはれけれは。西行と申ものにて候。法華結縁のために參て候。今は日くれ候。一夜此御庵室に候はんとて參て候といひけれは。上人うちに手くすねを引て。おもひつる事かなひたる躰にて。あかり障子をあけてまち出けり。しはしまもりてこれへ入給へとて。入て對面して。とし比承及候て見參に入度候つる。御尋悦入候よしなと。ねん比に物かたりして。非時なと饗應して。次朝また時なとすゝめて被歸けり。弟子遣手を拳つるに。無爲に歸ぬる事悦思ひて。上人はさしも西行に見あひたらは。かしらうちわらんなと御あらまし候しに。殊に心閑に御物語候つる事。日來仰にはたかひて候と申けれは。あらいふかひなの法師ともや〔古體〕。あれは文學にうたれんする物のつらやうか。文學をこそうたてんする者なれと被申けると云々。

或人云。千載集の比。西行在東國けるか。勅撰あると聞て上洛しける道にて。登蓮に逢にけり。勅撰の事尋けるに。はや披露して御うたも多入たると云けり。鴫たつ澤の秋の夕暮といふ歌入たりやとゝひけれは。見えさりしとこたへけれは。さては見て要なしとて。それより又東國へ下りけると云々。

或聖西國よりのほりけるに。住吉に參りて通夜して侍ける。夢に御社のまへに僧俗男女貴賤まいりあつまりたり。ゆゝしき人もおほし。猗人をまたるゝ躰なり。しはらくありて黑衣僧一人參たるを。御殿のうちへ召入られて後。けたかき御聲にて。

心なき身にもあはれはしられけり鴫たつ澤の秋のゆふくれ。

と云歌を講せられけると見侍るよし語けるとなん。

住吉神主國冬云。歌よみはおほく當社御眷屬となれり。和泉守道經は鬼形にて紙筆を持て。とのゐかきのいぬゐの角のたんの上に。西むきに座して。人に見えけると申傳たりと云々。

國助神主近は神羅寺のそはに社を作りて神とあかむ。今主神と號す。近來此道の堪能也。敢爲ハ道まもりける神なしもおか神垣と思ふうれしさとよめる。けにさこそ思はんと覺ゆ。公宴なゆるされ。新後撰の時。新古今の秀能か例とて十七首入られ。稽古も名譽も無双也き。しかるに家隆の詠歌六萬首ありける事をうらやみて。已達の後歌をおほくよみけり。月次に千首をよむ事をしけり。其比よりの歌優美ならす。おそろしき事ましれり。かやうの事尤斟酌すへき由。今の宗匠語被申き。東入道（行氏。）も毎月の百首とてよめる歌共は。さらに勅撰にえらひ入ぬへき物も見えすと被申き。

故宗匠云。初心なる時は常に戀のうたよむへし。それか心もい

てき。詞をもいひなるゝ也。
又云。民部卿入道被申しに。古歌の一句をきりて題に出してよむか。初心の稽古にことよき也。古歌の詞にかはりめなきやうにいひつゝけんとする程に。歌の詞も能成。詞も優になる也。
右頓阿之抄二條家之内見也。努々不可許外見。幸雲書寫。烏跡可恥云々。
門藤甲賀藤原上付

勅撰に異名とも有。後拾遺集をは小鰺集と名つく。津守國基歌。小鰺をはこひて撰者の心にかなひて。歌多く入たるよしの異名也。金葉をは髭漬集(ヒチツキ)といへり。ゑせうたといふ心にや。詞勅撰をは宇治川集と云けり。武士の多く入たる故也。續拾遺をは鵜舟集といふ。簿の多く入たる故之。新後撰をは傍家は津守集といひけり。住吉神官の多く入たる故之。今の世は勅撰そしる人はあれ共。名つくる程の力はなきにや。
戸部被語云。或人民部卿入道に對面の時。堀川院百首。人の口にある名歌は不及申。其外近日集なとに入候は。更におもしろし共覺え候はす。近來の歌にもおとりて覺候は。いかにと候哉らんと尋申ければ。殿上大盤はふりたれ共公物也。閑幡かうしの塗りすまして。絵うつくしくかきたるは人まへには出しかたし。堀川院百首は殿上大盤のごとし。近日歌は閑幡かうしのごとしと申されけり。
又云。法師入道なとの歌は。公宴にも端作たゝ詠何首和歌。官位も官にても位にても一方斗を書之。仙洞十首に實伊僧正懐紙に。秋日陪太上皇仙洞同詠十首應　製和歌。法印權僧正實伊上と書たるを見て。冷泉大納言(爲氏。)臣藤原朝臣とはなと書ぬぞと。利口被申けり。
又云。女房懐紙は端作も題も書事なし。只歌計書之。小侍從正治御百首の時。人にあつらへてかゝするに。春二十首と斗書たり。是うけたるすかたゝ之。其時の歌に。おもへたゝつそちの年の暮なれはいかはかりかは物はかなしき。男懐紙に應製臣上の間一をはかゝさる之。かゝは皆書へき之。法師はその字はかりを書たると有。入道も書たり。嘉元文保の御百首には定爲法印上の字をかゝれたり。又かゝぬ人も有。
小倉云。頓覺歌にはあまりに晴すくして。當座歌合の勝點數なとはすくなきと云々。心は晴の歌秀歌の躰を毎度心にかけて詠する程に。近日の人の心には不叶の由被申き
故宗匠續千載集をうけ給て被撰し時。さして歌よみにもあらさる人の來るにも。勅撰こそ候へ。御歌やゝ出させたまへと申しゝを。故戸部其外の門弟も。勅撰は道の重事。秀逸を可被撰事にて侍るに。分明に歌もよまぬ者に歌をこはるゝ事。人の嘲も有ぬへき事なり。不可然之由つふやき申されしをかへり聞

れて。予に對面の時被仰しは。歌は此國の風俗なり。國に生れたらんもの誰かよまさらん。稽古して世にしられたるも有。獨吟して心をやしなふ者も有。能歌の出來事。うた讀ならぬ者もよみ出して。ふるき集にも入たり。後撰八子か類なり。勅撰を承てひろくよき歌を求む時。名譽なき人もいかなる秀逸をか詠してもちたらん。なとかあひふれてあるへきと被申し。返〳〵面白覺侍りき。

能譽は故宗匠の被執し歌よみ也。故香隆寺の僧正の愛弟の兒也。侘人の心にならへ時鳥うきにそやすく音はなかれけるとよめるうた。新後撰に隱名にて入たり。後二條院新後撰歌を御手つから屛風の色紙にあそはされたるにも。此歌を入られたるとそ承りし。故宗匠これからたとておほへて人にかたられき。あふ坂やつゐにとまらぬ月かけを關の戸あけてにしに見るかな。さとの犬のこゑするかたをしるへにてとかむる人に宿やからましなといへる歌なり。これはさして庶幾せらるへき躰とも覺えぬに。いかなる事にかとおほつかなし。東山雙林寺に住し比たつね來て。年月承及なから未得參會之次。近程に筑紫へ罷下へし。又上洛の命もしらぬ程に。うゐ〳〵(本ノマヽ)しなから尋來たるなと申き。此道の事も如法卑下しかへりたり。さして稽古仕たる事もなし。詠歌も生得に其骨なきよしを存侍るを。宗匠あしからぬ由を被仰事。我なから心得侍らす。此世ひとつならぬ宿習にて侍るやらんなとまておほゆると申き。しはし雜談して侍しか。物なといたく見たるものとは覺えす。よに申やさしき數寄とおほえ侍りき。

兼氏朝臣は稽古もよみ口も相かねたるよし戸部被申き。勅撰方の事は官外記にもおとり侍るましきよし。人のもとへの狀に書て侍りけり。續拾遺の時。和歌所より人にて侍りけるか。勅撰書終らさるさきに卒去して侍りき。朝臣寄橋戀に。おはたゝの板田のはしとこほるゝはわたらぬ中のなみたなりけりと云歌を可被入と云沙汰ありけるを。慶融法眼議を被申ける。其夜の夢に冷泉亭の中門の角の椽のほとにて。彼朝臣に慶融行逢て侍るに。腰にいたき付て。歌よみは沒後をこそ執する事にて侍るに。此歌に議仰らるゝ事恨めしくといひけると見えけり。さめて後より法眼腰のいたはり出來て。終に平愈の期なし。おそろしく詮なき執心なり。子息の長舜法印も道を執したる事は更にをとらす。和歌所に小蛇か小鼠かに成て候はんと覺候。左樣のものゝ見え候はん時。かまへて手かけさせ給ふなと申けり。續後拾遺の比。法印世をさりて後。和歌所の文書の中に小くちなわの見えけるを。すはや故法印御房よと人の云けれは。實性法印殊に恐れてむつかしかりけり。

隆教卿わかくては非器なりき。住吉玉津島へ被參詣ふかく被祈けり。さる故にや近き比は道もさる程に成て人も知りたり

き。歌合の判の詞なとかゝれたるは。よにむかし覺えたるやうに見えき。先年宗匠亭の會にも被來き。其時の事。歌もてなしたるさまなと。さる人と覺え侍りき。故宗匠も九條二位か披講席にある躰。維貫信なとにはさすか不相似とて被感き。

六條内府被語云。入道民部卿嵯峨中院亭にて發句一にて千句連歌をせられけり。其時發句の本なしして後代まて殘さんとて。にしきかと秋のさかの〻見ゆる哉。今の發句いかにかやうになからんとそ覺ゆ。

信實入道九月盡の日好士あまたさそひて。深草立信上人許にまかりて連歌侍りけるに。爲門發句。けふはゝや秋のかきりに成にけり。夜もすから連歌にあかして。次の朝歸る事もよほしけるに。今日は初冬にて侍るに。いかゝさては侍へきと上人被申て。また連歌有けり。自余好士に其代もなくて。又爲門發句を被出けり。けさはゝや冬のはしめに成にけり。

冷泉亜相(爲氏。)被北立信上人の深草の寺にて。連歌をせられけるに。無生か彼所に有りけるを召出て。發句をせさせられけるに。なけや鶉深草のきり〳〵すとしたりけるを面々かんせられけり。いかに此比の花下の輩かやうにせさせらんとそ覺る。

戸部被語云。俊惠大夫入道のもとに來て。御詠の中にいつれをか勝れたりとおほしめす。よそにはやう〳〵に申せと。それは用侍らす。まさしく旅侍らんと申けれは。夕されは野への秋風身にしみて鶉鳴なる深草の里。是をなん身にとりておもて歌と思給と申されしを。俊惠又いはく。世にあまねく申侍るは。俤に花のすかたをさきたてゝ幾重こえきぬ峯のしら雲。是をすくれたりと申侍るはいかにと聞けれは。よそにはさもやあらん。みつからはさきの歌にいひくらふへくも侍らすと被申けるを。俊惠後にいはく。かの歌には身にしみてといふ第三句いみしく無念に覺るなり。是程に成ぬる歌は景氣をいひなして。たゝそらに身にしみけんかしとおもはせたるこそ。心にくゝも優にも侍れ。いみしくいひもて行て。歌の詮とすへきふしをさは〳〵と云あらはしたれは。無下に事淺く成ぬるなりと云々(長明無名抄ニ委有之。)これは及はさる事なり。身にしみてを歌の詮と心得て此體をいたす。みにしみても景氣のくそくえ。夕暮うつら秋風のたくひなり。この外に歌のさひしき心詮としたる躰あるをしらさる也。(此歌甚深之。珍重々々。)

又云。當時非成業歌よみには富小路。(實教。)中御門。(經繼。)南大納言之。富小路は父卿門弟のたけすかたはなかりしか共。殊とに案ししほりて。あたならすよむ人之。中御門は勘解由次官なと申ける比より。此冷泉亜相門弟にて常にとふらひ來りき。詠歌宜よし記録にも書置て侍り。風躰今もまさしくたゝしくみゆ。歌會なとには富小路歌たひことに興有て皆さむる

やらん。但勅撰の時撰入せんとするに。さりぬへき歌なし。中御門は當座なとははるかにはえなきやうなれと。撰歌の時は用ゆへき歌おほしと云々。今宗匠もおなしきさまに申さるゝ也。

後宇多院龜山殿千首時に。霞後に經繼卿。津のくにの難波わたりの朝朗あはれ霞のたち所かなと詠せられたる由。戸部（予時侍從中納言。）語仰られし程に。かやうなるあはれを近比人不詠之。まとに達者のしことゝみえて候と申侍しを。經繼卿參會の時。頓阿かやうに申と語られけるにや。吉田僧正參會の時。あはれ霞のたち所哉を被稱美由。侍從中納言被語とて。中御門如法自愛のよし被語き。知房卿（三河守）は伊家辨に御歌優なりといはれて。道にたつさはるはかやうの事かあちきなきとて。道を捨たる事も侍そかし。員外後學一言を自愛せられける。まとの數寄人と覺えておもしろく侍りき。

正中之比。中西彈正親王押小路故殿吉田なる所にて和歌の御會有しに。富小路中御門參會せられき。御歌なと過て勸盃之間雜談之時。中御門被申は。歌のよきを知たる者候はす。宗匠なとは不及申。其外は小倉中納言入道なとそしられて候らんと云々。其後富小路白地に座を立れたるあとに。此大納言歌よみとて候へとも。よき歌は全分に知候まし。上さま富殿もよもしろしめされ候はし。榮性（中御門法名。）こそ歌は知て候へ共。其分は頓阿を證人にたて候へきよし被申き。

戸部云。京極禪門つねに被申けるは。亡父こそうるはしき歌よみにてはあれ。某は歌つくりなり。相構て亡父のやうによまんと思ひしか。かなはてやみにき。但俊恵と寂蓮と風情ははなはた替りたれ共。ともに能讀の名譽ありしかとも。片はらいたき事なれとも。亡父か歌のすかたにはかはりなから。愚詠をもなのつから目たつる人も侍る由被申云々。

此事卜部仲資入道も如此抄し置と云々。

又云。民部卿入道被申けるは。むかしこそ歌よみはありしか。今はみな歌つくりなり。つくるにとりて。いかにつゝけるぞといふにこそ面々所存不同もあれと云々。

又云。京極中納言入道被進慈鎭和尚消息云。御詠又は亡父なとこそうるはしき歌よみの歌にては候へ。定家なとは知恵の力をもてつくる歌作之。天下に歌をつくるものは皆以門弟也と云々。

故民部卿後宇多院に參らせられて。歌の風體の事なと御所よりも被仰出。戸部も申されけるに。歌は別の子細候はす。うつまさの法師か妻の世に有わひて年の暮に。身のうさをおもひしとけは冬のよもとゝこほらぬは淚なりけりと。はいの手習にして候。是か歌の本にて候よし申されけるを。後まて　叡感有けるよし。近習の人兩人語侍し也。さしたる歌よみにあらね

共。感の至極しぬれは。詞のえんも自然により來て。誠にめてたき歌と成也。

故宗匠被語云。續古今に撰者くはへられて後は。入道戸部物うくおもはれて。撰歌の事冷泉亞相[爲氏卿](于時侍從中納言。)讓與。其狀云。勅撰の事一向可被沙汰。不可誇堪能事候也云々。其時向後勅撰可被入者。兼長朝臣子孫。光行餘流。祝部者共云々。殊に被讓與門弟也。

又云。民部卿入道出行の時。辨入道家前を被通に。狩文車立たり。以下部誰人の御車候哉と被尋候處に。日向守殿御車と云々。(兼氏朝臣之。)以外腹立被歸。後直入和歌所。兼氏朝臣歌三首被書入たるを悉被切出云々。

長舜と順敎とは遁世して。勸修寺の奥松陰の別所に行て栖けり。長舜は出て聖道に成て。靑蓮院邊經曲。順敎舜惠は關東に下て。我本道の陰陽師をたてゝ奉公。各立身云々。長舜初は遁世體にて關東下向。號觀惠。大御堂邊時々出現。所々歌會交衆。あまりに歌平懷之間。平懷なる歌をは。關東にては觀公といひけり。

戸部云。京極大納言入道。俊言宰相雲客之時吹擧して。令勤仕講師。而左大臣とよむ。ひたむのおほいまうちきみとよむ事をしらす。亞相も不敎不存知歟。比興と云々。

私云。近日内々會某講師可勤なといへは。彼は有聲人也。講頌に可宜別の人をなと云。或は講誦にすゝまむとても。聲を損なといひて。禮讃懺法なとの誦聲なとせんするほとにいひあひたる。かへす〳〵片腹いたき事也。日比は更に不聞及。無下に此間の事之。

内々如讀歌講師勤る者。歌をよみはてても敢す座を起て。面々したる心地に思へり。此事京極中納言入道被書物にも。讀畢て急に可起故實之。　御製を別講師可讀故之云々。　御製もなき下樣内會に。事有かほに忩起。知一不知二と云はかゝる事にや。歌をよみ畢上は。やかてに可立之條は子細なけれとも。物しりかほにあはてたつ。每度おかしく見ゆる事之。讀聲なとのことと〳〵敷も不宜也。

晴の歌は人にも見せあはせ。又我晴に出したる歌にも可校也。一條法印嘉元御百首に。道のへに賤か門松荷ひもていそくと見ゆる年の暮哉といふ歌。文保御百首に又此歌あり。さしもかやうの事執せられたりし人の老後失錯也。又門弟なとにあまた見せられぬ故也。

めつらしき本歌名所。常にもなき五文字なと。同事を不可詠。拾遺愚草に此句出來なとつけられたる。後昆をいましめむため之。近きはとに人の詠したる本歌なとも。耳に立は不可詠。此事近日一人詠すれは。やかて人とによみあひて侍り。うたてき事之。

歌會時讀歌なとの案を別物に書て人に見せ。又詠草を後の爲とおほしくて。書うつして懷中なとする事。ふるき堪能の人々さらにせられさりしとこ、近日はやりたる事之。剩短册分取て後。料紙一枚つゝ人別にひく所もあり。返〻見苦しき事之。我歌をいみしきものかほに書付て持たる。おかしく見ゆ。當座歌をさのみ人に見せ合。人になをさせなとする事不可然。

近日はかしらさしつとへて評定する躰也。見苦事也。

(定爲事)一條法印云。勅撰は可然高位の人を賞し。譜代の誰をさきたてらるゝ間。歌よみ口數寄稽古なとは次に成て。道の賢愚あらはれかたし。打聞をえらひて。歌の善惡によりて可用捨之由。年來思企侍しかとも。打聞も人の根は同事成へきほとに。終不思立云々。

冷泉相公云。公任卿。朝またきあらしの山のさむけれはちるもみちはをきぬ人そなきといふ歌を。花山院拾遺集に。もみちのにしきゝぬ人そなきとなをして被入たるを。公任卿の所存にたかひて。此歌を拾遺抄にちるもみちはをきぬ人そなきと被入たり。時の人集をさしをきて抄をもてなしけり。仍て通俊卿後拾遺も集にはつかすして。抄につきて後拾遺抄と題せり。其後年久しく抄を賞翫する事にて侍りけるを。京極黄門集をもまとに殊勝之とて。抄をさしをきて集をもてあそふ。此よしを後鳥羽院へも被申けれは。　御所も御同心ありけり。其後集をもてなす事になりて侍るよし。京極黄門委細被書置云々。公任卿拾遺抄をえらふ事も。我歌一首の故に被思立と云々。

後西園寺太政大臣殿故民部卿(爲藤。)對面の時。初心は歌には點の多きとすくなきと。いつれか始終器用にて有へきと御尋ありけれは。すくなき猶器量の者にて候ぬへきと被申けるを。後までも被感仰ける由。或人被語申き。

冷泉殿云。風雅集被撰ころ。常に萩原殿參候之時。　法皇御物語に。爲兼卿我には。鳥の音ものとけき山の朝あけに霞の色も春めきにけり。所存歌にも本にもすへきやうに申き云々。

又云。爲家卿を宇津宮入道所望して聟にとりき。京極不被庶幾(此三字ホノマ、)躰。あつとのゐ物の下より目見出して。道の稽古せらるへきにあらすと申されけりと云々。

又云。順徳院被遣京極　勅書に。あさのさ衣うつくしく。不庶幾之由被申。相叶愚意之由被仰下云々。又近江姫君のはこさきの松のやうなる歌おほし。　叡慮に不叶之由同被仰云々。

右此書者頓阿法師對爲世卿所被聞書也。號井蛙抄。六軸合爲一册。於二條家尤爲秘藏者也。

明應三年正月十一日

此一部當家雖爲秘說。依懇望令授兼藏法橋畢。努々不可有他見者也。

明應七年三月三日　　法印堯惠判在

此六卷(文明十八年五月十七日)當集以御内書御懇望之條借之。借於燈下書寫之畢。然同八月於木曾路下。重而在御内御自筆之書。同借勢守貞宗秘有之者也。

延德元年四月二日　　法印判

明應九年令同時或仁借留之。在木曾。棲賓之由承及之。此本借以不可他借有之。書籍云以秘抄者也。

行年七十三　沙彌判

聊有無或意日。於于今忘當來之資糧。如斯書物無其詮。雖然別無傳法。別無相承。可謂同一味而已。此六帖二部有之。

一帖有他筆之間書改之。

右此本御依大納言殿(常恭。)御本筆以遂校合畢。急之本之間，悪筆不顧。先中書寫留。重而可清書所也。

享保三年三月十二日，勢州香取中鄉於日光坊書寫畢。

右筆　　任賢

[右井蛙抄以圖書寮本及井蛙抄尾清校合]

和歌部九十八

清巖茶話

清輔供奉申されたりけるに。歌の御會ありしに。人々の歌はみな出來たれとも。清輔一人ひさしく案してをそく出されたり。清輔なれは人もゆるし。中〳〵遲かりしもくるしからさりき。其歌は。

年經たる宇治の橋守こととゝはん幾世になりぬみつの木上

此歌はうちの橋守より末はみな出來て。五文字かいかに案せられけれともなかりし程に。久しく案せられける也。あまり久しかりし間。ちからなくて。年へたるの五文字を注にちいさく書て出されける也。これはけに不足なる五文字也。

一無心所著の歌は一句〳〵別の事を云たる歌なり。萬葉集に。

我戀は障子のひきて峯の松火うちふくろにうくひすの聲（落葉わかせこかたふさきにするつふれ石のよしふのけにいをそさかれる又わきま子
我せこかたうさきのなのつふれ石とひの牛の鞍の上のかさ
かひたひに生ふるすくろくのことひの牛のくらの上のかさ）

法師らか髭のそりくひ馬繋くいたくなひきそ僧なからかも

一宗尊親王は四季の歌にも。やゝもすれは述懐の歌をよみ給ひしを。難に申ける也。

一物哀躰を歌人必定する也。此躰は好てよまは。さこそあらんすれとも。生得の口つきにてある也。物あはれの躰をこのまんとて。あはれなるかなといひて。あはれからせうとよむは。さらに物哀躰にあらす。たゝ何となく躰か物あはれなるか物哀躰にてある也。俊成の歌こそ物あはれの躰にして侍れ。

しめをきて今やと思ふあき山の蓬かもとに松虫のなく

をさゝ原風まつ露（さえやらてイ）のかりの世にこの一ふしを思ひをく（こそをけイ）哉

といへるは何となく物あはれなり。

一堀川院の作者は。たとひ近年の動揺にいりたりとも。本歌にて有へし。堀川院の作者の歌の動揺にいらむも。本歌とはた

る也。本歌にてはあるましきなり。
一ましみつはたゝし水也。まことのしみつといふこゝろなり。
一法樂の百首をよみ侍し時。何の法樂にてあるやらん。神によりて題をかくへしと云々。其謂は百首にも先例不吉の百首なと有て。わろく出しぬれは。人の難する事也。先例不吉は百首の終らすして。主上崩御なりなとせし事也。
一拾訓抄は爲長卿の作かと覺る也。歌仙有職能書にて有し也。官の廳にて侍しかは。文をもて先とせしなり。おもしろき事共を書たる物也。我も持侍しを。新熊野にて燒侍しなり。
一枕草子は何のさほうもなくかきたる物也。三卷ある也。
一つれ〳〵草は枕草子をつきて書たる物なり。とはゝとへかしと云たるは。にくいけしたる詞也。人のかたへ文書していはゝにくし。たゝ獨居てとはゝとへかしといひたらんは。あはれなりと書たりと云々。
一三躰の歌にも。慈鎭和尚のねぬにめさますの歌そ。まことに玄妙なる物にて侍る。先ねぬにめさむるといふは。假令宵の間なとねもせてゐたるに。郭公の鳴を聞て。はやといふておとろくへけれは。これはけにも寢いられねとも。驚きたるかめさむるにてある也。これを心得ぬ人は。ねいらては何とめさむへきそといはむは道理なれとも。其たくひはいふにおよはす。これは玄妙なれとも。上手は猶もおもひよる事あるへきか。此詞をえても。上句には夕暮の雲のはたてを詠ても。よひの間に月を見むともよむへし。しかるをまこともかるみつのみまきの夕闇暮とあるそ。さらに凡慮もおよはす。理の外なる玄妙。さらに何ともせられぬ所にて侍る。かやうにかけはなれたる所をとりあはする事。自在の位にのりゐてのしはさなり。春の歌に。

よし野川花の音してなかるめり霞のうちの風もとゝろに

花のをとしてといへるかおほきなるなり。また秋の歌に。

あきふかき淡路の島の在明にかたふく月をゝくるうら風

一匠作の家にて夏樹鳥に。

郭公又一こゑになりにけりをのかさつきの杉の木かくれ

時鳥亦ひと聲に成にけりと云たるか。すこし大なる也。千聲百聲といひたりとも。ちいさき事も侍へきなり。或時の會に新戀に。

おもひねの夢の關にましはらは歩をはこふ神やなからむ

あゆみをはこふといひたるか。あゆみきて行る緣か有てよき也。次日匠作の會に又新戀をとり侍しかは。人々題をかへさはやと申侍しかとも。よは〳〵しくやと思ひて。

そのかみの陰神陽神の道あらは戀に御衣を神やうけまし

と六月のみそきなといひて。みそきかあまたあれは。戀にみそきとよみたる也。

一従門歸戀をははや度〳〵よみ侍り。等思兩人戀をはいまたよみ侍りし事もなき也。惣して此題の出たりと云事もいまた聞侍らぬ也。従門歸戀は後撰に。なるとよりさし出されし船よりも我そよるへもなき心地するとあるなり。

一途中契戀に。

　やとりかる一村雨をちきりにてゆくえもしほる袖の別路

とよみ侍しを。飛鳥井殿も褒美有し也。

一もすの草くきをは。忘住所戀にも途中契戀にも通してよむなり。

一憑媒戀難題也。

一慶運か子に慶孝と云て。東山黒谷に侍し。花盛に冷泉爲尹いまた宰相にて有し比。父爲邦了俊なと同道して。東山の花み侍しに。題を懷に入て。道すから案して。鷲尾の花のもとにて講すへしと有しに。さらは慶孝をさそふへしとて。庵室へ尋行しかは。折節内に侍しをいさなひつゝ。尋花といふ題を一首出し侍しかは。慶孝。

　さそはれて木のもとことに尋來ぬ思ひのほかに花や恨みむ

とよみ侍し。

一中比祖月とて禪僧の歌よみ侍し。是か歌只一首新後撰に入たり。一首なれともうらやましきうたなり。

　思ひ出のなき身にいはゝ春毎になれし八十の花や恨みん

はなやうらみむといへる次に思出し侍也。

一懷紙の作者をは官姓名を書也。實名に上の一字をちいさく書は卑下の心也。題をはまつ和してよむか本なり。旅宿時雨なも。たひのやとのかへる時雨とよむへけれとも。餘に長けれは。旅宿時雨とよむたり。是もきかんをはかへるかりとよむへきなり。昔は山家をは山の家。田家をは田の家とよみし也。

一六百番に定家卿歳暮に。

　たらちねや又唐土にまつら船ことしもくれぬ心つくしに

歳暮に唐松浦舟なとをよめる。いかなる事にや。さりなから何となく親なとのもろこしにて。本朝のむかへを待居たるに。年もくれたんあり樣は。さすかに心ほそくにきこふれとも。實には何事にかと心得かたく侍る也。もと松浦の物語といふ草子を見侍しに。松浦の中納言と云人。遣唐使にて唐へわたる事を書たり。これを下しきにしてよみ侍し。同歌合に。

　夜もすから月に愁てねをそなく命にむかふ物思ふとて

命にむかふといふ詞も。まつらの物語にある詞なり。かやうに定家卿の歌は本説〔[illegible]〕をふまへてよみ侍る也。

一何やらんに源氏をはとらす。心をとると書たりと覺侍る也。歌をもおほくとり侍る也。おもふかたより風や吹らむと有

を、

袖にふけさそな慣れの夢もみしおもふ方よりかよふ浦風

とよみ侍る。袖にふけとはねかひたる也。[illegible]は。おもふかたよりの風は袖にふけと也。

一俊成の家は五條室町にて有也。定家卿は[illegible]俊成のもとへ行て見侍しかは。[illegible]いつしか俊成も心ほそきありさまにみえ侍し程に。定家の一條京極の家より父のもとへ。

玉ゆらの露もなみたもとゝまらすなき人こふる宿の秋風

とよみてつかはされし。あはれさもかなしさもいふはかりなく。もみにもふたる歌さま。玉ゆらはしはしと云詞也。末に秋風と置たるにてあはれに身にしむに。なき人こふるとあるも。かなしう聞えたるなり。俊成の返歌。

秋になる風の涼しくかはるにも涙の露そしのにこほるゝ

とすけなけによめるか。何ともえこらへぬ也。定家は母の事なれは。哀にもかなしうも。身をもみてよみたるは理也。俊成は我女房の事也。我身はや老耄なれは。あちきなしかなしなといひては似あはねは。たゝかく秋になる風のすゝしくと。何となけにいへるか。なにもおほえす殊勝也。

一定家卿はとに戀の歌かしみ入て。何ともかともおほえぬかおほき也。惣して定家には有家。雅経。通具。通光も及事にあらす。家隆そ戀の歌はしやうによみよせられ侍る。

一定家の申されけるは[illegible]心[illegible]て。[illegible]人[illegible]をいへる[illegible]ひとりゐたるに。ほろ／＼と雨の打ふりたるは。まことにかほそき事也。なき人こふる宿の秋風の歌は。此時の心にかなひたる也。

一[illegible]に入たり。

[illegible]にとこし[illegible]ときりに

弘法大師。

法性の室戸ときけと我すめは[illegible]の浪[illegible]たゝぬ日そなき

の御歌に新勅撰に入たり。かやうにもろ／＼の神明佛陀もみなこと／＼くうたをあそはしたれは。歌はやらあるものにや。

一おもひきや我戀はと云五文字を。本ノ因[illegible]よりこのかたよみたる事はなき也。思へはいかにとしにくいけしたる詞也。我戀はといはすとも。誰か[illegible]すへきとおほしき也。おもひきやのかはりには。おもはすよ。しらさりきなとよむ也。

一人丸の御忌日は秘する事也。さる程にをしなへて知人はまれ也。三月十八日にて有也。影供は此日はなかりしなり。六

條顯季の影供夏六月也。

一上手になるものはまはしめからみゆるなり。家隆卿おさなくて。

霜月に霜のふるこそ道理なれなと十月に十のふらぬそとよみ侍るに。鳥羽院は重寶になるへき物なりとて御感有し也。

一上手の歌をは見をきぬれは。かならす心かまつ上手になる程に。心のやうには詞か自在によまれぬ程に。心の上手に成たるか一わろき也。詞は物をみるにもよらぬ物なり。又詞はきいたれとも。心かきかねはよまれぬなり。さる程に物を見るに心得あるへきなり。

一花の八重山は名所にはあらす。あしからにおほく八重山とよみたる也。たゝかさなりたる山也。

一建保名所百首題にて。初心の人歌をよむへからす。其所にむかしより詠しつけたる物あれは。今よむ歌も大略もとの物なり。たゝちと其物か有也。初心の時名所の歌か好にてよまるゝ也。それはやすきゆへ也。我も歌のよまれぬときは名所をよむ也。名所をよめは。二句も三句も聞ふきかる物なれは。さのみわか力かいらぬ也。高嶋やかちのゝはら。さゝなみやしかの濱松なといへば。二句ははやふさかる也。我ははや四十餘年歌をよみ侍しかとも。また此百首をはよみ侍らす。むかしの人はみな堀川院の百首を初心の稽古にはよみ侍し也。されなから堀川院の百首はちとよみにくき題也。初心にては二字題なとのなひ〳〵としたるにて。よみつけたるかよき也。月花なとのうちむかひたるなとにてよむかよきなり。弘長。弘安。嘉治。建久。貞永なとの比またひの題にてよむへき也。初心の時は。雪月題。雪花題なとの體物の題はよみにくきやうに覺る也。見題。顯題なとは。何にもよせぬ題はよみやすくおほゆる也。後心には寄花の題はやすくて。たゝ[illegible]題。同題なと大事也。

建久。後鳥羽。貞永。後堀川。弘長。龜山。弘安。後宇多。建治。同上。

一暮春閑情。

此[illegible]いりあひの[illegible]に[illegible]。音せぬかたに。此樣にやす〳〵と讀習へきなり。さりなから[illegible]それは[illegible]にいたりて[illegible]初心の[illegible]所に[illegible]。[illegible]中の月はとらんにわすけれとも。[illegible]とられ[illegible]也。

一かびや。かびや。兩義也。かびやは俊成。顯昭はかびやと申ける也。六百番[illegible]に見え侍る[illegible]。

一千五百番の時[illegible]の歌は[illegible]也。

一夢河懸。(堀川)

あたにしも人こそわたれやす川のうきせ心にかへる浪散

うきせ心にかへる波歳の発句か好也。うき事はちや〳〵と
かへる物なり。

短夜月。(同。)

水浅き蘆間にすたつ鴫の足のみしかくうかふ夜半の月影

鴫の足は歌には入ほかなるやうなれとも。短の字にめをかけてかく讀侍り。

寄山戀。(同。)

あふ坂の嵐をいたみこえかねて関の外山にきゆる浮雲

或者此御詠吟の歌の様にもきこえ侍らす。風の歌とてかく讀ならはし侍也。

一停午月。空の眞中にある月也。いくかの月にてもあれ。空のまなかにある月はみな停午月也。

一祈戀をはいつれの神をもよむへき也。

年もへぬいのる契ははつせやま尾上のかねのよその夕暮

と定家もよみ侍れは。佛にも祈るへき也。攝政殿の

幾夜われ浪にしほれて貴船川

きふねへは夜まいる程に。いく夜我と詠也。

一ひむろの在所あまたあれとも。富士の氷室いまた見及さる事也。順徳院御製も富士の氷室とはなきなり。

限あれはふしの深雪のきゆる日もさゆる氷室の山の下柴

とあるは。萬葉に富士の雪はけにきえてくちにふるなとあれは。是はかきりあれは。富士の雪もきゆるとあそはしたる也。扨又さゆる氷室の山の下柴とあるは。氷室の在所にて富士の事をいひたる也。心はふしの雪のきゆる日も。氷室は猶さむしと云たる御製なれは。まつたく富士に氷室ありといひたる御歌にてはなき也。

一高嶋やあと川柳。

一おりふしよもす鳴秋もふゆかれしとをきはしはらもみちたになし

は沓冠の折句の歌也。ちやとよまれし也。いかによまんとすれとも。よまれぬ時も有也。らりるれろのあるは。殊によまれぬ物也。天暦御時女御更衣あまたの御方へ。

あふ事もはては往来のせきもゐすたつねてとひこきなはかへさし

とあそはしてまいられしかは。みなえ心得給はて。ある女御は詩てとひことあれは。まいれといふ御製と心得て。其夜内へまいり給ひしもあり。又心得ぬ方の御返事申されし女御もおはしましき。其中にひとりひろはし(たイ)の更衣と申ける御かたより。たき物をまいらせられけるを。叡慮にかなひておほしめされける。あはせたきものすこしといふ沓冠の御製にて有し也。

一埋火の題にては埋火をもたく火をもよむなり。埋火の題に

て爐火をはよまぬ也。

一寄虎戀にては時の寅をはよまぬ事也。時の寅も虎の事なれ共。日よみのとらは字かはりたり。此題生たる虎の事なれは。虎ふす野へとも。石にたつ矢なと讀たるかよきなり。日よみのとらは寅のこゑなり。虎のいけはきと云事新撰六帖にあり。爲家卿大納言にて有しを。子の爲氏大納言に任せんとするに。當官あらはこそ任せめ。仍父の卿をは前官になして。爲氏當官に任せしかは。爲家是を述懷して虎のいけはきとよめり。

一巖苔。

みたれつゝ巖ほにさかる松かえの苔のいとなき山風そ吹

苔のいとなき。さかりこけと云。卷て糸のさかるもの也。さて苔の糸とよみたる也。いとなくは。あしのいとなくなと云て。いとまなき也。

一懷紙をかくに。下をはあけぬ事也。上をはいかにもあけたるかよき也。

一舟子。

一首夏藤。(招月。)

夏きても匂ふ藤浪あらたへの衣かへせぬ山かとそみる

萬葉集にあらたへの藤浪とよみたり。藤の花のふさのもとはあらくとして。しかも妙なるものなれは。あらたへの藤えといへる也。あらたへの衣とよみたる事は更になき事也。たゝ我はしめてよみたり。白妙の衣といふも。白く妙なる衣と云事なれは。あらたへの衣といはん事。何かくるしかるへきと存し侍る也。

一待郭公。

年もへぬ待にこゝろはみしかくて玉の緒なかき郭公かな

玉のをなかきはわか事也。七十まて生たれは。玉の緒長きにて有也。毎年子規は待物なれは。年もへぬとは云也。かやうによみては。何の用そと存すれとも。同類をよましとしのく程に。數山にかゝりてよみぬるにて候也。

一寄夢戀。

涙さへ人の袂に入とみし玉とゝまらぬゆめそうきたる

若紫やらんに。紫の上のいまたいときなく侍るを。源氏むかへりとり給ひし時。

わかの浦の心もしらぬ□玉もなひかん程そうきたる

とよみたるは。いまたいときなき程の人をむかへとりて。そひはつへきやらん。又いとはれやすへきもしらす。むかへをきたるはけにうきたる事也。こゝを玉もなひかん程そうきたるとよめる也。夢そうきたるといへるも。人の袖の中へわかたましゐの入共。そのまゝとまりて有へきにあられは。やかてかへる也。さて玉とゝまらぬとはいひたる也。たましゐ

か人の袂に入とみしか。夢かさむれはかへる也。夢を詠に。みる覚るなといへるは。安道とてわろき也。入とみしといひたるに。ふたりと云事は聞えたれは。さむるといはねとこそ。玉とゝまらぬといへは。さめたる所はきこゆる也。入とみれともとゝまられは。夢からうきたる也。

一卯月郭公といふ題にて。
郭公をのか五月をまつかひの涙のたきも摩そすゐなき
伊勢物語に。わか世をはけふかあすかとまつかひのなみたのたきといつれたかけん。行平の鼓の瀧をみてよみたる歌也。それを時鳥の泪の瀧と。ちやとなしたるはめつらしく侍る也。かやうにちと引かへてならてはよまれぬ也。まつかひはまつのあひた也。間の字也。

一あまきるはくもり也。目きりて。なみたきりてなといふも同事也。

一歌には秀句か大事にて侍る也。定家の未来記云、秀句の事を書たるなり。雅經の燒塩のからかの浦なと云たるか秀句也。

一残月越レ關と云題をは人わろく心得也。残月越レ關とよみて。月か關をこゆると心うるはわろし。月に人の關を越えて有也。さる程に残月にとよむ也。

一歌には根かおほき也。後をくゝりさきを思ひて。我本意なる事なし。たゝうとしともてたす歌をよみたるは。いつまても其分にてあるへく。又間違なる本意の歌をよめは。人か心得すして。秀句に事をきへくはふる様ある也。こゝの程か歌の根にてある也。但をしなへてよしといふは。よくこそあるらめと也。

一□よしの川こほりて涙の花たにもなしの歌をよき歌とあまねく申侍れとも。其程の歌は朝夕よみゐたる也。

一ねさめなとに定家卿の歌を思ひ出し侍れは。物狂になる心地し侍る也。もふたる躰をよみ侍る事。定家の歌ほとなる事はなき也。作者の歌はことはの外に影そひて。なにとなく詠するに哀におほゆる也。六百番に寄獣戀。
うらやます臥猪の床はやすくとも嘆くも形見ねぬも契を
こゝろは晝は終日に戀かなしひて歎くも人の形見。夜はすからにねもせて心をつくすも世々の契なれは。我はふするのやすくぬるもうらやますと云也。まことにあはれたる心也。

一たゝ千鳥袖の湊にとめこかしもろこし舟の夜半のね覺に
といへるは。
思ほえす袖に湊のさはく哉もろこし船のよりしはかりに
といふ伊勢物語の歌にてよめるなり。

一隠在所戀は人か在所をかくす也。在所をかくさるゝ也。展戀も忘戀も。いとはるゝ。わすらるゝ也。此體の題をはみな被と云字をそへて心得へきなり。

一廿首卅首すくなくよむには。ちと案せらるゝやうに。むすひ題をいたし。五十首百首おほくよむ時は。一字二字題を出したるかよきなり。

一憑人妻戀は人の妻を(マヽ)ろさう事也。空蟬浮舟なとかよかるへき也。或所の會に此題にて。

身を宇治とたのみこはたの山越て白浪の名を契にそかるとよみ侍り。

一鶯の聲の匂ひをとめくれは梅さく山に春風そふく

さのみ遠からぬ集の歌也。匂といふは何にもあるへき也。匂はゆうにてある也。

一晩夏は暮春暮秋に同し。末の夏を云也。暮夏といふは聞にくき程に晩夏と云也。

一早苗(招月。)

旅行はさおりの田歌園により處につけて聲そかはれるさおりは五月にあるも也。旅行はゝ何とやらんしたる詞なれとも。古歌にもいる詞なれはくるしからぬ也。

一本歌にとる事。草子には源氏の事申におよはす。こと物語もとる也。住よし。正三位。たけとり。伊勢物語をはみた歌をも詞をもとる也。堀川院の作者の件も。その時の人の歌をはみな本歌にとるへき也。西行は鳥羽院の北面にてありしかは。堀川院の御時代は深山にあるへきなり。仍西行か歌をは本歌にとるへきなり。初心の程は無盡に稽古すへき也。一夜百首。一日千首なとのはやきをも讀たり。又五首三首を五日六日に案する事もあるへき也。かやうにかけ足をいたいたる歌をもよみ。手綱をひかふる歌をも讀つれは。延促自在になりて。上手にも成へきなり。初から一首也ともよき歌をよまんとすれは。はては一首二首もよまれす。終に讀あかる事なき也。

一閑中雲。花盛。まさかき。みね。落花。

さけはちる夜のまの花の夢の内にやかて紛れぬ峯の白雲

幽玄體の歌也。幽玄といふ物は心に有て詞にいはれぬものなり。月に薄雲の靄たる。山の紅葉に秋の霧のかゝれる風情を幽玄のすかたとする也。是はいつくか幽玄なると云とも。いつくといひかたき事也。それを心得ぬ人は。月はきらきらと晴て。普き空にあるこそおもしろけれといはんは道理也。幽玄と云は更にいつくか面白きとも妙なるともいはれぬ所也。夢の内にやかてまきれぬは。源氏に源氏藤つほにあひて。

見ても又逢夜稀なる夢の内にやかて紛るゝ我身ともかな

とふやしもつ関ゑのすかたにてあり。見てゝ又逢夜まれなるとは。もともあはす後にも逢ましけれは。逢夜まれとはいふなり。此夢かさめすして。夢にてはてたらは。やかてまきれたるにて有へき也。夢のうちとは逢をさしたる也。此あふと見えつるは。夢の内に我身もまきれて。夢にてはてよかしと也。藤つほの事なり。

　世かたりに人や傳へん類なく憂身をさめぬ夢になしても

とあり。藤壺は源氏の為にはまゝ母也。さるにかゝる事ありしとは。たとひうき身は夢にてはてたりとも。うき名はとゝまりて。後の世かたりといひつたふへしとなり。夢のうちにやかてまきるゝ心を。よく打返してよみし也。さけはちる夜のまの花の夢のうちにとは。咲かとみれは夜のまにはやちる物也。あけてみれは。雲はまきれもせすしてあれは。やかてまきれぬ峯の白雲とはいふ也。夢のうちとは開散あひたをさすなり。

一田蛙。

　行水に蛙のうたのかすかくやおなし山田に鳥もゐるらむ

鳥とは鴫也。鴫は秋の物なれは。たゝ鳥といひたれは。何鳥やらんにてよきなり。苗代には萬の鳥かおりゐる也。

一夕日影のこれる山陰にひくらしの啼たる程。おもしろき物はなき也。蟪蛄のなく夕景のやまと撫子といひたるやうに。賞する事か大事の物也。日くらしのなく夕かけとあれは。雲とも日影ともいふへきに。大和なてしこと賞したるは。ちとつかぬやうなれとも。おもしろく賞したる也。定家の。

　らんせいの花の錦のおもかけにいほりかなしき秋の急雨

の儀はおもへは面白也。らんせいの花の錦に秋の村雨。よく賞したる也。これは蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草庵中の詩のこゝろ也。らんせいの錦帳は内裏なとの事也。

一鶴のやたあひとは八百合と書たる也。四方より汐のみちあふさかひをやをあひといふなり。

一そよつにそゝや木からしなといふ詞は。上手めきたる詞なり。好よむへからす。にくいけしたる也。

一深夜寐覺。

　秋の夜はなからにつくるためし迄思ひねさめの夢の浮橋

ととみ給しか。ね覺の夢と云詞はなき事也。ねさむる夢とよむへしとて。なをしたまひき。

一一首懐紙は詠の字の下に題をかくなり。詠松有春色和歌。かやうにかくへき也。歌をは三行三字にかく也。奥をひろくあましたるも見にくきなり。一はいに書合せんとしたるもわろし。詠と云字より前のあきたる程に。歌の奥をも書殘したるかよきなり。歌の行のあはひの廣きもわろし。三首の時の行程にてもわろし。ちとひろくのけて書へき也。俗人は春

日同詠、、、、と書間。一行あまる也。法師はたゝ詠、、、、とはかり書なり。夏日秋日冬日とかくをはしつくりと云也。

一歌は極信によまは。道にはたかふましき也。されともそれは勅撰の一體にてこそ侍れ。さしはなれては堪能とはいはれかたきか。是はたゝ流々わかれしから。かやうになりもて来る也。爲兼は一期の間終に只是をもふまぬ歌をこのまれし。同時爲世はいかにも極信なる躰をよまれし。頓阿。慶運。淨辨。兼好なとゝいひし上足も。皆家の風をうくるゆへに。極信の體をのみ此道の至極とたゝしてよみ侍りしかは。此ころほひよりも歌は損しけるなり。流々わかれさりし以前は。三代共に何れの體をもよまれけるにや。里郭公。

あやなくも夕の里のとよむかなまつにはすきさし山郭公

夕は里かとゝといふ物なり。連歌ならは。人といはすしては。何かとよむそといふへきなり。

一寄烟戀。

たつとてもかひなし室の八嶋守神たにけたぬむねの煙は

室の八嶋もろ神と。ちやと引かへたる所にて。めつらしく成たる也。是もふたゝひむろの八嶋守と云事をよむましと存へき也。中古には池にすむなし明かた。露のぬき夜半の山風なと云事。二度まなひては恥辱とおもひし也。

一實相院僧正入峯せさせ給ふとて。奈良の傳勝院へ立よりて。一夜とゝまりて。つとめて出させ給ひけれは。院主てつから盃もて出て。首途をいはひ侍るに。實相院短册を一枚もて送行の歌一首うけたまはらんとて予に給りし。俄の事にて計會いふはかりなかりしかとも。とかくいなひ中に及はぬ事なれは。墨を靜に打すりて。かきつけてまいらせ侍し。

此度はやすくそこえんすゝ分てもと踏なれし岩のかけ道

今度は入峯の二度めにてありし程に。もとふみなれしとよみ侍しなり。

一慈鎭和尚の御弟奈良の一乘院にておはしましける。八月十五夜夕もしるくさやかなる月に。中門にたゝすみ給ひし折ふし。御力者あまた御庭をはきけるに。傍輩とちいかにこよひ慈鎭坊のうたよませ給ふらんといひあへり。さてあくる朝慈鎭和尚の御かたへ狀を進せられしやうは。恐ある申狀なから。又心底を殘すへきにも候はす。一山の貫頂三千の棟梁にて御座候へは。眞言止觀の兩宗をこそ賞翫もせられ。興行もあるへき事に候へ。日夜風月のたはふれをもてあそはせ給ふ事。釋心の義にも背き。還而凡俗の躰に吟せられ候事無勿躰候。此室につかひ候奴原等。去夜の月に御身上申沙汰仕候。まして天下の皆いひさこそと推量仕候へ。向後は此道を御さしをき候へかしと。教訓狀を進せられしかは。慈鎭和

倚其比天王寺別當にて。彼寺にわたらせ給ひしかは。あれへ御狀をもてまいりけれは。御返事には怪入候とて。一首の歌を奥に書給へり。

みな人に一つのくせはあるそとよ是をはゆるせ敷嶋の道

とあそはしてまいらせられしかは。一乘院の門主沙汰のかきりの限なりとてやみ給にき。

一聞不逢戀。

よのつねの人に物いふよしなから思ふ心の色やみゆらむ

よのつねの人に物いふと云たるは。俗なるやうなれとも。かくもあるへき歟。

一古寺灯。

法そこれ佛のためにとも寸火に光をそへよことのはの玉

かやうによみつれは。古寺はある也。古寺の題にて。かならす寺とよむへしと存したるは。おかしき事也。古もたゝそへ字也。たゝ寺まてなり。

一社頭祝。

いほ原にあらすなからの太山もるみおの神松浦風そふく

いほはらや三おの浦といふ所は駿河の國に有也。それにも松をよみたり。これも三尾なれとも。いほはらにあらされは。いほ原にあらすなからの山と云也。神のもるといへは。祝の心はある也。又にもうら風ふくへけれは。うら風そ吹とよみ侍る也。

一歌の數寄に付てあまたあり。茶の數寄にも品〳〵あり。まつ茶數寄といふものは。茶の具足を奇麗にして。建盞。天目盆。茶釜。水指なといろ〳〵の茶の具を。心のをよふ程たしなみ持たる人は茶數寄なり。是を歌にていはゝ。硯。文臺。短尺。（懷イ）色紙なとうつくしく嗜て。何時も一續なとよむ會所なと。しかるへき人は茶數寄のたくひなり。又茶のみと云ものは別して茶の具をはいはす。いつくにも十服茶なとよくのみて。宇治茶ならは三番の茶也。時分は三月一日わたりにしたる茶也とのみ。栂尾にては是はとはたの園共。是はさかさまのえんとものみしるやうに。能々其所の茶を前の山名金吾なとの樣にのみしるを茶飲と云也。是を歌にては歌の善惡をわきまへ。詞の用捨を存し。心の邪正を明にさとり。人の歌をもよく高下を見分なとせんは。いかさまにも歌の骨髓にとほりて。さとりしれりと心得へし。是を先の茶飲の類にすへし。さて茶くらひといふは。大茶碗にて。ひくつにても吉茶にても。茶とたにいへはのみ給ひて。さら〳〵茶の善惡をも知らす。おほく飲居たるは茶くらひ也。これ歌にては詞の用捨もなく。心の善惡をもいはす。下手ともましり上手にもましはりて。いか程ともなくよむ事を好てよみ給たるは。茶くらひのたくひ也。此三の數寄は。いつれにも一の類にてた

にあれは。座にはつらなる也。智蘊は我は茶くらひの衆也と申侍り。

一初心の程は先ましはりをとる歌をよむか最上の稽古也。後には獨吟しゐれは。心もとなき事もおほく。歌おもしろき事もなき也。一度に歌をおほくよむには。初一念に取得たる物をはなたすよみもてゆく也、かれこれと取捨すれはよまれぬなり。

一天彦は日の事也。彦星をも天津彦星ともよみたり。津はやすめ字也。たゝは天彦也。

一たちぬは縫日とは。七月七日はかり。七夕にははたをもをらす。裁縫をもせぬなり。と時は三世常住機を織也。衣手の七夕は。手といはんとて。衣手の七夕とつゝくるなり。是はかくも有へき歟とて。我料簡したる也。衣手の田上のやうなり。衣手とたにつゝかは。ともかくもよむへき也。

一手かひの犬は。男七夕は犬を飼也。萬葉の歌に見えたり。

一かさゝきの橋は。烏鵲か河のむかひにゐて。雨からはねをひろけてたなはたをわたす也。紅葉の橋といふもかさゝきの橋也。紅葉の木にてはなき也。七夕の別をかなしひてなく泪かかゝりて。鵲のはねか赤くなるか紅葉に似たれは。紅葉の橋といふ也。

一山ふみとは山をふむなり。山ふみといふ事。源氏に只一所あり。右近か初瀬へまいりて。玉かつらにあひたる事を。歸りて源氏にかたるとて。あはれなる山ふみにて侍しといひたる也。

一いかなるを幽玄體と申へきやらん。これそ幽玄とて。さたかに詞にも心にもおもんはかりいふへき事にはあらぬにや。行雲廻雪を幽玄體と申侍れは。空に雲のたなひき。雪の風にたゝよふ風情を。幽玄體といふへきにや。定家の書たる愚秘とやらんに。幽玄體を物にたとへていはゝ。もろこしに襄王といふ帝おはしましき。或時晝寢すといひて。ひるねをしたまふところへ神女天降りて。夢とも現ともなく。襄王とちきりをこめたり。襄王餘波をおしみてしたひ給ひけれは。神女我は上界の天人也。宿世の契有て今爰に來て契をこめたり。此地にとゝまるへきものにあらすとて。飛さらんとしてけれは。王あまりにしたひかねて。さらはせめてかたみを殘し給へと有けれは。神女我かたみには巫山とて宮中にちかき山あり。此巫山に朝にたなひく雲。夕にふらん雨をなかめ給へとてうせぬ。此後襄王神女を戀慕して。巫山に朝にたなひく雲。夕にふる雨をかたみになかめ給ひけり。此朝雲暮雨をなかめたる體を幽玄體とはいふへしと書たり。これ、いつくか幽玄なるそといふ事。面々の心のうちにあるへき事なり。さらは詞にいひ出し。心にあきらかに思分へき事に

はあらぬにや。艶顔としたる躰を幽玄躰と申へきか。南殿の花の盛に咲みたれたるを。きぬはかまきたる女房四五人なかめたらん風情を。幽玄體といふへきか。これをいつくかさても幽玄なるそと問んに。爰こそ幽玄なれと申さるましき事也。

一隆祐か歌。若年の比ほひは父の卿にもをとらす。このもしくおほえ侍しか。老後に成て無下にをとりたるよし。定家申さるゝと聞て。さらは老後の歌こそあらめ。たと若年の歌をは勅撰には入てたはぬそと。隆祐うらみけるとなん。家隆の歌をは。定家卿いさゝか亡室の躰ありとて。恐れおもはれしか。はたして家隆。隆祐。隆尋。わつかに孫まてにて絶けるこそふしきなれ。

一翫花。

一枝のはなの色香をかさすゆへいとゝやつるゝ老の袖哉

雪の時わろき物を着たるか。殊にわろく見ゆる物たり。

一家隆は四十以後はしめて作者の名を得たり。それより前も。いか程か歌をよみしかとも。名譽せらるゝ事は四十以後成し也。頼阿は六十以後此道に名を得たるなり。かやうにむかしの先達も初心から名譽なかりし也。稽古數寄功積りて名譽有ける也。今の時分の人。いまた歌ならは一二首よみて。やかて定家家隆のうたを似せんとおもひ侍る事おかしき事也。定家もゆかすして長途にいたる事なしと書たり。坂東僕西のかたへは。日を經てこそいたるへきに。只出立一足にいたらんとするかことし云々。たゝ數寄のこゝろ深くして。其夜の修行をこたらす。まつ〳〵なに〳〵と口かろによみつけなは。自然ともとめさるに有興所へ行着へき也。但後京極攝政殿は卅七にて薨し給ひしか。生得の上手にておはしまして。殊勝の物ともあそはしき。若八十九十の老年迄おはしましたらは。いかに猶重寶ともあそはされんすらんと申侍し。宮内卿は廿よりうちになくなりしかは。いつの程に稽古も修行もあるへきなれとも。名譽有しかは。生得の上手にて有故也。生得の堪能にいたりては。初發心時便成正覺なれは。修行を待所にはあらす。しからさらん輩はたゝ不斷の修行をはけまして。年月を送なは。つゐに自得發明の期あるへき也。たゝ數寄にこえたる重寶も肝要もなき也。上代にも數寄の人〳〵は古今の大事をもゆるし。勅撰にも入られ侍り。まことに數寄たにあらは。なとか發明の期なからん。

本云
此一冊招月雜談　蜷川新右衛門尉聞書也。以彼自筆本令書寫之畢。

慶長第三八月下旬

〔右清巖茶話以内閣記錄課本校合〕

〔以宮内省圖書寮所藏[illegible]氏原本寫了田邊勝哉〕

明治四十四年八月五日印刷
明治四十四年八月八日發行
大正十四年二月二十日再版發行

發行者　東京府西巣鴨町宮仲二千五百七拾番地
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者　東京府西巣鴨町宮仲二千七百拾三番地
大場幸吉

印刷所　東京府西巣鴨町宮仲二千七百拾二番地
續群書類從完成會第一工場

發行所　東京府西巣鴨町宮仲二千五百七拾番地
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七　電話小石川一三〇八